
鷲爪伝

堀井 俊貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鷲爪伝

【Nコード】

N8136F

【作者名】

堀井 俊貴

【あらすじ】

毛利家の家譜から抹消された悲劇の武将毛利元綱（相合四郎）。歴史の闇に葬られた、毛利元就の家督相続に関わる陰謀と謀略の物語。

第一章 毛利元綱 今義経

べん

平家琵琶の弦が鳴る。

祇園精舎の鐘の聲

諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色

盛者必衰の理をあらわす

鏘の利いた低い声。

撥を握るは、襜褕のような墨色の法衣をまとった小柄な坊主である。薄暗い部屋の中で灯明かりに照らされたその顔は、目鼻の彫りが深く、濃い隈の中で眼は閉じられ、頬には痘痕が浮いている。年齢は、よく判らない。眉間に皺を寄せ、苦吟するように語るその表情は時折よほどの年配にも見えるのだが、肌艶は悪くないからそれほどの高齢ではあるまい。四十代後半といったところだろうか。

奢れる人も久しからず ただ春の世の夢のごとし

猛き者も遂には亡びぬ ひとえに風の前の塵におなじ

折り返すように絞って寂寥の響きを出す声の技術を「望憶の声」と言うらしい。 嫋々とした弦の響きと共に、法師の搔き口説くような声が広間に響き渡る。 ゆったりとした言葉の流れ。 長く伸ばされる声音に独特の抑揚。 哀調を帯びた平家琵琶の音。 聞く者をして幽玄の秀囲気に引き込み、駘蕩とした気分させる。 この法師の法力と言うべきであろう。

法師は、一時の栄華に奢り、哀れに亡んだ猛き者の例としてまず唐土の覇者の名を挙げ、次いで平将門、藤原純友などといった本邦で大乱を起こした者の名を並べ、

まぢかくは六波羅の入道 前太政大臣 平 朝臣 清盛公と申
しし人の有様
伝え承るこそ心も言葉も及ばれね

と続けた。

さらに平清盛の先祖と平氏の略歴を語り、この曲は終わる。
勝一と名乗った法師はひととき激しく琵琶をかき鳴らし、その音が静まると、たつぷりと余韻の間を取って首の短い小ぶりの琵琶を横に置き、土下座のような辞儀をした。

「小秘曲『祇園精舎』 お耳汚しにござりました」

その言葉を合図に、広間に集まった数名の男たちから唸るようなどよめきが湧いた。
俺の左隣に座った太郎左などは、膝を打ちながら満足げに何度も頷いている。

「いやいや、なるほど評判を取るだけのことはある。見事な声でありましたな、若」

「ん？ ああ」

俺は苦笑し、胡乱な生返事をした。

実際、耳で接する『平家物語』の印象は新鮮で、勝一の声の響き、語りの玄妙な間など、なかなか面白いと思ったのだが、平曲を初めて聞く俺にすれば、勝一と他の法師の声を比較することができず、それが一般にどれほどの水準にあるのかが判らなかつたのである。見事と言われれば見事なのだとも思うが、それが普通だと言われればそうかとも思う。

ただ、この勝一という琵琶法師は評判が良い、ということを知っ

ている。これを聞いた兄が非常に気に入ったらしく、一度招いてゆつくり聞いてみるよう俺に勧めてくれたからこそ、今夜のこの席がある。

「平曲にはいくつか流儀があると聞くが　御坊はいずれの師につかれたか？」

太郎左が法師に問うた。

「一方流いちかたの名人と謳われた千一法師の孫弟子ぼくいちにト一法師と申されるお方がおわします。短い間ではございましたが、野僧はそのト一法師に手ほどきを頂きました。流儀で申しますならば、一方流師堂派の枝葉の末に連なりまする」

勝一は慇懃に答えた。

顔は太郎左に向けているつもりなのだろうが、その方向はわずかにズれて、むしろ俺に向いている。目が見えていないからだろう。俺はと言えば、平曲に流派があるということさえ知らなかった。言つまでもなく、千一やト一という琵琶法師の名も聞いたことがない。

「喉を湿らすがよい。注いでやれ」

俺の右手に侍はべって酌をしていた侍女に、そう命じた。

女は打掛の肩を脱いで腰巻姿である。酒器を持って静々と進み、盲目の法師の手を取って盃を持たせ、

「お殿様からのお志こころざしであります」

と言いながらそれに濁酒を注いだ。

「これは もったいない。有り難いことでございます」

勝一は両手でそれを受け、盃を額の前まで掲げて辞儀をし、乳白色の酒を実に美味そうに飲んだ。好きなのである。

「ご相伴に預らせて頂きましたる上は、如何様なりともお言いつけくださりませ。夜は長ござりまする。まずはどのあたりを語らせていただきますしうや？」

『平家物語』を琵琶の音に乗せて語る平曲は、二百曲以上も曲目がある。これを全部聞こうと思えば十夜あつても時間が足りないだろう。奏者に演目を任せるか、あるいはこちらが聞きたい曲目を指定するかしなければならない。

「若、何ぞお望みがおありですか？」

太郎左の問いに、

「曲目は何でもよい。義経の出てくる件を聞きたい」

俺は即座に応えた。

最初からそのことは決めていたのである。

「されば、『一の谷』のあたりは如何でござりますしう」

「おお、『鶯越』か。それでよい」

「一の谷の合戦」は、「屋島」、「壇ノ浦」と並んで源平合戦における最大の見せ場のひとつである。平氏の本拠・摂津国福原（

神戸市中央区）に築かれた堅固な防御陣地を、東の大手、西の搦め手から源氏軍が攻める。平氏軍の守備は堅く、源氏方は苦戦するが、その激戦の最中、義経がわずか七十騎の兵と共に敵陣を頭上の断崖つたがりけ 嶋越 から逆落として奇襲し、平氏軍を大混乱に陥れ、敗走に追い込んだという歴史的奇襲戦である。戦の天才という義経の評価を確固たるものにした記念碑的合戦と言っている。

「されば、まずは『老馬』をお聞き頂き、しかる後『坂落』の段を演らせて頂きまする」

勝一は再び琵琶を構え、その弦を鳴らし始めた。

九郎 判官 義経

義経を意識するようになったのは、いつからだったろう。

物心がついた頃、俺にとって義経はすでに英雄だった。

最初に読んだのは『義経記』だったと思う。餓鬼の頃、それで義経に強く惹かれてしまった俺は、『吾妻鏡』、『源平盛衰記』、『保元物語』、『平家物語』、『平治物語』といった書物を貪るように読んだ。俺の家は代々学者の家系で、城の書庫には先祖が数百年掛けて集めた千冊を越える書籍があったから、教材には困らなかった。

義経という男は常に劇的だ。牛若丸と弁慶の出会い。父を滅ぼした平家への復讐を志し、その力が及ばぬ奥州へ逃避行。兄・頼朝が関東で兵を挙げるとその元に駆けつけ、黄瀬川で涙の対面を果たす。源氏軍の大將となってからは常に先陣に馬を立て、「一の谷」では切り立つ崖を逆落として駆け下り、「屋島」では平氏軍の本拠を奇襲するためにわずか五艘で嵐の海に船を出し、「壇ノ浦」で宿願だった平家打倒を見事に成し遂げる。有名な“八艘跳び”の超人ぶりを見せたのもこの船戦の場面である。しかし、義経は平家打倒にそ

れだけ巨大な貢献をしながら、戦目付け（軍監）とは常に衝突し、これに讒言ざんげんされ、兄・頼朝から憎まれるようになる。鎌倉への帰還さえ禁じられた義経は「腰越状こしえじょう」を書いて頼朝の冷たい仕打ちを嘆き、切々と兄弟の情に訴えて許しを請うが、ついに許されず、“朝敵”として国中の頼朝傘下の武士たちから追われ、逃避行の果てに最後はわずかな主従と共に奥州で滅ぼされる。

子供心に義経の哀れさに同情し、兄・頼朝の冷酷さに義憤を発したりしたものだ。

長じてもう少し物事が解つてくると、その頼朝の側近くに知恵袋として仕え、鎌倉幕府創設の立役者となった大江おおえのひろもと広元こそが、俺の先祖であるということを知った。

俺の家は、代々毛利という姓を名乗っている。

家に伝わる話では、大江広元の四男・季光すえみつという人が相模国（神奈川県）毛利庄を賜り、その土地の名を取って「毛利」という姓を名乗った、ということになっている。南北朝の頃、季光の孫・時親ときちかが安芸国（広島県）吉田荘（安芸高田市吉田町）の地頭となり、以後、代々吉田の領主として三千貫（約二万石）ばかりの領地を治めてきた。

学者の家系と言ったのは、先祖であるその大江氏が、文章道もんじょうどう（歴史学・漢文学）をもって代々朝廷に仕えていたからである。平安の頃　　といえは、現在いまから五六百年も昔の話だが　　大江氏は優れた学者や歌人を多く輩出し、朝廷から重く用いられたのだという。たとえば大江維時おおえのこれときという人は歴代の天皇の侍読（学問を教授する学者）を務めたと聞いているし、大江匡房おおえのまさふさという人は菅原道真すがわらのみちざねにも伍する碩学せきがくと謳われ、白河天皇からは知恵袋のように重用され、なんと正二位にまで昇っている。かの和泉式部も大江氏の出であったと伝わっているし、「中古三十六歌仙」には大江姓の歌人が三人も入っている。

一族の誇りと言つべきそれらの偉人と同じ血が俺にも流れている、
ということ、餓鬼の頃からさんざん聞かされて育つた。

「血」というものが人間の才にどれほど関係するのか俺は知らないが、少なくとも俺の記憶にわずかに残っている親父の面影は、今
想えば武将というより線の細い学者のような印象だった。

親父は

どんな顔をしていただろう。想い出そうとしてみたが巧くいかな
かった。なんだか薄ぼんやりとした印象しかない。

親父が死んで、もう十年にもなるか……。

縁は薄かった。

親父は俺がまだ三つの頃に隠居を宣言し、当時わずか九歳の長兄・
少輔太郎しよほつたろうに毛利家の家督を譲つて、本拠である郡山城ぐんやまを出てしまつ
たのである。親父は次兄の松寿丸しよじゆまるだけを連れて西の多治比たじひに移り、
猿掛城さるかけで暮らすようになった。なぜそんなことになつたのかは長く
解らなかつたが、大勢力に翻弄されざるを得ない弱小大名としての
政治的配慮から、已むにやまれずそういう選択をしたのだろうと推
察できるようになったのは、ごく最近のことだ。

俺は三男坊で、しかも妾腹へんぷいの子である。母は親父の側室めかけで、郡山
城下の相合あひあひという土地に屋敷を与えられ、そこで暮らしていたとこ
ろから「相合の方」などと呼ばれた。親父は俺が知っているだけで
三人の側室がいたし、侍女にもよく手をつけて子を産ませたりした
が、城下に屋敷を持たせてもらうという特別待遇を受けていたのは
どうやら俺の母だけだったようで、その意味では親父は母を特別に
想つてくれたのかもれない。が、餓鬼の頃の俺にはそんなこ
とは当然ながら判らなかつた。母と乳母と侍女、そして姉が二人と
妹が一人　俺はまさに女ばかりに囲まれて暮らし、育つた。<*

注釈1>

親父は、月に一度か二度、その屋敷に泊まってゆくだけの人だつ
た。

記憶の中の親父は、いつも母に酌をさせて酒を飲んでいた。

叱られた記憶も、遊んでもらった記憶もない。

剣を振ったり槍をしごいたり、弓を引いたり馬に乗ったり　およそ武士として必要な技能の鍛錬は、すべて太郎左が俺に仕込んでくれた。太郎左　渡辺　太郎左衛門　勝すくも　は、親父が俺につけた傳人めのと（養育係）なのである。古武士然とした厳しい男で、餓鬼の頃はずいぶんと殴られた。

太郎左は暇さえあれば　それが己の使命でもあるかのように俺の身体を鍛えた。身体を使うことは何でも得意だったし、覚えも早かった。木剣や木槍で殴り合っても、相撲でも水練でも、同世代の子供で俺に敵う者はいなかった。

しかし、親父は一度も褒めてはくれなかった。親父は俺の顔を見るたびに、書を読め、勉学に励め、と、太郎左とは真逆の事を言った。言いつけを守れば親父に褒めてもらえるだろうと子供心に思った俺は、手当たり次第に本を読んだ。仮名は母に手ほどきを受け、漢字は郡山の満願寺に通って住職から習った。七歳で漢文の訓読を覚えてからは、寺の蔵書はもちろん、郡山城の書庫からも書籍を借り出して、片っ端から読んだ。

和歌はその面白さが解らなかった。『源氏物語』のような色恋を扱ったものにも当時は興味を覚えなかった。それらに比べ、合戦を扱った軍記物語は面白かった。義経に入れあげるようになったのも、その頃である。

たしか八つの頃、屋敷に泊まった親父の前で『太平記』を暗唱した。俺が本当に学んでいるのか試すつもりで、半ば冗談で「やつてみる」と言った親父は、半刻経っても俺の暗唱が淀みなく止まらなかったたので、この時ばかりは仰天していた。

「お前にもやはり江家の血こけが流れておるのだな」

と言われた時は、初めて褒めてもらったようで嬉しかった。

「お前の下の兄の松寿にもなかなか才があるが、あれはどうも詩歌の方に偏っておるように思える。お前は合戦が好きか」

好きだと答えると、

「ならば今宵の褒美に、お前に良いものをくれてやる」

次に屋敷に来た時に、親父は『鬪戦経』という古びた書物をくれた。

「これは毛利家の当主が代々相伝して来た軍略の奥義の書だ。我らのご先祖・毛利時親は、かの楠木正成にこの書をもって軍略の奥義を授けたと伝えられておる」

と親父は誇らしげに言った。

「少輔太郎は病がちで線が細い。松寿は女のように弱々（なよなよ）して王朝物や歌物ばかり読んでおる。見るところ、三人の中ではお前が一番行く末に見込みがある」

酔った親父の酔狂だったかもしれないし、妾の境遇に甘んじる母に対する機嫌取りであったかもしれない。しかし、俺は後にも先にもあの時ほど嬉しいと思ったことはなかった。

『鬪戦経』は小著である。半刻もあれば全文を読めるが、その割にはなかなか大仰な序文がついている。

「鬪戦全経者本朝兵家之蘊奥我家之古書也 先鬼先神智勝陰勝陽機不在于此書者不能」

『鬪戦経』の全ての章は、本朝兵家の奥義を極めたもので、我が家の

古書である。鬼に先んじ神に先んずるための智、陰に勝ち陽に勝つための機は、此の書でなければ得られない』

あの時の俺は、その書き出しを目にしただけで、全身が総毛立つほどの興奮を覚えた。

「お前ならば、それほどの量ならすぐに覚えられよう」

親父は言った。

「だが、知っておるだけでは会得したことにはならぬ。己の血肉にせねば意味がないのだ。読んで考え、考えてある境地に行き着けば、そこで凡てを忘れてしまえ。忘れたらまた読め。読んで考え、考えたら再びまた忘れよ。そうしておれば、そのうち何やら解ったような気になれる」

謎のような言葉で、当時はまったく意味が判らなかったが、親父が俺にくれた最初で最後の親らしい訓戒だったようにも思う。

長兄の病弱を心配していた親父は、その翌年にぽっくりと病で死んだ。俺はまだ九つだった。しばらく親父の姿が見えぬと子供心に不審に思っていたのだが、ある日突然、親父の葬儀に連れて行かれずいぶん面食らったように憶えている。三月ばかりは患ったのか、酒害で身体を壊したのだとその時に聞かされた。哀しいと思うほどの繋がりはなかったが、やはりそれなりの喪失感は味わった。

それが、現在いまからちょうど十年前である。

十年

決して短い歲月ではない。

この十年で、病がちで線が細かった長兄は毛利 治部少輔しほのすけのすけ 興元おきせんと

と名乗り、毛利家当主として恥じない立派な武将となり、安芸の国人一揆（豪族連合）の盟主と目されるほどの存在感を持つようになった。

った。

歌好きで女のようにだったという次兄は多治比 少輔次郎 元就と名を変え、本家から分家して一家を立て、猿掛城主にして多治比・三百貫（約二千石）の領主になった。

それに比べて俺はといえば

俺は未だに部屋住みの三男坊である。立派な兄が居り、その兄に家を継がせる子まである以上、毛利本家の家督を継ぐ望みなどは勿論ないのだが、分家して家を立てさせてもらえるでもなく、他家に養子に出されるでもなく、十九にもなつて本家の御曹司として飼ひ殺され、何とも宙ぶらりんな立場にいる。

部屋住みだから、俺個人にはろくな財力も兵力もない。

俺にあるものといえば、人並み外れて強靱なこの体躯と、親父に貰った『鬪戦経』と、大仰な渾名あだなくらいのものだ。

いまよしつね
今義経

二年ほど前から、俺はそう呼ばれている。誰が呼び始めたものかは判らない。なぜそう呼ばれるようになったかと言えば、俺が合戦で多少の活躍をしたからだろう。部屋住みの「御曹司」という立場も関係しているのかもしれない。敬意と共に、幾らかの諧謔かいぎやくや侮蔑も含まれているに違いない。

いずれにしても、やはり何かしら義経とは縁があつたらしい。

気が付けば、平曲は『坂落』さかおとしの名場面に入っていた。

義経は搦め手攻めの三千騎を従え、京から丹波路を迂回して播磨国へ出、平氏の福原の城塞を西から攻める。『義経記』では、義経は搦め手軍本隊から離れ、わずか七十騎のみを率いて隘路を取り、鴨越ひづりこから福原を直撃する作戦を取ったと記述されている。一方、『平家物語』では、義経は三千騎を率いてそのまま鴨越の道を取り、

全軍で攻め込んだ、ということになっている。

同じ合戦を扱っていても軍記物語にはよくそういう齟齬そごがあり、現地の実地の地理を知るすべもない俺などはその手の差異を発見する度に混乱し、真贋しんかんの見極めに苦労したりする。

この「一の谷の合戦」で言えば、鴨越が大変な険阻であるらしいことを考えれば、三千騎もの軍勢　おそらく総勢は一万人を遙かに越えるであろう　が道なき道を殺到できたとは思えない。本隊には西から敵陣を攻めさせ、義経が少数の精鋭を率い、敵の虚を衝いて頭上の断崖から奇襲を掛けたという『義経記』の説が自然であるうと思っている。

が、琵琶法師である勝一にはそんなことは関係ない。

九朗御曹司　其の勢三千餘騎で　一の谷の後うしろ　鴨越に打ち上げ城郭遙かに見くだしておわしけるところに

と『平家物語』をそのまま語るだけである。

義経は断崖の上から十頭の鞍を置いた馬を落とす。そのまま落ちてゆく馬、あるいは足を折り、転んで落ちて死ぬ馬もあつたが、そのうちの三頭が崖際の屋形の屋根の上に落ち、見事に立ち上がる。それを確認した義経は、

「馬どもはそれぞれに乗り手が注意して落とせば怪我することもあるまい。我に続いて落とせ！　この義経を手本とせよ！」

と叫び、真つ先に断崖を駆け下る。

大勢皆つづいてぞ落としける　餘りのいぶせさに　目を塞いでぞ落としける

ゑいゑい声こゑを忍びにして　馬に力をつけて落とす
大方人の仕業とは見えぬ　ただ鬼神の所為しゝゐとぞ見えたりける

勝一の名調子は、合戦の様子をありありと脳裏に浮かび上がらせる。

俺は前傾して聞き入り、拳を握り締めていた。

先頭に立って敵陣に駆け込む義経の姿が、己に重なった。

あの時も

二年前のあの合戦の時もそうだった。

吉田の北 甲立こうだち（安芸高田市甲田町）の穴戸しんご氏は毛利とは昔か

ら仲が悪く、この数年、年に数回は小競り合いを繰り返していた。

秋の刈り入れ時期を狙って穴戸氏が兵を南下させ、吉田の田の収穫を略奪しようとしたのがその合戦の契機だった。

長兄の興元は次兄の多治比元就に郡山城の留守を任せ、三百騎を率いて出陣した。俺も十騎ばかりの近侍と共にこれに参加した。

一方、敵将・穴戸しんご元源は武勇に優れた猛将として知られ、しかも老巧の合戦巧者である。五百騎ばかりを引き連れて可愛川えの河畔に陣を敷き、毛利軍の出戦を待ち構えていた。

弟の俺から見ても長兄は正義感の強い高潔な男で、赤心に溢れ弁舌にも優れた外交の上手だが、合戦はあまり巧うまくない。筋目や大義を好むゆえか正攻法に拘り、駆け引きが単調だから、地力に勝る穴戸氏との戦いでは常に苦戦を強いられる。あの時も愚直に戦う毛利軍は穴戸元源の采配に好いように翻弄され、二段、三段と構えられた戦術のために後手後手を踏まされ、ついには兄の旗本までが窮地に立たされた。

このまま押し切られれば負けるな。

そう悟った俺は、近侍のみを率いて戦場をすり抜け、敵軍と駆け違い、敵の本陣目掛けて迂回突撃を敢行した。

これが、図に当たった。

手持ちの兵を出し切ってしまった穴戸軍の本陣は、俺が率いたわずか十騎ほどの突貫で備えが崩れ、しかも背後の本陣を直撃さ

れたと知った穴戸方の先陣が大いに狼狽し、足並みが乱れた。一方、毛利方は、俺の無茶な突撃に仰天した長兄が全軍を叱咤し、俺を討たすまいとして軍兵たちも猛然と反撃したために勢いを盛り返した。潮の流れが変わるように鮮やかに攻守が逆転し、劣勢だった毛利軍は見事な逆転勝利を収めたのである。

あれが、俺が『義経』になった瞬間だったろう。

「あの時の御曹司の鬼神のようなお働きは、九朗 義経の再来かと思っほほどで」

なぞと、城下ではしばらく評判になった。

毛利家に属す家臣も領民も、誰もが俺を誉めそやした。

長兄は俺の働きに対して立派な馬を 感状まで添えて 褒美にくれたが、血を分けた肉親としてはその無謀を叱った。

「此度はたまたま勝ち戦となったから良かったものの」

命を粗末にするような真似はするな、と兄は怒った顔で言った。俺の身を案じて親身に忠告してくれているわけで、その有り難い真心はちゃんと伝わったのだが、

この聡明な兄上ですら、俺という人間を知らぬか……と、密かに落胆したものだ。

今でも俺は、あの突撃が無謀だったとは思っていない。

『鬪戦経』の第四十四章にこんな文言がある。

「箭離弦者討衆之善歟」

「寡兵をもって大軍を討つには、戦機を捉え、弦から放たれた箭のように一気に突き進むのが善い」

俺は合戦の流れを読み、敵の戦術が出尽くし、後詰め（予備兵）が払底し切った戦機を嗅ぎ取ったのである。俺が突撃することで、戦場の敵味方の風景がどう変わるかということがちゃんと視えていた。

が、それを言葉で説明したところで、戦機の視えない人間にはその機微は絶対に解らない。たまたま巧く行ったからこそその強弁と取られるだけだということが判っているから、反論する気にもなれなかった。何をかいわんや、という感じである。

その後も何度も合戦はあり、俺はそのたびに手柄を立てたが、境遇はそれ以前と少しも変わっていない。相変わらず本家の「御曹司」として飼い殺され続けている。

武門に生まれた弟ほど哀れなものはないな。

そう思わぬでもない。

義経も、おそらくこういう悲哀を味わったのだろう。

が、俺が現在の境遇いまに強い不遇感を抱いているかと言えば、実はそういうわけでもない。

大勢力の狭間の弱小豪族という立場で長兄がどれだけ苦勞をし、日々どれほど心痛しているかを、俺は間近で見知っているのである。正直、兄の役回りを代わりに務めたいとは思わない。頼まれたって嫌である。

だから、兄に代わって毛利家の当主になりたいなぞという大それた願望は俺にはない。また、義経のように兄との確執で涙を流すようなハメにもなりたくない。

ただ、

大将として毛利の軍兵を自在に動かしてみたい。

とは思っ。

要するに俺は、己の裁量で大きな合戦をやってみたいという、およそ子供じみた夢を抱いているだけなのだ。義経に比されるだけの軍才が本当に自分に備わっているのか、それを見極めてみたいのである。

総大将として長兄には本陣に座ってもらい、先鋒大将として俺が先陣を預かる。そういう形なら、あり得ない話ではないだろう。俺にすれば、それで十分なのだ。

俺の武勇と軍才を万人が認めれば、いずれそうなる。口にこそ出さないが、俺はそう想って部屋住みの「御曹司」に甘んじている。

平家琵琶の響きは、深更まで途絶えることはなかった。

永正十三年（1516）、晩夏のある夜の話である。

第一章 毛利元綱 今義経（後書き）

<＊注釈1>

毛利弘元の側室・相合の方は、もともと身分の低い家付き女房（侍女）であつたようで、相合元綱と、さらに三人の娘を産んだとされている。この三人の女性はいずれも毛利元就の「異母妹」と一般に考えられているが、三人の年齢が確定できる史料はない。彼女らが嫁いだと思われる年代、婿になった人物の年齢、死亡した年代などを考慮すると、三人のうち少なくとも一人 吉川元経に嫁ぎ、吉川興経を産んだとされる松姫 は元就より年齢が上とした方が自然であるように思われる。

いずれにしても史料的な確定作業は不可能と判断し、この物語では三姉妹のうち二人を元就の「異母姉」とし、一人を「異母妹」として扱うことにする。

第一章 毛利元綱 鬼吉川の夜叉姫（一）

折り重なるように並ぶ山々に、低い雲が掛かっている。

安芸と石見の国境 山また山に囲まれた大朝は、空が狭い。

左右に聳え立った緑の山塊を眺め、むっとする草いきれを嗅ぎながらなだらかな坂を登り切ると、深緑に縁取られた里の全景が見えた。可愛川の本流・支流が地を割り、その河岸のわずかな平地は一面の美田である。晩夏の陽を受けた稲穂は黄金色に光り、点在する林はどうやら松と竹藪が多い。見晴るかすと、正面 北方 の山並みの麓に多くの町屋がある。

「あれが小倉山ですか」

轡を並べる吉川家の武士に尋ねると、

「左様。あの山すべてが小倉山城でござる」

男は少しだけ誇らしげに言った。

誇りたい気分も、まあ、解らぬではない。主峰の高さはあまりなさそうだが、背後にも山が聳えているし、あの周囲の山がすべて城郭であるとすれば、吉川の本拠は我が毛利の郡山城などより遙かに規模が大きいということになる。

この男、吉川家の一門で、現当主・元経殿の甥だったか従兄弟だったか いずれかなりの重臣である。見た目の年齢は二十歳前後、侍烏帽子に紺瑠璃の直垂姿で、立派な造りの大小を差している。目鼻の彫りが深く、眉も濃く、顎がしっかりした男っぽい顔つきをしている。

名は確か、宮庄 何と言ったか。

まるで憶えてない。

紙の上に並んだ文字ならいくらでも憶えられるのに、俺は昔から人の名前を憶えるのがあまり得意ではない。この宮庄某なにかしは使者としてよく吉田にやって来るから、これまでに少なくとも十度くらいは顔を合わせているのだが、それにしたところで逢うのはせいぜい年に二三度くらいのもので、長々と口を利いたこともない。苗字を覚えていただけでも俺にしては上出来だと思う。名を思い出すのを諦め、俺は言葉を継いだ。

「大朝には昔一度来たことがあるはずなのですが」

「お方さまのお輿入れの時ですな」

男はゆったりとした微笑を浮かべた。

「そうです。ところがこう見ると、景色にまったく憶えがない」

「それは　まだ幼かったからでござろう」

いや、そうではない。

あの時は雪景色だったからか。

長く思い出すこともなかった情景が、朧げな記憶の中で不意に像を結んだ。

十年前

すべてが雪に塗り込められ、水墨画のように色彩いろを失った世界。前を往く大人たちに置いてゆかれぬように、姉が乗る輿を見失わぬように、俺は櫛かんじきをつけた足を交互に雪にめり込ませ、齒を食いしめるようにして歩き続けたのだ。

吉川元経殿の元に姉のお松が嫁いだのは、親父が死ぬ半年ほど前

だった。春と呼ぶには早すぎる梅も咲かぬ時期で、山深い吉田にも根雪がたつぷりと残っていた。俺は親父に連れられてこの大朝を訪れ、訳も判らぬまま姉の婚儀に列席させられたのである。親父や姉と一緒に遠出をしたのは、その時が最初で最後だった。

当時の俺は九つである。結婚の何たるかはまだよく判っていないが、それでも、物心つく前からずっと傍で優しく世話を焼いてくれた姉をこの日限りで奪われるのだ、ということだけは敏感に察して、豪勢な式を眺めながら決して抗うことのできないその理不尽さに腹を立て、寂しさと喪失感にただ耐えていたように思う。親父は見知らぬ大人たちと上機嫌で酒を酌み交わしていた。入念に化粧をし、真っ白い打掛姿に身を包んだ姉が、息を呑むほど美しく、たったことだけは何故か鮮明に憶えている。

あの時、姉上は十七だったか。

適齢からはわずかに遅れていたが、それにしても三十以上も年の離れた男のところへ嫁に出したのだから、あからさまな政略結婚であつたことは間違いない。姉は、自分の父親よりさらに七つも年長の男のもとに嫁がされたのである。

親父にとっては、そんなことはどうでも良かったのだろう。

毛利家の家督を継いだ長兄の興元は当時まだ十五で、生き馬の目を抜く戦国乱世を乗り切つてゆくには幼すぎた。親父にすれば、吉田の北西　大朝に根を張る強豪・吉川氏と縁戚になることでよ誼みを深め、毛利家の安泰を計ろうという思惑だつたに違いない。

吉田の北方には、安芸から石見に掛けて広大な領地を持つ高橋氏という大豪族があるのだが、この高橋氏は毛利とは古くから同盟関係にある。逆に吉川氏は、当時は高橋氏と敵対関係にあつたのだが、吉川氏にすれば、毛利から嫁を迎えて手を結び、毛利・高橋の連合を分断したいというような思惑があつたのであろう。実際、毛利と吉川が縁戚となることで高橋・吉川間の争いもひとまず収まつたし、高橋氏の方も毛利とのさらなる連携強化を考えるようになり、数年後には高橋氏当主・久光の娘と長兄・興元との縁談が纏まつた。結

果として毛利・吉川・高橋は婚姻で結ばれ、少なくとも表面上は良好な同盟関係を保つことになったし、この有力三者の連携は安芸の国人一揆（豪族連合）締結の核ともなっていたのである。

その意味で、親父の先見の明と政略眼の鋭さは認めねばならないだろう。姉の婚姻は非常に大きな役割を果たしたと言うべきで、親父にも感謝をせねばならないのだから、そういうことが解るようになったのは、俺が十代後半になってからである。

俺にとつての姉婿　義兄になった吉川元経という人は、すでに六十近い高齢である。結婚した当時は四十八　当然ながら姉が最初の妻というわけではなかったはずだが、それまで不思議と子宝に恵まれなかったらしい。ところが姉が嫁ぐと、その二年後には嫡男が生まれた。吉川家の人々の喜びはひとかたでなく、そのこともあって毛利・吉川の紐帯ちゆうたいはさらに強まった。姉が産んだ吉川家の嫡子を、千法師せんぼうしという。

この暑い中、俺が十年ぶりにわざわざ吉川氏の本拠に向かっているのは、夏風邪をひいて動けないという長兄に代わって、その千法師の元服を寿ぐためなのである。長兄の名代に俺が選ばれたのは、千法師の母が俺の同腹の姉だからだろう。

「千法師殿は、お幾つであられましたかな？」

顔の汗を拭いながら俺が尋ねると、

「御年九つでござる」<＊注釈1>

愛想が良い宮庄某は微笑しながら答えた。

「九つ　元服するにはずいぶんとお早いですな」

十年前の俺と同じ年である。

男を一人前の「大人」と認める元服という儀式は、一般に十五の前後で行われる。俺は十四の時にそれをしたが、早くとも十一と十二とかだろ。十歳以下というのはかなり珍しい。

「お目出度いことは、早いに越したことはござるまい」

そう言っつて男はいなしたが、実際は、父である元経殿の高齡と、政略的な意味合いがその主な理由であるのだろう。

人間五十年　と謡曲の文句にもある。六十に手が届かんとする元経殿が嫡子の元服を急ぎたい気持ちには解らぬでもないし、何より、吉川氏の後継者である千法師の烏帽子親を西の大大名・大内義興に頼むことで、『吉川家は次代も大内氏の傘下である』という政治的な意思表示をした、ということなのだ。

安芸国は、この数年、微妙な政情の中にある。

そもそも西国は、周防、長門、石見、安芸、さらに北九州の豊前、筑前という六ヶ国を押さえる日本最大の守護大名・大内氏が大きく勢力を張っており、安芸国も長くその勢力下にあつた。しかし、近年、山陰・出雲を本拠とする強豪・尼子氏が昇竜のような勢いで勢力を拡大しつつあり、その影響力が石見、安芸、備後へと及んで来たために、大内傘下の豪族たちが去就に迷い、世情が騒然とし始めたのである。

我が毛利家は、俺の祖父の代から大内氏に属していた。

親父の名・弘元の「弘」の字は大内氏の先代・大内政弘から貰つた偏諱であつたと聞いているし、長兄・興元の「興」の字も、大内氏の現当主・大内義興から貰つたものである。名を一字貰うという行為は臣従の証であり、家来になつたと考えてもそう外れていない。安芸の豪族として半独立を維持しつつ、大内氏の傘下にある、というのが毛利家の立場であり、安芸の豪族たちの多くも同じ姿勢

であると言っている。

吉川氏もそれと同様で、昔から大内氏に従う姿勢を取っていたのだが、安芸の最北に位置し、石見にも勢力を持つ吉川氏にすれば、隣国・出雲の尼子氏との関係も軽視できなかつた、というのは想像に難くない。これは俺が生まれる前の話になるが、吉川氏の先代元経殿の父・国経殿は、妹を尼子氏当主・尼子経久つねひさに嫁がせ、婚姻関係を結んだのだという。つまり元経殿にとっては、尼子経久は叔母の婿であり、義理の叔父ということになるらしい。

尼子氏が出雲の大名で留まっていたくれればそれで何も問題はなかつたのだが、この尼子経久というのが稀代の英傑で、ここ数年の間に出雲から伯耆ほくき、備後、石見とその勢力を広げ始めた。石見は大内氏の勢力範囲であつたから、つまり大内・尼子の間で争いが起こるようになったわけである。

大内氏の傘下であり、尼子氏とも婚姻関係で結ばれている吉川氏の立場は、微妙にならざるを得ない。

元経殿が息子の元服を急いだのは、大内・尼子の本格的な衝突が始まる前に、吉川家の旗幟きしを鮮明にした、というような意味がある。大内義興に我が子の烏帽子親になつてもらつたことによつて、『吉川家は大内方である』ということを外に宣言したのだ。千法師は元服後、大内義興の「興」の字を貰つて吉川興経と名乗ることがすでに決まっている。〈*注釈2〉

ただ、それで吉川家が尼子氏との繋がりを断つた、というわけではないだろう。

強大な二大勢力に挟まれた弱小勢力にとっては、その両方と手を握るといのが生き残りの知恵のようなもので、その程度の老獪さが無い者はともこの乱世を泳ぎ渡つてゆけないのである。尼子氏との誼みは自分が、大内氏との誼みは息子が、というあたりが、元経殿の思惑であるに違いない。

こういう両天秤は小豪族という立場からすれば当然の処世で、たとえば俺の親父が吉川氏に娘を出したのも、尼子氏と昵懇である吉

川氏と繋がっておけば、将来、大内氏を駆逐して尼子氏が安芸を取るような事態になった時、その縁が役に立つであろう、というような下心が当然含まれていたはずである。

卑怯ではなく、周到

平穩にあるうちに変転に備え、転ばぬ先に杖を用意しておくのが遠謀深慮というものである。乱世にこの事を怠ると、たちまち家が滅ぶのだ。

小倉山の城下に入ったのは申さるの上刻（午後三時）あたりだった。

一行は、総勢十一人である。俺と、着替えなどの荷を担いだ俺の従者、宮庄某とその従者、祝儀の品を積んだ荷馬には口取りが一人付き、副使の井上元景もとかげとその従者、さらに警護の士が四人いる。物騒な時勢だから用心の意味もあつてこんな大所帯になったわけだが、もちろん土匪どひ（賊）に襲われるようなこともなく、吉田から大朝まで道のりにして五里（二十キロ）ばかりの旅は、実にのんびりしたものだ。

石見街道を北に取り、小倉山の山裾へと向かう。

「今宵は城でお泊り頂き、式は明日、あちらの龍山八幡宮たつやまの方で行うことになっております」

宮庄某が指差す方に顎を向けると、左手の鎮守の森の隙間から銅板葺きの社殿の屋根が見えた。

町屋が並ぶ大路を何度か折れ、立ち並ぶ武家屋敷の間を抜け、鬱蒼と樹木が茂る山道を少し登ると、眼前に立派な櫓門が現れた。俺たち一行の到着が先に報ぜられていたのであろう、門扉は大きく八の字に開け放たれ、武装した衛兵たちと共に、数名の平装の武士が出迎えてくれていた。

馬を預け、宮庄某に案内されるまま城内の山道を登る。

なるほど、これは大きい。

城は小倉山の尾根にそって本丸を囲うように曲輪が切られているらしい。一山がそのまま城砦になっているようで、ならば城域は相当に広そうである。郡山城が四つくらいは収まってしまつのではないか。

断崖の下から見上げて察するに、山頂部分の本丸の敷地は狭い。見張り櫓と殿舎の屋根のようなものが見えたが、おそらく籠城の時に籠るための建物で、城主の家族が暮らす居館ではないだろう。

本丸の周囲を回るように土居に囲まれた曲輪の櫓門を二つ三つ抜け、さらに急な坂を上り、大きな櫓門を潜ると、

「こちらは二の丸でござる」

と宮庄某が説明してくれた。

細かく土居と板塀で仕切られた広い敷地がいくつもあり、敷地ごとに平屋の殿舎の桧皮葺の屋根が見える。

その中で、一際大きい屋根の方へと案内された。

間口の広い玄関前には吉川家の武士たち（おそらく重臣たち）が平装で居並んでいる。

その先　玄関を入った敷台の上には、なんと城の主が出迎えてくれていた。

「よくこそお出でくださった」

吉川元経

六尺を越える偉丈夫である。さすがに髪や髭には白いものが混じっているが、赤銅色に焼けた肌は生気で溢れ、老人とはとても呼べない若々しさがある。

俺はその礼の厚さにすっかり恐縮し、深く頭を下げた。

「しばらくぶりにご尊顔を拝します。相合あいあうの元綱もとつなでござる。本日は兄に代わり、ご嫡子・千法師殿元服のお祝いに参上致しました」

「相合殿とは先年の有田の合戦で見えてまみ以来でござるな。わざわざのご足労、痛み入る」

年の離れた義兄は気さくに破顔した。

姉との婚儀の時を除けば、俺はこの元経殿とは二度ばかりしか顔を合わせたことがないのだが、長兄の興元は何度も戦場で共に働いたことがあり、叔父のように敬し、深い信頼を寄せている。

「兄は伊予殿いよ（元経）にお会いできるのを楽しみにしておりますが、生憎あいにくと急の病にて」

元経殿は伊予守いよのかみを私称している。字は次郎三郎で、そう呼んでも良いのだが、その名は明日から千法師が継ぐはずだからわざと使わなかった。

「丁寧なお手紙を頂戴した。治部殿ぢぶ（興元）のお加減は如何か？」

「夏風邪と伺いましたので、大事はござるまいかと」

「それなら良いが」

義兄は少しでも表情を曇らせたが、すぐに気を取り直したらしい。

「ああ、これはいかん。こんな所で話し込んでおる場合ではなかったな。まずはお上がりください。室（妻）も相合殿あいあうが来てくださると聞き、朝から楽しみに待っておったのだ。我が父や祖父も、音に聞く『今義経』を間近で見られると申して、年甲斐もなく喜んでお

られた」

吉川家の男というのは代々長命で、元経殿の父も祖父も未だ健在なのである。先代の国経殿は七十四にして戦場に出るほど矍鑠かくしゃくとしているし、祖父の経基殿つねもと（なんと九十近い高齡であるらしい）に至つては、五十年前の「応仁の乱」で天下に勇名を馳せ、『鬼吉川』の異名を取つた伝説のような武人である。

父を早くに亡くした俺にすれば、そういう老巧な人物に直に話を聞ける機会を持つことは極めて貴重であり、楽しみでもあつた。

とりあえず控えの部屋を借り、俺たちは旅塵と汗に汚れた服を着替えた。顔と手足を清めて一息つくつと、ほどなく案内の者が現れた。供の者たちは部屋に残し、俺と副使の井上元景の二人がそれに従う。

俺たちはまず大広間に案内された。

毛利家当主の名代として吉川家当主である義兄と公式に挨拶を交換する。吉川家の重臣が居並ぶ中、俺は祝いの品の目録を読み上げ、それを三方に乗せて進上した。千法師殿には、太刀と脇差をそれぞれ一振り。稚児着の大鎧一領。鍬形を打つた兜。さらに姉への進物として絹の反物を三巻である。長兄はそこそこ奮発したようだ。

元経殿は威儀を正して返礼し、引き出物に馬を一頭と石州和紙を贈つてくれた。

堅苦しい場はそれであつさりと終わり、いったん控えの部屋に戻つた俺たちが次に連れて行かれたのは、居館の奥　姉の居室であつた。

姉とその夫、その子とが並んで座つていた。

「姉上、お懐かしい」

座るなり俺は声を上げた。

「ああ、鶴寿かくじゆですね。本当に立派りっぺいになって」

十年ぶりの再会に感極まったのが、姉は目に涙を溜めていた。透けるような白い肌、艶々とした黒髪は、昔と少しも変わっていない。弟の俺から見ても、姉は目鼻立ちの整ったなかなかの美人だ。子を産んだからか、昔より全体にややふっくらと丸みを帯びたような印象がある。女ぶりを上げたと言っべきであろう。

「元服してすでに五年になります。幼名はご勘弁を」

嬉しくもあつたが、なんだか無性に照れ臭かった。

「四郎とお呼びください」

「ああ、そうでした。聞いています。あなたは『相合あいあひの四郎』と呼ばれているのでしたね。それにしても、なぜ四郎なのですか？ あなたはお父上の三男。当然、少輔しうほ三郎さんらうと名乗るものだと思うておりましたのに……」

姉は俺が九歳の時に毛利家を去った。当然ながらそのあたりの事情を知らない。

「少輔しうほ太郎たろう、少輔しうほ次郎じらうというような立派りっぺいな字は、毛利家の本流の人間が名乗るべきものだと思つたのです。元服する時、兄上は『少輔三郎』の名を俺にくれたのですが、それを使うことは遠慮しました。『四郎』と名乗りたいと願つたのです」

姉はその言葉に何度も頷き、すぐに納得したようだった。

俺も姉も脇腹の子　つまり妾の子で、正室の子ではない。俺たち姉弟が、正妻の腹から生まれた長兄や次兄に対してある種の劣等感や遠慮を持たざるを得なかったのはやはり事実だし、周囲の人々の間にも　差別というほど際立った格差はなかったにせよ　たとえば会釈などの丁寧さに厳然とした区別があつたことは間違いない。

だから「少輔三郎」も「三郎」も遠慮し、自分から「四郎」にしたのだ、と言えば、いかにも謙虚に聞こえるだろう。姉もそう思つて納得したようだが、実はこれは俺にとつて後付けの言い訳のようなものに過ぎない。本当は、単に濁点が混じる音の響きが気に入らなかつたのだ。

「少輔三郎　元綱」より「四郎　元綱」の方が音の響きも語呂も良い。「九郎　義経」にも何となく近い気がして、俺に相応しい名乗りだと思えた、というだけのことである。

懐かしさが先走つてしまつて、まだ挨拶さえしていない。それに気付いた俺は、威儀を正した。

「本日は兄上の名代として罷り越しました。此の度は、ご嫡子・千法師殿ご元服とのこと、祝着至極に存じます」

「ありがとうございます。遠路わざわざ来てもらつて、心嬉しゅう思つております」

姉は手について頭を深く下げた。血を分けた弟に対するものではなく、「毛利家当主の名代」に対する礼であろう。

俺は慌ててその手を上げさせた。

「そのように畏まら^{かし}れては俺が困ります。千法師殿は姉上のお子、俺にとつては甥御ではありませんか。晴れの元服の儀に臨席することができ、喜んでおるのです」

「そう申してくださると、私も心強い。元服するとは言っても、お千はまだまだ子供です。どうかこの子のことを、よろしゅうお頼みます。私が懇ろにそう申しておったと、吉田の殿にもくれぐれもよしなに伝えてください」

姉は隣に行儀良く座る少年に向け、

「こちらは毛利の四郎 元綱殿 あなたの叔父上です。ご挨拶なさい」

と柔らかな笑顔で促した。

はい、と元気に応じた少年は、

「お初にお目に掛かります。明日より、吉川 次郎三郎 興経と名乗ります。向後、何事にも宜しゅうお導きくだされませ」

と立派に口上を述べ、頭を下げた。

「これは利発なお子じゃ」

俺は思わず声を上げた。

「吉川と毛利の血を受けたこの若君は、必ずや名将となられましよう」

父である元経殿は終始目を細め、嬉しくて堪らぬという顔をしていた。時折、姉と目を合わせ、微笑したり頷き合ったりしている。政略で結ばれた夫婦であるとはいえ、姉はこの城で幸せに暮らしているのだらう。

あからさまな政略結婚、か・・・。

この婿を選んだ親父の心情が、俺にも少しだけ理解できたような気がした。

第一章 毛利元綱 鬼吉川の夜叉姫(一) (後書き)

<*注釈1>

作中の年齢は満年齢ではなく、数え年で表記している。

数え年では生まれたその年を一歳とし、以後正月ごとに一歳ずつ増やして年齢を数えるので、作中の永正十三年(1516)の段階で、永正五年生まれの吉川千法師(興経)は九歳となる。

<*注釈2>

吉川興経がいつ元服したかというのは資料的には確定できない。

吉川興経の「興」の字は大内義興の偏諱であり、この元服が大内方への臣従の証しであったことはまず間違いない。大内氏と尼子氏の石見を巡る争いは、大内義興が石見守護に任せられた永正十四年(1517)から本格化している。この時点では大内方が圧倒的に優勢であるから、吉川氏が大内方として旗幟を明らかにするのは、永正十四年かそれより前であろう。

ところが尼子氏は怒涛の勢いで石見北部を奪い、安芸へと侵攻を始める。二年後の永正十五年の段階で、その影響力は安芸の南部にまで伸びている。吉川氏は安芸の国人の中ではもつとも尼子氏との紐帯が強く、当然この頃には尼子方に転じていたと思われる。

吉川氏が最初から尼子氏に臣従するつもりであるならば、大内義興の「興」の字などは貰わなかったと考えるのが自然であろう。つまり大内方を宣言する興経の元服は、永正十五年の遙か前でなければならぬが、興経の幼すぎる年齢も考慮し、永正十三年とした。

第一章 毛利元綱 鬼吉川の夜叉姫（二）

俺たち一行の到着と前後して、小倉山には続々と人が集まっていた。

千法師の烏帽子親である大内義興よしおきの使者が来たことは勿論、安芸の国人一揆（豪族連合）や吉川氏と婚姻関係を持つ石見いわみの豪族などからも当主やその名代がやって来て、その夜は盛大な酒宴となった。大広間には三十人を越える男たちが座し、酌婦の侍女まで含めると実に五十人近い人間でこつた返した。

俺にとっては、他家の人間などはそのほとんどが初対面である。

二十歳にも満たない俺がもつとも年少ということもあり、いちいちこちらから挨拶して回らねばならなかったわけだが、副使の井上元景もとかげが卒なく介添えしてくれたお陰で恥をかくことだけはせずに済んだ。元景は毛利家に十五人いる宿老の一人で、他家に遣いするなごした経験も多いからそれなりに顔が広く、座持ちも世馴れていた。饗応の酒食は贅を尽くしたものだ。山間の大朝であるから海のモノは干し鮑あわじくらいしかなかったが、雑煮、吸い物、素麵すめん、湯漬たくけ、根菜の煮つけ、山菜のおひたし、漬物といった定番の肴さかなに加え、酢味噌で食べる鯉の洗い、ヤマメの塩焼き、山鳩の焼き鳥きじ、雉肉きじの羹あつものなど、彩りも豊富な七献が供された。酒は播磨からわざわざ取り寄せた名酒であるという。< * 注釈1 >

「豪儀なものですなあ」

俺の隣で、井上元景がしきりに感心しながら箸を動かしていた。

俺の時とはえらい違いだ。

少しばかり苦い笑いが浮いた。

俺の元服の時は親族と家中の老臣が集まって酒を呑んだというだけで、他家からの祝いの使者などは一人も来なかったし、これほど

豪勢な料理にもありつけなかった。部屋住みの三男坊と大名家の次期当主とでは立場が違うから待遇も違つて当然なのだが、心の片隅では釈然としないものを感じぬでもない。

膳を片付けつつ酒盃を傾けるうち、一刻（二時間）ほどが経つた。酔いが回つたからでもあろう、座は無礼講のようになっている。

疲れた者や酒に飽いた者は三々五々広間を去り、人数は当初の半数ほどに減つたが、騒がしさはかえつて増したようだった。陽気な雑談に花が咲き、喚き声や笑い声、謡の声や擲揄からかわれた女の嬌声などが、蒸し暑い部屋を賑やかに満たしていた。

吉川家の若い女房が、座持ちをしながら俺と隣の井上元景に酌をしてくれる。

注がれるたび、俺は次々と盃を空けた。

酒は嫌いではない。

あればあるだけぐいぐいと呑むし、どれだけ呑んでもさほどには酔わず、酔態もあまり崩れないから、周囲からは酒豪だとか鯨飲けいしんだとか言われる。母は「お父上に似たのです」などと嘆いていて、その意見に首肯する者も少なくない。

が、自分ではさほど酒好きだとも思っていない。

酒が好きというより、俺は酒席の雰囲気が好きなのである。

酒が入ると、人は本性が出る。陽気に騒ぐ者、陰気に愚痴る者、笑う暴れる叫ぶ泣く。それは様々な人間模様が見られる。俺はそれらを眺めるのが愉しいのだ。一緒に騒ぐのも良いし、愚痴を聞いてやるのも良い。武辺ぶへん嘯はなしでも聞けるならなお良い。いずれ平素とは違うその人間の本音と触れ合えるのが酒の席であり、俺はそれが愉しくて毎夜のように酒を呷あおっているのである。

そういう眼で座を眺めていて思ったのは、吉川家の男たちの酒は総じて陽気だ、ということだ。なかでも長老と言つべき駿河殿

吉川 駿河守 経基翁 は、常に太い声で笑っていた。

吉川 経基

伝説の武将である。

五十年前の「応仁の乱」の折、経基殿（当時は四十手前の年齢であつたろう）は東軍に属し、名高い「相国寺の合戦」で僥名を馳せた。

応仁の戦乱には俺の祖父・毛利豊元も東軍として参戦し、兵を率いて京に上っている。家中でも七十以上の老人なら従軍した者は多く、だからこれは今でも語り草になっている。嘸なのだが、この「相国寺の合戦」では終始西軍が優勢で、押されっぱなしの東軍からは逃亡者が続出したらしい。しかし、経基殿は吉川家の武士たちを鼓舞して一步も退かず、全身に二十ヶ所を越える傷を負いながら味方の屍を踏み超えるようにして奮闘勇戦し続け、ほとんど孤軍で東軍の陣を守り抜いたのだという。その鬼神のような戦いぶりに恐れをなした西軍の方がついには戦意を喪失し、撤退したというのだから恐れ入らざるを得ない。人々はこの勇将を「鬼吉川」と讃え、またそのあまりの傷跡の多さから「俎吉川」という凄まじい渾名まで付けた。まさに生ける伝説としか言いようがない。

その伝説の武将は、想像していたより遙かに気さくで磊落な老人だつた。

「おお、お手前が毛利の今義経殿か」

好々爺然とした笑いを浮かべながら自ら俺の近くにひよこひよこと寄つて来、折敷を挟んで目の前にのそりと座つた。

「義経といえば、前歯の少し出た、色の白い小男かと思つておつたが、そつという訳でもないのじゃな」

『平家物語』に書かれた義経の容姿をすらすらと口にした。

「残念ながら、合戦の最中に直垂と鎧を何度も着替えられるほどの物持ちでもありません」

俺が『平家物語』の記述で返すと、即座に通じたらしく老人は愉しそうに笑った。

京で絶世の美女と謳われた常盤御前から生まれた義経は、その血を引いて婦人の如き美男子だったのではないかと俺は思っている。小柄で色白だったと『平家物語』にもある。対して俺は中肉中背で肌は日に焼けて蒲茶色に近い。風貌もどちらかと言えば男っぽいから、おそらく雰囲気は似ても似つかないだろう。まして安芸の小名の三男坊に過ぎない俺は哀しいかな貧乏で、武家の棟梁である源家の御曹司のように装束に凝るような銭の余裕はまったくくない。だから俺の台詞にはそういう卑下も含まれていたわけだが、

「戦場の綺羅は装束でなく手柄で飾るものよ。お手前の武辺が『今義経』の名を成さしめたのであろう?」

武人に共通する匂いを感じたものか、老人はわずかなやり取りで俺に好意を持ってくれたらしい。人懐っこい笑みを浮かべて酒器を取り上げた。

「お噂はかねがね聞いておった。この年寄りの酒を受けてくださらぬかの」

「これは」

あの伝説の武人が俺のような小僧に酌をしてくれるというのだから、大いに恐縮した。注がれた酒を一息に呑み、すぐさま酌婦から酒器を奪って老人の盃に注ぎ返した。

老人が纏っているのはあずき色の大紋で、吉川家の家紋である」

三つ引両」がいくつも染め抜かれている。呆れるほど大柄だが鶴のように痩せていて、腕や首などは枯れ木のように細い。往年はそれこそ鬼のように筋骨逞しい大男だったのだろうが　さすがに現在いまはその面影はない。

異相　　と言つべきであろう。皺深いその顔面には目に付くだけでも六つもの傷跡があり、中でも頬の矢傷が大きく、右の耳たぶは千切れて無い。鉢の広い大頭は綺麗に剃り上げられていて、白く染まった眉毛は長く、落ち窪んだ眼窩の中の眼は細いけれども優しげである。鼻梁は高く、小鼻は張っている。形の良い口の周りから顎にかけて伸びた髭は真っ白だが、肌は乾いた感じではなく、色艶は良い。

これで、九十に届かんというご高齢とは……。
とても思えない。

仙人めいた風貌ではあるが、風韻の稚気と瑞々しい眼光が印象をより若やがせているのである。百まで生きるのではないかと本気で思えるほどだから凄。

この老人は武の道ばかりでなく文の道でも優れた業績と名声を残して、歌道や文学に造詣が深く、仏道にも通じ禅学を究めたほどの英才なのだという。さらにその書の腕前は名人の域に達し、京あたりの貴顕きげんの間でさえ評価が高いそう、今上きんじょうの天子さま（後柏原天皇ごかしわ）から勅命を受け、『古今和歌集』と『伊勢物語』を筆写して朝廷に献上したという晴れがましい逸話まで持っている。

まさに文武両道の達人であり、武人の理想像と言つべきであろう。およそ中国に暮らす武士なら、我が子にこの老人の爪の垢を煎じて飲ませたいと願ってしまうような偉材なのである。

盃を空けた老人は、治部殿ちぶどの（長兄・興元）の弟御には一度会つてみたいと思つておつたのよ、と言いながら意味ありげに笑った。

「実は孫娘の婿を探しておつてな」

孫娘　　ということは、元経殿の妹御のことだろう。元経殿とは四十近くも年が離れた妙齡の姫が吉川家にいる、ということは聞いたことがある。

噂の夜叉姫か・・・。

鬼吉川の姫ならば、夜叉でなければ蛇うづまであろう、とか、般若ぼんぎゃのようなご面相に違いない、などと、家中の口さがない者たちが無責任にほざいているのを小耳に挟んだのだ。

「肚を割つて言えば、わしは治部殿にこそと考えておつたのじゃがのお。高橋の隠居殿に先せんを打たれて婿むこをさらわれてしもうた。治部殿の弟御には尼子の姫を　　と思つた事もあつたが、いやいや、縁談を纏めるといふのはなかなか難しい」

「はあ」

と言うくらいしか相槌の打ちようがない。

確かに三年ほど前　　長兄が高橋氏の姫と結婚した前後にそんな話があつた。次兄の多治比元就たじひに尼子氏の姫を娶めあわせようという縁談話で、それは吉川氏からの働きかけであつたと聞いたが、尼子氏の側が断つたためにこの話は流れた。

いずれ戦国の婚姻である。裏に政略的な駆け引きがあるのは当然で、毛利と尼子を縁戚にすることで安芸国人一揆を大内側から尼子側に引き寄せようというのが、尼子氏と強く繋がる吉川氏の狙いであつたのだろう。

しかし、この縁談は纏まらなかった。結果として吉川氏は安芸国人一揆の一員として大内側に留まる決心をし、その延長に明日の干法師の元服がある。吉川家の次期当主は、大内義興の「興」の字をもらつて吉川興経と名乗り、大内氏に臣下の礼を取るのである。

「吉川と毛利は、未永う仲良うしてゆくべきじゃとわしは思つとる。

なればこそ、孫をやるなら毛利がよい。治部殿にはすでにご正室がござるゆえ諦めるとしても、治部殿のしかるべき親族に縁付くのであればわしに文句はない。弟御なればなお望ましい、と思うておるのじゃがな。どうであろう。孫の婿にならんか？」

話の内容は重大なのに老人の口調は世間話でもしているように軽妙である。

「婿　ですか」

あまりに唐突な話なので、俺は戸惑った。

自分が結婚するというようなことは、正直、今まであまり考えたことがなかった。俺は小名の子として生まれたわけで、いずれはしかるべき重臣の娘なりどこぞの豪族の姫なりを妻にするのだからと漠然と思っていたが、婚姻というのはあくまで毛利家としての政略の一部だから、決めるのは長兄であり重臣たちなのである。俺の一本存でどうなるものでもないわけで、そのことについて深く考える必要がそもそもなかった。

もちろん、別に女が嫌いなわけでもそれを遠ざけているわけでもない。

母の手前もあり、屋敷の侍女には手を付けてないが、俺に身体を開く娘や後家は郡山の城下には何人もいるから、女が欲しいと思つた夜にはそれらを抱けばそれで済んだ。身を固めるとか所帯を持つとか、そういう柵を現実として考えるのは、それらの女が子を孕んだ時で十分だと思っていたのだ。

が、老人はどうも本気であるらしい。

「多治比の次郎殿（次兄・元就）は未だ初陣の噂さえ聞かぬが、お手前の戦場での働きのお働きのほどはよう聞いておる。こうして会つてみて、その眼を見れば性根に歪みがないのも解る。武の道だけでなく

文の道にも通じておるようじゃいな。末は頼もしい大将になると視えた。可愛い孫をやるなら、そういう男の元に嫁がせたいというのが、まあ、武門に生きる者の人情というものよ。まして次郎三郎（吉川元経）の嫁はお手前の姉御。お手前が次郎三郎の妹を娶れば二重の縁となる。毛利にとつても悪い縁談ではあるまい」

「う、ご老体、唐突にそのようなお話を聞かされましても」

隣で井上元景が大そう周章している。その様子が可笑しくて俺は少し笑ってしまったが、笑ったことでかえって肚が据わった。

「いや、急なお話で驚き入りました」

「急ではあつたかな。じゃが、酒の席ゆえの戯言ではない。身臍肩でなく、孫はなかなかの器量佳しじゃぞ」

老人は自慢げに言うと、遠く上座の近くで酒器を運んでいた若い娘を呼んだ。

綾地錦の打掛を腰巻姿に巻いたその娘は、上座に座す大内氏の使臣たちに酒を届けて辞儀をし、下げ髪を靡かせながら足早でこちらにやって来た。

ほう、これは……。

とびきりの美人とまでは言えぬとしても、顔の作りはまずまず整っていて、決して醜女などではない。しっとり濡れたような大きな眼が好い。陶器のように肌理の細かい白い肌。少し厚めの朱唇。鼻梁はやや高い。兄である元経殿にはあまり似ていないから、母親似なのかもしれない。女々した色気はないが仕草に愛嬌があり、小娘らしい健康的な若さに溢れている。

人の噂などというのはアテにならんもんだな。

思わざるを得ない。

この娘のどこが夜叉や般若であるというのか
娘は老人の隣に座ると、俺たちに向けて手をつけて辞儀をした。

「お久^{ひさ}じゃ。十六になる」

「お爺^{じい}様、何か御用？」

老人はその問いを無視して孫娘に俺を紹介した。

「こちらは お前も聞いたことくらいはあるう。毛利の今義経
相合^{あいあひ}の四郎殿じゃ」

「ああ、この方が」

娘が値踏みするような視線で改めて俺を見た。

「物語に出てくる平家の公達^{きんたち}のような涼やかな殿御かと思っております
ましたに、存外な」

口調に、これが義経か、というようなわずかな失望がある。

「存外な、何です？」

「普通のお方だと思つたまでです。義経には見えません」

勝手に描いた義経像と比べられても迷惑だが、悪びれもせず、ハ
キハキとものを言うところには好感を持った。屈託のない娘らしい。

「それはそうでしょう。俺は義経ではないし、義経を自ら名乗った
こともない。人の噂などはアテにならぬものです」

あなたが夜叉や般若でないように　とやり返そうかと思っただが、それはやめておいた。

「お前の婿にどうかと思うておるのじゃがな。どうじゃ？」

老人は単刀直入である。

娘は急な話に狼狽したようで、頬がみるみる真っ赤に染まり、慌てて俺から視線を逸らした。

「どう　って……。わたくしは武門に生まれた女です。嫁けと言われればどこへでも嫁きます」

拗ねたような口調でそう言い、立ち上がって奥へ去ってしまった。嫌だったのだろうか。単に恥ずかしかっただけか。照れた結果であつたとすれば満更まんぷくでもないのかもしれない。いずれにしても

「いや、ご老体、いかにも嘉よいお話とは存じますが」

俺の返事はすでに決まっている。

「なんじゃ。孫娘では不足かの？　それとも先約でもあつたか」

「不足などとてもない。私のような者にはもつたいないお話だと思います。ですが、私の一存ではなんともお返事ができかねる、ということですよ。ご老体がこのお話を本気でお考えなら、我が兄・興元が正式にお返事つかまつるでありましょう」

老人はしばらく俺の顔を覗き込むように見ていたが、

「なるほど、弁えておるな。悦叟院殿（亡父・弘元）はよい子を遺されたようじゃの」

と言つてニヤリと笑つた。

俺はもしかしたら試されていたのかも知れない。

そうも思ったが、さして不快に感じなかったのは、老人の笑顔に邪気がなかったからであろう。

その翌日、小倉山からそう遠くない龍山八幡宮で、千法師の元服の儀式が厳かに執り行われた。

龍山八幡宮は安芸に入部した吉川氏の初代が勧請し、創建した社殿であるそうので、以来二百年、吉川家の人々が篤く尊崇しているのだという。我が毛利で言えば郡山の鎮守社として代々尊崇している清神社に当たる社ということになるう。

広い拝殿は板敷きで、吉川家の親族と重臣、招かれた他家の使臣が左右に分かれて席に着き、加冠の座と鬘所を兼ねた神前には畳が敷かれ、白い狩衣姿の千法師が座つた。

加冠役は大内氏の使臣である陶隆康という青年が務め、理髪役は同じく大内氏の某が務めた。白い直垂姿の二人が千法師の理髪を調べ、立烏帽子をかぶせる。大内義興自身が認めたと、「興」の字を大書した筆紙が披露され、ここに吉川次郎三郎興経という名の若すぎる武人が誕生した。

大内義興はこの数年、領国の周防を離れて京で権力争いに没頭しているから、わざわざ国許から使者を京まで往復させて元服の承認を得、この筆紙を取り寄せたのであろう。当主の留守を国許で預かるのは陶中務（弘詮）という重臣で、加冠役を務めた陶隆康と、いうのはその子であるという。あまり広い世間を知らぬ俺でさえ、陶氏が大内氏譜代の重臣で、大内家中で最大の軍事力と政治力を持

つた一族であるという程度の知識は持っている。

加冠の儀に続いて備服の儀が行われた。いったん屏風の陰に隠れた主役の少年は、白の狩衣から鮮やかな青の直垂姿に色を直し、再び神前に現れて八幡大菩薩に礼拝した。

藤原氏の末を称する吉川氏の氏神は春日神であるはずで、源氏の氏神を拝むのも妙な気はしたが、八幡大菩薩は武神として広く尊崇されている神だから、これはこれで良いのだと思い直した。考えてみれば郡山の清神社だって祭神は素盞鳴尊で、大江氏の氏神である今木神を祀っているわけではないのである。どの神に祈るかなどという事よりも、神前で額ぬかずく人間がどういう気持ちで祈りを捧げるかという事の方がずっと重要な問題であるだろう。

続いて三献が行われ、人々は酒を酌み交わして少年の元服を寿いだ。

この献の合間に、大内義興から元服の祝いとして御剣ぎよけん、鎧、弓、征矢そや、馬の鞍、時服などが進上された。

豪儀なものだ。

御剣は物語に出てくるような黄金造りの太刀、鎧は五色の糸で威された見事な大鎧（子供の体格ではとても着こなせないだろうが）で黄金作りの籠を立て物に打った兜まで付いており、鞍は蒔絵の入ったまことに煌びやかなものである。これほど絢爛豪華な武具は、長兄が元服した時にやはり大内義興から贈られたものを除けば俺は見ることがない。大内氏は日本でもっとも富強な大名だと聞いているからこれくらいは当然であるのかもしれないが、それにしても合戦いくさで使うことが惜しくなるほどの逸品であった。

巳みの刻（午前十時）あたりに始まった式は、その後に行われた祝宴も含めて未ひつじの刻（午後二時）にはすべて滞りなく終わった。姉もその夫である元経殿も、穏やかな微笑を浮かべて我が子の晴れの式を見守っていた。

俺はそのまま帰路につくつもりであったので、姉夫婦に丁寧に挨拶をした。

それに気付いたのであろう、その場に経基翁と国経殿（姉の義父）がやって来た。

「ご病床の治部殿にはよしなに伝えてください。治部殿の病が良うなったら、わしから治部殿に正式に話を持ってゆくつもりであるでな」

別れ際、老人は好意の籠った笑顔でそう言った。

この俺が妻を娶るか……。

あのお久という娘の濡れたような大きな眼を思い出し、それも悪くないかと思ったりした。

が、この話が実現することはないになかった。

長兄の病は癒えることはなく、この日から半月ほど後にそのまま黄泉路よみじに旅立ってしまったからである。

それは、俺にとつて 毛利家にとつても まさに青天の霹靂へきれきと呼ぶしかない痛恨事だった。

第一章 毛利元綱 鬼吉川の夜叉姫(二) (後書き)

<*注釈1>

「献」とは酒と肴を出して進めることで、一献の膳には複数の肴が乗る。大内義興が編纂させた『大内問答』によれば、饗応において献の数は特に決まりはなく、饗応の予算や接待する客次第であったようだが、七献、九献、十一献など、いずれも奇数の膳が出るのが慣例であるという。將軍のような高貴な上級武士を接待する場合、十七献というような数でも行われることがあったらしい。(参考：

『中世武家の作法』/二木謙一著)

第一章 毛利元綱 長兄の死（一）

その報を聞いたとき、俺は到底納得できなかつた。
釈然としなかつた。

確かに人の運命などというものは一寸先は判らないものだし、予想だにしない事というのはまま起こる。禍事まがごとはそのほとんどが突然にやって来るわけで、またそれは往々にして立て続くものでもあるだろう。だからこそ「泣きつ面つらに蜂」だとか「弱り目に祟り目」などという俗諺ぞくげんが世にあるのだし、それが毛利家にも起こり得るといふことくらいは俺だつて解っている。

だとしても、だ。

釈然としないものは釈然としない。

その瞬間まで、俺は兄の病をただの夏風邪だと信じて疑わなかつたのである。それがいきなり死んだと言われても、はいそうですかと納得できるはずがないではないか。

まして

こんな時に！

驚愕も、困惑や狼狽もすっかり通り越して、怒りにも似た想いで俺は天を仰いだ。

そこにはただ野天の夜の闇があるばかりであつたのだが

今にして想えば、確かにいくつか思い当たる事はあつたのだ。わずかな違和感に首を傾げたことも一度や二度ではない。しかし、長兄は昔から腺病質たちな性質で、年に一度や二度は熱を出して寝込んだりしていたし、寝込めば長びくのが常であつたから、俺を含め毛利家の家臣たちもそういう長兄の体質に慣れてしまつていた。もちろん主君あるじの病を氣遣あはれわぬ者はいなかつたろうが、それが死を想定せねばならないような重篤くわいごうなものだとは誰も思つていなかったのではな
いか

これは後に知つたことだが 俺が大朝に使者として発つ数日前

長兄は腹痛を訴えて夜中に俄かに苦しみ、大量の血を吐いたのだという。

長兄を診た薬師くすしは、日頃の激務と心痛、それに酒害などによって内臓がすっかり駄目になっており、命は長くないであろうと断を下した。その場に居た小姓や侍女らに嚴重な口止めがなされた事は言うまでもないが、その事實は長兄自身にさえ秘匿ひかくされていたらしい。知っていたのは、義姉あね（兄の正室）と次兄、それに毛利家の執権しゅっけんである志道しじ広良と宿老の中の数人だけであつたようだ。

たとえ長兄の病状をあらかじめ聞かされていたとしても、その後の俺の行動はおそらくそう変わらなかつたであろうし、長兄に何かしてやれたというわけでもない。せいぜい俺の裡なかで心の準備ができたという程度の違いであつたろうが、それでも心の準備があるかないかでは大違いだろう。ましてこんな合戦の真まつ最中に、いきなり主君あるじが死んだなどと聞かされたのでは堪らない。

釈然しやくぜんとしないどころか、俺は思わず使者を怒鳴りつけたのだ。

「ふざけるな！」

怒鳴らずにはおれなかつた。

認めたくもなかつた。

あの日

大朝から吉田に帰つた俺は、復命するためにその足で郡山城に上り、副使の井上元景もとかげと共に病床の兄を見舞つたのだ。

すでに日は暮れていたから、兄が眠っているようなら明日にでも出直すつもりであつたのだが、幸いすぐに病間に通された。

「そつか。姉上はお元気であられたか」

長兄は　その時は小康を得ていたのだろう　薄い夜具から身を起こして俺の話聞いた。

「兄上にくれぐれもよしなに伝えてくれと申しておりました」

「千法師　いや、興経殿か　我らの甥御はどのようなお子であつた？」

「利発であると思えました。伊予殿（吉川元経）のお子らしく柄（がら）体格）が大きく、凜々しい面つきをしておりましたな。毛利と吉川の縁は次代も安泰となりましょう」

「それは重畳」

長兄は面影が親父によく似ている。髭こそ蓄えてないが、中背、瘦身、色白なところも親父と同じで、老臣たちに言わせると親父の若い頃にそっくりであるらしい。

続いて井上元景が　俺の話を補足するように　祝宴の料理の豪勢さなどを引き合いに出して吉川家の富強について語り、また何処から誰が祝いに来たか　それが当主であったか名代であったかまでを克明に説明し、宴席での雑談などで得た情報をまとめて報告した。これは吉川家の実力を量り、豪族同士の親疎を知る格好の材料になる。

「さすがに尼子から使いは来ておらなんだか……」

聞き終えた長兄はそう呟いて小さく頷いた。
話はさらに吉川経基翁の言動に及んだ。

「駿河殿（吉川経基）がお前を孫娘の婿に　な……」

細い腕を組んでわずかに首を傾げるのは、長兄がものを考える時の癖である。

「お前も少輔次郎（次兄）もいい年齢だ。そろそろ嫁を持たさねばならんと考えてはおつたのだが　悪い話ではないかもしれんな。先方から正式に話が来たら重臣たちに諮るとしよう」

今から想えば、確かにその時の長兄は、いつもより顔色が悪かったかもしれない。声音も弱々しかったかもしれない。ただ、その時はそうは思わなかった。部屋は火明かりのみで薄暗かったし、そもそも病人であるのだから元気がないのは当然なのである。まさか半月後に死んでしまうほど酷い容態であるとはまったく考えなかった。病間から下がると、次室には多治比で暮らしている次兄の元就もとなりがいた。

「兄者ではないか。珍しいな」

年齢の近い次兄に対しては親しみと気安さもあつて「兄者」と呼ぶのが俺の通例である。毛利家当主である長兄の事は「兄上」と呼ぶことにしている。「兄者」と「兄上」の間でそれほど意味合いに差があるとは思わないが、俺の中ではその使い分けでしっくりいつている。

次兄は毛利本家から分家して多治比の領主になっている。普段は郡山城に出仕する必要がないわけで、そこに次兄を見つけたことにわずかに違和感を持ったが、たまたま長兄の見舞いに来たところに鉢合わせただけだと思い、その時は気にも留めなかった。

「四郎か。帰つたのだな」

「ああ、先ほど戻った。いま兄上に復命してきたところだ」

次兄は美男子の部類に入るであろう。親父や長兄と同じく瓜実顔つりみねで、色白で鼻筋が通り、やや面長だ。眼は切れ長で眉は濃く、口元に締りがある。武家より公家の装束が似合いそうだといつも思う。

武人の匂いが強い俺と文人の香りを漂わせる次兄とは水と油ほどに肌合いが違うが、仲は決して悪くない。と、少なくとも俺はそう思っている。離れて暮らしていたせいもあるが、考えてみれば餓鬼の頃から喧嘩ひとつしたことがない。

かつて親父は、次兄に歌詠みの才があると評した。俺が軍記物語に没頭していた頃、歌物や王朝物ばかり読んでいたという次兄は歌道や文学に造詣が深く、その点では人に抜きん出た量の知識を持っているはずだが、それを誇りがましく言葉に乗せることをしない。謙虚なのだ。

しかし、文事一辺倒の情弱だじやくな男かと言えば、そういうわけでもない。

たとえば去年、酔った長兄の酔狂で、俺と次兄が弓矢の勝負をせねばならなくなったことがあった。

武門を「弓矢の家」と言い、「精兵せいひやう」という言葉が弓の巧者を指すように、弓矢はまさに武士の表芸であって、俺も日々その鍛錬を欠かした事はない。腕前には相当の自信を持っていて、この勝負でも五本射た矢のすべてを十五間けん（約二十七メートル）先の的に突き刺した。

ところが、俺にとって意外であったのは、次兄も的を一矢も外さず、俺と引き分けてみせた事だった。

いや、それどころではない。

的を確認すると、俺の矢は三本しか正鵠せいこく（中心）を射抜いてなかったが、次兄は正鵠に四本を射込んでいた。つまり、厳密に判定すれば俺が負けていたのである。

その事を指摘すると、

「お前が用いたはこの矢場でもつとも強い弓だろう。あの矢は鎧さえ軽々と貫き通したはずだ。非力な私が射た矢とは比べ物にならないよ。弓矢は的に当てるためではなく、敵を射倒すためにある。勝ち負けを付けるならお前の勝ちさ」

次兄は事も無げにそう言った。

一事が万事、そういう男なのである。

次兄は何事にも常に控え目で、長兄の影に隠れて家中ではまったく目立たない。あえてそうしているのか、あるいはそういう性格なのか、そこは俺にも判らないが、俺はそんな次兄の人としての色合いに好感を持っている。

次兄の方も、俺の男としての器量に敬意を持って接してくれているように思う。

だから　　と言うべきか、俺と次兄の間には過去に不快な経緯が一切ないのである。

「大朝はどうであった」

次兄の問いに、俺は腰を下ろしながら気さくに答えた。

「大そうな羽振りだったよ。宴はまことに豪勢だった」

「ほう」

「姉上もお元気そうだったしな」

俺は長兄に語ったようなことを再び次兄にも話したわけだが、今にして想えばこの時の次兄の様子も少しおかしかったのだ。

次兄は座持ちの巧い人で、温顔をもって話者を不快にさせない聞

き上手だが、この日は俺の話に対する食いつきが悪く、口元に浮かべた微笑にもどこか硬さがあつた。身嗜みなども常にきちんとして容儀の良い男であつたはずなのに、この日に限って二三日剃つてないように髭が濃かつたし、目元に疲れの色が見えたようにも思う。が、それらはほんのわずかな違和感に過ぎない。まさか次兄がこの数日まともに眠ることさえできず、憔悴し切つていた。などは考えもしなかつた。

長兄の風邪でも貰つたのではないか。

その時はそんなことを思つただけだつたのだ。

俺は何の疑問も持たぬまま相合あひあうの屋敷に帰り、日常生活に戻つた。

その後、四度ばかり長兄を見舞つたが、面会が叶つたのは一度だけだつた。取り立てて相談せねばならない事項があつたわけでもないから、病人が眠つてしていると義姉に言われれば強いて病間に押し入ろうとまでは思わなかつた。

勿論、なかなか本復しない長兄の病態を心配してはいたのだが、だからと言ってまさか重体に陥つているとまでは考えない。

滋養をつけてもらおうと、狩りで仕留めた鹿を持って行った時も会うことはできなかつた。看病疲れでやつれていゝ俺はそう思い込んでいた。義姉を励まして、獲物だけ置いて引き上げた。

そうこうするうちに十日ばかりが過ぎた。

山深い吉田は、八月も中秋を過ぎるとめつきり秋らしくなる。稲穂の季節は農作業が忙しく、百姓たちは合戦いくさを嫌がるが、収穫を略奪するには絶好の時期でもあるから、戦火の季節でもあるということになる。 < * 注釈 1 >

ご多分に漏れず、この秋も宍戸ししど氏が兵を南下させる気配を見せた。宍戸氏とその同盟者である隣国・備後の三吉みよし氏とはこの春から夏に掛けて何度も兵火を交えていて、初夏の頃、毛利と高橋氏の連合軍が宍戸軍を大いに破り、本拠である五龍城まで攻め込んでいる。味方の流血を避けるということで城攻めまではしなかつたが、城下

を焼き払ってやったから、宍戸氏にすれば怒り心頭であつたらう。

今回はその報復のつもりに違いない。

宍戸氏の甲立こうたちは、吉田の北東　可愛川えのに沿って一里半（六キロ）ほど下つたところにある。わずか一里半の距離しかないと言つべきで、まして可愛川は交易の大動脈だから、それぞれの城下の噂はそのまま筒抜けに聞こえるということになる。言うまでもないが、五龍城で陣触れなどの動きがあれば城下に住まわせてある諜者からすぐさま報せが届くようになっていゝ。もっとも宍戸氏の側も郡山城下に諜者を入れているに違ひなく、これもお互い様なのだろうが。

それはともかく

宍戸氏が合戦支度を始めたらしいということ、郡山城で軍議が持たれた。

その軍議にも、長兄は姿を見せなかつた。

当主不在のまま、執権の志道広良が座を仕切り、十五人の宿老と数人の老臣、次兄と俺を加えた面子で討議が行われた。積極的な先制攻撃論をぶつ者もあつたが、主君が病床ということもあり、自重論が大勢を占めた。

しかし、自重と言つても籠城は論外である。城に籠つて敵を領内に入れれば、城下や吉田の集落を焼き払われることになり、略奪を自由に許すことにもなる。民百姓の暮らしの安寧を守ることは領主の重大な責務であり、そのためには一歩でも領国から出て戦つべきなのだ。

そこで、いつものように国境くにがはまで出て敵を迎え撃つところ、に衆議は落ち着いた。

長兄が毛利軍を率いて出陣する時、郡山城の留守の大將は常に次兄が務めてきた。そのせいで次兄は未だに初陣さえ済ませられずにいるのだが、この時も次兄には郡山城の守將の役が振られた。

一方、出戦する毛利軍の総大將には俺が選ばれた。総大將と言つても飾りのようなもので、兄の代役を期待されたわけではない。兵馬の指揮権は重臣たちが握るといふ腹積もりであつたらう。それは

判っていたが、初めての太役に俺はそれなりに興奮し、意気込んだのだ。

敵の陣触れがあり次第、自城で防戦態勢を取る者と郡山城に駆け集まる者とをそれぞれ確認し、戦支度を抜かりなく調えることを定めて軍議は打ち切られた。

そのわずか三日後　八月二十四日の昼に、宍戸氏の陣触れの確報が入った。

ただちに郡山でも陣触れの太鼓が鳴り、法螺貝が吹き立てられ、使い番の早馬が四方に駆け付けた。

その後の謀者や物見の報告を総合し、宍戸軍の出陣を翌二十五日の早暁と踏んだ俺たちは、二十五日の夜明けと共に郡山城を出陣した。

この時も、長兄は出陣する軍兵たちを激励することさえせず、見送りにさえ出て来なかった。いかに病体とはいえ、さすがに俺も強い不審感を持ったのだが、出陣という事態の慌しさあわただと異常な興奮で、正直それを長く気にし続けることはできなかった。

わずかに朝霧が立った暁の黎明れいめいの中を、「一文字三星」の旗を掲げた軍勢が出陣した。毛利家の最強兵団・井上党を先頭に、約三百騎、総勢千五百人を越える人馬の列が歩武ほぶを揃えて東へと進んで往く。三千人を越す領民たちが沿道に並び、大声援をもってこの軍列を見送ってくれた。

お飾りとはいえ総大将である俺は、十騎ばかりの近侍に囲まれながら全軍の途中で馬を進めた。長兄が昔使っていた緋威ひおどしの大鎧に身を包み、細長い金の鍬形くわがたの前立てを打った兜の緒をキリリと締め、背には切斑きりふの矢を背負い、右手みぎに手綱、左手ひだりには重藤しげとうの強弓つよゆみを握る。腰に差す愛刀は安芸の野鍛冶が打ったという無銘の業物わざもので、厚重ねで重いくせに矢鱈やたらと斬れる。<＊注釈2>

沿道には見知った領民たちの顔が並んでいた。女と老人・子供が多い。家中の武士の妻女がいる。両手を合わせて拜んでいる老婆もいる。頭を下げる商家の者たち、赤子を抱いている農婦、大工の隠

居や鍛冶屋の倅、過去に身体を重ねた女たちの顔もあった。それらの声援に俺が弓を上げて応えようと、四郎さまとか義経さまとかいった黄色い声上がる。

悪い気はしなかった。

沸々と、不思議なほど血が滾^{たぎ}ってくる。

この無^む辜^むの民草を守るために、俺たち武士は命を張るのだ。

長兄はいつもそう言っていた。

百万一心

長兄の座右の銘である。

毛利の旗に集う者は、武士も百姓も職人も商人も、すべての者が心をひとつにし、力を合わせて事に臨むのだ。

可愛^{えの}川に沿って細い谷状になった山間の道を半里ばかり東進すると、川幅が急に広くなり、視界が開ける。川筋はいったん南東へ逸れ、再び蛇行しながら北に向かつて流れる。左右を山塊に閉ざされた可愛川の河原はそう広くはないが、遮蔽物がなく見通しが利くから合戦^{いくさ}をするには好い場所だ。

川を右手に、小高くなつた土手沿いに軍兵を並べる。老臣たちはどれも百戦錬磨^{ひゃくせんれんま}の戦人^{いくさびと}だから、俺が何をする必要もない。見る間に目前で三段の布陣が完成した。

物見からの報告通り、敵の軍勢の砂塵が視界に入ったのは布陣を終えた直後だった。

数は二千ばかりだろう。

両軍が指呼の間で睨み合い、しばし言葉合戦などをしてお互いを挑発し合ったが、双方、動かない。戦機を計つていえると言えばそうだが、勝負事には先に仕掛けた側が負けそうな雰囲気というものがあり、なかなか戦闘に入れない静寂の中で、口火を切るキツカケを探り合っているうちに、半刻ばかりが経った。

「ひと当て、つついてみましょうかの」

俺の隣で戦況を見ていた志道広良がのんびりとそう言い、前線に使い番を走らせた。

広良は毛利家の執権　つまり政務を統括する立場にあり、この合戦の指揮を実際に執っているのもこの男であった。

やがて先陣で矢戦が始まった。宍戸軍もこれに応戦し、矢の雨を交換する。

箆えびらの矢を射尽くした頃、先陣に配した井上党、福原党が突出して敵と槍で叩き合いを始めた。

赤川就秀なりひで、桂広澄かつら、坂広秀ひろひで、国司有相くにしありすけといった武将たちが手勢を率いてこれに加わり、宍戸軍も二陣が前線に出て、戦闘が本格化した。

両軍の武者たちが喚声を上げながら押し合い、揉み合い、叩き合う。雑兵の間を騎馬武者が駆け抜け、矢が風を切って飛び交い、気合の声や怒声や断末魔が空気を間段なく震わせ続けた。

どうやら緒戦は毛利方に分が良い。先鋒が徐々に敵を押し込み始めた。

床几に座してその様子を眺めながら、俺はやはり大将の器うつわではないな。

とつくづく思った。

戦が始まってからというものの、血が滾たぎってしょうがないのである。無軌道に暴れ狂うあの人間の激流の中に俺も飛び込み、思いっきり暴れ回りたいという欲求が抑えられない。

しかし、当然これは許されない。

総大将とは味方の軍兵に幾重にも守られる者のことであり、その仕事は自ら槍を振るって戦うことではなく、軍兵たちの働きを見守ることなのである。総大将が討たれば合戦は負けなわけで、これを討たさぬために軍兵たちは必死に戦っているとも言える。わざわざ自分から先陣に出てゆく総大将がどこに居よう。

それこそ、義経くらいのものだ。

義経も俺と同じ滾たぎりに身を焼かれたのだろうか、ふと思った。

「旗色宜しきようでござるな。ここは一息に押し切りましようぞ」

太郎左が興奮気味に叫んだ。

この古武士然とした四十男は、率いる渡辺党の兵団を俺の馬廻りのように配置し、ここまで片時も俺の傍を離れない。傳人めんどとして育てた元綱が毛利軍の総大将となり、合戦の晴れ舞台に立っているわけで、是非とも大勝利をと意気込みまくっていた。

「ふむ。されば渡辺殿、お手前が横（横槍）を入れられよ」

「心得たり」

志道広良に促された太郎左は勇んで立ち上がり、渡辺党を率いて猛然と駆け出した。

主戦場を迂回し、左手の山裾を駆けて敵の側面に槍を入れる。

穴戸軍ははずると後退した。軍勢をくるくると器用に繰り替えながら、退き陣に掛かっているようにも見える。

勢いを得た毛利軍は怒涛のように押しまくり、俺たちが居る本陣と前線とが間延びし始めた。

いかな。

俺は直感した。

「執権殿、ここで勝ち過ぎては事を誤る。先陣を引き戻すが宜しかろう」

俺が言うと、志道広良は珍しいものでも見るようにまじまじと俺を見た。

「これは異な事を申される。敵の崩れに付け入り、どこまでも進むのが勝ち戦の常道でござらんかな」

「まだ勝ち戦と決まったわけではないでしょう。宍戸が退いておるは、我らを釣り込む策ではないかと思う。宍戸元源は戦巧者じゃ。侮って良い相手ではござるまい」

広良は公正実直な男だが、その顔にわずかな油断があった。

「お言葉はいかにも道理ではあるが、いかさま考え過ぎでござろうよ」

戦を知らぬ小僧めと、俺を侮っていたのか

いや、今から想えばこの男は、合戦を一刻も早く終わらせたいと焦っていたのではないか。長兄がまさに死の淵にあるということ、この男は知っていたのだから。

それに、勝ち戦の勢いに乗った軍兵たちを止まらせることは、たとえ命じたとしても難しいのである。総大将に強い指揮権と絶対の信頼がなければ功に逸った武者たちは止まるものではなく、広良にはすでに止める事ができなかつたというだけかもしれない。

毛利軍は、さらに五、六町（約六百メートル）も敵を追って進んだ。

その時、左手の山から宍戸軍の伏兵が飛び出し、毛利軍の横腹を強襲し、前軍と本陣との間を遮断した。

毛利軍は狼狽し、俄かに崩れた。右手は川であり、逃げ場も態勢を立て直す空間もないのである。それを待っていたように、受けに回っていた宍戸本軍が猛然と反撃し始め、毛利軍は大混乱となった。

それみたことか！

呆然と口を開けている執権をひとつ睨み、俺は馬に飛び乗った。

「四郎殿！ お待ちを！ 〴〵自重を！」

驚いた広良が叫ぶ。

待つてどうなる！

味方の敗勢は寸刻ごとに酷くなってゆくだけではないか。ここで迅速に手を打たねば必敗である。議論している暇などない。

馬の口を捕らえようとする雑兵を蹴倒した俺は、手綱を引き絞ると弓で馬の尻を叩き、

「者ども、続け！」

と一声叫んで前線へと一直線に駆けた。

日頃から俺に従う十騎ばかりの若武者たちは、俺の気性と呼吸を飲み込んでいる。すぐさま俺に続いて飛び出した。

本陣を固めていた数十騎の武者と四百ほどの雑兵たちは、「総大将」の一騎駆けに仰天したであろう。大慌てで馬に飛び乗り、槍を担ぎ、続々と駆け出した。

俺を先頭に杉なりになった毛利軍は、宍戸軍の別働軍を背後から強襲し、包囲された前軍が逃げるための道をこじ開けた。

ここからの戦場の收拾は骨だった。

宍戸軍は毛利軍を半包囲し、嵩かさに掛かって攻め寄せて来る。毛利軍の前軍は傷が深いが、四散するには到っておらず、中でも勇猛な井上党は怒り狂って戦い続けており、退くに退けない。しかも、戦場はすでに滅茶苦茶な乱戦である。寄親が寄子を見失い、雑兵たちは主の武者からはぐれ、そこで勝手に戦っているといった有様で、どうにもならない。

頼勢たいせいを巡らそうにも、毛利軍にはもはや後詰め（予備兵）がない。何の策もなくこのまま総力戦の潰し合いになれば、兵数が多く、作戦が凶に当たって士気も騰がっている宍戸軍がやはり圧倒的に有利

であろう。毛利軍はここまで攻めに攻めていたわけで、兵の疲労も激しい。

しかし、逃げるわけにもいかないのである。

こんな状況で不用意に退き鐘を鳴らし、退却を命じれば、毛利軍はまったく総崩れになる。死傷者は敵に背を向けた瞬間から激増するもので、宍戸軍にしても獵犬のようになって追撃に掛かるに違いない、結果として討ち死にする者は二百や三百では済まなくなるだろう。

なんとか痛み分けに持ち込むしかない。

俺は敵の武者を次々と馬から射落とし、矢が尽きてからは自ら槍を振るい、混沌の戦場を駆け回り、声を嗶らして兵を纏めた。

乱戦の中で俺を見付けた毛利の武將たちは、

「大将が敵中に駆け入るなぞ間違うてござる！ はや後ろへ下がられよ！」

と口々に怒鳴り、俺を囲んで守ろうとした。

それが、俺の狙いでもあった。

武者たちは、眼前の敵と戦うことに必死になり、前後の顧慮を忘れていた。しかし、この乱戦の中に「総大将」が居ると知れば、自俣に戦っている場合ではなくなるであろう。「総大将」の討ち死には全軍の敗北と同義であり、俺を守るということで目的がひとつに絞られるのである。ともかくもこの混乱を收拾するには、これしかないと思った。

あれが毛利の大将ぞ。

それに気付いた宍戸の武者たちの槍や矢が、俺を指して殺到し始める。後で数えてみると、俺の鎧には十三本もの矢が突き立っていた。

ともあれ、俺がそうして暴れ回っているうちに、武者同士の自俣で無軌道な戦闘の集積から、俺を中心に戦う毛利軍とこれを攻める

宍戸軍という形に戦場が少しずつ収斂しゅれんされてゆき、いつしか俺の周囲には錚々たる武将たちが集まり、いびつながらも円陣が組織されていた。

頃は良し。

俺は声を限りに叫んだ。

「南の堤つみで戦を立て直す！ ここはいったん繰り退きに退くぞ！
井上河内かわち（元兼）、福原左京（貞俊）は退路を突き破れ！ 殿軍しんがりは俺と執権殿で引き受ける！」

「承知！」

毛利家の武将は戦巧者が多い。彼らはジリ貧のこの戦況を当然理解していたし、ともかくいったん引き分けて戦を仕切り直そうという俺の意図もすぐさま飲み込んだ。正しい方向さえ与えてやれば、そこは歴戦の猛者もてたちで、戦っては退き、退いては繰り代わって敵を防ぎ止め、実に巧みな退却戦を繰り広げた。

俺は毛利軍を可愛川べりの土手に上らせ、堤の上から矢を降り注がせ、宍戸軍の勢いを殺し、機を見て高所から突撃し、突出している敵の前軍を突き崩してやろうと狙っていた。それが出来ていれば、今日の合戦は全体で毛利の六分の勝ちということになったであろう。しかし、敵将・宍戸元源もとよしは合戦というものの機微をよく知っていた。俺たちを執拗に追うような愚を冒さず、毛利軍が堤に辿り着いたと見るや巧みに自軍を収拾し、七、八町ばかり引き下がって山裾に陣を敷き、対陣する構えを取ったのである。こうなると、いかに俺でも反撃のしようがない。

勝ちの目を消され、逆に六分の負けを確定されたと言わねばならないだろう。

退いてゆく「花洲浜はなすはま」の旗を馬上で眺めながら、

「穴戸元源殿はお幾つか？」

と俺は訊ねた。

「さて、四十の半ばであったと思いますが……」

傍に居た志道広良が首を捻りつつ答える。

策を好み駆け引きに巧みであるくせに、勝ちを拾うには手堅い。年齢としよりずっと老練だ。

俺は苦笑った。

知恵を誇る者は往々にしてその知恵に溺れるものだが、敵將の冷静な見切りには、聡明さに加えて堅実な性格が垣間見える。知恵にゆとりがあるということはおそらく浮華なところがない重厚な男だろう。こういう手合いはできれば敵に回したくない。

両軍は対峙したまま日暮れとなり、俺はそのまま野陣を敷くよう諸將に命じた。

毛利軍の傷は大きく、討ち死には百人を越え、負傷者はその三倍にも及んだ。

この敗戦の日の深夜、戦陣に長兄の訃報が届けられたのである。

第一章 毛利元綱 長兄の死（一）（後書き）

<*注釈1>

作中の日付はすべて陰暦で表記されている。

中秋は八月十五日。永正十三年（1516）の八月中旬は、現在の九月下旬に当たる。

<*注釈2>

「切斑の矢」とは矢羽根が鷲の尾羽で作られた矢のこと。

第一章 毛利元綱 長兄の死（二）

「ふざけるな！」

俺の怒声が闇夜に吸い込まれた。

「兄上のご病状はそこまで悪かったのか!? 執権殿はこの事知っておられたのか!?」

俺の隣で床几に座した志道広良は沈痛な面持ちで地面を睨み、こちらに視線を向けようとはしなかった。しかし、答えはあらためて聞くまでもない。集まった諸将の顔を見渡せば一目瞭然で、福原貞俊、桂広澄ら、驚愕の表情を示さなかった数人だけが、長兄の容態をあらかじめ聞かされていたのだろう。

つまり、この凶事が誤報でも悪夢でもないということである。

武将たちは、ある者は声を殺して哭き、ある者は悲憤し、ある者は悲怒の声を放った。眼前に主君の遺体でもあればそれに取り縋つて大泣きに泣いたのであるが、ここは戦陣なのである。せいぜい嗚咽を漏らすことしかできない。

「なぜ今の今まで俺に報せなんだ！ 敵を前にしたこの土壇場で、いきなり主君が死んだなぞと 俺にどうせよと言うのだ！」

「若 ！」

顔をくしゃくしゃにした太郎左が、いきり立つ俺の腕を強く掴んだ。

「わしも驚いた。驚き入り申した。じゃが、人の口に戸は立てられ

ぬと申す。わしも執権殿のお立場であれば、同じように殿のご容態をひた隠しにしたでござろう。執権殿を責めるわけには参らぬ」

毛利の敵は宍戸氏ばかりではないのである。北東には備後の三吉氏が、南には安芸守護の武田氏が、虎視眈々と毛利領を狙っている。毛利興元が重い病の床にある。なぞということが漏れていけば、この機に兵を向けて来ぬとも限らなかつたろう。それを防ごうとした志道広良の処置に間違いはない。それは解っている。

「済んだ事をあれこれ言い募っておつたところで詮も無い。今は、この戦にどう始末をつけるか。それこそを考えねばなりませんまい。殿が身罷られたことを宍戸方に知られれば、彼奴らは嵩に掛かつて攻めて参りましょうぞ」

それも解っている。

ただ、俺の裡で気持ちの収まりがつかないだけだ。

「兄上……！」

長兄は名将ではなかつたかもしれないが、名君だつたと俺は信じている。

わずか九つで毛利家の家督となり、海千山千の大人たちに囲まれて暮らした長兄は、大名の地位とは決して絶対的なものではないという事と、権力は地位によって生まれるものではないという事を、どうやら肌身をもって学んだ。

毛利家は三千貫（約二万石）ほどの所帯しかないのに十五人もの宿老がいる。宿老たちはそれぞれが族党の当主であり、つまり主家である毛利本家と傘下の族党の実力に大きな差がないのである。その毛利家を束ねる長兄は、君主としての権力の基盤が非常に弱く、

宿老たちの利害の調整役を務めねばならぬ立場であり、ことに十五の時に親父を喪^{うしな}つてからは、家中の融和を保つだけでも大変な気苦^{きく}勞を重ねてきたのだ。

「大名というのは、皆が担^みぐ神輿^{みこし}のようなものだ。私は思っている。私が清らかで大きく立派であれば、これを担^みごうと寄^よつて来る者も増えるが、私が汚く小さくみすばらしい神輿^{みこし}ならば、誰もこれを担^みいではくれぬ。担^みぐ者がおらねば、神輿^{みこし}は地にうち捨てられるのみだ。私は武勇拙^{つたぬ}く生まれ、人並みの知恵もないが、せめて、担^みいでくれた皆々が担^みいだ事を誇りに思えるような神輿^{みこし}でありたい」

いつかの長兄の言葉である。

だから長兄は、己という神輿^{みこし}を担^みいでくれる人間を大切にした。家臣に対しては常に温顔を持って接し、領民に対しては常に慈悲の心で臨み、人を叱り飛ばしたりその面目を失わせるような言葉を吐いたことがない。一度口にした約束はどんな些細な事でも律儀に守ったし、訴訟においても依怙^{えこ}や鬚臆^{ひいき}を決してしなかった。その無私公正な人柄は、家中の誰からも信賴されたのである。

いや、それは毛利家中には止まらない。

まだ若輩の長兄が、遙かに年長の豪族たちを説き伏せ、安芸国人一揆の締結に主導的な役割を果たすことができたのも、長兄の人柄があつたればこそと俺は信じている。毛利・吉川・高橋の同盟による武力が背景にあつたにせよ、

毛利興元^{おきもと}は一度約定したことを決して破らぬ。

という信賴が得られなければ、この戦国乱世に豪族同士の大連合などという離れ業は実現しなかつたに違いない。長兄は一兵も損なわず敵を味方に変え、毛利の存在感を強く大きくしたのである。

そう考えれば、

安芸に毛利興元あり。

と他国にまでその名が響くようになったのは、長兄の徳の力によ

ると言っても外れてないはずだ。乱世は武力にばかり眼が行きがちだが、徳の力が武の力に優るといふことを、長兄は体得していたのだろう。

あらためて説き聞かされた事はないが、おそらく長兄は「信義」を己の揺るがぬ中心に据えていたのだと思う。もちろん、この乱世である。綺麗事だけで渡つてゆけるものではないが、足りずとも及ばずとも、愧はずることのない大道を歩もうと長兄はもがき、努力し続けていた。「百万一心」という座右の銘も、長兄の大いなる理想を表していたのではないか

そんな男であつたからこそ、長兄は俺の誇りだつた。長兄のために戦場で働き、その役に立つことが俺の悦びだつた。俺と次兄とで長兄を支え、若い三人で力を合わせて十年、二十年と頑張れば、いずれは毛利が安芸一国の盟主にもなれるのではないかと 俺は半ば本気でそう考えていたのである。

惜おしい。

俺は闇色の天を仰いだ。

両眼の縁から涙が落ちた。

郡山へ戻つても、もう兄上の声を聞く事はできぬのか……

人が必ず死ぬものであることは解っていたが、近しい肉親の不慮の死には、人の営みの儚さをあらためて思い知らされる。わずか二歳の嬰兒えいじを遺のこし、志半ばで逝ゆかねばならなかつた長兄は、どれほど無念であつたか

嬰兒

幸松丸こうまつまる。

長兄が死んだ以上、その幼い遺児が毛利家を相続することになるであろう。

高ぶっていた俺の心は急速に醒め、現実に引き戻された。

「……兄上が身罷られた事を全軍に伝えよ」

「若　それは……」

「どうせ隠したところで知れるのだ。毛利の旗に集うすべての者にこの哀しみを共にさせよ。亡き殿のご恩に酬^{むく}いる道は、そのご遺児である幸松丸さまのために、明日の合戦^{いくさ}で奮迅^{ふんじん}の働きをすることであると　皆にそう申し伝えよ」

鬱々と、血が嫌な滾^{たぎ}り方をしている。

宍戸は運が悪い。

長兄が死んだことに宍戸氏は何の咎^{とが}もないが、毛利の軍兵たちはやり場のない怒りと哀しみを明日の合戦にありつたけぶつけるだろう。長兄を慕い、その馬前で死にたいと願っていた武士たちは、これこそ死さえ厭わず戦うに違いない。思うさま暴れなければ、この肚の哀と怒と弔の気を吐き尽くすことはできぬ。

「明日は兄上の弔い合戦と心得よ！」

決戦を誓い、俺は諸将を散会させた。

毛利軍は可愛川の土手を土累に見立て、河原側に降りて野陣を敷いている。敵の夜襲に備え、全軍の三分の一が不寝番となって土手に並び、北方の敵陣の篝火を睨んでいる。もちろん交代で休息を取らせるが、敵が指呼の間に居る以上、休みといっても鎧は脱げない。河原には幔幕で仕切っただけの本陣があり、俺は其中で矢楯を敷いて横になった。

眠れぬまま時間だけが過ぎた。

やがて、夜が明ける。

徐々に空が白んでゆき、東の山陰から日が昇る。ご来光をこれほど虚しい気持ちで迎えたことはかつてなかった。

朝飯を終え、毛利軍は再び土手を背に三段に布陣した。

その軍兵たちを前に、俺は叫んだ。

「皆も知つての通り、殿は昨日、城にてご逝去なされた！ この危急存亡の秋、まことの臣の取るべき道とは、亡き殿が遺された幸松丸さまを守り立て、ご立派にご成人あるまでお輔けすることである！」

俺の声に、漢たちは気合で応えた。

「泉下の殿に御心安らかにお休み頂くためにも、毛利の武威に些かの衰えもないことを、この合戦で天上と天下に示すぞ！」

「おおおおっ！」

軍兵たちの哀悼を込めた闘志が、天に向けて漲っているのが見えるようであった。

俺が開戦の一矢を放つてやる。

「誰ぞ、鎬矢を　　」 < * 注釈 1 >

俺の声に武將たちが驚いた。

「四郎殿、なりませぬぞ。そのような　　大将のなさる事ではござらん」

志道広良が慌てて止めたが、

「若ほど遠矢が利く者はそうはおらん。心配には及ぶまい」

太郎左が太鼓判を押ししたので、広良は苦々しく口を閉じた。差し出された一筋の矢を箆に差し、俺は全軍をそこに待たせ、た

だ一騎で北へと駆けた。

毛利も宍戸もお互いの軍の動きは見えている。毛利軍が布陣を終える頃には敵方も魚鱗ぎょりんに陣を組み終えており、ゆっくりと行軍を始めていた。

点のようだった宍戸軍の先陣の武者が、次第にはつきり見えるようになる。

その距離が三町（約三二七メートル）ばかりまで縮まったところで馬を止め、俺は馬上から叫んだ。

「我は江家の末孫、毛利 治部少輔 興元が舎弟、相合の元綱なり！ 宍戸雅楽頭殿に物申す！」

俺の声は大きい。敵の後陣まで届いたであろう。

宍戸軍は足を止め、静まり返った。

「たれぞ大将に取り次ぐ者はおらんか！ 宍戸の家に武士の礼はないか！」

馬を輪乗りしながら眺めると、待つほどもなく敵軍の前列が割れ、眼にも鮮やかな萌黄威しの大鎧をまとった巨漢の騎馬武者が前に出た。半月の前立てが朝日に輝いている。

「音に聞く毛利の今義経殿か！ 初めて見参つかまつる！ 我は宍戸元源が舎弟、深瀬の隆兼！」

俺に負けぬ大声である。四十年配のその男は、勇将・宍戸元源の実弟で、その兄に優るとも劣らぬ武勇の持ち主と聞いている。

「おお、深瀬殿か！ されば大将の雅楽頭殿に伝えていただきたい！ 我が兄・毛利興元は、昨日、俄かにこの世を去られた！」

男が訝しげに俺を睨んだ。言葉の虚実が付きかねたのであろう。

「八幡大菩薩もご照覧あれ！ 我らは本日の合戦、主人の亡魂に捧げる甲い合戦と致す所存！ 兄亡き後も、我ら毛利の槍先は些かも鈍らぬと知るがよい！」

俺は背の鎗矢を取り、それを弓につがえて十分に引き絞り、天に向かつてひようと射た。

鎗が音を立てて風を切る。矢は山なりに飛んで穴戸軍の前軍を飛び越え、その後方に落ちた。

遠矢で三町の距離を飛ばせる者はざらにはいない。俺の弓勢を見た深瀬隆兼は、

「お見事！」

と大声で応え、馬首を返して軍列の中へと消えた。

穴戸軍からその矢が射返されれば、それが戦場における礼の往復となり、開戦の合図になる。

俺が毛利軍の中に駆け戻り、しばらく待つと、穴戸軍から一騎の武者が駆けて来た。

先ほどの深瀬隆兼である。

「毛利家の方々に物申す！」

声が届くところまで近づき、馬を巧みに輪乗りしつつ叫びを上げた。

「治部殿は年来の敵ながら、若くして身罷られたはまことに愁傷！ 同じ武門に生きる者として、主人を喪われた方々の心中、お察し

申す！ 我が兄・穴戸元源は、葬儀法要の邪魔立てを致すほど無粋ではござらぬゆえ、これより陣を払う！ 方々も疾く歸られて、冶部殿の菩提を弔われるが宜しかろう！」

毛利の軍兵たちがどよめいた。

俺さえ虚を突かれた。

深瀬隆兼は鎬矢を射返すことをせず、馬首を巡らせて去った。

穴戸軍がゆっくりと退いてゆく。

「敵ながら、礼節を弁えた見事な振る舞いでござるな」

感心する太郎左の声に、俺は苦笑した。

太郎左は人が好い。

兵法に、鋭鋒を避く、ということがある。穴戸元源は、悲憤に猛る毛利軍とここで戦うのは損と見て、恩を売る形で決戦を先送りにしたのではないか。長兄亡き後、その遺児である幸松丸の元に毛利家がひとつに纏まるという保証はなく、たとえば内紛が起こって家が弱体化したり分裂したりする事だつてないとは限らないのである。しばらく様子を見るにしかず、と判断しただけではないのか

どうも相手が一枚上手だな。

禍福は紙の表裏のようなもので、それはちよつとした風向きの如何で容易にすり替わる。長兄の死という「禍」をもって軍兵たちの闘志を奮い立たせ、毛利軍勝利への挺子にし、新たな主君となるべき幸松丸の「福」へと転じようとした俺の思惑は、またもや穴戸元源によっていなされた形である。

「穴戸の申し条、果たして信じてよいものか……」

志道広良が武將たちと話し込んでいる。

穴戸元源が名聞を齒牙にも掛けぬ男なら、引き上げた軍勢を解散

させず、毛利軍の引き上げを見届けた上で、間髪入れずに吉田に攻め込んで来ることだつてあり得ぬ話ではない。なんと云つても宍戸氏の五龍城から吉田の郡山城まではわずか一里半しか離れていないのである。帰つて葬儀などしては、付け込まれぬとも限らないというのがその懸念であるらしい。

警戒したくなる気分は解らぬでもないが、見当外れだと俺は思った。

ここで吉田を攻めるのは、外敵によつてわざわざ毛利家を纏まらせるようなもので、宍戸氏にとっては小利にしかない。大利を狙うなら、この機に調略の手を伸ばし、むしろ毛利家の内部分裂を謀る方が賢い。

あの男は小利には奔^{はし}らぬ。

俺の直感がそう告げている。

初めて総大将という立場で戦を眺め、敵将・宍戸元源と戦つてみて、かの男と膝を突き合わせて語り合つたような感触が、俺にはあった。

戦場で策を好む者が必ずしも奸悪なわけではない。策とは味方の死傷者をいかに少なくして勝利を収めるかという合理であり、家来を殺したくないという思いやりがない者には生まれぬ知恵であろう。狂奔の場である戦場で冷徹な計算を働かせられる度量と、勝ちを六分^とで止められるゆとりには、人物の重厚な奥行きさえ感じる。

そういう男が、目先の小利に囚^とわれるとは思えない。

「敵が退いた以上、我らも退くほかあるまい。先の事は先の事として、今はすぐにも兄上の元に参じねばならぬ」

強い口調で武将たちの議論を打ち切り、俺は兵馬を郡山城へと向かわせた。

軍兵たちは、決死を誓つた合戦をいなされ、すっかり覇気を失つていた。目前の危機はとりあえず去つたが、残されたのは主君の死

「兄上は 何ぞ言い遣されたか？」

俺の問いに、次兄は目を伏せて首を振った。

「親父が死んだと聞かされた時もこれほどはこたえなかった。俺は兄上が好きだった……」

「私も同じ気持ちだ。いや、毛利の者なら武士も領民も 皆が兄上を好いていた」

次兄は眼に涙を溜め、しみじみと言った。

葬儀はその翌日に行われた。

天野氏、平賀氏、小早川氏、阿曾沼氏といった安芸国人一揆の豪族たちから続々と甲問の使者が来た。吉川氏からは元経殿と国経殿が自らやって来て、長兄の死を悼んでくれた。大内氏にも急使を送ったが、本拠である周防の山口まで達するにはまだ数日掛かるであろう。

宍戸氏からは当然使者は来なかったが、宍戸元源は長兄の四十九日の追善供養が済むまでは兵を動かさなかった。意外に律儀な男なのかもしれない。

長兄には、

「秀岳院殿常松禅定門」

という号が呈された。享年は二十五歳である。

葬儀の後、今後の毛利家の仕置きについて重臣たちで評定が持たれた。言うまでもなく、毛利家の次期当主を決めるためである。

その席に、高橋久光殿が「幸松丸の祖父」という資格で同席した。俺を含め、おそらく毛利の重臣すべてが不快に思ったはずだが、高

橋氏は毛利より遙かに大きな実力を持つ大豪族で、今後もその誼^よみを失うわけにはいかなかったから、強く拒絶することはできかねた。群臣の気分ということ言えば、最初から長兄の遺児・幸松丸に家督を相続させるのが当然であるという空気であったのだが、この評定の場で、宿老の坂広秀が俺を当主に推す論陣を張り、誰よりも俺自身を当惑させた。

「この乱世に、二歳の嬰兒を当主に立てて家が保てるのか、ということでごさる。亡き殿には成人した立派なご兄弟があり、このお二人から当主を選ぶが穩当でごさるう。しかして少輔次郎殿^{しほじろう}はすでに多治比に分家し、毛利本家を出てごさる。対して四郎殿はご本家の御曹司でごさる。そのご器量、武勇の優れたる事は亡き殿ご自身もお認めであり、この場における皆もよう存じておるう」

「馬鹿な！」

執権の志道広良はじめ、家臣団の長老格である福原広俊、その子である福原貞俊ら、親族一門の多くはこぞってこれに反対した。言うまでもなく、「幸松丸の祖父」である高橋久光殿も声高に不満を述べた。

「お二人のご器量にはもとより不足はない。じゃが、御家の相続にもっとも大切たるは筋目でごさる。筋目が立たぬば家が乱れる」

というのがその論旨である。

ちなみに親父の正室は長老・福原広俊の娘で、広俊から見れば長兄と次兄は孫であり、幸松丸は曾孫に当たる。が、妾の子である俺とは血の繋がりが無い。自分の孫の次兄ならともかく、身分の低い妾の子である俺を当主にするなぞということは、認められる話ではなかったらう。

井上元兼、井上就在^{なりあり}、井上元盛、井上元景ら井上党の宿老たちは、もともと幸松丸擁立で異存はなさそうであったのだが、坂広秀が俺を推した事に対抗してか、あるいは高橋久光殿が家政へ介入することを嫌ったからか、急に次兄を推すと言い始めた。井上元盛の死んだ祖父（同名・元盛）が次兄の後見役を務めていたという縁があり、井上一族には次兄と繋がりが深い者が多いからだろう。

井上党は家中でもっとも勢力の強い族党だから、評定はにわかには紛糾した。

「こう申しては何だが、少輔次郎殿は未だ初陣さえ踏んでおられぬ。それに比べて四郎殿の戦場のお働きは、義経にさえ喩えられるほどのものじゃ。乱世に生きる侍であれば、優れた大将こそ頼もしいと思うのが当然ではないか」

坂広秀は引き下がらなかった。

「かつて悦叟院^{えそういん}さま（亡父・弘元）は、四郎殿に何やら言う家宝の書物をお譲りになったと聞いた。代々毛利の当主が相伝して来た家宝をわざわざ四郎殿に譲られたのは、ご長男の殿に不測の事があった時、四郎殿に毛利家を継がせるという悦叟院さまのご遺志であったと考えることもできよう。もし悦叟院さまがご隠居のまま多治比でご存命であったとすれば、家督を四郎殿にと申されたとは思わぬか」

『闘戦経』の事がここで問題になるとは思わなかったが、どんな横車にもそれなりの理屈は付けられるものだ。俺は変に感心した。

坂氏というのは毛利家の一門で、数代前に毛利本家から分かれた庶家である。代々毛利家の執権を務めた名譽の家柄で、この坂一族から桂広澄の桂氏、志道広良の志道氏などがさらに分家して族党を

作っている。坂広秀はこの名門・坂氏の当主でありながら執権には就いてないから、察するに親父はあまり厚遇しなかったらしい。親父が死んだ後、広秀は幼かった俺の後見役を自ら買って出て、何くれと俺に肩入れする素振りを見せてくれていたのだが、正直言って俺はこの脂ぎった男があまり好きではない。

小理屈の多い男だ……。

いつもうんざりさせられるのである。

広秀は四十代後半の働き盛りで、政戦の経験に不足はないが、家中での信望はあまり高くない。さほどの器うつわでもなくせに、気位だけは妙に高いところが人に疎ゆるまれる所以ゆえんであるう。しかし、そういう欠点に本人はあまり自覚的ではないようで、坂氏当主の自分が蔑ないがしるにされ、分家の志道広良が執権を務めていることに強い不満を持っているような気配がある。この評定で熱弁を振るったのも、俺を当主に据えることで権力を交代させ、俺の後見という権威をもって執権の座を奪おうとでも考えたのかもかもしれない。

宿老の一人でもある太郎左は、武辺者肌の男だから理屈こきの坂広秀とは仲が決して良くはないのだが、この時ばかりは広秀に消極的に賛成するような態度であった。傳人めのと（養育係）として、俺が当主にと推されたことが単純に嬉しかったのであるう。

太郎左に限らず、戦場往来の男たちの間で俺の人氣は高い。族党を背負う宿老たちはともかく、軽輩の武士の中には俺を武神か何かのように持ち上げ、心酔するような困り者さえいるくらいで、広秀が吐く屁のような理屈に賛同する者も皆無ではなかった。

俺を主君にと推してくれる者たちの気持ちは嬉しくないわけでもないが、

小さな家の中で小さな権力なぞ争って何になる……。

というのが俺の本音でもある。

議論はぐだぐだと一向に纏まらなかった。

俺はそれを醒めた目で見守っていたが、ついには我慢ができなくなり、

「兄上にお子があるのに、これ以上何を議論する必要があるか！」

と怒鳴った。

いい加減にしる、という気分である。

俺自身、長兄の遺児を脇にのけて当主の座に就くことなぞ考えられない。長兄に男子の子がある以上、これを立てるのが理の当然なのである。そう強く言っていると、評定ではめったに発言しない次兄が、

「四郎の申す通りじゃ。家督を継ぐは幸松丸さま以外には考えられぬ。兄上亡き後の毛利家を力を合わせて支えてゆかねばならぬ我がが、兄上のご遺骨も冷めぬうちからいがみ合つてなんとする」

と真つ先に俺に同意した。

俺と次兄が揃つて幸松丸の相続を推したから、坂広秀もついに口を噤み、毛利家の家督問題はそれで決着した。長兄の遺児を毛利家の当主に据え、これを皆で盛り立てることが正式に決まったのである。

もちろん、二歳の嬰兒に家政が執れるはずがないから、次兄と高橋久光殿が幼い当主を後見するという体制が取られることになった。次兄は毛利家を出て一家を立てており、自らの城を持ち、独自の兵力もある。長兄のもっとも近い血縁でもあり、当然の人選だと俺も思った。

が、問題は高橋久光という初老の男である。

久光殿は娘婿である長兄の人物を買っていたから、長兄が健在であつたこれまではそれなりに毛利に好意的であつたし、同盟者として助力もしてくれたし、遠慮も見せてくれていたが、今後は幸松丸を擁して毛利家の内政に露骨に介入しようとする意図が透けて見える。己の孫の家だから久光殿も悪くは扱わぬであろうという希望的

な観測は成り立つが、ゆくゆくは毛利を高橋の傘下にしようという
ような下心がないとも言えぬであろう。その点は宿老たちも不安を
感じていたに違いないが、強大な高橋氏を敵に回すわけにもいかな
いし、今後も高橋氏の助力が必要であることも事実であったから、
結局はこの横車を黙認せざるを得なかった。

「兄上があつてこそその毛利家だったのだ……」

言葉に出さずに呟いて、俺は深く嘆息した。

この嘆きは、多くの家臣たちの実感でもあつたらう。

第一章 毛利元綱 長兄の死（二）（後書き）

<＊注釈1>

「鐏矢」とは、矢の先に鐏（蕪の根のような形の木製具）をつけた矢。鏃^{やじり}は先端が二股に割れた雁股^{かりまた}を使うことが多く、飛ばすと風を切って音を発するところから「鳴り矢」とも言う。破魔の力が宿る矢と信じられており、合戦における開戦の一矢や、流鐏馬などの儀式や神事に用いられた。

第二章 西の桶狭間 籠手斬り重蔵（一）

細い雨が静かに落ちている。

羽田重蔵はたじゆうぞうは、物思いに耽りながら漫然と庭先の百日紅さるすべりを眺めていた。

なにやら妙な雲行きになってきたな。

気が乗らないというか、なんとなく物憂い。

「重蔵殿、重蔵殿」

この屋敷の主人である熊谷孫次郎くまがいまじろうが足音を響かせながら離れに入ってきた。

「いやいや、お待たせを致した」

鬼瓦のような面相をくしゃくしゃにして、満面で笑っている。

「殿にお話してみたら、おぬしの剣の腕前を是非見てみたいと仰せられてな。家中の腕自慢と仕合わせれば面白かるうなどと、大乗り気であつたよ」

重蔵は眉をしかめ、ああと無意味な声を発した。

困つたな。

こんな西国で仕官するような気はまったくなかったから、正直に言えばあまり深入りしたくはないのだが、親切に世話をして貰っている手前、孫次郎の好意を無下にするのも気が引けた。

「弱りましたな。わしは熊谷の殿さまに買いかぶられたようじゃ。孫次郎殿の言葉で、わしの腕を大げさに飾ってくれたのでしょ」

重蔵は、兵法者である。

本人にはそのことに対して大した自覚や誇りはないし、自らそう名乗った事もないのだが、世間では兵法者とか武芸者とか呼ばれる人種であることは間違いない。この時代、兵法というものの自体がまだほとんど世の中に認知されていないから、世の人々が重蔵を見る目というのは旅芸人ほとんど変わらない。いや、実際のところ重蔵の安芸までの旅は、まさに旅芸人そのものであったわけだが

「なんのなんの」

孫次郎は手を振って笑った。

「『籠手斬り重蔵』の技前は、吉岡兵法所で共に腕を磨いたわしが天下で誰よりもよう知っておる」

籠手斬り

それが、重蔵の二つ名である。

重蔵の家に代々伝わっていた剣術の型のひとつで、相手の剣が振り下ろされたその瞬間に、相手の太刀筋を左右どちらかにかわしつつ下段から斬り上げて相手の籠手を斬る。手加減なしなら木剣でも手の骨を砕く。戦場で使う時は籠手で守られてない指を斬り飛ばす。重蔵はこの技を得意とし、この技で「吉岡兵法所」の門人たちから一目置かれる存在になった。

「その妙技を見れば、殿は勿論、家中の頭の古い連中も考えを変えらるであらうよ」

孫次郎は、自ら進んで剣術の術理を学んだほどだからこの時代の武士にしては珍しく兵法に理解があり、「戦場で兵法など役に立た

ぬ」という一般の認識に強い不満を持っていた。剣術の兄弟子とも言うべき重蔵が訪ねて来たのを幸い、その腕前を衆人に見せ付けることによって兵法の有用さを認めさせ、家中での兵法の地位を向上させようとも考えているのかもしれない。

それはそれで悪いことでもないのだが

肝心の重蔵自身が、兵法というものに対して迷いを抱えている。

重蔵は、その迷いを払拭する契機きっかけを掴むべく、はるばる安芸くんだりまでやって来たのである。物見遊山でも仕官目当てでもないのだ。

重蔵が剣の道を志したのは、半ば以上は成り行きだった。

死というものが生と隣り合わせの乱世だから、己が身を己で守れるのは悪いことではないだろうし、男というのは本能的に強さを求める生き物でもあろう。自ら進んでその道に踏み込んだと言っても間違っではないし、だから自発的と言えば自発的なのだが、重蔵は人を斬ることが正直あまり好きではない。生れ落ちた環境が違っていれば、剣など握ることなく一生を終えていたかもしれない思ったりもする。

太刀先をこつ走らせれば相手のここを打てる、相手の太刀をこつ流せば相手のあそこを斬れる。術理、合理としての剣は、確かに面白いと思う。身に付けた技を比べあい、勝った負けたを競うのは嬉しいとも思う。それらを突き詰めてみたいという願望もないではないのだが、しかし、人殺しの技術であるという現実から乖離かいりしたところに剣術はあり得ない。さらに言えば、どれほど剣の腕を磨いたところで戦場ではさほど役には立たないということを、重蔵自身が身をもって知ってしまったのである。

一対一で平装で斬り合うというなら兎も角、戦場では敵も味方も鎧兜に身を固めているわけで、実際問題として剣などはほとんど齒が立たない。まして足軽による集団戦が確立されつつあるこの時代、一列に並んだ数十人の足軽たちが振るう数十本の槍を前にすれば、術も理もあつたものではない。戦場において、個人の尊厳と誇りを

賭けて一騎打ちをするというような、個々の武勇がものを言った時代は、すでに終わろうとしているのである。そのことは、何度も足軽として戦場に出てみて重蔵は痛感した。

平時の人殺しが巧くなるというだけなら、たとえ技を極めたところで何になるというのか。

そう考えるようになって、重蔵は迷路に迷い込んだ。迷いを抱えたまま剣の修行を続けてきたが、何年経っても迷いを振り切ることではできなかった。

だから、迷妄の壁を突き破る何かを求めて重蔵は安芸にやって来た。この国に、会って教えを乞うべき人物がいる　　かもしれないと思っただからである。

重蔵はもともと京の武士の子であった。

姓を秦、諱を武元と言う。

秦氏というのは神代の昔に朝鮮から集団で日本に移住したという帰化人の姓で、秦の始皇帝の末裔であるとかいう眉唾な伝説がある。聖徳太子の側近であった秦河勝が歴史に名高いが、自分の家はその遠い子孫に当たるのかどうか、本当のところは重蔵も知らないし、そんな大昔の事にはほとんど興味もない。

重蔵は、山城国葛野郡　　京の西郊・太秦にほど近い山里で生まれた。

我が家は代々「上北面」であり、出羽守の官職を頂戴していたのだ。

というのが、重蔵の父の誇りであった。重蔵の秦家は、曾祖父の頃まで京の御所を守る「北面の武士」であったのだそうだ。「北面の武士」というのは、上皇に直に仕え、朝廷の警衛をその任務とする武士団である。「上北面」と「下北面」があり、「下北面」は地下（蔵人を除く六位以下の官人と一部の庶民）の武士であったことに比し、「上北面」は院への昇殿を許され

た者、つまり五位以上の官位を持つ貴族武士で編成された。

重蔵の秦家は、その「上北面」であつたと父は言う。

父は常に先祖の氏素性を誇り、秦家の名誉を誇る人であつたが、父にあるのは誇りだけで、屋敷にはその日食う米さえなく、畑で作つた稗ひえとか粟あわや、山で採つた山菜などで辛うじて食い繋ぐような生活だつた。

「北面の武士」は源平の昔には大そうな人気と実力を誇つたらしいが、鎌倉に政権が移つて以降、朝廷がその権威を失うに従つて衰微した。足利の世には完全に形骸化し、有名無実となつてからすでに数十年が経つている。当然だが、重蔵は「北面の武士」の栄光の時代を知らないのである。秦家は重蔵が子供の頃にはどうしようもなく貧窮していたし、血の尊貴さを誇つてみたところで零落した姿を嗤わらわれるか同情されるかするだけで、腹が膨れるわけでも銭が貰えるわけでもなかつた。

父は、武士として先祖の名をあげるといふ夢に生き、その夢のために十四年前に死んだ。「応仁の乱」以後、戦乱が続く京のどこの戦場で討ち死にしたらしい。らしいといふのは死体すら帰つて来なかつたからで、正確には行方知れずと言つべきなのだろうが、多くの戦死者がそうであるように、身ぐるみを剥がれて鴨川の河原にでも捨てられたのだろうと重蔵は思っている。

父の二年後には母が病で死に、重蔵は十七歳でまったく家族を失つた。兄弟はおそらくいない。物心つく以前に死んだり売られたりした兄や姉はいたかもしれないが、少なくとも重蔵は知らない。親戚くらいは何処かにいるのだろうが、それも系図の上だけのことで、重蔵は会つたこともない。

上北面の秦家は滅びたのだ。

そう思うといつそサバサバして、秦という重々しい姓も捨てる気になつた。重蔵はそれ以後、羽田と名乗っている。

重蔵の手元に残つたのは父から貰つた太刀と脇差と、家に代々伝わつていたといふ古びた数巻の巻物と数冊の書籍　それだけだつ

た。家にさして愛着もなかったし、そのまま田仕事で一生を終える気にもなれず、掘つ立て小屋のような屋敷とわずかな田畑を売り、重蔵は身ひとつで京の都へ上った。

生きるためには喰わねばならない。父から弓馬刀槍の初歩と家伝の剣術を叩き込まれていたから、戦場に出さえすれば何とかなるだろうと思った。父のように武士として名をあげようとか出世しようとかは考えなかったが、重蔵は剣の振り方くらいしか知らなかったから、他に選択肢はなかった。

京では細川氏や大内氏といった大大名がそれぞれの將軍を担ぎ、いつ果てるとも知れない戦乱を繰り返している。まったくどうしようもない世の中ではあるが、そういう世であるからこそ、重蔵のよくな人間が飢えずに済んだ、とも言える。京の周辺は常に戦場であり、足輕稼ぎの口ならいくらでもあったのである。そこで重蔵は集団で行う足輕の戦闘という現実に向直し、己の技の無力を思い知らされたわけだが、それでも身に付けた技のお陰か生き残ることはできたし、足輕をやつてさえいればとりあえず喰うには困らなかつた。ところで、京には「京流」とか「京八流」とか呼ばれる兵法の流派が古くからある。本当に八流派あったのかは判らないが、少なくともその一流である「吉岡流」は代々足利將軍家の兵法指南役として栄えていて、京の今出川に「吉岡兵法所」という道場まで開いていた。

「京流」は天狗が生み出した兵法と伝承されていて、鞍馬山での修行時代、牛若丸うしわかまると呼ばれた義経がそれを学んだという伝説があり、「鞍馬流」とか「義経流」とかの名でも知られている。天狗とは、おそらく修験者しゆげん、山伏といった連中のことであろう。源平時代の「北面の武士」たちがこの兵法を学び、武芸の技を練っていたのかどうかは知らないし、確かめようもないのだが、重蔵の家にはその「義経流」と謂われのある剣術の型が代々伝えられていて、重蔵は物心つく前からそれを父に叩き込まれた。

それが本当に義経が学んだ剣術である　と、重蔵が信じていた

わけではない。重蔵の家には剣術の型がいくつか伝わっており、それはそうした由来のものであると伝承されていて、三百年に渡って代々そう信じられて来た、というだけのことである。

わしの剣術とは、どういふものであるのか。

その事は、昔から純粹に興味があつた。

それを知るには、同じ根を持つ「京流」の技を知り、重蔵の技と比較するのがもっとも早いであろう。重蔵は足輕稼ぎの合間に「吉岡兵法所」に出入りするようになり、また鞍馬山や醍醐山といった京周辺の修験の山に足を運んで修験者と接し、古くから伝わる兵法を自分なりに研究しつつ、己の剣の技を磨いた。

「吉岡兵法所」は単に剣術の道場というわけではなく、槍、薙刀、柔術、弓術などの武芸に加え、軍略の研究も盛んに行われていた。

古今の合戦を調べ、その勝因敗因を分析したり、あるいは『孫子』、『呉氏』といった唐土の兵法書を訓読したりして、軍の動かし方、戦法、軍略などを議論するのである。

幼い頃から厳しい父に武士としての教育を施された重蔵は、拙いながらも漢文の読み書きができる。初めて接した軍学は、机上の空論とはいえ非常に面白かつた。もちろん重蔵が軍勢を率いることなどあり得ないし、軍学を身に付けてどうなるという話でもなかつたが、強く惹かれるものを感じたから熱心に学んだ。剣の道で生きてゆくことに迷いを抱いていた重蔵は、そちらに逃避していたと言えぬこともない。

そんな暮らしを七、八年は続けただろうか。

修験者に関わっているうちに、重蔵は司箭院 興仙という男の名前を知つた。

司箭院 興仙 本名を宍戸家俊と言つ。

一種の怪人である。

興仙は二十年ほど前に突然京に現れた修験者で、薙刀術、剣術、柔術、杖術、弓術など武芸百般に通曉し、さらには神業のような魔法を修し、飛行自在の術まで使うという事で世の評判を取つた。

時の幕府管領・細川政元は、幕政を牛耳って絶大な権力を握り、足利將軍の廢位さえ行つて『半將軍』と謳われたほどの大物だが、どうしたわけか修験道に凝り、自ら魔法を行ったという風変わりな人で、興仙の靈験を聞いてその弟子になっている。興仙は細川政元に仕え、「第一の家臣」と呼ばれるほど寵遇ちゆうぐうされた。

いわゆる「永正の政変」でその細川政元が暗殺されたのが十年前である。>*注1<

興仙はその後も三、四年ほどは京の周辺に居たようだが、近頃はその消息をまったく聞かなくなった。一説には故郷の安芸国に帰つたとも言つた。

重蔵は京の愛宕山あたごで偶然にこの高名な修験者の話を聞いたのだが、興仙の使う技が「義経流」の兵法であると知つて、俄然興味を持つた。

興仙という人に教えを乞えば、「義経流」兵法の真髓に触れられるのではないか。そう思つた。

別に魔法を使いたいか空を飛びたいとか思つたわけではないが、「義経流」を極めたという先達に師事し、研鑽けんさんを積みめば、必ず得るものがあるだろう。自分の裡なかにある迷いを吹っ切る契機きかけになるのではないか

興仙 宍戸家俊は、安芸の豪族・宍戸氏の一族で、当主・宍戸元源もとよしの弟であるという。あまり詳しくは知らないが、宍戸氏は安芸の豪族たちと共に大内義興よしおきの上洛戦に従軍し、四年ほど在京して各地の合戦で戦っていたから、常に大内氏の陣営で足輕稼ぎをしていた重蔵は、宍戸元源という勇将の名前くらいは聞いたことがあつた。ちなみに大内義興は現在いまも幕府の管領代として京に居座り、幕政を牛耳っているが、安芸の豪族の多くは六年前の「船岡山の合戦」を最後に続々と国許に帰つてしまつていて、宍戸家の人間も京には残っていないはずだ。

安芸へ行つてみるか。

京では「船岡山の合戦」以来大きな戦がなく、重蔵にとっては景気が悪かった。京にしがみ付いていなければならぬ理由もない。

瀬戸内海に沿って山陽道をひたすら西に進み、摂津、播磨、備前、備中、備後と歩けば、次が安芸である。道々、国々の寺社・仏閣、名所旧跡などを訪ね、古今の戦場を我が目で見て廻りながら旅をするのは悪くない。懐には足輕稼ぎで貯めた銭があるから、二月や三月なら飢えの心配はないであろう。

よし、決めた。

重蔵はそうして京の都を離れ、旅に出た。

が、この思惑はまったく無謀だった。

重蔵はせいぜい京の周辺の二里四方しか世間を知らず、西国に土地勘もなく、知人もなく、おまけに旅の知識もない。街道筋は二里も歩けば必ず関所があり、手形を持たない重蔵は通行するたびに銭を取られてしまうから、さして多くもない持ち金はたちまち目減りした。山の民や修験者などが使う山越えの道なら関所はないのかもしれないが、土匪（賊）に会わぬとも限らないし、そもそも重蔵はどの道がどこに繋がっているのかさっぱり判らない。山里育ちの重蔵は山の怖さは知っており、迷ったら命が危ないということくらいは心得ている。

甘かったな。

そろそろ三十路も近いというのに、己はあまりに世間を知らぬ。京を離れてみて、その事に初めて気付かされた。銭をケチらず堺あたりから船便を利用するか、京で西国に向かう修験者なり連歌師なりの探して、ついて歩かせてもらえば良かったと気付いたが、後の祭りである。

周防国山口へ向かうという旅芸人の一座と行き会うことがなかったら、おそらく重蔵は備前あたりで立ち往生するハメになったであろう。

「ほうほう、ご浪人さんは剣術を使いなさるかい」

座長の文五郎という四十男の計らいで、芸として剣術を披露する事と荷担ぎや雑用などの仕事をする事を条件に、重蔵は一座と行動を共にさせてもらえる事になった。

一行は、美濃国青墓宿（重蔵はそれがどこにあるか知らないが）を根城にしている旅一座で、傀儡子（人形遣い）、放下師（奇術師）、猿回し、歌舞をする女など、総勢三十数人の大所帯であった。在在所の有力者の膝元で小屋掛けして興行し、銭を稼いではまた次の在所へと向かう。大名小名の城下町や大寺社の門前町といった都市部は稼ぎ所で、数日腰を据える場合もあり、その間、女たちは求められれば権力者や有徳人（金持ち）の夜の伽も務める。

重蔵は「天下無双の剣術使い」などと偽りの看板で大仰に囃され、居合いの技を見せたり、飛び入り客と木刀で勝負させられたり、それを賭けの道具にされたりした。謳い文句がいかにも挑発的だから、売名を目論む旅の兵法者や地元の無頼漢に勝負を挑まれるようなこともあった。歴とした武士や「本物」の兵法者は旅芸人ごときに聞わらぬものようで、幸いなことに重蔵が負けてしまうほどの手練には出会わなかったし、素人の客に大怪我を負わせるようなへまもなかったから良かったが、後になって考えれば、ひとつ間違えば大変な事態になっていただろうと思わぬでもない。

日に二度の飯は食わせてもらったが、基本的に無報酬だったから、本当のところは騙されてこき使われたというだけかもしれない。けれど重蔵はそれで少しも文句はなかった。これまで知らなかった世の中の裏側を見ているようで面白かったし、何より銭と飯と寝床の心配をせずに旅ができるのは有り難かった。

移動は何とものんびりした速度である。重蔵が京を出たのは永正十四年（1517）の桜が散る頃であったが、気が付けば夏も過ぎ、秋と呼ぶべき季節になっていた。天候に恵まれさえすれば船で三日で済む距離に、三ヶ月以上の日数が掛かったわけである。それでも、ともかく安芸へと無事に辿り着くことができた。

廿日市の町で打った興行を最後に、重蔵は一座と別れることにした。

座長の文五郎は、この旅の間に大そう重蔵を気に入ったようで、

「我誇りで粗暴なだけって奴が多いから、俺あ兵法者って連中はあまり好きじゃなかったんだが、あんたあ人柄が好いよ。このままウチに居て貰いてえくらいだ」

そう言つて何度も引き止めてくれた。

それも悪くない。

馴染みになつた女も居たし、笑い声が絶えぬ一座での日々は快適で、足輕稼業よりよほど性に適つていた。諸国をこうして旅する人生も面白いと思つたりもしたが、しかし、いざとなると不思議と兵法へのこだわりを捨てることができなかつた。

重蔵の意志が変わらぬと知ると、

「どこに居たつて同じ空の下だ。生きてさえいりゃあ、またどっかで会つこともあるでしょうよ」

文五郎は饒別に多少の銭をくれた。

この文五郎というのも不思議な男で、身ごなしに隙がなく、教養もありそうであり、男ぶりも好い。とても卑賤の出とは見えず、武家の出ではないかと重蔵は直感したのだが、一座の誰に聞いてもその素性はまったく知れなかつた。

ともあれ、いつかの再会を約して一座と別れた重蔵は、廿日市から広島へと少し道を戻り、太田川に沿つて北へ足を向けた。

安芸では孫次郎殿を頼ろう。

安芸にはただ一人、重蔵の知り合いがいる。熊谷孫次郎という男で、大内義興の上洛に従つて京へ従軍した安芸の豪族・熊谷氏の家臣である。「戦場では兵法なぞは役に立たぬ」と剣術に見向きもせ

ぬ武士が多い中で、孫次郎は珍しく兵法に関心があり、在京した四年ほどの間に何度も「吉岡兵法所」に足を運び、熱心に剣術を学んでいた。重蔵とはそこで知り合い、年が近いこともあって打ち解けた。型を指南してやったり稽古相手を務めてやったり、時には連れ立って遊女屋で酒を飲んだりした間柄である。剣の筋はさほどでもなかったが、よく笑う人柄の爽やかな男だった。六年前は二十五、六であったから、現在は三十一、二ということになるう。

熊谷氏は安芸の有力豪族で、安芸郡の北部 可部の高松山城（広島市安佐北区可部町）に本拠を置いている。

地元の領民に聞けば屋敷の場所はすぐに判った。熊谷孫次郎は当主・熊谷 民部少輔 元直の縁者であるらしく、城下の一等地に立派な屋敷を持っていた。

重蔵は孫次郎がこれほどの武士とは知らなかったから、広壮な屋敷を前にして多少の気後れや不安もあったのだが、思い切って訪ねてみると、幸いなことに孫次郎は在宅しており、重蔵が驚くほどに再会を喜んでくれた。

「朋有り、遠方より来たる、とはこの事じゃ。わしが京へ再び上るということでもない限り、二度と会えぬお人と思っておつた」

名もない素浪人に過ぎぬ自分を、孫次郎は家を挙げて持て成してくれたから、重蔵はえらく恐縮した。

重蔵の腹づもりでは、孫次郎から安芸の政情を聞き、宍戸氏が拠るといふ安芸北部の地理なども教えてもらい、宍戸家中に知人が居るようなら紹介状でも書いてもらい、居ないならどこかに伝手を探す便宜を計ってもらいたい。

酒を飲みながら話をしてみると、重蔵が探している男を孫次郎はよく知っていた。

「蔵島神領家には懇意の兵法者が幾人かおるんじゃ。神人とか修験

者とかいう輩やからは兵法を齧かじっておる者が多いでな。その連中から聞いた。細川政元殿の側近であったというのには驚かされたが……。その興仙こうせん 宍戸家俊か、何でも若い頃、誰それ言う師匠について兵法を学び、二十年ほど前に厳島神社に参籠さんろうし、厳島大明神の神託を得て京にのぼり、修験の山で修行して、兵法の蘊奥うんのう（極意）を極めたという話じゃ」

「二十年ほど前……。宍戸家俊殿とはお幾つなのですか？」

「宍戸雅楽頭うたのかみには深瀬ふかせの隆兼たかねという舎弟がおると聞く。そのさらに下の弟というのであれば、おそらく不惑ふわくを越えてはおるまい」

「三十代ですか……。！」

重蔵は仰天した。宍戸元源の年齢など知らなかったから、それほどの若さとは思ひもなかったのである。飛行自在とか魔法に堪能とかいう印象が強く、それこそ仙人のような老人の修験者を勝手に想像していた。

「しかし、宍戸の甲立へ往くというのは……」

そこで孫次郎は罅ひびの入った鬼瓦のような面相を歪め、難しい顔をした。

「いま、安芸はややこしいのじゃ」

と、孫次郎は言う。

重蔵の認識では、安芸は大内氏の属領で、守護の武田氏をはじめ、熊谷氏、宍戸氏、吉川氏、毛利氏、高橋氏、小早川氏といった安芸の豪族たちは大内義興の上洛戦に揃って従軍していたから、いわば

味方同士であると思っていた。

しかし、実情はどうもそうではないらしい。

「安芸の北における毛利と吉川というのが厄介でな。さほどの力もないが、安芸の九家の豪族を纏めて国人一揆（豪族連合）の盟約を結び、安芸のご守護たる武田殿の言うことを聞かんのだ。我が熊谷家は、ご守護殿の第一の盟友だからな。この数年、国人一揆の連中とは争いが絶えん」

「では、穴戸もその国人一揆とかに加盟しておるのですか？」

「いや、穴戸は穴戸で、我こそが安芸の守護であるというような顔をしておつてな。国人一揆とは争うておるが、ご守護殿にも従わぬ備後の三吉と結んで、毛利、高橋なんぞと合戦いくさをしておるらしい」

どうも一筋縄ではいかぬようだ。

よくよく話を聞いてみると、安芸の騒乱は、そもそも厳島神領家の家督相継争いが発端であつたらしい。安芸の守護である武田元繁もとしげがこれに介入し、さらに大内義興から離反したことで事態が大きくなつた。

武田元繁は西国の雄・大内義興に服属を強いられ、その下知によつて京に出張つていたわけだが、厳島神領家に相継争いが起こるや、その鎮定を口実にして安芸に帰国した。大内義興が在京している隙をついて、大内氏からの独立と安芸一国の制覇を目論んだ、というあたりがその真相であろう。

反大内の旗幟を鮮明にした武田元繁は、大内氏から貰つた嫁を離縁し、出雲の強豪・尼子経久あまこ つねひさと結ぶや、大内方の豪族を次々と攻め、勢力を拡大したのだと言う。

大内義興にすれば、飼犬に手を噛まれたようなものであつたらう。当然これに激怒したが、京の幕府政権は大内義興の威望と兵力

と財力とで保っているようなものだから、自身は京を離れられない。已む無く、毛利氏、吉川氏など安芸の豪族たちを京から帰国させ、叛いた武田元繁を討つよう命じた。安芸に戻った毛利氏の毛利興元おきもと、吉川氏の吉川元経もとつねらは、安芸の大内方の豪族を国人一揆という形で連合させ、守護である武田氏に対抗したのである。

「なるほど……」

重蔵は安芸の歴史に詳しくないからここ数年の表面的な理解しかできなかったが、およそ乱世の典型のような話だと思った。

「実は去年、その毛利興元が病で死んだ」

孫次郎は口元だけでニヤリと笑った。

安芸国人一揆の盟主的な存在であった毛利氏の当主が若くして病死し、二歳の嬰兒えいじが家を継いだのだと言う。

「国人一揆は、安芸の北の豪族と南の豪族とをくつつけておった膠にかわを失い、力を弱めたわけじゃ。ご守護殿は、この機に毛利、吉川を一息に攻め潰すお肚であるらしい。この冬までには大きな戦があるぞ」

「ほう」

「重蔵殿、どうせ北へ往くつもりなら、来年の春まで待ってはどうか」

孫次郎の提案に、重蔵は首を傾げた。

「春まで　ですか」

「戦がいつ始まるかはハキとは判らぬが、そう先の話ではない。始まってしまえば道の往来などはできぬから、往くなら今のうちに発つしかないわけじゃ。冬は安芸の山奥は道が雪で閉ざされようから旅には向かんしな。じゃが、何の伝手も方策も持たずに宍戸の城下に着いたところで、立ち往生になるかもしれない。その宍戸家俊は消息が知れず、いま国許におるかどうかさえ判らぬのであろう?」

「まあ、それはそうです」

「毛利が滅び、吉田がご守護殿の手に落ちれば、宍戸の五龍城は目と鼻の先よ。毛利、吉川が滅べば、宍戸雅楽頭もご守護殿に従うようになるやもしれんし、そうなれば話はぐんと早くなる。我が殿はご守護殿とは義兄弟の契りを結んだほどの間柄じゃ。宍戸にも話が通せるじゃろう」

「ふうむ……」

重蔵は腕を組んで考え込んだ。

宍戸家俊の事もあがるが、それより「大きな戦」という言葉には心惹かれるものがある。安芸でそれが行われるなら、この眼で見たいという好奇心である。

京で行われる合戦と言えば、足軽同士の小競り合いがそのほとんどと言っていい。大内氏、細川氏の双方が雇っている足軽同士が殺し合うだけで、本物の武士が大合戦をする様子は実際のところあまり見られない。

安芸の守護・武田氏が、その威信を賭けて行う国取りの戦とは、どれほどの規模であるのか。安芸の武士たちはどのように戦うのか。陣立ては? 軍略は? 城攻めの方策は? そう考えると興味は尽きない。

「この家にはいつまでおつてくれても構わぬぞ。我が屋敷と思つて使つてくれればよい。共に剣を磨いた友垣ともがきじゃ、遠慮はいらぬ。ああ、そうじゃ、どうせならわしの家来にも剣の手ほどきをしてやつてくれんか。おぬしほどの手練てだれに仕込んで貰えれば、わしが教えるよりずっと腕が上がるう。そうなれば合戦いくさで我が手勢の手柄も増えよう。わしも大いに助かる。　　ああ、こりや名案かもしれんな。そうせい、そうせい」

孫次郎は重蔵の肩を叩き、豪快に笑つた。

何となく言い包められたような気がしなくてもないが、興仙
穴戸家俊の消息を確かめねばならぬのは事実だし、どうせ急ぐ旅でもない。流されるままに往くのも、また面白かるう。

「……判つた。ならばしばらくご厄介にならうか」

「おお　　」

孫次郎は厳つい顔をくしゃくしゃにして大いに喜んだ。

「よし、そうと決まれば今宵は大いに飲もうぞ。昔の思い出も語り合いたい。近頃の京の話も聞きたい。おぬしが旅した国々の様子なども聞かせてもらわねばならぬ」

酒豪の孫次郎に明け方までつき合わされ、翌日の重蔵はひどい二日酔いに苦しめられることになった。

第二章 西の桶狭間 籠手斬り重蔵（一）（後書き）

<＊注1>

「永正の政変」とは、永正四年（1507）に細川政元が暗殺された事件を指す。室町幕府管領・細川家（京兆家）の内訌である。

第十代将軍・足利義材を廃立し、強大な権力を握った管領・細川政元には子が無く、澄之、澄元、高国という三人の養子を迎えていたのだが、澄之を擁する家臣団が政元を湯殿で暗殺し、澄元を近江へ追い、細川家の家督を奪った。

高国は在京の有力者と語らい、澄元を細川家の家督に擁することを決め、近江で味方を募って上洛した澄元と共に澄之方を攻めて滅ぼし、澄之を自刃させた。

その後、政元が廃立した足利義材が大内義興の武力を頼って上洛し、細川澄元と対立するや、高国は澄元から離れて大内義興と結んだ。澄元を再び近江へと追い、高国が細川家の家督の座に就いたのである。近江へ逃れた細川澄元は再び味方を募って勢力を蓄え、京の再奪取を目論んだ。

大内義興が参戦したことによって細川家の内紛に足利家の将軍後継争いや幕府内の権力争いが加わり、京や近江などを舞台に泥沼の戦乱が繰り返されることになった。

第二章 西の桶狭間 籠手斬り重蔵（二）

その夜、盃を傾けながら聞いた話である。

熊谷孫次郎は、熊谷氏の当主・熊谷 くまがい 民部少輔 みんぶのしょうぶ 元直の従兄弟 もとなお に当たるらしい。孫次郎の父は熊谷氏の先代・膳直 よしなお の弟であり、孫次郎はその父の庶子 くわいし（妾腹の子）であったのだそうだ。

京で重蔵が孫次郎に出会ったのは九年前で、熊谷軍が京を去るまでの三年ほど交流があったのだが、その頃は孫次郎の父・熊谷直祥 なおよし がまだ現役であったし、跡継ぎとして正嫡 せいちやく（正妻の子）の立派な兄も居たそう、庶子の孫次郎は兄の遙か格下の家来という身分であり、部屋住みの日陰者という立場だったらしい。服装や持ち物や従者の数など、当時の孫次郎はどこから眺めても下級武士であったし、だからこそ足輕稼業で暮らす重蔵のような素浪人が引け目なく付き合えたとも言える。また、そういう気楽な身上であったからこそ、孫次郎も剣術を身に付けようなどという酔狂を起こしたのだろう。一般に、この当時の武士の剣術に対する認識は、「歩卒（雑兵）の技」、「葉武者の技」であり、一軍を率いる大将に必要な技能とは考えられていなかった。

しかし、京を去って後、この六年間で孫次郎の境遇は一変した。何のことはない。五年前に父が隠居し、家を継いでいた兄も二年前に戦死してしまったのである。

兄には子が二人いたがいずれも幼い姫で、婿を迎えることができなかった。他に家を継ぐべき男子はなく、降って湧いたように孫次郎のところの家督が転がり込んで来たというわけだ。熊谷氏の家中において孫次郎の家の家格は非常に高いから、庶子とはいえその家を継いだ孫次郎は、一躍、熊谷氏の重臣になった。

当然、その所領は大きく、家来も多い。ひとたび陣触れすれば雑兵が五、六十人も槍を抱えて在所から駆け集まって来るであろう。高松山の城下にある屋敷も実に広壮で、部屋数が知れぬほど広い母

屋には離れまでが付き、厩うまやには十数頭の馬が繋がれ、家僕（使用人）が暮らす長屋だけで二棟もあつた。

その様子を眺めた重蔵が、

わしは人間ひとまちが違いをしたのではないか。

と思わず気後れしてしまつたのも無理はない。

重蔵はその長屋の一部屋を与えてもらい、衣服も貸してもらい、三度の飯も食わせてもらつたという、まったく有り難い身分になつた。

無為に徒食しているだけではさすがに申し訳ない。

素浪人が貧窮した末、出世した古い友人に食を強請たかりに来た、なぞと周囲に思われては恥はずかしくもある。

ここは孫次郎殿が望んだ通りにするしかないか。

半ば観念するような気分でそう思つた。

重蔵が人の役に立つ事となると限られている。孫次郎の提案通り、家つきの家来たちに武芸の教導をしながら日を送るのが、自分にとつても孫次郎にとつてもその家来たちにとつても、もつとも益になるであろう。

重蔵の一番の得手は何と言っても剣だが、そこは長く戦場で暮らし、日々兵法を研鑽けんさんしてきた男である。槍も人並み以上に使えるし、弓も拙ますくはない。何より重蔵は大小併あわせれば三十以上の戦場を踏んでおり、圧倒的な実戦の経験があつた。それも、家来に幾重にも守られながら後方で戦の模様を眺めていたわけではなく、使い捨てる足軽として常に戦場の最前線に立ち、矢の雨、槍の林という中で生き抜いて来たのである。殺した人間の数は優に五十を越え、手傷を負わせた者の数はその数倍にも及ぶ。重蔵の五体にはそれらの戦歴を示す傷跡がそれこそ無数にあり、夜討ち朝駆けは勿論、山岳戦の困難さも市街戦の心得も、勝ち戦の味も負け戦の過酷さも知り抜いている。いかに戦国乱世とはいえ、二十九歳の若さでこれほど修羅場を潜っている者も多くはないであろう。世故や世渡りには暗くとも、戦場で生き残るための知恵なら豊富に持っているという自負があつた。

ただし、重蔵が教えられない事も勿論ある。

その筆頭が、馬上戦闘であろう。

重蔵は幼い頃に馬術も学んでいるから馬に乗れぬということはないが、父が行方知れずになった時に、家にただ一頭いた馬も失った。それ以来この十四年間、重蔵は馬に乗ったことがなく、戦場にも足軽としてしか出たことがないのである。

騎馬武者というのは馬で駆けながら刀槍を振ったり弓矢を射たりするだけでなく、馬上組み打ちと言って騎馬武者同士で馬に乗ったまま格闘することもある。これらは馬に乗れる身分の高級武士には必須の技術と言ってよく、独特の鍛錬が必要だが、重蔵にはその経験がまったくなかった。

が、おそらく孫次郎もそこまでは望んでいないであろう。いずれにしても己が今やれることをやるしかない。

重蔵はその旨を孫次郎に伝えた。

「おお、それは有り難い」

孫次郎は無邪気に喜んでくれた。

「ならばさっそく頼むとするか。善は急げと申すからな」

その二日後、孫次郎は己の家来の中から二十数人の若者、元気者を屋敷に集め、重蔵を紹介した。

「こちらは羽田重蔵殿と申して、京の吉岡兵法所で共に剣を学んだ兄弟子のようなご仁じや。その兵法の腕は数多おつた門人の中でも特に優れ、わしなどは遠く及ぶところではない。巖島の神人や白光山の修験者にも剣術の達者はおるが、この重蔵殿に比肩するほどの者は多くはないであろう。せつかく当家に逗留あるを幸い、親しく教えを乞い、その技を学ばせて貰うがよい。来たるべき合戦で必

ず役に立とう」

最初は重蔵に不信の目を向ける者も少なくなかった。乱世を生きる男たちは実力本位であるから、いかに主人の古い馴染みとはいえ、急にやって来たどこの馬の骨とも知れぬ素浪人に師匠面しゅうめんをされて嬉しがる者はない。まして孫次郎の家来たちは主人の影響もあって兵法に親み、常日頃から武芸を心掛けており、並みの武士よりよほど使えるという者が多いのである。当然、自分たちの腕に誇りも自信もある。

その空気を敏感に察した孫次郎は、

「皆にまずは重蔵殿の腕を知らしめるか」

と重蔵に顎を向けて笑った。

「承うけたまわった。されば」

重蔵は、孫次郎の家来で腕自慢の三人に木太刀を取らせ、自らは手ごろな太さの竹を三尺ほどに切ったものを握り、それをもって立ち会うことにした。

この勝負は屋敷の中庭で行われたが、詳細は書いてもつまらない。静かな佇たたずまいで下段やや半身に構えた重蔵は、三人が裂帛れつぱくの気合を込めて打ち込んで来るその初太刀に合わせて身を翻し、同時に下段から斬り上げて籠手を軽く打った。最初の二人は八双の構えから撃ちかかり、最後の一人は正眼に取った木太刀で中段へ突きを放ってきたが、結果はまったく同じある。静から動へと瞬転する重蔵の動きの疾はやさと質が、力と勢いに任せて撃ちかかって行った三人とは違いすぎて、事も無げに勝った。という印象だけが残った。

「今のは家伝の技で、『飛猿とびざる』と申す。戦場いくさばで鎧を着た敵も、籠手

から指は出ておりますから、指を斬れば打ち物（武器）は取れぬようになり、戦うことができぬようになります」

それを目の当たりにした者たちは、ただ啞然とするしかない。

「あの頃より、また一段と腕を上げられたな。何やら凄みさえ感ずるわ」

久々に重蔵の妙技を見た孫次郎も、驚きを隠さなかった。

家来たちの不信の目は一瞬で尊敬へと変わり、重蔵に接する態度も手のひらを反したように丁重そのものとなった。

重蔵が見るところ、孫次郎が選んだ家来たちはさすがに基礎的な修練はできていて、足腰もよく鍛えられている。

しかし、組太刀の型というのは、教えたところで一月や二月で身につくものではない。凄まじい速度で迫って来る刀槍に対して、意識するより早く型の通りに身体が反応する、ということまで修練を積み重ねば意味がなく、その形だけを憶えたとしても実戦ではほとんど役に立たないのである。

合戦が近いということもあり、重蔵は戦場で使えるより実践的な技術を中心に指導することにした。木刀では場合によっては大怪我をするので、剣を得意とする者、槍を得意とする者にそれぞれの長さの細い竹の棒を持たせ、腹巻や籠手、脛当てなども付けさせた上で、わざと二対一、あるいは三対一という変則的な形で叩き合いをさせた。注意を常に分散せねばならない状況を強いて乱戦に慣れさせると同時に、複数の人数で一人の敵を倒すコツを身に付けさせるのが狙いである。これは足軽稼業で生きてきた重蔵ならではの指導法と言うべきで、卑怯を恥とする歴とした武士からは出ない知恵であろう。単に剣術の腕を競わせるより、雑兵たちにとっては得るものが多いに違いない。

また、重蔵自身が戦場で掴んだ心得やコツといったものも、折に

触れて説いて聞かせた。

「何かひとつの物事に囚われ、その事に心が行ってしまつと、周りの物事は見えなくなる。これが人の急所です。戦場で敵と向かい合えば、誰でも怖い。相手が繰り出して来る槍先、振りかぶる太刀先にのみ気が行つてしまふ。それしか見えなくなると、敵味方が入り乱れた戦場では死ぬ危険がずいぶん増えるのです。ひとつの物事に囚われる事なく、目に入るすべての物、すべての事を、視るとはなく全体として視て、周囲の流れの中で己の身体を自然に動かすという事が肝要です。それができるようになれば、戦場の呼吸というのが解つてくる。ここは進むべき、ここは退くべきという勘所が掴めるようになれば、不思議と死なぬものです」

「戦場では、敵を組み伏せておる時がもつとも危ない。下になつた敵はそれこそ死に物狂いで反撃しようとするし、こちらはこちらで敵に止めを刺す、その首を取ることに夢中になり、周囲が見えなくなる。どんな豪傑も、そういう時は横手から突き出される槍、飛んで来る矢に気付かず、呆気なく死んだりするものです。なればこそ、味方が敵を組み伏せておる時は、助太刀せよとまで言わぬにしても、その者の周囲の敵に気を配つてやる事が大事です。それだけで怪我をしたり死んだりする者はずいぶん減る。『武士は相身互い』と申すのは、この事です。これとは逆に、味方を組み伏せておる敵があれば、それこそ狙い目。敵は己が組み敷いた者の首を搔くことに夢中になり、周囲が視えておらぬゆえ、簡単に槍を付けられる。その敵を倒せば味方も救える。一石二鳥というわけです。広く戦場を視て、己が何を為すべきかを常に考えて動くよう心掛けておれば、そのうち考えずともすらすら動けるようになります」

重蔵を敬する男たちは熱心にその話を聞き、稽古に熱を入れた。そうになると自然とやり甲斐も感じるし、愉しくもなる。

なるほど、こうして暮らすのも悪くない。

何やら日々に充実感さえ覚えた。

それはそれで良かったのだが、しばらくすると重蔵が予想もしなかった反響も起き始めた。

孫次郎の屋敷から連日のように聞こえる凄まじい気合の声や戦いの喧騒は、狭い城下でたちまち評判になった。屋敷は練堀で囲まれているから覗くことはできないはずだが、孫次郎自身がどうやら自慢気に吹聴しているようで、家中の武士が見学にやって来たり、重蔵に教えを乞いに来るような者も出始め、半月後にはその噂が熊谷氏の殿さまの耳にまで入るほどになったのである。

ところで、高松山城下には、重蔵がやって来る以前から神崎弾正と名乗る兵法者が住み着いていた。厳島神社の神人あがりと噂のある三十男で、熊谷家中の知る辺を頼ってその屋敷に寄寓し、家中の下士に剣術を教授して暮らしていたらしい。

その神崎弾正、真偽のほどは判らないが、常陸国（茨城県）鹿島神宮で鹿島神道流を、下総国（千葉県）香取神宮で天真正伝神道流をそれぞれ学び、安芸に帰って厳島神社に参籠し、厳島大明神の神託を受けて兵法の極意を悟った、なぞと喧伝しているのだと言う。兵法者の常だが、己の剣術で身を立て、あわよくば熊谷家へ仕官をとても目論んでいるのであろう。

そういう男が城下に居るといふ事を、迂闊にも重蔵は知らなかった。孫次郎に頼まれるまま、勝手に武芸指導を始めてしまったわけだが、このあたりが重蔵の世渡り下手と言わねばならない。

兵法者として生きるなら、兵法者の通すべき筋というものがある。こういう場合は土地の先達に挨拶をして話を通すのが当然の礼儀だし、場合によっては立ち合って先達との腕の上下関係をはっきりとさせ、相手の顔を立てるなり叩きのめして黙らせるなりしておかなければ、後から必ず話がこじれるのだ。

そもそも重蔵は熊谷家に仕官の望みはなく、高松山城下に長居をするつもりもないのだから、自ら出向いてその事を神崎弾正に説明

しておけば、おそらく波風は立たなかった。神崎にしても、重蔵に負ければすべてを失い、勝つてもほとんど得るものがないわけで、そんな勝負を望むはずがない。重蔵が己の商売敵しょうばいがたきにならないという事が納得できさえすれば、それで話は済んだであろう。

しかし重蔵は、悪意はなかったにせよ、通すべき筋を通さなかった。

そうになると、話はまったく別になる。

神崎弾正にしてみれば、後からやって来た重蔵が、「熊谷氏の重臣」である孫次郎の庇護を受け、先達の自分を無視して勝手に門人を取り、兵法を教授し、それが城下で評判になっていくというのは、己の存在と生存を脅かされたに等しい。これは死活問題であり、重蔵の行為を「自分に対する挑戦」と受け取るのはむしろ当然で、この「売られた喧嘩」を買わねば、「神崎弾正は臆した」と世間に取られてしまう。兵法の看板で飯を喰っている以上、己の面子めんづが立たないのである。

怒った神崎弾正は、門人を孫次郎の屋敷に走らせ、

「正々堂々と立ち合い、どちらの腕が上かはつきりさせようではないか」

といった内容の挑戦状を送りつけてきた。

重蔵はその書状を受け取り、そこで初めて神崎弾正という兵法者の名を知り、同時に己の迂闊さに気付いた。しかし、城下の評判と なってしまった後では取り繕いようがない。勝負の申し出は丁重に断ったのだが、重蔵はそのまま武芸の指導を続けているのだから神崎の側が治まるはずもなかった。

「羽田重蔵なる者は、兵法者を騙かたっておるようだがよほど腕に自信がないと見える。わしが何度も試合を申し込んでおるに、言を左右して決して受けようとせぬ。あれはただの騙り者、恥を知らぬ臆病

者よ」

神崎弾正は重蔵を臆病、卑怯と罵り、負けるのが怖くて逃げ回っているのだと門人たちに吹聴させ、悪声を放つことによって己の矜持と世間の信用を保っている。

重蔵はこの城下に長居をするつもりがないから、罵声で済むなら安いものだとかれまで放っておいたのだが、それがかえって悪かった。

その事が、思いもよらぬ大事に発展したのである。

一日、重蔵は孫次郎に屋敷の離れに呼び出された。

「殿にお話してみたら、おぬしの剣の腕前を是非見てみたいと仰せられてな。家中の腕自慢と仕合わせれば面白かるうなどと、大乗り気であつたよ」

孫次郎は嬉しくてたまらぬといった風情でそう言った。

どうやら雲の上の方でも重蔵の事が話題になっているらしい。熊谷氏の殿さまである民部少輔 元直までが興味を示しているというのだから、只事ではない。

「弱りましたな。わしは熊谷の殿さまに買いかぶられたようじゃ

」

重蔵は眉をしかめた。

重蔵には仕官の望みはなどはないのである。熊谷元直に謁を賜り、その御前で兵法を披露するというのはいかにも気が重い。

「その妙技を見れば、殿は勿論、家中の頭の古い連中も考えを変えらるであらうよ」

孫次郎は、重蔵の剣名をあげる手助けをしているつもりなのだろう。熊谷家中における兵法の地位を向上させたいというような思惑も勿論あるのだろうが、半ば以上は重蔵への親切心であるに違いない。

確かに、熊谷元直と言えば安芸の有力豪族の一人であり、素浪人の重蔵如きがその面識を得ることは願ったところで普通は叶えられないものではなく、これは千載一遇の好機と言わねばならない。孫次郎は重蔵の幸運を無邪気に喜んでくれているのだ。

しかし、重蔵にしてみれば、

困ったな……。

というのが正直なところである。

重蔵は剣の道に迷い、師とするに足る人物を探して流離りゅうりっているだけの男であり、己が未だ道半ばの半端者である事を誰よりも知っている。名をあげようなどと望む事自体がそもそも烏滸おしがましく、孫次郎の好意は有り難いとも思うのだが、それを素直に喜ぶような気にはとてもなれない。

重蔵の訝えぬ表情から自分との温度差を察したのであろう、孫次郎は大慌てで言い訳めいた言葉を吐いた。

「いや、この話は、別にわしが企き図したものではないのだ。例の神崎弾正とかいう兵法者が、是非とも試合の場を設けて欲しいと申し出ておるそうだな。それに殿が乗り気になったものらしい」

「ああ」

そういう事か……。

事の真相を察し、重蔵は尚更なほさらうんざりした。

神崎弾正は、勝負を受けようとならない重蔵の態度を「逃げ」と解釈し、重蔵の腕を見くびり、いつそ衆目の中で重蔵を打ち負かす事によって名をあげ、仕官の契機きっかけにしようと思立ったのに違いない。

どうせやるなら熊谷氏の殿さまを担ぎ出し、御前試合という派手な舞台を作つてやろうと、家中の知人や門人を通じて運動したのである。

ならば、此度の事はわしの身から出た鎧でもある。

ため息をつくような気分です。

話がここまで大きくなつてしまえば、もはや逃げられない。危難を事前に避けるのが兵法の極意であるとすれば、重蔵はまったく未熟者と言わねばならぬであろう。

面倒なことになつた……。

熊谷家の武士が相手なら、まだやりようはある。戦場覚えの介者かいしゃ 剣術けんじゆつ > *注1<しか知らぬような者が相手なら、どんな怪力の豪傑が出て来ようが「剣術の勝負」でなら重蔵は負けない自信があるし、勝負を綺麗に引き分けることも不可能ではない。先に一本取つた上で、相手にわざと次の一本取らせてやり、そこで勝負を終えるような手だつてあるだろう。要は相手の面子を潰さないように配慮すれば良いのだ。

しかし問題は、神崎弾正である。

「その神崎弾正、どのような男かご存じですか？」

重蔵が尋ねると、孫次郎はわずかに首を傾げた。

「懇意こんいにしておる蔵島の神人しんじんなどから聞いた限りでは、決して評判の善い男ではない。若い頃は野心家わねぼこで我誇りの気性が激しく、粗野な上に酒乱であつたと言つ」

「ほう……」

野心家であるという事は、向上心が強いという事でもある。

我誇りというのも、「名」を売らねば身を立てられない兵法者に

は当然の特質である。

粗野というのは、あるいは出自の卑しさを表しているのではないか。つまり、礼儀作法を知らずに育ったという事なら、歴とした武家の出ではないのかもしれない。神崎が武家に生まれず、それでも武士を目指して兵法を志したのだとすれば、よほど努力をして研鑽を積んだという事にならないか。

酒乱というのは体質であるからその事自体をどうすることもできないが、神崎が高松山城下に住み着いてから酒の上での狼藉ろうせきがあれば、孫次郎は当然それを聞き知っているはずで、そういう噂がないという事は、酒を止めたか、深酒をせぬ自制が働いている証拠と言えるだろう。それは意志の強さに繋がるのではないか。

「家中に幾人かは門人がおるのだが、門人からは敬されておるように見える。それらの者が言うには、腕は立つらしい。わしはその技前を見たことがないゆえ、確かなところは判らんが 片手打ちに妙を得ておると聞いたな。そうそう、二年ほど前、城下に参った何やら言う旅の兵法者を、試合をして討ち果たしたという噂があった。・・・」

やはり、相当の実力を持っていると見ねばならぬであろう。吹聴している前歴も嘘ではないかもしれない。

もし神崎弾正が自分と互角かそれに近い技量を持っているとすれば

おそらくわしは勝てぬだろう。

と重蔵は思った。

同等の技量の者が戦えば勝敗は時の運であり、その試合に賭ける両者の気迫の違いが差になって表れるものである。

神崎にすれば御前試合は仕官のための千載一遇の好機であり、それこそ全身全霊で勝ちに来るに違いないが、重蔵の方はこの試合自体に乗り気でなく、できれば逃げ出したいくらいの気分である。自

分の未熟さのせいで神崎を追い詰め、無用の騒ぎを起こしてしまつたという負い目さえ感じている。こんな気持ちで勝負に臨んで勝てるわけがない。

「試合は五日後、お城の馬場に会場を設えるという事であつたが重蔵殿、どうなさる?」

「どうなさるとは……。辞退しても良いものですか?」

「いや、それは困るのだが」

孫次郎は珍妙な顔で苦笑した。

「しかし、どうにも気が進まぬという顔をしておるではないか。嫌がる者を無理に引つ張つてゆくわけにもいかんさ。重蔵殿は熊谷家の家士でもわしの家来でもないゆえ、命じることでもきんしなに、いざとなれば、殿には代わりになしに勝負をすとも言うておくわい」

孫次郎殿らしい。

その言葉を聞いて、重蔵はわずかに笑つた。

そして、肚をくくつた。

試合とは、「仕合い」とも「死合い」とも書く。兵法者同士が試合をするということは、すなわち死を賭すということであり、殺されても文句は言えぬということである。たとえ命が助かつたにしても、怪我から不具にでもなれば兵法者としてはやはり死ぬわけで、負ければ先はないというほどの覚悟がなければ勝負には臨めない。

勝つまでだ。

重蔵は己が兵法者として半端だと自覚しているが、それでも漢としての矜持はある。避けられぬ勝負なら受けるし、勝負する以上は

負けてやるつもりはない。

「わしの名が熊谷のお殿さまにまで聞こえておるのなら、逃げるわけにも参りますまい。まして孫次郎殿には世話になっておる恩があります。その顔を潰すような真似はできませんよ」

重蔵が言くと、孫次郎は救われたというように破顔した。

「おお、受けてくれるか」

「ただ、神崎弾正に勝てるかどうかは やってみねば判りません
」よ

神崎弾正に恨みはなく、あるのはむしろ負い目だが、それでも、降りかかる火の粉は払うまでだ。

重蔵は敢えてそう思い直した。

神崎にとっては重蔵の存在こそが「降りかかる火の粉」であったろう。

それも解っている。

しかし、そこは兵法者という道を選んでしまった者の宿業と割り切るしかない。殺さねば殺される世界で重蔵は今日まで生き抜いて来たのだ。弱き者は淘汰され、強き者だけが生き残る。それがこの乱世の理ことわりというものであろう。

試合は、その五日後 永正十四年（1517）九月二十三日に行われた。

その日の天は、いまにも降り出しそうな重い雲が一面に垂れ込めていた。

第二章 西の桶狭間 籠手斬り重蔵(二) (後書き)

<*注1>

「介者剣術」とは、鎧兜を着用した状態で戦うことを想定した剣術。

鎧兜を着た武者は、兜があるために剣を両手で振りかぶることができないし、鎧の重さで軽快な動きも制限される。鎧で守られている部位には剣は通じないから、そこを狙う意味はないし防ぐ必要もない。自然、武者たちは、目、首、脇の下、内腿、膝裏、手といった鎧で守られてない部位を狙うしかなく、攻撃は刺突が中心になった。また、防御は敵の攻撃を鎧兜に当てて受けるということが行われた。転倒させられぬよう、足を前後に大きく開いて低く構えるのが一般的で、「素肌剣術」の系譜を引く現代の剣道とはまったく別のものである。

第二章 西の桶狭間 籠手斬り重蔵(三)

「それまで！」

検分役の男が鉄扇を上げ、勝った西軍の武士の名を高々と告げた。会場の周囲を埋めた数百人の武士たちからどつと喚声上がる。

いやいや、やるものだ。

東軍の控えに座し、幔幕の隙間からここまで三試合の様子を眺めていた重蔵は、声に出さずに何度も唸っていた。

御前試合に出て来るほどだから、いずれも戦場の勇者として知られた猛者たちなのであろう。木太刀を使う者も稽古槍を使う者も、凄まじい気合と共に力任せに得物を打ち合い、ぶつけ合い、押し合っている。どれもこれも戦場覚えの我流兵法のようで、要するに膂力と体力にものを言わせた叩き合いに過ぎないが、その太刀行きの速さ、槍先の鋭さ、気合の迫力には眼を見張るものがある。

さすが、熊谷直実なほざね以来の武門の名家よ。

熊谷 次郎 直実は源平時代の武士で、坂東屈指ばんとうの荒武者として知られ、「一の谷の合戦」では義経に従って敵陣に一番乗りを果たし、平敦盛たいけんもりを討ったことで歴史に名高い。およそ武門に生まれた男ならその名を知らぬ者はないというほどの有名人である。安芸・熊谷氏はその直系の子孫で、熊谷家の武士団は吉川家と並んで安芸国屈指の強兵なのだと聞いた。

御前試合に臨んだ武士たちは、まさにその家名に恥じめ武勇の持ち主ばかりであった。

試合は、家中から剛勇の八名が選ばれ、兵法者である神崎弾正と重蔵を含め、計十名によって行われていた。十名を東西の二軍に分け、五番勝負をするというわけである。神崎弾正は四番目、重蔵は大トリの五番目に試合が組まれており、それぞれ相手は熊谷家の武士が務める。勝ち抜き戦ではなく、一人一番の勝負である。

神崎とはやらずに済んだか。

昨夜、その事を知らされた重蔵は、胸を撫で下ろした。

実はこの五日間、重蔵は可能な限り神崎弾正について情報を集めている。神崎その人を見ることはなかったが、その素行や日常生活について、孫次郎の家来などを通じて聞き込みをしてもらっていた。それで判ったのは、神崎にどうも妻子があるらしいという事である。神崎は高松山城下にすでに数年も暮らしており、さる下土の後家と良い仲になり、子まで作ったのだと言う。

この地に骨を埋める気であるのか。

神崎が本気で武士になる事を目指し、仕官を願って努力しているらしいと知ってから、重蔵は試合に対してまったく闘志が失せてしまった。

わしが勝っても誰も得をせぬ……。

重蔵は熊谷家に仕官の望みはなく、来春には城下を立ち去るつもりでいるわけで、いわば熊谷家にとって何の益にもならない人間である。重蔵が勝てば神崎は城下に居られなくなるだろうし、神崎という兵法者を失う分だけ熊谷家にとってはむしろ損であろう。

一方、重蔵が負ければどうか。神崎はあるいは熊谷家に仕えることが叶うかもしれない。そうなれば熊谷家のために懸命に励むに違いないく、それは神崎の妻子のためにもなるであろう。

重蔵はこの事ですっかり気鬱になっていたので、試合の取り組みを知って拍子抜けし、同時に大いに安堵したわけである。

胸のつかえが取れたわ。

現金なもので、気鬱が去った重蔵は俄然やる気になった。今日は朝から上機嫌で、用意の襷たすきと鉢巻で装束を調べ、幔幕で仕切られた控えから試合を観戦し、それを大いに愉しんでいた。

会場は、高松山山頂の本丸から南側に少し下がった馬場である。熊谷家の家士が数百人も見物に詰め掛けていて、仕切り縄の周囲はびっしりと人で埋まり、その後方には立ち見の衆が幾重にも列を作っている。

馬場の北面には大きな厩うしやと棟むね続きになった狭い殿舎があり、その広縁に熊谷氏の一門、重臣がずらりと座っていた。孫次郎の厳いつい顔も見える。

中央に座す四十男が熊谷氏の殿さま 民部少輔みんぶのしょうぶ 元直であろう。どつしりとした堂々たる体躯で、言つては悪いが孫次郎に輪を掛けた醜男である。その隣に、紅葉色の小袖を纏たつた嫺たおやかな女性と十歳前後の少年の姿が見える。城主夫人と嫡子であろうか。子はともかく、女の身で兵法試合を見物するというのも変わり者ではある。

「ここまで東軍の一勝二敗か。残り二戦、負けるわけには参らんながら大声で言つた。重蔵の隣で床几に座した力士のような巨漢が、鉢巻を締め直しながら大声で言つた。

別に東西で勝敗を争っているわけではないが、同じ控えに配された者同士にある種の連帯感が生まれるのは人情であろう。

「わしは勝つ。芸者殿も是非とも勝つてくだされよ」

不敵な笑いを浮かべる巨漢は、家中一の怪力の持ち主であると言う。

重蔵は微笑を返した。

「これからお手前が戦う兵法者 手練てだれと聞いています。ご油断なきよう」

「おう、念には及ばぬわ」

再び合図の太鼓が鳴り、四番目の勝負に臨む武士の名が呼び上げられた。

巨漢は気合で応え、勢いよく立ち上がるや四尺近い長大な木太刀

を掴み、鼻息荒く幔幕を出て行つた。

いよいよか。

西の控えから、枯葉色の小袖に襷を掛け、鉢巻を締めた瘦身の武士が現れた。

神崎弾正である。

眼光が鋭く、眉間の皺が深い。頬骨が高く、顎は鋭角に尖っている。歩く姿の歩の運びよう、腰のさま、眼の配りなど、さすがに尋常ではない。いかにも兵法者らしい雰囲気を漂わせていた。

長大な木太刀をぶんぶんと素振りした巨漢は、その太刀を肩に担ぐように構え、やや半身になって足を前後に大きく開き、腰を深く沈めた。

神崎は定寸の木太刀を下段に取り、自然に佇立ちよりつしている。

「始めっ！」

検分役の武士が叫び、勝負が始まった。

巨漢は凄まじい気合の声を上げ、長大な木太刀を二度、三度と振り回したが、神崎は敏捷にそれを避け、かするどころか受けもしない。

これは勝負にならんな……。

あの巨漢がどれほどの大力でも、いちいち動作が大きいから、動きを読むのも太刀をかわすのも手練てだれであればそう難しくはないのである。相撲や組み討ちでの勝負というならともかく、剣術の勝負でなら神崎の敵ではないだろう。

その予想通り、試合は実に呆気なく終わった。

巨漢の長大な木太刀は唸りを上げながら何度も空を切り、地を叩く。神崎はそうして男をあしらいつつ見せ場を作ると、男が上段から振り下ろした木太刀をかわし様、かぶせるようにその柄つか近くを強烈に打ち下ろした。

合撃がっしゅう……！！

よほどの腕がなければ出来ない高等技術である。
巨漢はたまらず木太刀を取り落とした。

「それまで！」

検分役の男が叫び、群衆からはため息のような唸り声が上がった。

「く、組み討ちを所望じゃ！」

巨漢が叫んだが、検分役はそれには応じず、両者を分けて控えへ下がるよう厳しく命じた。

神崎は殿舎に向けて礼をし、重蔵の方をちらりと見て西の控えに下がって行った。

巨漢は無念そうに肩を落として引き上げて来た。
ほどなく次の太鼓が鳴った。

「東軍、羽田重蔵！」

呼び上げの声に応えた重蔵は木太刀を握り、東軍控えの男たちの激励を受けつつ幔幕を出た。

「西軍、みずおちんのじょう水落源允！」

西の幔幕から、四十代と思しきがつしりした体格の武士が現れた。
水落直綱 当主・熊谷元直の叔父であり、熊谷家の侍大将を務める男で、家中屈指の武勇の持ち主であると言う。小具足姿に鉢巻を締め、得物は一間半（2・7m）ほどの短い稽古槍を握っている。武士にとって主なる武器とは太刀よりむしろ槍である。そうでもなくとも槍と太刀では間合いが大きく違い、太刀の側が圧倒的に不利なのだが、この水落は我流ながら槍仕やりしとして一流で、これまで数々

の戦場で数え切れぬ武功を挙げた、と孫次郎から聞いた。そういう履歴は別にしても、男が醸す雰囲気は紛れもなく手練てだれのものである。出来る。

重蔵は気を引き締めた。

両者、馬場の中央に進み出、まず殿舎に向けて一礼し、続いて検分役に頭を下げ、さらにお互いに目礼した。

重蔵は抜刀から木太刀を正眼に、水落は半身になって稽古槍を切っ先下がりの中段に構え、四間（7・3m）ほどの距離で対峙する。

「始めっ！」

検分役の男が叫んだ。

腰を低く取った姿勢で、水落がじりじりと距離を詰めて来た。

太刀と槍では間合いがまったく違うから、重蔵から飛び込んで攻めるのは難しい。水落に先に槍を出させ、それをかわしつつ太刀の間合いに付け入る事ができなければ、重蔵に勝機はないであろう。

会場は水を打ったように静まり返っている。群衆が息をするのも忘れるようにして見守る中、ついに両者の間合いが詰まった。ただし、あくまで槍の間合いである。あと一步踏み出せば水落の槍は十分に届くであろうが、とても太刀が届くような距離ではない。

重蔵は正眼から右足を大きく引き、八双気味に構えを換えた。

誘いである。

「はあっ！」

がら空きになった身体を目掛け、気合と共に水落が槍を繰り込む。重蔵は左に回ってそれをかわすが、水落の槍の引き戻しも速い。二の槍、三の槍が立て続けに飛んで来、それを払うのが精一杯で、踏み込むどころではない。

鋭い！

重蔵はたまらず大きく跳び退いたが、水落も飛鳥のように踏み込み、追い討ちの槍を突き込んできた。

重蔵の態勢が悪い。

「くっ！」

木と木がぶつかる音が鳴った。

重蔵はほとんど無意識に身体を左に捻り、切っ先の下がった太刀をすくい上げ、槍の先端から一尺ばかりのところ柄えを打ち上げたのである。槍筋が上方にいなされ、槍先は重蔵の小袖の襟元をわずかにかすめた。

いなされた分、水落の槍の引きが鈍った。付け入りたところだったが、重蔵は上体が反り、体重が後ろに掛かっていたために、動き出しが一瞬遅れた。已む無くそのまま横っ飛びに飛び退き、素早く態勢を整え、再び正眼に構えた。

「なるほど……。孫次郎が褒めるだけのことはある」

構え直した水落が愉しそうに口元で笑った。

「真剣であれば、今ので槍の穂を斬り落とされたかな」

重蔵も釣られて笑った。

「いや、斬れなかったでしょう。さすが熊谷随一の槍と、感服しております」

世辞ではない。これほど鋭い槍は戦場でも滅多にお眼に掛かれぬであろう。重蔵は全身に冷や汗をかいていた。

「せつかくの機会だ。木太刀であつたと諦めて、もうしばらくお付き合ひ願えるか」

「随意に」

一拍置いて、気合と共に水落が突いて出た。

重蔵は正眼の太刀をわずかにずらして突きをいなし、水落の引き槍に合わせて踏み込もうとしたが、やはり引きが速い。慌てて左に飛び、辛うじて二の槍をかわした。

無理に飛び込めば次の槍をかわせぬ。

と、考える間もなく槍先が足元に来た。

慌てて飛びかわすと、態勢の崩れに付け入って、胸元、胴と次々に槍が飛んで来る。

いなし、払い、かわし　と、息つく暇もない。

一方的に攻められながら、

やはりこちらからは打ち込めんな。

と悟つた重蔵は、なんとか飛び退いて再び間合いを取り、八双に構えを換え、柄を肩のあたりにまで上げた。

家伝の技に、ただひとつだけ槍を相手にした型がある。

これほどの槍を相手に、果たして上手くゆくか……。

水落が渾身の気合と共に槍を突き出した。

その瞬間である。重蔵は胸元に迫る槍をわずかに左にかわして右脇の下へと流し、同時に太刀を振り下ろして槍の柄を打ち、それを押さえ、そのまま滑るよう一気に間合いを詰めた。

「！」

手元に飛び込まれると槍は弱い。反射的に間合いを取ろうとして、槍を握つたまま飛び下がっていれば、水落は成す術なく籠手を打たれていたであろう。

しかし、そこはこの男も戦場で鍛えた実戦の達者である。飛び退きながら槍から手を離し、帯びていた脇差を抜いて重蔵の木太刀を受け、同時に重蔵を蹴り離すために足を飛ばした。

間一髪、飛び退いてその蹴りをかわした重蔵の口から、

「お見事」

思わず感嘆の声が漏れた。

水落は苦笑し、脇差をゆっくりと鞘に収めた。

「この試合、槍を失った時点でわしの負けだな。おぬしの太刀とわしの脇差では勝負になるまい」

「いや、引き分け、勝敗なし　というところで如何でしょうか」

両者の戦いを呆然と見ていた検分役が、我に返ったように、

「それまで！」

大声で宣した。

同時に　同じく我に返ったのであろう　周囲の群衆からやんやの喝采が上がった。

重蔵は水落に一礼し、広縁の方に向きを変えて膝を付き、礼をした。

「見事な勝負であつた」

顔を上げると、熊谷の殿さま　民部少輔みんぶのしょうぶ　元直が興奮冷めやらぬといった顔で笑っていた。

「羽田とやら、義経流の技の冴え、確かに見せて貰うた。また源允も、家中随一の名に違たがわぬ凄まじい槍であった。決して恥じるには及ばぬぞ。試合は引き分けである。勝敗はこのわしが預かった」

その言葉を聞いて、

熊谷の武士には、勝負に遺恨を残さぬ爽やかさがある。

重蔵はあらためて実感した。それが熊谷直実以来の家風なのかどうかは判らないが、この家には気持ちの好い男が多いらしい。孫次郎の気性も、こういう家風の中で育はぐまれたのかもしれない。

「畏れながら　！」

突如、会場に野太い声が響いた。

重蔵も、水落も、広縁に座る面々も周囲の群集も一斉に声の主に視線を向けた。

西の控えの幔幕から神崎弾正が歩み出て、広縁に向けて片膝をついた。

「ご両所の技量には感服つかまつりました。同じく兵法を志したる者として、この機会に是非とも羽田殿に一手ご教授願いたく　民部少輔さまには、この事、伏してお願いつかまつります」

重蔵と勝負させてくれ、と、神崎は衆前で願いだした。

「冗談ではない。

重蔵は思ったが、

「面白し　」

熊谷元直は大いに乗り気になった。

熊谷家の武士同士の試合なら怪我や遺恨を気遣うようなこともあ

つたろうが、兵法者同士の試合といふのであれば熊谷家にとって損はなく、純粹に勝負の模様を愉しめる。神崎と重蔵の技量を見た後だけに、どちらが強いのか、どつう勝負になるのか、といった興味もある。見てみたいと思つたのも無理はない。

神崎は馬場の中央付近まで無造作に進み、水落に目礼し、重蔵と向き合つた。

「お初にお眼に掛かる。神崎弾正と申す」

その口元に薄い笑いがある。

「羽田殿にはこちらから何度も立ち合いをお願いしたはずだが、一向に色好きお返事が頂けぬゆえ、このような仕儀となつた。よもやお逃げにはなるまいな？」

「逃げは致さぬ……」

重蔵の表情は苦い。

この衆目の中で逃げることなぞ男としてできるものではない。

「それは重畳。されば」

神崎は検分役に視線を送り、

「いざ、尋常に」

右手に下げていた木太刀を左手で抜き、正眼に構えた。

な！？

重蔵は表情を動かすことこそしなかつたが、内心で激しく動揺した。

左太刀だと・・・？

正直、虚を突かれた。

両刀は左腰に差すのが常識であり、つまり太刀を抜くのは右手になるのが必然である。これまで数え切れないほどの武士を見て来たが、右腰に刀を差した男は戦場でさえ見たことがない。たとえ箸を左手で使う者であつても、それが武士なら太刀を抜くのは右手であり、柄の握りは右拳が左拳の上に来るのが当たり前なのである。この神崎も、先ほどの試合では普通に右太刀を用いていた。

しかし、考えてみれば、それはただの常識であるに過ぎない。その常識に縛られねばならないという決まりはなく、決まりがあつたとしてもそれを破ることが罪になるわけでもない。そもそも兵法者にとつて人目を驚かすのは名を売るための常套手段であり、左手で太刀を抜いたとして誰に非難される謂われもないのである。

まさか、というのが兵法の要諦よつていだな・・・。

敵の心理の裏を突き、来ないと思つたところを攻めるのが駆け引きの勘所であろう。重蔵を驚かせた時点で神崎の勝ちと言わねばならない。

左太刀は、神崎が学んだという「香取の太刀」、「鹿島の太刀」

>*注1<にはその型があるのかもしれないし、あるいは神崎独自の工夫なのかもしれないが、いずれにしても重蔵が父から叩き込まれた型にはなく、重蔵の常識にもない。重蔵はこれまで稽古も実戦も右太刀の者ばかりを相手にしていたわけで、実際に左太刀と対峙すれば、初めて体感する間合いや太刀筋や足運びの違いに戸惑うに違いない。逆に神崎は右太刀との戦いには慣れ切っているはずである。

そんな事さえ知らずにこの男と立ち合うつもりでいたのか。

己の浅慮に唾を吐き掛けたような気分になった。

敵を知り己を知れば百戦危うからず、と言つてはないか。敵を知ることもなく勝負の場に身を投じるのは無謀無策以外の何物でもない。勝つ勝つと念じるだけで勝てるなら、修行も稽古も必要ないの

だ。

「どうなされた。始めても宜しいのか？」

神崎は口元で笑っている。

重蔵も太刀を構えざるを得ない。

ざわついていた群衆が、再び静まり返った。

「始めっ！」

検分役が叫ぶと同時に、神崎は左足から飛ぶように踏み込み、左太刀を無造作に逆袈裟さかげさに一閃させた。

不覚にも、重蔵は面食らっていた。左太刀だと頭では解っていて、身体に染み付いた動きが勝手の違いに対応できていない。混乱が重蔵の初動を一瞬遅らせ、神崎の太刀を受けるのが精一杯であった。鏝つばせ迫り合いを嫌ったのか神崎が太刀を引いたので、重蔵も飛び下がって間合いを取り、再び正眼に構えたのだが、無用の迷いや気後れもあつて心中の動揺は増すばかりである。

重蔵が集中できていないという事実は、本人よりもむしろ対峙している神崎によく視えている。

敵が氣を立て直す前に勝負をつける。

神崎にすれば、それが必勝の戦法であつたらう。

先せん、先、と神崎が鋭く打ち込んだ。

重蔵は左に回りながら引き足でかわすが、逃げ回っているようにしか見えない。

怖れるな。

意を決し、上段から落ちて来た太刀を合撃がっしゅうち気味に切り返し、そのまま踏み込みつつ左斬り上げ、さらに続けて袈裟斬りに返す。

が、神崎の受け太刀が巧い。最後の袈裟斬りを頭上で受けて己の背中側へと受け流し、体を左に回しながら太刀は円のような軌道を

描き、重蔵の足を薙いだ。

重蔵は飛び下がってかわす。神崎はそのまま踏み込み、太刀は止まらず円の軌道を描きながら今度は頭上へ斬り掛かって来る。

重蔵はその流麗な太刀筋に戦慄した。かわすことも流すこともできず、反射的に太刀で受け止めるのが精一杯である。

「くっ！」

足を飛ばす。

神崎は飛び退き、再び三間（5・4m）の距離で対峙となった。

神崎の口元には余裕の笑みがある。

これは本物だ。

そう実感すると、奇妙なことだが、

これほどの相手なら、負けても良い。

とも重蔵は思った。

神崎が顕示欲のみの騙りの兵法者であるというなら兎も角、これほどの腕を持っていれば、これを召抱えても熊谷家の損とはならぬであろう。武芸が武士の本分だとすれば、並みの武士など足元にも及ばぬほどの技術を身に付けた神崎には、武士になるに十分な資格がある。

ならばわしは負ける方が良いのだ。

太刀を捨て、「参りました」と一言叫べば、おそらく神崎も太刀を引くに違いなく、お互いに怪我せず勝負を終えることができるであろう。名をあげるなぞ烏滸がましいとする重蔵は、己の名に惜しむほどの価値を感じていない。

よし、負けるに決めた。

そう肚を決めると、重蔵は何とも不思議な心境になった。

重蔵はこれまで、稽古を含めれば数え切れないほどの兵法者や武士と相対して来た。立ち合いの場では常に、どのように相手に勝つか、どのように相手を打つか、という事しか頭になかった。相手が

こう打ってくればこう返そう、こう変化をつけて相手のここを打とう。身に付けた技でどのように相手に勝つかをのみ考えていたのである。真剣勝負の場で、負けてやるつもりで立ち合ったことはこれまで一度もない。

しかし、いざ負けると決めてしまうと、心の裡なかでそれまで猛っていた闘志とか負けん気とかいったものが静まり、不思議なほど心が澄明せいめいとして、それにつれて神崎の姿がより鮮明に視えるようになった。

これは……？

初めての体験に、重蔵はわずかに戸惑った。

一方、神崎弾正は別の意味で困惑していた。

目の前にいる重蔵の剣気が、急に消えてしまったからである。手練てだね同士の立ち合いというのは剣気の押し合いであり、対峙した兵法者は両者の間の空間に漂う濃密な気配で相手の力量技量を推し量り、目の配り、足の運び、肩や腕のわずかな動き、太刀先の揺れなどで相手を牽制し、あるいは惑わし、騙したりすかしたりして先を取り合うもののだが、しかし、いかに神崎が気合を掛け、剣気、殺気を叩きつけても、牽制しても誘っても、重蔵からは気配が何も返って来ない。暖簾のれんに腕押し、糠ぬかに釘くぎ。と言うが、圧力を掛けようにも跳ね返りがなければ実体のない影法師を相手にしているようなもので、なんともならない。

なんだこの男は……？

神崎も長く兵法者を相手に暮らしてきたが、負けるつもりでいる相手と勝負した経験なぞあるはずもない。御前試合という華々しい舞台でそんな馬鹿げたことをする者が居るとは思いもしないから、重蔵の異様な静けさに不気味さを感じ、対処に迷った。

実は神崎は、これと似た感覚を体感したことがある。

関東に流浪し、名高い鹿島の地で師に出会った時の事である。

神崎が師事した吉川よしかわ左京あきかた覚賢は鹿島神領家の四宿老の一人で、後に剣聖と讃えられた塚原つかはら卜伝ぼくでんの実父として名高い。「鹿島の太刀」

を修めた兵法者として卓越するだけでなく、優れた人格者で、およそ剣気や殺気を表に出す人ではなかったが、剣を握るとおそろしく強かった。神崎は師と立ち合ったびにこの静かな感じを味わい、吸い込まれるような感覚に慄き、達人とはこのようなものかと思ひ知らされたのである。

兵法の大家には、長い修練の末に己の依怙心を去り、水のような悟達の境地に至る者があるという事を、神崎は鹿島の地で知った。鹿島を去って十年以上になるが、いま師と立ち合っても勝てるという自信はない。

この男、あるいはそれほどの達人か。

戦慄と共に、その事を思った。もし重蔵がそれほどの兵法者であれば、とても自分が敵う相手ではない。

衆目の前で勝負なぞするのではなかった。

神崎は、この勝負に負ければすべてを失う立場なのである。兵法者としての名声は地に落ち、熊谷家中で築いてきた人脈も、これまでの苦労もすべて水泡に帰し、高松山城下を去らねばならなくなるであろう。すでに家族も出来ている。今さら根無し草の浮浪人に戻るわけには断じていかない。

絶対に負けられない。負けたくない

そう思えば思うほど、神崎は精神的に追い詰められた。焦りが怖れを生み、怖れが疑心を生んで、その身体は呪縛されたように重くなる。いつしか神崎の表情から余裕の色がまったく消えていた。

両者、三間ほどの距離を置いて固着したように動かない。

じりじりと、ただ時間だけが過ぎる。

勝負を見守る群衆は、真剣勝負が持つ異様な雰囲気気圧され、寂として声もなかった。

神崎は、わずかな対峙の間に驚くほどの疲労感を覚えた。極度の緊張を強いられ、それに負けぬように気を張り続けていれば、気力は吸い取られるように疲弊する。気が揺らげば位負けに負けてしま

このままではいかん。

神崎は覚悟を定めた。

肚から気合を吐き出しつつ、一気に間合いを詰める。

左八双から籠手を狙って繰り出した初太刀は^{おとら}、瞬転、左に変わりつつ体を沈め、右片手で抜き胴を打つ。

が、焦りが神崎を力ませ、その余分な力が四肢の動きをわずかに鈍くした。技は普段のキレを失い、太刀先は疾^{はし}らない。

重蔵は神崎の太刀筋が鏡に映すように判った。わずかに動いてその籠手打ちを外し、右から胴を薙ぎに来る木太刀に己の木太刀をぶつけるようにして弾き落とす。木と木が打ち合って乾いた音が鳴った。

「
」

弾かれた太刀を捌きつつ神崎は右の脇構えに変化し、すくい上げるように斬り上げる。

重蔵は飛び退き、紙一重で太刀の間合いを外した。

神崎の動き出しからここまでがまさに一瞬。

再び三間ほどの距離を置いて両者が対峙する。

いと容易^{たやす}く凌ぎおった……。

立ち合いの最中、瞬間的に利き手を換え、構えも左右に換え、さらに片手打ちを使うことで相手に太刀の間合いを測らせず、見切りを狂わせるのが神崎の戦法であったが、そのすべてを重蔵は事も無げにかわした。この動揺は大きい。

一方の重蔵は、異様なほど心気が冴えている。向かい合う神崎の剣気、気迫の揺れ、焦り、怖れなどが、剣先から伝わって来るように判った。初めて体験する、なんとも不思議な心境だった。それが勝敗を捨てた境地であったという事に気付いたのは、試合が終わった後である。

神崎の尖った顎から、汗が滴り落ちた。

すっかり自信を失い、気が揺らいでいる。

重蔵はゆつくりと下段に構えを換え、左足を半歩前ににじり出した。それにびくりと反応し、神崎が一步下がる。

さらに重蔵が半歩詰めると、神崎はやはり半歩退いた。

ああ、ここまでだな。

これ以上神崎を追い詰めても何もならない。

重蔵はゆつくりと三歩下がって構えを解き、右手に下げた木刀を左手に収めた。

神崎が不審気に眉根を寄せた。

「熊谷孫次郎殿まで申し上げる！」

重蔵は大声をあげた。素浪人に過ぎない分際で、歴とした地頭である熊谷 民部少輔 みんぶのしょうふ 元直へ直言するのは礼に失するから、その傍にいる孫次郎へ話し掛けるという体裁で、実際は熊谷元直に語り掛けている。

「神崎弾正殿の比類なき剣の技量はよう解り申した。このまま立ち合いを続ければ、たとえ木太刀と言えども、兩人のいずれか、あるいは兩人共に、必ず手傷を負う事になりましょう。大きな合戦が近いと聞き及んでおります自今、浮浪の身のそれがしはともかく、神崎殿の如き有為の士が怪我をするような事になつては、ご当家にとつて損。一技一芸に優れたる者を抱えるは武將の心得、士は生かして使うが良將の道とやら申します。この勝負 これにて民部少輔さまにお預けいたしたく思いまするが、このこと如何に」

勝敗は、余人は知らずとも重蔵と神崎にだけは判っている。

この言葉を聞いた神崎の顔は、何とも複雑に歪んだ。自分を救う言辞を吐いた重蔵に対する驚きと、恥をかかずに済んだという安堵と、手も足も出ずに負けたという悔しさが、同時に噴出したのであ

ろう。名状し難い腹立たしさと情けなさがあるが、同時に、
これなら明日から路頭に迷わずとも済む。
という打算めいた気持ちがない事もない。

「なかなか好き見物であつた」

熊谷元直が広縁で立ち上がった。

重蔵と神崎は、それぞれその場で向き直り、片膝をついた。

「羽田とやらの申す事もつともである。この勝負はわしが預かる
う。兩人、何ぞ望みがあるか」

「お、畏れながら」

神崎が顔だけをあげて叫んだ。

「ご当家は熊谷直実なほみね以来の武家の名門。それがし、ご当家の家名を
慕い、当地に住まい付きましたる者でござりまする。民部少輔さま
のご家来の端にお加え頂けますならば、一死をもつてご奉公つかま
つる所存！」

静かに頷いた熊谷元直は、今度は重蔵に視線を向けた。

重蔵は大真面目な顔を作って言上した。

「それがし、孫次郎殿のお屋敷にてご厄介になっておりまする。願
わくば、孫次郎殿へ酒を一樽かしご下賜くだされたく」

それを聞いた元直は、口元に微笑を浮かべた。

なるほど出来たご仁のようだ。

重蔵は直感した。

孫次郎は殿さまである元直にずいぶん心酔しているようなのだが、孫次郎が男惚れするだけあって、この男は士を愛する徳を持っているのであろう。

「あい判った。望みの通りにするであらう。兩人共、大儀であつた」

重蔵は一礼し、一度だけ神崎に視線を送って東の控えへと下がって行つた。

第二章 西の桶狭間 籠手斬り重蔵(三)(後書き)

<*注1>

京に「京八流」と呼ばれる兵法があるのに対して、関東には「関東七流」と称される兵法がある。伝説を信ずるなら「関東七流」の成立は「京八流」より遙かに古く、遠く神代の昔にまで遡らねばならない。

神話の時代、名高い「国譲り」が行われた際、高天原たかまがはらから天降つて葦原中国あしはらのなかつくにを平定した経津主神ふつぬしのかみと建御雷神たけみかづちのかみという武神がある。この二柱の神は後に関東に居つき、下総国(千葉県)香取神宮が経津主神を、利根川を挟んでそのすぐ北隣にある常陸国(茨城県)鹿島神宮が建御雷神を、それぞれ奉じた。この二社の神職・七家に伝えられたという武神の兵法こそが「関東七流」の発祥であり、俗に「香取の太刀」、「鹿島の太刀」という名で呼ばれた。

「香取の太刀」から天真正伝神道流(香取神道流)が、「鹿島の太刀」から鹿島神道流(新当流)がそれぞれ生まれている。当時、兵法を志す者の間でこの二派は特に知名度が高かった。

第二章 西の桶狭間 有田中井手の合戦（一）

安芸の守護である武田元繁が、傘下の豪族に大動員を掛けたのは、重蔵が安芸に入ってから一月ほど後 御前試合のわずか五日後の事であった。この時期まで出陣を遅らせたのは、秋の刈り入れとその収税が終わるのを待っていたためであろう。

その報せが高松山に届いた夜、重蔵を離れに呼んだ孫次郎は、

「いよいよ合戦が始まるぞ」

手酌で酒を呷りながら興奮気味に言った。

向き合った二人の間には絵図が置かれ、それぞれの傍らには酒器がある。酒器に満たされているのは熊谷元直から褒美に賜った酒で、備前の名酒であるという。

「武田のお屋形は十月一日に出陣なさる。我らはこの城下で武田の軍勢を迎え、共に進むことになる」

武田氏の本拠・佐東銀山城（広島市安佐南区）から北東に向かつて伸びる可部街道（出雲街道）が、熊谷氏の高松山城の西麓に直結している。本拠で集結を終えた武田軍は、二日後にこの街道を北上して高松山城下に入る予定なのだそうだ。

可部街道はそのまま進めば北の高田郡へ通じ、毛利氏の本拠である吉田へと到るらしいのだが、街道沿いの山々には数珠球のように毛利氏の枝城が築かれていて、力づくで押し通ることは得策ではないらしい。

「此度は」

孫次郎は絵図を指差した。

「こちらの石見街道を進み、北西の山県郡やまがたこおりへと向かう」

その山県郡こそが、武田氏とこれに敵対する毛利・吉川両氏が奪い合いを演じている境界なのだという。

山県郡は安芸北部の西端にあり、そのほぼ北半分を吉川氏が抑えている。南部には山県氏、今田氏、壬生氏みぶといった武田氏傘下の国人領主があり、それぞれ山砦を構えて領地を守っているらしい。

「ここ 山県郡の真ん中にあるのが有田の城じゃ。この城は、かつてはお味方のものであったのだが、一昨年に吉川・毛利に奪われた。その頃、我らは武田のお屋形に従って安芸の南西部の敵城を攻めておったが、北の守りを破られたために、お屋形は腹背に敵を受ける形となったわけじゃ。お陰で近隣を平らげるのが半年は遅れた。いわば因縁の城じゃな。現在は吉川の小田刑部せうべとか申す男が守っておるらしい。お屋形は、まずはこの城を取り返すおつもりなのである。ここを取れば、吉川の大朝にも毛利の吉田にも道が通ずる」

吉川氏の小倉山城と毛利氏の郡山城の位置が、絵図には描き入れ
てある。

「なるほど……」

重蔵はもっともらしい顔で頷いた。

「おぬしが探しておる穴戸家俊は」

孫次郎は指で絵図を指した。

「甲立こうだち この辺りじゃ。吉田から北東へ一里半ほどかな。この五龍城が宍戸の居城よ」

毛利氏の本拠と宍戸氏の本拠はほとんど隣接しているように見える。

まあ、それはともかく と、孫次郎は話題を戻した。

「この有田城を睨むように、西に半里のこの山に今田氏が拠よる今田城がある。おそらくここに兵を集め、吉川・毛利の動きを眺めつつ有田城を攻めるということになる。吉川・毛利が有田城を救援に出て来てくれればシメたものよ。城攻めには日数が掛かるが、野戦でなら一息に叩き潰せる」

孫次郎は自信満々である。吉川・毛利の如き小物を相手に、安芸の守護である武田氏の大軍が負けるはずがないと信じているのである。

重蔵は諸豪族がそれぞれどれほどの動員力を持っているか、などという事をまったく知らないし、現地の地理地勢にも暗いから、合戦の推移を予想できるような立場ではないのだが、孫次郎の樂觀ぶりを見ることで、やや気楽な気分にはなっている。

「此度の合戦しぐさ、わしも孫次郎殿のご陣の端に加えてくださらんか」

と申し出たのも、別に命懸けで功名を得ようというような気概があつたわけではなく、

大きな合戦をこの目で見てみたい。

という物見遊山的な好奇心からに過ぎない。

「おお、そうしてくれればわしも心強い」

孫次郎は破顔して喜んだ。

「雑兵の腹巻でも貸して貰えれば有り難いが」

「何を水臭い。わしのために骨を折ってくれるというおぬしに足輕の真似なぞさせられようか。わしの換えの鎧があるので、それを使うてくれればよい」

「いやいや、人には分相応という事がある」

孫次郎と二人きりの時は、重蔵もややぎっかけない口調になる。

「わしに武者の装束などは似合わぬさ」

「何を申すか。そもそもおぬしは上北面の秦出羽守はたでわのかみの裔すえと申すではないか。世が世なら、無位無官のわしなどは同座いはかすることさえ憚はばらねばならぬほどの武門の名家ぞ」

「大昔の話よ」

重蔵は苦笑した。

「わしは足輕稼ぎで暮らして来た素浪人に過ぎぬゆえ、着慣れぬ大鎧なぞを着て合戦に出るのは落ち着かん。重うて動きにくいしな。できれば御免こうむりたい」

「困った御仁じゃ……」

孫次郎は腕を組んで嘆息した。

重蔵が吉岡兵法所で軍略を学んでいたことを孫次郎は知っている

し、その実戦経験の豊富さも買っている。客分の待遇で己の馬廻りに組み入れ、常に自分の傍近くに置き、色々な場面でその意見を聞いてみたいと思っていたのだが、雑兵姿の者を馬に乗せるわけにもいかない。

「まあ、そうまで言われるなら好きになさるとよい。いずれにしてもおぬしが共に働いてくれると知れば、わしの家来どもも勇み立とう」

武田軍は十月一日の昼過ぎに高松山城下に入った。二千数百の武田本軍に、香川氏、己斐氏、品川氏、飯田氏、山田氏など安芸南部の豪族が加わり、総勢五千に近い大軍である。清和源氏の名流・武田氏の家紋である割菱の旗が、歩武の音と共に颯々（さつさつ）と流れて行く。

あれが安芸のご守護殿か。

中軍に馬を立てた武田元繁は、五十年配の大柄な男で、黒々とした大髭を蓄え、赤地錦あかしにしきの直垂ひたたれに、紺、白、赤の三色の糸で威した見事な大鎧を纏い、阿古陀形あこたの兜には金の三鍬形みつくわがたの前立てが輝いている。まさに威風堂々、この大軍の総大将に相応しく、どっしりとした貫禄がある。

重蔵は、武田軍を馳迎ちげいした熊谷軍の中に居る。官給の腹巻をつけ、鉄の陣笠を被った足軽姿である。

熊谷氏の最大動員力は千人を越える規模だが、出陣したのは五百ほどの人数であった。高松山は地理的に武田領の北東にあり、つまり熊谷氏は東側の守りを受け持っている。その領地は毛利領と接している上、安芸の南東部には小早川氏、平賀氏、阿曾沼氏といった国人一揆側の豪族たちがおり、武田氏出陣の隙を衝いてこれらが広島平野へ侵入しないとも限らなかつたから、城を空にするわけにはいかなかつたのである。

熊谷軍を吸収した武田軍は、高松山から北西に進み、武田氏の枝

城である下西山城で一泊した。ちなみに永正十四年（1517）の十月一日は新暦では十月二五日で、そろそろ晩秋と呼ぶべき季節である。周囲の山々はすっかり秋色に染まっている。

翌日はそこから石見街道を取り、山塊に閉ざされた谷状の道を三里ほど北進した。今田城がある河内山という丘陵に到達したのは昼前である。行軍にはゆったりとした余裕があり、今日は休息と戦支度に当て、戦は明日の早曉からだという。

城と言うより砦だな・・・。

河内山は麓からの比高がせいぜい一町ほどしかない小山である。しかし、山容の傾斜は急角度で、いかにも小豪族の根城らしく攻め難そうな作りになっている。山頂に本丸があり、南東に伸びる尾根に曲輪が三つほどあるそうだが、いずれもそれほど広さがなく、とても五千五百もの軍兵が寝泊りできる規模ではない。

城の大手口付近に土居で囲まれた今田氏の居館があり、熊谷軍はその北側で野陣を敷くことになった。

近隣には貧しげな百姓家が十数軒あるばかりで、城下とも呼べぬ貧相な山村である。狭い平地には刈り入れを終えた田畑が並び、遠景はどちらを向いても山また山だ。

目指す有田城は東に半里ほど行ったところにあるそうで、河内山の山頂からなら遠望できるらしいのだが、山麓からでは手前の丘に茂る木々に遮られて視認できない。

熊谷軍に宿営を指示した熊谷元直は、

「有田の周囲を物見せよ」

孫次郎を含めた三人の物頭にそのことを命じた。諜者でなくわざわざ物頭を物見に出すということは、威力偵察をせよということであり、武将としての戦略眼でもって予定戦場を眺めて来い、ということでもある。三人はもちろん別々の道を取り、それぞれの才覚とセンスで情報を集める。

孫次郎は、連れて来た人夫に宿営地の設営や飯の支度などを命じておき、自らは手勢を率いて出陣した。部隊は武者が十騎に雑兵が四十人ばかりで、そこに重蔵が加わっている。

有田城までの距離は直線で半里ほどである。重蔵たちは四半刻で有田南郊の茫漠ぼつぼくとした原野に到った。数町の距離から見渡すと、何年か放棄され荒地になった田園の中に、比高が半町にも満たない丘がぼつんと盛り上がり、城頭に吉川氏の「三つ引両」の旗が翻っている。

「城兵は三百ほどもおるか。多くとも五百を越えるということはあるまい」

孫次郎が言った。

石見街道が南北に通る、北東へも東へも道が通ずるこの有田は交通の要衝であるはずだが、それを睨む有田城の規模は決して大きくない。山容はなだらかで山裾が広く、要害は悪そうだし攻め口も多そうである。一度落ちた城というのは二度、三度と落ちるものであり、吉川・毛利の後詰めさえ許さなければ攻略はさほど難しくないのであろう。

城山の東側に又打川またうちが、さらにその東を冠川かんむりが流れている。この二本の川は十町ばかり北で合流し、北東に向かって流れてゆくらしい。川の周辺は広い河川敷のようになっていて、背の低い草木に覆われ、ぬかるんだ湿地も多い。

重蔵たちは、葦やスキを掻き分けながら、一刻ばかり掛けて川筋の浅瀬や淵、湿地がどこにあるかなどを調べた。又打川は川幅の割りに水深が浅く、深いところでも腰まで浸かるほどしかない。

川筋に沿って徐々に北へと進み、やがて又打川と冠川の合流点に到った。

「この辺りは中井手なかいでと呼ばれておる」

又打川を越え、背後の丘に登りつつ孫次郎が言った。

「吉川はあの石見街道を通って北から、毛利はその山裾を通って東から、有田へやって来るはずじゃ」

いずれこの中井手の鼻先を通ることになる。

「吉川・毛利の軍勢はどれほどの規模ですか」

重蔵が尋ねると、孫次郎は首を捻った。

「それは判らぬなあ。両軍合わせても二千を越えることはないと思うが……」

「二千……」

味方の半数以下である。敵に奇襲を許さず、正面からまともな野戦に持ち込みさえすれば、まず負けることはない。

低い丘を登り切った孫次郎は、有田の方を振り仰いでしばらく地形を見ていたが、

「又打川を堀に見立て、この地に防塁を築けばどうであろうかな」
ぼつりと言った。

有田城を救援せねばならぬ吉川・毛利軍とすれば、中井手の武田軍を無視して進めば背後に敵を置くことになるわけで、それはできまい。これを排除してから有田に進む以外に手はなく、その時点で有田城を攻めている武田本軍を吉川・毛利軍が背後から奇襲・急襲する、といった展開は不可能になる。

当然、中井手の武田軍は吉川・毛利軍を一手で支えねばならぬことになるが、時間を稼いでいるうちに武田本軍が駆けつけ、吉川・毛利軍を横撃するというような形になれば、勝利はまず間違いないであろう。

重蔵は孫次郎の隣に並び、西方に顎を向けた。有田城の丘陵が見える。明日にはあの山裾に武田軍・五千が陣取るはずであり、武田元繁の本陣はその数町南方の丘陵に置かれるに違いない。

早馬なら、ここから二度往復したとしても一刻も掛かるまい。つまり、ほんの二、三時間だけ敵を支えることが出来れば、武田本軍が援軍に駆けつけてくれるであろう。吉川・毛利の軍勢が二千と言ふなら、防御陣地で守戦に徹する人数は、五百もあれば十分過ぎてお釣りが来る。

「悪くないかもしれませぬな」

「まあ、吉川・毛利が必ずしも出戦して来るとは限らん。有田は吉川の城じゃ。毛利がこれを捨て殺しにするのは十分にあり得るし、戦っても勝てぬと見た吉川がこれを見捨てぬとも言切れぬ。吉川・毛利の双方が兵を出さぬという事になれば、この中井手に配された兵はまったくの無駄になる」

「ですが、その無駄には十分な意味が有りましたよ」

寡^かで衆^{しゆ}を打ち破ろうとすれば、夜討ちか朝駆けか、いずれ奇襲をもつてするしかない。寡兵の吉川・毛利の側からすれば、正面からの野戦を望むはずがなく、必ず何らかの策を弄そうとするであろう。軍を分割するのは軍略上の禁忌だが、全軍の一割ほどを割くことで敵の奇襲を封じられるのなら、悪い勘定ではない。

無論、孫次郎もそこまで計算に入れて言っているわけで、

孫次郎殿は戦が解る。

と重蔵は思った。

「後ほど熊谷の殿に言上なされ」

重蔵が促すと、

「それはそのつもりだが 我が殿から武田のお屋形にそれを進言すれば、お屋形は我ら熊谷勢にここの守りを命ずるやもしれん・・・」

孫次郎は微妙な表情で苦笑した。

「戦場いくさばにあつて合戦に加われぬほど辛いことはない。こんなところを守つておるより、有田城攻めで手柄を競いたいというのが人情である。我が殿に貧乏クジは引かせとうないな」

なるほど。

言われてみれば、それも当然の人情である。

彼我の戦力差を考えれば、どうせこの合戦いくさは勝つに決まっていると、武田軍の将士は誰もが思っている。勝ち戦のどこで手柄を拾うかというのが諸将の思惑であり、緒戦の有田城攻めで華々しく活躍することをまずは考えるであろう。

この驕りは危ういな。

と、重蔵は思う。

合戦に絶対ということはないのである。勝利の確率を少しでも上げるために十全の策を積み上げるのが軍略ぐんりやくというものである。

そうは思ったが、重蔵は武田軍の軍略ぐんりやくに嘴くちばしを入れるようなつもりはないし、そもそも入れられる立場でもない。あくまで傍観者の気分きぶんでいるわけで、孫次郎にそれ以上言おうとは思わなかった。

重蔵たちは丘を下って再び又打川を越え、中井手からさらに北に

進んだ。

「あれに壬生城みぶという味方の小城がある。城兵の大半は武田軍に加わっておるゆえ、城には大して兵は残っておらぬはずだがな」

孫次郎が北東の山容を指差しながら言った。

そこから一行は有田城を大回りに回るようにして西に進み、今田城へと帰陣することにした。

幸い と言つべきか、敵兵と遭遇することもない。

河内山が見える辺りまで来た時、鎌を腰に差し、背負子せおこに柴の束を背負つた二人の農夫と行き会つた。

重蔵たちの一隊をやり過ぎすため、二人は道脇にどいて小腰を屈めた。

「そのほつども、地の者が」

孫次郎が馬を止め、馬上から気さくに声を掛けた。

百姓たちは笠を取り、一人が慇懃に答えた。

「へえ、左様でございます」

「武田のお屋形の軍が有田の城をお攻めになるといふ話は聞いておるか」

「えつ。そうなのですか。それは」

農夫たちは顔を見合わせた。

「戦があるのでございますか」

「ある。明日にも始まる。有田には近づかぬがよいぞ。ところで」

孫次郎は人懐っこい笑みを浮かべた。

「そのほづらが背負っておる柴　それを売ってはもらえぬか。銭はそのほづらの言い値でよい」

年かさの男がいかにも困ったという渋面を作った。

「仰せではござりますが、どうか勘弁くださりませ。これを買ってしまつと、わしら、今宵の煮炊きができぬようになってしまいます」

「そうか」

孫次郎は家来たちに顎を向け、

「捕らえよ。殺しても構わん」

と短く命じた。

瞬間、愚鈍そうだった百姓たちが短く舌打ちし、抜き手も見せぬ早業で腰の柴刈り鎌を孫次郎へと投げつけた。

二本の鎌が回転しながら空気を裂いて飛ぶ。

孫次郎の馬の脇にいた重蔵は、持っていた槍でそのひとつを弾き飛ばした。

馬上の孫次郎は、籠手で顔を庇いつつとつさに半身を捻っている。残るひとつの鎌は孫次郎の鎧の^{おおそで}大袖に突き立って止まった。

百姓たちは背負っていた柴を駆け寄る雑兵たちに投げつけ、すでに二方向に別れて一散に駆け出している。

「孫次郎殿、お怪我は？」

「ああ、大事ない」

孫次郎は鈍く笑った。

脱兎の勢いで駆ける百姓たちはこれを追って走る雑兵より俊敏だったが、さすがに馬の足には敵わない。たちまち武者たちに追いつかれ、一人は背後から槍で突き殺され、一人は臀部を突かれて転がったところを捕縛された。

重蔵は身を屈め、百姓たちが投げつけた柴の束を丹念に見た。

昨日今日刈った柴ではない。

いずれも枝の刈り口が黒く乾燥しており、新しいものがただのひとつもない。

つまり、あれらは農夫に成りすました謀者なのだろう。

孫次郎殿も、やるものよ。

重蔵はその慧眼に感心した。

「大方、武田の陣容を探りに来た間者の類であろう。吉川か毛利か帰ったらたつぷりと痛めつけて口を割らせよ」

孫次郎は冷徹に命じ、再び馬を進ませた。

物見から帰った孫次郎が、熊谷元直にどういう報告をしたのか、重蔵は知らない。その夜、武田軍の本陣でどのような軍議が行われたのかも聞いてはいない。

しかし、戦略眼を持った人間の意見というのは、おのずと一致するものらしい。孫次郎と同じように、中井手の戦略的重要性に気付いた者は複数いたらしく、ここに軍勢を置いて吉川・毛利の後詰め

に備えるべきという意見が通った。

武田元繁は熊谷元直にそのことを命じ、熊谷軍・五百が中井手に防塁を築き、そこに籠ることになったのである。

翌十月三日の早朝、武田軍は出陣し、有田城を囲んだのだが、熊谷軍は数百人の人夫を引き連れて有田城を素通りし、そのまま半里ほど北東に進み、中井手に到った。

又打川を堀に見立て、その背後の丘に陣地を据える。丘の前面に空堀を掘り、その土を掻きあげて土塁とし、背後の山から切り出した木で防御柵を植える。城攻めの旗が動く様子を遠くに見ながら、やらされているのは地味な土木作業である。

「つまらぬ事になった」

柵を作るための木を担ぎながら、孫次郎は何度もぼやいていた。

熊谷元直は武田元繁がもつとも頼りにする腹心であり、熊谷軍はまさに武田軍の主力と呼ぶべき存在で、当然、城攻めの先鋒を命じられるであろうと予測していただけに、熊谷軍の中でもこの役回りに不平を漏らす者は多かった。

「我らが防塁を築き終える前に、有田の城攻めが終わってしまつのではないか。そうなれば我らのやっておることはまったくの徒労になるではないか」

などと嘆く者もいる。

が、その懸念は的外れであろう。

武田元繁の狙いは、吉川・毛利の軍勢を城から誘き出し、これを野戦に引きずり込むことであり、有田城はいわばそのための餌なのである。急いで城を抜く必要はなく、開戦早々、味方の出血を度外視してまで総攻めをするとは思えない。

まず、一月ほどはじっくり様子を見るつもりではないか。

と、重蔵は思っている。

山深いこの山県郡は、広島湾岸の平野部よりはるかに雪が多いと聞いた。本格的な冬になれば兵を収めざるを得ないであろうから、そもそも武田軍に残された時間はそれほど多くない。有田城を力攻めで抜き、吉川氏の大朝なり毛利氏の吉田なりに攻め込んだとしても、敵の本拠であるだけに防備は固いであろうし、守勢に徹してそれこそ死に物狂いで防戦するであろうから、雪が落ちるまでに攻め落とすことはおそらく難しいであろう。それどころか、大朝に攻め入れれば毛利氏が、吉田に攻め入れれば吉川氏が、それぞれ武田軍の背後を脅かすに違いなく、挟み撃ちにされ、退路を断たれる危険さえある。地理的に言って、軽々に攻め込めるような形ではないのである。孫次郎は「大きな戦がある」とか「吉川・毛利を滅ぼす」などと大仰な事を言っていたが、現地の地理地勢を見、戦況を知るにつれ、それが意気込みに過ぎぬという事が、重蔵にもだんだん解ってきた。

武田元繁にすれば、有田城を攻略し、山県郡での主導権を吉川氏から取り戻すことが今度の戦の主眼なのである。吉川・毛利軍が有田城を救援に来て、野戦を挑んでくれれば儲けもの、という程度の肚づもりに違いない。ゆるゆると様子を見ながら、敵が動かぬと見切った時に、はじめて有田城攻めに本腰を入れるはずである。

「今頃、吉川や毛利は、有田をどうするかで揉めておりましような」
縄で横木を柵に結わえ付けながら重蔵が言った。

「そりゃ揉めておろうが、武田のお屋形に戦を挑むほどの度胸が連中にあるのかな。長々と話合った末、結局は日和見を決めて、有田を捨て殺しにするのが関の山よ」

孫次郎は敵を見下しきっている。

吉川・毛利の側が、城から出戦して武田軍と雌雄を決するというなら、相当な覚悟が必要であろう。『鬼吉川』の異名で名高い勇猛な吉川氏なら、味方の城を戦わずに見捨てることを恥とし、勝敗を天に預けて出て来るような事もあるかもしれない。一方、毛利氏は当主が三歳の嬰兒であるという。重臣の合議で家政を執っているとすれば、果断な決断は下しにくかるう。

重蔵がそう言つと、しばらく考えた孫次郎は、

「案外、吉川・毛利のふぐりを握っておるのは高橋かもしれないな」

と返した。

ふぐり 鞆丸こづかんの事である。そんなものを握られれば、どれほどの勇者でも身動きが取れまい。

「高橋というのは、それほどの豪族ですか」

「ああ、高橋は安芸より石見に広く領地を持つておつてな。子牛の毛の数ほども家来がおると言われるほどじゃ。毛利の三倍は人数を集められるのではないか」

「毛利の三倍……」

すると、高橋氏が全力で吉川・毛利を応援するようなら、吉川・毛利・高橋で五千近い軍勢を集められるのではないか。武田軍とも互角以上に戦えるということになる。

「高橋の合力が得られねばおそらく毛利は動くまい。毛利が動かねば、吉川は単独で戦わねばならぬようになる。勝ち目が無いゆえ、これも動けまい」

「なるほど……」

慧眼である。孫次郎の言う通りかもしれない。

いずれにしても、敵方の動きを待つしかないわけか。

吉川氏が有田城にどれほどの思い入れを持っているか。吉川氏と毛利氏の紐帯ちゆうたいがどれほど強いのか。敵将はどういう気性であるのか。吉川・毛利と同盟している高橋氏は援軍を出すのか。他の国人一揆側の豪族たちはどう動くのか。そういった多くの敵側の要素によって、この合戦の様相と意味は大きく変わってくる。

それらを知るために、重威が見えぬところで多くの諜者が駆け回っているに違いない。

敵方が動かなければ、冬の到来と共に有田城が武田の手に落ち、この合戦はおそらくそのまま終わる。武田元繁が次に兵を動かすのは来春という事になる。

中井手の防塁は、三日目には空堀と土塁が概ね完成した。その間、柵の植え込みも続けられ、熊谷元直とその重臣たちが寝泊りするための陣小屋作りも始まっている。

城攻めから外されてしまった熊谷軍は、ひたすら「待ち」である。五日経ち、十日経っても戦況は変わらない。吉川・毛利の援軍は姿を見せず、有田城では兵気が弛まない程度に城攻めが続けられている。

やる事のない熊谷軍は、諜者や物見を出すなどして大朝や吉田の様子を探っているが、敵が動く気配はない。

「吉川も毛利も、竦すくみ上がって震えておるわ」

熊谷軍の将士は、わざわざ遠征に出張って来たにも関わらず戦う相手がおらず、明らかに欲求不満になっていた。

熊谷元直はもともと気の長い男ではなく、ついに焦れてしまったように、

「多治比の辺りでも焼いてやれ」

と毛利領北西端の多治比へ百人ばかりの兵を送った。

毛利方を挑発し、兵を出させて戦に引きずり込もうと言うのである。

有田城はそもそも吉川氏の支城であり、毛利氏の城ではない。その毛利氏が武田軍と戦い始めれば、吉川氏としてもこれを黙視しているわけにはいかず、出戦せざるを得なくなるであろう。戦いが始まってさえしまえば戦局は変わるわけで、それが大戦に発展することだって十分にあり得る。

熊谷軍の部隊は中井手から山道を東へ二里半ほど進み、多治比の西部に侵入し、あたりの百姓家に押し入って略奪し、手向かう者は殺し、女・子供は攫い、家屋を放火して回った。

多治比には猿掛城という毛利方の支城があり、多治比元就という男がそれを守っているらしいのだが、毛利方はこの挑発に応じず、多治比の軍勢さえも動かなかったらしい。

その夜、報告を伝え聞いた孫次郎は、

「多治比の少輔次郎とは、とんだ臆病者であるらしいわ」

と吐き捨てるように言った。

己の領民を守るために戦うのは領主の責務である。領民のために兵を出さなかったという事実が、武士として腹立たしかったのである。

実際は、敵地にわずかな人数で乗り込んだ熊谷軍が、毛利方から反撃を受けることを嫌って一刻ほどで早々と引き上げたために、多治比勢の出陣が間に合わなかったというだけなのだが、孫次郎の手

勢はこの焼き働きに加わらなかつたから、そんな経緯は孫次郎も重蔵も知らない。

「多治比の少輔次郎　　というの？」

重蔵たちは、焚き火の傍に座り、握り飯と汁の夕餉を取っている。

「毛利の先代・興元おきもとの舎弟じゃ。多治比の領主でな。猿掛城に居を据えておる。毛利の幼主の後見役をしておるらしいが、文弱な男で二十歳を越えた今でも初陣さえ踏んでおらぬと聞く。大方、合戦いくさの仕方を知らぬのであろうよ」

そういう男が毛利家の舵を握っているのだとしても、その「文弱な後見役」に聡明さと人の意見を聞く耳があり、これを補佐する老臣に人材があれば、家勢を傾かせることはないであろう。

「毛利家の武將に人はおらぬのですか」

重蔵が重ねて尋ねると、握り飯を頬張っていた孫次郎は、竹筒の水で喉を湿らし、しばし考える顔をした。

「毛利の武威は何といつても井上党が支えておる。井上河内かわちがその筆頭じゃ。他には、志道しじ上野こうずけ、福原左京、渡辺、桂、坂といったあたりが名高いか……」

そこでふと顔を上げた孫次郎は、重蔵を見て意味ありげに笑った。

「ああ、肝心なのを忘れておった。『今義経』などという大それた渾名あだなの男がおるぞ」

「今義経」

義経流の兵法者を自認する重蔵は、「義経」という単語に過剰に反応した。

戦の天才と謳われた義経に喩えられるほどなら、よほどの合戦巧者なのではないか。あるいは鬼神の如き武勇の男か

「これも、死んだ毛利興元の舎弟じゃ。毛利家では部屋住みの御曹司というが、あいおう確か、相合の四郎とか申すのではなかったかな」

「四郎 四男ですか」

「いや、三男坊のはずじゃ。なぜ四郎と名乗っておるのかの」

孫次郎は首を捻った。

「いずれ二十歳かそこらの若造よ。大方、小柄で色白で女のような姿をした優男やうゆうなのだろうよ」

「ああ そういう事ですか……」

確かに、義経の容姿を連想させるような若者、というところから来た渾名という事もあり得るだろう。

期待を裏切られたような気分になり、重蔵は苦く笑った。

この相合四郎 毛利元綱という男が、重蔵の人生に大きく関わる存在になるのだが

今の重蔵は、そんな事を知るよしもない。

第二章 西の桶狭間 有田中井手の合戦（二）

白む空と薄藍色の稜線の端境で、寸刻ごとに茜の色が強くなつてゆく。

模糊としていた世界の輪郭が、徐々に明瞭になり始める。

やや強い風が猿掛山の木々を揺らし、空気は間断なくざわめき続けている。山裾から吹き上がって来るその風は凍るように冷たく、吐く息は白くたなびいた。

やがて東の山の稜線に一条の光が差し、墨色の濃淡で描かれていた世界に無限の色彩を与えた。天に浮かぶ雲が、地に鎮まる山々が、猿掛山の麓をかすめて流れる多治比川が、命を吹き込まれたように輝き始める。稜線に生まれた燃えるような光は、無限の生命力を誇示するかのように見るみるその眩さを増し、見詰めるうちに直視できぬほどの光輝に変わった。

多治比元就は目を細め、その偉大な自然の営みに向けて合掌した。万物は、日輪によって生かされている。

草木も獣ももちろん人も、その「生」は日輪の恵みによって支えられている。生きとし生けるもの総てに遍く与えられるそれは、まるで神仏の慈悲のようではないか。

有り難い。

心からそう思った。

「南無阿弥陀仏」

元就は念仏を声に出して十度唱えた。

日輪の恵み 神仏の慈悲に感謝し、ご来光に向かつて手を合わせて念仏を唱えるのが、この信心深い男の日課なのである。

敬虔な祈りを終え、元就が振り向くと、

「おお寒い。今朝はまた一段と冷えまするなあ」

三歩後ろでやはり手を合わせて念仏を唱えていた女が、その手を擦り合わせながら言った。

育ての母　杉すぎである。元就の父・弘元ひろもとの側室そばむすめだった女ひとで、父が病死し、十歳で孤児となった元就を女手ひとつで育ててくれた。家中の者からは「お杉の方」などと呼ばれている。

「一昨日あたりから急に寒さが増したように思えます。この調子なら、そろそろ初雪が落ちるかもしれませんな」

「雪が落ちるようになれば、武田のお屋形も兵をお引きになりましようか」

元就はその問いには応えず、

「お風邪を召してもいけません。味噌汁で身体を温めるとしましよ
う」

城頭から身を離し、本丸屋敷の濡れ縁で履物を脱いだ。

元就の母は元就が五つの時にやはり病で死んだ。お杉はもともと母の侍女であったが、母の死後、父の事実上の継室になった。すでに三十路も半ばのはずだが、顔の作りが若く、子を産んでないためか肌にも張りがあり、どう見ても二十代の美貌を保っている。

「今日も吉田へ行かれますのか？」

暗い廊下を渡りながらお杉が訊ねた。

「朝餉を済ませたら、行きます。行かねばなりませんからな」

このところ、吉田の郡山城では連日のように軍議が行われている。有田城を囲んだ武田軍に対し、毛利家はどうすべきか、という事を延々と話し合っているのだ。

昨年、兄の興元おきもとが病で死に、三歳の遺児・幸松丸がその跡を継いだ。興元の実弟であり、幸松丸の叔父に当たる元就は、幼主の後見役という大任を担わされており、おかげでこの猿掛城を留守にすることが多い。

「殿さまのお留守に、また武田の兵が多治比に寄せて来るような事はありませぬか」

お杉はやや不安そうだ。

武田方の熊谷元直の軍勢が多治比に攻め入るといふ一大事が、一昨日に起こったばかりなのである。

熊谷軍は二十軒ばかりの百姓家を焼き、恣ほしに略奪りやくを行った。軍議のために郡山城に居た元就は、その報告を聞き、多治比へ飛んで帰ったのだが、敵を邀撃ようげきすることが叶わなかった。領民を守るという領主の責務を果たすことができず、切齒せつしやく扼腕くわんするしかなかったのである。

あのような想いは、二度としたくはない。

しかし、それでも当主の後見役たる自分が軍議に欠けるわけにはいかない。

「防備については、私が不在の時にも動けるように家来たちによく言い聞かせておきました。物見も配っておりますし、ご安心ください」

それよりも、すでに十度近くも行っている軍議が一向にまとまらぬということが、元就を憂鬱うゑふにさせている。

本家が腰を上げてくれねば、とても武田とは戦えぬ。

元就の多治比勢は、雑兵まで含めてもせいぜい百五十ばかりである。五千とも六千ともいう武田の大軍に立ち向かうには、毛利・吉川・高橋の軍勢を挙る以外に^{こそ}なく、まずは毛利本家を決戦論に導かねばどうにもならないのだが、本家の老臣たちは口々に自重論を唱え、武田軍が毛利領に攻め込んで来るまでは静観すべし、と言つて譲らない。

山県郡は吉川領であり、武田軍が困んでいる有田城は吉川氏の城であり、毛利が攻められているというわけではない。雪の時期になれば戦はできぬから、有田城さえ落とせば武田元繁も満足して兵を引くという可能性は決して低くはなく、老臣たちの言にも十分に理はあるだろう。

その事は認めながらも、元就は出戦を主張し続けている。

「ここで打つて出ねば、毛利は腰が抜けたと世間は思うであろう。ひとたび信用を失えば、兄上が築き上げた毛利の武威は^{すた}廃れ、国人一揆の盟約さえ有名無実になりかねぬ。今は、勝敗を天に預け、戦うべき秋ではないのか。武田の大軍を相手に、勝てぬまでも互角以上に戦えば、兄上亡き後の毛利の武威とその軒昂^{けんこう}たる意気を、天下に知らしめることができよう」

本家の老臣たちは、そんな元就の決戦論を、若さゆえの血気と見てほとんど相手にしていない。元就は初陣さえ済ませていない男であり、合戦の何が解るか、と侮られてもいる。

が、決戦を唱える元就自身は、血気に逸るところかそもそも戦なぞしたくはない。

初陣で、圧倒的な武田の大軍を相手に絶望的な戦いを挑まねばならぬと考えるだけで気が重い。代われるものなら誰かに代わってもらいたいとさえ思う。何と言つても元就は書物と伝聞でしか合戦を知らぬ男であり、実際に戦場に出たことすらないのである。思い詰

めるあまり近頃はすっかり食が細くなり、夜中に何度も目を醒ましてしまうほどの重圧を感じている。

父上も兄上も、この気重きおもを紛らわすために、あれほど酒を飲んでいたのであるうか。

そんな元就が、それでも打って出て戦わねばならぬと思い定めているのは、突然の兄の死から始まった毛利家の苦難が、天が己に与えた試練であるように感じているからである。

それが天与のものならば、禍福を問わず全霊で享うけねばならぬ。

天の与うるに取らざれば、かえってその咎とがを受く、と言うてはないか。もし甘受することから逃げれば、必ず天から見放され、地の愛顧を失い、人からは蔑あはまれることになるう。

が、こういう抽象論で重臣たちを説得することはできない。負ける戦はせぬものと兵書にもあり、合戦は勝敗がすべてなのである。勝てるという見込みがなければ戦は仕掛けてはならず、見込みということと言えば千五百の兵力がやっとという毛利が五千とも六千とも言う武田軍に勝てるわけがない。それが常識というものであり、老臣たちも当然そう考えている。

執権の志道しじ広良、長老の福原広俊などが自重派の急先鋒である。

「我らが動かねば、有田城を落としたところで武田は兵を引きましよう。たとえ武田が吉田を侵そうとしても、雪が落ちれば兵を引かざるを得ますまい。しかし、もし有田で決戦するとなれば、敵は我らの三倍以上の大軍、お味方の苦戦は火を見るより明らかでござる。勝ち目がないとまでは申しませぬが、それも天運次第。運が武田に傾けば、我らは滅亡の憂き目に遭わぬとも限りませぬ。わざわざそこまでの危険を冒す必要がござろうか。ここはご自重あつてしかるべきと存ずる」

志道広良は早くに父を亡くした元就にとって父親代わりの存在で

あり、福原広俊に至っては母方の祖父である。この二人が強硬に反対する状況では、他の重臣は誰に遠慮する必要もなく、頑として出戦に頷かない。

元就は普段は評定でめつたに発言せぬ男だが、それでも今度の軍議ばかりは多弁になって懸命に説いた。

「有田が吉川のものであればこそ、毛利が動けば吉川は動かざるを得ぬ。毛利が武田に挑んだと知れば、高橋も義理でもいくらかの援兵は出してくれるであろう。有田城にも四百ほどの兵があると聞く。これらをすべて合わせれば三千ほどにはなるう。ましてこの三千は、一所懸命の地を侵され、故郷を守るために決死で働く三千である。対して武田の五千は、味方の大軍に驕り、毛利なぞ怖るるに足らずと油断し、しかも長い城攻めに疲れてもいよう。決して勝ち目のない合戦いくさとまでは言えまい」

つまり、毛利が兵を出しさえすれば、結果的に毛利・吉川・高橋の同盟軍を有田に集めることになる。その上で武田軍と雌雄を決するべき、というのが元就の意見なのだが、これに積極的に賛同してくれる者は、弟の相合あいあう元綱を除けば一人もない。

年若く、合戦経験も持たない元就には、老臣たちの反対を強引にねじ伏せるだけの説得力も政治力もない。しかし、一方で元就は幼主・幸松丸の後見役という立場にあり、いわば毛利家で最高の意思決定権を握つてもいる。結果として元就と老臣たちの議論は常に平行線で歩み寄りを見せず、衆議がまとまる気配はない。

老臣おひんどもは、高橋の隠居殿の意向に縛られている。

朝餉の間、元就はその事を考え続けていた。

高橋氏の隠居　大九朗　久光は、幼主・幸松丸の祖父に当たる人物で、娘婿である兄が死ぬや、幸松丸の後見役を自ら買って出て、以来、毛利家中に強い影響力を持つようになった。隠居という身軽さも手伝ってか、この男は孫の顔を見るためと称して月に二、三回

は必ず吉田にやって来て、そのたびに三、四日は郡山城に滞在してゆくから、合わせれば毎月十日ほど郡山城に居て、毛利家の軍議にも三度に一度は顔を出してくる。毛利家は久光に首根っこを掴まれたような格好になっているのだが、高橋氏は毛利の三倍以上の兵力を持つ大豪族であり、弱小の毛利とすれば常にその兵力を当てにせざるを得ないから、誰もが久光を怒らせる事を恐れ、腫れ物を扱うように接している。

その久光が、

「有田を救うために吉川が兵を出すと云うなら解る。が、なぜ我がが率先して兵を動かさねばならぬ」

などと言い、毛利の出兵を強く抑えつけている。吉川を援けるために高橋が兵を損ずるのは真つ平、ということらしい。

元就の父・弘元の時代、その画策で毛利・吉川・高橋は婚姻による三国同盟を結んだ。さらに兄・興元の時に他の六家の豪族と共に国人一揆の盟約を交わし、進退を共にしようと誓ったのだが、もともと高橋と吉川は領地を奪い合っていた敵同士であり、仲は決して良くない。高橋と吉川の間で膠にかわのような役割を果たしていた兄が死んで以来、高橋久光は毛利の家政に強く介入し、逆に吉川氏は疎外しようとしている節がある。

ゆくゆくは毛利をなし崩しに併呑へいどんし、吉川領を攻め取り、安芸と石見で大勢力を築く肚そんたくであろう。

そんな事は子供でも忖度そんたくできる。

当然、高橋久光の思惑を悟った吉川氏の方も高橋氏を警戒し、兄の代には堅固だった毛利・吉川の紐帯ちゆうたいにまで悪い影響が出始めている。

毛利はすでに高橋の犬に成り下がったか。

と思えば、吉川氏が毛利を信頼できるはずがないであろう。

毛利・吉川・高橋の同盟を、兄の時代のように戻したい。

と元就は考えているのだが、当主が三歳の嬰兒、その後見役の一人が高橋久光では、毛利家はどうしても軽く見られてしまう。死んだ兄のような出来物てきぶつが家中を束ね、「毛利と吉川が組めば高橋にも対抗できるぞ」と言えるほどの武威を示さなければ、三者の均衡きんこうを保つことはできぬであろう。

幼主の後見役たる自分が、高橋久光から舐められているからこういう事態になっている、とも元就は思う。

要は、私の器量の問題か。

自分に兄ほどの器量があるかどうか　それは元就にも判らない。しかし、世間の人々に「興元は死んだが、元就がある限り毛利は侮れぬ」と思わせるよう実績を積み上げてゆくしかないであろう。そして、天下に向かつて元就の器量を示すには、武田の大軍はこれ以上ない相手と言うべきである。

これは、天与の機会なのだ。

武田軍の侵攻という禍を、何とか福へと変えねばならない。禍福があざなえる縄のようなものなら、福は常に禍の種ほを孕ひんでいるのだろうし、禍は必ず福の萌芽ほつがを秘めているはずだ。禍をもって福へと転ずるのが人の知恵というものであるう。

この合戦しやくせんは避けてはならぬ。

理屈を越えたところで、元就はそう感じていると言っている。

朝餉を済ませた元就は、わずかな近侍のみを連れて猿掛城を発つた。

多治比川に沿って東に一里半ほど進めば吉田である。馬なら速足でも四半刻ほどあれば着く。

郡山城は、吉田盆地を北から見下ろす郡山の南尾根に築かれている。

大手口を守る衛兵に馬を預け、城山を登った元就は、まず奥に渡

つて幼主・幸松丸とその母に挨拶し、軍議の席についた。
やがて、朝の二番太鼓が鳴る。それに前後して、三々五々、重臣
たちが出仕し始める。

「多治比は遠いが、兄者はいつも誰よりも早いな」

弟の元綱が生あくびをしながら広間に入って来た。

「人は日の出の前に起き、ご来光に手を合わせるのが善い。お前は
毎夜深酒が過ぎるから朝が弱いんじゃないか」

「朝っぱらから痛いところを突かれた」

元綱は苦笑した。

「父上も兄上も、酒の害でお命を縮められた。ほどほどにしておけ
よ」

弟は返事の代わりに片手を上げ、一門筆頭の席に座った。

幼主の後見役である元就は、執権・志道しじ広良と共に上座の席につ
いている。席次は臣下の序列を表すものだから厳格に定められてお
り、福原父子、坂、桂、渡辺、井上党の五人、赤川、栗屋、国司、
飯田、中村といった老臣たちもそれぞれの席についた。

最後に広間に入って来たのが、高橋氏の隠居 大九朗 久光で
ある。

「おお、皆の衆はすでにお揃いか。お待たせをしてもうたか」

大名家にとって最高機密と言うべき軍議の席に他家の人間を入れ
る事が愉快なはずはなく、弟の元綱をはじめ重臣の何人かは露骨に

苦々しい顔をした。が、この五十男は気にした様子もなく、上座下手の隅近くにのそりと座った。

「執権殿よ、多治比に熊谷の兵が焼き働きに来たそうじゃな」

「左様。本日の評定もそのことでごござる」

志道広良が表情を変えずに答えた。

「我らが動かぬので、焦れた刑部少輔（武田元繁）がちよつかいを掛けて来たというだけである。我らを挑発し、有田へ誘き出そうという肚じゃ。そんなものは放っておけば済む話ではないのかな」

「ご説はごもつともでござるが 領地を焼かれ、領民を殺された多治比殿にすれば、放っておけて済ませられる話ではありませんまい」

広良は語尾を濁した。

この男自身は自重論のだが、他家の人間に「放っておけ」と言われれば、素直にその言葉に従うという気にもなれなかったのである。

「多治比殿は、まだ有田へ兵を出せと申されておるのか」

久光の瞳にわずかに浮かぶ侮蔑の色を元就は見逃さなかった。

「多治比殿はまだまだお若い。血気に逸るのも無理はないが、それを諫めるのが老臣の役目というものでござろう」

ことさら元就を子供扱いし、評定を老臣たちに主導させようとするのが、この初老の男の常である。

「兄者は合戦を嗜むような男ではなく、また徒に血気に逸るような浮薄な性情でもないが、ご隠居殿はそういう事をご存じないようですな」

弟の元綱が強い口調で言った。

元綱は、久光の毛利家への介入を強く厭い、その嫌悪感を隠そうとしない。弟はどちらかと言えば直情傾向な男で、そのまっすぐな性格を好ましいと元就は思っているのだが、好悪を露骨に出し過ぎるのは求めて敵を作ることにもなる。

案の定、久光は、いけ好かぬ孺子め　という顔をした。

「ああ、多治比殿は未だ初陣さえ済ませておられぬのであったな。合戦を嗜まれるはずがない。合戦遊びがしたいのは、むしろ相合殿の方が」

棘を隠さぬ物言いである。

元綱も負けてはいない。

「我らは遊びで合戦をするようなことなぞ考えられぬが、隠居殿のその口ぶりでは、高橋ではなされるらしい。我らの如き小家と違い、子牛の毛ほども家来があると、遊びで討ち死にする者が出ても懐も心も痛まぬものと見える。羨ましい限りですな」

弟は喧嘩となれば引かぬ男だから、窘めねばどこまで食って掛かるか判らない。

「四郎、言葉が過ぎるぞ」

元就が間に入ると、元綱は苦笑して矛を収めた。

「いずれにしても」

久光が苦い顔で話題を戻した。

「吉川の有田なぞ放っておけばよろしい。刑部少輔けいぶしょうぶとて、雪が落ちても滞陣を続けるほど愚かではなからうゆえ、武田の兵が吉田に攻め入るような事はまずあるまいよ。万一、武田がこの郡山城を囲むような事があれば、その時はわしが高橋の兵を率いて後詰めし、敵を後巻き（逆包囲）にするまでのこと。案ずるには及ばぬ」

久光の高言は毛利家の誰にとっても愉快なものではないが、戦略として正しいという事は元就にも解る。毛利が兵を挙こぞつて郡山城に籠城すれば、武田がいかにも大軍でも十日や二十日では絶対に抜けな
い。久光は孫の家を見捨てはしないから、高橋氏の援軍は翌日にも必ずやって来て、武田軍の背後に布陣するであろう。さらに吉川軍が多治比あたりまで出張つて退路を断てば、武田軍は進退に窮する。その程度の事は、攻める武田元繁の方も当然解っているに違いない。

武田元繁がそれほどの危険を冒してまで毛利攻めに拘るつもりなら、有田城に長々と時間を掛けるようなことをせず、力攻して手早く城を落とし、勢いをつけて東進して来たと考えるのが自然である。それをせず、半月近くも有田に留まっているのは、要するに毛利・吉川の出戦を待っていると見るべきであろう。

その意味でも、久光や重臣たちの観測はおそらく間違っではないな
い。

しかし

「此度の有田の事は、我ら国人一揆の面々と武田の軍が初めてまとも**にぶつかる合戦**でござる。安芸だけでなく、天下の人々がこの合

戦の行方を見ている」

元就は言った。

英主と評判を取った先代・興元を喪い、幼主を戴いた毛利家の武威は、衰えることはあっても騰がることはないと言われ、世間は見ていないに違いない。幼主の後見役として毛利家の舵を取る元就は未だ初陣さえ済ませておらず、武将としての評価は定まっていなかった。つまり、今度の武田軍の侵攻は、毛利家の武威の真価が問われていると言つてよく、同時に元就の武将としての器量が試されているのである。

「我ら国人一揆の者が居竦んで誰も戦わぬとなれば、毛利・吉川は腰抜け、武田は強し」と世間は見る。刑部少輔に合力する豪族はさらに増え、その勢いは増すばかりということになりましょう。しかし、雪が落ちる前に武田軍に一撃を加えておけば、たとえ刑部少輔が降雪のために兵を引いたのだとしても、国人一揆の軍が武田軍を撃退した、という風に世間は考えます」

武田軍は、有田城を落とせば当然勢いづく。来春の雪溶けを待つて猛烈に仕掛けて来るであろう。その時は有田城という拠点を失っている分だけ今より不利であり、しかもその先は長い。ここで有田の落城を静観しているのは、せいぜい決戦を一時先送りにするという程度の意味しかなく、先の展望はまったく拓けない。武田との戦いはまだまだ続くのだから、ここでその勢いを挫いておくことが必要なのではないか。

元就がそう説くと、久光はすぐさま反論した。

「多治比殿、有田で我らが大敗すれば、それはやはり武田の勢いを増すということになるではないか。そもそも、有田に出て勝てるという見込みがどこにある。負ける合戦はせぬものじゃ」

「勝てぬまでも、手強い戦いを演じることはできましょう。たとえば痛み分けに終わったとしても、十分に意味があると申しております」

有田城救援のために兵を出すことは、吉川氏に貸しを作ることに
もなり、興元亡き毛利の武威を世間に示すことにもなり、国人一揆
の紐帯の強さを世に知らしめ、更なる結束を高めることにもなるは
ずだ。

元就がそう畳み掛けると、久光は冷笑した。

「国人一揆なぞと申しても、平賀も小早川も援けてはくれんではな
いか。多治比殿が高橋の兵を当てにされておるなら、申しておく。
そんな分の悪い博打はくちのような合戦に、兵を貸すような気はわしには
ないぞ」

その台詞に、居並ぶ重臣たちまでが慌てた。

「多治比殿は負け戦がどういふものかを知らぬゆえ、いかにも勇ま
しい事を申されるが、武田は六千、毛利・吉川は合わせてもせいぜ
い二千数百というところか。それで勝てると思っておるなら、ご
存分にやってみなさんとよい」

元就は唇を噛み、怒気を隠すように視線を逸らした。

戦場経験がないことは、元就にとつて最大の弱点と言っている。

元就が何を言っても、「机上の空論」、「戦を知らぬ者の戯言たわごと」と
決め付けられてしまえば、反論のしようがないのである。

「まあ、たとえ有田でさんざんに敗れても、毛利はわしの可愛い孫
の家じゃ。この郡山城はわしが守ってやるうほどに、安堵なされよ」

見かねたのか、座で最年長の福原広俊が助け舟を出した。

「まあまあ、大九朗殿、そのようにきつう申されては多治比殿もお辛いであろう」

長老・福原広俊は元就の祖父・豊元と義兄弟の契りを結び、豊元・弘元・興元・幸松丸と四代に渡って毛利家を支える重臣中の重臣である。福原氏は毛利家の庶家で家臣筆頭の位置にあり、当然、老臣たちにも大きな影響力を持っている。

「我らは幸松丸さまの御ため、より善き道を選ぼうとこうして顔を突き合わせ、評定を致しております。高橋との誼みを、ゆめ疎かに思っておるものではない。その事はお含みくだされよ」

「ああ、これはいかにもそうであった。売り言葉に買い言葉　ついでに久光は余裕を取り戻している。

「毛利は我が孫の家ゆえ、危うい橋を渡って欲しゆうはない。わしの存念は、極めてみればそれだけの事でござるよ」

口だけではどうにもならぬ。

どれほど議論を繰り返したところで、老臣たちが元就の器量を認めていない現状では意見は通らない。そのことを痛感し、元就は発言する気をすっかり失った。

元就が黙ってしまったからか、元綱も妙に静かになった。評定は昼まで続いたが、軍議は重臣たちの発言に終始し、敵が毛利領に攻め入って来るまでは静観するという方針があらためて確認された。

その翌日の夜のことである。
多治比の猿掛城に、元綱が二人の近侍を連れてふらりとやって来た。

「喉が渴いたゆえ、兄者に酒をたかろうと思つてな」

垢じみた頭巾を取りながら元綱は笑つた。三人は薄汚れた布子を着て、まるで作男のような格好をしている。

「その格好は何の呪いだ」

驚いた元就が尋ねると、元綱は事も無げに答えた。

「昨日今日と有田のあたりを見て回っていた。帰り道に寄つたのだ」

「見て回つたつて……」

「武田の陣容も遠目から眺めて来たが、なかなか熾んなものだったよ」

元就は唾然とした。敵に見つかれば膾になますされていたであろう。そう言つて叱ると、

「俺を討てる者があるものか」

元綱は磊落らいらくに笑い、出された酒を美味そうに飲んだ。

「物見の報告にもあつたから兄者も知つておるとは思うが、中井手に立派な陣城が出来ておつたよ。又打川を堀のように前に配して、

芝土居（土塁）に柵しつが設たえられていた。鳩はとを描いた旗が立っており、
たから、守っておるのは熊谷くまがい 可部かべの民部少輔みんぶのしょうぶだ」

可部の高松山城主・熊谷 民部少輔 元直。

「武田第一の武将が、城攻めから外れておるのか……」

熊谷元直は武田軍でもっとも名高い武将である。熊谷直実なおざね以来の
武勇を誇る熊谷氏の兵は、吉川氏の兵と並んで安芸随一の強さとさ
れているのだが、その頸兵けいへいを攻城に使っておらぬというのは意外で
あった。

「多治比に焼き働はたらきに来たのが熊谷勢だと聞いて、おかしいとは思
つておつたのだ。熊谷勢ならば城攻めの先陣を務めておつても不思議
はないからな」

言いながら元綱は手酌で次々と盃を重ねた。父や兄に似て酒豪な
のである。

対座する元就は、酒を嗜たしなまない。飲んで飲めぬことはないのだが、
父と兄が酒害で死んだと信じる元就は、それを口にする気がしない。

「俺は有田のあたりはあまり詳しくないのでな。一昨年の有田合戦
には出たが もう一度ちゃんと見ておきたかったのだ。あの辺の
山野の様子や、有田の城と中井手の位置も頭に入った。厄介なこ
ろに陣城を置かれたもんだよ」

元就はその有田合戦にさえ出ていない。物見が作った絵図を持っ
ているからおよその位置関係は解っているつもりだが、有田周辺の
山野を歩いたわけではなく、兵要地誌には暗い。

「それほど厄介か」

「ああ、俺たちも、石見街道から来る吉川も、中井手の鼻先を通らんことには有田へ行けん。陣取る熊谷勢を潰さぬことにはどうにもならんわけさ。だが、熊谷勢と合戦を始めれば、武田本軍にその事は筒抜けになる。有田城と中井手とはわずかに半里ほどしか離れておらんからな。遠目が利く者なら、天気さえ良ければ直接見える」

武田本軍に奇襲を掛けることはまず不可能ということであろう。寡兵の毛利軍とすれば、武田の大軍と戦うには策を弄する以外になく、まず浮かぶのは夜討ち、朝駆けといった奇襲である。しかし、それが封じられたとなれば、正面決戦にならざるを得ない。

「俺が武田元繁なら、毛利・吉川が出て来たとなれば、有田城には抑えの軍兵のみを残し、全軍を中井手まで進ませて、熊谷勢と戦っておる毛利・吉川を叩く。まず間違いなく勝つだろう」

「我らに勝ち目はないか……」

やはり、決戦論に固執する自分は間違っているのか

元就は何とも言えぬ閉塞感に嘆息したが、

「そうと決まったものでもないさ」

元綱は軽みのある笑みを浮かべた。

「いや、理屈の上では確かに勝ち目はない。が、実際の合戦は理屈の上でやるものではない、という事だな。大手が駄目なら搦め手から攻めるといふ手もある。その日の天気ひとつで結果はまったく違ったものになる。それが合戦というものだろ？」

「そうかもしれないが……」

戦場を知らぬという負い目を持つ元就は、合戦を語ることに躊躇するところがあり、つい口が重くなる。

「地の者の話だと、有田のあたりは寒くなると、吉田のようによく朝霧が立つらしい。この数日で朝夕はめっきり冷えるようになったからな。今朝も薄く霽はやっていた。特に中井手は又打川と冠川から霧が立つ。遠目からはまるで見えぬようになる。中井手を攻めるには、夜討ちより朝駆けだな」

「中井手を攻めることになったのか？」

この一日で本家は方針を変えたのか、と思い、元就は戸惑った。

「あん？ 兄者は合戦いくさを仕掛けるつもりだったのではないのか？」

元綱は怪訝な顔をした。

「評定では埒が明かぬゆえ、そう肚を決めたものと見えたのだがな」

「仕掛けるも何も 私の下にはせいぜい百五十の兵しかおらぬ。本家が共に動いてくれねばどうしようもないだろう」

元就の投げやりな言葉に、元綱は少し呆れたようであった。

「兄者が自分で申しておった事ではないか。毛利が動けば吉川は動かざるを得ぬ、と。それと同じだ。老臣おきなどもがどれほど自重を唱えていようと、兄者が動いたと知れば本家も兵を出さざるを得ぬ。福

原の爺じいが孫の兄者を捨て殺しになぞさせるわけがない。執権殿も同じだ」

そう言われて元就はハツとした。他人の事は見えるのに、自分の事は気付きにくいものらしい。

「そつか・・・」

戦えぬことはないのか。

元就は目をにぶく光らせ、おもむろに思案に沈んだ。慌てたのは元綱である。

「いやいや、ちょっと待ってくれ。そこで考え込まれても困る」

「ん？」

「俺は別に兄者を焚き付けに来たわけではないのだ。兄者はすでにその肚だと早合点しておった。どうも先走りが過ぎたらしい」

元綱は苦笑し、一息に盃を空けた。

「今宵はこれで帰る」

「もうおそ晚おそい。この城に泊まってゆけばよい」

「そうはいかぬのだ。黙って出て来たからな。家の者が心配している。今宵のうちに戻っておかねば、明日には母者が大騒ぎをする」

元綱は悪戯つぼく笑った。

話が急に所帯じみたので、元就もつい笑ってしまった。

「これは俺の勤に過ぎぬが、熊谷勢は近々また来るぞ。民部少輔は城攻めに加われず、手柄を立てる場がない。待っても待っても毛利・吉川の兵が現れず、このまま冬になれば何をしに来たか判らんといい話だからな。合戦いくさがしたくてうずうずしておろう」

「熊谷元直か……」

武田軍随一の猛将

「来てから慌てぬように、肚をくくって備えておくことだ」

美味しい酒であったよ、と言い残し、元綱は吉田へ帰って行った。

第二章 西の桶狭間 有田中井手の合戦（三）

有田城の丘陵に、陽が落ちてゆく。

茜色に染まった空を眩しげに眺めた重蔵は、

この様子なら、明日も雨にはならんな。

と安堵の息をついた。

熊谷元直の軍勢に加わって中井手の防塁に籠り、早くも半月以上が過ぎた。赤と黄に彩られた山の木々は過半が枯れ落ち、晩秋だった風景は初冬の雰囲気に変わりつつある。安芸の北部は山岳地帯だけに冬が早く、例年十月の末には降雪があるという。今日はすでに十月二十日（新暦の十一月十三日）であり、昼間は兎も角、朝夕はめっきり冷え込むようになっていく。野天で寝起きせねばならぬ重蔵にすれば、雨に濡れるのだけは勘弁してもらいたい。

重蔵は、土塁の傍で仲間と共に見張りに立っていた。

ふと背後の空に目をやると、

おや？

陣地の後方で上がっている炊煙の数が、普段よりかなり多いことに気が付いた。

夕餉の支度と共に、腰兵糧の準備でもしているのではないか。だとすれば、今宵か明日にでも出陣するということではないのか

熊谷の殿さまは、いよいよ焦れたか。

いつまで待っても動かぬ吉川・毛利両氏に、業を煮やしたという事はある得るだろう。

戦陣における重蔵の勘は、悪くない。その夜はあえて武装を解かず、寝蓐代わりの枯れ葉に身を埋めて身体を休めた。

案の定、夜半に出陣の命が下った。

「我らはこれより多治比へ夜行し、猿掛城を攻める」

家来を集めて孫二郎がそう宣した。奇襲作戦が敵に漏れぬよう、直前までその事を秘していたらしい。

猿掛城は毛利領の北西の要かなめであるそう、これを抜けば毛利氏の本拠である吉田の郡山城へ道が通ずるのだという。西から毛利氏を攻めるには是が非でも落としておかねばならない城であろう。

熊谷勢の三百に、武田軍の山中、一条、板垣らの軍勢から三百を加え、総勢六百の兵がこの奇襲のために編成された。

「謀者の報告では、城を守る兵は二百にも満たぬというぞ。おまけに守将の多治比元就は合戦いくさをしたこともない孺子こぞうよ。一息に攻め落とせよう」

奇襲は、本当に敵の不意を突くことができれば、五倍、十倍の大軍でも打ち破ることができる。猿掛城に二百以下しか守兵がいないという諜報が正確であれば、敵に気付かれず夜明け前に押し寄せることさえできれば、苦もなく陥落させられるであろう。

奇襲を成功させるには、敵の物見や謀者に自陣の異変を悟らせてはならない。中井手に二百の兵を残すのもそのためである。さらにその移動を敵に気取られてはならない。この場合、何より移動経路が重要になる。

中井手から多治比に行くには、可愛川えのに沿ってほぼ真東に二里半ほど進めばいい。が、この経路は前回多治比に討ち入った時に使った道であり、当然毛利方も嚴重に監視しているであろう。孫次郎の話では、中井手からいったん北東へ進み、山中を大回りに迂回し、南下して多治比と吉田の間に出る道があるそう、熊谷元直はその経路を選択したのだという。

六百の熊谷軍は、闇の中を肅々と出陣し、壬生みぶの八幡神社の脇を通って迂路に入り、山中を北東に進んだ。現在の中国自動車道に沿って美土里町みどに向かったと思えばいい。小津古山の山麓を回るように道を南に取り、県道六号線を南下すれば多治比であり、猿掛城の

東に出られる。

ただ、この経路の難しいところは、移動距離が四里を遙かに越える長さになってしまうことと、美土里が高橋氏の領地であることである。横田盆地を北から睨む大狩山に高橋氏の安芸における本拠である松尾城がある。熊谷軍が高橋氏の目を掻い潜るには、美土里の集落（当時は横田村と呼ばれていた）に入る手前で東の山に分け入り、小津古山の南を横断する形で一里ばかり山中を突っ切り、美土里と多治比を繋ぐ道 県道六号線 に出るしかない。

隠密行動であるため、灯火はわずかしか使えない。二十日の月は雲に隠れ、山中は己の鼻先も見えぬほどの闇である。この辺りの地理に詳しい壬生^{みぶ}氏の兵が道案内を務めてくれたが、足で道を探るようになって進むことに変わりはなく、ことに小津古山の山中を横切るのは困難を極めた。

「急げ。夜が明けてしまふぞ」

熊谷元直はろくに休息を挟まず、行軍を急がせた。

しかし、目指す猿掛山を見る前に、東の空が白んで来た。

失敗だな。

重蔵は嘆息するような気分ですら思った。夜が明けてしまったのは奇襲にならない。移動にこれほど時間が掛かるとは思わなかったのであろう。夜半まで待たず、日が落ちてすぐに行動を始めるべきであった。

が、熊谷軍の移動は毛利氏にも高橋氏にも察知されていない。毛利領の北方は高橋領であり、毛利方もまさか敵が北から来るとは思いもしなかった。つまり、熊谷元直は隠密行動にも敵の裏を掻く事にも成功したわけで、計画にやや周密さを欠いたものの、実行力に不足はなかったと言える。

「無様な事になってしまつたわ」

苦笑した熊谷元直は、猿掛城を奇襲するという当初の戦略を変更し、多治比から半里ほど北の山中で足を止め、全軍に腰兵糧を使わせた。兵を休ませつつ腹ごしらえと戦闘準備をさせ、満を持して多治比に攻め込んだのである。

両側が山という谷状の道を半里ほど進むと、やがて視界が開け、左右に冬枯れた田園が広がる。山に囲まれた狭い盆地で、ちらほらと農家がある。奥行きは四町ほどの広さしかなく、その先は山である。南東に向けて多治比川が流れ、その土手に沿って街道が通っており、吉田へと続いている。

目指す猿掛城は、右手　ほんの二、三町先の山塊に築かれているらしい。

「火を掛けよ」

熊谷元直は、加勢にもらった三百の將兵にそのことを命じた。略奪は雑兵にとって格好の副収入である。兵たちは勇躍し、猿掛城の多治比元就に見せ付けるように近隣の百姓家を手当たり次第に焼いた。熊谷軍の出現をあえて知らせ、多治比勢を城から引きずり出すというのである。野戦でこれを叩き、その崩れに付け入って城を攻め落とす肚に違いない。

これは時間との勝負だな。

孫次郎の馬の傍を歩きながら、重蔵は思った。

熊谷軍が焼いた百姓家の煙は、敵の出現を毛利方に伝える狼煙ろうしんになる。毛利氏の本拠である吉田は南東にわずか一里ほどというから、この黒煙が見えぬわけがない。

毛利氏の動員力は千を遙かに越える。これに対して熊谷軍は武田本軍からは切れた孤軍で、その人数はわずか六百に過ぎない。藪をつついて蛇を出すと言うが、危急を知った毛利本家の兵が大挙してやって来れば、熊谷軍は背後に敵を受け、総崩れになるであろう。

無論、その程度の事は熊谷元直も承知している。

元直は、吉田から来る兵を見張るために、真つ先に南東へ物見を走らせた。猿掛城を落とすことができればそれが最上だが、奇襲が失敗した時点でそのことには拘っていない。援軍の到着までに城を落とせぬと見れば、無理せずそのまま西へ退却するつもりである。毛利氏に対する挑発という意味ではそれで十分であろう。

元直は城から少し距離を取り、四、五町ばかり離れた街道と冬枯れた田に軍を展開し、三百の熊谷家の兵を前後二陣に配した。

多治比の孺子は、どうするか。

というのが、元直の興味である。

多治比元就という男は、これまでほとんど名も聞いたことがない。文弱で戦の仕方を知らぬという噂の通りなら、寡兵の多治比勢は守戦に徹して城から出戦しないかもしれない。動かぬようならこちらから攻めるしかない。

西の山麓を凝視して待つうち、

果然

城で陣貝が鳴り、太鼓の轟きと共に多治比勢が打って出た。街道と田の畦を使ってこちらに駆けて来る。その数、わずか三、四十騎ばかりである。雑兵を入れても二百に満たぬであろう。

臆病ではないようだが、頭は悪いらしい。

元直は薄く嗤った。

あんな小勢でどうするつもりか。

城から出てくれれば、こちらの思う壺なのである。

「どれ、手並みを見てやろう」

前陣に配した兵が矢をつがえ、一町ばかりまで多治比勢を引きつけるや、合図と共に一斉に矢を放った。

が、多治比勢に矢戦に応じる気配はない。三十数人が矢を受け、そのうち十人ばかりが倒れたが、それを物ともせず、勢いをそのま

まに熊谷軍に突っ込んで来た。

序盤はまず矢戦というのが常識であり、熊谷軍はやや意表を衝かれた。三矢まで放てた者は稀で、二矢を射た頃には多治比勢に肉薄され、早くも接戦となった。

熊谷元直は後陣の中央で観戦を気取っている。

「おう、健気健気。若い者は威勢がよいわ」

敵勢の中央付近で馬を操っている若い将が、多治比元就であろう。多治比の兵は将の気迫が乗り移ったように奮戦しているが、熊谷の兵は安芸随一と謳われるほどの頸兵けいへいである。勢いに押されてやや下がったものの、もちろん容易には崩れない。多治比勢の鋭気を柔軟に受け止め、次第に押し返し始めた。

当然だ。

という余裕が元直にはある。

熊谷軍は前陣だけで多治比勢と変わらぬ人数がある。率いる先鋒大将は熊谷家屈指の侍大将である水落げんのじょう源允。直綱であり、初陣の若造などに負けるわけがない。

「者ども、油断すな！」

孫次郎は手勢を率いて前陣の右翼を受け持っていた。孫次郎の家来たちは、徹夜の行軍の疲れも見せず澆刺と働いた。

当然、重蔵も孫次郎の馬の傍で戦っている。孫次郎に殺到しようとした雑兵を二人ばかり斬り、一人を刺し殺した。が、手柄に興味はない。たまたま傍に剣術を教えた若者が居たので、首級はくれてやった。

戦場における重蔵の視界は狭くない。

あれが敵の大将か。

一町ばかり左手の方で、敵の若い大将が馬上で声を囁らして何か

叫んでいる。戦場の喧騒に掻き消されてよく聞こえないが、必死に味方を鼓舞しているらしい。その鎧にはすでに何筋かの矢が突き刺さっていた。

敵の背後に後詰めがある。

という事にも気が付いた。戦場の後方に五十人ばかりの一隊が控えている。

多治比勢は三隊で構成されているらしい。大将らしき若武者が一隊を率い、もう一隊がそれと競って働き、二本の槍のように熊谷軍をえぐっている。後方の遊軍は退路を守りつつ不測の事態に備えているのだらう。

初陣にしては、堂に入った采配だ。

重蔵は感心したが、敵将を褒めるようなゆとりがあるのは、要するに熊谷軍が圧倒的な優位に立っているからである。

どう見ても、兵の質、量ともに熊谷勢が優っている。多治比勢は二度、三度と引いては突撃を繰り返したが、熊谷勢はそのたびに敵を楽々と押し返した。

多治比勢が出戦して熊谷勢と戦い始めたのを知って、放火や略奪に駆け回っていた味方の三百人が戦場に集まり始めている。もうしばらくすれば、小勢の敵を包囲する形勢になるであらう。

勝ったな。

どれほど多治比勢が頑張っても、これでは熊谷方は負けようがない。

半刻ほども戦っただらうか。

「退け！ 城まで退け！」

という敵將の叫びがかすかに聞こえた。包囲されることを怖れたのであろう。

多治比勢の前衛がにわかに崩れた。

「追え！」

叫んだ熊谷元直は、攻め太鼓を乱打させ、後陣の兵をも解き放つた。

多治比勢の先陣の退却を、後方の遊軍が矢で援護した。熊谷軍の兵たちは、飛矢を受けながらも敵を追って獵犬のように駆ける。

城に繰り込むつもりだな。

孫次郎の馬脇を全力で走りながら重蔵は思った。

城攻めにそういう法がある。敵の退却を追い討つ形で、城門が開いた城の中に飛び込むのである。後続が雪崩れ込むまで城門を確保できれば、城の外郭を一気に落とせる。

孫次郎の隊は、枯れ田を一直線に走った。

城山まであと一町というあたりまで迫った時、畦を蹴って飛んだ重蔵は、着地した拍子にずぶりと足を取られ、無様に転倒した。

な！？

泥の中に足が膝まで埋まってしまっている。

城の付近の田だけが、深い泥田になっていたのだ。

「畏だ！ 下がれ！」

孫次郎が叫んだ。馬上から泥田に投げ出されてしまったために、顔も鎧も泥まみれである。

左右を見回せば、騎馬の武者も徒歩かちの雑兵も、数十人が足を取られ、あるいは転倒し、周章狼狽している。多治比勢が退却に使った一筋の狭い道の周囲は、すべて泥田であるらしい。

当然のように、無数の矢が雨のように降って来た。城門付近に布陣し直した多治比勢が、身動きの取れなくなった熊谷軍の兵に一斉に矢を放ち始めたのである。

無理に泥田を突っ切ろうとした者は、城山に辿り着く前に次々と矢を受け、運の悪い者はそのまま絶命した。進むにしろ退くにしろ、

まともに動けないのだからどうしようもない。

重蔵の左右の泥にも矢が何本も突き立った。重蔵はほうほうの体でなんとか泥から足を抜き、一步、二歩と進んで畦に這い上がり、ようやく行動の自由を得た。

孫次郎とその家来の武者たちは、泥田で立ち往生してしまった馬を何とか救おうと骨を折っていたが、馬は的が大きいかから格好の標的になる。飛矢が集中し、十頭いた馬のうち五頭が射殺された。足を折るなどして使い物にならなくなった馬もあり、結局残ったのはわずか三頭である。

これが狙いだっただのか……。

考えるまでもなく、泥田は通れない。しかし、城へと続く道は騎馬が二頭並ぶほどの幅しかなく、あとは田の畦を進むほかないが、こちらは人が一人通るのがやっとである。軍勢が展開できない以上、兵の数の差は問題にならないであろう。足場がしつかりとした高地から援護の矢を射ることができる分だけ多治比勢が有利である。

状況を理解した熊谷軍の将たちは、兵を退き下げ、泥田を挟んで矢戦を始めた。しかし、あらかじめ並べてあった矢楯の隙間から矢を射る多治比勢に対し、熊谷軍の兵には身を隠す場所がない。当然、命中精度は多治比勢が圧倒的に高くなる。

やられたな。

敵の作戦勝ちと言わねばならぬであろう。

熊谷方とすれば、矢楯で兵を守りつつ、藁束などを泥田に入れ、その上に戸板のような物を敷いて、攻め込むための道を作るしかない。それ自体は珍しいことでも難しいことでもなく、こういう場合の常套手段なのだが、今日の合戦はそもそも時間との勝負である。ぐずぐずしていれば、吉田の毛利本家から兵が駆けつけるであろう。つまり、急襲で一気に城を抜けぬという時点で、熊谷方に勝ちはない。

「多治比の孺子め、合戦の仕方を知っておったかよ」

遠矢を射ながら孫次郎が憎々しげに吐き捨てた。その鎧にはすでに三筋の矢が突き立っている。

矢を射る手を止め、重蔵は敵陣を遠望した。

たまたまそういう角度に重蔵が居たのであろう、敵勢の中央あたり、矢楯の隙間に将らしい人影が見えた。赤、白、紫の糸で緘した腹巻きをつけ、三鍬形みつくわがたの前立てが陽光を反射してキラキラと輝いている。

「多治比 少輔次郎 元就と言ったか……」

重蔵はあらためて矢をつがえ、弓を引き絞ってゆっくりと敵將に狙いを定めた。自分を精兵（弓の名手）とは思わぬが、矢が届かぬ距離ではなく、十本射れば二、三本は中あてる自信がある。

「動くなよ……」

ひょう と、風を切る音が鳴った。

顔を狙った矢は、狙いをわずかに逸れて兜の鍔つばに中たり、余所よそへ弾け飛んだ。

狙撃に驚いた左右の近侍が慌てて主人を庇い、その身を矢楯の陰に隠す。

「ちっ」

武運もある、か……。

すでに敵將は見えない。重蔵は諦めて弓を下ろした。

あの若い武將は、熊谷軍が攻め寄せて来ることを想定して、あらかじめ備えていたのであろう。それにしても、小勢であえて城を出て戦い、敗走して熊谷軍を泥田に誘い込むあたり、初陣とはとても

思えぬ老獺ろうたがひさがある。

熊谷軍は二百人近くが矢傷を受け、三十頭以上の馬を失っている。戦前には予想もしなかった大損害であろう。

やるではないか。

と、重蔵は敬意を込めて思った。

先鋒大将の水落直綱が、精強な兵を率いて細道を攻め込んでいる。兵の個々の武勇は熊谷の兵が圧倒しているが、毛利方の援護の矢に手を焼いてなかなか前に進めない。武門の意地で戦い続けているのである。すでに無理攻めでどうこうなるような状況でない事は水落も解っているはずだ。

後方からこの戦況を眺めていた熊谷元直は、

「もうよい。引き上げるぞ。退き鐘を鳴らせ」

と不機嫌そうに命じた。

毛利本家の兵が出陣し、多治比に向かっているという報告が入ったのである。

熊谷軍は猿掛山から少し離れて兵をまとめ、城の前を素通りして西に向けて退却した。

余力がなかったのか、多治比勢は城から動かず、追撃を掛けては来なかった。

結果だけを見れば、痛み分けということになるであろう。多治比の兵を五十人以上討ち取ったが、熊谷軍の死者も七十人に上った。熊谷方の死傷者は、刀槍の怪我ではなく、そのほとんどが矢傷である。

孫次郎の家来も四人が矢で死に、十数人が矢傷を負った。

「ふう」

西へ去る熊谷軍を見送りながら、元就は深いため息をついた。

どうにか生き長らえた。

その実感が強い。

多治比勢はおよそ三割が討たれ、手負いも多く、戦えるのはすでに九十人に満たない。あと半日攻められ続けたら、支えきれなかったかもしれない。

元就はへたり込みたいほど疲れていたが、それを表情に出さず、

「勝ち鬨をあげよ」

と左右に命じた。

兵たちが叫ぶ鬨の声が山野にこだました。

怪我人の手当てや死んだ者の埋葬など、事後処理を命じた元就は、継母のお杉に戦勝を報告するために城山を登った。お杉は出丸の物見櫓から合戦の様子を見ていたに違いないが、無事な姿を見せて安心させてやりたかった。

坂を登るたび、膝がガクガクと揺れた。人心地ついて怖ろしさがぶり返したのかもしれない。

私は勇者ではないな。

とつくづく思った。

本丸の殿舎の玄関では、お杉と家付きの女房たちが三つ指をついて出迎えてくれた。

「生きて帰りました」

元就が言つと、

「悦叟院さま（父・弘元）と秀岳院さま（兄・興元）がお護りくださいましたのです。勝ち戦、おめでとうござりました」

涙ぐんだお杉は深く頭を下げた。

仮に籠城戦になつていたとすれば、男だけではなく女も戦いに加わることになつたであろう。飯を作つたり、負傷者の手当てをしたリ、矢櫃を運んだり 稀に矢石しせきを放つたり薙刀を振るつて戦うような剛の者もいるが 女性の活躍の場はいくらでもある。戦国を生きる女たちはそのことを自覚しているから、合戦の推移を固唾を飲むように見守つていた。敵を撃退したことを知つた女たちは狂喜し、元就の智勇を黄色い声で誉めそやした。

ほどなく、毛利本家の将兵が続々と多治比にやつて来た。

真つ先に猿掛城の城山を登つたのは、元就の弟の相合あいあひ元綱である。本家の雑兵の参集を待つことさえなく、手回りの近侍だけを率いて駆けつけてくれたらしい。

元就の顔を見るなり、

「勇んで出て来たが、間に合わなかつた。美味しいところを貰つつもりであつたのだがな」

元綱は冗談めかして笑つた。

「よう駆けつけてくれた」

元就は弟の手を取り、慇懃いんぎんに謝した。

熊谷軍が兵を退いたのは、毛利本家の兵が出陣したと知つたからに違いなく、その「毛利本家の兵」とは、さしあたつて真つ先に馬を出した元綱の一隊であつたらう。その疾はやさに救われたと言えぬもない。

「それにしても、多治比の一手である民部少輔みんぶしょうぶに勝つとは、大したものだ」

百五十そこそこの多治比勢が、六百もの熊谷の兵を野戦で撃退できたとは元綱には思えない。当然、兄が何かしら策を弄したのだからと踏んでいたが、猿掛山の山麓まで来てみて、その謎はすぐに解けた。数十本の矢を浴び、針鼠のようになった武者や馬の骸が、泥田のあちこちに無数に転がっていたからである。

城の周囲は枯れ田に水が引かれて泥田になっており、それまでなかった「縄手」^{なわて}が作られていた。縄手というのはまつすぐな細道を言い、軍勢を展開できないから少人数で多数を相手に戦うことができる。敵を泥田へと誘導し、矢戦で撃退したのである。

しかし、敵将・熊谷元直は百戦錬磨の武将であり、その率いる軍兵たちが練達の頸兵であることを思えば、この単純な計略に引つかかったという事実が重要であった。よほど巧妙に敵を誘い込んだと見るべきで、初陣の兄がそれをやったのけた事に元綱は感心したのである。

「近々寄せて来るといってお前のご宣託のお陰だよ」

そう応えた元就には、不思議なほど喜びや興奮がない。

「いったいどんな魔法を使ったのだ？」

元就は自分の口で自分の功を誇るほど厚顔ではないので、近侍に合戦のあらましを語らせた。

近侍は興奮冷めやらぬといった顔である。

「つまり、殿はわざと敗走して見せ、敵を泥田に誘い込んだのです。身動きのできぬ敵にさんざんに矢を射掛けると、熊谷の兵はたまたらず引き退き、すすごと逃げ帰って行きました」

兄者自らが囷おしになったのか。

熊谷軍の将兵は、初陣の元就が野戦に応じたのを見て、敵の大將の首を取り、一気に猿掛城を抜く好機であると、逸りに逸つたのに違いない。熊谷軍の粗忽さを嗤わらうより、敵をそういう心理にさせた兄を褒めるべきであろう。

やるものだ。

兄を見る目に武人に対する敬意が籠こもった。

「敵が退いたのは本家の兵の来着を怖れたからで、我らが勝つたからではない。こちらも筒先一杯だった。たまたま運が良かっただけだ」

元就が切り上げ口調で言った。

「武将はその運が大事なのだ。兄者には武運があるということさ」

兄の初陣の勝利を、元綱はそういう言葉で寿ことほいだ。

元綱から四半刻ほど遅れて、福原、桂、坂、志道しじ、井上、赤川、渡辺ら、老臣たちが続々と城山を登って来た。やがて城には約三百騎 総勢千五百ほどの兵が集まった。

初陣の元就が、わずか百五六十の兵で四倍の熊谷軍を撃退したという事実は、家中の誰にとっても意外な事件であり、重臣たちをも驚かせた。武断派の井上党の老臣たちなどは、元就に向ける目を明らかに変えている。

しかし、執権の志道広良だけは渋い顔で、勝敗よりも元就の出戦とその戦いぶりを難詰した。

「さても危うい戦をなさつたものじゃ。出戦なぞせず、本家の兵が来るまで城にて防ぐが穩当でござつたらう。まして、聞くところによれば、多治比殿自らが先頭に立って戦われたという。大将のなされようではない。流れ矢で命を落とすかもしれぬのですぞ。たまた

「ま勝ったから良かったようなもの」

「後方におつても、流れ矢に当たる時は当たる。芝居（戦場）での生死はいずれ紙一重よ。多治比殿の天運次第であろう」

井上 河内守 かわちのかみ 元兼が豪放に言つてのけた。

「それよりも、佯敗（敗れた振り）をして敵を泥田に誘い入れたと聞きましたぞ。初陣にして見事な戦ぶりではござらぬか」

老練の武将たちの中ではそういう声が圧倒的に高い。毛利家中における元就の武勇の評価は、この合戦で一時に騰がったと言つていい。

元就は、あらためて本家の老臣たちを広間に集め、

「皆々、早々に駆けつけてくれたこと、礼を申す」

とまず慇懃に頭を下げた。

「今日の合戦は、私にとって不本意なものだった。敵が多治比に近付きつつあることを知り得ず、利を失い、不意打ちを許してしまつたは私の失態であり、まことに無念に思う」

初陣で見事な采配を見せた元就が、さほど喜んでもない様子なので、諸将は一樣に不審な顔をした。

元就はさらに口を開いた。

「思うに、敵は、昨夜来の徹夜の行軍と今日の戦いに疲れ、今宵は泥のように眠ることになる。この機に敵の不意を衝き、中井手の熊谷勢を朝駆けにて突き崩し、その勢いをもって武田と雌雄を決し

よじと思つ」

静かな語り口であったが、そのことがかえって元就の決意の深さを感じさせた。

「いやいや、お待ちください。とてもとても 我ら一手で決戦なぞは思いもよらず」

と反対したのは志道広良である。

「我らは千五百、対する武田は六千でござる。これとまともに懸合かけあひの合戦をなされては、お味方の苦戦は必至でござる。中井手の熊谷を攻めるといふのは兎も角、武田の本軍と戦うと申されるなら、吉川、高橋に援軍を求め、力を合わせて一戦に及ぶべきと存ずる」

「『小国の大国と事に従ふや、利あらば則ち大国その福を受く』という事を知らぬか」

元就はぴしゃりと言った。

『史記』にある言葉で、「小国が大国と共に事を行えば、成功した時の利益は大国が受ける」という意味である。逆に失敗した時の害は小国だけが蒙ることになるわけで、小国は大国と事を共にしてはらないと、唐土もろこしの賢人は教えている。

「高橋が大なる事は申すに及ばず、吉川も我らより大身。また『鬼吉川』と怖れられるその武勇は安芸随一とも評される。対して、この元就は若輩にして小身、武名も未だ聞こえておらぬ。他家の力を恃たのんで戦えば、たとえ我らが粉骨碎身して勝利を得たとしても、それは吉川、高橋の手柄となり、毛利はただ彼らに従って戦っただけであると世間は思い、諸人に噂されるであらう。そうなつては無念

である。他家の力は恃まぬ」

広良は慌てた。

「いやいや、申される事はいかにも道理でござるが、わずか千五百ばかりの兵ではござり勝利はおぼつきませぬ。勝つてこそその合戦いくみくでござるぞ。吉川、高橋の兵を加えねば」

「合戦は人数でするものではあるまい」

声を上げたのは元綱である。

「將に戦意がない時、兵は必ずすぐに崩れる。そんな兵ならむしろおらぬ方がよい。そもそも高橋を当てにしようというのは間違っている。軍が出払った郡山城を守ってくれると思えば、それだけでも十分ではないか」

高橋久光を毛嫌いしていることを差し引いても、元綱の言葉は道理である。

「吉川にも援軍なぞ頼む必要はない。ただ『毛利は中井手に朝駆けを掛ける』とだけ報せてやればよい」

武田軍が攻めている有田城はそもそも吉川氏の城であり、中井手の武田軍に毛利が奇襲を掛けるということを知れば、吉川氏は「毛利に遅れては恥」とばかりに兵を出すに決まっている。わざわざ下手に出て援軍をお願いする必要がどこにある、と元綱は言ったわけである。

諸將はなるほど頷いた。

「しかし……」

広良はまだ踏ん切りがつかない。毛利家の執権職を預かるこの男にすれば、博打ばくちのような戦いを挑むよりも、毛利の安全を期した戦い方をしたい。退嬰的な思考だが、それは広良の責任感の表れでもあり、この男の立場からすれば当然でもあつたらう。

「あくまで気が進まぬという者は、芝居に立つ必要はない。執権殿は郡山城の留守をなされよ」

突き放すように元就が言った。

この一言が、諸将の反対意見を封殺した。

すでに戦闘が行われた猿掛城は濃厚に戦陣の雰囲気が残っており、鎧をつけた軍議と平服を着た評定とでは、おのずと諸将の気の入り方が違う。彼らは戦うために出陣して来たわけで、ここで合戦から外されるのは武門の恥である。

「多治比殿がそこまでのお覚悟であれば」

ということ、皆が出戦に同意し、元就を総大将に戴くことを決めた。

それから夕刻まで戦略についての議論が重ねられ、その間、兵には休息が与えられた。

元就は日暮れに食事を取って浅く仮眠し、深夜に全軍を出陣させた。

明ければ、永正十四年（1517）十月二十二日である。

中国地方の戦国史において、まさに運命の一日と言っている。

第二章 西の桶狭間 有田中井手の合戦（四）

熊谷軍は大きな傷を負って中井手の砦に戻った。

山中を徹夜で行軍し、朝から合戦をし、さらに二里半を歩いて帰ってきた兵たちにはさすがに疲労の色が濃い。遅い昼餉を終えて落ち着くと、多くの者が崩れるように眠り込んだ。

疲れた顔でそれらを見回りながら、

「敵からすれば、今が我らを攻める絶好の機ということになるうな」

と孫次郎が言ったので、重蔵は頷いた。

さすがに解っておるな。

敵が動くとすれば、今宵か明日の明け方であろう。そこで動きがなければ、敵に出戦の意志なしと断定していいのではないか。

「兵はこのまま夜まで休ませ、今宵は夜討ち朝駆けに用心すべきでしょう」

重蔵が言つと、

「万端備えはしておるさ」

孫次郎は薄く笑った。

吉川氏の大朝、毛利氏の吉田の双方に謀者が張り付いているし、中井手への経路にも物見を埋めてあるという。熊谷元直は武将としての才質に乏しくなく、経験にも不足はない。さすがにそのあたりに手抜かりはないらしい。

「わしも横にならせてもらいます。孫次郎殿も少し眠っておかれた

方がよい」

「ああ、そうしよう。毛利に出て来るほどの戦意があるとは思わぬが、吉川は狙っておるやもしれんからな。油断はせぬよ」

果たして

その夜の深更、二、三の謀者が中井手に駆け戻って来た。

多治比に集結していた毛利本家の兵が出陣し、あと半刻ほどで中井手に到るといふ。それにやや遅れて、大朝で吉川氏の兵も動いたといふ報告が続いた。闇のために敵の数まではつきりしないが、毛利本家の兵は多治比に千五百ほども集まっていたようだし、吉川氏の動員力は毛利氏を凌ぐといふから、両軍合わせればかなりの兵力になるであろう。

熊谷元直はただちにこのことを武田軍の本陣へ伝え、中井手の全軍に防戦の準備を命じた。

当然、休んでいた者たちは叩き起こされる。中井手の空気はとにかくに緊張した。

時刻は寅とらの刻（午前四時）あたりである。この日（新暦の十一月十五日）、夜明けは午前六時十五分ごろだから、天が白むまでにまだ一刻ほどある。夜討ちには晩おそすぎ、朝駆けにはやや早い。

熊谷の陣地を除けば周囲は無明の闇であり、視界はまったく利かない。が、大軍が動く気配というのは注意さえしていれば必ず感じ取ることができる。中井手の砦の前には又打川が流れているのだが、数町ばかり川下の森で、眠っていたはずの鳥たちが飛び立つ羽音や鳴き声が聞こえた。

「来たようだ」

孫次郎が呟いた時、熊谷元直は用意したおびただしい篝火に火を入れるよう命じた。

中井手の砦全体が、昼のような明るさになった。森の闇までは見通せないが、又打川の川辺にも捨篝火（すてかがりび）（敵の目をくらすために本陣から離れた所に焚く篝火）を二十近くも据えてある。敵を弓矢で迎撃するにはこれで十分であろう。

中井手の陣地の異変を見て、敵も奇襲が失敗したことを悟ったらしい。正攻法に切り替えたようで、森から無数の軍兵の影が溢れ出し、河川敷の向こうでいくつもの松明が灯った。薄く立った川霧が、その炎をぼやけさせている。

「昨日今日合戦を覚えたような孺子の浅知恵など、百戦錬磨の我らに通用するか」

誰かがそう嘲笑し、熊谷の兵たちがどつと笑った。

やがて敵方から鎬矢が射込まれた。鎬が風を切る音は破邪の呪いであり、戦神への祈願でもある。その矢が熊谷の陣から射返され、戦場における礼の交換が終わった。この時点で敵の攻撃はすでに奇襲ではなく、正々堂々とした合戦になった。

敵陣で陣貝の響きが闇を裂き、開戦を告げた。陣太鼓が乱打され、敵兵が闇の中から次々と現れ、飛沫を蹴立てて猛然と川を渡り始める。

敵兵の旗印は「一文字三星」 毛利氏の軍兵だ。

「敵をよう引き付けよ。我が合図するまで射てはならんぞ！」

先陣の大將である水落直綱が、土塁の上で叫んだ。

土塁の柵の中では三百の射手が弓を立てて敵を睨めつけている。

「それ射取れ ！」

水落の声と共に三百の矢が風を切り、敵兵が川辺でばたばたと倒

れた。

毛利軍はそれをものともせず、喚声をあげながら果敢に挑みかかって来たが、熊谷軍の兵たちは万端準備を整え、敵を待ち構えていたのだから、精神的な余裕がある。怯むことなく落ち着いて敵を狙撃し、たちまち数十人を射倒した。

中井手の防御柵は又打川に沿う形で東西に築かれている。重蔵は、孫次郎の家来らと共に柵の西側を守備していた。土塁の上から矢継ぎ早に矢を射かけ、闇の中から現れる敵兵を何度も撃退した。

ここが切所だ。

武田の本軍がやって来るまで柵を維持できれば熊谷軍の勝ちである。柵を破られれば、寡兵の熊谷軍は窮地に陥るであろう。

「どンドン矢櫃やびつを運んでくれ！」

重蔵は景気良く叫んだ。矢を射尽すまで射まくってやるつもりである。

熊谷の兵には弓の達者が少なくない。毛利の軍兵たちは柵に取り付くどころか、又打川を渡ることさえできなかった。熊谷方の防ぎ矢に辟易したのであるう、やがて敵は突撃を止めて河原に矢櫃を並べ、川を挟んで矢戦を始めた。

毛利方にも頸弓けいきゅうを引く者がある。桂元澄、井上就良なりよしなどが高く、その名を記した矢が熊谷の兵を何人も射倒した。

が、これを見ている熊谷元直は、

こちらの思う壺よ。

と余裕の笑みを浮かべていた。

熊谷軍は昨日の戦で七十余人が討ち死にし、数十人が重傷で戦闘不能である。加勢にもらった山中、一条、板垣らの軍勢・三百はそのままこの砦に籠っているが、戦えるのは七百に満たない。一方、敵は闇に紛れてその数のはっきりしないが、毛利軍だけでおそらく千数百、これに吉川軍が加われば三千は覚悟せねばならぬであろう。

この兵力差では野戦では戦えないから、砦に籠って守戦に徹するしかない。時を稼ぎたい熊谷元直にすれば、数に物を言わせた無理な突撃をされるより、矢戦に応じてくれる方が有り難いのである。

このまま一刻も支えておれば、我らの勝ちよ。

やがて武田本軍・五千が中井手に到着し、敵を横撃するであろう。その時に砦から打って出て敵を突き崩せば良い。つまり、敵の奇襲を察知し、その不意打ちを許さず、これを待ち構えて防いだ時点で、熊谷方の勝ちはず動かない。

熊谷元直だけでなく、重蔵や孫次郎ももちろんそう考えていた。

馬上から敵陣を遠望している多治比元就は、機嫌が悪かった。

「何をやっておるのだ！」

と何度も怒声を放った。

熊谷方に奇襲を見破られたのは仕方がないにしても、毛利軍の先陣に配した井上党、桂、渡辺、兎玉、栗屋らの諸隊は、熊谷軍の矢に圧倒されて呐喊を諦め、矢戦を始めてしまっている。この合戦が時間との勝負であることを思えば、老練の武将たちの手ぬるい戦い方が元就には信じられない。

「こう矢戦ばかりして悪戯に時を移せば、武田の本軍が助勢に来てゆゆしき大事となろう。あの者たちはそれが解っておらんのか！」

元就は怒鳴った。

すでに半刻ほどが無為に過ぎている。元就が苛立つのも当然であったろう。

実は元就は、吉川氏の援軍が中井手にやって来る前に、毛利軍一手で熊谷軍を潰してしまいたい。せめてそれくらいのができね

ば、元就と毛利軍の武威を示す戦にはならないのである。そう思い、吉川氏には無断で開戦を早めたのだが、元就の甘い予想に反して、毛利軍はわずか四、五百人が守る熊谷陣に手を焼ききっている。

あと半刻ほどもすれば夜が明けてしまうであろう。幸い霧が立ち始めているから中井手の様子は有田の武田軍からはしばらくは見えないだろうが、霧が晴れば武田軍は毛利方の「策」を見破り、中井手に急進して来るに違いない。

「槍で攻撃を掛け、あの目障りな柵を押し破るぞ！」

元就が自ら旗本の軍兵を率いて打って出ようとしたから、傍らで戦を眺めていた志道広良が慌てた。

「まずお待ちを！　しばしご自重くださいな！」

広良にしてみれば、血気に逸った元就が前後を忘れ、敵陣に突出するというような展開が一番怖い。総大将が流れ矢にでも当たれば、その時点で毛利軍の負けなのである。

「仰せはごもつともでござる。わしが一隊を率い、柵を押し破りましようほどに、その機に多治比殿はお旗本をもって熊谷の本陣を切り崩してください。それまではこちらにお控えあって、決して旗本の備えを乱されませぬ！」

広良は元就の馬の口取りに向かって、

「もし多治比殿が駆け出そうとなされても、決してお馬の口を放しではならんぞ！」

と怒鳴るように命じ、自らの手勢と坂党の軍兵たちを率いて駆け

出した。

が、元就はその指示に従うつもりはない。

「馬の口を放せ！」

と鋭く命じ、口取りがその命に従わぬと見るや、もう一度怒鳴って自ら太刀に手を掛けた。その怒気に口取りたちが怯え、思わず手を放した。

元就は馬腹を蹴り、一騎駆けに駆け出した。それを見た数百の旗本たちが、遅れてはならじと津波のように走り出した。

左手の柵の守りがぬるい。

志道広良の隊が敵陣中央に猛攻を掛けたため、敵陣の東側の兵が中央に寄り、やや薄くなっている。そう見た元就は、軍頭を左手に向けて一息に又打川を渡り、

「ここを攻め破れ！」

と敵陣の前で輪乗りしながら絶叫した。

当然、矢が殺到する。元就は巧みに馬を乗り回し、太刀を振るって飛矢を払ったが、鎧には二筋の矢が立った。幸い、肉に食い込んだという感覚はない。

大将のこの気迫に打たれた毛利の軍兵たちは、飛矢を受けながら面も振らずに柵に取り付いた。柵を守るうとする熊谷兵を槍で突き、柵を揺すぶって引き倒そうとする。

それを見て驚いたのは志道広良である。

「大将自らが先駆けとは、何たる軽率！」

と舌打ちし、

「多治比殿は勇みすぎておられるぞ。万が一にも敵の矢に当たられるような事になってはならぬ！ 急ぎ後ろへ下がらせよ！」

先陣の井上元兼、渡辺勝すくもに元就の護衛を頼み、その兵を敵陣の右翼へ遣った。

が、広良も老練の武将である。自身の猛攻と大将・元就の呐喊で敵陣が防戦に手一杯になっていると見て、とつさにこの機を生かそうと思いついた。遊軍に残しておいた二百の兵に柵を回り込ませ、横あいから敵を攻めるよう命じたのである。

毛利の遊軍は主戦場を西に逸れて川を渡り、柵の西端を迂回して敵陣に攻め込もうとした。

熊谷方の侍大将・水落直綱は、この毛利方の兵の動きを瞬時に察知した。

「敵が柵を迂回し、我らの背後に回ろうとしておるぞ！」

後詰め（予備兵）として後方に控えさせていた山中、一条、板垣らの軍勢・三百をすぐさま走らせ、毛利の別働隊を押さえ込み、この奇策を封じた。

水落直綱は激戦となった主戦場の戦鬪を指揮しつつ、自らも弓を執って奮迅の働きをしていた。毛利の別働隊が篝火から遠い闇の中を進んでいたにも関わらず、戦いながらそれに気付いたこの男の戦場における洞察力は、非凡と言っほかない。

ついでながら付け加えれば、三百もの兵を後方に待機させていた熊谷軍は、わずか四百にも足らぬ熊谷家の兵のみで毛利軍の猛攻を支えていたことになる。安芸屈指と謳われた熊谷の兵の頸つよさは伊達ではなかった。

両軍が火花を散らして戦ううち、やがて天が白み始めた。深夜にはさほど気にならなかった霧が、明け方にかけて少し濃くなった。毛利氏の側は運があったと言っべきであろう。

この頃、吉川氏の援軍が五、六百人ばかり、中井手に到着した。

「しゃつ、すでに戦が始まっておるわ！」

と叫んだのは、先陣の二百騎を率いる侍大将・宮庄みやじょう 下野守しもつけのかみ 経つね友ともである。吉川氏の先代・国経の弟であり、当主・元経の叔父に当たる人物で、吉川家中で屈指の侍大将と言われている。

「毛利め、抜け駆けしおったか・・・！」

戦場を睨んだ経友は苦々しく吐き捨てた。

毛利からは、「明日の夜明けと共に中井手の陣に攻め込む」という連絡が昨夜にあった。多治比に集結を終えていた毛利軍と違い、吉川氏はそれから兵を集めざるを得なかったわけだが、大朝にいる者は兎も角、石見に領地を持つ家来が集結するにはどうしても一日は掛かってしまう。とりあえず集まった兵を一陣とし、経友がこれを率いて駆けつけたのである。だが、いざやって来てみれば、まだ夜明けの前だというのに、合戦はすでにたけなわになっているではないか。

「毛利に遅れたとあつては鬼吉川の名折れぞ！ 者ども懸かれ！」

経友は軍兵たちを中井手の陣にぶつけるように突撃させた。

ちょうどこの頃、元就が攻めていた熊谷陣の右翼の柵がついに破れた。

「よし！ 一気に乗り破れ！」

河原のあたりで兵を叱咤していた元就は、軍兵たちにそう命じ、自らも進もうとしたが、井上、渡辺といった老臣たちがうるさく諫

言するので、少し下がって川を渡り、戦場が遠望できる土手まで戻った。

右手を見渡すと、見慣れぬ軍勢が戦場に参陣している。

三つ引両。みひきしやう

その旗印は、言うまでもなく吉川氏のものである。

間に合わなんだか。

元就は無念さに嘆息したが、同時に安堵もしていた。正直、ここまで苦戦させられるとは思ってもみなかったのである。熊谷の兵を侮っていたつもりはないが、奇襲で一氣に陣を抜けるのではないかと甘く考えていたことも否めなかった。決死になった頸兵の粘りがどれほどのものか思い至らなかったのは、経験不足と言うしかない。しかし、ともかくも敵陣の一角は破った。これに五百を超える新手が加わったとなれば、熊谷軍を壊滅させるにさほどの時間は掛からぬであろう。

敵陣の右翼の柵が破れたため、そのあたりでは熊谷軍の兵も弓を捨て、両軍が白兵戦で戦うようになった。

「敵も味方も聞け！ 一番槍の高名は、この井上源三郎じゃ！」

敵陣に真つ先に飛び込み、二人の敵兵と渡り合って一人を突き殺した井上源三郎就良なりよしが、功名の一番と決まった。それに甥の井上就助なりすけが続き、その後も敵を仕留めた武者たちが挙げた首級を誇らしげに掲げて続々と本陣へ駆け戻って来た。

武者たちにすれば、己の手柄を首注文の帳面に付けて貰わねば、後日の恩賞がもらえない。他人ひとが獲った首を盗んででも手柄にしたという時代であり、戦場における当然の風景と言える。

ところでこの時、逸話が伝わっている。

「わしが八番とはどういうことじゃ！」

首を持参した粟屋源次郎という男が、首注文を付ける祐筆（書記官）に食って掛かったのである。

源次郎は井上源三郎らと共にほとんど先頭で敵陣に乗り込み、熊谷方の大兵と渡り合って見事に敵を突き伏せ、その首を獲った。順番で言えば三番首であったのだが、首を持って引き返そうとした時に背後から太ももに矢を受け、歩行が不自由になってしまったために、味方の武者たちに次々と追い抜かれ、本陣に戻った時には八番目まで順番が下がってしまっていた。

「軍中の首注文は坊主・比丘尼が付けるものではない。よう目を見開いて付けんか！」

そう怒鳴られても、祐筆にすれば迷惑な話であつたらう。

「私は千里眼は持ち合わせませぬ。この場に居ながら先陣の様子を見分けられるわけがないではありませんか。一番に首を持って来れば一番首と書き、二番に持って来れば二番首と付けるだけのことです」

それを聞いた源次郎は　よほど腹が立つたのであろう　祐筆の筆を奪い取り、それで祐筆の顔面をしたたかに打ち、さらにその男を仰向けに突き倒した。哀れなのはその祐筆で、泣きつ面が筆の墨と鼻血に塗れて珍妙な顔になり、それを見た周囲の者たちからさんざんに笑われた。

源次郎にしてみれば、戦場で汗もかかぬ祐筆風情が、命のやり取りをして功名を挙げてきた武士に対して篤い礼を示さず、その働きを労（ねぎ）うこともせず、あまつさえ口先で言い負かそうとしたその態度が、腹に据えかねたのであろう。

それを間近で見ていた元就も、苦笑せざるを得ない。

大将である元就は、敵の首を獲って個人的な武勇を誇らねばなら

ない立場ではないから、大局的な合戦の勝敗より個人の功名に必死な武者たちの行動は愉快でなく、本音を言えば「そんなことより早く敵陣を破れ」と叫びたかったが、武者の働きを見定めて恩賞を沙汰するのが大将の務めであることも知っている。ことに元就は大将であるとはいえその立場は多治比の分家に過ぎず、毛利本家の武者たちの主人であるわけではないから、彼らの自尊心には過剰なまでに配慮せねばならない。

「源次郎、そう腹を立てるな。各々の手柄は私がしかと見届けておる。異論があれば、後にきちんと詮議を致す。が、今は論争の暇はない。武田の加勢が来ぬうちに、一刻も早う敵陣を切り崩されよ」

懇ろに諭して、源次郎を再び戦場に送り出した。

元就にしてみれば、毛利の武威を誇示するためにも、この合戦で確かな戦功が欲しい。

「すでに吉川の加勢が来ておるぞ！ 吉川に民部少輔（熊谷元直）の首を渡しては無念である！ 何としても毛利の手で民部少輔の首を獲れ！」

帰って来る武者たちを大声で鼓舞し、再び戦場へと嗾け続けた。

その頃

重蔵は、だるくなった腕で懸命に弓を引き続けていた。その背後には空になった矢櫃が三つも転がっている。

「あとしばらくの辛抱じゃ！ 武田のお屋形の軍勢はもうすぐそこまで来ておるぞ！ あとしばらくだけ支えれば、我らの勝利は疑いない！」

孫次郎は何度もそう叫び、家来たちを励ましつつ奮戦を続けている。

開戦からすでに二時間以上が過ぎ、さすがに矢が寡すくなくなってきた。重蔵は弓を槍に持ち替え、柵に取り付く敵兵を何人も土塁の下へと突き落とした。

遅い……！

疲労と共に、焦りがじりじりと深くなってゆく。

夜はすでに白々と明けた。武田本陣へは何度も使番の武者が走っているはずだ。武田元繁にその気があれば、とうの昔に武田の大軍が霧の中から現れていなければならぬのに、いつまで待ってもその気配がないのはどういうことか。

武田の本陣で何事か起こったか。

そうとでも考えなければ道理が立たない。

戦場の喧騒に混じって、

「東の柵が破られたぞ！」

という声が遠くで聞こえた。

水落直綱が手兵を率いて右翼へ走り、どうにか敵を斬り防いでいるらしい。大将の熊谷元直自身が旗本を率いて防戦に参加している有様で、熊谷方はまさに手一杯である。

武田のお屋形は何をしておるのだ！

重蔵だけでなく、熊谷軍の誰もが心中でそう叫んでいたであろう。薄く霧もやってはいるが、辺りが明るくなって視界が開けたため、河原に参集する敵兵が見渡せるようになった。敵は吉川氏の援軍が参戦しており、総勢は千五六百もいるであろう。戦前に予想していたよりは寡すくないが、死傷者が増えた熊谷軍は戦える者がすでに三百を割り込んでいるから、五倍以上の大軍と戦っている勘定である。毛利方は兵力にさらなる余裕ができ、防備が手薄なところを狙って兵

を繰り込んで来る。当然、熊谷方はその防戦に振り回されざるを得ない。

そういつまでも保たんぞ……！

熊谷の兵がいかに頸くびいと言っても限界はあり、これでは鬪死する前に疲労で押しつぶされてしまうであろう。

そんなことを想いながら、ふと戦場を遠望した重蔵は、血が凍った。

まずい。

毛利軍が、いったん退いて休んだ兵を河原の土手で再編している。あの三、四百の兵が新手となって押し寄せて来れば、さすがに支えきれまい。あれが敵の本陣であり、馬上の将が多治比元就に違いない。兜に輝く三鍬形みつくわがたの前立てに見覚えがある。

その光景は、熊谷陣の中央で兵を指揮していた熊谷元直の目にも入っていた。

「あれが敵の大将、多治比の元就ぞ！ この方より打って出て、一息にあの首を獲れ！」

と叫んだ元直は、すでに自軍の敗北を悟っている。

元直が有田の武田本陣へと走らせた使番の武者は、四人とも未だに戻って来ない。武田元繁に裏切られたとは思わぬが、何かしら援軍に駆けつけられぬ事態が発生しているのである。武田軍が来ないとなれば、この中井手の合戦は熊谷氏が主体の戦いであり、武田軍の戦いの一部ではない。熊谷には熊谷の作法があり、熊谷の意地がある、というのが元直の自負であった。

主君を守って奮戦していた水落直綱が、元直の鎧の袖を掴んで怒鳴るように言った。

「なりませぬ！ 甲斐なき討ち死になぞなさいますな！ この場はいったん退き、武田のお屋形の軍勢と一手になって再度の一戦をな

されませ！」

水落から言わせれば、熊谷の大將ほどの者がここで討ち死にするのはどう考えても馬鹿げている。今なら大將を戦場から落とすことも不可能ではなく、兵も少なからず生き長らえることができるであろう。武田の本軍に駆け込みさえすれば、あの敵ともう一度戦うことができるのである。たとえここで一敗地に塗れても、最後に勝てば良いではないか。

「ぬかすな、源允！」

元直は漢臭い顔で笑った。

「我が先祖・次郎直実以来、熊谷の大將が敵に後ろを見せたためではないわ！ 毛利なんぞに陣を切り崩され、多くの郎党どもを討ち死にさせて、何の面目あつて生き長らえようか！」

この男は、すでに死を決していたのであろう。己が死ぬことによつて、熊谷軍を捨て殺しにした武田元繁に対して「恥」という煙毒を吐き掛けてやる気であつたと言つてもいい。

「幸いにも毛利の大將があれに見えるわ。わしはあの孺子と刺し違える！」

それが熊谷の武士の死に様よ、と主人に言われれば、家来とすれば是も非もない。

「しかと承つた！」

水落直綱は旗本と傍にいた数十人の兵をまとめ、元直を中心に一

塊になつて陣地から打つて出た。

毛利と吉川の軍兵が、手柄を求めてこれに殺到する。

熊谷元直は自ら槍を振るい、群がる敵兵を槍で突き伏せ、その柄で殴り倒し、鬼神の如き奮戦を見せた。さすがに熊谷の大將であり、その武勇は並みの武者では齒が立つものではない。これを守る元直の旗本も一騎当千の頸兵揃いであり、雑兵などは相手にもならない。熊谷の一団は、激流を溯さかのぼる小船に似ていた。群がり寄せ敵兵を押しつけるように進み、又打川を蹴立てて越え、土手を駆け下りた毛利軍の本陣の兵とぶつかった。

が、その時である。

熊谷元直が内兜に矢を受け、馬から逆さまに転げ落ちたのだ。

「殿！」

矢は元直の頬骨を貫き、深々と突き刺さっていた。即死ではないが、瀕死の重傷であることに違いはない。

熊谷の兵たちは倒れる主人を囲んで足を止め、絶望的な戦いを演じた。圧倒的な兵力の前に磨り潰されるようにして次々と討たれてゆく。ついに吉川軍の宮庄経友が助けぬ熊谷元直に駆け寄り、その首を落として太刀に突き刺し、

「当陣の大將、熊谷 次郎三郎 元直をば、宮庄 下野守 経友が討ち取つたり！」

と叫びをあげた。

吉川軍が歓声を上げ、毛利軍からは歓声と共に無念のため息が漏れた。

毛利軍に抜け駆けされた吉川軍の兵たちにすれば、

「してやつたり！」

と叫びたい気持ちであつたらう。
逆に毛利軍の兵たちは、

「やられた・・・！」

と齒噛みしたに違いない。

「情けなし、主君あまじに死に遅れたぞ！」

「こうなれば何のために命を惜しもうぞ！」

水落直綱をはじめ、大坪孫四郎、細迫ほそきこ弥七、桐原与七朗などといった生き残った武者たち三十数人は、首のない主人の遺骸を守つて戦い、多くの敵兵を道連れにしてその場で鬪死した。数十本の矢を浴び、ズタズタに斬られても倒れるまで戦い続けた熊谷の兵の気迫は鬼気迫るものがあり、毛利・吉川の兵たちを戦慄させた。

宮庄経友の叫び声は戦場の喧騒に紛れ、陣の西端で戦い続けている重蔵の耳には届かなかつたが、熊谷軍の中央の兵が打つて出た事と、それが壊滅したことはもちろん見えている。

毛利・吉川の兵の歓声が大気を振るわせた時、熊谷軍の兵たちは熊谷元直の戦死を直感した。

「孫次郎殿、もはやこれまで！ はや落ちられよ！」

重蔵が叫ぶと、

「馬鹿な！」

孫次郎は重蔵を睨みつけ、怒声を放った。

「殿までが討たれ、何の面目あつて家来のわしが生き長らえようか！ 熊谷の侍でないおぬしは好きに落ちよ！ わしはこの場で死ぬ！」

すでに孫次郎は怒気が突き抜け、平常心を失い切っている。

重蔵は孫次郎に顔を近づけ、その耳に吹き込むように大声で怒鳴った。

「それが熊谷の武士の忠義か！」

孫次郎の両腕を掴み、前後に激しく揺さぶった。

「おのれは民部少輔さまお一人に仕えておるのか！ 熊谷の家に仕えておるのか！ それを考えよ！ 民部少輔さまが討ち死になさつた今、おのれの主君は、可部の城におわす若君ではないか！ まだ幼き若君をお援けせねばならぬとは思わぬのか！ おのれ勝手に死ぬが主家への忠義か！」

重蔵の言葉は、孫次郎の深いところを抉った。

「民部少輔さまお一人に仕えておつたと言うなら、止めはせぬ！ この場で追い腹切つて死ぬ！ わしが介錯してやる！」

逆上してしまつた武士の心を沈静するには、これほど激烈な言葉が必要であるということを、重蔵は心得ていた。

「若君……！」

絞り出すような声で孫次郎が呟いた。

「生き恥は、主君あまじのために忍べ。幼くして父を亡くした若君の哀しみを想えば、忍べぬということがあるか」

「おぬしの申す通りじゃ。わしが間違えておった……」

その頬には滂沱ぼっただの涙が流れていた。

熊谷元直の旗本が壊滅したことを受け、生き残った熊谷家の兵たちは四散して逃げ去り始めている。多くの者が陣の背後の山を目指して走っているが、陣地の東側に居た者は、戦場を東から迂回し、壬生城みぶを目指したという例も少なくない。

重蔵たちは陣地の西端にいる。川筋に沿って南へ走るしかないであろう。

「この場は退く！ それぞれ有田の武田のお屋形おやがたの軍を目指して駆けよ！」

涙を払った孫次郎は、生き残った二十数人の家来を集め、そう宣した。

今なら、まだどうにか逃げ切れる。

というのが重蔵の直感である。

毛利・吉川軍の将たちは、熊谷元直を討ったことでこの合戦は終了と考え、次の武田本軍との戦いに意識を移しているであろう。敗兵の追撃に時間を割いている余裕はあるまい。幸い霧も出ている。敵の視界から隠れてしまえば、さほどの深追いには遭わぬに違いない。

目立つ馬も捨て、重蔵たちは全員が徒立ちかちで駆けた。

川筋は湿地が多いが、このあたりの地形は何度も調べて熟知して

いる。一行は川辺の葦あしやスキに隠れるようにして南へ走り、浅瀬を選んで冠川を越えようとした。

!?

矢が風を切る音を聞いた、と思う間もなく、数人の雑兵が矢を受け、二人が倒れた。霧に霞む川筋の草むらから十数本の矢が飛んで来たらしい。そう気付いた時には、二十人ばかりの武者が声も立てずに草むらから駆け出し、こちらに向かって来る。

伏兵だと・・・!?

落ち武者狩りの土匪どひではない。なぜこんなところに敵がいるのか、考えている暇いとまもなく、一行はそのまま走って川を越え、霧に隠れるように逃げた。逃げ遅れた数人はそのまま首を獲られたに違いないが、構っている余裕はない。

冠川を越えれば、辺りは枯れた田畑と荒野である。霧さえ晴れば、視界は広く利く。西の有田の山並みの南側に武田の大軍が布陣しているはずであり、距離はほんの十数町に過ぎない。

南西へしばらく走ると、乳白色に霞む遠景の中に無数の人影と旗が見えた。

武田の軍がすでにここまで来ておったのか。

一行の誰もがそう思い、安堵の息をついた。

が、虫が報せる、ということはある。

「孫次郎殿、あちらへ!」

足を止めた重蔵が小声で叫び、孫次郎たちを南へと走らせたのは、戦場の勘と言うしかない。

霞む視界の中で徐々に明瞭になってゆく軍兵たちの影は、こちらに殺到して来る。その旗の紋は「武田菱」ではなく、「一文字三星」!

馬鹿な・・・!

こんなところに毛利の軍勢が展開しているはずがない。

はずがないのだが
現実に目の前にそれを突きつけられ、重蔵は愕然とした。

第二章 西の桶狭間 有田中井手の合戦（五）

二十に近い敵影が指呼の間に迫っていることを知り、重蔵は逃げることを諦めた。ここで敵に背中を見せれば後ろから無数の飛矢を浴びるに違いなく、たちまちのうちに射殺されてしまつてである。

「兜首が見えたぞ！ あれに逃げてゆくわ！」

「鳩の指物は熊谷の武者に間違いないぞ！」

「逃がすな！ 余さず討ち取れ！」

敵兵たちが口々に叫んだ。

どうせ逃げられぬなら、せめて孫次郎殿が遁のがれる時を稼ぐか。重蔵はとっさにそう肚をくくつた。

ただし、

ここで敵を一人でも殺せば、わしはなぶり殺しにされる。ということも心得ている。

逃げられぬ以上、重蔵が生き延びる道はもはやひとつしか残っていない。

「まずはお前からじゃ！」

毛利軍の雑兵が二人、駆け寄る勢いをそのままに重蔵に突きかかって来た。

「待て待て待て！」

迫り来る二本の槍。重蔵はその一本の穂を引き抜いた太刀で斬り

飛ばし、もう一本を脇下に流して柄を掴んだ。相手が慌てて槍を引こつとするタイミングに合わせ、その槍を思いつき押し返してやる。相手は勢い良く仰向けにひっくり返った。

槍を奪った重蔵は、すでに太刀を鞘に収めている。横をすり抜けて進もうとした兵の足を引っ払い、さらに向かつて来る二人の兵を石突で突き倒した。ほとんど一瞬の早業である。

「待てと申しておるに、判らぬか！」

この凄まじい働きを目の当たりにした武者たちは、さすがに重蔵がただの雑兵でないことに気付いた。剛勇の武人の出現は、戦場の雰囲気を変える。武者たちは目が覚めたように慎重になり、重蔵を半円に包囲した。

長く戦場で暮らして来ただけに、重蔵には戦場ずれた図太さがある。

捕虜（いじと）になるのは仕方がないにしても、殺されるのは御免だな。重蔵は熊谷氏の家来ではなく、歴とした武士というよりは雇われ足軽のような身分であり、いわば雑兵に過ぎない。その首を獲ったところで大した手柄にはならず、毛利氏にとつてどうしても必要な首というわけでもないであろう。敵兵を率いる将の器量次第だが、上手く立ち回れば、あるいは殺されずに済むのではないか。もし助かる道があるとすれば、それしかない。

片手で顎紐を解き、鉄笠を投げ捨てた重蔵は、あえて顔を見せて笑みを作った。

「中井手の合戦（いぐさ）の勝敗は、すでに決した。民部少輔殿（みんぶのしょうぶ）は討たれ、熊谷の兵は逃がっている。逃げる敵を討つたとて、さしたる手柄にもなるまい。毛利の武士は敦盛（あつもり）の首を欲するのか。毛利ではそれが名誉（ほまれ）になるのか？」

と武者たちに穏やかに語り掛ける。敵の鋭鋒を柔らかく逸らすには、言葉をもつてするのが良い。何より時間も稼げる。

「そもそも敦盛を討つたは熊谷の先祖ではないか！ その家の者が敦盛のように討たれるは、因果応報じゃ！」

武者の一人が喚き返した。

武者たちは重蔵に油断なく槍を向け、隙あらば突きかかろうとしているが、重蔵の余裕を凄みと感じたのか、真つ先に進み出ることは躊躇した。左右に目をやりながら、無言で順番を譲り合っている。

「なるほど因果応報　するとそなたらが敦盛の首を討てば、そなたらの主人は、熊谷直実のように武士を捨て、一生を悔いて過ごすことになる。そなたらは主人を仏門に入りたいか」

「足軽風情が偉そうにほざくな！」

武者たちが猛り立った。

「足軽、足軽と言うてくれるな。こんな格好だが、これでも身は上北面・秦　出羽守の末裔だ。氏も素性もある」

重蔵にとつてはすでに捨てた姓だが、こういう時は己を高く持つるに限る。この時代、まだ人々は血の尊貴に対する信仰を濃厚に持っており、都会の京よりむしろ地方においてその傾向が強い。

「『北面の武士』と言えば、田舎者でもその名を聞いたことくらいはあるう。わしは熊谷の侍ではないが、いま逃げて行った男にはいささか借りがある。逃がしてやってはくれまいか」

と重蔵が笑いかけると、その武芸の冴えを目の当たりにした武者たちは気圧されたように半歩退いた。

騒ぎに気付いた周囲の兵が集まり始めている。武者の人垣がさらに増え、重蔵の背後にまで敵兵が回った。

「わたただ一人をこれほどの人数で囲んでおきながら、誰一人として名乗って槍を付けようとする者がないとは、驚いた。毛利の武士には人がないのか」

武士らしく正々堂々と戦う者はおらんのか、という挑発は、数に任せて打ちかかるのは卑怯だと言っているのと同じで、重蔵が我が身を守るための方便である。表情とは裏腹に重蔵に余裕はまったくなく、生死のぎりぎりの境で駆け引きをしている。

「憎き雑言を並べるものよ！」

人垣から一人の若武者が進み出た。

「我は江家の裔孫、福原広世が末孫、福原俊秋！」

高らかに名乗りを上げた若者は、毛利氏の長老・福原広俊の孫であり、福原貞俊の三男坊である。年はまだ十代で、血気の盛りだ。

「おお、良き若武者と見えたり」

福原俊秋は槍を従者に預け、すらりと太刀を抜いた。重蔵の槍を手強しと見て、あえてそうしたのかもしれないが、これはかえって失敗だった。当然、重蔵も槍を捨て、太刀打ちの勝負となったが、剣の腕で重蔵に敵う者などそうはいない。俊秋はたちまち籠手を打

たれ、その太刀を叩き落とされた。

峰で打たれた　つまり手加減されたという事実が、若者をさらに激昂させた。

「組まんず！」

怒気を漲らせて挑みかかって来たが、

冗談ではない。

組み討ちなどになったら、たとえ重蔵がこの若者を組み伏せたとしても、その瞬間、周囲の武者たちが若者を救うために重蔵を突き殺すであろう。

素早く飛び下がった重蔵は捨てた槍を拾い、その石突で俊秋をあしらうように突き倒した。

「おのれ、卑怯な！」

地に転がされた俊秋は羞恥で顔を真っ赤にして怒鳴った。が、重蔵にすれば生き死にが賭かっている。なりふり構ってなぞいられない。

俊秋の怒りに煽られ、周囲の武者たちがさらに殺気立った。四方から一斉に懸かられば、いかに重蔵とてどうしようもない。

なんとかせねばと思った時、人垣の背後に十騎ばかりの武者が近付いて来るのが見えた。

先頭の鹿毛かげの立派な馬に跨った若者が、一際目立つ武者ぶりをしている。細面だが、肌はよく陽に焼けており、狼を思わせるような精悍な顔立ちである。緋威ひゑしの見事な大鎧たいに身を包み、兜の前立ては細長い金の鍬形くわがた。弓手に重藤の弓を握っている。

「わしがその気であつたなら、そなたらのうち七、八人はすでに死んでおるぞ！　これから武田のお屋形の大軍と戦うのであろう！」

落ち武者狩りなぞに心血を注いでおる場合か！」

大将まで聞こえよ、と念じ、重蔵は大声で怒鳴った。

「何事だ！」

天に抜けるような大声を放ったのは、馬上の若武者である。

武者の一人が慌てて駆け寄り、早口で事情を説明する。若武者はそれを聞く風でもなく、そのまま人垣を割って進み、重蔵を馬上から見下ろした。

重蔵は構えを解き、槍を立てた姿で昂然と胸を張った。戦意がない、というサインと言っている。

「名は」

「上北面・秦はた 出羽守が末孫はつそん、秦 重蔵 武元たけもと！」

「熊谷の侍か」

「さにあらず。兵法の道に迷い、師とするに足る人物を探して浪々とした末に、安芸に流れ着いた者とお思いくだされよ」

「兵法の道 芸者（武芸者）か」

「北面の武士は御所を守るが務め。我が秦家は、義経流の兵法を家伝として参りました。我はそれを父祖から受け継いだまで」

「ほう」

義経流の兵法、という言葉に、若者の興味が動いたらしい。

が、その表情の揺れは一瞬で消えた。

「中井手の陣が落ち、民部少輔が討ち死にしたというのはまことか」

「まことでござる。民部少輔殿が死なぬうちは、熊谷の兵は決して崩れませなんだ。熊谷の兵が逃げているということが、その証拠あかしでござる」

「そうか……」

と呟いて、この若者はなぜか苦笑したが、すぐに気を取り直したらしい。

「我らの役目は終わった。これより兄者の本軍と一手になる。全軍に、速やかに中井手へ戻るよう伝えよ。川筋に配った者たちへも使番を走らせよ」

左右の武者たちに大声でそう命じた。

若者はそれつきり重蔵を無視し、馬首を返して進み始めたから、これには重蔵の方が慌てた。

「御大将とお見受けしました。お名をお聞かせ願いたい！」

馬上で振り返った若者は、昇ったばかりの朝日を受け、輝いている。その眩い姿が重蔵にはなぜか武神のように見えた。

「毛利の四郎 元綱」

その名には聞き覚えがある。

相合あいあひの四郎。

先代・毛利興元おきもとの舎弟で、今義経と渾名あだなされる男ではなかったか。

「四郎殿、命をお助けくださるならば、降り申す」

「好きにしる」

その素っ気ない返事が、重蔵をさらに驚かせた。

「四郎さま、この者、なかなかの手錬てだれですぞ！」

「縄を打っておかねば、お味方にいかなる災厄をもたらさぬとも限りませぬ！」

周囲の武者たちが言い立てたが、

「放っておけ。俺に従いたければ従えばよく、逃散したくばすればよい」

元綱は面倒そうに言い捨て、馬腹を蹴った。

ここに味方の死骸でも転がっていたなら殺さねばならぬところだが、見たところ大きな手傷を負った者もなさそうである。この武者の言葉の通り、手加減してもらったのだろう。もしこの男を捕縛して連れてゆけば、その事にも人手と手間が取られる。元綱にすれば、そんな馬鹿げたことに割くような余分な人数はなく、それをするくらいなら男を殺してしまう方がマシである。が、この武芸の達者を殺そうとすれば、味方にも数人の死傷者が出るに違いなく、それこそ無駄でしかない。今は、武田本軍との戦いに向けて、寸刻を争う時なのである。

些事に構っている場合か。

というのが正直なところであった。

が、重蔵の心は、この言葉で逆に縛られた。

捕縛され、捕虜として扱ってくれば、重蔵は逃げ出す機会を虎視眈々と窺ったであろう。しかし、好きにしろと言われてしまうと不思議と黙って去る気になれない。孫次郎から受けた恩を返すために自分の命を賭けたことでも解る通り、重蔵には妙に律儀なところがある。借りをそのままにしておけない性格と言つてもいい。その重蔵が、命を救われるという巨大な恩を受けてしまえば、それを返さずに済ませられるものではない。

重蔵を困んでいた武者たちは、ある者は重蔵を憎々しげに睨み、ある者は罵声を浴びせかけるなどして、次々と大将を追つて走り始めた。

「命冥いのちみよしが加な奴よ！」

重蔵に槍を奪われた雑兵が、重蔵の手にあつた槍をひつたくるよ
うに奪い返した。

「四郎さまがあのように申された上は、おぬしの首を獲つたところで
手柄にはしてもらえぬ」

ほとんど呆然としていた重蔵は、思わずその男に尋ねた。

「あの殿は、ああいうお人柄か・・・？」

「ああ、身分の貴賤を問わず、わしらのような物の数にも入らぬ雑
兵にまでお情けを掛けてくださる、慈悲の心の深いお方じゃ。じゃ
が、戦となれば、鬼神の如きお働きをなさるぞ。他国のことは知ら
ぬが、この安芸では、あれほどの大将は二人とおるまい」

「古えいにしへの義経に、優るとも劣らぬ、か・・・」

「おう、聞いておるか。今義経の異名は伊達ではないわい」

重蔵は、全身が総毛立つような興奮を覚えた。

面白い。

この瞬間から、重蔵の運命は大きく変わることになる。

なぜ元綱が中井手の戦場から十町ばかりも離れた場所に居たのか

それを語るには、時間を半日ばかり遡らねばならない。

場面は、多治比たじいの猿掛城の広間である。毛利の諸将が顔を揃え、武田の大軍とどう戦うべきか、激論が交わされていた。

「中井手の熊谷は問題ではない」

議論の中心にいたのは、誰あろう元綱である。

「吉川の兵も合わせれば味方は二千を越える。民部少輔みんぶのしょうぶは侮つてはならぬ武将だが、その兵はせいぜい五、六百に過ぎぬ。明朝の奇襲が成功すればひとたまりもないだろう。たとえ敵が我らの奇襲に気付き、備えておったとしても、中井手の陣を抜くこと自体はそれほど難しくないと見る」

そこで元綱は諸将の反応を計るように一同の顔をぐるりと見回した。

「むしろ問題なのは、武田の本軍がどう動くか、という事だ。我らが中井手を攻め落とせぬうちにこれが援軍に来れば、我らは必ず負ける」

その観測はもつともであり、誰からも異論は出ない。

「で、四郎はどうすべきだと申すのか」

上座に座した多治比元就が、続きを促した。

「なに、難しい話ではない。緒戦に勝つには、要するに武田の本軍が動けぬようにすればよいのだ」

そもそも中井手の砦は武田軍が仕掛けた罠であり、これに喰らいついた敵を討つというのが武田方の軍略であろう。この罠を噛み破るには、武田本軍の動きを封じ、熊谷軍と武田本軍の連携を断ち、熊谷軍のみを先に撃破すべし、というのが元綱の主張である。

「そこで、俺に五百ばかりの兵を預けてもらいたい」

「わずか五百の兵で、五千の武田を足止めすると申されるのか」

志道広良が声を上げた。諸将も一様に難しい顔をしている。

「何も五百の兵で武田本軍と戦うと申しておるわけではない。敵を動けぬようにすると言っただけだ」

「どうするといふのだ？」

元就が低い声で問いを重ねた。

「兄者は『孫子』は読んだか？」

元綱は逆に兄に尋ね返した。

「ん？ ああ、一通りは目を通したが」

と言ったのは元就の謙遜で、実は一通りどころではない。

元綱はそれを知らないが、元就は多くの漢籍に精通し、知識の量で言えば元綱を遙かに上回っているのである。「孫子」はもともと著名な兵法書と言ってよく、元就はそれを繰り返し何度も読み、書写までし、そのほとんどを諳んじていた。

が、元就はそういうことを誇りがましく口にはしない。

「一通りは目を通したが」

と穏やかに返しただけである。

「兵は詭道なり、とある。兵は詐を以つて立つ、とも書いてあったな。いずれ合戦は騙し合いということだ」

元綱が言った。

「そして敵を騙すには、まず味方を欺かねばならぬ」

その類には、悪戯を考え付いた悪童のような笑みが浮んでいる。

「毛利・吉川・高橋が兵を挙げれば五、六千にはなるう。国人一揆の我ら三者が中井手で軍を集結し、一部の兵で熊谷の軍を押さえ、本軍はそのまま有田へと進み、武田本軍と決戦する」と、兵たちに伝える。もちろん嘘だがな」

毛利軍の雑兵の中には武田方の謀者が当然入り込んでいるはずだ。

この偽情報を武田方が掴めば、毛利方の兵力を過大に想像するだろう、と元綱は続けた。

「刑部少輔（武田元繁）が恐れるのは何か、ということだ。刑部少輔は毛利を恐れず、吉川を恐れぬだろうが、毛利・吉川・高橋の兵が一手になれば、武田軍を数で上回るということくらいは承知しているだろう。国人一揆の側が兵を挙（こぞ）ることは、恐れているに違いない」

武田元繁にとって、今度の有田の合戦は、毛利氏との戦い、吉川氏との戦いというよりは、守護の自分に従わない国人一揆勢力との戦いであり、さらに言えばその背後にいる大内義興（よしのき）から安芸の支配を取り戻すための戦いなのである。吉川氏の有田城を攻撃すれば、最悪の場合、毛利・吉川・高橋の連合軍との合戦になるということも、当然視野に入っているであろう。実際、高橋氏は有田へ兵を出さないわけだが、そんな国人一揆側の事情は、高橋氏が敵と通じているというようなことでもない限り、武田元繁が知るはずもない。

「このことを逆手に取るのだ。兵たちには毛利の旗だけでなく高橋や吉川の旗も持たせ、軍を鶴翼に薄く横に広げ、有田へ進軍する振りをする。昼間にこれは通用せぬが、夜と早暁なら別だ。朝霧が晴れるまでは視界が利かぬからな。敵方は、我らの兵数を見極めることができず、対処に迷うだろう」

この軍の役目はそれだけではない　と、元綱は続けた。

「我らが中井手の陣を攻めれば、民部少輔（熊谷元直）は援軍を求め、急使を有田へと走らせるはずだ。また、有田の武田本陣からは必ず物見が出て、敵情を確かめようとするであろう。これらを討ち、中井手と有田の連絡を断つ。要は、刑部少輔（武田元繁）に目隠し

をすと思えばよい。夜が明け、霧が晴れるまで、中井手の様子も我らの動きも判らぬようにしてやるわけだ」

人は視界を封じられると想像が逞しくなる。将も士もそれは変わらないが、将たる者は、常に最悪の状況まで視野に入れて軍略を巡らさねばならない。国人一揆の大軍が有田に向かってしていると武田元繁に思い込ませ、それがいつ闇の中、霧の中から現れるかもしれないと想像させ、有田で決戦になると覚悟させれば、中井手の救援どころではなくなるであろう。武田軍は有田山の南の丘陵に陣を据えている。迎撃に有利な高所に陣取っているだけに、その場から軽々に動けなくなるに違いない。武田元繁は、敵軍の規模と動きを確実に見極めるまでは、自軍の備えを固めて待つ、という選択をせざるを得なくなる。

「ほお……」

「なるほど……」

諸将からため息のような声が漏れた。多くは元綱の吐く言葉に感心したらしい。

「兵は詐を以って立ち、利を以って動き、分合を以って変を為すなりか……」

元就は呟き、腕を組んで考え込んだ。

敵にこちらの全容を掴ませず、有利な状況を作り出すべく手を打ち、兵力の分散と集中を巧みに用いて状況を変化させることが、軍略の要諦である、と唐土の軍略家は教えている。戦に勝つとは廟算において勝つということであり、勝つべくして勝つということであればならぬであろう。

武田元繁と熊谷元直の連絡は、確かに断つべきである。それをするには、冠川の川筋に沿って伏兵を埋め、熊谷陣から出るであろう連絡將校を討つのが適当だが、その網をすり抜ける場合もあり得る。また、武田本軍の物見が駆け回って周囲の状況や中井手の様子を知ろうとすることも間違いない。有田と中井手の間に軍兵を展開させて、通行を物理的に阻むというのは確かに有効ではある。

が、最悪の場合、その軍は武田本軍から攻撃を受けることになるのではないか

元就の思考は、志道広良があげた反論の声によって遮られた。

「軍議の席ゆえ、憚ることなくまっすぐに申し上げる。相合殿の申される事は、穴が多い。博打のようなものですぞ。明日、霧にならぬかもしれぬ。武田軍が夜の闇も霧も苦にせず、ただちに中井手に向けて動き出すかもしれぬ。そうなった時、どうなさるおつもりか」

広良は常に慎重な常識家で、無理を嫌う。戦場経験にも不足はなく、個人的な功名に恬淡てんたんとしているために大功をあげたことはないが、これまで戦場で大きなしくじりを演じたこともない。先代・興元もとが幼い頃からこれを輔たすけ、毛利家の舵を執とつて来た名臣と呼ぶべき男である。

その広良から言わせれば、気象を軍略に織り込むのはいかにも危うい。霧が出れば確かに有田から中井手は見通せぬようになるだろうが、明日の朝、必ず霧が立つという保証はないのである。もし霧にならなければ、朝靄あさげが晴れるだけで視界は通る。毛利方の兵が寡少である事はすぐさま看破され、武田軍は猛然と中井手に向けて進軍するであろう。毛利軍は分割した兵を各個に潰されることになる。

「今日は雲ひとつない晴天だ。風もほとんどない。天気は今夜も崩れぬであろう。雲がないゆえ明朝は必ず冷え込み、川から霧が立つ。百姓どもも同じ事を申ししていた。霧がいつごろ晴れるかまでは判ら

ぬが、中井手は低い湿地だ。十町、二十町が見渡せるようになるには、早くとも夜明けから半刻ほどは掛かる。霧が濃ければ一刻は見えぬ」

そう言い切る元綱も大胆ではある。実際に現地の様子を我が目で見て知っているという自信が、それを言わせるのである。

が、広良は引き下がらない。

「危ない橋と断ぜざるを得ませぬ。我らは寡兵、その軍をさらに分けるというのは、軍略上の禁忌でござる」

「寡兵であるがゆえに、策を弄さねばならぬのではないか。寡兵の上に無策では、求めて刑部少輔に勝たせてやるようなものだ」

元綱は声に力を込めた。

「確かに、合戦はすべてが事前の思惑通りに運ぶものではない。それは当たり前のことだ。思惑通りにならぬということまで算術に入れて策を巡らすのが、武略というものである」

実際問題として、武田軍が即座に動くという可能性も決して低くはない。五千のうち、たとえば千ばかりの兵を大物見（威力偵察）に出すかもしれないし、あるいは軍を二分し、二千、三千の兵を中井手の援軍に差し向けて来るかもしれない。全軍で打って出るといふ事もないわけではないだろう。こればかりは敵将・武田元繁の決断次第で、事前にそれを確実に予見することはできない。また、毛利軍が中井手の陣を抜くのに手間取り、そのまま霧が晴れてしまうことだってあり得る。そうなれば目隠しも何もあつたものではなく、この策はあっさりと見破られる。敵は中井手へと猛進し始めるであろう。と、元綱は怒涛のようにまくし立てた。

「それでも、我らが中井手の陣を抜くまでは、武田本軍を必ず足止めせねばならぬ。つまり、その時の状況や敵の打つ手に応じ、敵を討ち破つて追い払うか、後拒こうきょを行いなから退くか、まさに臨機応変の働きが求められる。この役はそれほど難しいということだ。なればこそ、俺が将になると申している」

俺以外の誰がこの難役を担えるか。

と元綱は思っている。根拠は一切ないのだが、こと合戦に関しては、昔から自分でも不思議なほど自信がある。

そういう元綱の態度は、元就にとつても不思議であつた。

元綱は元就のひとつ年下で、未だ二十歳の若造に過ぎない。その武勇は衆に優れ、戦場での勳も抜群に良い、という評判を聞いてはいるが、元就は弟と戦場を共にしたことがなく、その異能を実見したことも実感したこともないのである。

今義経の異名は伊達ではない、ということか。

とりあえずそう理解しているが、元就自身に戦場経験がほとんどないために、弟の能力をどう評価すべきか解らない、というのが正直なところだつた。

「いやいや、なんとしてもという事なれば、その役はわしのような年寄りにお命じくだされ。相合殿を捨て駒に使い、討ち死にさせたとあつては、わしはあの世で悦叟院さまえそういん（弘元）にも秀岳院さましゅうがくいん（興元）にも申し訳が立たぬ」

と広良が言った。

武田本軍を足止めするための部隊は、全滅覚悟の死戦になる、というのが当然の見方である。元綱のような未来ある若者に相応しい役割ではなく、同じやるなら、五十に近い自分のような老将がそれを担うべきだと広良は思った。

元綱はこの良臣と押し問答することに飽き、

「総大将は兄者じゃ。兄者が決めてくれ」

そう言つて元就に決断を委ねた。

元就は腕を組んだまましばらく考えた。

志道広良に限らず、毛利家には老練な武将が多い。井上党の将たちはどれも勇猛だし、福原貞俊、桂広澄、渡辺勝すすむなども優れた将器を持つており、戦場経験にも不足はない。彼らにそれを命じることが簡単だが、

私や四郎が安全な場所であんまり安穩としているようでは、兵たちに決死の戦いを強いる資格がない。

と元就は思っている。

自重論を唱える重臣たちを抑え、毛利を武田氏との決戦に引き込んだのは、いわば元就と元綱なのである。自分たち二人がこの一戦に対する決死の覚悟を見せなければ、そもそも戦に乗り気でなかつた重臣たちの中には、

若造どもめ、主筋あなごというだけで主人あなご顔をし、我らを無理な戦に放り込み、無駄死にさせる気か。

と反感を覚える者がなくとも限らない。

君臣一体となり、将も雑兵も心をひとつにして戦わなければ、とても武田の大軍には勝てないであろう。この合戦に関しては、自分も弟も、先頭に立つて戦うべきなのだ。

「わかった」

元就は断を下した。

「刑部少輔を巧うまく謀たはかることができるとかどうかは別にしても、武田軍が加勢に来たならば、我らが中井手の陣を破るまでこれを防ぎ止め

ねばならない。四郎の申すように、この役は絶対に必要なものだ。それを四郎がやってくれると言うなら、私に異存はない」

「おお、ならば決まりだ」

元綱は我が膝を叩いた。

「四郎には、福原父子、赤川兄弟の兵を預ける」

長老の福原広俊は高齢のため郡山城の留守をしているが、子の貞俊が一党の百数十人を率い、貞俊の子である広俊、元勝、俊秋の三兄弟も揃って参陣している。貞俊は偉大な父に肖にて名将と言つてよく、機転と才覚に優れ、その用兵の柔軟さと粘り強さには定評がある。

赤川氏も毛利家中では有力な族党で、就秀なりひで、元保もとやす、元久という兄弟がそれぞれ一家を立てている。末弟の元久は二十代の元気者で武勇に優れ、三十代の就秀と元保は十五老臣に名を連ねる文武兼備の将である。赤川党三家の兵力をすべて合わせれば二百ほどにもなる。これに、毛利本家の足輕を加え、五百ばかりの別働隊を編成した。

「敵が大軍を發するようなら、決して無理はするな。速やかに退き、私の本軍と一手になれ」

元就が言つと、

「まあ、そのあたりは任せてもらおう」

元綱は不敵に笑つた。

最悪の場合、五百の兵で十倍の大軍を相手に戦わねばならなくなる、ということを知っている。そうなつた時は、まさに侍の

本懐だと思っていた。粘り強く遅滞戦闘を繰り返し、敵の進軍を遅らせ、中井手の毛利本軍が態勢を整えるなり逃げるなりするための時間を稼ぐつもりである。

「何があるかと無様な敗軍だけはせぬつもりだ。知り得た武田軍の様子は、逐次兄者に報せるようにする」

十月二十一日の夜半、毛利軍は猿掛城を出陣した。

多治比川に沿って肅々と西へ進み、津々羅山の南麓を突っ切り、可愛川筋えのに出る。

寒さは酒で紛らわせることができるが、隠密行動に灯火は使えない。山野は無明の闇であり、山に囲まれた谷状の道を月明かりのみを頼りに歩むのは困難を極めた。わずか二里半の距離を進むのに、実に二刻（四時間）以上を要した。

壬生みぶの手前まで来ると、山陰から抜け、平坦な平野に出る。又打川が可愛川に流れ込む合流点の近くで、元就は全軍を渡河させ、土手を降りて近くの林に軍兵を隠した。

驚いたことに、その直後、数町先の中井手の陣で無数の篝火が灯り、そこだけ昼のように明るくなった。

「さすが民部少輔みんぶのしょうぶ、防ぎに抜かりはないか」

元綱が感心したように声をあげた。

熊谷元直は百戦錬磨の武将である。こちらの動きはお見通しであったらしい。

「こうなれば奇襲も何もない。正面から堂々と戦うのみだな」

そう応えた元就は、覚悟を決めた。

毛利軍はここまで隠密行動を行っており、馬には嘶いななかぬように枚ばい

を噛ませ、武者の鎧の草摺りを縄で縛るなど、消音措置を施してある。元就は全軍にこれらの解除を命じ、松明を灯させ、戦闘準備をさせた。

言うまでもないが、元綱の一隊だけはそれを行わない。

「我らはこのまましばらく潜んでおく。兄者の本軍が戦を始めたら、戦場の後方を大回りに迂回して有田へ向かう」

「承知した」

言うなり、元就は口取りが曳いて来た馬に颯爽と跨った。

「民部少輔は必ず手強い戦をするぞ」

馬上の元就を見上げ、元綱がそう忠告した。

「心得ている。夜明けにはまだ早いが、吉川が来る前に仕掛ける」

「ほう」

その言葉は、元綱にはやや意外であった。

「毛利の一手で熊谷の陣を抜くというのか」

「それくらいのことができねば、とても武田の大軍には勝てまい」

「よう申された。その通りだ」

元綱は嬉しげに声を弾ませた。

元就の本軍が中井手の陣に攻め懸けるのを眺めた元綱は、率いる

部隊を出発させた。闇に紛れるようにしていったん北へ進み、中井手を大回りに迂回して南進し、又打川を越えて南西へと馬を向ける。有田山の数町東というあたりまで進むと、元綱は全軍に松明を灯させ、戦闘準備を命じた。五百の軍兵を五隊に分け、一隊を自ら率いて遊軍とし、三隊にはそれぞれ毛利の旗、吉川、高橋の紙旗を持たせてある。最後の一隊は百人をさらに五組に分け、冠川の川筋に五箇所、二十人ずつ伏兵として埋めた。

これで準備は万端整った。

三百の人数を鶴翼に薄く並べ、元綱自身はその後方に布陣し、有田へゆるゆると進軍してゆく。

あとは敵がどう動くか、である。何人もの物見を先行させ、武田軍の陣の様子を探らせた。

夜明けが近付くにつれ、やや霧が濃くなった。これも毛利方には天佑であった。

元綱にとつてある意味で誤算であったのは、敵将・武田元繁が、考えられる中でもっとも消極的な反応を示した、ということであるう。

熊谷元直から敵軍出現の一報を受けた武田元繁は、敵軍の詳報と戦況を知ろうとし、ただちに手元から物見を出した。

「休んでおる者どもを起こし、急ぎ戦支度をさせよ。各陣、油断無く堅固に備えを固めるよう諸將に申し伝えよ」

物見が帰るのを待つ間、元繁が取った措置というのは、具体的にはこれだけである。

「毛利の他に、吉川、高橋の旗も見えました！」

「敵は思いのほか多勢と見え、一軍はこの方へ向けて進軍しておる様子！」

松明を掲げた武者たちが次々と馳せ帰っては報告する。

さては毛利め、吉川、高橋と一手になり、熊谷の陣には押さえの兵を置いて、本軍はこの有田の陣へ押し寄せせる肚か。

そういう謀者の報告も元繁の耳に入っていた。あるいはその通りかもしれないと思った。

無論、さらに多くの物見を出して戦況を探り続けたが、暁闇が明けると薄い霧が立ち、視界が悪いということもあって、敵の総数はつきり掴めない。千にも足らぬという者もあれば、いやいや二千以上であるという者も居て、元繁は判断に迷った。

この間、中井手を守る熊谷元直は、武田本軍へ戦況を伝え、援軍を求めるための使者を四度も出している。が、これは一人も有田へ辿り着けなかった。このために武田元繁は中井手の様子を掴めず、さらに敵軍の詳細も知り得なかった。

武田元繁にとって確実な事実とは、敵の先鋒軍がすでに数町の距離まで接近しているという事と、その先鋒軍には毛利、吉川、高橋の旗が混在しているという事だけである。こうなると、その先鋒軍の背後にどれほどの兵力があるのか判らぬことには、迂闊に軍を動かせない。

あと半刻もすれば朝霧も消え、敵が見えるようになる。戦立てを決めるのはそれからだ。

と、元繁は判断を保留し続けた。

しかし、しばらく時が経っても、敵の先鋒軍は一向にこちらに攻め掛けて来る気配がない。

敵の狙いは、あるいは時間稼ぎか。

という事によろやく気付いた。

「敵は熊谷の陣ばかりを攻め、こちらには懸かって来ぬ。熊谷は小勢ゆえ、陣を捨てて逃げると思っておるのである。急ぎ馳せ向かって、加勢せよ」

辺坂道海入道、毛木民部大輔、筒瀬左衛門大夫の三将に八百の兵を授け、出陣するよう命じた。が、時すでに遅し。

ちようどその頃、中井手では熊谷元直が戦死し、毛利・吉川軍が高らかに勝ち鬨をあげていた。

その事を知った元綱は、苦笑せざるを得ない。

まるで働き場がなかったわ。

策がツボに嵌った、と言ってしまうえばそれまでだが、虎狼のごとく恐れられた武田元繁ともあるう者が、熊谷軍を捨て殺しにし、一兵も動かさないというのは、元綱にとっても予想外であった。

しかし、本当の戦いはここからだ。

気を取り直した元綱は、毛利本軍と一手になるべく、軍を素早く中井手へ転進させた。

第二章 西の桶狭間 有田中井手の合戦（六）

安芸・武田氏は、八幡太郎義家の弟である新羅三郎義光から発する甲斐源氏の名門である。かの武田信玄と同族と言えれば解りやすいかもしれない。

武田氏の本貫地は甲斐であるが、安芸と若狭にも守護代を置いて統治していたことが知られ、安芸・武田氏は「承久の乱」の後に武田信光が安芸の守護に補任されたのが初代であるという。守護職は武田氏が一貫して継いで来たわけではないが、三百年近い期間、安芸において勢力を培っていたことは間違いない。佐東郡の銀山城かなやまに拠り、近隣の国人たちを家臣化し、荘園・国衙領を押領するなどして力を蓄え、安芸中央部に根強い勢力を保持していた。

その武田氏の現当主である武田元繁もとしげは、陽によく焼けた肌と黒々とした立派な鬚鬚を持っている。中背だが肉厚な体軀は雄偉で、すでに五十代の半ばだが、年齢による衰えをまったく感じさせない精力漢である。この男が「刑部少輔ぎょうぶのしょうぶ」を私称していたのは、先祖である新羅三郎義光が、その晩年、刑部少輔の官職を得たと伝わるからであろう。

武田氏は、隣国・周防の大勢力である大内氏とは厳島神領家の帰属を巡って長く対立関係にあった。厳島は広島湾の海上交通の要であり、その対岸の廿日市の町はつかいちと合わせて交易の一大拠点である。厳島神領家を従属させることは巨大な交易利権を得ることと同義であり、武田氏と大内氏はそれを奪い合っていたと言っている。両者は元繁の代で和解し、元繁は大内義興よしのぶの上洛戦にも兵を率いて協力していたのだが、しかしやはり厳島の社領が欲しかったのである。厳島神領家の家督相続争いが起こるや、元繁は京から国許に戻って大内氏から離反し、神領家の内訌に介入して勢力を伸ばし、さらに出雲の強豪・尼子氏と結んで反大内の立場を明確にした。

これに驚いた大内義興が、毛利氏、吉川氏、小早川氏といった安

芸の国人領主たちに武田氏討伐を命じた、というのは先述した。京から帰国した毛利興元おきもと、吉川元経もとつねらは九家の豪族を糾合して国人一揆を成立させ、強大な武田氏に対抗したのである。

毛利興元はその人柄を大内義興から愛され、厚い信頼を受けていた。まだ年若い興元が国人一揆勢力の盟主的な存在となれたのは、大内義興の後ろ盾によるところが大きかったであろう。武田元繁にすれば、脅威とまでは言わぬとしても目障りな存在であったに違いない。

その毛利興元が病死したことが、この永正十四年（1517）の騒乱の契機になった。

毛利・吉川の勢力を叩くべく、大軍を発して北上した武田元繁は、先年奪われた有田城を囲み、熊谷元直に命じて中井手に陣城を築かせた。

中井手の陣の役割は、毛利・吉川軍の出戦を誘うと同時に、有田に陣取る武田本軍への奇襲を不可能にする、というのがその第一である。今回の場合、朝駆けを掛けて来た毛利軍を足止めし、その存在を武田本軍へと伝えた時点で、戦略的意義は十分に果たされたと言っている。

確かに、中井手に足止めした敵を武田本軍で討つというのが事前の作戦であり、元繁もそのつもりであったのだが、敵の規模や戦況によつては、武田本軍が中井手に駆けつけるまで陣を支え切れぬ場合もあり得る、ということも、元繁は最初から判っていた。その場合、熊谷軍は無理せず陣を捨てて退却し、武田本軍に合流すれば良く、熊谷元直も当然そうするであろうと元繁は考えていたのである。元繁は熊谷元直という男の気質を理解しているつもりであったが、まさかそこで死戦を演じるなどとは思いませんでした。

「民部少輔みんぶのしょうぶが討ち死にしたと……!？」

その報告を聞いた武田元繁は、だから仰天した。

熊谷元直は武田軍第一の武将であり、元繁にとってもつとも信頼のおける協力者であったと言っている。その元直が戦死し、精鋭である熊谷軍が壊滅したというのは、まさに痛恨事であった。

中井手の陣に熊谷勢を配したのは、寡兵でも大軍を押さえられる元直の戦術能力と熊谷の兵の強悍さを高く評価していたからだ。元直の我が強さと誇り高さが裏目に出た。あの男は陣を崩されて激怒し、敗走するくらいなら死んだ方がマシと思いついてしまったのである。

選ぶべき将を間違えた。

と、元繁は悔いざるを得ない。純軍事的に言えば中井手の陣城は落とされたところで痛くも痒くもなく、極言すれば、敵に攻められた時点でそれを捨てたって良かったのである。熊谷元直のような剛勇の男ではなく、臆病なほど慎重な者を配するべきだったのだ。

麾下の主立つ武将を集めた武田元繁は、

「わしが加勢を遅らせたばかりに、あたたら兵を討たせてしもうた」

と己の非を認め、

「民部少輔とは義兄弟の契りを結び、同じ死ぬ身ならば一所に死ぬと言い交わしたほどの仲であったのに、無念至極である」

と言いながら涙をばらはらと流した。

熊谷氏は武田家の家来ではなく、独立の豪族であるという意味で同盟者と言つに近い。元繁にすれば、これを捨て殺しにしたと諸将に思われるわけにはいかないのである。武田軍に従っている豪族たちが元繁に対して不信感を持ち、

第一の盟友であった熊谷殿さえ冷然と捨て殺しになさるよう

な大将では、とても恃むに足りぬ。

などと思うようになれば、安芸の守護として立ってゆけなくなるであろう。元繁は剛勇をもって自ら誇りとする男だが、大内義興に面従腹背しつつその信頼を勝ち得たことでも判るように政治家として無能なわけではなく、その程度の政治的配慮はある。

「かの者が死んだ今、わしのみが生き長らえ、命をまっとうしようなどとは露ほども思わぬ。この上は、毛利の奴輩を皆殺しにし、敵の大将を討ち取って、民部少輔への供養にするぞ！」

この台詞には多分の演技が含まれていたが、豪族たちの多くは大将の情の深さに感銘を受け、熊谷元直の弔い合戦に向けて闘志を奮い立たせた。

中井手で快勝を収めた毛利・吉川の連合軍は、有田から退却した別働隊と合流し、軍を再編して有田へ向けて進軍しつつある。すでに朝霧も晴れ、その様子は武田軍の本陣から見通すことができた。その数は、せいぜい二千と少しであろう。熊谷軍が壊滅したとはいえ、五千の武田本軍から見れば敵は半数以下であり、野戦で正面から戦えば負けるはずがない。その自信が武田軍の将兵の士気を高め、緒戦の敗北の悪影響を最小限に留めていた。

元繁はあらためて陣立てを決め、諸將を部署し直し、満を持して全軍を出陣させた。

五百の別働隊を率いた元綱は、多治比元就が指揮する毛利本軍と無事合流を果たした。

中井手の陣は激戦の余韻が未だ覚めやらず、周囲には首のない遺体が二百以上も転がっていた。残敵の掃討を終えた毛利・吉川軍の武者たちは、又打川の流水をすくって喉を潤し、河原や土居に座り込んで疲れを癒し、呻きながら受けた手傷の応急処置をするなど、

それぞれに過ごしている。河原には、幔幕を張って矢楯を並べただけの本陣が作られており、そこで武將たちが今後の方策について話し合っているところであった。

元綱は、福原父子、赤川兄弟と共にそれに加わり、未だ動きの見えない武田本軍について報告した。

「お前の策が見事に嵌ったというわけか」

元就が朗らかな笑顔を浮かべて言った。

「いささか期待外れだったがな。まあ、勝ったから良いようなものだが……」

元綱にすれば苦笑せざるを得ない。

「有田には物見を配ってきた。敵が動き出せば、すぐに報せが入るはずだ」

合戦の詳細を聞きたいところであったが、今はそれどころではないということも元綱は弁えている。軍議を再開するよう促した。

緒戦に大勝利を収め、猛将・熊谷元直を討ち取ったことで、武將たちは妙に鼻息を荒くしていた。

「この勢いにて武田が陣へと押し寄せ、一息に刑部少輔を討ち取るべし！」

「我らが一丸となって命も惜しまず働けば、武田の軍兵とて恐るるに足らんわ！」

などと、やたら積極攻勢を主張する者が多い。穿った見方をすれ

ば、吉川勢に敵の大將首を攫さらわれたことが悔なげしかったのかもしれない。

これらの声の中であえて自重を唱えているのは、志道しじ広良くらいである。

「民部少輔が首を獲たは、この上なき大勝利でござる。せつかくの大勝を無にしてはなりませぬぞ。徹夜の働きで兵も疲れており、ここはいったん吉田へ帰るが分別というものでござる。武田がこの先も有田から兵を退かぬようなら、また機を見て攻めることもできましよう」

が、元就はこれに頷かない。

「ここで退けば、武田に必ず追討たれよう。進むも退くも、死なば一緒である。退きつつ戦うより、むしろ進んで戦おう」

諸將の熱気に煽られたわけでもないのだろうが、決戦の決意を変えなかった。

元綱も、武田本軍と戦うという総大将の決定自体に異存はないのだが、このまま有田へ進軍し、敵と正面からまともにぶつかるといふのは、いくらなんでも無謀である。毛利・吉川連合軍は二千と少しに過ぎず、この寡兵をもって五千の武田本軍に挑むというなら、大軍が展開できない山間に敵を誘導するなり、防戦に有利な高地にいち早く陣取るなりして、兵数の差を補うような戦い方をすべきであらう。

「あれに見える山に陣を据え、冠川を堀に見立てて敵を迎え撃つのがよい」

中井手から数町南の丘陵を指差して元綱は説いた。

敵軍を冠川の川辺まで引き付け、渡河しようとする敵を矢戦で防ぎ、敵が打ちかかって来れば高所から突き崩し、突き崩しては再び態勢を整え、地の利を生かして時間を稼いでいけば、今夜にも吉川氏の本軍が有田へ出張って来るに違いない。武田軍の本陣は有田城の南の丘陵にあるから、これと前線とは間延びせざるを得ず、しかも大軍を引き付ければ有田城の囲み自体が手薄になる。兵の一部を割いて城衆と呼応させ、城から打って出させ、敵の背後を脅かすような手だつて使えるだろう。いずれにしても、守戦の態勢さえ築いておけば、戦術の巧緻を尽くして戦うことができるのである。もし全軍の指揮権を与えてもらえるなら、勝てぬまでも負けない戦をしてみせる自信が元綱にはあった。

が、元綱の進言は容れられなかった。

精強な熊谷軍と死闘を演じた直後の諸将は血の猛りが未だ収まっておらず、戦闘に参加しなかった元綱とはかなりの温度差がある。いわば興奮状態にある彼らからすれば、元綱の作戦案は積極性を欠き、物足りなく思えたのであろう。

「他の敵には目もくれず、刑部少輔の本陣に遮二無二に斬って入り、手詰めにして勝負を決しよう」

大将の元就までが、この時は正々堂々とした正面決戦を望んだ。

兄者までが逆上^{のぼ}せておるのか。

常に思慮深いはずの兄が、血気に逸つているとしか思えぬ言辞を吐くことに、元綱は当惑せざるを得ない。合戦は博打でやるものではなく、勝敗を度外視して戦うなどは愚の骨頂なのである。今朝ほど熊谷軍に起こった地獄絵図が、毛利軍にも起こり得るということを、なぜ想像できないのか

元就は元綱の進言のすべてを退けたわけではなく、その一部を採用した。

「執権殿は、戦場を迂回して有田城へ向かい、城衆と呼応して敵の背後を衝いてください」

志道広良の一隊・二百を、毛利軍が武田軍と戦っている隙をついて戦場を大回りに迂回させ、有田城の城山に登らせる。広良は城衆と一手になつて城から出戦し、武田軍の背後を脅かすのである。重要な作戦ではあるが、決戦に消極的な志道広良を主力から外したとも取れぬことはなく、諸将は元就の決定に異を唱えられなくなった。元就は続けて全軍の戦立てを決めた。

「先陣は二つの備えをもつてする。一軍は四郎を将とし、本家の兵・二百と桂左衛門尉（広澄）を付ける。もう一軍は井上河内（元兼）と福原左近（貞俊）に任せる」

元綱を右翼の将として桂広澄の手勢と合わせて三百ほどの兵を与え、井上党と緒戦で消耗しなかつた福原党を合わせて四百ほどを左翼に配置する。これを両先鋒とし、二陣は元就自らが率いる主力の五百。後陣には井上資忠すけただに百の兵を預けて予備隊とした。

吉川氏の軍兵・五百数十は、遊軍として自由に働いてもらうことにした。「鬼吉川」の異名を持つ強悍な兵団であり、できれば二陣にでも配して布陣を重厚にしたいところだったが、元就には客将である宮庄経友に対して指揮権がないから、その自由裁量を尊重したのである。

吉川勢を思案の外に置けば、毛利軍の陣立ては、あくまで正統な正攻法の布陣であった。彼我の戦力にそう差がなければそれも良からうが、敵には味方の倍以上の兵力がある。

苦戦は必至だな。

と、元綱は思わざるを得ない。

元綱の不安をよそに、再編を終えた毛利軍は続々と冠川を渡河し、有田へと歩武を揃えて南進して行った。

有田山の山裾を洗うように南西から北東へと又打川が流れている。有田周辺はゆるやかな起伏のある荒野で、放棄された田畑、背の低い藪や雑木林などがわずかにある他は障害物らしきものもない。有田山の南方に武田軍が本陣とする丘陵があり、その東側　又打川と冠川に挟まれた平野が、大軍が大合戦をするのに適した広々とした地勢になっている。

毛利・吉川軍の進出を見た武田軍は、丘陵を下りて北東に向けて陣を敷いた。土地の高低で言えば冠川が流れる東側が低く、丘陵がある西側が高い。毛利軍は低地から敵を見上げ、武田軍は高地から敵を見下ろしていると思えばよく、この点でも毛利軍は不利であった。

敵の備えは五つ。いや六つか・・・。

武田軍も先陣が二軍ある。一軍が向かって右に大きく開いて小高い丘に布陣し、一軍が全軍の正面に陣取っている。その後ろに二陣が控え、さらにその後方にひととき大きい軍勢の三陣が見える。あの三陣が、武田元繁が率いる本軍であろう。本軍の背後には後備の一軍があるに違いなく、さらに有田城の兵を抑える部隊をも配置しているはずである。

右手に離れて陣取ったあの連中が曲者だな。

元綱は即座にそのことを見抜いた。数はざつと七、八百ばかりで、その旗印から己斐氏、香川氏、福島氏の兵と知れる。三者ともに武田元繁に従う独立豪族で、熊谷氏と合わせて武田の四天王と言うべき連中である。あの一軍は、戦がたけなわになるのを待つて毛利軍の側面を衝こうとするに違いない。そうでなくとも寡兵の毛利軍が、半包围を受けるような形になれば、敗北は確実である。

兄の元就も同様の観測をしたらしい。

「四郎はあの一軍を抑えてくれ」

使い番がその指示を伝えに来た。

元綱はその命に従い、麾下の兵を右手に向けて進ませた。三百の兵で八百の敵を足止めできれば、本軍の決戦が少しは楽になるであろう。望まぬ形の戦いではあったが、今は武将として最善を尽くすしかない。

陽はすでに高く昇り、時刻は巳の刻（午前十時）に掛かろうとしている。両軍の距離が詰まり、三町ばかりの距離を置いたところで兵たちは足を止め、対峙した。

「民部少輔殿の弔い合戦ぞ！ 安芸の守護たるお屋形に従わぬ奸賊どもめ、この矢を受けよ！」

武田軍から鎬矢が射込まれた。
頸弓けいきゅうを誇る井上源三郎が一騎で前に進み出、

「幕府の管領代たる大内のお屋形から安芸の鎮めを命ぜられながら、恥知らずにも帰国するなりお屋形に叛き、私利を追って国を乱し騒がす刑部少輔こそ、公儀に対して不義不忠の至り！」

と叫んでその矢を射返した。

両軍、これを合図に矢戦を開始した。

数百本の矢が空気を切り裂きながら雨のように飛び交い、並べられた矢楯には無数の矢が突き立った。武者たちはその隙間から次々と矢を放ち、不幸にも矢を受けた者は呻き声や断末魔の悲鳴をあげた。

始まったか。

その様子を馬上から遠望した元綱は、丘の上に陣取る敵軍に視線を戻した。

「始まったようですな」

副将格の桂広澄が、元綱に馬を寄せて来た。

桂広澄は鋭角な顎と苦味走った相貌を持つ四十男で、中背で細身ながらよく鍛えられた鋼のような強靱な体躯を持ち、内面の剛鋭さを表すように眼光が鋭い。これまで数え切れぬほどの武功を積み重ねており、口数は決して多くはないが、十五老臣の中でもその存在感は小さなものではない。もともとこの男は毛利庶家の名門・坂氏の嫡流に生まれたのだが、父の代で分家して桂村に居を構え、桂姓を名乗るようになった。坂氏当主である坂広秀とは従兄弟いとこの関係である。

「我らも始めますか？」

広澄の問いに、

「いや、こちらからは攻めぬ」

元綱は冷静に応じた。

三百の兵で八百の敵の動きを封じておれば、それだけで役割は十分に果たせている。高所に陣取る倍以上の大軍を相手に、寡兵で攻め上ってゆくほど元綱は能天気ではない。

「そのうち焦れた敵が坂を下って来よう。それまでは、桂の者の弓ゆん勢せいを見せつけてやるだけでよい」

「承った」

しばらく矢戦に徹せよ、という元綱の命令が、己の考えと合致していたのであろう。広澄は口元だけで笑い、家来たちに戦闘準備を命じた。

敵から三町ばかりの距離を置いて、元綱の部隊は一重ひつえの陣を敷い

た。陣頭に矢楯を並べ、あえて敵に近付かず、対陣したまま静観の構えである。

このままでは合戦にならないから、敵軍は矢の届く距離まで坂を下り始め、やがて矢戦が始まった。

桂党には弓の達者が多い。広澄自身が家中でも屈指の弓の名手であり、家来たちをよく鍛えたのであろう。中でも息子の元澄は、まだ十七という若さながら父に優る精兵せいひょう（弓の名手）と評判が高く、その矢は射るたびに確実に敵を殺傷した。

元氣者ばかりが集まっている元綱の近侍たちも、桂党に負けていない。

ちなみに部屋住みの元綱には家来を養うべき領地がなく、元綱個人の家来と言えば従者が数人あるのみである。しかし、重臣たちは己の息子や一族の子弟の中から嫡子から遠い三男坊や四男坊を選び、元綱がまだ幼い頃から近侍として十人ばかりを側に付けていた。元綱にすればいずれも共に育った竹馬の友であり、ガキ大将であった昔の子分たちと言い換えてもいい。元綱と性格が合わない者は去り、現在まで残っているのは気心の通じた者ばかりである。その関係は正確には主従ではないが、彼らにとって大将といえれば元綱以外に考えられなかったであろう。

矢は射下ろす方が有利であり、低地から敵を見上げる元綱たちは当然ながら不利であった。しかし、射手の勇気と狙撃の正確さにおいては敵兵に優り、倍以上の敵軍を相手に互角の矢戦をして引けを取らなかった。

自軍から攻める気がない元綱はもちろん、敵軍も白兵戦の契機を見出せないまま、飛矢の交換で半刻ばかりが過ぎた。

南方の主戦場では、すでに両軍主力の激突が始まっている。

その様子を見て焦ったのであろう、丘の上で不意に陣太鼓が乱打され、陣貝が鳴り渡り、敵軍の半数ほどが一斉に坂を駆け下り始めた。

「波のように敵をあしらえ！ 退いては押し、押しでは退け！」

元綱にすれば、合戦の序盤で手持ちの軍勢を疲弊させたくない。たとえ眼前の敵を蹴散らしたところで、戦況全般にはほとんど影響がないのである。主戦場において寡兵の毛利軍は苦戦必至であり、本軍が危機に陥ればこれを援護に向かわねばならないから、できるだけ余力を残して戦いたい。

元綱は、坂を駆け下って来る敵の勢いにあえて逆らわず、自軍をゆるやかに後退させながらその勢いをいなした。鋭鋒に鋭鋒をぶつければ、双方が大きく傷つく。彼我の兵力に大きな差がある以上、消耗戦になれば勝ち目がないということ、元綱は弁えていた。

どれほど大力の者が射た矢でも、推進力を失えばやがて地に落ちるのが道理である。元綱は防戦に徹しつつ三町ばかりも引き退き、敵の勢いが尽き、兵たちが息を入れたその瞬間に、絶妙のタイミングで反撃に転じた。

桂広澄は戦場巧者である。元綱が攻勢に出たのを見るや、それに呼応して麾下の兵を躍進させ、敵の側面に激しく槍を入れた。

潮の流れが変わるように攻守が入れ替わった。

「さすが左衛門尉、馬齢を重ねてはおらんな」

馬上で手綱を操る元綱の頬に、思わず笑みが浮いた。

敵軍には意外に粘りがなく、元綱たちは押しに押し、丘の上へとこれを追い上げた。しかし、深追いするような愚は犯さない。素早く兵を元の位置まで戻し、一息つかせ、一陣と二陣を入れ替えた敵の再度の攻勢に備えた。

元綱が戦っている己斐氏、香川氏、福島氏というのは武田家の家来ではなく、元繁に従う半独立の豪族たちである。彼らは同じ境遇であった熊谷元直の戦死に少なからぬ衝撃を受けており、その戦意にやや積極性を欠いていた。

民部少輔のようになっては阿呆らしい。

という想いが彼らにはある。彼我の戦力差は歴然であり、どうせ合戦は勝つに決まっているのである。勝ち戦の中で戦死するほど馬鹿げたことはなく、大事な家来たちを無駄死にさせる気にもなれない。どうせ眼前の敵は、主戦場で毛利の本軍が壊走を始めれば逃げざるを得ないのだ。今のところは無理押しをせず、追撃戦になつてから首を稼げば良いではないか……。

将たちのそういう思惑というのは口に出さずとも兵には伝わるもので、彼らの槍から鋭さを失わせ、足腰から粘りを奪った。大将である宗端入道・己斐師道は兵を入れ替えてさらに突撃を繰り返したが、元綱の部隊は大きな損害を受けることもなくこれを押し返した。この間に、毛利の本軍は武田軍に突き崩され、主戦場は混沌の乱戦になつていた。

毛利本軍と武田本軍の間で戦端が開かれ、矢戦を始めたところまで話を戻す。

飛矢の交換で半刻ばかりが経った頃、武田軍の先陣から大野美修理亮という男がただ一騎で両軍の中央まで進み出た。燃えるような赤具足を付け、兜には赤熊を戴き、真紅の軍配を握っている。その姿は酒に酔った狸々（しようじょう）のようであったと『陰徳太平記』にある。>*注1<

大野美は、周囲に落ちている毛利軍の矢を芝居がかった仕草で悠々と拾い、

「これしきのしよろしよろ矢は、わざわざ弓で射るまでもない。打矢でたくさんじゃ！」

と大声で嘲った。

この派手な物頭を討ち取って手柄にしようと、毛利方の先陣から

数人の雑兵が駆け寄って行ったのだが、大野美はこの足軽たちに拾った矢を手裏剣打ちに投げつけた。矢は見事に二人を射倒し、怯んだ雑兵たちは怪我人を抱えて慌てて引き下がった。

「おのれ、憎き敵の振る舞いよ！ 何をしておる、あやつを射取れ！」

先陣の大將である井上元兼は激怒し、弓足軽たちに命じて大野美に矢を集中させたのだが、雨のような飛矢を浴びながら矢は大野美の鎧や兜に当たるだけで、不思議とその身体を傷つけることができなかった。

大野美はからからと大笑し、

「おのれらの射る矢など、それがしの鎧に百筋も射付けたところで、鹿の角に蜂、蛙の面つらに水よ。効き目なぞありはせぬわ！」

と毛利軍の將兵をさんざんに嘲弄し、味方の陣の中に戻って行った。

武門を「弓矢の家」と表現するように、武士にとって弓矢の腕を馬鹿にされるほどの屈辱はない。毛利軍の武者たちは激怒し、いわばこの挑発に乗って白兵戦に転じた。先陣の井上党・福原党の四百が、弓を槍や薙刀に持ち替え、切っ先を揃えて敵に突っ込んだのである。

武田軍の先陣は、辺坂へさか海道入道、毛木民部大輔みんぶだゆう、筒瀬左衛門大夫さえもんたゆうらが率いる武田家の精鋭で、その数は一千。外様の豪族たちでなく、家来で先陣を固めたところに武田元繁の矜持が表れている。毛利軍の先陣は凄まじい勢いでこの敵軍に突っ込み、支えようとする敵兵を切り立て切り立て、ものの半刻ほどで備えの中央を突き崩した。

しかし、武田軍の布陣には十分な厚みがある。二陣の一条繁高、板垣繁任しげとう、小河内繁継しげつぐらは少しも動揺せず、先陣の崩れを兵の壁で

もって堰き止め、毛利軍の突撃をも防ぎ止めた。

勢いが尽きれば、流れも変わらざるを得ない。崩れた一陣の兵たちが態勢を立て直すと、毛利軍は圧倒的な敵の洪水の中に包囲される形勢になり、たちまち崩された。

それを見た大将の多治比元就は、味方の崩れを支えるために本軍・五百を前進させ、再びその流れを押し返した。

が、敵の一陣は四散せず、崩された中央を埋め、再び毛利軍とがつぱり四つに組み合った。

豊富な兵力を持つ武田元繁は、三百人ほどの弓足輕を八つの組に分け、これらを自軍の右翼　つまり毛利軍の左側に展開させ、藪や雑木林などに埋めておいた。白兵戦が始まるとこれらが群がり立ち、遠矢をもって毛利軍の側面をうるさく脅かし、その出足の勢いを殺ぎに殺いだ。

この厄介な小部隊を駆逐したのは、宮庄経友に率いられた吉川氏の兵团である。吉川勢は戦場を掃除するようにこの弓隊を蹴散らしつつ、主戦場を左側から迂回して武田軍の本陣　つまり元繁が率いる三陣へと直接襲い掛かった。

この横撃が、苦戦する毛利軍をどれほど救ったか判らない。

もし吉川勢にあと五百ほどの兵力があれば　あるいは吉川元経率いる本軍がこの戦場に参戦していれば　武田軍の側面からさらに背後を脅かしていたであろう。武田元繁はその手当てのために大軍を割かざるを得ず、その分、正面の毛利軍に対する兵力が不足したに違いない。武田軍はあるいは防戦一方という展開になっていたかもしれない。

しかし、吉川勢がいかに強悍で、宮庄経友の戦術能力が優れたものであったにしても、わずか五百ほどの兵力では、せいぜい武田軍を苦しめるところが精一杯である。武田軍は元繁が率いる本軍だけで千五百もの兵力があり、元繁は本軍を二分し、八百ほどの兵を吉川勢の防ぎに回して急場を凌いだ。

元就は、愚直なまでに粘り強く戦った。崩されるたびに数町引き

下がり、そこで敗走した味方を掻き集め、兵を纏めて再び突撃する。

「逃げるは卑怯者のすることぞ！ 元就はここにある！ 我より退いて恥を残すな！」

逃げて来る味方を大声で叱咤し、その崩れを繕い、再編しては突撃を繰り返した。しかし、武田軍は一陣が崩れても二陣でそれを支え、二陣が崩れかければ三陣がそれを防ぐ。毛利軍はその重厚な壁をどうしても突破できなかった。

ところで、毛利軍が激闘を繰り返している頃、別働隊を率いた志道広良が有田城の抑えのために配された武田方の部隊を背後から痛撃している。

武田方は伴とも繁清、品川信定が率いる七百ほどの部隊であったが、毛利軍の来援を見た城将・小田信忠が三百の兵を率いて城から出戦したために、武田方は挟撃される形になり、苦戦に陥った。

これを見た武田元繁は、

「もし伴、品川らが打ち負けるようなことになれば、敵は我が後方から押し寄せてゆゆしき大事となるう」

と憂慮し、後備えとして本軍の背後に控えさせていた三百の一軍を有田城へ向かわせたのである。このことによって、武田軍は予備兵力を使い切ることになった。

何度も何度も敗走しながら、それでも毛利軍が全面崩壊に到らず、壊走しては軍を立て直し、盛り返すことができたのは、敵の側面を攻撃している吉川勢のお陰であったと言っている。武田軍は元繁の本隊を「鬼吉川」の鋭鋒で直撃されており、その防戦に足が止まっているために、前面の毛利軍に対して追撃に厚みと迫力がなく、決定的に突き崩すことができなかつたのである。

『陰徳太平記』には、

「割菱の旗と一文字三星の旗が三度入り乱れ、三度離れた」

とある。武田元繁がこの時点で前線に馬を出すはずがなく、大將同士が行き違うほどの接戦、というのはおそらく誇張だが、寡兵の毛利軍はまさに死力を尽くして善戦したと言っべきであろう。

しかし、善戦するということは、この場合、無理に無理を重ねるといふことでもある。毛利軍は昨夜から徹夜で行軍し、今朝から連戦を続けているのである。入れ替えるべき予備兵力もなく、兵たちはさすがに疲労困憊し、それにつれて死傷者の数は激増した。ことにもつとも過酷な最前線で戦い続ける井上党の損傷は甚大で、すでに十数人の物頭と百人近い雑兵がその首を失っている。

元就は思い通りにならない戦況に激怒し、逃げながら悔し涙さえ浮かべた。井上党の長老である井上元兼が前線から退却して一息入れているのを目ざとく見付け、

「井上の者どもは、日頃の大言壮語をどこへやった！ おのれらが持ったる弓に弦が張ってあるのは何のためか！ 矢を射る気がないのなら、その弓を踏み折って杖につけ！」

と怒鳴りつけた。「弓を折れ」とは「武士を辞める」というほどの重大な意味があり、最大級の罵倒であったと言っている。

井上元兼は五十代。老練にして剛毅、しかも尊大な男で、若い元就の暴言を意にも介さず、

「いやいや、まこと年老いた哀しさ。はや戦い疲れ、しばらく休んでおったところのごさるわ。さりとて、命を惜しんで退いたわけではござらぬぞ。もとより我ら一党、拳こぶって身命を投げ打つ覚悟であり申すわ。武田が何ほどのことやある。あのような陣ひとつ、切り崩さずにおろつか」

と放言し、高笑いした。

「さあ、井上の一族の者ども！ 武士の死に様を見せるはこの時ぞ！ 今こそ一所に集まって討ち死にせよ！」

元兼は大声で叫び、周囲にいた一族の数十人を率いて真っ先に立って敵陣に突っ込んで行った。

この井上党の決死の呐喊で毛利軍は再び勢いを盛り返した。元就は周囲の兵をまとめ、井上党に続いて突撃した。この四度目の攻勢は、兵力としてはわずか四百ほどに過ぎなかったが、武田軍の二陣を四散させ、その将の一人であった山県備中守を討ち取るほどの威力を見せた。ついに元繁の本軍を剥き身にしたのである。

もともと千五百を数えた元繁の本軍は、吉川勢の横槍によって兵が散り、二方面の防戦に振り回され、元繁を囲う兵力自体が五百ほどにまで減っていた。瞬間的には五百 対 四百の戦いになったわけ、元就はそれを勝機と見、ほとんど先頭を切るような勢いで突きかかって行った。武田軍はすでに後備えの予備兵まで失っており、ここで初めて総大将の元繁自身が陣頭に立ったのである。

「毛利の大将は、多治比元就と言ったか。昨日今日戦をし始めたにしては、なかなか頑張るではないか」

元繁は性格的には猛将と言うべき男で、その個人的武勇は鬼神とまで恐れられている。わずか四百ばかりの敵を相手にうるたえるはずもない。むしろ馬上で愉しげに頬を弛ませた。

「長生きをすれば、未は良き武将にもなったかもしれぬが、今日を命日とする不憫さよ」

健気に戦う毛利軍を間近に見つつ、元繁は嘲笑した。

元繁の馬廻りは一騎当千の頸兵揃いであり、しかも今朝からまったく戦いに参加しておらず、銳氣が漲っていた。対する毛利軍は、敵に倒される前に疲労で倒れてしまうのではないかと思うほどに疲弊し切っている。両軍の拮抗状態は当然長くは続かず、武田軍は楽々と毛利方を押し返し始めた。

ひとたび勢いを止められると、周囲は武田の軍兵だらけであり、これが群がり襲って来ることになる。毛利の兵たちは包囲されることを恐れ、見る間に崩れた。毛利軍は哀しいかな兵力に厚みがなく、先頭の一行が崩されるとそれを押し止めることができないのである。毛利軍はまたもや壊走し、元繁の本軍と、踏み止まった一陣、二陣の兵たちがこれを追撃した。

元就が予備隊として後方に配しておいた百人ばかりの兵が、辛うじてこの追撃を食い止めた。お陰で元就はどうか敵の槍から逃れることができたわけだが、しかし、一息ついた元就は、あらためて絶望感に苛まれざるを得ない。

毛利軍はすでにほとんどの軍兵が四散し、軍勢としての体を成していないのである。ざっと見渡しても、元就を囲んでいる兵は二百人を割り込んでいる。

もはやこれまでか……。

合戦は、どう見ても負けであった。大将の元就が戦場から逃げずにあるから、兵たちは大将の周囲に辛うじて踏みとどまっているというだけで、誰の目にも勝敗は明らかである。

しかし、それでも元就は逃げることを考えなかった。若さゆえの血気であったと言ってもいい。

「今やこの元就、討ち死にすべき時が来た！ あれに見える割菱の旗が、武田元繁の本陣じゃ！ この上は、あの旗に向けて遮二無二駆け寄り、元繁と刺し違える！ 皆みな、我に続け！」

元就は生き残った兵をまとめ、最期の突撃を試みた。

第二章 西の桶狭間 有田中井手の合戦（六）（後書き）

>*注1<

「赤熊」とは、騾馬ラバの毛を赤く染めて作った兜の飾り。輸入品であるために当時は非情に希少であった。

「猩々」とは、中国の想像上の動物。赤面赤毛で猿に似ているとされ、人の顔と足を持ち、人の言葉を解し、酒を好むという。

第二章 西の桶狭間 有田中井手の合戦（七）

毛利軍と武田軍が激突した主戦場は、有田城の南東 武田軍の本陣がある丘陵の東側であった。南西の方角から有田山に沿うように流れて来た又打川と、南北に流れる冠川に挟まれた地域である。

元綱たちは主戦場から二町ばかり北方で戦っている。毛利軍が苦戦を重ねる様子は、当然ながらよく見えていた。毛利方は度重なる猛攻で疲弊し切り、開戦時の位置から三町以上も北東に押し込まれ、もはや壊滅寸前である。善戦を続けていた吉川勢も、孤軍になることを恐れてか あるいは敵の前進に引きずられてか 戦いながら徐々に退き始めていた。

眼前の敵の三度目の攻勢を退け、一息ついて主戦場の様子を確認した元綱のところへ、桂広澄が馬を寄せて来た。

「残念ながら、お味方の負けでござるな」

辺りを憚るような小声である。さすがに歴戦の男で、その表情には焦燥の色が少しも浮いていおらず、ふてぶてしいほど落ち着き払っている。

「我らも、このあたりが潮時かと存ずる」

毛利本軍が総崩れになるのは時間の問題である。元綱たちは敵の一軍を抑え切ったという意味でその役割を十分に果たしたが、このまま対陣を続けていれば敵中に取り残されることになり、退路を断たれて全滅するであろう。その前に、眼前の敵を牽制しつつ整然と退き、敵が追撃してくればこれを叩き、戦っては逃げ、逃げては戦いしながら北東へと移動し、崩れて逃げて来るであろう本軍の退却を援護すべきではないか。

広澄の提案に、元綱は首を振らなかつた。丘の上に陣取る敵を悠然と眺めている。

「あの連中も、我らが当然そう動くと考えておるだらうな」

そこで振り向いた元綱は、肩越しに広澄を見て、悪童のように笑つた。

「このまま敵の思惑通りに負けてやるのも業腹ではないか？」

広澄はやや不審げに眉を寄せた。

「同じ退くなら敵の本軍を裏から突き破つて退き、刑部少輔（武田元繁）に冷や汗をかかせてやるというのはどうだ」

広澄はその意図を即座に察した。毛利本軍を追撃して進む武田軍に、背後から突撃してやろうと言うのである。

元綱たちから見て左前方にいたはずの武田軍は、毛利本軍を押しまくつて進むことで今や元綱たちの左やや後方にまで進出している。時計と逆廻りに移動すれば、敵軍の背後に出ることは容易い。たとえ小勢でも、背後を脅かせば敵はうろたえるに違いなく、前進する勢いも一時的には止まるかもしれない。そうなれば毛利本軍が退却するための時間をわずかでも稼げるであらう。

元綱の提案は戦術的にも悪くない。勝ちに驕り、敵を追って走る軍勢は、前方にしか意識がないのである。後ろから襲われることなど考えもしないであらうから、意外に脆く崩れるかもしれない。それより何より、敵の大將を慌てさせ、その心胆を寒からしめてやるのは、痛快ではないか。負け戦には違いないが、敵に一矢報いたことにはなるう。

ただひとつ、丘の上の敵が追撃して来る恐れがあり、それだけが

心配であったが、後ろに退いたところで追撃されるといふ事には変わらない。武田の本軍をも引き受けて毛利軍の退却を援護するとなれば、全滅覚悟の死戦になるのは間違いないであろう。そう考えれば、乱戦の主戦場に飛び込んでしまふというのは、むしろ一案であるかもしれない。敵軍を引つ掻き回し、混乱させることができれば、その先、戦がどう転ぶかは判らないのである。

広澄は不敵に笑った。

どうせ負け戦であれば

「面白い……。やりますか」

「決まりだな」

元綱は二百数十人の麾下の兵を素早くまとめ、

「これより敵中を突破して退く！ 生きて吉田に帰りたいと思う者は、いちいち敵に構うな！ 俺に続いてただひたすらに駆けよ！」

と短く訓示した。

「では、往くか」

元綱は広澄に言い、手綱を動かした。その声と表情には少しも悲壮なところがなく、それどころか遠乗りにも出るような気安さがあり、周囲の武者たちに奇妙なまでの安心感を与えた。この大将に従ってさえいれば、つまりらぬ討ち死にをすることだけはないであろう。少なくとも元綱の近侍たちはそう信じていた。

元綱隊は、丘の上へと攻め懸かって行くかのように静々と前進して見せ、不意に敵前で左に転進した。元綱を先頭に、杉なりになつて猛然と走り出したのである。

この元綱隊の動きは、丘の上にいる武田方の諸将を驚かせた。

逃げるつもりならば背後　北東へと駆けるはずであるのに、敵軍はなんと南方に向けて駆け出したのである。その先にあるのは三千以上の武田の武者たちが乱戦を演じている修羅場であり、三百にも満たないあんな小勢でそこに突っ込んでゆけば、たちまち磨り潰されるのがオチであろう。

己斐宗端こいそつたん、香川行景ゆきかげ、福島信方のぶかたといった将たちは、元綱隊が退けばもちろん追撃するつもりであった。しかし、敵の動きが予想外のものであっただけに、これからどうすべきか協議せざるを得なくなつた。

そもそもこの一軍は、主戦場で武田軍と毛利軍がぶつかるのを待って、毛利軍の側背を衝くという作戰意図をもって編成された部隊である。しかし、主戦場の毛利軍はすでに壊滅寸前であり、ほとんど軍勢の体さえ成していない。今さら横撃もないであろう。そこまでは諸将も一致しているのだが、その先の意見は割れた。

大将格である己斐宗端は、この際元綱隊は無視して北東へ進出し、毛利軍の背後に陣を敷いてその退路を断つべきだと主張した。毛利の軍兵たちが吉田へ逃げるには、いったん中井手まで北上するしかないわけで、戦場の北方を封鎖されたと知れば、粘っている連中もさすがに腰が砕けるであろう。勝利への決定打になるのは間違いない。宗端の判断は戦術的に極めて妥当であり、もし実行されれば毛利軍は全滅していたかもしれない。

他の二将は、眼前の敵　つまり元綱隊を追撃すべきであると主張して譲らなかつた。毛利軍と主戦場で戦い、苦労して敵をあそこまで追い崩したのは武田家の諸将の功績なのである。当初の作戰通り敵軍を横撃していたならともかく、主戦場で一切働かなかつた自分たちが今さらその首を獲りに走るのには、彼らから手柄という果実を横取りするような匂いがあり、気が進まなかつたのであろう。これは将としての戦術的思考ではなく、外様の豪族としての政治的配慮であつた。

格に上下のない外様衆によつて編成された部隊の悲しさで、大将格の己斐宗端にしても諸将に対して強い指揮権があるわけではない。自説が通らぬことに腹を立てた宗端は、やむを得ず、武田元繁の元へと急使を走らせ、敵の背後に軍を回すことの裁可を求めた。諸将を思い通りに動かすには、総大将から命令を発してもらうしかない。宗端は合戦巧者として知られた男であるだけに、敵を全滅させ得る好機をむざむざ逃してしまふことの馬鹿馬鹿しさに、嘆息せずにはおれなかった。急使が帰つて来る頃には戦場の様子は必ず変わっている。あるいは退路を断つ前に毛利軍が壊走してしまつているかもしれない。機に臨んで変に必ず戦場において、総大将の指示をいちいち仰がねば動けないというほど愚劣なことはないのである。余談ながら、己斐氏は先年まで武田氏とは敵対関係にあり、宗端自身、武田元繁に従属してはいても心服しているわけではなく、その利益のために身を捨てて尽くすというような殊勝さは持ち合わせていなかった。眼前の風景は武田軍の揺るぎない大勝利を示しており、その気分的な余裕と、「手伝い戦」という気安さが、宗端から必死さと果敢さを失わせたと言えなくもない。

いずれにしても、遊軍として重要な役割を果たすべきこの一軍は、主戦場から二町ばかり離れた丘の上に陣取つたまま動きを止めた。壊滅寸前の毛利軍にとって、この事はまったくの僥倖であつたと言ふしかない。

ところで

その頃、羽田重蔵は、毛利家の雑兵たちに混じつて元綱の後ろを駆けていた。

妙なことになった。

我ながらおかしな気分だが、重蔵にすれば他に選択肢がなかつたのである。

熊谷軍が壊滅し、孫次郎ともはぐれてしまつた以上、熊谷家の家

来ですらない重蔵は、戦場にいるべき法的な根拠を失ったに等しかった。これは、敵の毛利軍からだけでなく、下手をすれば味方の武田軍の武者からも首を狙われるということであり、まったく危険この上ない状態なのである。歴とした武士は別としても、雑兵たちにはほとんど倫理観などはないから、たとえば味方を背後から殺してその首を獲り、褒美に与ろうとするような悪例も実際には無数に行われていた。味方を討つのはもちろん重罪だが、それが確かに味方だったと証明されなければ罪は発生しない。その点、浪人者の重蔵は安芸に地縁もなく、知り合いもおらず、身分を証明するすべもない。「敵の雑兵首」として格好の標的になり得るのだ。

こうなってしまった以上、さっさと戦場を離れて逃げれば良いと考えるのは、この時代の戦場を知らない素人であろう。たった一人で戦場から離脱し、右も左も判らない山野に紛れ込むなどというのは、まさに自殺行為なのである。

ひとたび合戦が始まれば、戦場の周囲には多くの土匪（賊）や百姓たちが、どこからともなく群がり集まって来る。彼らは少人数の落ち武者を見つければ多数を恃んで襲撃し、その首を戦勝軍の陣に届けて勝利のおこぼれに与り、哀れな犠牲者たちの武器や身包みを剥いでは己の懐を温めるのだ。合戦のたびに略奪などによって迷惑を蒙る地元の住民たちにすれば、その程度の副収入はいわば当然の権利であり、これを獲るチャンスを虎視眈々と狙っているのである。その意味で、戦場とその周辺は、まさに異界であった。平時は純朴で親切ですらある百姓たちが、手に手に錆び槍や竹槍を握り、徒党を組んで襲い掛かって来る。地元の山野を知り尽くす土匪が神出鬼没し、逃げてても逃げてても襲われ続ける。そういった恐怖を、京周辺の数々の戦場で重蔵は何度も味わっている。

結局のところ、戦場では軍勢の中に混じっているのがもつとも安全なのである。そして、重蔵が混じり込むことができる軍勢と言えれば、現在のところ元綱の隊しかなかった。

「俺に従いたければ従えばよく、逃散したくばすればよい」

という大将の有り難いお言葉を頂戴しているのである。生き延びるためなら、利用できるものは何でも利用すべきであり、重蔵はその事に躊躇ためらいはなかった。

重蔵は、袖に付けていた熊谷家の合印をむしり取り、雑兵の一人から毛利家の合印をわけて貰い、それを袖に付けて元綱隊に従った。今朝ほどまで毛利の武者と戦っていた自分が、今は武田の武者と槍を合わせている。こういう無節操な転身はさすがに重蔵も初めてであり、奇妙な感慨を抱かざるを得なかったが、しかし、倫理的な罪悪感とは無縁であった。

重蔵は孫次郎との個人的な友誼をもって熊谷軍に　　というよりは孫次郎個人に　　協力しただけであり、命を張って孫次郎を援けたことで、これまで受けた寝食の恩には十分酬いたつもりでいる。武田元繁から恩を受けた覚えはないから、仰ぐ旗を換えたところで寝返ったというような後ろ暗い気持ちはなかったし、むしろ、

命を助けてもらった恩を返さねばならぬ。

という想いの方が強い。元綱のために働くことに、重蔵の裡なかで違和感はなかった。

ただ、孫次郎たちがそのまま可部へ帰らず、武田軍に合流を果たしたとすれば、重蔵が毛利軍の合印を付けて戦場にある以上、敵として彼らに出会ってしまう可能性がある。そんな偶然はまず起こらないであろうが、毛利軍の雑兵として戦う重蔵をもし孫次郎が見たとすれば、重蔵がもともと毛利方の謀者で、熊谷家の内情を探るために自分を騙していたのだと誤解するに違いない。その点だけが不安と言えば不安であったが

実際のところ、重蔵に不安などを感じているヒマはなかった。わずか三百ほどの寡兵で、倍以上の敵と戦わねばならなかったからである。重蔵は、生き延びるためにそれこそ必死で働いていた。

重蔵から見て、元綱の戦闘指揮は惚れ惚れするほど見事だった。

敵との距離の取り方や攻守の切り替えのタイミングが絶妙で、決して無理をせず敵の勢いを上手にいなし、味方の損傷を少なく抑えるよう配慮しながら、倍以上の敵を相手に互角に渡り合っている。

これが今義経の采配か。

これほどの駆け引き上手にはめったにお目にかかれないであろう。あの若さでは実戦経験をそれほど積んだとも思えないから、やはり天与の才があるのかもしれない。重蔵は感心したが、傍観者のように感心してばかりもいられなかった。元綱隊の善戦も虚しく、主戦場では毛利軍が押されまくり、削り取られるようにその人数を減らし、ついには敗勢が濃厚になってきたのである。

そろそろ退き時か。

と思っていると、大将の元綱は、なんと武田軍の武者で溢れる主戦場を突っ切って退くという。これにはさすがの重蔵も仰天させられた。

「敵に構うな！ 一散に駆け抜けよ！」

物頭たちが、大将の指示を叫びながら駆ける。

左手に進路を取った元綱隊は、自然の曲線を描きながら武田軍の背後に回り、そのままの勢いで乱戦の中に突っ込んだ。

主戦場にいる武田軍は人数で言えば三千近かったが、部隊として機能しているのは武田元繁が率いる本軍と、吉川勢と戦い続けている八百ほどの部隊くらいのもので、四散した一陣、二陣の武者たちは、本軍と一手になっているか、その後を追って走っているか、出遭った敵と自俣に戦っているか、あるいは激戦の合間に息をついて休んでいるか、いずれにしても後方からの襲撃に備えていたような者は皆無であった。彼らは不意に背後に出現した敵部隊を見て、仰天したのである。

元綱隊から見れば武田軍は十倍以上の大軍だが、元綱たちが小勢であるだけに実際にこれと槍を合わせられるのはそのごく一部でし

がなく、しかも同士討ちになる恐れがあるから弓矢も使いにくい。味方の壁が邪魔をして、ほとんどの者が敵を眺めていることしかできなかつた。前線で戦っている兵たちは、後方で何が起こっているかさえ判っていないかつたであろう。何より元綱隊の動きが疾風のように素早いために、武者たちは将も雑兵もとつさにはこれに対応できず、ひたすら狼狽し、右往左往するのみであつた。

「裏切りじゃ！ 笠間刑部が裏切つたぞ！」

元綱は近侍に命じて、そう連呼させた。戦場では、敵を惑わすためにこの手の虚言を弄することは別に珍しくない。小さな混乱が波のように広がり、慌てた者たちはその虚言を真実だと思い込み、同士討ちを始める者まで出た。特に前線の者たちは後方の様子が判らないから、後方で起こつた混乱が味方の裏切りのせいであると信じ込む者も少なくなかつた。後日、この噂を伝え聞いた敵島の棚守（たなもり）上級神職）が、そのことを事実として後世に書き残している。

ちなみに笠間刑部というのは山県郡に根を張る国人領主 つまみり半独立の小豪族で、その妻は『鬼吉川』 吉川経基の娘であつた。現在は武田氏に臣従しているものの、そもそも吉川氏との繋がりが深い人物だから、その意味で元綱の人選は慧眼であつたと言える。

元綱は自ら槍を振るい、雑兵は馬で蹴散らし、騎馬武者は槍で馬から叩き落しながら、ほとんど一直線に戦場を駆け抜けた。麾下の武者たちは、その速度に遅れまいと必死になつて走るしかない。武田方にはこの突撃を組織だつて受け止めようとする部隊がなく、元綱たちは、たまたまその進路にあつた数十人の敵の塊を三つ、四つと蹴散らし、四散させ、足を止めずに戦場の南東まで四町ばかりを突き抜けた。

そのまま東へ駆けて冠川を渡河すれば、山に紛れ入って逃げることのできたであろう。しかし、元綱はそこで馬首を返して北進し、

遅れて退却しつつある吉川勢と戦っていた武田方の部隊に背後から突っ込んだ。

この武田方の部隊も、後ろから敵が突撃して来るなどとは思ってもない。たちまち後陣が崩れて中央に穴が開き、その崩れが前線の兵たちを驚愕させた。

吉川勢を率いる宮庄経友は合戦巧者である。突然の敵の崩れに驚きつつも、この機を逃さない。

「敵が乱れたぞ！ 懸かれ懸かれ！」

疲弊し切った軍兵たちを鋭く叱咤し、退く足を止めて敵に逆撃を掛けた。前後から挟撃される形になった武田軍は大きく左右に崩れ、元綱隊は敵軍を中央突破し、吉川勢と合流を果たしたのである。

「おお、相合殿あいあうでござったか！」

吉川勢も討ち減らされて三百ほどにまで減っていたが、元綱隊と一手になれば人数は五百を超える。退却するには味方が固まる方が良いに決まっているから、経友は素直に助勢に感謝した。

元綱は、この兵力をもって武田軍の後背をさらに脅かし、毛利本軍の退却を援護するつもりなのである。そのことに気付いて、

いやいや、驚いた。

と、重蔵と似たような感慨を抱いていたのが、副将格の桂広澄である。

元綱の父である弘元ひろもとは、政略の手腕には優れていたが、とても合戦上手と呼べる器ではなかった。先代である兄の興元おきもともそれは同様で、臆病ではなかったにせよ、彼をして名将と呼ぶ者は誰もいなかった。それらに比べ、元綱は誰に合戦を習うでもなく、二十歳にしてすでに卓越した戦術眼を持っているらしい。それはまさしく天性のものである。

この若殿は合戦いくさの申し子か。

人間の中にはごく稀に、戦場の臭いのようなものを嗅ぐ特殊な嗅覚を持って生まれる者がある。二十数年の戦歴を誇る広澄は経験的にその事を知っており、元綱がまさにそういう人間なのではないかと思わずにはいられなかった。

話を主戦場へと戻し、時間を少しばかり遡る。

多治比元就は、二百ほどの兵力をなんとか掻き集め、まさに最期の突撃を敢行した。

「あれが多治比の元就ぞ！ 逃がさず討ち取れ！」

敵将を間近に見た武田元繁は興奮を隠さず、怒鳴るようにそれを命じた。元繁自らが槍を取って戦ったというから、この男はよほど血の気が多かったのだろう。

武田軍は、半刻にも満たぬ戦闘で毛利軍を完全に撃ち砕いた。毛利方の武者たちは数十人が討たれ、生き残った者は命からがら逃げ、まったく総崩れとなった。元就自身も、わずか数騎の武者に守られながら辛うじて虎口を逃がれた。

負けた……！

刀折れ、矢尽き とはこの事だ。元就は肚の底からそれを痛感した。昨日、初陣を終えたばかりの元就である。負け戦を経験するのも当然初めてであり、その惨めさに涙が流れた。

元繁の本軍は、元就の軍勢と戦ううちに前へ前へと進み、気付けばほとんど全軍の先頭に立っていた。元繁は猛将と呼ぶべき気質の男であり、戦闘による血の滾たぎりに酔い、それに身を任せていたと言えなくもない。元繁を困う旗本は今や四百ほどに過ぎないが、彼らは獵犬のようになってそれぞれに逃げた毛利の兵を追った。その頭には勝利の興奮と功名に対する執着しかなかったであろう。

ちょうどその頃に元綱隊が武田軍の後方を掻き乱している。これに驚いた武田方の将たちは背後の敵に備えねばなくなり、四散した兵をまとめて軍勢を再編することに忙殺された。この事が後続部隊の足を止めさせ、元繁の本軍をさらに孤立させる結果になった。本軍が味方の群れから三町ばかりも突出してしまっていることに元繁は気付いていたが、敵の大将を討ち取ることを優先し、自ら先頭に立って逃げる元就を追った。

「敵に息を継がせるな！ なんとしても元就を討ち取れ！」

毛利方はもはや大将を囲う二十騎ばかりが残っているに過ぎず、ここまで来て敵將を討ち漏らしたのでは、せつかくの大勝利に画竜点睛を欠くことになる。多治比元就は義兄弟の契りを結んだ盟友・熊谷元直の仇であり、この首を獲って元直の墓前に供えねば、かの義弟の無念は晴らせぬであろう。

もし、は無意味だが

もし己斐宗端らの一軍が毛利軍の背後を封鎖していれば、元就たちは逃げ場を失って全滅したに違いなく、元繁は完全なる勝利を手中にできたはずである。しかし、毛利軍の退路を断つ部隊はなく、元就たちは算を乱して北へ北へと敗走し、元繁たちはそれをひたすらに追った。

元就にとつてわずかに救いであったのは、合戦の序盤から中盤にかけて四散した毛利方の兵たちが、吉田へ逃げ帰ることはさすがに憚って、主戦場から七、八町ばかり北方の又打川の川辺あたりで踏みとどまっていたことであろう。時が経つにつれてそれらが十人、二十人と増え、元就が逃げて来た頃には数十人にまでなっていた。彼らは戦場を早々と離脱して休んでいただけに疲労が少なく、何よりその箠には数本の矢が射尽くされずに残っていた。

又打川を渡河した元就は、これらの兵を見つけて麾下に加え、やつと百人ばかりの兵力を得た。

なんとか一矢報いねば……！

このままおめおめ逃げて帰れるか、という想いが、元就に一計を案じさせた。兵たちを土手の背後や左右の木陰などに隠して弓矢を構えさせ、自らは八騎の武者と二十人ばかりの雑兵を従え、河原の土手に馬を立てたのである。大将である自分を囿にし、突出した敵の先頭集団に痛撃を与えてやるつもりであった。

これを見つけた武田方の武者たちが二百人ばかり、猛然と川を渡り始めた。

驚いたことに　　というか、むしろ呆れたことに　　そのほとんど先頭に、敵の総大将である武田元繁の姿がある。

「あれ！　射落とせ！　者ども！」

元就は思わず太刀を振って叫び、自らも元繁目指して馬を駆けさせた。

数十本の矢が鋭い風切り音をあげ、武田方の先頭集団に襲い掛かった。そのうちの一本が、元繁の鎧の胸板を深々と貫き、この猛牛のような男を馬から転落させた。

元就は、この瞬間から数秒間のことは、ほとんど覚えていない。周囲のことはまったく目に入らず、ただただ倒れた敵将に殺到しようと思死だった。

元就の麾下にあつた井上光政という男が、誰よりも早かった。うめき声をあげて起き上がろうとする元繁に飛びかかり、ほとんど同時に喉元に鎧通しを突き込み、噴き上がる血潮を浴びながら手早くその首を掻いた。太刀の切っ先に首を刺し、天に高々と掲げて叫びをあげる。

「日ごろ、鬼神のごとく恐れし武田殿をば、井上左衛門尉さへもんのかみが討ち取つたりい！」

両軍の武者たちが、一瞬、動きを止めた。叫びの意味を理解すると、毛利方の武者たちは狂喜し、武田方の武者たちは呆然と立ち竦んだ。

百人ばかりの毛利方の武者が、喉を嚙らして声をあげ、箆えびらを乱打し、勝ち鬨をどつと作った。その音が周囲の味方を呼び集め、どこに隠れていたものか、毛利方の敗残兵が喜色を浮かべて続々と駆けつけて来た。その数が瞬く間に三百人にもなったというから、戦場というのは不思議な場所である。

武田方の武者たちにしても、いつまでも茫然自失しているわけにはいかない。ある者は主人の弔い合戦とばかり怒り狂って毛利軍に駆け入り、ある者は命あつての物種とばかり後ろも見ずに逃げ出した。いずれにしても、指揮すべき大将を失った武田軍の旗本たちは、まったくの大混乱に陥ったと言つていい。

元繁の本軍を追つて、千人以上の武田方の軍兵が北へと進んでいた。彼らは、算を乱して逃げて来る味方の武者たちに仰天せざるを得ない。

総大将のまさかの討ち死にを聞かされた一条、板垣、内藤、青木といった武將たちは激憤し、悲怒の声を撒き散らした。すぐさま弔い合戦を決意したが、いかんせん総大将の死に武田方の兵たちは動転し、その士気がまったく瓦解してしまっている。雑兵たちは浮き足立って我先に逃亡し、兵が逃げれば将も逃げざるを得ないといった有様で、軍勢を組織だつて運用できる状態ではなくなつてしまつた。

それでも元繁に忠節を誓っていた武田家の家来たちは、悲憤と怒りに任せて敵に突進して行ったが、これは自殺するようなものであつたらう。彼らは又打川の河原に累々と骸むくろを並べ、先に黄泉路に旅立つた主人の供をすることになつた。

己斐宗端、香川行景、福島信方らの一軍は、丘の上に陣取つたま

ま急使の帰りを待っていたが、北方に押し進んで行った武田軍の武者たちが壊乱し始める様を遠望して、やはり仰天した。

ほどなく、逃げて来た味方の兵たちが、彼らに凶報をもたらした。

「お屋形が討ち死になされただと・・・!?」

にわかには信じられない話である。

しかし、戦況の激変にうろたえた雑兵たちが、逃げ遅れては死ぬとばかりに逃散を始め、七百以上いたはずの軍兵が、わずかの間に二百を切るまでに減少してしまった。歴とした武士はさすがに逃げはしなかったが、雑兵はほとんど踏み止まらない。こうなってしまう、もはや弔い合戦どころの騒ぎではなく、将たちも逃げるしか選択肢がなかった。

一方、元綱が元繁戦死の事実を知ったのは、それよりわずかに後である。

元綱たちは、武田軍の背後を脅かすために吉川勢と共に北を指して進んだ。しかし、武田軍にも眼の利く武将はおり、一陣を率いていた辺坂道海入道、毛木民部大輔らが四散した兵を再編し、数百の一軍を作って元綱たちの進撃を防ぎ止めていた。

武田方にすれば、すでに勝利は確定的な状況である。毛利本軍を壊滅させ、敵の大將を討ち取るまで、ほんのしばらく元綱たちを抑えればいい。辺坂、毛木らは無理押しをせず、ゆるやかに退きながら防戦を続けていた。

吉川勢はもとより、元綱隊の兵たちにも連戦の疲れが色濃く、その槍に鋭さを欠いている。さすがの元綱も正面からの戦いでは守戦に徹する敵軍を崩しきれず、武田の本軍を追うことができなかった。

このままではまずい。

と元綱が焦りを深めているところに、北方から武田方の武者たちが数百人、無秩序にどっと雪崩れ込んで来たのである。

「お屋形さまが討たれなさった！」

「合戦は負けじゃ！ 早う逃げよ！ 皆殺しにされるぞ！」

などと彼らは口々に叫んでいる。戦場は騒然となり、武田方は大混乱を起こした。

そんなことがあり得るのか・・・！？

元綱もさすがに信じられぬ想いで、傍にいた桂広澄と顔を見合わせた。

倍以上の敵を相手に負けに負けを重ね、ついには壊滅して総崩れを起こしながら、敗走の途中で敵の総大将を討ち取り、一瞬で勝敗が逆転するなどという合戦は、お伽噺にも聞いたことがない。実際にそれが起こったとすれば、奇跡と呼ぶしかないではないか。

が、敵の崩れが事態の本質を如実に表している。たとえそれが虚報であつたにしても、この機は最大限に生かさねばならぬであろう。

「押せ！ 押せ！ 敵は崩れるぞ！」

元綱は大声で兵たちを睨つけた。喜色を取り戻した兵たちは疲労を忘れたように攻勢に転じ、うろたえた敵を突き崩した。

元綱は四散して逃げる敵を追わせず、吉川勢と共に北方へと駆けた。又打川から二町ばかり南で、崩れる武田軍を追って南下して来た元就の本軍と行き会い、これに合流を果たした。

総勢二千を越えるほどであつた毛利・吉川連合軍は、今や八百ほどにまで減少している。どの将もその兵の大半を失っている中で、二百人以上が脱落せずに残っている元綱隊は、むしろ異常であつたかもしれない。

元綱が見た兄の顔は、奇跡の逆転勝利を挙げた戦勝軍の大将のものではなく、疲労感がたつぷりでまったく精彩を欠き、悪く言えばほとんど茫然としていた。

「刑部少輔を討ったというのはまことか!？」

噛み付くような元綱の声に、傍らにいた井上光政が武田元繁の首級を高々と掲げ、我が功を誇った。その首が本物であるかどうか元綱には判断がつかなかったが、いずれにしても、この男の手柄話を聞いてやっているヒマはない。

元綱は無理やり気持ちを切り替え、強い口調で言った。

「細々とした話は後じゃ。大将を討ったとはいえ、敵の人数は我らより遙かに多い。弔い合戦を期して、奴らがいつ攻め返して来ぬとも限らぬぞ。逃げる敵を追うより、まずは味方をまとめ、有田城に入って備えを整えよう。毛利の旗が城頭に立てば、逃げ散った者たちも集まり始めよう」

せつかくの奇跡を無駄にしてはならない。この戦勝を勝利と確定づける作業を怠れば、敵に再び勝敗をひっくり返されぬとも限らないのである。そうでなくとも味方はその大半が四散し、残っている者たちも疲弊し切っている。そして、逃げ去ったとはいえ敵には味方の倍以上の兵力がある。ともかくも有田城へ入り、防戦の態勢を整えることが絶対の急務であった。

「ああ、お前の言う通りだな……」

元就は疲れ切った顔で応え、傍にいた宿老の井上元兼、渡辺勝すくもなどに兵をまとめるよう命じた。

元綱たちが有田城へ入ったのは、未ひつじの下刻（午後三時）あたりであったろう。有田城を抑えるための武田方の部隊はすでに遁走しており、志道広良と城將の小田信忠が城門で毛利・吉川連合軍を迎えてくれた。

元就は深追いを禁じて味方の武者たちを呼び戻し、敵の夜襲に備えて用心を怠らぬよう諸將に厳命した。有田城はその夜、無数の篝火によって明々と照らし出され、闇に浮かび上がることになった。

吉川元経に率いられた千余の吉川本軍が有田に現れたのは、夕陽が西の山並みに沈みこんだ直後であった。援軍の来着に、城内の士気はにわかに騰がった。

「これは驚いた。すでに刑部少輔を討ち取り、武田軍を総崩れにしたてか」

と声を上げたのは、なんと吉川経基翁である。九十歳になんなんとする老体を鎧で包み、しっかりとした足取りで城山を登って来たその姿を見たとき、元綱はほとんど啞然とした。

「驚いたのはこちらの方です。ご老体おん自らがご出馬とは……」

元綱の声に、

「なに、合戦はこの年寄りのただひとつの道楽でな。馬に乗れぬよ
うになるまでは芝居（戦場）に立つつもりじゃよ」

経基翁は血色の良い顔で呵呵大笑した。

この祖父の元気さには義兄である吉川元経もやや閉口しているよ
うで、

「爺さまはわしより長生きしそうだろう？」

と苦笑を隠さなかった。

吉川元経は、元就や毛利方の重臣たちにあらためて丁重に挨拶し、

遅参を詫び、有田城救援の労を謝した。

その夜、壬生あたりの百姓たちが、武田方の落ち武者の首を多数獲って有田城へ進上にやって来た。勝ったからこそその風景であり、もし毛利軍が敗れていれば、百姓たちは毛利方の敗残兵の首を刈り取って武田軍へと届けていたであろう。

討ち取った敵の首の点検は、夜から翌日の昼まで掛かった。その数、なんと七百八十余である。毛利・吉川連合軍の方は、行方不明の者が多くその数のはっきりしないが、死者は六百人以上と推測された。

物見の報告では、逃げた武田軍は後方基地と呼ぶべき今田城に兵を集結させているという。武田元繁が死んだとはいえ、武田軍にはまだ名だたる武将や屈強な武者が多く残っているはずであり、これが弔い合戦に来るのではないかと懸念された。事実、武田軍の一部が翌日になって有田城へ押し寄せて来たのだが、無傷の吉川本軍が主力となってこれを痛烈に破り、己斐宗端、香川行景らを敗死させた。両軍の士気と勢いの違いが如実に現れたと言っべきであろう。

その翌々日、武田軍はついに今田城からも兵を退き、南方へと退却していった。

ともあれ、元綱や元就にとっての長い一日は、こうしてようやく終わったのである。

有田中井手の合戦は、後に中国地方の覇者となった毛利元就の初陣として歴史に名高い。多治比の分家に過ぎぬ身分で寡兵の毛利軍を率い、安芸守護であった武田元繁の強大な軍勢を打ち破り、総大将の元繁まで討ち取ったのである。それまでまったく無名だった元就の名は、この一戦で近隣に雷鳴のように鳴り響いた。彼の飛躍の端緒となった記念碑的合戦と言っている。

この合戦は、彼我に圧倒的な兵力差がありながら、一戦のもとに敵の総大将を討ち取ったというその類似性から、後の織田信長の「

桶狭間の合戦「に比され、後世、「西の桶狭間」などと呼ばれるよ
うになる。

第二章 西の桶狭間 祭りの後

多治比元就は、初陣にして安芸の守護 武田元繁を討ち取り、味方に倍する強大な武田軍を撃退してのけた。過程はどうあれ結果としてそれは事実であり、その結果だけを知った毛利の領民たちは、当然ながら驚き、かつ喜んだ。毛利家の領地には非戦闘員だけで三千を越える人々が暮らしている。そこへ凱旋した元就は、雪崩のごとく押し寄せる賛辞と賞賛の美辞麗句の中で、溺れるような数日を過ごすことになったのである。

しかし、戦勝の酒宴の席にあっても、領民たちの歓呼の声に囲まれても、元就の顔は誇らしげでも嬉しそうでもなかった。常にお愛想ほどの微笑か、あるいは控え目な苦笑を浮かべるのみで、合戦の事はほとんど口にしようとしない。

とても褒められたものではない。

というのが、元就の偽らざる気持ちだったのである。

有田の合戦は、結果だけを見れば確かに勝ち戦であり、戦史にも稀な形の大逆転勝利であったわけだが、元就にとっては苦すぎる敗戦の記憶でしかなかった。

あの合戦いひくは大失敗だった。

元就は、何の策もなく武田の大軍に正面からぶつかり、当然の帰結としてまさに完膚なきまでに叩きのめされたのである。死力を尽くして敢闘し、善戦した毛利の軍兵たちは、実に三人に一人が首のない遺体となつて有田の地に倒れ、夫を喪った妻、息子を亡くした母、父親を奪われた子供を、無数に作り出すことになった。すべて、自分の采配の誤りのせいだと元就は思っている。

あの時、もし刑部少輔が突出するような愚を犯さなければ・・・。

そのことを考えると、元就は背筋が寒くなる。

毛利軍が総崩れとなつた時、武田元繁が豊富な軍兵を再編して整

然と追撃を行っていたら、毛利軍は確実に壊滅していたはずである。毛利方の軍兵たちは散り散りになって吉田まで逃げ帰らざるを得ず、武田軍は一気に毛利の本拠まで雪崩れ込んで来たであろう。吉田の毛利兵はそのほとんどが有田合戦に参加しており、ごくわずかな守備兵を除けばまったく出払っていたわけで、郡山城を守り切ることさえ困難だったに違いない。最悪、毛利はそのまま滅んでいたかもしれないのだ。

有田城救援のために武田軍と戦うという選択自体は、間違っていない。なかつたと元就は思っている。そのことは信じているが、有田の合戦の戦い方は、一から十まで間違っていた。彼我の戦力差を冷静に見詰めることをせず、中井手の合戦の勝利によって得た「勢い」に安易に乗ってしまったのだ。

騎虎キコの勢い、というヤツだ。

ひとたび虎の背に乗って駆け出してしまえば、止まることはできない。止まれば虎に食い殺されるわけで、それこそ死ぬまで走り続けるしか選択肢はないのである。その勢いを、元就は「戦機」だと思いついてしまった。

いや、あのとき私はそう思っていたのだらう。

希望的な観測。自分に都合のいい状況判断。唾棄すべき楽観と思考停止。その無様な帰結として、元就は数百人の毛利兵を死なせてしまった。彼らの死が無駄だったとは思わないし、思いたくもないが、元就がより正しい采配を振っていたなら、あれほどの人死に出すこともなかったはずなのだ。

私が無能であったばかりに……。

元就は、愚痴屋である。済んでしまったことでもウジウジと思いつ返し、牛の胃のように思考を反芻はんすうしては後悔し、懊惱おうれうするというような、実に粘性で面倒な性格をしている。もっとも、この男は口数自体がそもそも少ないし、家来の前では毅然とした主人の姿を演じてもいたから、そうと知る者は継母であるお杉とその侍女たちくらいであったが。

あの時、せめて四郎の献策を容れておれば……。

有田城でも、吉田に帰ってからも、元就は何度も心中で悔やんでいた。

中井手の南方の小山に陣を敷き、冠川を堀に見立てて防戦に徹していれば、その夜にも吉川本軍が援軍にやって来ていた。決戦するなら、それからすべきであったのだ。あるいはあくまで守戦に徹し、武田軍に時間を浪費させるという手もあった。たとえ勝敗がつかずとも、雪が落ち始めても有田城を抜けぬとなれば、敵も遠からず撤兵せざるを得なかったであろう。

物事には必ず裏表があり、禍福は常に紙一重である。もし元就がそのような守勢の戦略を採っていれば、確かに被害をより少なく武田軍を撤兵させることができていたかもしれないが、しかし、そうなれば敵の総大将である武田元繁を討ち取るという奇功もなかったであろう。武田元繁は毛利家にとって当面の最大の敵であり、たとえ敵軍を撃退できたとしても、元繁を生かしておけば来春にも再び攻勢に出て来たに違いないのである。あの男をたった一度の合戦で殺し得たことはまさに僥倖と言うしかなく、勝敗が逆転したことで武田方の多くの武将が命を落とすことになり、結果として武田氏の威勢は大いに衰えた。その意味で、元就は最小の被害で最大の戦果を挙げたとも言えるのだ。

元就は、政・戦略において徹底した合理主義者だが、一方で熱心な念仏信者でもあり、神仏の導き 超自然的な力の働きや、運命宿命といったものに対しては真摯な受容力を持っている。自分の采配の誤りに気付きながらも、その誤りによつて最大の強敵を除くことができたという現実に、奇妙な不思議さを感じざるを得ない。その不思議さを、人々は元就の「武運」とか「天運」といった言葉で片付け、無邪気に戦勝を喜んでいるわけだが、愚痴屋の元就にすれば そういうものの存在を心の片隅で確かに感じながらも 外野の声に素直に同調するような気にもなれないのだった。

あんな合戦は、二度としてはならない。

勝敗は廟算たむけにおいて決すべきものであり、合戦は勝つべくして勝つということではなければならぬのだ。元就はそれを言葉として、知識として知っていたいながら、流されるように勝算の立たない決戦に突き進んでしまった。知ってはいても、解ってはいなかったということであろう。

成功から得るものよりも、失敗から得るものの方が遙かに多い。いずれにしても元就は、この華々しくも無様な初陣によって、実に多くの教訓を得ることになった。

教訓ということ言えば、終戦後の志道広良の処置が、政略家としての元就にとつて大きな教材になった。

有田合戦が終わり、有田城で休んでいたその夜に、諸将の前で広良はこう言ったのである。

「大内のお屋形に逆らい、国を乱す元凶であつたとはいへ、刑部少輔は歴とした安芸の守護でござる。これを私闘によつて討つたとなれば、毛利の家に対する幕府の聞こえも悪しかろうと存ずる」

広良は、幕府の管領代たる大内義興よしおきにただちにこの合戦の報告を行ひ、大内義興から將軍・足利義植よしたねへと話を通してもらひ、武田元繁を討ち取つたことに対するお墨付きを貰つておくべきだと主張した。將軍から御教書みぎょうしょでも貰えれば、この合戦は毛利氏と武田氏の私闘ではなく、幕府のための忠戦、天下のための義戦であつたということになり、名分が立つ。そのことが世に聞こえれば毛利家の（同時に元就の）評判もより高くなるであろう。筋目を尊ぶ謙虚さを示しておくことは、世間に対しては大義を、権力者たちに対しては可愛げを見せることになり、いずれ損はない。

なるほど、そういうものか……。

元就は未だ二十一歳の若者であり、しかもその身分は多治比の分家に過ぎず、毛利家の当主ですらない。当然ながらその世間は狭く、これまで「天下」を相手にして思考を巡らすというような必要もな

かつたから、政略家としての広良の視野の広さと老獪さに大いに感ずるところがあつた。

広良が熱弁を振るっている時、元就の弟である元綱は、勝手にやってくれ、とでも言わんばかりに、興のなさそうな顔で大あくびをしていた。

元綱という男は、合戦に関する話題となれば眼を輝かせ、常に強入れ込みを見せるのだが、事が政略、政治といった分野になると途端に関心を失うようなところがある。特に家中の小政治や、内政、雑務といった分野の話題には、ほとんど興味を示さない。

困つたヤツだ。

その様子を横目で眺め、元就は内心で苦笑した。

軍事というのはあくまで政治の一部であり、合戦をするためにも様々な根回しや準備という意味で政治が不可欠である。たとえば兵糧や馬糧、武具や矢などが不足を起さぬよう常に備えておくことも内政の重要な仕事であるうし、あるいは重臣たちの融和を図つたり家中の結束を高めたりといった小政治もなおざりにして良いものではないであろう。戦争は大家の総合力で戦うのであり、いざ合戦という時に準備ができていなかったり、家中の重臣たちがいがみ合っているようでは、それこそどうにもならないのである。

そういう点に関する配慮が、元綱には生まれつき欠けているようであつた。

元綱の関心は、戦い、勝つ、というところにしかないように見える。戦場に立ちさえすれば比類ない働きをしてみせるといった強烈な自負はあるものの、それ以外のことに關しては、やや潔癖で一本気な、世慣れぬ若者というに過ぎなかつた。元綱が己の領地を持たず、家来を抱えていないこともその一因であろう。元綱は部屋住みの御曹司であり、領地の徴税に心を砕いたり民心の掌握に気を配ったりする必要がなく、家来たちを養つてゆくといったことの気苦勞も味わつたことがなかつた。

苦勞人の元就から見れば、ひとつ年下のこの弟は、「自分の好き

なことには熱を入れるが、嫌いなことには見向きもしない」という意味でいかにも貴公子然として、どこか危なっかしい。元綱は確かに優れた戦術家であり、そのことは今度の合戦で元就も実感として知ったが、政治家としてはまだまだ幼く映るのである。元就の本領は戦術よりもむしろ戦略、政略の分野にこそあり、ことに政略家、政治家としての元就は、弟より遙かに精神年齢が高いのだった。

「執権殿の申されること、いかにも道理にも情理にも叶うておる。さっそくそのようにしよう」

元就は自ら親書をしたため、それを持たせた使者を京へと走らせた。

この政略は図に当たった。大内義興の取り次ぎによって事態を知った將軍・足利義植は、上野民部大輔を上使として吉田へ派遣し、元就の功を賞してくれたのである。

「武田の事、国中静謐せいひつのために差し下されしところ、かえって兵乱を企て、下知に背いたにつき、毛利がこれ（武田元繁）を討ち果たしたことは、忠節ちよつ少なからずと御感遊ぎよかんばされ

上野民部大輔は上機嫌に將軍の言動を伝え、その御内書を届けてくれた。

元就たちが家を挙げてこの貴人を饗応したことは言うまでもない。將軍の上使がわざわざ吉田まで下向したという事実が、この合戦の勝利をいっそう意義深いものにした。

毛利本家の御曹司として、伸びやかに、なに不自由なく育てられた元綱と比べると、元就のこれまでの人生は、より過酷で、悩みの多いものだった。

五歳の時に母を、さらにその五年後には父を、相次いで亡くした元就は、わずか十歳で多治比の領主となり、猿掛城主になった。無論、十歳の子供に家政が執れるはずがないから、宿老の井上元盛という老人がその後見役となり、一切を取り仕切っていたのだが、この井上元盛が野心を起こし、多治比の領地を横領し、元就を城から追い出すということがあった。元就が十二歳の頃の話で、頼りの兄と主立つ重臣たちは大内義興の上洛戦に従軍して国を空けていたから、この不正を糾^{ただ}せる者は誰もいなかったのである。

この時、孤児同然になった元就を守り育ててくれたのが、死んだ父の側室であつたお杉の方だつた。お杉は百姓に頭を下げて多治比の片隅に廢屋同然のあばら屋を借り、貧窮に耐えながら女手ひとつで元就を養育した。子を産めなかつたお杉は、元就の父が死んだ時点で毛利家との縁は切れており、二十代の若さとその美貌を考えればしかるべき相手と再婚するのが自然であつたのだが、この女性は血さえ繋がらない亡夫の継子^{まじこ}を懸命に守り、己のすべてを捧げて尽くしたのである。

家来に裏切られて領主の座を奪われた幼い元就が、それでも過度な人間不信に陥らず、その人格に大きな歪みや圭角^{けいかく}を生じさせずに済んだのは、お杉の方の存在があつたればこそであろう。元就のこの不遇期は井上元盛が病死するまで二年ほど続いたのだが、子供心に乱世の厳しさと人の表裏を痛感させるには十分であつた。

苦難は人を必ず成長させ、その精神を強靱にする。元就の場合、抱いた危機感は武技を練^ねることに向かわず、大人に負けぬ知恵を身に付けることに向かつた。これは元就の性格というより、元就を庇護したお杉の意向であつたろう。元就が武張つた評判を立てれば、「やがて虎に育つかもしれぬ」と井上元盛が必ず警戒する。そうなれば、最悪の場合、元就は暗殺される危険さえあつた。この哀れな幼童が多治比の領主として復帰するには、兄や重臣たちが京から帰国するのを待つ以外に方策はなく、それまでは井上元盛を刺激せぬように大人しく過^こしているしかなかったのである。こういう知恵

の巡らせ方は、子供にできる事ではない。

お杉の勧めに従って寺に通うことにした元就は、好きだった歌物や王朝物の書物を脇に置き、外典げてん（儒書、史書、兵書など仏典以外の書物）を実に真剣に学ぶようになった。少しでも早く大人になるうと、子供なりに必死だったのである。周圀やぶから文弱と揶揄されるようになったのもその頃だが、幸いにも十四の時に井上元盛が病で頓死し、元盛の横暴を憎んでいた井上一族の人々の尽力もあって、元就は兄の帰国を待つことなく多治比の領主に返り咲くことができた。

この二年の歳月が、元就の精神に与えた影響というのは計り知れない。

下克上で主人の領地を横領する家来があれば、血も繋がらぬ孤児のために無償で人生を捧げようとする女もいる。朋輩の悪を見て見ぬ振りして平然としている武士もあれば、幼い領主の悲運に同情して涙を流してくれる百姓もある。元就は子供心に人というもの不思議さをつくづくと考えさせられた。と同時に、己の能を隠すこととつかい 韜晦することが、己の身を守ることになるという事を学んだ。

忍従を強いられ、命の危険にさらされながら、そのなかにあつて人知れず静かに己の爪を研ぎ続けた少年は、人変わりしたように物静かになり、その後は妙に老成した思慮深い青年へと成長を遂げたのである。

元就は兄の存命中はその影のように振る舞い、家中でもまったく目立たなかった。いざ合戦という時は留守役ばかりを命ぜられていたために戦場に出たことさえなく、当然ながらその名は周囲にほとんど聞こえていなかった。

それだけに、有田の合戦が近隣の人々に与えた衝撃は、ことさら大きなものとなった。

「多治比の元就とは何者ぞ？」

「あの毛利興元おきもとの舎弟であるらしい」

「武田元繁は五千とも六千ともいう大軍を集めておったそうだ。これを破るほどの男が、これまで名も知られずにおったのか」

「まだ二十歳そこそこの若造だという。しかも此度が初陣であったらしい」

「京にある公方（將軍）さまが、わざわざ毛利に上使を遣わし、戦勝を賞したというぞ」

噂は風のように四方に飛び、安芸どころか隣国の人々もこの合戦の詳報を知りたがった。

吉田から二十五里（百キロ）を離れた出雲にも、この話題に耳を傾けている男がいた。

「ほう……」

よく陽の当たる小書院である。初老のその男は文机ぶんぐいの上で墨を磨すっていた手を止め、呟くように言った。

「刑部少輔が死んだか……」

「は。武田は翌日の合戦にも敗れ、有田から兵を退いたよしにごいざいます。武田に従った熊谷元直、香川行景、己斐宗端こいひらも討ち死にしたとのこと」

「多治比の元就 か……」

どこか眠たげな、茫洋とした雰囲気の男とは対照的に、その背後

に座した話者は、いかにも切れ者といった印象を人に与える。眉が濃く、彫りが深く、鼻筋も通つたなかなかの美男で、年はまだ二十代半ばといったところであろう。

「何年前、『鬼吉川』が、元就の嫁を我が家から迎えたいと申ししてきたことがあつたな」

「は。そのように伺っておりますが、私はその頃はまだ家督を継いでおりませず、詳しくご内談には与あずかつておりませぬゆえ」

「ああ、そうであつたかな」

男は再び静かに墨を磨り始めた。

「人の世とは思ひもかけぬことが起こるものよ。あの刑部少輔を討つほどの男が安芸におろうとはな。元就がそれほどの武将なら、あのとき一族の端の者でも我が養女にして、くれてやれば良かったか……」

「お言葉ではございますが、此度のことは、元就が云々というよりは、刑部少輔が愚かであつたと申すほかござりませぬ。総大将ともあるう者が、一騎駆けの葉武者の真似をして討たれるなぞ、笑い話にもなりません。猪はしょせん猪。人並みの知恵がなかつたというだけでございましょう」

墨を磨る手を止めぬまま、男は窺めるような口調で言った。

「わしは京で刑部少輔に逢つたことがあるが、思慮もあり、勇気もある、なかなかの男と見えた。そう悪し様に申すものではない」

「は……」

「能^の登^のよ、お前は人に優れた知恵と才があるが、いささか知恵が鋭すぎ、才が走りすぎるのが珠^{たま}に瑕^{きず}よな。それが若^{わか}さというものかもしれないが……」

若^{わか}さ

男は苦笑し、羨ましいことだ、と声に出さずに独語した。

男はこの年で六十になる。老人と呼ぶには眼光が若々しく、その容貌にも枯れたところはない。体力的にもまだまだ衰えてないつもりだが、髪や髭にはずいぶん白いものが目立つようになった。

「その元就、いくつであつたかな」

「確か二十一かと……」

「若いな。ゆくゆくお前のよき敵手になるのではないか？」

その台詞は男にとっていわば知的会話のあやで、それ以上の意味はなかった。しかし、後々の事を思えば、何やら予言めいた響きがあつたと言えなくもない。

「まさか」

若者の口調にわずかに嘲^{わい}いが籠^{こも}つた。

「毛利のごとき吹けば飛ぶような小^こ家^{やけ}、問題にもなりますまい」

「そつかな……」

男は口元だけで晒^{わら}ったが、その背を見詰める若者からは、表情までは窺い知れなかった。

「生まれたばかりの虎は猫と区別がつかぬが、育てばやがて人の手に負えぬようになるぞ」

「元就とか申す男、虎だと申されますか」

「さて、どうであろうかな……。ただ、誰しも最初は雛^{ひな}から始まるものよ。このわしにしても、今でこそ出雲の国主のような顔^かをしておるが、お前ほどの年の頃は、国を追われ、城も兵も失い、河^か原^{わらもの}者^{もの}同然の境涯であつた」

この初老の男 名を尼子経久^{つねひさ}という。

出雲の守護代から戦国大名へといち早く脱皮し、近隣を切り取つて山陰山陽に巨大な武威を張り、後に「十一州の大守」と仰がれた稀代の英雄である。後世において、北条早雲、斉藤道三と共に、「戦国の世を拓^{ひら}いた男」と評価されている。

「畏れながら、お屋形さまの偉業は、何人^{なにびと}にも真似できぬことでございましょう。比べることさえ無意味かと……。」「

男はその迎合には乗らず、興を失つたように話題を変えた。

「石見のことが済めば、次は安芸じゃ。刑部少輔が死んだとなれば、国人一揆の者たちが大内に味方し続けるようでは、少々面倒だな」

同盟した武田元繁に安芸を取らせ、安芸の大小名を遠隔支配するのがこの男の青写真であったが、元繁が死に、武田氏が大いに衰えてしまったことで、その戦略は大きな変更を強いられることになっ

た。

「元就が猫にせよ虎にせよ、いずれ飼ひ馴らさねばなるまい……」

「

呟いた男の眼が、その一瞬、猛禽もうきんのように鋭くなった。

若者 亀井 能登守のこのがみ 秀綱は、主人の背に向けてすぐさま叩頭くわうとうした。

「さっそく手を打ちまする」

安芸の国人一揆の衆を大内氏から引き離し、尼子の味方に付ける。それが自分の仕事であると、この明敏な若者は理解した。

羽田重蔵が可部の高松山城下に入り、熊谷孫次郎の屋敷を訪ねたのは、有田で合戦が行われた日から十日ほど後のことであった。

「重蔵殿！ よう無事で……！」

玄関まで駆け出して来た孫次郎は、顔をくしゃくしゃにして喜び、重蔵の肩を抱くようにして屋敷に招じ入れた。生き残った孫次郎の家来たちも主人と感動を共にし、口々に重蔵の生還を祝ってくれた。重蔵は離れに通され、すぐさま酒が運ばれてきた。

「お互い生き残り、こうしてまた酒を酌み交わせて、よかった」

注いでもらった酒を美味そうに飲みながら、重蔵が言った。

「ああ、わしがこうして生きておるのは、まったくおぬしのお陰よ」

この言葉に誇張はない。孫次郎は重蔵を命の恩人であるとさえ思っていた。

「して、おぬしはあれからどうしておったのだ？」

「三十人ばかりの兵に囲まれ　しばらくは斬り防いだが、どうしようもなかった……」

重蔵は経緯を短く説明した。

「あの一軍を率いておったのが、例の今義経　毛利の四郎　元綱殿だったのよ。わしは四郎殿に降り、命を助けられた」

「そうであつたか……」

孫次郎の声に落胆と申し訳なさが混じった。

降る、というのはこの場合、「その相手の奴隷になる」といった意味を含んでいる。相手に生殺与奪の権を認め、命だけは助けてもらう、と考えればいい。それでも重蔵が熊谷家の歴とした武士であったなら、たとえば人質交換などの政治的措置で自由を取り戻す可能性も皆無ではないのだが、雑兵が捕虜になつたような場合、それは「人」とは看做されず、下人（奴婢）同様に扱われ、奴隷売買の対象にさえなる。

「では、捕らえられた後、毛利方の目を盗んで遁れおせたというわけか」

「いや、そうではない」

重蔵は一息に盃をあおった。

「四郎殿というご仁は、若いながら器量が大きい。わしのことなど眼中にないというだけかもしれないが」
「従いたければ従え、逃げたければ逃げよ」
なぞと申して、わしは縄を掛けられることさえなかつた」

「ほう……」

「合戦が終わって、毛利軍が吉田へ戻るといので、わしは吉田まで従った。そこで四郎殿に断りを入れ、ここへやって来たという次第だ。わしが生きておるといふ事を、孫次郎殿に報せておきたかつたでな」

「なに？　すると、おぬしは吉田に戻る気であるのか？」

「ああ、明日にも帰るつもりだ」

静かに頷く重蔵に、孫次郎は声を荒げた。

「馬鹿な。せつかく自由の身になったのではないか。その四郎殿か、その仁にしても、おぬしが戻って来るなどとは思つておるまい」

よほど優しい人柄なのか、単に甘いだけなのかは知らないが、自由にしてやるつもりで重蔵を送り出してくれたと考えるのが自然である。わざわざ奴隷になりに戻るなど、馬鹿正直にもほどがある。

「いや、これはわしの心持ちの問題なのだ。あの仁からは大きな恩を受けてしまったからな。それを返さずにおいては、わしの気が済まんということさ。気が済んだら、その時は吉田を離れるつもりで

おるよ」

事情を理解した孫次郎は、重蔵の律儀さには好意と敬意を感じつつも、なお釈然としない。重蔵ほどの男が下人になるといふのがいかにも惜しく、納得できないのである。まして、毛利氏と熊谷氏は敵同士であり、ひとたび合戦となれば、戦場で重蔵と殺し合うことになるかもしれないのだ。

しかし、人にはそれぞれの生き方があり、それぞれの筋の通し方がある。重蔵がそう決めたというなら、孫次郎にもどうしてやりようもない。

孫次郎は、あらためて重蔵に頭を下げた。

「わしを援けてくれたがために、上北面の末裔^{すえ}たるおぬしほどの男が、あたら下人同然の境涯に落ちた。詫びのしようもない」

「よしてくれ。わしはもともと浮浪の身よ。境涯というなら、さほど悪くもなっておらんさ。それに、あの今義経 四郎殿という仁は、なかなか面白い」

重蔵はことさら気軽な笑みを浮かべて言った。

男惚れした、とまでは思わぬが、あの男の下でまた戦をやってみたいという気持ちがないわけでもない。今まで主取りをしたことがなく、人に仕えたことのない重蔵だが、あのような男の家来になるのは侍にとって幸せなのではないか、とさえ思っているのだった。

重蔵は久しぶりに孫次郎と差し向かいで心ゆくまで語り、かつ呑んだ。話題は自然と、今度の合戦とその後のことが中心になる。

「おぬしも知っておろう、水落源允殿^{みづおちのじゆん}、大坪孫四郎殿、細迫弥七、末田源内、桐原与七郎 家中で武勇を誇った者たちがみな死んだ・

・・・」

いずれもあの御前試合に出て来た勇者たちである。なかでも重蔵と戦った水落 源允 直綱は、熊谷元直の叔父であり、孫次郎とも血縁がある。家中随一の槍仕で、安芸でも名の知られた侍大将であった。熊谷元直と共に彼らを喪ったことはまさに痛恨事と言っしかなく、熊谷家の武威は無残なまでに衰えていた。

「殿のご遺体さえ城にお帰しすることができず、わしは奥方さまにも若君にも合わせる顔がなかったわ」

孫次郎は自嘲気味に笑った。生き残ってしまった者の悲哀と言っべきであろう。

「その夜のことじゃ。奥方さまが供も連れずに城を抜け、たった一人で中井手に向かわれた。翌日になってそのことを知らされた我らは、驚くやら慌てるやらで、えらい騒ぎであった」

帰ってきた家来たちから事態を聞かされた熊谷元直の妻は、熊谷の大将ほどの者の遺骸が戦場に放置されていることの無念さと不甲斐なさに哭いた。居ても立ってもいられず、たった一人で馬を飛ばし、中井手まで出かけたのだという。

距離的に見て、元直の妻が中井手に着いたのはどんなに早くても翌日の昼以降であろう。元就は有田合戦が完全に終息した後、敵・味方を問わずこの合戦で戦死した者たちを丁重に弔っているのだが、この時はまだ中井手の戦場の遺体はそのまま放置されていた。すでに百姓や土匪どひによって武具や衣服を剥がれた首のない裸体が、二百以上も河原に転がっている風景を想像すればいい。

元直の妻は、女手ひとつでいちいち遺体を確かめて回り、その中から執念で夫の遺骸を見つけ出した。長年連れ添った夫の身体であり、首がなくともそれと判ったものらしい。しかし、女の非力では、

遺体を馬に載せることがどうしてもできなかつた。元直の妻は涙を流しながら夫の身体から片腕を切り落とし、その腕を胸に抱いて馬に乗り、高松山へと帰った。熊谷氏の菩提寺である観音寺には「清泉」と呼ばれて現在まで残ってる湧き水の井戸があるのだが、彼女はその水で夫の片腕を洗い清め、熊谷氏累代の墓に入れたのだという。

「そのようなことが……」

戦国の世にも珍しい美談である。重蔵も思わず感動した。

ちなみに熊谷元直の妻は、安芸の豪族である香川氏の娘である。香川氏当主の香川行景は熊谷元直とは義理の兄弟で、元直と共に武田元繁の腹心と呼ぶべき男であつた。有田の合戦では行景は己斐宗端らと遊軍を形成し、武田元繁が戦死したその翌日、元繁の弔い合戦を期して有田城を攻め、奮戦の末に討ち死にしている。彼女にとつて有田の合戦は、夫と兄を同時に死なせた悪夢のような出来事であつたに違いないが、家臣たちの前では取り乱すこともなく、高松山城の女城主として気丈に振舞っているのだという。

「武家の妻女の鑑かがみだな……」

あの御前試合の時、殿舎の広縁に座つた夫人の凜とした姿を重蔵は思い出していた。

「若君はまだ元服さえ済ませておられぬ。奥方さまが毅然としておつてくださることで、我らは救われておるのだ」

孫次郎は詠嘆するように言った。

その翌日、重蔵は吉田へ戻った。

高松山から可部街道を取り、北東へ六里ばかり歩けば吉田である。

毛利家の関所は、元綱から貰った手形を見せることで、往路と同様、難なく抜けることができた。

元綱の屋敷は、毛利氏の本拠である郡山の西尾根　天神山の山麓あいのちの相合と呼ばれる地にある。

重蔵がその裏門を潜った時、辺りはすでに火灯し頃であったが、元綱は数人の近侍と共に裏庭にいた。この寒空にもろ肌脱ぎになり、薪を割っている。ずいぶん長い間その作業を続けていたのであろう、身体中から汗が噴き出していた。

「四郎殿」

近付いて声を掛けると、振り向いた元綱は怪訝な顔をした。

「おぬし　本当に戻って来たのか」

「はい」

笠を取った重蔵は、慇懃に頭を下げた。

「四郎殿から受けたご恩は、我が命でござる。この命をもって返さねば、我が一代では返し切れぬやもしれませぬが……。恩を返せたと思える日まで、お仕えさせていただきとござる」

「律儀というか、酔狂な男だな……」

元綱はやや呆れたように言い、額の汗をぬぐって磊落な笑顔を見せた。

「まあ、気の済むようにするがいい。だが、俺は部屋住みの身で領地を持たぬゆえ、禄は与えてやれぬぞ。ここに住むというなら飯く

「らいは食わせてやるがな」

「それにて十分」

若者の笑顔に釣り込まれたように、重蔵も笑った。

第三章 乱世の梟雄 出雲の神女

部屋は薄暗かった。

夜具に仰向けになった女は、己に覆いかぶさる男の頭越しに、暗い天井を眺めていた。

つまらない男……。

頭の中で何度そう呟いたか解らない。

しかし、そこは仕事である。愉悦をこらえるようにときどき表情を歪ませ、腰をくねらせ、白い喉を反らせ、声をあげてやった。男という生き物の悦ばせ方を、女はすっかり体得していた。

男はますます昂ぶり、息を荒げ、身体を性急に動かした。どこか鯨なますに似たこの四十男の顔は、実にだらしなく弛緩している。天井に映る影の濃淡が、灯明の火のわずかな揺れに合わせてゆらゆらと変わり、闇色の生き物が蠢うごめいているように見えた。

男が夢中になればなるほど、女の心は冷え冷えと醒めた。

殺そうと思えば、こんな男、いつでも殺せる……。

たとえば袴はちまきの端に短刀でも忍ばせておけば、男の胸なり首なりを突くのは造作もない。この乱世に、我が城を持つほどの男がこんなうつけかと思えば、失笑さえ湧いてしまう。

男はほどなく一人で満足し、転がるように女から身体を離れた。

隣で仰向けになるや、すぐに躰をかき始める。酔いも回っていたのだらう。

もう寝ついたの？

女はやや閉口した。二度、三度と付き合わされるよりは、寝てくれた方がよほどマシではあるが、女の目当ては、この男の寝物語を聞くところにこそあったのである。聞きで語かたられる他愛ない会話、愚痴や不満、自慢や悪口といったものの中に、女の仕事にとって重要な情報が含まれている事が多いのだ。

が、眠ってしまったものを起こすこともできない。

女は「ぐったりした」という体の演技をやめ、白小袖の乱れを手早く直すと、男の身体に夜着を掛けてやり、襖を細く開けて静かに部屋を出た。次室で舟を漕ぎつつ座っていた宿直とくのちの若侍に軽く会釈し、与えられた部屋へと帰る。水でも浴びたい気分だった。

「おゆきさま、お帰りかえ？」

小女こめんなの幸さちが寝返りをうち、眠そうに夜具から身体を起こした。気配で眼が覚めてしまったらしい。

「起こしちゃったね。ごめんね。私も休むから、幸ももう一度お眠り」

頭を優しく撫でてやると、安心した童女は崩れるように夜具に沈み、すぐに規則正しい寝息を立て始めた。

そろそろここを離れようかしら。

自らも夜具にもぐり込み、ゆきは考えている。

引き留められ引き留められているうちに、滞在は半月ほどになつていた。あの男 高橋 弾正左衛門だんしょうざえもん 盛光は、ゆきとの情事がよほど気に入ったらしく、夜ごと、それに昼間にも二度、ゆきを求めてきた。身体を重ねるうちに、ゆきは男の性格や嗜好、器量などをおおよそ掴んだ気になっており、もうこれ以上得るものがないように思えたのだ。

石見国邑智郡いせのちを本貫とする高橋氏は、石見と安芸に広大な領地を持つ大豪族である。弾正左衛門 盛光は、高橋氏の当主・興光おきみつの伯叔父に当たり、この城 鷲影城わしかげの主だった。権力者にはよくある型だが、女をモノのように扱う男で、睦言むじこのひとつも吐こうとしない。そのくせ欲望が強く粘質な性格で、己の情欲を満たすまでゆきを離さないのである。

いかに仕事とはいえ、ゆきもいい加減うんざりし始めていた。

ゆきは、出雲の「歩き巫女」である。

歩き巫女というのは、諸国をわたり歩き、村々を歴訪しては出雲大社の神符を売るのが表の稼業で、霊能者として諸人の願いに応じ、病氣平癒や雨乞いなどの祈禱をし、あるいは神や死者の霊をその身に降ろしたりもする。求められれば酒の席に侍り、白拍子はやくしのように歌い、舞い、踊る。相手と条件の次第では色を売ることもある。この時代、巫女は、傀儡師くくし（人形使い）、放下僧ほうかそう（曲芸師）、河原者などと同様、賤しき者とされているのだが、加持祈禱といった特殊な技能を持っていることもあり、神に仕える者としてそれなりの尊崇を受けてもいた。余談だが、後年、出雲の歩き巫女の中から阿国おくにという歌舞の達者が出て、「ややこ踊り」を創始し、それが現在まで続く歌舞伎の元になったりしている。

もういいわ、あの男は……。

明日、この城を発とう、と、ゆきは思った。

たっぷりと礼銭をはずんでもらわねばならない。吹っかけてやった時、男はどんな顔をし、どんな言葉を発するだろう。それを見ることが、ゆきがこの城でする最後の仕事になる。

つらつらと考えているうちに、すこしまどろんだ。

目覚めたとき、すでに夜は白々と明けていた。

朝餉を終えたゆきは、旅の身支度を整えると、城主の高橋盛光の居室を訪ね、当地を立ち退くことを告げた。

「何もそう急がずともよいではないか」

盛光はゆきになじり寄り、その手を取って抱きすくめ、裾の間に手を入れてきた。

「もうしばらくここにね。いや、いつそわしに奉公せぬか」

女奉公人 すなわち妾になれ、ということである。

男に身体を預け、その手を自由にさせながら、ゆきは平静な声で言った。

「出雲の巫女は旅の空が棲家。一所に長う留まりますと、出雲の大神からお叱りを受けます。そうなれば、お殿さまのご武運は必ず悪しゅうなりましょう」

無論、口から出任せである。しかし、戦場往来の武士は多くが「運」の信奉者で、縁起を担ぐものだから、武神の加護を失うぞ、と脅してやれば、たいていの男が二の足を踏む。ゆきは何といつても神に仕える神女かななぎなのである。その言葉には、ある種の通力がある。

「左様が……」

男は、ゆきの言葉というより、自分に向けられたその冷たい眼に興を醒ましたのかもしれない。ゆきの身体を離し、近侍を呼んで、礼錢を言い値で払ってやるよう命じた。

「いずれまた、当地に巡って参ることもございました。その折は、よしなにお頼み申します」

型通りの挨拶をして御前を退いたゆきは、老僕いちべえの市兵衛、小女の幸と共に、鷲影城の城山を下った。

「さすがに大身の高橋さま、金払いはようございましたな」

旅の荷を背負った市兵衛は、ほくほく顔である。

市女笠を傾け、ゆきは老人を睨んだ。

「ゆきは出雲の神女^{かんなぎ}じゃ。遊び女^めか何かのように申すな」

ゆきは遊女ではなく、あくまで巫女なのである。男たちはゆきの身体を通して神と交わり、その加護を賜り、神への捧げ物として謝礼を払うのだ。身体を売って銭を稼いだような言われ方をされるのは心外であった。

ゆきはこの年、二十四になる。

物心ついた頃から旅の空にいて、正式に巫女になってから数えても九年をこの稼業で暮らしている。十代の頃は華奢^{きしゃ}で薄っぺらい身体つきであったが、二十歳を越えた頃から肉置き^{しじ}が豊かになり、いかに男好きする色気を身に付けるようになった。

土地土地の権力者や有徳人（金持ち）たちは、ゆきの美貌を見ただけで、たいてい喜んで寝床と食事と礼銭を提供してくれた。無論、男に騙されたことも一度や二度ではないし、旅の途中で難儀に遭うようなこともあったが、そういうさまざまな経験をすることで、ゆきは女として、歩き巫女として、一人前になれたと思っている。

ゆきたちはその足で、この村　羽須美^{はすみ}村の鎮守の社へと向かった。土地の神主にお礼と出立の挨拶をするためである。

古びて苔むした鳥居を抜け、鬱蒼と繁る雑木の林に入ると、橡^{くぬぎ}の大樹の根に男が腰を下ろしていた。行商人のような格好をし、大きな木箱を背に担いでいる。やや小柄だが、引き締まった身体つきの三十男である。頬が薄く、顎が尖り、苦み走った渋い面相をしている。

ゆきたち一行を見ると、男はゆっくりと立ち上がり、尻の砂を払った。

「蓮次^{れんじ}か……」

市女笠をあげ、ゆきが言った。

幸はこの男が怖いらしく、市兵衛老人の足にすがりついている。

「存外、長く掛かったな。あの城は居心地がよかったかい」

ぞんざいな口調で男が言った。

「よいものか。引き留められておっただけじゃ」

ゆきも負けずにぶっきら棒な声音で返した。

「お前さんの身体がお気に召したか。まあ、気持ちは解らねえでもないが」

男は下卑た笑いを浮かべながらゆきに近付き、肩を抱こうとした。

「よせ」

面倒そうにその手を外す。

「お前の相手は遊び女か傀儡女まひく（宿場女郎）が相応しかろう。たつて出雲の神女かんなぎと寝たいというなら、永楽銭の百枚も持って来よ」

「古い馴染みを相手に、権高う出るじゃねえか。いつぞやの夜は、一枚の銭も取らなかつたくせによ」

「あの時は私の方に男が要り用だったというだけじゃ。別にお前ではなくともよかつた」

「憎つたらしい女だよ……」

男は苦々しげに顔を歪めた。

「戯おどれに来たわけでもなかるう。用件を言つたらどうじや」

男は左右を窺い、近くに人がないことを確認すると、声を落とすと言った。

「首尾の委細は、今宵、お前さんが泊まった宿で聞く。それと」

男は市兵衛老人に顔を向けた。

「市兵衛爺じい、夜までに城内の絵図を描いておいてくれ」

「承知した」

「曲輪の並び、櫓、兵糧蔵、井戸の位置などを、知り得た限り、なるべく細かくな」

「ご念には及ばぬ」

「では、また後で　な」

男は背の木箱を背負いなおし、鳥居へ向かって足早に歩きだした。ゆきはその背をしばらく眺めていたが、

「鉢屋はちやめ……」

と憎々しげに呟いた。

出雲に、「鉢屋」と呼ばれる集団がある。

元々は飯母呂いほのろという名の血族集団で、平将門の乱のときに将門に

味方して敗れ、領地も地位も剥奪されて、いわゆる賤民の境涯に落ちた。定住する土地を失った飯母呂の人々は、生きてゆくために多種多様な方法で糧を得ねばならなかった。狩りを行って獣の肉を食べ、その皮をなめし、武器を作って売った。あるいは鉄を掘り、製鉄の技術者となり、あるいは笛、舞い、傀儡（人形使い）などの芸能の腕を磨き、それを売り歩いた。近隣で合戦が起これば、戦場の諜報、偵察、連絡、敵の後方霍乱などの仕事を大名から請負って、銭を稼いだ。なかには野盗になった者もあり、山賊になった者もあったであろう。「鉢屋」という名の由来は、京の五条河原に住み着いた者たちが、托鉢たくはつや門付けに歩く時、叩く鉦かねがなかったため鉢を叩いて歩き、「鉢屋者」と呼ばれるようになったからだという。飯母呂一族の人々は全国に散ったが、その多くが山陰へと逃れ、出雲に土着したらしい。

いずれにしても、出雲では、飯母呂一族の末裔たちが「鉢屋」という名で根付いていたのである。

この時代、出雲の覇権は尼子氏が握っているのだが、太守である尼子経久が、この鉢屋衆と繋がっていたことはよく知られている。

尼子経久は、出雲守護代・尼子清定の嫡子であった。若き頃、父の清定が守護の京極氏から独立し、出雲を横領しようとして、幕府から討伐を受けた。幕府軍に月山富田城がっさんとたを攻められ、出雲から追放されたのである。清定は各地を漂泊するうちに病死したという。

弟の久幸と共に流浪の身となった経久は、十数人の尼子家譜代の郎党と連絡を取り合い、鉢屋がま賀麻党の棟梁であった鉢屋弥之三郎やのやぶさぶに助力を仰ぎ、彼らの力を借りて、奇策によって月山富田城を一夜にして奪い返した。尼子経久の自立と発展を陰で支えたのが鉢屋衆であり、経久は賤民階級だった鉢屋の主立つ者たちに領地と武士の身分を与え、これを家中に組み込んだのである。以来、鉢屋衆は、尼子氏の裏面の仕事を引き受けて暗躍する存在になっている。平たく言えば、尼子氏子飼いの忍者集団と考えていい。

出雲の「歩き巫女」は、この鉢屋衆と繋がりがあある。諸国を渡り

歩く彼女たちは諜報要員としてまさにうってつけであり、国々の人情、政情、地理、大名小名の噂話といった情報が、鉢屋衆を通して尼子氏へと吸い上げられる仕組みになっていた。

ゆきが、高橋氏の領内を歩き、弾正左衛門 盛光に近付いたのも、無論、偶然ではない。

「高橋盛光に探りを入れよ」

それが、ゆきに与えられた裏の仕事だったのである。

鷲影城がある羽須美村は、石見と安芸と備後の国境である。

羽須美村を発ったゆきたち一行は、江の川に沿う形で南東に道を取り、備後の三次^{みよし}に入って投宿した。神主、僧侶はもちろんだが、巫女、修験者、神人^{しんじん}なども、各地の関所を素通りすることができる。神仏に仕える人々は「方外^{ほうがい}の者」であり、罪さえ犯さなければ浮世の法に縛られることはないのである。

その夜、ゆきたちの部屋に、蓮次がその言葉の通りに忍んで来た。どこから入り込んだのか、宿の者は気づきもしない。

ゆきは、知り得た高橋盛光の人となりや、高橋家中の噂話などを蓮次に報告した。

高橋氏は、隠居の久光が実質的な権力を握っている。先代の元光は三年前に備後の三吉氏との合戦で討ち死にし、その跡を継いだのが現当主の興光である。興光の「興」の字は西の大大名・大内義興から貰った偏諱^{へんき}であり、高橋氏が大内氏の与党であることは言うまでもない。

興光は久光の次男の子で、長男・元光の子ではなかった。この点、家督相続の筋目に乱れがある。久光は政治力もあり合戦も巧みな出来物で、彼が暗然と実権を握っているから高橋家中の不満はまだ顕在化してはいないが、興光が横から宗家を継いだことを面白く思っ

ていない者は家中に少なくなかった。

なかでも露骨に不平を鳴らしているのが、弾正左衛門 盛光である。

盛光は久光の弟の子で、久光の甥に当たる。盛光から見て当主の興光は従兄弟の子であり、まだ若輩の興光が、元光の子を差し置いて高橋の当主になったことが納得できぬらしい。

正嫡の万千代殿ならともかく、なぜ興光ごときが……。

という不満が、盛光にはある。万千代の幼少を理由に別の当主を立てるといふなら、年長で世故にも長け、武勇の実績もある自分の方が、宗家を継ぐにはよほど相応しいではないか

しかし、高橋氏の一族間では長老・久光の威光が圧倒的に強く、誰もこれに異を唱えられない。盛光も久光にだけは頭が上がらず、そのやり方を真つ向から批判することもできないから、興光に対する不平を鳴らすくらいしか仕様がなかったたのであろう。

盛光の不満は、かなり根が深い。鷲影城の酒席に侍り、盛光と閨を共にし、耳にした言葉の端々から、ゆきはそのことを看取していた。

蓮次は、帳面になにやら書き付けながら熱心にゆきの話を聞いていた。一通り聞き終えると、市兵衛老人が描き上げた絵図と一緒にその帳面を油紙に包み、木箱の二重底に大事そうに仕舞った。

木箱を背負って立ち上がり、蓮次が言った。

「『海蛇のお婆』からの言伝だ。このまま南の安芸へ入り、吉田へゆけ、と」

「安芸の吉田 毛利さまのご城下じゃな……」

ゆきも何度か通ったことがある。毛利氏の居城である郡山城の山麓すがに清神社という大きな社があり、その神職の顔は憶えていた。

「毛利の当主は幼少で、重臣の合議で家政を執っていると聞く。必ずしも一枚岩じゃねえだろう。毛利は大内の与党だが、重臣の中には尼子寄りの者もあるはずだ。誰が尼子に心を傾けてるか、誰と誰の仲が良いか、悪いか　そういったことを、探ってもらいたい」

「・・・・・・・・・・」

ゆきが返事をせずにいると、

「俺はいつたん出雲へ戻る。備後の情勢をしばらく探ってから吉田へ入るつもりだ。繋ぎはその時に入れる」

蓮次はそう言い捨て、足音も立てずに部屋から出て行った。

「因果な稼業でござるな・・・・・・・・」

市兵衛老人がゆきをいたわるように言った。

出雲大社の神使は「海蛇」である。出雲の巫女を裏で束ねる長老は、代々「海蛇の婆」と呼び慣わされている。その命令だと言われれば、従わぬわけにはいかなかった。出雲大社の神領家は尼子氏に従属しているから、出雲大社に属する歩き巫女は尼子氏の間接的な支配を受けざるを得ないのである。

「因果でない稼業なぞ、この世にあるうか・・・・・・・・」

ひとつため息をつき、ゆきは夜着を掴んで横になった。

市兵衛老人は灯明を吹き消し、幸がすでに眠っている次室へと消えた。

ゆきは父親の顔を知らない。母親はおふゆと言い、やはり歩き巫女であった。若い頃は出雲一の美女と謳われ、その踊りの巧みさと

歌声の美しさは同業の者からさえ尊敬を受けた。ゆきは幼い頃におふゆから引き離され、別の巫女のお付きの小女として春から秋まで諸国を歩き、冬は故郷の村で他の娘たちと共に歌や踊り、必要な教養などを仕込まれた。

故郷の村では、歩き巫女が生んだ娘、孤児みなしご、捨て子、人買いから買った童女などが、常時、数十人養育されている。その中で器量の良さそうな者、踊り、歌に才能がありそうな者が選ばれ、巫女としての教育を受けるのである。ゆきは巫女以外の生き方を知らなかったし、同じような境遇の仲間もいたから、自分が取り立てて不幸だと思つたことはない。

年長けてゆきが女になり、男を知つた頃に、おふゆは廃業した。現今いまは故郷の村に腰を落ち着け、歩き巫女として必要な技能を娘たちに仕込みながら暮らしている。この稼業の女はほほ例外なく親との縁が薄く、ゆきにとっておふゆは母というより芸事の師匠である。現職の「海蛇の婆」が引退すれば、次はおふゆがその座に就くのではないかと取り沙汰されたりしているが、ゆきはそのあたりの事にはほとんど興味が無い。

ただ旅の空を自由気ままに歩いて暮らしたいと思つていただけである。

ゆきにとって色を売るとは、感覚的に自由恋愛に近い。ゆきほどの美貌があれば、歌舞や祈祷などの収入だけで十分食べていけるのである。意に沿わぬ男と枕を交わす必要などはない。気に入った男とだけ、納得した相手とだけ、寝る。そして、契ちぎつた男に運を憑つけてやる。それが歩き巫女としてのゆきの誇りであり、その矜持であつた。

だから、雲の上の連中が決めた男と寝るよう強要されることは、ゆきにとって尊厳と神性を踏みじられるような不快さがある。特に、あの高橋盛光のような男に抱かれることは、仕事とはいえやり切れなかつた。

「吉田では誰に取り入るうか……」

声に出さず呟き、ゆきは夜着をかぶった。

ゆきたち一行は、備後の三次からさらに江の川に沿って安芸に入り、穴戸氏の甲立を経て、吉田の城下に到った。たまたまゆきに月の障りが来てしまったために、道中、巫女としての仕事ができず、余計な長逗留をすることもなかった。

季節は、永正十五年（1518）の春である。

郡山は新緑に溢れ、山桜が満開であった。郡山の山裾を多治井川が洗い、光の帯となって可愛川へと流れ込んでいる。野には、菜の花やスミレやカタバミやウドといった花々が、その短い命を謳歌するように咲き誇っていた。

不浄の血を憚り、しばらく城下の旅籠に逗留したゆきは、月のモノが終わるのを待つて清神社へと参り、まず神主に挨拶した。

神主はゆきのことを憶えてくれており、出雲大社の神符を売ることの許可と、滞在中の便宜を約束してくれた。広い境内の中には社務所と共に社僧や神人（下級神職）たちが住まう長屋が幾棟か建っているのだが、その二部屋をゆきとその従者のために提供してくれるという。

「以前に見たそなたの舞いは見事であったな。どうであろう、ちょうど田植えの時期でもある。舞台はこちらで設えるゆえ、神前で豊作祈願の神楽を奉納してはくれまいか。お城下の百姓たちにも喜ばれよう」

願ってもない申し出である。ゆきは喜んで承諾した。

二日後、清神社の社殿の前に即席の舞台が作られた。

境内にいくつもの篝が据えられ、夕闇の頃になってそれに火が入

れられた。夜の帳とじが降りるにつれ、境内が幽玄の雰囲気ふんぎを帯び始める。

話を聞きつけた百姓や武士、城下の男女が、昼の仕事を終えて続々と境内に集まり始めた。舞台の周囲は黒山の人だかりとなり、人垣ひがきが幾重にも取り巻いている。

やがて、清神社の神人たちによって神楽が演じられた。

「ちはやふる 玉の御すだれ巻き上げて」

儀式舞である『神降ろし』から始まり、『塵倫じんりん』、『天の岩戸』、『五穀種元』といった演目が続いてゆく。

ゆきは、純白の千早に赤い袴をつけ、金の天冠を頭上に戴いた清らかな巫女姿である。演目の終盤で、出雲の巫女神楽を三番演じたお囃子は、幸が龍笛りゅうふえを、市兵衛が太鼓を、それぞれ務める。ゆきが舞い始めると、境内に集まった群衆は息をするのも忘れ、篝火かきに浮かび上がるゆきの美貌とその舞いの美しさに酔いしれた。

奉納神楽は深夜まで続き、大成功のうちに終わった。

思いのほか多くの賽銭さいせんが集まったようで、神主も上機嫌である。

ゆきたちに酒食を饗し、礼銭れいせんをはずんでくれた。

ゆきは、心地よい疲れに酔いが加わり、夜具に入ると落ちるよう眠った。

ひどく淫よこしまらな夢を見た。

夢の中で、ゆきは逞しい男に犯おとされていた。

いや、ゆきを犯していたのは、あるいは武神であったかもしれぬ。己の神域に、出雲の巫女が眠ねっていることを幸い、清神社の祭神である素戔嗚尊すさのおのみことが自分を犠牲いけにえになされたのではないか。

神女かんなぎらしく、ゆきは眠りながらそう思った。そう思い至ると、「神」を受け入れるのが当然であるように思えた。

眠りと覚醒の端境はなかいで、酔いも手伝てでんって意識が朦朧もうろうとしたまま、ゆきは悩乱なやみした。「神」はときに激しく、ときに緩やかに、ゆきを責

め立てた。鋭い愉悦が幾度も背筋を突き抜け、眠っているはずなのに意識を失いそうになった。

律動的な動きの中で、「神」がゆきの両手を掴んで引いた。その握力、腕の痛みによって、ゆきは不意に覚醒した。

闇の中で、男の影に犯されている。

そういう自分を発見したが、犯されていることなど、この瞬間のゆきにとってはどうでもよかった。ゆきは自ら男の腰に足を絡め、さらに深く男を迎え入れ、我を忘れて声をあげた。

男の所作がさらに荒々しくなった。

不覚にもゆきは何度か気を失い、ことが終わったときにはしばらく起き上がることさえできなくなっていた。

ゆきがようやく呼吸を整え終えたとき、男はすでに衣服の乱れを直して胡坐をかき、静かにゆきを見下ろしていた。

ゆきは夜具の上に横臥したまま、横目で男を睨んだ。

「無体なことをなさいます……」

「無体？」

男の影が、驚いたように聞き返した。

「無体であったかな。そなたは悦んでいたように思えたが……」

その台詞にわずかな笑いが混じっている。

「ゆきに断りもなく、勝手に抱き遊ばしたのは無体でございました。ゆきがどうであったかとは関わりがございません。」

拗ねた口調にも、知らず知らずのうちに艶めいたものが籠った。まだ身体の奥に痺れるような余韻が残っている。

「ゆきと申すのか。よい名だ。そなたの肌は吸い付くように触り心地が好かったが、その色も雪のように白かるう。この暗がりでも、肌だけが浮き上がって見える」

言いながら男は立ち上がった。納戸の棚を探つて灯明皿を探し出し、火具を取り出して灯明に火を灯す。

闇が去ると、男の顔がゆきの前に露わになった。

思いのほか男が若いことに、まずゆきは驚いた。女の扱いの巧みさから、それなりに成熟した中年男を予想していたのである。歳は二十歳前後であろう。やや細面で陽によく焼けている。男っぽい顔立ちだが、大人になりきれぬ童臭が目元と口元に残っていた。月代さかやきは剃らず総髪を後頭部で無造作に束ね、顎のあたりに不精髭がまばらに生えている。その相貌の精悍さは、どことなく狼の野生を連想させた。

男はゆきの傍に再び腰を下ろし、その姿をまじまじと眺めながら、

「舞つておるときも美しかったが、こうして近くで見ると、また格別だな」

と嬉しそうに言った。

汗で湿った白い肌が、灯明の明かりを受けてぬめるような光を放っている。だらしなく乱れた白小袖の襟元からは、形の良い乳房が覗く。艶やかな黒い髪。上気し、薄赤く染まった頬。目の切れは長く、黒目がやや大きい。その瞳が、上目遣いでじつと男を見詰めている様が、たまらなく色っぽい。

「喉が渴いたであろう」

若者は気軽に再び立って、土間に置かれた水桶から水を汲んで来

てくれた。

木碗の水を飲み干したゆきは、ようやく人心地ついた気分になり、白小袖の乱れを直した。

「お名を、お聞かせくだされませ」

「毛利の四郎 元綱」

あ、つと、ゆきは声を呑んだ。さすがにその名前くらいは知っている。毛利氏の先代・興元おきもとの実弟で、毛利家の御曹司ではないか。

「毛利さまと申せば、この吉田のご領主さまではございませんか。その御曹司たるお殿さまが、このように夜這いなどと、ご身分に関わりましょう。村の若衆でもございませぬのに……」

「夜這いは若衆ばかりがするものでもあるまい。京の畏かしこきあたりでも、妻問いと言えば夜這いと、平安の昔から相場が決まっている」

「まあ、ゆきのような賤せんのしき女を、妻にしてくださいさるのですか？」

無論、本気で言っているわけではなく、言葉の遊びである。が、声が弾んでしまっていることをゆきは自覚した。

「俺は別に構わぬが、正室に迎えるとなれば家の老臣おとこなどもが許すまいなあ……」

「ゆきのような素性賤せんのしき者が、お武家さまのお正室やぐさまにして頂けるなぞとは思っておりませぬ。お側室はたひで十分でございしますのに」

「尼子の謀者を側室そはむらに飼う、か。それも面白いかもしれんな」

尼子の謀者　　という言葉に、ゆきは再び声を呑んだ。

「ゆきを謀者と申されますか」

「出雲の巫女は、当然、尼子の謀者であろう。そうではないのか？」

「ゆきは出雲の大神に仕えております。俗世の権力に仕えておるわけではございませぬ」

同じことさ　　と言って元綱は笑った。

「そなたのように諸国を巡っておる巫女は、出雲にはどれほどおるのか？」

「さて。どれほどでございましょう。ハキとは解りませぬ」

「五十人も百人もおるのか？」

「ほほ。五十人かもしれませぬし、百人かもしれませぬ」

擲掬かいつかうような笑みが、ゆきの頬かほに浮かんだ。

それを見て、若者もわずかに苦笑した。

「尼子経久殿は、さすがに稀代の傑物だな。出雲に居ながらにして、天下に起こる様々なことを細大漏らさず知ることができる。この一事だけでも、英雄と呼ぶに足る」

大内氏の与党である毛利氏の御曹司から意外な言葉が出たことに、ゆきは軽い驚きを覚えた。若者の表情を注意深く眺めながら、何気

ない口調で訊ねる。

「出雲のお屋形さまが、お好きなのでございますか？」

「ああ、好きだな」

元綱は躊躇なく言った。

「武士と生まれたからには、死ぬまでにせめてあれほどの仕事を成したいものだ」

尼子経久は、浮浪人という徒手空拳の境涯に落ちながら、わずか数年のうちには月山富田城を回復し、出雲一国を平らげ、さらに昇竜のような勢いで近隣を切り取るうとしているのである。その奇跡のような英雄譚は、中国地方の武士ならば知らぬ者はない。

この若者は、一人の武士として、憧憬に似た感情を抱いているらしい。

「お、いかん。明るくなってきたな」

すでに明け方なのであろう。部屋の中の闇が薄まり始めている。

「後朝きんあさの別れ、というヤツだ」

元綱は立ち上がり、悪戯っぽく笑った。

「まだ別れの涙で貴方さまのお袖を濡らしておりませぬに……」

ゆきの台詞は、『新古今』にある「讚岐たぬま」という女流歌人の和歌

を踏まえたものである。「夜はまだ明けていないのに、後朝きぬぎぬの別れには早すぎる」という意味を込めたのだが、男は和歌を嗜たしなむ風流は持ち合わせていなかったらしい。不思議そうに首を傾げ、女を泣かすのは好きじゃないな、と見当外れなことを言った。

「また夜這うとするぞ」

元綱は灯明の火を吹き消すと、軽い身ごなしで部屋から出て行った。

夜具に、男の匂が残っている。

それに包まって、もう一度寝よう　と、ゆきは思った。

第三章 乱世の梟雄 笛師銀兵衛

尼子氏が支配する出雲は、神国である。

平安時代中期に編纂された『延喜式神名帳』えんぎしきじんめいちようによれば、朝廷から「官社」とされた神社は全国・六十余州で二千八百六十一社を数えるが、出雲一国だけで大社・二座二社、小社・百八十五社もの記載がなされているという。

それらの社やしろのなかでもつとも長い歴史と高い格式を誇るのは、言うまでもなく出雲大社（杵築大社）きつきである。ヤマト王権の時代、いわゆる『国譲り』の交換条件として建立されたと伝えられるこの雄大な社は、神無月には日本中から天神地祇てんしんちぎが集まり、様々な事柄を話し合う「神議り」かみばかが行われるとの伝承があり、そのため出雲では十月を特に「神在月」かみありつきと呼び、神を迎える祭りと神を送り出す祭りが執り行われたりする。

出雲は神々とは切つても切れない土地柄であり、したがってこの国を治める代々の守護は、寺社行政にはとりわけ頭を痛めねばならなかった。当時の寺社は、それぞれが領地とそれを守る兵力を持ち、守護不入の特権さえ持ったいわば独立国なのである。なかでも神代の昔から出雲の王であった出雲大社の神領家（国造家）しくぞうの権威と影響力は絶大で、これと敵対したのでは、出雲に暮らす者たちを治めてゆくことなどできるはずもない。

出雲の現支配者である尼子経久は、月山富田城を奪い、自立を果たすや、いち早く娘を国造家（千家と北島家の二家）にそれぞれ嫁がせ、これを味方に抱き込んだ。その後も社殿を造営したり社領を寄進したり課役を免除したりして、出雲の大神の機嫌を取り続けている。

経久は、出雲大社と日御碕神社ひのみさきをとりわけ崇敬し、寺院では出雲第一の古刹にして出雲大社の別当寺でもある鰐淵寺がくえんじの興隆に力を入れた。尼子氏は経久一代で急速な発展と伸長を遂げた出来星大名で

あるだけに、これに反感を持つ旧勢力は少なくなかった。反抗する勢力をいちいち攻め潰していたのでは手間が掛かり過ぎるし、人心に恨みを残すことにもなるから、これをなるべく味方に取り込んでゆくという方針を取るしかなく、ことに神国である出雲では、強大な寺社勢力とは妥協していかざるを得なかったのである。

一般に山陰地方は国人領主たちの気性が荒々しく、独立心に富んでいる。しかも出雲は神領・寺領が多く、国人たちはそれらを横領することによって力を蓄えているから、寺社との折衝は利害が複雑に絡み合い、ややこしく繁多な政治調整が不可欠であった。この面倒な仕事を、寺社奉行として実際に統括していたのが、亀井能登守^{かみ} 秀綱である。

亀井氏の系図というのは、実はよく解らない。宇多源氏・佐々木氏の支流であるとされ、あるいは紀州の鈴木氏から出たという説もあるが、近江・佐々木氏の被官（家来）であったことはどうやら間違いない。いつの頃か佐々木氏の出雲守護代である尼子氏と婚姻関係を結び、出雲に移って尼子氏の一門衆に名を連ねるようになった。

この時代を生きた者として、文献上では永綱、安綱、秀綱、利綱などの名が知られている。利綱は秀綱の弟であるようだが、秀綱と安綱の関係が曖昧で、『戦国人名事典』などでは安綱を秀綱の父としている。しかし、『竹生島奉加帳』^{ちくぶじま ほうかちょう}という一次資料などから推察する限り、安綱は秀綱の子とする方が無理がなさそうである。この物語では、秀綱を永綱の子とし、秀綱の嫡子を安綱として話を進めたい。

秀綱の父である永綱は、尼子経久の月山富田城奪回戦にも協力し、以来、三十年にわたって主君・経久をよく輔^{たす}け、ことに民政、寺社行政などの分野で活躍し、尼子家の老臣筆頭^{おきな}とまで目された。

この時代、永綱は五十代半ばであったろう。五年ほど前に隠居し、亀井家の家督と尼子家の老臣の座を息子の秀綱に譲っていた。

秀綱は、まだ二十代半ばと若い。武人としての実績は多くはない

が、大内義興よしおきが上洛の軍を発した時、主君の尼子経久に従って京へ従軍したとする記録が残っているから、十代の頃から経久に近侍していたのである。行政官としては実に伶俐な頭脳を持っており、経久の若き懐刀といふべき存在であった。

亀井氏は出雲郡の須佐すさに領地を持ち、高櫓城に本拠を据え、隠居の永綱がこれを守っている。息子の秀綱は月山富田城の城内に屋敷を構え、普段はそこで暮らしていた。

尼子氏の主城である富田城は、中海なかつみを北に眺める月山を要塞化した巨城で、中国地方でも屈指の堅城として知られる。城主である尼子経久は、普段は山腹に切られた山中御殿という広大な曲輪の殿舎に住んでいる。山中御殿の背後の「七曲り」と呼ばれる急峻な登山道を登りつめると、月山の最高峰に作られた「詰め城」へと到ることが出来る。詰め城は籠城のための施設で、三の丸、二の丸と連郭式に曲輪が切られ、頂上部に本丸が置かれていた。

その日、亀井秀綱は、政庁といふべき山中御殿の御用部屋でいつものように政務をし、夜になって大東平おおひがしなりという曲輪にある自邸に帰った。

着替えを済ませ、酒を酌みつつ夜食をとり、さらに書院で訴状などをあらためているうちに、亥いの刻（午後十時）を過ぎた。

時報の鐘を遠くに聞いて、秀綱は仕事を切り上げた。この青年は時間に妙に律儀で、平時は四季ごとに決まった時刻に眠り、決まった時刻に起き、決まった時刻に登城する。

秀綱が書院を出ると、手燭を持った侍女が暗い廊下をさらさらと渡って寝所の次室の前まで先導した。女を帰し、次室に詰めている宿直とくのちの家来に一声掛け、寝所の襖を開けた時、秀綱は、あっ、と息を呑んだ。

そこに、見知らぬ男の背中があったのである。ボサボサの蓬髪を無造作に束ね、黒い装束をまとった中年男が、ふてぶてしくも夜具の上で胡坐をかいていた。

それを見た宿直の若侍が仰天し、刀を取って殺到しようするのを、

秀綱は無言のまま手で制した。

「おぬしは誰じゃ？」

と静かに声を掛けたのだから、秀綱にも胆力がある。が、その声には少なからぬ恥辱と怒りとが含まれていた。武家の屋敷というのは城のようなもので、屋敷の最奥にある秀綱の寢所にまで曲者の潜入を許したということは、城攻めで言えば本丸を乗っ取られたに等しい。

秀綱は脚を前後に開いて心持ち腰を落とし、左手に下げている刀の鯉口を切った。相手の出方によっては、一刀で斬り捨てるつもりである。

「ああ、能登殿か」

四十年配のその男は、鷹揚に身体の向きを変え、秀綱に向かって軽く頭を下げた。

異相である。

額が広く、煮しめたように肌の色が黒い。刷毛で描いたような太い眉の下にはぎよろりとした大きな目があり、鷲鼻の小鼻が左右に張っている。やや受け口で、しっかりした顎にいかにも強そうな髭がびっしりと生えていた。どこか狒犬に似ている。

「銀兵衛と申す鉢屋者でござる。笛師を生業なりわいとしており申す」

「笛師？」

秀綱は怪訝な顔をした。

「その笛師が、なぜわしの寢所におる」

「須佐のお父上の元へ参つたところ、自分はすでに隠居したゆえ、息子のところへ行けと申された。それで、こう参上つかまつた次第でござるよ」

「父上が・・・？」

「鉢屋の笛師銀兵衛と言えば、お聞き覚えはござらんかな。わしの親父殿は、出雲のお屋形がこの城を取るときに、鉢屋衆七十余名を率いて大働きに働いたものでござるが　古き話ゆえ、お若い方々はすでにござらないか」

「ああ」

その話なら聞いたことがある。

尼子経久が月山富田城を奪還した時、鉢屋衆の棟梁である鉢屋弥之三郎に助力を仰いだのだが、弥之三郎の命を受け、実際に鉢屋衆を率いて働いた頭目が、銀兵衛という名の男であつたという。

富田城では毎年元旦に「万歳」という祝賀行事があり、鉢屋衆は城内に招かれ、千秋万歳を舞いと囃子で賑やかに祝うのが恒例になつていた。経久はこのことを利用し、鉢屋衆七十余名に鎖帷子を付けさせ、武器を隠し持たせ、元旦の夜明け前に城内に潜入させたのである。城衆は恒例の祝賀ということもあつて、何の警戒もせず鉢屋の者たちを城内に入れた。彼らは不意に叛徒となつて警備の土を襲い、城内の各所に放火し、城門を開いて待機していた経久ら五十数人を城に導き入れ、富田城陥落に決定的な役割を果たしたのである。

つまり銀兵衛は尼子家にとって大功ある者であり、経久は鉢屋弥之三郎と共に真っ先にこの銀兵衛に土分を与え、召抱えようとしたのだが、銀兵衛はかたくなにそれを拒み、元の笛師に戻つたのだと

いう。すでに三十年も昔　秀綱にとっては生まれる前の話であり、銀兵衛という男がその後どうしているのかまったく知りもしなかったし、気に掛けたこともなかった。

「おぬしは、あの銀兵衛の子、というわけか」

「いかにも」

銀兵衛は面白くもなさそうに頷いた。

「おぬしと我が父と、どのような繋がりがある」

「わしの親父殿は、卑賤の身ながら、能登殿のお父上から昵懇にして頂いておつたと聞いてござる。親父殿はそれを恩に感じ、ゆえにご当家に関わりある話を耳にすれば、それが良きにつけ悪しきにつけ、お父上に密かに報せておつた。わしは、まあ、飛脚のようなものでござるよ。親父殿に命ぜられたゆえ、京より駆けて来た」

「京？」

「親父殿は、京の四条河原で笛を吹いて暮らしてござる」

ここまで聞いて、秀綱にもようやく事情が見えてきた。どうやら父は、旧知の銀兵衛を通じて京に集まる天下の風聞を集めていたものらしい。その使いがもたらした情報を、自分に届ける方が良いと判断したのである。

それはそれで良いとしても。

「そういうことならば、なぜわしの家来に来意を告げ、案内を乞わぬ。いや、そもそもどうやってご城内に忍び入ったのか」

「わしは鉢屋者でござるゆえな。案内を乞うたところで武家の屋敷は玄関さえくぐれず、座敷にも上がれず、下人同様、庭に座らねばならぬハメになる。それも業腹ゆえ、こうつかまつった。城入りはまあ、道楽のようなものでござるよ。鉢屋者がいかに城入りに巧みであるかは、尼子の侍ならばようござる存じであるう」

秀綱は男を睨みつけた。

「無礼ではないか」

「寢所は、女と戯れ、虚仮こけになり果てるための場所じゃ。礼なぞにこだわるは無粋でござるうよ。まあ、そのように怖い顔をせず、ま
ず座られたらどうか」

人を食った男だが、どうやら自分に対して害意はないらしい。警戒を解く気にはなれぬものの、それでも秀綱はやや安堵し、男の前に右膝を立てて座った。いつでも男を抜き打てるよう、己の左側に刀を置いている。

「それで、京から持ってきた話とは何じゃ」

男は口元だけにニタリと笑った。

「大内義興よしおきのことではござるよ」

「大内」

「義興め、この年の内にも国へ帰りますぞ」

「なに？」

秀綱の両の目が鈍く光った。

西の大大名・大内氏は、尼子氏にとって当面の最大の敵である。

大内義興が將軍候補である足利義植よしたねを奉じて上洛し、十年近くも京に居座っていてくれたからこそ、尼子氏は中国地方で大いに勢力を伸ばすことができた。

その大内義興が、ついに京を捨てて領国に戻って来るというのか。

京の情報は、鉢屋衆を通じて巨細となく常に仕入れていたつもり
の秀綱ではあったが、そこまでの確報はまだ掴んでいなかった。

「確かか。どこから漏れた話だ？」

「泉州堺せかいの商人あしひらの筋でござる。義興め、京を離れるにあたり、唐土たうどとの勘合貿易を独占しようとしておるようござってな。唐船の往来が絶えれば、堺の富は枯れまするによって、商人どもは戦々恐々」

「・・・・・・・・」

堺は日本でもっとも富裕な都市であり、大内氏と敵対している細川氏との繋がりが深い。その商人から出た話というなら、信憑性は高い。

秀綱は思わず考え込んだ。

在京十年、大内義興は莫大な軍費を投じて幕府を援けてきた。しかし、京では細川氏とその与党が粘り強く抗戦を続けていたし、將軍・足利義植が幕府の実権を握って専横を振るう大内義興を憎んで仲たがいするようないこともあって、義興の天下取りはさしたる成果もあげることができないでいた。この間、中国地方では、大内氏に

従っていたはずの尼子氏、武田氏などが次々と叛き、大内氏の支配体制が大いに揺らぎ始めている。このまま京に居座り続け、敵対勢力の伸長を座視していれば、いずれ自分の領国までが蚕食さんしょくされるであろう。実際、大内氏の分国である石見や安芸、備後などの政情は近年は非常に不安定で、豪族たちの中には大内氏の傘下を脱し、勃興する尼子氏に乗り換える者まで出てきている。京で権力遊びにうつつを抜かしている場合ではなくなったのである。

しかし、大内義興にすれば、このまま手ぶらで京を去ったのでは何のために上洛したのか解らない。せめて勘合貿易の権利を細川氏から奪い去り、それがもたらす巨大な利益を独占しようと、管領代の権力を使って横車を押しているのである。

「転んでもタダでは起きぬというわけか。どこまでも欲の深い男よ・・・」

「じゃが、その欲深のお陰で、尼子は肥りなさった。義興が京なぞに上らず、地道に中国筋で国の切り取りを続けておれば、今頃は出雲のお屋形も、義興の沓くつを舐めておったやもしれぬ」

無礼な物言いをするな　と秀綱は怒鳴りたかったが、寢所に礼を持ちこむなと釘を刺されたのを思い出して、不快さをぐつとこらえた。

「話はそれだけか」

「もうひとつ」

男は指を一本立てた。

「能登殿のお父上より、能登殿の仕事を援けてやってくれと頼まれ

申した」

「なに？」

「いや、本心を言えば気の進まぬ話でござったが、我が親父殿のこともあり、お父上の頼みを無下に断ることもできかねた。それで、ご子息を見てみてから返事を決めると申し置いて来たのだが、さて、どうしたものでござるかな」

その物言いの不遜さに、秀綱は顔を歪めた。鉢屋者は賤民である。賤民とは犬猫にも等しい人間以下の存在であり、そもそも歴とした武士を相手に対等の口を利くことなど許されるものではない。

鉢屋の分際で、何様のつもりか……！

という憤りが、秀綱にはある。

亀井家は出雲守護代の名門・尼子氏の一門衆にして重臣筆頭の家柄であり、秀綱は若いとはいえその当主である。生まれついでの人と言つてよく、人間じんかんに揉まれて苦勞をしたというような経験もない。自然、誇り高く育ち、恥辱に耐えられるような性質を持っていなかった。

「わしを愚弄するか……！」

「愚弄などはせぬ」

「銀兵衛とやら、お前の父には確かにご当家に対し大功がある。が、だからと言つて、わしがお前に恩を着せられる憶えはないぞ」

「恩を着せた憶えなぞ、わしにもない。気が進まぬと申しただけじや」

「お前なぞに援けてもらわずとも、鉢屋の者には事欠かぬわ」

月山富田城には鉢屋平と名付けられた曲輪がある。鉢屋衆で士分を与えられた者たちが郎党を引き連れてそこに住んでおり、諜報、謀略などといった裏の仕事を担っているのである。

「ああ、確かにおり申すな。わずかばかりのお扶持ふちに随喜し、忍び武者の在り方も鉢屋の誇りも忘れ、侍の真似事をして遊んでおる惚ほけ者どもが」

「……!!」

「物の役に立つとも思われぬが、まあ、能登殿がそう言われるなら、それはそれでよい。わしもその方が気が楽じゃ」

「どういうことだ」

「鉢屋にも色々あるということでごさるよ。我が親父殿なぞは、尼子が興おころつが滅ぼつが、鉢屋とは関わりがないと申して、仕官の話はなを蹴おつて鉢屋であることを貫いた。それが賢さかしい生き方であるかどうかはともかく、親父殿は人間じんかんで笛を吹いて暮らすことに足りておる。出雲のお屋形も、そういう親父殿の生き方を諒となされた。お屋形は人として器量おあが巨おほきく、親父殿もその点は大いに心服しておったが お若い能登殿は、お屋形に遠く及ばぬな」

「おのれ」

秀綱は激怒し、立ち上がるや刀の柄に手を掛けた。

「おお、怒ったか」

銀兵衛は満面で笑い、胡坐の姿勢からひよいと背後に飛んで立った。意外に小柄で、背は五尺そこそこしかない。

「お屋形は古今にも稀な傑物じゃ。それに劣ると申したとて、能登殿を貶けなしたことはなるまい」

「鉢屋風情が、不埒ふいぢな口を」

「そう、そこじゃ。鉢屋というだけで人として遇せず、畜生じふせいのように見下しておる。その分だけ、能登殿はお屋形に及ばぬと申すのよ」

言うなり、銀兵衛は足指で掴んだ夜具を空中に蹴上げた。

秀綱の視界が夜具で覆われた瞬間、寝所の隅で灯っていた灯明がふたつ共に消え、闇が来た。

「………！」

秀綱は抜き打ちに夜具ごと男を薙いた。が、手ごたえはない。

「今宵はこれで去る」

声が頭上から降ってきた。

「しかし能登殿よ、わしがその気なら、お手前の首と胴は、今宵のうち離れておったぞ。恩に着よとは言わぬが、人の値打ちを身分で計るような者に、鉢屋者は心服せぬということは、憶えておかれたがよい」

宿直の若侍が次室にあつた灯明を掴んで寢所に駆け入り、主人を庇うように前へ出た。闇は払われたが、男の姿はすでにどこにもなかった。幻術まほうにでも遭あひまつたような気分である。

「狐狸こじめ……！」

やや呆然とした秀綱は、苦々しげに呟いた。

すぐさま家中総出で家探しが始められ、天井裏から床下までが調べ尽くされた。積もつた埃ほこりの跡や破られた蜘蛛の巣の様子などから、いったん寢所の天井裏に遁のがれて別の部屋に降り、畳をめくつて床下から逃げたのではないか、ということは解つたものの、銀兵衛の姿は当然ながら影さえなく、その行方は杳ようとして知れなかった。

翌朝、秀綱は、登城するなり、主君・尼子経久に拝謁を願い出、許された。

「ほう、銀兵衛が、な」

経久は眠そうな目を若者から外し、開け放たれた明り障子から庭の景色を眺めた。三十年前　月山富田城を奪回した往時を思い出してでもいるのか、懐かしげな微笑が口元に浮いている。

「その者、先代・銀兵衛の子であるよしにて、我が父の使いと称して我が屋敷に参りました」

さすがに寢所の中まで侵入を許したなぞとは言えない。が、大内義興の帰国の風聞に関しては報告しておかねばならない。

「大内義興がいよいよ京を捨てるか」

経久はさしたる感想も漏らさなかった。すでに義興が在京して十年である。遅かれ早かれ帰国するであろうことは解っており、覚悟もできていたのである。

「あくまで風聞に過ぎませぬゆえ、さつそくに京に人を遣り、実相を確かめまする」

当然だ、と言わんばかりに、経久は静かに頷いた。

「それはそれとして、能登よ」

「は」

「安芸の国人一揆の者どもは、どうなっておる」

「は……」

秀綱は苦虫を噛み潰したように顔を歪ませた。

「色々申し送ってはおりますが、高橋の隠居が頑として靡なびきませず」

高橋氏の隠居・大九朗 久光は、石見、安芸、備後で勢力拡大を図っており、特に備後の三吉氏などは連年にわたって合戦を繰り返している。三吉氏は尼子傘下の豪族であり、利害がぶつかるのである。高橋久光は、尼子に属す気は欠片もないらしい。

「鷲影城の高橋盛光を調略してはおりますが、いかんせん高橋家中では隠居の威光が強いようで」

「ふむ。大九朗は家中をよう束ねておるか。石見と安芸で、高橋ほど大きな豪族はない。厄介なことよな」

「毛利の家中にはご当家に心を傾ける者もあるやに聞いております。しかしながら、毛利の幸松丸は高橋の隠居の孫ゆえ、毛利は高橋の言いなりのようにござりまする。これもなかなか動かしがたく」

経久は視線を遠くに遊ばせながら、何事か考えている風情であったが、しばらくして不意に口を開いた。

「『鬼吉川』に孫娘があつたであらう。いくつであつたかな」

その問いの意外さに、秀綱は瞬間戸惑った。

「……たしか、十八になるのではなかったかと」

「『鬼吉川』は、以前、孫娘を毛利の三男坊に嫁がせたいというようなことを手紙で言うてきたが、あの縁談話は、毛利興元が死んでより宙に浮いておつたはずじゃ。興元亡き後、幼き遺児の後見となつて毛利の舵を握つておるは、多治比の元就であらう。吉川の娘、どうせ毛利に嫁るなら、いっそ元就に娶せる方が、吉川にとつてもよいのではないか？」

経久の妻は、『鬼吉川』吉川経基の娘であり、尼子氏と吉川氏は強い同盟関係にある。その吉川氏は毛利氏とも婚姻を通じて同盟関係にあり、安芸国人一揆の盟友でもあるが、毛利氏は尼子氏とは直接の繋がりが薄い。

幼主・幸松丸の後見役である元就に、吉川氏の娘を娶せれば、経久は元就の叔母婿　つまり義理の叔父ということになり、親類と

しての繋がりには遙かに強くなる。当主である幸松丸は高橋久光が握っているらしいが、元就を中心に親・尼子の派閥ができ、それを吉川氏が応援するような形になれば、高橋久光にも対抗できるであろう。そのまま毛利氏を尼子側に引き寄せられればそれが最上だが、毛利家中を大内と尼子の二派に分裂させれば、少なくとも毛利氏の力を削ぐことにはなる。

また、安芸国人一揆の衆は、大内氏の与党として共同歩調を誓っているが、その中核たる吉川と毛利が公然と尼子寄りになれば、他の豪族たちも同調して尼子に靡く可能性がないとは言えない。そこまでいかずとも、国人一揆を尼子派と大内派に分裂させることはできるかもしれない。

明敏な秀綱は、主君の意図を即座に悟った。そして、その政略の抜け目なさに密かに舌を巻いた。

この殿には、わしはやはり遠く及ばぬ。

忌々しいが、銀兵衛の言葉の正しさは、秀綱も内心で認めているのだった。

「能登よ、『鬼吉川』へ手紙をしたためるゆえ、大朝へ遣いせよ」

毛利氏は大内氏に臣従しているから、大内義興が帰国した後では、吉川氏との縁談にどんな横槍が入らぬとも限らない。大内氏の支配力が再び強くなる前に、この縁談を早急にまとめてしまっべきであるろう。

「『鬼吉川』は傑物よ。あの老人が生きてあるうちに、一度会っておくのも、お前にとって無駄にはなるまい」

「承りました」

秀綱は平伏し、その日のうちに富田城を発った。

羽田重蔵が、相合あいあうの元綱の居館に腰を落ち着けてから、早くも半年ほどが過ぎた。

元綱は、帰ってきた重蔵を下人（奴婢）として扱わなかった。上北面の末裔すえたる重蔵の血の尊貴さを憚はばった、というわけではない。兵法者としての重蔵の技量　同じ一個の男としてのその頸つよさに、相応の敬意を払う気になった、というのが、元綱の心境に一番近い表現であろう。

実力本位の乱世のことである。元綱やその近侍たちを相手に己の剣術の技を披露した重蔵が、彼らの師のようになるのにさして時間は掛からなかった。

低い土居に囲まれた相合の屋敷は、母屋の裏手に厩うまやがあり、その隣に家僕が住むための長屋が建っている。重蔵はその隅に部屋をもらい、そこで寝泊まりしていた。

一日、寝蓐いぐさに埋まって浅く眠っていた重蔵は、深夜、庭の裏木戸が軋しんむ音で不意に目を覚ました。

人の気配が、徐々に遠ざかってゆく。この屋敷から出て行ったものであるう。

それが誰であるか、行き先はどこであるか、重蔵には見当がついている。

また清神社すがの巫女のところであろう。

両刀を腰にぶち込み、重蔵は長屋を飛び出した。月明かりを頼りに、左右に田畑が広がる細い街道を足早に歩く。相合から郡山の麓の清神社まで、徒歩でも四半刻とは掛からない。

鳥居を抜け、鬱蒼とした杉木立の中に腰を降ろした重蔵は、肌寒さに耐えながら夜が明けるのを待った。すでに花の季節だが、明け方の冷え込みは相当なものである。

一刻ばかり待ったであろうか。東の空が白み始めた頃、立ち込めた朝靄あさぐもの中から砂利を踏む足音が聞こえた。淡い人影の輪郭がみる

みる明瞭になる。

「また朝帰りでございますか……」

立ち上がった重蔵は、若者の前に立った。

「重蔵か」

悪戯を見つけた童子のように、元綱が苦笑している。

「この半月ばかり、三日と開けずにこちらにお通いですな」

「ほう、よう知っておるな」

「出歩くなどは申しませぬ。色恋の邪魔をするような野暮も致しませぬ。ですが、館を出る時は、せめて供の者をお連れください。わしに声をお掛けくださるだけでもよい」

元綱が、面倒な という顔をした。

重蔵は声を励ました。

「今は乱世でございます。ご当家の敵はもはや穴戸や武田ばかりではなく、安芸にも備後にも石見にも、厚い戦雲が掛かり始めている。誰かが放った刺客が、どこに潜んでおるとも限らんですぞ」

「なに、お前がこうして俺を見張っておるぞ」

「四朗さま……!」

まともに取り合おうとしない元綱に、重蔵は厳しい視線を向けた。

「あの巫女にそれほどご執心であれば、いつそ館に住まわせては如何か。四朗さまにご正室はなく、側室そばめを置いたとて不都合はござるまい。それとも、夜這いの趣向がお気に召されたか」

「つまらぬ厭味を言うな」

元綱は不快そうに吐き捨て、重蔵の横をすり抜けて歩き出した。重蔵は無言でそれを追う。

失言だった。

重蔵は密かに後悔した。

元綱が、連日、女の元に通うようになったのには、それなりの理由がある。元綱の気持ちだが、まったく解らぬ重蔵でもないのである。

元綱には、二年ほど前から縁談の話があつた。吉川氏の妙齡の姫を元綱の妻にしようという話で、吉川氏の長老である「鬼吉川」

吉川経基翁から出た縁談であつたという。それは婚約というより口約束のようなものであつたらしいが、吉川氏が正式にその申し入れをする直前に、毛利家の当主であつた先代・興元が病死してしまつたために、話が棚上げの形になつた。

吉川経基翁は、元綱の人柄を気に入つて婿にと望んだらしいのだが、それも、元綱の兄である興元が健在であればこそであつた。興元が死に、その遺児である幸松丸が毛利家を継ぎ、次男の元就がその後見役となつた。大名同士の婚姻が政略である以上、吉川氏にすれば、部屋住みでなんの権力もない元綱より、毛利家中で実権を握り得る立場の元就に娘を縁づけたいと考えるようになるのは自然の流れである。

元就が初陣さえ済ませていなかったこともあり、吉川氏の側も最初は元就の人物・器量を計ることができず、婚姻そのものに慎重な態度だつたようである。しかし、昨年「有田の合戦」で、元就は武田元繁を討ち取り、一躍その武名を揚げた。このことを受け、吉

川氏も肚を決めたのであろう。この春、正式に打診があり、吉川氏の姫と元就との婚約が調った。急な話だが、早くも再来月には祝言が執り行われるという。

口約束であつたとはいえ、縁談を一方的に破談にすることになつたわけで、半月ほど前、吉川氏の使者が相合の屋敷にやって来て、額を床にこすりつけて元綱に詫びた。元綱の近侍たちはこのあたりの前後の事情をよく知っており、彼らから話を聞いて、重蔵はようやく事態のややこしさを理解した。

要するに、妻になるべき女を、兄に盗られたようなものか・
・。

無論、当の元就には何の罪もなく、吉川氏の側にも罪らしい罪はない。あえて言えば、先代・興元の早すぎる死が招いた不都合であらう。

この件に関して、元綱は批判がましいことは一切口にせず、愚痴を聞いたこともないが、ちょうどその頃から、夜になると屋敷を抜け出すことが頻繁になった。

気持ちの持ってゆき場がないのであろう。

別の女に溺れていれば、とりあえずその不快さを忘れていられる。そうして時が経つうちに、気持ちの整理もできてゆく。つまるところ、時間が解決してくれるであろうと重蔵は思っているのだが、それにしても、夜毎、供も連れずに人気のない場所に通い続けるというのは、危険に過ぎる。敵の目がどこに光っているかもしれず、元綱を亡きものにしようとする者がいたとすれば、これほどの好機はないのである。

元綱の家来を自任する重蔵は、この主人の奔放な夜歩きには困り果てていた。

二人が相合の屋敷に帰り着いた頃、東の空に陽が昇つた。

元綱は、裏庭に回って井戸で水を汲み、それを頭からかぶつた。

二度、三度とその作業を続け、びしょ濡れになつた小袖を脱ぎ捨てた。

禪一本の姿である。細身の身体だが、全身の筋肉が引き締まっている。

「重蔵、木太刀を」

軒先に立てかけてあった木太刀を渡す。

元綱の望みを察し、重蔵も木太刀を取った。

「手を抜くなよ」

「は」

重蔵は、三間の距離を置いて主人と向かい合い、太刀を構えた。

仕掛けたのは元綱である。息を吐く音と共に、太刀が風を切った。

重蔵はその太刀をいなし、払い、あるいは受け流す。両者、気合いの声さえなく、木太刀の打ち合う音と鋭い吐息だけが応酬された。

元綱の斬撃は凄まじく鋭い。重蔵は素早く、そして細かく位置を換え、元綱の間合いをわずかにずらしつつ攻撃に転ずる隙を窺うが、若者の溢れんばかりの体力は、太刀を振り続けても少しも衰えない。重蔵が見るところ、元綱の剣には天稟がある。それは高い身体能力と卓越した反射神経の賜物であり、また天性の勘の良さにも因るであろう。

元綱は、戦いのなかで相手の呼吸をずらし、自分の呼吸に巻き込むことが巧みで、駆け引きの感覚が抜群に鋭い。喧嘩上手と言い換えてもいい。普通、己の頸さを誇る者は術をおろそかにするものだが、この若者は術を体得するといふところに喜びを見出す性質であるらしく、術理の研鑽にも余念がなかった。その理解の良さと呑み込みの速さは教えている重蔵が舌を巻くほどで、この半年の間に重蔵が持っている技のほとんどを身に付けてしまった。

ゆえに、重蔵の技が元綱に決まることはなく、その逆もあり得な

い。両者が本当の意味での決着を望んでいないから、勝負をする
最近には常に長引いた。太刀行きは臂力しほりよやくに優れる元綱の方がわずかに
速く、技では師である重蔵に一日の長がある。

やがて、疲れたのか　あるいは気が済んだのか　元綱の方が
先に太刀を引いた。

「重蔵、また手加減したな」

「滅相もない。手加減なぞしては、わしが怪我をします」

重蔵は全身汗だくである。

「わしが仮に一流をひらいておるとすれば、四朗さまはすでに免許
の腕前でござるが　そのわしにしてからが、義経流兵法の蘊奥うんのうを
極めたとは申せません」

「未だし道半ば　であろう。もうそれは何度も聞いたわ」

憑いていた悪いモノが落ちたように、元綱は清々しい顔をしてい
る。

「例の　穴戸家俊か、まだ消息は知れぬか」

「は。どうも備前あたりで山籠りをしておるらしゅうござる。稀に
は甲立に戻って来ることもあるらしいのですが、なにしろ飛行自在
の技を使うという怪人ですから、いつ現れるかも解らず、気付くと
すでにおらぬようになっておるといふようなことだ」

穴戸氏の甲立は、吉田からわずか一里半の隣郷である。吉田に腰
を落ち着けて以来、重蔵は何度か穴戸元源もとよしに手紙を送り、穴戸家俊

の消息を問い合わせてみたのだが、はつきりとした居所は未だに掴めていない。

「飛行自在なあ……」

元綱は苦笑した。

「天狗でもあるまいに、翼を持たぬ人が空を飛べる道理がなからう」

「修験者、山伏といった連中は、みな驚くほどの健脚です。一晩に十五里（六十キロ）を歩く者も珍しくありません。街道を取らず、山越えて他国へと通ずる道もよう知っております。遠国にいるはずが突然に現れたり、かと思えば急にいなくなったり 神出鬼没し、人を驚かせるところから、そのような噂が立ったのでしょう」

「人の想いもよらぬ速さで動けば、空を飛んで来たようにしか思えぬ、ということか。なるほどな」

得心した、という風に元綱は笑い、重蔵を伴って母屋に向かった。屋敷の中ではすでに人が立ち働く気配がし、炊煙も上がっている。朝餉の支度もじきにできるであろう。

飯を食ったら、わしも水を浴びるとするか。

生あくびを噛み殺しながら、重蔵は思った。

第三章 乱世の梟雄 高橋の隠居

高橋氏の遠祖は、紀氏である。

紀氏は武内宿禰たけのうちのすくねに始まるという古代氏族で、『古今和歌集』の編纂者にして『土佐日記』の著者でもある紀貫之きのつらゆきが歴史に名高い。その紀氏の末裔で、駿河国高橋を領した紀光盛という者が高橋の姓を称したとされる。その後、高橋氏は備中に封土を授かってそこに移り、さらに南北朝の擾乱じょうらんの影響で石見に転封となった。石见到土着してからまだ百五十年ほどしか経っておらず、その意味では比較的新興の勢力であったと言える。歴代の高橋氏の当主が進取の気概を持ち、守成よりさらなる成長を望み、領土拡張に邁進したのも、そのことと関係があるかもしれない。

高橋氏の本貫は石見国邑知郡阿須那あすな・三千貫であるが、近隣を攻め取って勢力を拡大し、この時代、石見と安芸に一万二千貫もの所領があつたと伝わっている。貫高を石高に直すのは難しいが、だいたい七万石前後と考えればそう外れてないであろう。豊臣秀吉が行った「太閤検地」によると、安芸一国の取れ高は十九万石、石見が十一万石で、両国合わせても三十万石に過ぎないから、七万石の領地というのは極めて大きい。その支配地域は、石見の邑知郡から安芸の高宮郡、高田郡の北部にかけてと実に広大で、婚姻などで土地の国人領主を取り込み、一族の者を所領の要所に配してそれぞれ城を築かせるなどして、一族が割れることなく総領家による一円支配を行っていた。

中国山地の山々が連なる高橋氏の領内には良質の鉱床が多く、この地域は古くから製鉄が盛んであった。また高橋氏は江の川中流域の水運を牛耳っており、それが富強の源となっていた。江の川は安芸の北部と日本海とを結ぶ交易の大動脈で、つまり高橋氏に睨まれると江の川の往来が不可能になり、交易で富を得ることが非常に難しくなる。毛利氏が古くから高橋氏との繋がりを深めていたのも、

江の川筋に生きる豪族としては当然の選択であつたかもしれない。

繰り返しになるが、高橋氏は先代の元光が三年前に戦死し、この時代の当主は興光^{おきみつ}である。この若者は三年前に元服したばかりで、まだ十六歳の少年であつた。この乱世に一族興亡の舵取りを任せるには、いかにも若すぎる。これも繰り返しになるが、高橋氏を実質的に牛耳っているのは、先代^{せんだい}の当主であつた隠居の久光である。

高橋久光は高橋氏の全盛期を築いた傑物で、このとき五十九。武将としての器量にも優れているが、この乱世を知恵と勇気でわたつてきた男だけに、外交にも独特の政治感覚を持つていた。

近年、これまで富強をほしいままにしてきた周防^{すおう}の大内氏が十年の在京によつてやや衰え、この隙をついて勢力を伸ばした出雲の尼子氏が大いに興っている。尼子氏は石見、安芸、備後へと勢力を扶植しつつあり、近頃は久光の元へも調略の密使がやって来たりするようになった。豪族としての鼎^{かなえ}の軽重が問われるのはまさにこういう時で、ここで慌てて尼子に尾を振るようでは、高橋氏は尼子に靡いた他の小豪族たちと同様に十束ひとからげに扱われ、軽視されることになる。

そうやすやすと尼子経久に頭を下げられるか。

という想いが、久光にはある。久光と経久は同世代であり、言葉にせぬまでも内心では強い対抗意識を持つていた。

人運にせよ家運にせよ、必ず盛衰がある。尼子の盛運と大内の衰運というこの状態が永遠に続くわけがなく、尼子が衰え、大内が盛り返す局面は必ずやって来る。その潮目が変わるのは、おそらく大内義興が京から帰国し、大内・尼子の激突が本格化するときであろう。

その時こそ、

強大な大内の武力を背景に、安芸の豪族たちを糾合して、尼子に対抗する。

というのが、久光が脳裏に描いている戦略であつた。大内側の豪族たちをまとめて高橋がその旗頭になり、安芸・備後・石見の内陸

部に大いに勢力を張る。大内氏からも憚られ、尼子氏にも対抗できるように第三勢力を目指すのである。

刑部少輔（武田元繁）が死んだいま、安芸で漢といえは『鬼吉川』とこのわしくらいのものよ。

と久光は密かに自負している。

毛利興元が病死したことに続き、先年の「有田の合戦」で武田元繁が敗死し、それに巻き込まれて熊谷元直、己斐宗端、香川行景などの有力武将が次々と死んだ。安芸で名のある武将と言えば、宍戸元源、小早川弘平、平賀弘保、天野興次などが残っているが、彼らはいずれも豪族として小粒で、他の豪族たちを糾合して大勢力にまとめあげてゆくほどの勢威も興望もない。現状、安芸の旗頭になれるほどの武将と言えば、吉川経基と高橋久光があるのみであろう。

その『鬼吉川』にしても、まさか百までは生きられまい。

吉川経基はすでに九十を超えた老体であり、まだ元気であるとは言っても、いずれ先は長くない。吉川国経・元経親子は武将として有能だが、人物、器量、名声、徳望ともに『鬼吉川』には遠く及ばない。『鬼吉川』さえ死ねば、吉川氏の威勢は必ず衰える。

逆に高橋氏は、三年前に当主の元光が討ち死にし、現当主である興光の新体制がスタートしたばかりである。元光の戦死はまさに痛恨事であったし、家中は大いに揺らいたが、久光自身がまだ現役であるから、悪影響は最小限に止められたとも言える。興光は若いだけに武勇にさしたる実績がなく、その徳量も政治力もまだまだ未熟ではあるが、この若者は覇気も勇氣もあり、久光の目から見てもなか見所がある。数年後には人物に重みも増し、立派な当主へと成長するであろう。その時まで、久光はこの孫を後見してゆくつもりでいる。

毛利氏の当主である幸松丸は久光の孫であり、久光が幸松丸の後見役になっている以上、すでに毛利氏は高橋の傘下と考えていい。

あとは吉川さえ服属させれば、高橋の武威は往年の武田をも凌ぐ。

吉川氏を傘下に収めることさえできれば、高橋氏は近隣では飛び抜けた大勢力となり、安芸の盟主に相応しい武威を備えることになろう。

厄介なのは、吉川氏が尼子氏と強い同盟関係にあることである。吉川氏が素直に大内氏に臣従し続けるとは思えず、安芸の豪族たちを尼子側に引つ張ろうとするに違いないが、国人一揆の盟友であるだけにいきなり武をもつて攻めるといふわけにもいかない。いつそ尼子氏に通じていることを理由に吉川氏を国人一揆から締め出し、敵として討ちたいところだが、高橋が吉川氏と戦を始めれば、これを援けるために尼子軍が石見に乗り込んで来るようなことにもなりかねない。大内義興の帰国の前にそんな事態になれば、それこそ藪蛇である。

大内義興が京から領国に戻って来るのは、遠い先の話ではない。年内にも帰国するという風聞さえあるくらいで、どんなに遅くとも一、二年のうちには必ず実現するであろう。帰国しさえすれば、義興は失地回復を目指してすぐさま尼子と戦い始めるに違いない。

それまでは軽々に動かず、静かに地力を蓄えておくことよ。

だからこそ久光は、尼子氏からの臣従の誘いを歯牙にも掛けず峻拒した。大内義興が帰国するまで、尼子氏の勢力がこれ以上安芸へ及んで来ないよう、防波堤になるつもりでいたのである。

そんな折り、久光にとって面白くない報告が届けられた。

話を持って来たのは、毛利氏の執権である志道広良である。

「多治比の少輔次郎殿と、吉川の久姫さまとの縁談が調いましてな」

自分に何の報告もないまま、それほど重要な決定が毛利家中で行われたことに、久光はまず驚いた。

「それはそれは　寝耳に水じゃな」

「いやいや、お耳に入れるのが遅うなつてもうたことはお詫び申す。なんでも亡き悦叟院さま（毛利弘元）が、生前、吉川国経殿との間で嫁取りの約束をしておつたらしゅうござつてな。我らもつい先日、そうと知らされて驚いたところなのでござるよ」

広良は笑顔のままめけめけと言った。そんな約束が本当にあつたのかどうか、久光には確かめようがないから、外交的に毛利が高橋に嘘をついたことにはならない。

志道広良は、毛利家で執権として家政を預かっている。その立場から言えば、高橋久光の毛利家への影響力が強まり過ぎていることに不快と懸念を禁じ得ず、その影響力を削ぐためにも吉川氏との紐帯を強めるのは悪い話ではないと思っっている。毛利当主である幸松丸はまだ四歳で、自らの判断で家政を裁断することなどは到底できないから、その後見役に高橋久光が座っている以上、もう一人の後見役たる多治比元就には吉川氏との繋がりを含めてもらい、政治的バランスを取りたいのである。幸松丸が立派な武将として独り立ちし、自らの判断で外交を展開できるようになるまでの間、なんとかしても毛利の独立を維持してゆくのが自分の責務であると、広良は強く思い定めていた。

「悦叟院殿が伊豆殿（吉川国経）と、な……」

久光は呟くように繰り返した。

毛利弘元が死んだのは十年以上も昔ではないか。今になってそんな古い口約束を蒸し返すのは、もっともらしい理由を作つたというだけであらう。

吉川国経の妻は高橋氏の一族である高橋信直の娘であり、久光とも遠い縁戚に当たるのだが、高橋と吉川氏は国人一揆の盟約を交わす以前は敵対していたこともあって、久光は国経とは親しくない。どころか、内心では積極的に嫌っていると云つた方が正しい。

その国経の娘が、多治比元就に嫁ぐ。

毛利め、尼子の威勢に怯えおつたな。

と久光は直感した。

尼子氏が今年中にも石見と安芸に兵を入れるという風聞が、近頃しきりと囁かれている。これは尼子氏自身がばら撒いている流言であるかもしれない、その可能性が高いと久光は踏んでいるのだが、大内氏に属する安芸の豪族たちは戦々恐々とし、密かに尼子に誼よじみを通ずる者まで出始めていた。安芸の北部は尼子氏の出雲に近く、その影響を直接に受ける地域だから、毛利氏がこの風聞に過敏になるのも当然と言えば当然なのである。高橋が尼子氏と敵対姿勢を取っていることは周知の事実であり、弱小の毛利氏にすれば、尼子寄りの吉川氏との繋がり深めることで、いざという時の保険を掛けようというのである。つまり、尼子軍が安芸に雪崩れ込んで来たとき、高橋側の旗色が悪く、大内氏の援軍も望めないようなら、尼子氏に寝返る道を残しておこう、という腹なのだ。

久光にしてみれば不快極まる話であったが、ことが婚姻という慶事であり、しかも吉川氏は国人一揆の味方でもあるから、表立っては批判がしにくい。まして多治比元就は毛利本家から分家して一家を立てており、独立性が強いのである。その婚姻に、直接関係のない久光が不都合を言いたてるのは、まったくの筋違いでもある。

久光は努めて温和な表情をし、

「いや、いずれにしても、めでたい話よな。毛利と吉川の縁が深まることは、国人一揆の紐帯をさらに強めることにもなる」

そう言ってこの縁談を祝ったが、釘を刺しておくことも忘れなかった。

「多治比殿が妻を持つとなれば、いずれ子も生まれような。気の早い話ではあるが、もし女子が生まれたときは、その姫をわしの曾孫

と娶めあわせたい。その旨、多治比殿に伝えておいてくださらぬか」

元就の娘を人質として高橋が押さえようと言うのである。

「これは 願ってもなきこと。多治比殿にはしかとお伝えしておきまする」

老練な外交家である志道広良は、久光の思惑を底の底まで見抜いていたが、あえて満面の笑みを作って頭を下げた。毛利が吉川との繋がりをもさらに深めることに、高橋久光が不快感を持つのは当然なのである。強大な高橋氏と事を構えるようなつもりは広良には毛ほどもないから、ここで久光の機嫌を損じても益はない。

志道広良が辞去した後、久光は、家中で忍兵頭がしらを務めている世鬼せき政時まさときという男を自室に呼んだ。

「多治比の元就のところに、吉川の小娘が嫁ぐらしい。耳に入っておったか？」

「いや、恥ずかしながら初耳でござる」

わずかに低頭した世鬼政時は四十代半ばの壮年で、武技で鍛え抜かれた両肩の肉が厚い。

世鬼一族は、元は遠江の世木氏から出たとされている。先祖は駿河の今川家に仕えていたが、一族の者が出奔して諸国を巡り、「応仁の乱」のとき、世木政久という者が上京していた高橋氏に仕えるようになり、石見に移ったのだという。世木政久は、安芸に領地を拝領し、その地名を取って世鬼と姓を変えた、ということになっている。初代・政久の孫に当たるのがこの世鬼政時で、武技に加えて偷盗術ちゆうとうじゆつ いわゆる忍びの技術 に優れ、高橋家中で諜報、謀略などの仕事を任されていた。

「そういえば、過日、大朝に潜ませておる者から、尼子の亀井能登守が小倉山城を訪れたとの報せがござった。あるいはその婚姻、尼子経久の指喉しそくであったのやもしれませぬな」

「経久め、忙せわしのうよう稼ぎよるわ」

「つい先日にも尼子の謀者と思しき者を一人斬ったところござるが。このところ、ご領内を往来する御師おし、巫女、物売りなどの数が増しておるように思われます」

そのうちの何割かが他国の謀者であろう。尼子の忍兵も多く混じっているに違いない。

「大内義興の帰国が近いという風聞もござる。尼子にすれば、義興が領国に戻って来る前に、少しでも味方を増やしておこうという腹づもりなのでござろう」

尼子の威圧に屈して尻尾を振る連中が、久光には笑止でならない。このわしと盟を結ばぬ限り、経久めも軽々とは安芸へ出ては来れぬ。

ということが、久光には解っているからである。高橋氏という大勢力を残したまま尼子軍が安芸へ雪崩れ込めば、尼子軍は敵地で背後に巨大な敵を抱えることになり、本国からの補給線を維持することも極めて難しくなる。他国へと遠征するには道々の足場を固めてゆくことが不可欠であり、石見東部と安芸北部に勢力を張る高橋氏を無視できるはずがない。

「安芸の豪族どもは震えあがっておるようだが、経久めにとって安芸は二の次よ。まずは石見に兵を向けおるに違いないわ」

尼子経久は、そのための名分もすでに得ている。

去年、大内義興が石見守護に任じられたのだが、それまで石見の守護であった山名氏はこの幕府の措置に納得せず、昇竜の勢いの尼子氏に泣きつき、実力による石見の奪還を頼んだのである。石見へ兵を向けたい尼子経久にすれば、格好の大義名分が転がり込んでくれたようなものであった。

石見の正統たる守護は山名氏であり、大内氏がこれを横領するは不義である。

そういう宣伝工作を、経久はすでに石見で始めている。東の山名氏と結んだとなれば、尼子は後顧の憂いがひとつ減ったことになる。安心して西への伸長を本格化させるであろう。

「経久めの狙いは、つまるところは大森銀山よ」

と久光は断じた。

「大内が銀山を失うのは構わんが、尼子にこれ以上肥られるのはかなわんな・・・」

大森銀山（石見銀山）は世界でも有数の産出量を誇っていたが、この数年前、中国から「灰吹き法」という製錬技術が渡来したために、その産出量がさらに飛躍的に増えた。莫大な軍資金を捻出し続ける大内氏の富強の種は、勘合貿易とこの銀山経営が二本の大きな柱と言ってよく、その意味で、大森銀山を押さえる者が中国地方の覇権を握るとまで言っても決して大袈裟ではないのである。尼子氏はこの銀山をどうにか奪おうとし、大内氏はそれをなんとか守ろうとする。石見が両者の激突の場になるのはまず間違いなく、石見に大勢力を持つ高橋氏の重要性はますます高まるであろう。

「それにしても経久め、多治比の元就とはよいところに目を付けたものよ。あれはもう二十二であろう。まだ嫁がなかったというのは盲点だったな」

「毛利では三男坊も未だ独り身にて、嫁を持つてはおりませんぞ」

「ああ、そうであつたな。婿殿（毛利興元）が死んで後、そのあたりのことがほつたらかしくなつておるのやもしれん。毛利の老臣どもも間の抜けたことよ……」

次男の多治比元就を吉川氏に握られた以上、せめて三男の相合元綱は高橋側に引き寄せておきたい。いけ好かぬ小僧ではあるが、あれはあれで使い道もある。久光は腕を組み、一族の子弟に妙齡の娘がなかつたかを考えた。が、一族の末端ならともかく、宗家から近い筋には思い当たる娘がない。

しばらく沈思していた久光は、不意に顔をあげた。

「甚介よ、向原の目下津城まで密かに遣いせよ」

「目下津城と申さば、坂広時の城でござるな」

坂広時は、毛利氏の老臣である坂広秀の父で、志道広良が毛利家の執権に就く以前、その職の座にあつた老人である。すでに隠居しているが、坂氏は毛利の庶家にして代々執権を務める屈指の名門であり、広時の毛利家中への影響力は長老・福原広俊にも伍するであろう。久光は広時とは歳が近いこともあり、古くからの昵懇であつた。

「あの男とは、高橋と毛利が大内へ臣従することを決める時、膝を突き合わせて何度も語り合つた。大内がいかに強大な力を持つてお

るか、あれほどよう知る者も他にあるまい。毛利をこのまま尼子寄りにするようなことがあつてはならん」

「承つてござる」

低頭した世鬼政時は、足音ひとつ立てず部屋を出て行った。

「その気はない」

と、元綱が素っ気なく言った。

「なにゆえでござるか。我が娘では不足と申されますのか」

元綱の前に座った坂広秀は、禿げあがった頭に青筋を立てている。押し問答を続けているうちに、だんだんと腹が立ってきたらしい。

「そつは言つておらん。俺に妻帯など早すぎるといっただけのことだ」

元綱は顔を歪め、面倒そうに答えた。

「四朗殿はすでに二十一ではござらんか。早すぎるなどということがあるうか。多治比の次郎殿も来月には妻を迎えられる。次は当然、四朗殿の番でござらう」

「それとこれとは話が別だ。兄者の婚儀と俺の妻帯に何の関係がある」

「早う嫁を持ち、子を成すのは、武門に生まれた男の務めでござる」

ぞ。身を固められれば、相合のお方さまも安堵なされ、肩の荷を降ろせましよう。それが孝道と申すものでござる」

「嫁を持たねば孝の道に悖るといふものでもあるまい」

「孫の顔を見せることに優る親孝行が他にござろうか。相合のお方さまの御子は、四朗殿をのぞけばいずれも女子 嫁いでしまえば逢うことさえままならぬ。四朗殿が妻を持たねば、お方さまはいつまで経つても孫を抱く喜びを知ることが叶いませぬぞ」

「む……」

珍しく元綱が言葉に詰まったようである。二人の問答を次室で聞いていた重蔵は、他の近侍と顔を見合わせ、小さく苦笑した。

坂広秀は、三年ほど前から己の娘を行儀見習いという名目で相合の屋敷にあげ、元綱の母に仕えさせていた。深読みすれば、女好きの元綱の傍に娘を置いておけば、いずれは男女の仲になるであろうなどと考えていたのかもしれない。

が、この広秀の思惑は、どうやら外れた。

確かに元綱は女好きで、郡山の城下には通じている女が何人かいるようだし、清神社の巫女の元にも足繁く通っているのだが、どういふわけか、相合の屋敷の侍女には一切手をつけてないようなのである。もちろん、これは元綱に直接に聞いたわけではなく、重蔵がそう直感しているというだけであつたが。

坂広秀の娘は、名を さと と言い、脂っこい顔の父には似ず、なかなかの器量良しである。年は十八と聞いた。やや適齢期を過ぎているが、二十一の元綱と釣り合わぬ年齢でもない。さとは、父に言い含められているのか あるいは自身が望んでいるのか 酒席などの機会があることに元綱の傍に侍り、酌をしたり話しかけたりしている。見ている重蔵がいじましくなるほどなのだが、元綱

はこの娘の気持ちに伝えてやった風ではない。

どういうおつもりなのか？

重蔵もそのあたりの元綱の心情がよく解らない。

正妻にするとか妾にするとかは別にして、毛利家の御曹司たる元綱の立場なら侍女に手をつけても何ら問題はないわけで、女好きの元綱がそれをしないというのは、奇妙と言えば奇妙だった。同居している母親の手前ということもあるだろうが、元綱は幼い頃から姉妹に囲まれて暮らしていたらしいから、思い出が染みついたこの屋敷の中では、女を抱こうというような気にはなれないのかもしれない。

「わしも、なにも下戸に酒を強いておるつもりはござらん。四朗殿とて女子がお嫌いというわけではありませんまい。いろいろと噂も小耳に挟んでおりますぞ」

そのぶしつけな言葉に、元綱は目つきを厳しくした。

「我が娘になんぞ到らぬところがあるのであれば、そう申してください。あるいはどのような女子ならお気に召すのか。この広秀にお漏らしくだされば、家中はもとより近隣の家の姫からそれに見合う女子を探してさしあげてもよろしゅうござる」

「いらぬ世話だ。坂広秀ともあろう者が、女見おんなみ（女術せげん）のような口を利くな」

元綱はピシヤリと言い、席を立った。まだ何か言おうとする広秀を残して足早に廊下をわたり、裏手の厩うまやへ出る。元綱は愛馬の『紗霧きり』を引き出すと、その背に鞍を置き、裏門を出るや鐙あひみを蹴った。

三人の近侍が慌ててそれを追う。馬を持ってない重蔵は、刀を左手に握り、小袖の裾を尻までからげ、徒歩かちで駆けた。

光井山を正面に見ながらしばらく走った元綱は、相合川が多治比川に流れ込むところで進路を南東に変え、多治比川の土手沿いを疾風のように走る。左右の田には、百姓たちがそこで田植え唄を歌いながら泥田に苗を植えこんでいる姿があつた。田植えはもう八分通り済んでいる。

多治比川は吉田の集落の南側を洗い、光の帯となつて江の川に合流する。元綱は浅瀬を選んで多治比川を渡り、蛇行する江の川筋に沿つてそのまま南西へと向かつた。

重蔵は懸命に駆けたが、馬の脚に追いつけるはずもない。田の百姓や道ですれ違つた里人たちに馬が去つた方角を尋ねつつ一里ばかり走ると、江の川の河原で近侍たちが馬に水を飼わせているのを見つけた。ひときわ馬格の大きい『紗霧』も見える。が、元綱本人の姿はない。

「四朗さまは？」

低い土手を駆け下つた重蔵は、荒い息を整えながら尋ねた。

「常楽寺です」

井上又二郎という青年が、光井山の南尾根にあたる小山を指差しながら答えた。鬱蒼と茂る木々に遮られて見えないが、あの小山をしばらく登ると常楽寺の山門がある。

常楽寺は曹洞宗に属する禅寺で、元綱の腹違いの弟が僧になつて修行をしている。この弟は幼い頃に足疾を患つたために武士としての春秋を絶たれたらしいのだが、兄弟仲は良いようで、元綱は遠乗りなどで通り掛かるとよくこの寺に立ち寄る。

「一子出家すれば九族天に生ず」という言い伝えがある。この時代に生きる人々は神仏に対する尊崇の心が篤いし、豪族たちにとつては領内の寺社との関係は軽視できないものでもあるから、族人の

中から一人は仏門に入れるというのは常識であり、実利でもあった。

「こうしてただ待つておるといふのも無聊だな……」

陽光に煌めく川面を眺めながら、又二郎が言った。この若者は元綱の二歳年長で、近侍の中でリーダー格である。毛利家中で最大の勢力を持つ井上党の出だが、一族の中では傍流の次男坊で、家では厄介者（相続権のない部屋住みの子）であるらしい。やや狷介けんかいなところがあり、お調子者でもあるが、根は善良で、戦場では勇敢である。剣の筋も悪くない。

「重蔵殿、『紗霧』をお願いします」

又二郎は『紗霧』の轡くわを重蔵に預けると、あとの二人の近侍を誘つて水馬を始めた。

「うひゃあ、冷たいのお！」

若者たちははしやぎながら大声で馬を励まし、巧みに手綱を操る。元綱には及ばぬものの、三人とも馬術はなかなか達者である。満々と水をたたえる江の川は、広い所では一町ばかりも川幅があり、瀬もあれば淵ふちもある。深いところでは馬の脚が川底に届かないから、習練にはちょうど良いであろう。

『紗霧』はすでに十分に水を飲んだようなので、重蔵は手綱を引いて低い土手を登った。すぐそばに雑木の林がある。手ごろな樹を選んで『紗霧』を繫いだ重蔵は、そのあたりの枯れ枝や落ち葉を集め、焚火の用意を始めた。若者たちが水から上がったとき、冷えた身体を温めねばならないし、濡れた衣服も乾かさねばならない。

相合の屋敷を出るときに中天にあった太陽が、やや西に傾いた。人の気配に気づいた重蔵がその方に視線を向けると、木々の隙間

から坂を下る元綱の姿が見えた。重蔵に気づいたようで、まっすぐにこちらに歩いて来る。

「お早いお帰りでしたな」

「ああ、茶を飲ませてもらうてきた」

重蔵の隣に並んだ元綱は、江の川を眩しげに眺めた。

「ほう、水馬か」

その顔がうずうずと笑っている。

「あの馬鹿どもめ、水を飼わせておけとは言ったが、俺を忘れて遊び惚けておるとはなんたる虚仮こぼじゃ」

元綱は『紗霧』の手綱を解き、それに跨るや一散に土手を駆け下り、川に馬を入れた

「おお、四朗さまじゃ！」

近侍たちが喜色を浮かべ、馬の向きを変える。

「又二郎、馬が水に沈み過ぎじゃ！ 戦場では具足をつける分、身が重い！ それでは馬が溺れてしまっぞ！」

元綱は河水の浅深が水面の姿で解るらしく、浅瀬を選んであつという間に川の半ばまで進み、さらに『紗霧』を声で励ましながら巧みに泳がせ、やがて向こう岸に跳ね上がった。『紗霧』に息を入れさせ、その首を撫でて褒め、再びざぶりと水に飛び込ませる。

好い景色だ。

眺めている重蔵は、思わずため息をついた。

降り注ぐ陽光のなか、四匹の人馬が水飛沫を跳ね上げながら河水に遊んでいる。中国の山々を背景に悠久に流れる大河　その自然に溶け込みながら、若者たちが「若さ」の可能性を迸らせているようなその風景は、生き物の美しさを雄渾ゆうこんに描き出していた。

「あれが相合の元綱か・・・」

対岸の雑木林から、ふたつの人影がそれを見つめていた。浪人風の身なりをした一人は世鬼政時であり、いま一人は農夫のような格好をした若者である。

「今義経は武芸も達者らしいな。人馬一体　なかなか魅せる」

政時が言うと、若者が不平そうに反論した。

「御殿でぬくぬくと育てられた殿さまなぞに、真の武芸がござろうか。戦場で馬上槍を取って戦うならともかく、一人と一人とで斬り合つというなら、我ら忍び武者の半人前も働けますまい」

「そうかな？　元綱は義経流の兵法にも通じておると聞く。たとえお前でも、兵法の手練てだれと昏間に斬り合えば、そうやすやすとは勝てまい」

若者は政時の子で、名を政定という。

「もつとも、夜に仕合つというなら、我らの敵ではなかるうがな」

政時はその言葉を残して林の奥へと歩き去った。

農夫姿の若者はしばらく川面を見つめていたが、やがて父とは別の方向に消えた。

第三章 乱世の梟雄 乱世の花嫁（一）

薄く立った夜霧のなかで、炎の列が儂げに明滅している。

無数の松明をかけた人の群れである。闇の街道をゆるゆると歩いている。

行列は、「三つ引両」の紋が描かれた立派な輿を中心に、総勢百人ばかりであった。侍烏帽子に紋服姿で馬に乗る武士たちがおり、馬の脇には松明を持って歩く従者があり、様々な荷物を担いだ小者たちと数頭の荷馬が続き、その後ろに輿がゆく。輿の周囲には、市女笠や衣被をかぶって歩く女たちの姿も見える。一行の護衛のためであろう、武装した五騎の武者と、槍や弓を握った雑兵が二十人ばかり、行列の前と後にそれぞれついていく。

輿に収まっているのは、浅葱色の小袖に綾地錦の打掛けをまとった娘であった。

名を、お久という。

「多治比のお城って、大きいのかしら」

薄く開けた窓から、輿の脇について歩く老女のお静に言った。

特に意味のある台詞ではない。お久にはしゃべるほかにやることがなく、要するに退屈なのである。昼間はまだ景観を楽しむこともできたが、日が暮れてからは流れてゆく景色はすべて闇色で、目を楽しませてくれるものもない。

「小倉山のお城と比べたら、ずっとお小さいと思いますよ」

お静が諭すように答えた。

「静も見たことはございませんけれど」

「お城でテイカカズラの花は見られるかしら」

「さあ、どうでしょうねえ。でも、珍しい花じゃありませんから、探せば城山のどこかに咲いているのじゃありませんか」

「それはそうと　　すこしお腹が空きましたね」

「まあ　　」

思わずあげたその声に、輿を担ぐ男たちが興味を持ったらしい。彼らの視線を一齐にあびたお静は赤面し、慌てて顔を伏せた。

ちなみに老女というのは侍女の頭というほどの意味の職名で、お静はまだ三十代半ばの若さである。もとは吉川家の下土の妻であったが、夫が討ち死にして寡婦になり、お久が産着むつきの頃からその乳母を務めるようになった。お久の実母は彼女がまだ幼い頃に死んでいるから、お久にとってこのお静は家来ながらも母親代わりの存在で、安心して甘えられる相手である。

「先ほど八幡さまでお憩やすみなされたとき、夕餉をたんとおあがりになつたばかりじゃありませんか」

小声で窘めると、

「たんとは食べていませんよ。緊張しているの。何を食べたかも憶えていないもの」

お久はけろりと返した。

「静はおかわりの給仕もさせて頂きましたけれど」

「嘘」

小首を傾げる。その仕草はまだまだ小娘臭さが抜けていない。

「わたくし、おかわりなぞしましたか？」

「しましたとも」

「でも、もう小腹が空いています」

「それはお姫さまが食いしんぼうだからです」

言いながら、お静は懐から紙に包んだ餅を二つ取りだし、それを輿の中へ差し入れた。お静は小才が利く女で、何事につけても用意が良い。

「今宵はゆつくりお食事もできませんからね。お婚儀しきの途中でお腹が空いたなぞと言えば、お婿さまに呆れられてしまいますよ」

火の群れは、多治比川のせせらぎを聞きつつ、東へ 多治比の猿掛城を目指して進んでゆく。沿道には付近の百姓やら領民やらが集まり、小声で雑談しながらこの行列を見物していた。

「吉川の姫御寮人さまのお輿入れじゃとよ」

「少輔次郎さまもいよいよ奥方をお持ちになるのねえ。よかつたわねえ」

「さすが鬼吉川、嫁入りのお道具も豪華なものじゃのお」

どの顔にも好意的な笑みがある。若い領主の慶事を、心から祝福しているのだ。

この日 永正十五年（1518）の五月の吉日 梅雨はまだ明けていないが、たまたま中休みになったのか、昨日から雨はあがっていた。蓑笠をつけての花嫁行列ではいかにも見苦しいから、婚姻に関わる毛利・吉川両家の人々にとっても、沿道に並んだ見物人たちにとっても、このことは少なからぬ幸運であった。

行く手には、満天の星空をバツクに猿掛山とその周囲の山々が黒々とうずくまっている。猿掛山の山中には無数の篝火が据えられているようで、その稜線の木々だけが闇に浮き上がって見えた。

「毛利へ嫁くことになった」

と父から聞かされたとき、お久がすぐに思い浮かべたのは、毛利家の三男・相合元綱のことだった。

「今義経殿のところですね」

確認すると、父はやや苦い顔で、

「いや、そうではない。婿は多治比の少輔次郎殿だ」

と応えたから、お久は驚き、少しばかりうろたえた。

うろたえた様を父に見せてしまったのは、お久の不覚であったろう。

お久も戦国の女である。大名間の嫁取り婿取りは外交の重大事であり、婚姻が政略であることはよく解っている。女として実家の役に立つというその役割に誇りを持ってもいたから、父や兄が決めた

男の元へ嫁いでゆくことに否やがあるはずもない。

が、お久にしてみれば、即座に頭を切り換えることは難しかった。二年ほど前、お久は祖父によって元綱と引き合わされたことがある。そのとき祖父は、

「お前の婿に」

というようなことを言ったのである。その話があまりに唐突であったから、そのときはお久も狼狽してしまい、どういう受け答えをしたものか実のところあまり憶えてないのだが、それでも、狼のような精悍さと悪童のような童臭が同居した元綱のその相貌には強い印象が残った。

祖父の経基つねもとは、「鬼吉川」の異名で天下に堯名ひょうめいを馳せたほどの武将であり、文武の両道における傑士けっしである。お久にとつて祖父はまさに武人の理想像と言つてよく、心から尊崇し、敬愛し切つていたから、その祖父が選んだ男に不安はなかった。武勇において人後に落ちるはずがなく、伴侶として恥ずべき人間ということも決してないであろう。

お爺さまが見込んだほどの男なら……。

ということ、元綱という男に対してお久はむしろ好感を持った。その日以来、お久は、元綱を漠然と意識しながら日を送ってきた。年ごろの娘が、婿になるかもしれぬ男に興味と関心を持つのは当然であろう。大朝と吉田はそう遠くないから、毛利家中の噂話なども自然と伝わつて来る。そういうときに元綱の名が出ると、お久は耳をそばだてるようになった。歌を詠むよとき架空の男への想いを詩情に乗せるような気分で元綱に疑似的な恋心を向けてみたこともあったし、妻になつた自分の姿を無邪気にあれこれと想像してみたりもした。元綱の顔が夢に出て来たことさえある。

あの人の妻になる。

ということが、いつしか自己暗示のようになっていたと言えなく

もない。

毛利氏の当主であつた興元が亡くなつたために、縁談は長く棚上げされた形になつていた。そうして二年が経つたある日、流れたとも思つていた毛利家との縁談話が再び持ち上がったのである。お久が元綱のことを脳裏に描いたのも当然であつたらう。
ところが

「多治比の少輔次郎殿……？」

一度きりとはいえお久は元綱には会つたことがあり、短いながら言葉も交わしている。その意味でお久のこれまでの想像や夢想には具体像があり、そういう自分の未来を思い描いてこの二年を過ごしてきたのである。それが突然、別の男の元へ嫁げと言われたのだから、それまで出来ていた心の準備は基礎から崩れざるを得ない。

「少輔次郎殿とはどのようなお人ですか？」

父や兄はもちろん、周囲にいるあらゆる人々に対して、慌てて訊ねて回らねばならなかつた。

お久は多治比元就という男をよく知らない。歳は四つ年長であるという。文弱な男で、二十歳を過ぎても初陣さえ踏んでおらず、合戦の仕方也不知道というような悪口を囁く者もかつてはあつた。その後、人々の印象は「有田の合戦」によつて一変したが、お久にとって元就が謎の男であることに変わりはない。

「毛利の先祖である大江氏というのは平安以来の名門じゃ。血は争えぬと見えて、次郎殿は公家のごとき瓜実顔で、なかなか気品ある目鼻立ちをしておるよ」

父である国経は、元就の容姿の良さを繰り返し言い、その温和な

人柄を強調して褒めた。娘に無用の心配をさせまいという親心も混じっていたであろう。

「江家は文章博士の家だ。文事はお家芸のようなものだから、そちらにはたいそう明るいだろうと思う。だが、多治比殿は決して文弱なだけの男ではないぞ。『有田』の戦ぶりを聞くに、その勇氣には非凡なものがある」

と評したのは兄である。

兄の元経は四十以上も歳が離れていて、お久が物心ついた頃にはすでに壮年であった。母親が違ふということもあり、感覺的には叔父さんというに近い。

「少輔次郎殿は名家の末裔ながら、父母に早くに死に別れ、幼き頃よりいろいろと苦勞をされたようじゃな」

と教えてくれたのは、大好きな祖父である。

「人は艱難辛勞を経ることで磨かれる。苦勞を知っておる者は、他人に優しいものでな。勇氣だけあって優しさのない男より、そういう男の元へ嫁く方が、ずっとよい」

祖父は元綱のことには一切触れなかった。今さら言っても詮ないことであろう。大名家の婚姻が政略である以上、政治状況が変われば嫁ぎ先も変わらざるを得ない。毛利氏の先代である興元が死んだとき、元綱との縁も切れていたのだ。祖父の慈愛に満ちた笑みを見て、お久もそう割り切った。

婚約から祝言までわずか二月ほどしかなかったから、準備は大急ぎで進められた。慌ただしさに追われているうちに、時日は飛ぶように過ぎた。

いよいよ嫁ぐというその日、たまたま前夜から雨が上がり、空には無数の星が瞬いていた。

朝　それも太陽がまだ昇る前という早朝　大広間に居並ぶ親族や重臣たちの前で、お久は父に挨拶をした。

お久が生まれたとき、父である国経はすでに六十に近い高齢であった。国経にとってお久は晩年に授かった末娘であり、可愛いくてしょうがない。その娘を他人にやっってしまうというこの日、父は哀れなほど狼狽し、そわそわと少しも落ち着かなかった。こうなると、女のお久の方がむしろ度胸が据わっている。

「お父上さま、今日まで育てて頂き、ありがとうございます」

と手をついて頭を下げると、国経は目を真っ赤にし、泣きだすかと思つほどに顔を歪め、

「達者に　。　達者で暮らせ」

と言つのが精一杯であった。

もつとも、国経は多治比の猿掛城まで同行し、婚儀にも列席する。吉川と毛利は経基の時代からの盟友でもあり、国経はすでに当主の座を嫡子の元経に譲って隠居しているという身軽さもあるから、娘の顔を見たくなればいつなりと多治比まで出向くことができる。これが今生の別れというわけでもない。

やがて、時刻がきた。

花嫁の乗るべき輿が、小倉山城の二の丸の殿舎の玄関の式台まで担ぎあげられ、お久はその輿の中の人になった。

城内はいたるところに篝火が焚かれ、庭、通路、城門などは真昼のような明るさである。

二の丸の道脇に杉の大樹があり、その幹に絡みついてテイカカズラが群生している。無数の小さな白い花弁が、篝火のやわらかい明

りを受けて淡く光っていた。輿の窓からその可憐な花々を見たとき、この花を見るのもこれが最後になるのね。

とお久は思い、不意に寒々とした寂しさが湧いた。お久は陽気な楽天家ではあったが、十八年を過ごした小倉山を去るといふ現実を前にしては、さすがに感傷的にならざるを得ない。それほど遠くへ嫁くわけではないが、離縁でもされぬ限り帰ってくるなどということとはあり得ないのである。大朝の景色を眺めるのは、今日が最後になるかもしれない。それが解っているお久は、窓からの風景を心に焼き付けるように見つめ続けた。

輿が城山を降り、石見街道を進み始めた頃に朝日が昇った。天がこの婚儀を祝福したのか、梅雨明け前にも関わらず空は抜けるような晴天である。沿道の見物人たちに見守られながら、初夏の陽光を受けた行列はゆるゆると進んでいった。

小倉山城から多治比の猿掛城までは、直線ではほほ四里 道のりにすれば五里ばかりである。途中、寺原氏、壬生氏みぶといった小豪族の領地を通らねばならないが、武田氏に臣従していた彼らも武田元繁の敗死後は吉川氏に従う姿勢を見せており、通行の了解も取り付けてあるから、まず安全と考えていい。

山に囲まれた大朝から、有田城がある千代田に入ると視界がやや開ける。石見街道に沿って流れていた志路原川しほじが、中井手の戦場跡の近くで又打川に流れ込み、やがて北から南流してきた江の川へと合する。一行は進路を東に変え、浅瀬を選んで江の川をわたり、壬生の八幡神社で長い休息をした。早めの夕餉を終え、再び行列が進み始めてしばらくしたところで日が没する。そこからは用意の松明を用いて夜道を進み、多治比に入り、猿掛山の山麓へと到ったのは、戌いぬの刻（午後八時）の鐘を聞いた少し後であった。

一行は毛利家の武士たちの出迎えを受け、そのまま悦叟院えそういんと名付けられた寺院の鳥居をくぐった。

猿掛城の大手門は、さらに少し坂を上ったところにある。輿がすぐに城門へと進まず、まずこの悦叟院へと入ったのは、その本堂を

花嫁の中宿にするためであり、花嫁の義父になる男の霊に挨拶するためでもあった。

浄土宗に属するこの新しい寺は、毛利氏の先代・弘元ひろもとの墓所である。寺に鳥居というのは違和感を持つかもしれないが、神仏混淆しんぶつこんごうのこの時代、靈廟れいびょうの入口に鳥居があるのはそう珍しいことでもない。敷地の周囲は、鬱蒼うつそうとした杉木立に囲まれている。境内に月明かりしかなく、風のほかに音を発するものがなかったならば、いかにも神寂かみさびた厳肅な雰囲気かみさに包まれていたであろうが、この夜は無数の篝火と群れ集った人々が出す雑音のために、ただただ雑然としていた。

古来、日本の神々は淨闇なみを好む。たとえば田の神は、秋になると山に登って山の神となり、春になると里に降りて田の神に戻るのだが、その移動は（地域によって日は異なるもの）常に深夜と決まっている。あるいは神社で行われる様々な神事も、多くが夜更けに執り行われる。この時代、婚儀は紛れもなく神事であるから、夜に行うというのが常識であった。

本堂の前にも篝火が焚かれ、数人の毛利家の重臣が出迎えに立っていた。

「遠路、ご苦労でござった」

と挨拶したのは、毛利家の執権であり花婿の父親代わりでもある志道しじ広良である。

「お出迎え、痛み入る」

と応じたのは、花嫁の父である吉川国経だ。担ぎ手たちが輿を静かに降ろした。

「お姫さま、着きましたよ」

お静がその戸を引き開け、草履を揃えて置き、お久の手を取った。お久は、やや緊張した面持ちで輿から降りた。地面に立つや、

「さ、こちらへ」

周囲の男たちの目から花嫁を隠すように、お静がいそいそと本堂へお久を導き入れた。

お久は、吉川家の主立つ人々と共にまず仏前に額き、それを済ませると、用意の部屋に連れてゆかれ、そこで衣裳と化粧けわいを直した。

「先さまは、お姫ひいさまがやって来られるのを、きつと首を長くしてお待ちですよ」

甲斐甲斐しく着替えを手伝いながらお静が言った。

「どのような殿方か、楽しみでございますねえ」

お静は嬉々とした顔でいろいろとお久に話しかける。緊張をほぐそうとしているのかもしれないが、当のお久は、なんだかバタバタと慌ただしくて、ゆっくりものを考えたり感じたりしている余裕がない。

「まあ、お美しい」

純白の小袖に同色の練絹の打掛けという、いかにも花嫁らしい姿になったお久は、お静が思わずため息をつくほど清純な美しさに溢れていた。

用意が済むと、お久はすぐさま再び輿に押し込められた。

輿の担ぎ手は吉川家の者から多治比家の者に交代している。

花嫁を乗せた輿はゆつくりと坂を上り、門火が焚かれた大手門をくぐり、さらに篝火に照らされた山道を登り、櫓門を抜けて本丸の殿舎の玄関前に横付けされた。

お静に手を引かれてお久が輿から降り、玄関に立つと、敷台には白装束に身を固めた花婿と数人の男女がその到着を待っていた。

この人が……。

と思つたが、女の礼としてここでは恥ずかしげに振舞わねばならない。お久が己の草履のつま先を眺めているうちに、父と花婿が挨拶の言葉を交わし終えた。お久はお静に手を引かれるまま敷台をあげ、燭の灯された廊下をわたり、気付いたときには大広間の上座に置かれた畳の上に座らされていた。

当然、花婿が隣に座っている。

厳めしい武者面むらというのからは遠く、どちらかと言えば線が細い印象である。瓜実顔で肌はやや白く、目の切れは長い。鼻筋が通り、口元にはそこはかとなない気品がある。白づくめの衣裳をまとい、髪を艶やかに結び上げ、威儀を正して座っているその姿はいかにも貴公子然として、血筋の良さを感じさせた。

が、さすがのお久もその顔をまじまじと眺めることまではできず、目線をすぐに数尺先の床板へと移した。自分では落ち着いているつもりでも、内心ではよほどあがっている証拠に、志道広良や父がしゃべっている祝辞の言葉が、聞こえていたのに後からまるで思い出せなかった。

やがて盃事があり、それが済むと、広間では毛利・吉川の両家の親族や重臣たちが祝宴を始めた。次室では多治比家の武士や下土が歓談しながら酒食を取り、台所や土間では卑女はしためや家僕たちにまで酒や餅が振舞われている。

酒器を持った花婿が、吉川家の人々に挨拶がてら酌をして回り始めた。

儀礼として、お久も婚家の主立つ人々に挨拶して回らねばならない。花婿の継母であるお杉の方、花婿の父親代わりである志道広良、

母方の祖父である福原広俊、伯父にあたる福原貞俊と酒を注ぎ、さらに席を移ったとき、お久は思わず息を呑んだ。

「あ
」

二年を経ても見間違えようがない。元綱がそこにいたのである。

元綱は花婿の弟であり、考えてみればこの場にいるのが当然ではあったのだが、不覚にもお久はそのことを忘れていた。いや、考えている余裕がなかったと言うべきであろう。その顔を見てわけもなく狼狽し、自分でも判るほどに赤面した。

元綱は片手で酒を受け、それを一息に飲み干し、お久をまっすぐに見つめた。その口元に幽かすかな苦笑がある。

「しばらくぶりでございます。今日からは義姉上とお呼びせねばなりませんな」

「はい。そのように
」

消え入るような声で応えたお久は、逃げるように次の席に移り、挨拶を受け、酒を注ぎ、さらに席を移った。

ちなみに室町期というのは礼法の時代と言っている。婚儀などの式次第は室町幕府の儀典係と言うべき小笠原家によって五十年も昔に集大成され、いちいち細かく定められていて、守護ほどの格式を持つ大名ならば、婚儀に関わる様々な儀式が三日も続くことになる。新郎新婦は二日目までを白装束で過ごし、三日目から色ものの衣裳に着替えていわゆる色直しをし、それからやっと親族、家臣らに直面披露をするのである。

もつとも、京から遠い地方に暮らす豪族・地侍といった階級の者たちにまでそれが浸透していたわけではなく、それぞれの土地柄や家の経済力などに応じて我流でやっているところが多い。毛利家に

しても吉川家にしても由緒ある古い家柄で、幕府から認められた歴とした地頭でもあり、その意味で礼式には割りあい明るかったが、婚家である多治比家はわずか三百貫（約二千石）の分限で、大名どころか小豪族とも呼べない規模である。婚儀といっても簡素なもので、この夜の祝宴がほとんどそのすべてであった。

一刻ほどで宴はお開きとなった。

お久はいったん別室に下がって化粧けわいを直し、お静によって寢室へと導かれた。

燭が灯された薄暗い部屋にはすでに夜具が延べられ、その傍らに三方がふたつ置かれ、それぞれに酒器と肴のが載っている。

待つほどもなく、同じように女房に導かれ、花婿たる元就が寢室にやって来た。

再び花婿と盃を交わし、それが済むと侍女たちが姿を消し、二人きりになった。

お久の動悸が、うるさいほどに早い。

初夜なのである。お久はこれから男というものを知らねばならない。

わたくしはこれほど怖がりだったかしら。

ふと思った。

お久は安芸屈指の強豪である吉川家の姫として生まれ、堯勇いぬしゆうで鳴る祖父や父の武勇譚を子守歌代わりに聴いて育ち、その同じ血が己に流れていることに女ながら誇りを持っている。勇氣の点で他家の娘に劣るはずがなく、度胸などもよほど据わっているものと自分では信じていたのだが、この時ばかりは蒼ざめるほどに緊張していた。この場合、家によっては「床入りの作法」というものがあるが、お久は早くに母を喪うしなったためにそれを教わっていない。母親代わりのお静は、

「ただただ殿方の言われるまま、なされるままに身をお任せになり、辛抱しておるだけでよろしゅうございます」

などと解ったような解らぬようなことを言っただけで、床入りの作法についても肝心の内容についても、詳しく教えてはくれなかった。

吉川氏は「鬼吉川」の異名で名高く、武張った印象ばかりが強いが、そもそもこの家は土くれから身を起こしたような氏も素性もない新興勢力ではなく、奈良時代以来の名門貴族である藤原氏の歴史した末裔である。八百年をかけて醸造されたその家風には濃い文雅の匂いがあり、たとえばお久の祖父である吉川経基は、文学や歌道の分野において京の貴顕きけんの間でさえ高い評価を受けたという一流の文化人であった。その祖父の膝に抱かれるようにして育ったお久は、当然のように幼い頃から王朝物の古典には親しんでおり、ことに『伊勢物語』や『源氏物語』には明るく、平安貴族の典雅な恋愛に想いを馳せたりしながら多感な少女時代を過ごした。お久はまだ処女ではあったが、その手の知識が皆無というわけではなく、これから行われるであろう男女の営みに対しても、漠然とながらおおよその予想はついている。ただ、平安貴族の恋愛が和歌を通じた心の交流から始まるのに対して、武家の結婚は嫁いだその日に初めて花婿を知り、その夜にはもう同衾どうきんせねばならないわけで、恋や愛といったものが帯びる情感も心の昂たかぶりもあったものではない。

鬼に食べられてしまうわけでもあるまいし。

とも思うのだが、それでもやはり怖いと思ってしまう気持ちをどうしようもない。

なんとも言えぬ緊張感に満ちた沈黙が、しばらく続いた。

「お久殿」

と声を掛けられたとき、お久は飛び上がるかと思うほどに驚き、肩をびくりと震わせた。

元就が柔和な目でこちらを見ている。

「今日はお疲れになったであろう」

落ち着いた丸みのある声だった。

「はい。 あ、いえ、それほどでも」

自分の返事の滑稽さに、さらに赤面した。

何か花嫁らしい挨拶をせねばならない。二世の末までよろしくお願いたします、でも良いし、ふつつか者ですがよろしくお導きくださいませ、でも良い。お久はそれを何度も考えてきたのだが、我ながら滑稽なほど緊張して、最初の言葉がどうしても出て来なかった。

が、沈黙をし続けては相手も困るであろう。

「あの」

なんとか話を続けようと、勇気を鼓して口を開いたお久だったが、夫になる男にどう呼びかけるべきかが解らず、すぐに口籠った。

「ん？ なにかな？」

「えっと。あの、なんとお呼びすればよろしいでしょうか」

新妻の困ったような表情を見た元就は、その初々しさと可愛さに思わず微笑した。

「そうだな……。吉川家には私の異母姉あねが嫁いでおりますな。姉はその婿殿を、何とお呼びになっているのだろうか」

「はい。お義姉^{ねえ}さまは兄を、元経さま、と呼んでおります」

「ふむ。して、元経殿は姉をどのように？」

「お松、と」

「では、それに倣うとしよう。私は今宵よりあなたをお久と呼ぶことにする。あなたは私を元就と呼んでくださればよい。それでどうかな？」

「はい、それでよろしゅうございます」

元就さま。

と心中で呼びかけてみて、お久はやや落ち着きを取り戻した。たったこれだけのやり取りだが、今日から夫になるこの男は、がさつでも強権的でも独善的でもないらしい。落ち着いた、理知的な印象を受けた。盃事や祝宴などで見たこれまでの振舞いもごく常識的で行儀が良く、奇矯なところもないようである。

女子に優しい人みたいだし……。

先々のことなどは解らないが、とりあえず、なんとかやっていくのではないか、とお久は直感した。

夜具に入った後も、元就は優しい男だった。すぐにはお久の身体に触れようとはせず、その緊張をほぐすためか　あるいは自身の緊張を隠すためか　色々と物語をした。

「このような夜に無粋なことだが、実は私は女を知らぬ」

と元就がやや恥ずかしげに言った。

この行儀の良い男は、五歳で母を、十歳で父を亡くし、それから父の側室であったお杉の方に守られるようにして暮らしてきた。

このため、悪さをするにも常にお杉への遠慮があり、女人に触れるような機会を進んで作るうとまでは思わなかったのだという。

お杉は若くて美しく、しかも聡明で芯が強く、おまけに慈母のよくな優しさまでを兼ね備えた女性である。元就にとつては頼れる母であると同時に優しい姉のような存在であり、淡い恋心を抱いた最初の対象でもあつたかもしれない。それと間近で接して育つた元就にしてみれば、お杉に劣情を向けるわけにもいかず、お杉に代わり得る女性を見出すこともできず、結果として他の女に興味を持たなかったのであろう。

「だから、男女の事に巧みというわけにはいかないと思う」

この告白を聞いたお久は、

なんと、まあ、正直な人。

と好感を抱くと同時に、

この人と一緒に夫婦めおとの道を一から学んでゆけばいいんだわ。

と思ひ、よほど気が楽になつたりした。

翌朝、多治比に泊まつた吉川家の人々が大朝に帰つていった。

お久はほとんど眠れておらず、身体はかなり疲れていたが、白装束から色ものの衣裳に直し、父らに別れの挨拶をした。ただ、父の顔はまともに見れなかった。

父の国経は、娘から女に変わつてしまつたお久を眩しそうに眺め、すこし寂しげな笑顔を残して猿掛城を後にした。

この日、お久は忙しい。

まず継母のお杉にあらためて挨拶した。元就に連れられてその部屋を訪れると、お杉は穏やかな微笑を浮かべてお久を迎えてくれた。話には聞いていたが、お杉の若さとその美貌にお久はあらためて驚いた。昨夜もチラとは顔を合わせているのだが、そのときはお久

の方にゆっくり相手を観察するような余裕がなかったのである。見た目の年齢は二十代で十分通るであろう。母というより歳の離れた姉と言うに近い。

「殿さまに御台みだいさまをお迎えすることができて、わたくしもこれで肩の荷が降りました」

お杉は気さくな笑顔を浮かべた。

「これから、殿さまのこと、よろしくお頼みますね」

控え目な印象で、付き合いにくい感じではなさそうである。お久はそのことにとりあえず安堵した。

続いて大広間に元就と共に座り、多治比家の家来、侍女たちなどからあらためて挨拶を受けた。

その後、吉田の郡山城まで出向いた。毛利本家の当主である幸松丸とその母、本家の重臣らに挨拶するためである。

毛利氏の本拠である郡山城は、郡山の南の尾根に築かれた山城だが、規模は大きくない。お久が暮らした小倉山城に比べれば、哀れなほどの小城であった。

重臣らに出迎えられ、待つほどもなく広間へと通された。

数えて四歳（満年齢では三歳）になる幸松丸は、やっと簡単な言葉を話すようになったばかりで、やんちゃの盛りである。静かに座っていることができず、その母を手こずらせていた。

幸松丸の母は高橋お久光の娘で、名を夕ゆうという。亡くなった先代・興元の妻であり、年齢は二十歳より少し上であろう。やや癪の強そうなキツ目の顔立ちだが、かなりの美人である。日陰に咲いた花のようなどこか儂げな印象を受けた。

この女性は、現在いまのお久とそう変わらぬ年齢で早くも寡婦となったが、毛利家当主の生母である以上、息子が独り立ちするまでは再

嫁することもできず、家に縛り付けられている。郡山城の女城主という言い方もできるが、そういう暮らしが女にとって幸せであるのかどうか　お久にはちょっと想像がつかない。

元就は幸松丸とその母に丁寧に挨拶し、新妻を紹介した。

「多治比殿の御台所は吉川の姫であられるとか」

義姉になった女の眼は、少しも笑っていない。

「毛利と吉川の縁がより深くなったことを心強く思っております。多治比殿、向後も、幸松丸のことをよろしゅうお頼みます」

贈り物を交換し、ちよつとした酒肴が出た。毛利本家の重臣たちを交えてしばらく雑談をしたが、その大半が初対面でもあり、打ち解けた感じとはいかなかった。特に上座に座る夕は　もともと口数の少ない女なのかもしれないが　儀礼的な挨拶の後はほとんど口を利くこともなく、幼子の世話ばかりを焼いていた。

わたくしは嫌われているのかしら。

高橋の娘が吉川の娘に向ける態度は、どうも好意的とはいえない。もともと吉川氏と高橋氏は仲が悪い。当主の幸松丸が高橋お久光の孫ということもあり、毛利家中で高橋寄りの者たちのなかには、元就とお久の縁談に反対した者もあった、ということをお久は仄聞している。

ま、考えても仕方ないわ。

お久は実家を背負って輿入れしてきたわけで、毛利家中において夫である元就を吉川氏の利益代表にすべく努めるのが、その暗黙の責務である。お久を快く思わない人間がいるのもいわば当然で、それをいちいち気に病んでいたのでは乱世の花嫁なぞは務まらない。

元就は意外に座持ちが巧く、温和な微笑をたたえて重臣たちと当たり障りない座談をし、話を繋いでくれたから、お久も居心地が悪

いというほどではなかった。

日暮れ前に多治比に帰るということで、二人は一刻ほどで退出した。

「昨日今日でずいぶん多くの人に会ったろう」

城山を下りながら元就が言った。

「はい。まだちょっとお顔とお名前を憶えきれません」

お久は正直に応えた。

「さもあるづ。まあ、徐々に慣れていってくれればいい」

「はい」

「そういえば、今日は四朗がいなかったな」

その名を聞いて内心でやや狼狽したが、何気ない口調で返した。

「四朗殿　　といえば、ご舎弟の元綱殿のことですね」

「ああ、昨日は顔を見せに来ていたが　　」

「はい。お目に掛かりました」

「気の良いヤツなんだが、気ままところがあるからな。狩りにでも行ったか、遠乗りでもしておるのやもしれん」

元就は、お久と元綱の間に縁談話があったということをごう思っ

ているのだろう。知らぬはずはないのだが、素知らぬ振りをして
いるのだろうか……。

この人と、もっと心が通い合うようになったら。

永久とわの伴侶として揺るぎない自信が持てるようになったら。

いつか聞いてみたい、とお久は思った。

そのときは、きつと笑い話として話せるようになってい
るだろう。

第三章 乱世の梟雄 乱世の花嫁（二）

毛利氏の支配領域は南北に長い。

本拠である郡山は毛利領の北東にあり、そこから一里半ほど西にある多治比の猿掛城が北西の端である。毛利領は吉田から可部街道に沿う形で南西に向けて延び、六里を経て可部の熊谷氏と領地を接する。南東の端は向原のあたりである。領地のほとんどは山巒によって埋められ、山と山とに挟まれた谷状の狭い平野に街道が通っている。肥沃な地といえば江の川の本・支流に沿ったわずかな平野部に限られるが、この狭い地域に大小合わせて六十を超える城や砦があったというから、平地に近い丘陵や小山にはひとつ残らず砦があると云ってもそう間違っていない。村の数は、小さな集落も含めれば三十ばかりもあつたであろう。

この三月ほど、ゆきはそれらの村々を歩いていく。ゆきらの一行は、どこへ行つても常に歓迎された。

人の往来の激しい都市部と違い、娯楽の少ない山村などでは、諸国の噂がもつとも喜ばれる。歩き巫女のように諸国を巡り、様々な噂話や見聞を伝播する者は、情報に飢えた田舎者には重宝されるのだ。また、清神社で奉納した神楽の影響も大きかつたであろう。ゆきの美貌とその舞いの見事さは、「天女のようにじゃ」などとやや誇張された噂になつて、城下はもとより領内の端々にまで伝わつていたのである。

ゆきは村々の名主やら豪農などの屋敷を訪ねて歩き、靈驗あらたかな出雲大社の神符を売り、社殿造営のための喜捨きしよを集めて回つた。求められれば加持や祈祷をし、あるいは酒席に侍り、舞いや歌を披露し、諸国の見聞譚などを語つて聞かせる。吉田の城下では、大身の武士や富商などの屋敷に舞い手として招かれたりもしたし、毛利家の重臣の城、桂氏の桂城、福原氏の鈴尾城、渡辺氏の長見山城、坂氏の日下津城など、にも乞われて出掛けて行つたりもした。

ただ、南方へ足を伸ばすと泊まりになるから、あまり遠出はしないようにしていた。ゆきは清神社の長屋をそのまま宿舎にしているのだが、夜になると元綱が逢いに来てくれることが多かったからである。

その日も、ゆきは城下の商家の酒席に昼から招かれていた。

初更（午後八時）の頃に長屋に戻り、すぐに横になったのだが、その深夜、ほたほたと何かを打つ音を聞いた気がして、ゆきは目を覚ました。

月明かりさえ差さぬ部屋の中は、真つ暗である。闇に慣れぬ眼では視界はまったく利かない。それほど長く眠ったとは思えないから、夜明けはまだ遠いであろう。

四朗さま？

毛利家の御曹司がまた忍んで来たのかとも思ったが、考えてみれば元綱は、これまで戸を叩くようなことをしたことがなかったし、そもそも今夜は兄の婚儀とかで隣郷の多治比へ出かけているはずで、ここに来るわけがない。

気のせいだったかしら。

再び目を瞑ると、しばらくして再び床板がほたほたと鳴った。

「たれ？」

ゆきは半身を起し、夜具の下にある懐剣を手で探った。音を立てぬようにその鞘を払う。

二間ばかり先の闇で何か動く気配がした、と思った瞬間、

「俺々」

と小声が返ってきた。その声音に聞き覚えがある。

「蓮次れんじか……」

安堵のため息が出た。さすがのゆきも見えない相手は怖ろしい。

「そのまま。火は灯すな」

闇が動き、わずかな衣擦れの音がした。土間にいた蓮次が板間に腰を降ろしたようだ。ゆきには何も見えないが、あの男は夜目が利くらしく、闇をほとんど苦にしない。

「お前さんがこんなところを宿にするから、繋ぎを取ろうにも取れず、苦労したぜ」

「……苦労？」

「この半月ばかり機会を窺ってたんだが、武士が二、三人、常に目を光らせてやがって、夜はこの長屋に近づけたもんじゃねえ」

「ああ」

元綱の家来が主人を護衛していたのだろう。

ゆきはまったく知らなかったのだが、いつ屋敷を抜け出すとも知れぬ元綱を警護するために、重蔵と元綱の近侍たちが相談して、交代でこの長屋の周囲を密かに張っていたのである。今夜は元綱は多治比へ出向いており、重蔵たちも清神社を警護する必要がなかったから、それで蓮次が忍んで来れたのだ。

「毛利家の御曹司とは、またうまいところに取り入ったもんだな。もっとも、その想い者になってしまっちゃ、今さら宿を旅籠に移すというわけにもいかねえんだろうが」

「想い者 か……」

恋人というほどの意味である。ゆきにとって不快な響きではない。

「で、首尾はどうだ？ 家中の様子が少しは見えてきたか」

訊かれて、ゆきはやや鼻白んだ。

「……いや、まだどうもよく解らない」

別に隠し立てするつもりもないが、そう言うしか仕方がなかった。この三月、ゆきは多くの酒席でさまざまな話を聞いたが、どう整理しても毛利家中の人間関係が奇麗に割り切れてくれないのである。

高橋久光が絶対的な権力を握る高橋氏のような体制なら、主流派と反主流派、守旧派と改革派のような色分けは比較的容易なのだが、毛利氏の当主は幼少の幸松丸で、これは政治力は皆無である。その後見として高橋久光と多治比元就が座っているのだが、さらに毛利家には十五人もの宿老がおり、しかもそれぞれに血縁であったり縁戚であったりしているから、その親疎や利害関係は複雑すぎて、一筋縄ではとても理解できないのだ。

同族の者でも同じ方向を向いているとは限らないし、たとえば次男の元就に親しい者、三男の元綱に近い者という風に仮に分類したとしても、それらはそれぞれに高橋氏寄りである者もあれば吉川氏寄りの者もあるであろう。吉川氏は尼子氏とは強い同盟関係にあるが、吉川氏寄りの者が必ずしも尼子氏に心を傾けているわけではないだろうし、大内氏の傘下であることを支持しながら高橋氏のことには毛嫌いしているという者もあるだろう。大内・尼子に頼るのではなく、安芸国人一揆の結束こそが大事だと考えるような者もあるかもしれない。

「たとえば、毛利さまの執権は志道広良というお人じゃ。老臣おとなの坂広秀はその従兄弟いとこに当たる。同じ坂一族の出じゃが、坂氏の本家である坂広秀と分家の志道広良は仲が良くないらしい。一方で、そのお二人は大内びいなき鼻びいなき貞まことであるという点では仲間だ」

ことほど左様に、毛利家は、そういった主義も立場も違う重臣たちが合議によつて家政を執っているのである。ゆきが知り得た限りでは、「毛利家の意志」といったものを体现する中心的人物は、存在しないと云うしかなかった。

「老臣おとなのなかで重きをなしているのは誰だ？」

「まず志道広良。あとは、福原広俊というお人が家中で長老だという。これは多治比元就の母方の祖父じゃそうな。それと、坂、井上の一族から老臣が多く出ている」

その程度のことは調べれば誰でも解ることだから、蓮次ももちろん承知しているだろう。

「志道広良は多治比元就に親しく、井上党の老臣とも近いと聞いた」

「多治比元就と言えば、今宵が吉川の姫との初夜だな。今ごろは臥ふ所のなかで睦み合つてる頃か……」

闇でその表情は窺えないが、蓮次の下卑た笑い顔が見えるようであつた。

「吉川国経は出雲のお屋形さまの義兄だ。その国経を舅いひぢいにしたのなら、多治比元就も出雲のお屋形さまと縁戚ということになる。高橋久光にも十分対抗できる後ろ盾を得たわけだ。これからは毛利家

中での重みもずつと増すだろうな」

ただ、それでも当主の幸松丸が高橋久光の孫であるという現実には動かない。毛利家が尼子氏に通じるということは、尼子と敵対している高橋氏を敵に回すことと同義であり、容易に決断できることではないであろう。

ゆきの感触ということ言えば、毛利家中の人々やその領民たちは、旭日の勢いで勢力を伸長させている尼子氏の威勢を恐れてはいない。しかし、遠い出雲より、隣郷の高橋氏により現実的な恐怖を感じるであろうことも間違いない。いずれにしても尼子軍が安芸に雪崩込んで来るのは今日明日の話ではないわけで、決断を遠い先に置いて思考を止めているのかもしれない。実際に大内義興が京から帰国し、大内・尼子の戦いがどう展開してゆくのか見極めないことには、右も左も決められないということもある。大内氏から尼子氏に寝返ろうというほど飛躍して考えるところまでは、まだ物事が煮詰まっていないように思える。

ただ、重臣たちのなかでも、吉川氏との盟友関係を大事にする者と、高橋氏との提携を一番に考える者とは、尼子氏に対する考え方にかなりの温度差がある。毛利家中は、大内・尼子の対立軸で見ると、吉川・高橋の軸で眺める方が、形は理解しやすいのかもしれない。

「お前さんの仇あだし男おはどうだ？」

「四朗さまは出雲のお屋形さまを好いておるようなことを言うておられたが。それで尼子に心を傾けるといふこととは違ふと思ふ。……」

元綱は尼子経久に対しては武士としての敬意を持ち、一方で高橋久光のことは露骨に嫌っているようだが、だから毛利家を高橋氏が

ら離間し、尼子氏の側へ導こうとしているかと言えば、必ずしもそうではないであろう。あの若者の思考や物言いは、政治的な色合いが薄く、もっと単純な好悪の感情から発しているように思われる。

「四朗さまは父御を早くに亡くされた。坂広秀が幼き頃より四朗さまの後見を務めてきたらしい。渡辺勝すくもという老臣は四朗さまの傅人めんとであつたお人じゃ。この二人は四朗さまに近い。あとは桂広澄という老臣とも親しいような気配であつた」

「ふむ」

蓮次はしばらく考えている風に沈黙していたが、

「出雲のお屋形さまは、そう遠くない先に、吉川を通じて毛利に臣従を求めるだろう。毛利家中が大揉めに揉めるのはそれからだな」

と面白がっているような口調で言った。

「願つてもないところに手蔓を掴んだことだし、お前さんにはもうしばらくここで女をひさいでいてもらおうか」

歩き巫女が一所に長く留まれば怪しまれそうなものだが、そこは蓮次も抜かりはない。行商のついでに、ゆきが元綱の囲い者になつたというような話をあちこちでばら撒いており、噂はすでに城下に広まり始めている。そのうち妾にでもするのだろうということまで、誰も不審には思つまい。

元綱は未だ本家の部屋住みで何の権力もないが、何と云つても先代・興元の実弟であり、評定などにも加わり、機密にも参与できる立場にある。情報源としては申し分ない。

「二十歳やそこらの若造に、お前さんの身体を自由にさせとくのは癪だな」

その声が思わぬ近さでしたので、ゆきは驚いた。

暗さに少し目が慣れて、闇の濃淡や物の輪郭もうつすらと解る。質量をもった闇の塊が、ゆきの鼻先にまで近寄って来ていた。

「私は尼子の謀者でないかと疑われている。これまでのところは四朗さまもさほど気に留めてはおられぬ様子じゃが、お前のことが知れるとさすがにマズい。ここにはもう来るな」

「ふむ。またしばらくこの匂いを嗅げねえか」

声に笑いが籠っている。

「なんのつもりじゃ」

「こつちも命懸けで忍んで来ている。多少の役得はあってもいいんじゃないねえか？」

蓮次はゆきを横ざまに抱き、夜具へと押し倒した。同時に、己の脚をゆきのそれに絡め、裾の間に手をすべり込ませている。

が、その手の動きが凍りついたように止まった。

蓮次の喉元に懐剣の切っ先が突き立ち、その皮膚を薄く裂いたからである。それに気付かず体重を掛けていたら、怪我では済まなかつたであろう。

「……おいおい、殺す気か？」

「命懸けなのじゃろう。死んだところでもともとではないか」

ゆきは突き放すように言った。

「御曹司に操でも立ててるつもりか。売女風情が義理がてえことだな」

男の声に明確な憎悪が籠っている。

「神女と遊び女の区別もつかぬ男に好んで抱かれてやるつもりはない。子種を撒きたいのであれば他を当たるがいい。それとも、無理やりに犯すか。いっそその方が鉢屋のお前には似つかわしかろう」

ちっ、と舌打ちをして、蓮次の身体が離れた。闇に溶けるようにその姿が朧になり、次の瞬間にはもう見えなくなる。

「手籠めにしようとして逆に刺されたなどと知れば、仲間内の物笑いになっちまうぜ」

声が遠い。土間へ降りたらしい。

「ほほ、鉢屋の者にも恥などあるのか」

ゆきの憫笑に、男はため息で応えた。

「気位の高え女だよ」

「そこに惚れたのdarou?」

蓮次は返事もせず、戸を薄く開き、月明かりを恐れるように闇に消えた。

「やくたいもねえことを……」

という眩きは、ゆきの耳にまでは届かなかった。

その数日後、ゆきが夕餉を取っていたときのことである。

はげしいえずきがこみ上げ、食べたものを残らず吐いてしまうということがある。

ゆきの背を擦ってくれていた市兵衛が、

「おゆきさま、もしや」

と怖いほど深刻な声音で言ったとき、

これは悪阻つわりでは……。

ということに、ゆきは愕然と気付いた。

ゆきは昔から月のモノが不順で、一月で来ることもあれば三月来ぬこともあり、自分のそういう体質を知り抜いていたから、吉田に入ってから、それが来ないことについても、いつものことと思つてさほど気に掛けていなかったのだが、ここ最近の体調の悪さを想い合わせ、自分の身体に尋常でない変化が起こっていることを否応なく直感させられた。

あの時だ。

ということも、女の勘として解る。清神社に鎮座する「神」を迎え入れたと思つて抱かれたあの夜の子に違いない。

ゆきは狼狽し、それ以上に当惑した。

これまで多くの男と枕を交わしてきたが、ゆきはついぞ妊娠したことはなく、自分は石女いしめなのではないかと密かに思っていたのである。己が母になったり男ひとの妻になったりするということのようなことを、これまで本気で考える必要がなかった。

ゆきは歩き巫女の暮らしが気に入っていたし、女にとって巫女ほど素晴らしい生き方は他にないのではないかとさえ思っていた。誰かの妻になれば、さまざま煩わしさに悩まされねばならぬであろう。周囲の他人に様々に気を使い、その息をうかがい、遠慮をしたり気兼ねしたりしつつ世を送るのはいかにも気が重い。それでもゆきが若く美しいうちならばチャホヤもされ、大切にもしようが、年が経てその容色が衰えれば、男の心さえも若く美しい別の女へと移ってしまうに違いない。

それならば、巫女として己の芸で身を立て、誰の厄介にもならずに生きてゆく方が、どれほど気楽かと思うのである。

巫女とは神に仕える特殊な技術者であり、芸能者である。世間からはそれなりの尊崇を受けており、身分ということで言えば卑賤ではあるが、権門勢家にも割り合い自由に出入りができ、庶民に比べれば収入も決して少なくはない。霊能や歌舞や教養といったものは年と共に磨かれることはあっても衰えるものではないから、それで世に立っている限り、誰に対しても遠慮する必要はないのである。ゆきはそう信じ、そのことを誇りにも思い、これまで男を利用することはあってもそれに頼ることはせず、自由気ままに世を送っていた。

しかし、子を成したとなって、初めてその心に迷いが湧いた。

この子が、身分賤しき歩き巫女の子として生まれてしまえば
・
・
・

女なら歩き巫女になる。それはまだ良いとしても、もし赤子が男であつたとすれば、故郷の村で雑役などをする下男になって市兵衛のように生きるか、豪農の小作人にでもなるか、あるいは鉢屋のよくな連中に飼われて世を終えるしかないであろう。

それはあまりに哀れと、ゆきは思う。

毛利氏は小なりとはいえ歴とした地頭であり、元綱はその家の御曹司である。生まれた赤子が男で、元綱の嫡子ということにでもなれば、将来、そこそこの領地を持つ小領主くらいにはなれるかもし

れない。世は乱世であり、武家の浮沈は極めて激しいから、その生は安穩とは言えぬであろうが、生まれた子はその器量次第で面白く世を渡つてゆけるであろう。女であっても、それは毛利家の姫として扱われるのではないか。ゆきの身分が低いからその扱いはさほど重くはないであろうが、いずれどこかの豪族なり家中のしかるべき重臣の元へと嫁ぐことになるに違いなく、婚家の次第では、栄耀栄華とまでは言わずとも、それなりに恵まれた暮らしができるのではないか。

ともかく四朗さまに相談しないことには……。

これは、すでにゆきだけでどうこう決められる問題ではない。ゆきの出自を考えれば、毛利家の御曹司の正妻に迎えられることはそもそも不可能であり、側室として置いてもらえればまだ良い方で、最悪、生まれた子を取り上げられて放逐される、といったことさえ考えられる。この時代、武士から見れば巫女も遊女も大きな違いはなく、卑賤の女の扱いとはその程度のものなのである。自身の処遇はひとまず措くとしても、生まれて来る子の行く末を想えば、やはり元綱の子として認めてもらえるようにしておくべきであろう。

ある夜、元綱が忍んで来た時に、ゆきはそのことを打ち明けた。

「子が……？」

と言つた元綱の表情は、喜びからは遠く、困惑とか当惑とかに近かつた。「本当に俺の子か？」などと聞き返さなかつただけ、誠実であつたとは言えるかもしれない。

しばらく沈黙した後、

「俺にも子などできるのだな……」

ポツリと言つた。

「当たり前でございますのに」

「ああ、それはその通りなんだが、これまで通じた女どもには一向にその気配がなかったからな。俺には子種はないのかと思っていた」

若者の詠嘆を聞いて、ゆきも苦笑した。

子が成し難い者同士で、それでも子が授かったのだとすれば、それは運命と言うべきであろう。神女であるゆきはそこに神慮を感じ、

あの夜は、やはり素戔嗚尊すさのおのみことがなにかしら計らってくださったのかも知れない。

なぞと思ったりした。

「いや、それにしても驚いた。そういうことならば、お前には身を大事にしてもらわねばならぬな。丈夫な子を生んで欲しい」

「それは……そのつもりですけど……」

ゆきは少し苛立った。この若者は世事にはまったく気が回らないのだ。

「あの　　ここで生むのですか？」

「ん？」

「生まれるまでまだ半年以上もあります。ずっとここにお世話になっておるわけにも参りませぬ」

それを聞いて、元綱は顔をさらに困惑させた。

「ああ、そうか……。無論、このままというわけにはいかな

お前を相合の屋敷に迎えたいが。その、どうなのだろうか。お前は俺の妻になれるか？」

こちらが聞きたいところである。

「なれるかと申されましたも……。ゆきを妻にして頂けるのでしょうか」

「いや、巫女には巫女なりのしきたりやら何やら、色々と面倒ながらみもあるう。そちらの世間のことは俺はよう解らぬからな。故郷には親兄弟もあるうし……。お前はずつとこの地に居ついてくれるのか？」

妻になつてくれるかどうかを心配しているらしいと気づいて、ゆきは内心で驚いた。

この若者は、大名家の御曹司らしい権高さが少しもなく、己の身分の高さとゆきのその卑ひくさに対する認識が、常の武士とは違っているのである。それは毛利家自体がごく小規模な豪族であるからかもしれない、気楽な三男坊という境遇の影響なのかもしれないし、あるいは元綱自身が妾腹の子として生まれ、兄たちとの待遇の差というものに理不尽さを覚えていたからなのかもしれないが、いずれにしても元綱は、武士がごく当たり前持っている身分的な差別意識をほとんど持ち合わせていなかった。そのことから来るこの若者の気さくさ、優しさ、器量の大きさは、ゆきのような被差別的な身分の女にとってはたまらない魅力として映るのだが、しかし、こういう場合は「子供！」と罵倒してやりたくもなる。

「歩き巫女は旅の空が棲家すみかでございます。一所に長うは留まりませぬ」

つい拗ねたような口調になり、くるりと背を向けた。

「四朗さまは、ゆきがこの地を去ると言えば、引き止めてもくださらぬのですね」

「どうしてそういう話になるのだ？ 俺は、この地に居ついても大丈夫なのかと尋ねておるだけだ」

それはゆきという人間を自分と対等に遇してくれているからこそ態度であり、若者なりの思いやりなのであるうが、それがゆきには齒がゆくてならない。

しきたりもしがらみも関係ないではないか。なぜ俺の女ものになれ、と命じてくれぬのか。その言葉がたとえ口先の嘘だとしても、その嘘があればこそ、女はすべてを投げうつこともできるのに。

「四朗さまは、ゆきがご要り様なのですか？ それとも子が欲しいのですか？」

「そんなもの両方に決まっている」

「それならば、なぜ我が妻になれ、と申してくださいませぬ。たつてとお望みくださるならば、ゆきを旅立てぬようにしてくださいませ」

「ああ」

頓悟とんごしたように、元綱の表情から困惑が消えた。

「よう解った。しばらくだけ待ってくれ」

元綱はゆきを引き寄せ、その身体を強く抱いた。

「必ず相合あいあひで暮らせるようにする」

嬉しくもあつたが、女心を解さない男に物足りなさも湧いた。

浮いた言葉のひとつもくださればいいのに。

ゆきは、長くとも数ヶ月、短ければ一夜限りという疑似的な恋愛を数え切れぬほど経てきた、いわばこの道の猛者である。そのゆきからすれば三つ年下のこの若者は 戦場では「今義経」の異名を取るほどの勇者であるにしても、こと色恋に関しては どうしても幼く見えてしまうのだが、しかし、この気が利かぬ男に、抑えがたいほどの愛かなしさを感じ始めている自分を、我ながらどうしようもない。

相合の元綱の屋敷には、常時二十人ばかりの人間が暮らしている。元綱の母である相合の方とその末娘が一人、侍女がそれぞれ数人、雑用や水仕事をする卑女など、女手は多いのだが、男手は重蔵を除けば老僕が一人と馬の世話やその口取りを務める中年の下僕が二人あるのみで、あとは近侍の青年たちが三、四人ずつ交代で長屋に詰めている程度である。元綱が幼い頃は傳人めんとの渡辺勝すけや後見役の坂広秀などが頻繁に出入りしていたが、彼らは元綱と歳が離れすぎていたし、元綱がいつぱしの大人になってからは屋敷からやや足が遠くなっている。元綱はこういう環境で成長し、暮らしているために、ことに長兄の興元が病死してからは、気軽に世事を相談できる年長者が近くにいなくなっていた。

その元綱にとって、有田の戦場で拾った重蔵という男は、色々な意味で重宝な存在であった。重蔵は元綱より十ばかりも年長で、世故に長けているというわけではないにせよ、諸国を旅して来たという意味で世の見聞もそれなりに広がったし、京の武士の子であった

からか意外に教養もある。何より毛利家中における政治的・党派的な色合いを持たず、元綱を主人と仰いでその身よかれとのみ計ってくれるのが有難かった。

ある夜、元綱は重蔵を呼んで二人きりで酒を呑みつつ、

「どうも子ができたらしい」

と相談を持ちかけた。

「それはそれは おめでとうございまする」

重蔵はさして驚いた風もなく、穏やかに微笑した。

「例の巫女でござるか？」

「ああ、そつだ」

「お手柄にござりましたな」

「いや、うん。それはいいのだが」

元綱は困ったような顔で続ける。

「あの者を妻に迎えたいと思うのだが、どうすればいいだろう？」

「それは」

言われて重蔵も当惑せざるを得ない。

「まずは相合の方さまにご相談申し上げ、そのお許しを頂かねばな

りますまい。その上で、ご本家の重臣の方々にも諮らねばなりませんまいが」

「やはり母上にも相談せねばならぬか……」

元綱はいかにも厭そつな顔をしている。

「隠し通せるような事ではありませんまい。お子ができたとなれば、もはや色恋の話ではありません。それは当然です。いや、そもそも、あの巫女を妻としてお迎えになるおつもりなのですか？」

相手は卑しい巫女風情なのである。常識的に言って、毛利家の御曹司の妻になどなれるものではない。女奉公人　つまり妾として雇ったということにすれば済む話ではないか。

「それはせぬ。正妻は無理としても、せめて側室としてきちんと遇してやりたい」

「ならばなおのこと、内々で済ませられる話ではありませんまい。四朗さまのご身分ということもござる」

「婚儀をせねばならぬか……」

途方にくれた、という風情で言った。

このあたりがこの若者の小僧臭さであろう。元綱はまだまだ世慣れぬ若者に過ぎず、婚儀ということについてもどういふ思案もつかず、ほとんど成すところがなかった。

「ごとういう時のための後見役でござる。坂さまにご相談なさるが宜しかろう」

元綱の母である相合の方は、身分は低いながらも歴とした武士の娘であった。相手の女が歩き巫女と知ってさすがに良い顔はしなかったが、子ができたらしいということまで聞かされれば強く反対することもできず、渋々ながら事情を諒解してくれた。

話を聞き知った坂広秀は、

「側室になさるにしても、ご母堂が巫女風情では世の聞こえも悪く、またしかるべき実家がなければ、生まれたお子が肩身の狭い想いをせぬとも限りませぬ。色々と面倒な根回しも要りましようが、なに、細々としたことはこの広秀に万事お任せくだされ」

と得意顔で請け合った。

「ひとえに頼み入る」

元綱が広秀に頭を下げたのは、これが最初であつたらう。

この坂広秀という男は、家中に対する小政治や根回しは年相応に老練で、小知恵も利く。ゆきの扱いについても、まず自分の家来の遠縁の娘ということにし、それを自分の養女にするという手続きを踏んだ上で、坂氏本家の養女として元綱に嫁がせるといふ。それだけの形式と必要な手続き、家中への根回しなどを、半月ばかりで調べてしまった。

形式上、ゆきの実家は坂氏本家ということになり、広秀がその後ろ盾になったと考えていい。広秀にすれば、ゆきを己の手駒にし、元綱にも恩を売った上で、その義父という立場を手に入れたことになる。

ともあれ、ゆきは向原の日下津城へ連れてゆかれ、そこで半月ばかりを過ごし、侍女やお付きの家来などを揃えた上で、あらためて相合の屋敷に輿入れするという事になった。その間、相合の屋敷

ではゆきの局となる部屋の増築が大急ぎで行われた。元綱には経済力も動員力もないから、これも坂一族の当主である広秀がすべて差配した。

この私が武家の婚儀をすることになるうとは……。

さしものゆきも、自分の運命の変転に呆然とする想いである。

六月の吉日を選び、簡略ながらも披露の宴が行われた。

輿に乗せられて相合の屋敷へと運ばれたゆきは、毛利本家の重臣らが居並ぶ広間で盃事をし、木の香りも新しい新築の部屋で元綱と「初夜」を持った。

「どうも奇妙な感じだな。今さらお前と初夜なぞと……」

苦笑する新郎に、

「ゆきも何やら長い夢でも見ているような心地がします」

白装束のゆきは苦笑を返した。

臥所ふしどに入れば、すでに馴染み合った男と女である。ゆきは元綱の胸に顔を埋めながら、

「末永う可愛がってくださいませ」

と吐息混じりの声で言った。

お腹の子を氣遣ってか、元綱の愛撫は攻撃的な荒々しさが消え、ゆきを優しくいたわるようにゆったりとしたものに変わった。それでも、妻になったというだけで気持ちが変わったのか、ゆきは充分にそれに酔い、これまで以上の悦びを感じられるようになった。

身体にも相性というものがある。肌を重ねるたび、ゆきは、元綱に対する情愛が潮のように高まってゆく気がするのである。

第三章 乱世の梟雄 老雄の悲嘆

島根県の松江市に、かの小泉八雲が愛した洞光寺という古刹がある。

洞光寺は、徳川時代の初期、堀尾忠氏によつて松江城が築かれたときに現在の位置に遷うつされたのだが、それ以前は安来市の広瀬月山富田城にほど近い場所にあつたという。もともと尼子氏ゆかりの寺院で、尼子経久とその父・清定の墓所がある。

その洞光寺には、尼子経久の肖像画と伝えられる寿像が遺つてい

る。描かれているのは、いわゆる衣冠束帯姿いかんそくたいの若々しい青年で、賛さんの日付を信じれば三十三歳の頃の経久ということになる。烏帽子ではなく古風な冠をかぶり、黒い袍ほうのような衣服をまとい、武士というより高位の公家といった方が相応しい。やや面長で頬の線がふつくとし、眉尻はあがり、目は二重で優しげである。鼻はやや高いが小鼻は小さく、唇が薄い。髭は鼻下に蓄えているが、頬や顎のあたりは奇麗に剃られている。その顔立ちは上品で、秀麗とさえ言えるであろう。豪傑、猛将といった型からはほど遠い。

この尼子経久とは、どういう男であつたのか
京の大徳寺の四十一世住持・春浦宗熙しゅんぽうそうぎが、この寿像に賛さんを書いて
いる。

「経久の忠功の誉ほまれ美しく輝き、鉾先りりしく、雲州の庶民を安撫し、その威風は万世にふるい、金城湯池の重城（富田城）を拠点に向かうところ敵なく、道理のとあつたことばには何人なにびとも屈服する。禅儒の人で気宇壮大、経久の発する光明は国土の八方を照らす」

これ以上ない持ちあげようである。

若き日の経久は、出雲の守護代であつた父の名代として京に上つ

たことがあり、その時にこの高僧と交流を持ったらしい。ちなみに大徳寺というのは、かの一休和尚をはじめ名僧を数多く輩出し、「五山の上」という我が国の寺院で最高位の寺格を与えられたこともある臨済宗の巨刹きょさつで、その住持（寺の長）といえは、現代で喩えるなら文部科学省の大臣といったほどの権威がある。三十三歳の頃の経久はやつと出雲一國を平定したばかりで、しかも京から遙かに遠い地方の一大名に過ぎないわけだから、祖父ほどに年の離れた春浦宗熙が迎合せねばならぬ相手ではない。その言葉は、誇張や装飾はあるにしても、心底から経久という男に惚れ込んだのものと見るべきであろう。

『陰徳太平記』は、経久についてこう述べる。

「知勇全備するのみならず、吾わが身露宿風餐ろしゆくふうさんの艱難辛苦を経て後、数國の大將と成りたる人なれば、諸士百姓等に至るまで、それぞれに応じて身の上の苦忠（苦衷）をよく考へ知られたる故、民を使ふに時を以ってし、臣を見るに礼を以ってし、賢を尊ぶに爵を以ってし、士を招くに禄を以ってするの道を行はれけるによりて、勇士謀臣風を望み、招かざるに來り、よばざるに集まりぬ」

『雲陽軍実記』によれば、経久は若年より世間の荒波に揉まれ、艱難辛苦を重ねた人物であったので、他人に対してはかくべつ仁心が深く、柴をかる下男や藻を取る海女のような者にまで憐憫の情を持ち、また女子供にはことさらの優しさを示した、という。

「常々は飢えたるには食を与へ、凍えたるには服を賜はりける程なれば、まして君（経久）の為に命を的にする軍士は雑兵に至るまで、手負は疵きずを吸い、医薬を与え、討ち死にすれば、その子孫を寵愛し、職禄を増し、追善誦経まで心をつけ給ふゆゑ、万人信を通じ徳を慕い、武士たらんものは経久公の命に代わらんことを本意とす」

とある。

また、経久が没してから十年ほど後に書かれたと推定される『塵塚物語』という古書にもこんな記述がある。

「経久は天性無欲正直の人にて、牢人を扶助し、民と共に苦楽を一にし、事にふれて困窮人を救われける間、これにより、彼の門下に首をふせ、渴仰する者多し」

齊（古代中国の国）の名宰相・孟嘗君は、一芸を持つ者であれば、盗賊であろうが乞食であろうが誰でも食客として扶養し、その数千人と言われたが、その情景が出雲に再興したようだ、と、人々は感じ入ったという。

このようにいずれの古書も、人を大切にする経久の徳を讃えている。

他方、尼子経久という人は、物欲を置き忘れて生まれてきたようなところがあった。毎年暮れになると持っている衣服をみな家来にやってしまったため、出雲の国主という高々とした地位にあるにも関わらず自らはほとんど衣服を持っておらず、真冬でも薄い綿の小袖ひとつを着て寒そうにもせず、「暮春暖気の人相をみるがごとし」という体で悠々と過ごしていたという。

また、これも『塵塚物語』にあるエピソードだが、経久は、自分の所持品を人に褒められると、「そんなに気に入っていただけならば、貴殿に差し上げましょう」と、なんでも人にかけてしまうという珍妙な性癖があったらしい。

「墨蹟・衣服・太刀・刀・馬・鞍などにいたるまで、即時にその人におくられけるとなん」

といった有様だから、ついには人々は経久の前では迂闊に道具を褒めることができなくなってしまったという。

ある時、出入りの何某という者が富田城にご機嫌伺いにやって来て、経久と様々に雑談していたのだが、ふと庭に目をやると、景色の見事な松の古木がある。何某も経久の性質は知っており、物を褒めてはいけないということは承知していたのだが、庭木まで褒めないうのも風流に欠けると思い、

「いやあ、このお庭の古松、まことに趣向よく拝見させていただきました。そもそもこの木は、どこのどなたがここに植えられたものでしょうか？ それとも昔からこの庭に自然に生えていたものでしょうか？ このような姿の美しい松は、私は今まで見たことがありません。ぜひお大切になさってください」

と言つて、帰つて行つた。

その翌日、経久はこの松を指差し、

「知恵を使つて、このままの姿で、かの人にお贈りせよ」

と家来に命じた。

困つたのは家来たちである。人夫を使つてどうにか松を根から掘り起こしはしたものの、なにせ十間（十八メートル）以上もある老木のことから車に乗せることも容易でなく、また乗せたところで、城にはそんな大きなものを通せる通路はない。

途方にくれて正直にそう報告すると、経久は、

「そついうことなら致し方ない。その松を細かく切つてお贈りせよ」

と言つて古松を切り砕かせ、それを牛車に乗せて残らず贈らせたという。

この挿話は、「まったく不思議としか形容しようのない人柄である」という言葉で締めくくられているのだが、自らの物欲を自身で

徹底して禁じているような経久の姿勢が窺えて、なかなか興味深い。乱世を武将として生きる経久にとって、その関心は、己の物欲を満足させることなどではなく、いかにして衆人の心を執るか、というこの一事に尽きたであろう。松の名木なぞ焚き木とどれほどの違いもなく、それを愛でる風流心があるのはまだ良いとしても、それに執着しようとする己の心は常に諫めねばならなかった。愛蔵する物をみな人にくれてやるという行為も、ここに通じている。物をやめた相手を喜ばせると同時に、自分の小欲を常に監視し、これを拘束し、抑圧し、擦り潰してしまうという自戒でもあったに違いない。「無欲」という自分の人柄を世間に宣伝するというような思惑も、そこに含まれていたと推察できる。

経久はそれほど人心の掌握に心を砕き続けていたわけだが、それでも出雲という国を統治することには手を焼いた。経久は出雲の国主といふべき存在だが、絶対君主として出雲を完全に支配していたわけではないのである。

経久は一度は出雲守護代の地位を失い、徒手空拳の浮浪人という境涯に落ち、わずかな味方を募っただけで謀略によって一夜にして富田城を回復した。そこから一代で大勢力を作り上げたわけだが、それだけに出雲の在地勢力はなるべくこれを味方につけ、取り込んでゆくという方針を取らざるを得なかった。出雲の東部はもともと尼子氏の直轄領が多く、父の代ですでに強固な地盤があったこともあり、ほぼ掌握できていたが、多くの大豪族が割拠する出雲西部の山岳地帯はそうはいかない。そこに根を張る三沢氏、三刀屋氏、塩谷氏、赤穴氏といった豪族たちは、いずれも独立心が強く、守護の京極氏を追って出雲を横領した尼子氏をそもそも快く思っておらず、不満が鬱積すればすぐにも叛くというようなアクの強い連中が多かった。豪族たちはそれぞれに寺社領などを横領することによって富力を蓄えているのだが、経久は国主として寺社の利益をも守ってやらねばならない立場だから、その利害もぶつからざるを得ない。彼らは恭順の姿勢を取っていても心から尼子氏に服しているわけでは

なく、政情は常に不安定だった。

経久はその巨大な「個」で豪族たちを統御してはいるが、この国内事情には悩まされ続けていた。経久が豪族たちを動員して次々と外征を繰り返していたのは、共通の敵を作ることと豪族たちの目を国外に向けさせ、切り取った領地を褒美として分け与え、その不満を逸らすと同時に、戦争によって豪族たちを酷使し、その民力と財力とを疲弊させ、反逆を起こすためのエネルギーを浪費させるといふ裏の思惑もあつたであろう。

この時代の大名というのは在地勢力の上に乗る盟主のような存在で、傘下の豪族たちは家来というより同盟者というに近い。ひとたび膨張を始めた大名家というのは、酷使した豪族たちを常に満足させてやらねばならず、つまりは恩賞を次々と与えてやる必要がある。このためにどんどんと領地を広げ続けてゆかざるを得ないのである。それが不可能ということになれば、経久の大将としての信望は一夜にして失墜してしまうであろう。

そうして膨張を続ける尼子氏と、中国地方の大半の豪族を傘下に収めていた大内氏との戦いは、経久が京から帰国した永正九年（1512）ごろからすでに始まっていた。経久は、大内氏の本拠である周防から遠い備前、備中といったあたりにさかんに兵を出し、大内氏から脱しようとする豪族を支援し、これを服属させている。大内氏は水軍をもって本国から兵を送り、尼子方と戦ってはいたが、大将の大内義興が主力軍と共に京にあることもあつて、捗々しい戦いができない。尼子軍とその傘下の豪族たちは戦えば必ず勝ち、そのことでさらに大内氏の威勢と声望は衰えていった。

この永正十五年（1518）、備後の名族・杉原氏が、尾道あたりに進出し、海からやって来た大内軍を撃破している。杉原氏は尼子傘下の豪族であり、尼子氏の勢力はこの時期には瀬戸内海まで伸びていたことが解る。備後の諸豪族は、好悪は別として、少なくとも表面上は、出雲に人質を送り、尼子氏に臣従する姿勢を示すようになっていった。

同時にこの時期、経久は、弟の久幸を大将にして東へも兵を向け、伯耆東部の豪族である南条氏などと兵火を交えている。伯耆国の守護は山名氏であったが、その威勢は衰え、傘下の豪族たちが下剋上で守護の支配を脱し、自立するようになっていたのである。経久は山名氏を援けるといふ名目で軍勢を派遣し、伯耆をほぼ制圧しつつあった。

さて

尼子経久は、記録に残っているだけで六人の子に恵まれ、そのうち三人が男子であったことが知られている。

長男を政久、次男を国久、三男を興久おきひこという。尼子経久の妻は「鬼吉川」吉川経基つねもとの娘であり、この三兄弟はいずれもその女性の腹から生まれ（異説もある）、すでに成人していた。

三男の興久は、このとき二十二歳。利かん気の若者で、三兄弟の中でもっとも血の気が多い。癩癩持ちで無鉄砲な面もあったが、戦場では誰よりも勇猛で誇り高く、彼が一声下知を発すれば、家来をして喜んで死地に向かわしめるような一種のカリスマがあった。出雲経略の一環として出雲西部の強豪・塩谷氏えんやに養子に出され、その家を継いで塩谷彦四朗興久と名乗っている。ちなみに興久の「興」の字は大内義興よしかの偏諱であり、数年前まで尼子氏が大内氏に臣従していたことの証拠と見ている。

次男の国久は二十七。肉厚で雄偉な体躯を持ち、性質にやや粗忽なところはあるものの人並み外れた武勇を誇り、さらに将としての合戦の進退が精妙で、父である経久をして「軍務にかけては鬼神のごとし」とさえ言わしめた。後年、尼子家の最精鋭部隊として著名な「新宮党」の大将になる男である。弟と同様の理由で出雲の名門・吉田氏に養子に出され、その家を継いで吉田孫四朗国久と名乗っていた。

長男の政久は、三十一歳。経久の通称であった「又四朗」の名乗

りを継ぎ、尼子家の相続者たることはすでに確約されている。

この政久の評判は、家中の内外を問わず非常なものであった。高齡の経久に代わって近年は尼子軍の総大将を務めることも多かったが、それを楽々とこなしてまったく粗漏がなかったというから、智勇に優れていたことは言うまでもないであろう。その相貌は若い頃の父に似て秀麗で、肌は白く眉は長く、目元などは婦人のように優しい。拳措は洗練されて立ち居振る舞いに厭味がなく、言葉づかいはいかにも武家貴族らしい典雅さと美しさを備えていた。また文雅の道にも明るく、詩歌に長じ管弦に達者で、その横笛の腕前は名人の域にあるとさえ言われた。まさに花も実もある武将であり、人々はこの青年を『花実相応の大将』と賞賛した。

尼子経久は言動に謙讓謙虚な男で、自らを誇ったりすることが極めて少ない性質であったが、この嫡男のことだけは自慢で、

「鷹とびが鷹を生むということが世間にはあるが、わしのような者からあれほどの息子が生まれたのは不思議と言うよりない。あれは祖父の『鬼吉川』の血が濃く出たのであろう。わしは悪戯に馬齡ばかりを重ねたが、この歳になっても政久に優るところがひとつもない」

などとつねづね口にしていた。

「父上は百世に一人の英雄にまします」

政久は、そういう父の言葉を耳にするたびに、必ず控え目に反論する。

「私が父上にわずかに優るところがあるとすれば、太刀打ちの技と笛の腕前くらいのものでしょう。そのようなものが少しばかり優れていたところで、国は取れませぬ」

誇張でもおもねりでもなく、政久はそう信じていた。

実際、彼の父は生ける伝説と言ってよく、その器量の大きさ、知恵の深さ、戦術・戦略の構想力、政略手腕の凄み、不屈の精神力と圧倒的なバイタリティーというのは言語に絶している。二代目が偉大な父に及ばないというのはよくある話で、これほどの大才が二代にわたって遺伝し、開花するということがむしる稀であろう。

しかし、経久が戦国大名としての尼子家を「創業」した男であるとするれば、二代目の政久はそれを継承・発展させるのが役割であり、その求められるところはおのずと違ったものになる。経久の見えるところ、この若き二代目は、明晰な頭脳と的確な判断力を持ち、衆人の輿望を担うに十分な覇気と才気を内に秘めながら、その人柄はどこまでも謙虚でゆかしく、他人に対しては依怙や鼻屑が少なく、しかも人の上に立つ者として自然の威を備えていた。さらに何よりであるのは、政久が誰からも愛されるという得がたい徳を持っていることであろう。

我が覇業を継ぐに相応しい大器。

という経久の直感、親の欲目ばかりではない。

「必ずお父上以上になられるであろう」

というのはむしる衆目の一致するところで、尼子家の家臣や領民は誰もがこの若大将を敬愛していたし、大げさに言えば国中の女たちがこの青年に憧れていた。近隣の土豪などのなかには、

「経久公はすでにご高齢だが、政久殿の代には尼子はさらなる興隆を遂げるであろう。尼子に属しておけば、まずまず間違いはない」

という理由で臣従を決める者さえ少なくなかった。

この永正十五年の八月、経久は政久と共に戦陣にあった。

尼子軍の主力が東隣・伯耆国へ出陣中であることを好機と見、大

原郡阿用あよの桜井宗的そうていきが磨石城とぎし（阿用城）で叛乱を起こしたのである。この理由はよく解らないが、桜井宗的は出雲の守護であった京極政経に同情的で、尼子氏の支配を快く思わず、経久が国中の豪族たちを月山富田城へ招き寄せたときにもこれに応じず、独立独歩の姿勢を貫いていたらしい。伯耆で尼子軍に攻められている南条宗勝がそのことに目を付け、密使でも送って叛乱をそそのかしたのかもしれないし、あるいは大内方の誰かが調略したのかもしれないが、いずれにしても、出雲のほぼ中央に位置する大原郡での叛乱は、経久にとって看過できるものではなかった。

事態を重く見た経久は、国内の諸豪族に大動員を掛けてさらに七千の大軍を掻き集め、自ら総大将となって磨石城へ攻め寄せた。ここで弱みを見せればさらなる豪族の叛乱を誘発させかねないから、叛く者は許さぬという断固とした決意を態度で示しておく必要がある。だったのである。

経久の用兵は疾風のように素早く、数日後には磨石城は幾重にも包囲され、桜井宗的は早くも追いつめられた。

桜井氏はさほど勢力の大きくない豪族で、叛乱に同調する味方もなかったから、その兵力はさしたるものではない。しかし、その城は磨石山を要塞化した堅城で、しかも逃げ場を失った兵たちが死に物狂いになって頑強に抵抗したから、寄せ手は攻めあぐんだ。

城攻めに損害はつきものだが、今回は主力軍が伯耆に遠征中ということもあり、その状況下でさらに無理やり動員した傘下の豪族たちに多大な流血を強いれば、彼らの不満は何倍にも膨れるであろう。力攻めを続けることを躊躇した経久は、本陣を堅固に固め、城の周囲に五ヶ所の砦（付け城）を急造し、城を厳重に包囲して兵糧攻めの態勢に切り替えた。降伏し、忠誠を誓うなら、大度を示して許してやろうというような余裕も、そこに含まれていたであろう。

「伯耆のことが片付くまでは、気長に構えるがよろしいでしょう」

軍議の席で政久が言った。

「こうして備えを固めておれば、宗の入道がたとえ鬼神であっても手も足も出ますまい。父上は富田の城にお帰りになられては如何ですか」

主力軍が出払っていることもあり、出雲の国主たる経久が主城を長く留守にしているのは行政上も軍政上も得策ではなかった。政久は七千やそこらの軍勢なら掌を指すほどにやすやすと取り捌くことができるから、その点で何の心配もいらぬであろう。

「もうお若くはないのですから、戦陣の苦勞などは私のような者にお任せくだされ」

「からか 擲揄うような口調だが、息子の孝心が解るだけに、経久も悪い気はしない。」

「やれやれ、わしも年寄り扱いをされるようになったか」

「とんでもない。まだまだ父上には老け込まれては困ります」

「老いては子に従わねばならんかな」

左右の重臣たちに向けて経久が戯れると、

「父上、それは女性にょしの身の振り方の話でございましょう」

と政久は苦笑しながら返した。

「幼いうちは父母に従い、若いうちは夫に従い、老いては子に従え

『大智度論』でしたか。父上のような英雄が従わねばならぬのは、ただ天意があるのみです」

経久は春浦宗熙が「禅儒の人」と評したほど仏教知識にも儒学にも精通した男である。その経久が常に自分の傍近くに置き、手ずから一流の教育を施したのがこの長男であり、政久には並みの学者などは足元にも及ばぬほどの学識があった。ちなみに経久は教育熱心な親だったが、次男と三男は養子に出してしまったこともあり、この出来た長男に比べて行き届かぬ部分が多く、ことに十代半ばで手元を離れた三男の興久は我がまま放題に育ってしまっていて、それが経久の頭痛の種のひとつにもなっている。

それはともかく

この場合は政久に任せておいても大過はあるまい。

と経久は思った。合戦の大勢はすでに決しており、あとは城内の兵糧が欠乏するまで時間を掛ければ済む話なのである。経久は息子の好意を受け、陣頭指揮は政久と重臣たちに任せ、自らは月山富田城に帰ることにした。

戦陣とはいえ兵糧攻めであるから、周囲は落ち着いたものである。無理な流血はできる限り避けるといふ方針だから、陣地を堅固に守り、敵が城から出戦してくればこれをあしらい、山上に追い返すだけの作業と言ってよく、連日のように小競り合いは行われるものの、日常的には敵を監視しているほかにやることもない。十日、二十日と滞陣が長引くにつれ、軍兵たちの間には油断や厭戦気分が蔓延しほりがちになり、その士気を保つことも難しくなっただけ。

政久は日ごとに自ら各陣を回り、兵気を励まし、驕慢を戒めた。また、夜になると付け城の櫓に上り、月を眺めながら得意の笛を吹いた。兵たちの長陣の無聊を慰めると同時に、その日に討ち死にした者たちの霊を敵味方なく弔うためでもあつたらう。

欠けた月から蒼い光が娟娟けんけんと降る夜、名人の手になる澄んだ笛の音ねが大気を静かに震わせ、それを耳にした味方の兵たちを肅然とし

た気分にした。城に籠る者たちは敵陣のこの様子を余裕と受け取り、籠城戦の苦勞と想い合わせてさらに絶望を深めたであろう。

しかし、この優れた笛の腕前が、政久の命取りになった。

城将・桜井宗的は、

「向かい城から夜ごと聞こえる素晴らしき笛の音色。あれほどの吹き手はそうあるものではない。おそらく、あれが噂に聞く政久の笛であろう」

と予断し、一計を案じた。

昼間のうちに笛が聞こえて来る櫓の位置を密かに確かめ、どの場所からの角度で矢を飛ばせば狙えるかということ調べておき、九月六日の夜、頸弓^{けいきゅう}を引く者を集め、それを率いて夜陰に紛れて出戦し、笛の音のする櫓に向けて一斉に矢を放たせたのである。

昼間でさえ狙って必ず当たるといふものではなく、まして夜では標的を見ることさえできない「めくら撃ち」である。当たれば奇跡という賭けであり、これを企図した桜井宗的自身が、こんなことで政久を殺せるとまでは思っていなかったであろう。圧倒的な敵の大軍に包囲され、絶望的な籠城戦を続けるなかで、それでもなんとか一矢報いてやろう、憎き敵將に冷や汗のひとつもかかせてやろう、という程度のもりであったに違いない。

しかし、天運がこの好漢の命脈を断った。

うなりをあげて殺到した矢のうちの一矢が、政久の喉首を貫いたのである。

「かつ……！」

と一声放った政久は、頸動脈から血を^ほ進らせ、その場に崩折れた。ほとんど即死であったろう。

包囲陣を激震させたこの悲報は、急使によってその日のうちに月

山富田城へと届けられた。

「政久が……!?!?」

その報告を聞いた経久は、跳ね上がるように立ちあがって二、三歩進み、息をするのも忘れたような表情でしばらく宙を睨んでいたが、

「馬鹿な……」

という呟きを発するや、へなへなとその場に座り込み、その後は左右を憚ることさえなく、ただ号泣した。

手塩にかけ、山陰の覇者たる尼子家を継ぐに相応しい大器に育てたつもりであった。立派に成長した息子に、そろそろ家督を譲ろうかと考えていた矢先でもあった。この息子があれば、自分も安心して老いることができる。と、そう思っていた。

その嫡男が、まったく予期せぬところで非命に斃れたのである。三十年にわたって積み上げてきた積木が、一時に崩れ去ったようなものであったろう。経久の悲怒と落胆は、筆舌に尽くしがたい。

「おのれ宗的……!! もはや降参も許さぬ! 政久の供養のためにも、磨石の城に籠りおる者どもは、猫や鼠に至るまで、生ある者のことごとくを討ち果たしてくれぞ!」

尼子経久という人間が、これほど感情のままに生の言葉を発したことは、後にも先にもなかったに違いない。

経久は再び出陣し、自ら陣頭に立った。政久の弔い合戦を呼号し、味方の出血を度外視して苛烈なまでの猛攻を繰り返し、数日で磨石城を押しつぶすようにして陥落させた。

城主の桜井宗的は自ら十文字槍を執って戦い、十余人の敵兵を討

ち殺したが、やがて力尽き、首を取られた。重臣たちは宗的の妻子を刺し殺し、城に火を放った上で自害して果てた。城兵とその家族は文字通り皆殺しにされ、その首の数は千三百余にのぼったという。女・子供、老人といった非戦闘員がその半分以上を占めていたであらう。

政久の横死でもっとも利益を得たのは、伯耆東部の羽衣石城うづしで尼子軍の猛攻にさらされていた南条宗勝であつたらう。尼子家の次期当主たる政久が討ち死にし、経久自らが陣頭に立つて内乱戦を戦っているとなれば、もはや外征などをやっている場合ではない。派遣軍の大將であつた尼子久幸は陣払いを決め、出雲へと撤退した。この時に殺し損ねた南条宗勝が、後に毛利元就と結んで尼子氏に敵対し、毛利家の忠良な番犬のようになり、尼子氏滅亡の後も尼子家再興のために戦う尼子遺臣軍を伯耆で苦しめ続け、ほとんど半世紀にわたつて尼子に仇なすことになるのだから、運命の綾と言つしかな

い。

ちなみに尼子久幸というのは経久の実弟で、経久が出雲守護代の地位を追われ、流浪していた頃からこれにつき従い、艱難辛苦を共にし、富田城奪回作戦にも参加し、以来三十余年、政戦両面において経久を輔け続けてきた男である。智勇に優れ、常に冷静で的確な判断力を持ち、しかも心が涼やかで、その無私無欲な人柄は家中の誰からも信頼された。このとき四十六の働き盛りで、大軍を任せて安心感があり、諸將の信望も厚い、まさに尼子家の柱石と呼ぶべき存在であつた。

久幸が軍勢を引き連れて富田城へと帰還したとき、すでに磨石城は落ち、内乱は終息していた。経久はこの弟の労を謝し、さらに譜代の重臣らをも集め、評定を開いた。尼子家の次期当主を誰にすべきであるか、協議するためである。

評定の冒頭、経久は久幸に顔を向け、

「わしは少し疲れた。年が年でもある。この尼子の家は、その方が

継いではくれぬか」

と力なく言った。

この数日で経久はめつきり老けこんだ観がある。嫡男を喪った傷心が癒えるはずもなく、生気もなければ覇気もない。久幸から見てもその萎れようは哀れなほどであった。

久幸は経久より十五も若く、能力的にも人格的にも申し分ない。血縁という意味でも経久にもっとも近く、経久の後継者として至当の人材と言えるであろう。

しかし、久幸は言下にその申し入れを断った。

「それはなりません。又四朗殿にはご嫡男がござる。これを後継ぎに立て、ご立派にご成長あるまで殿がご後見をなさるが穩当でござるう」

「いや、そう申してくれるのは有難いが」

経久の顔は渋い。

政久にはすでに一男一女があるが、息子の三郎四朗はまだたった五歳であった。家政を執ることなどできるはずもない。

「幼主に家は保てまい……」

「家督の相続に大切たるは、筋目でござる。筋目が違えば家が乱れます。又四朗殿のご嫡男を措いて尼子の正統はあり得ませぬ」

久幸の言葉は道理であり、居並ぶ重臣たちも次々に賛意を口にした。

政久には二人の弟があるが、いずれも他家に養子に出しており、このいずれかを呼び戻して家を継がせるということになれば、後継

者になれなかつた一方が必ず不満を持つてあろう。その養家の豪族たちとの関係も微妙にならざるを得ない。万一、継嗣争けいしいが起こるようなことにでもなれば、今は服属している豪族たちも尼子の旗の元から離れていつてしまふに違いなく、尼子家はたちまち弱体化し、乱世の荒波のなかで覆滅されるであらう。

政久に子がある以上、それを継嗣に立てるのが筋であることは経久も解つていた。しかし、この乱世に幼主で家を保てるか、家臣団の結束を保ち得るか、という点に大いに不安があつた。つまり経久は、久幸に家督を と勧めることで、家中の反応を確かめたと見える。経久が我が孫を後継ぎと決めるより、家中の総意として政久の遺児を擁立する、という形にもつてゆき、家臣団の結束の核にしようとしたわけである。

衆議は経久の狙い通りに落ち着き、政久の子を尼子家の嗣子にするということが一決された。

しかし、経久は、五歳の孫が立派な武将となるまでこれを後見してゆかねばならぬ義務を負つたわけで、六十一というその年齢を想えば、重い荷物をさらに背負わされたような気分であつたらう。

英邁えいまいな後継者の早すぎる死は、経久にとってまさに痛恨事であつたと言つしかない。それは破竹のような勢いで興隆を遂げていた尼子氏にとって大きすぎる躓つまずきであり、経久の今後の政・戦略にも微妙な影を落としてゆくことになる。

第三章 乱世の梟雄 永正十五年の秋（一）

大内義興よしおきが幕府管領代の地位を辞し、京を去ったのは、永正十五年（1518）八月二日であった。

京を去った、と言っても、別に義興は京に常駐していたわけではなく、近年はほとんど泉州・堺にいた。京は応仁以来の戦乱によって焼けただけ、宿舎にできる建物も人が生活するための物資も常に不足していたし、何より防衛上不安全だったからである。当時の堺は日本第一の富裕を誇った城塞港湾都市で、十分な防衛力と兵の収容能力を備えていたし、大内氏に敵対する細川氏との繋がりが深い都市であったから、これを押さえておくという意味合いもある。本國である周防から瀬戸内海を経由して船で送られて来る食糧などの物資を集積するにも、金銀と物資を交換するにも、日本で最大の交易能力を持つ堺は至便の地であった。

義興は、堺では大安寺という寺院をその宿舎にしていた。

大安寺は百年ほど前に建立された臨済宗の寺で、堺のほぼ中心に位置し、二町四方の寺域を持ち、六つの塔頭たつちやう（寺内の小院）を有している。堺の堀の内側では有数の大刹であった。

「お屋形さま、御出立の支度が整いましてございまする」

重臣の筆頭である道麒みちき入道・陶すえ興房おきふなが、義興が待つ書院へと報告にやって来た。

義興はひとつ頷き、寺の住持にあらためて世話になった礼を述べ、辞去の挨拶をした。

回廊を通って境内へ出ると、本殿の階はしの前に輿こしが据え置かれていた。それに身を入れ、

「出せ」

と言い捨てるように短く命じた。

義興は、京には正直言つてまったく未練はない。あるのは、

この十年の苦勞はいつたい何だったのか。

という徒勞感のみであつた。

永正十五年の八月二日は、新曆では九月十六日に当たる。秋口とはいえまだまだ残暑は厳しく、風もないから輿の中は蒸し暑い。汗かきの義興はすぐに汗が滲んできて、薄く施した化粧が流れた。

屈強の男たちに担がれた輿が、わずかに揺れながらゆつくりと進み始めた。それと共に、輿の周囲にいた数百人の武者や雑兵たちが一斉に歩き出す。歩武を揃えた足音、甲冑の擦れ合う音、馬のいななきやその蹄の音などが、大氣を無軌道に震わせてゆく。

義興は、輿の窓を薄く開き、流れてゆく風景を漫然と眺めた。

強大な自衛力を持つ堺という都市は、応仁以来の畿内の戦乱もどこ吹く風である。治安は常に保たれ、その巨大な水堀の内側は戦場になつたこともなければ戦火で焼かれたこともない。戦国乱世の風潮からは超然とし、平和と繁栄を独り謳歌していた。

平素は人間と荷を満載した車でごつたがえす目抜き通りは、大内軍の行列とそれを見物する人垣で埋まり、道の両側には様々な物品を売る無数の店舗が立派ないらかと看板を並べている。米、塩、材木、酒、海産物、薬種、武器、金物、仏具、家財道具、嗜好品、南蛮渡りの希少品などなど、それらの店が扱う品目は数万点にも及び、およそ日本で売買される物品で手に入らぬ物はないとさえ信じられていた。

右手に少し離れた高台に、四メートルを超える見事なソテツが立ち並び、天に向けて葉を青々と茂らせている。ソテツは四国と九州の南部がそれより南の温暖な島々にしか自生しておらず、本州ではまずお目に掛かれないのだが、堺では五百年近く前から植樹されていたらしい。古くから交易で栄えたこの都市ならではの名所と言つてよく、そこには後に妙国寺という大寺院が建てられ、このソテツ

は織田信長の目をも楽しませることになる。義興にとってはすでに見慣れた風景だが、その奇怪な姿の木を初めて目にしたときには驚いたものだ。

帰ったら、あれを取り寄せて館の庭にでも植えてみるか。

こつこつ些細なことも含め、様々な事柄に対する知見が広がったことだけは、上洛による収穫と言えたかもしれない。

山口を出てから、すでに十一年か……。

息子の亀童丸かめどうまるも数えで十二になっているはずだ。

十一年前の十一月、義興が京を目指して山口を出立したその数日後、長男の亀童丸が無事生まれたとの報せを旅路の途次で受け取った。義興にとつて初めての男の子であり、後ろ髪を引かれなかったと言えは嘘になるが、義興は未練を振り切るようにして東へ進み、上洛を果たし、そのまま一度も帰国することなく今日を迎えている。山口に帰るその日まで息子のことは忘れようと思いつめていたこともあるが、成長した亀童丸から自筆の手紙ふみが届くようになって、この長男に対する実感はついに感じたことがない。

義興は息をひとつ吐いて瞑目し、十一年間にわたる畿内での歳月を想った。

大内義興の上洛は、永正四年（1507）にまで遡る。当時の義興はまだ三十一歳で、若々しい野心に溢れる青年武将であった。

いわゆる「明応の政変」で京を追われ、各地を流浪して「流れ公方」と擲掬ちやくされた足利義材あしかぎよ（後の義植よしたね）が、明応八年（1500）、大内氏の富強を頼って西国へ流れて来た。義興はこれを山口で保護し、前將軍の庇護者となったのだが、思い返せばこの時から、齒車がわずかずつ狂い始めたと言えぬこともない。

その当時、畿内は細川吉兆家の全盛時代で、細川政元が絶大な権力を握り、足利義澄を第十一代將軍に擁立して幕政を牛耳っていたのだが、永正四年、その政元が暗殺されるという大事件が起こった。

俗に「永正の錯乱」と呼ばれるこの政変によって当主を喪った細川氏は内部分裂し、政元の三人の養子が家督相続を巡って争い始めたのである。諸国の諸勢力が利を求めてこれに介入したため戦火は大きくなり、畿内は混沌とした政情に陥った。

義興は、この中央政府の混乱につけ入った。前將軍である足利義稙を奉戴し、中国、九州の諸大名に大動員を掛け、味方を募り、その兵力をもつて陸路京へと攻めのぼったのである。

現將軍であった足利義澄、管領・細川澄元らは、大内軍の圧倒的な兵力に驚き、京を捨てて近江へと遁れた。義興はあらためて足利義稙を將軍に復位させ、自ら幕府の管領代となつて京に君臨した。後年、織田信長が足利義昭を奉戴して京を握つたが、それに似た政治状況と言つていい。このとき義興はまさに天下人であり、得意の絶頂であつた。

政敵である細川澄元らは、近江の六角氏、阿波の三好氏、播磨の赤松氏などと連携して京の奪還戦を挑んだ。大内方は一時は京を失うなど苦戦の連続であつたが、「船岡山の合戦」において細川軍を大いに破り、再び京を奪還した。細川澄元はそれでも諦めず、諸国に味方を募り、義興の地盤である中国、九州地方の諸大名にも盛んに働きかけ、大内氏の足元を揺るがす外交戦術を展開した。自らの野望のためにこの呼びかけに応じた尼子経久が、出雲に帰国して大内氏から離反し、中国地方を切り取り始めたのもここに起因している。

義興は山城国の守護となり、日明貿易の特権を独占するなど、実利も確かに得た。しかし、絶大な権力を握れば、必ずそれに嫉妬し、足を引っ張る者が現れるというのが世の常である。義興が管領代となつて幕府の実権を握ると、擁立した足利義稙とも反目するようになり、味方であつた細川高国などからも憎まれた。さらに中国地方では、大内氏の地盤を尼子経久によつて次々と削り取られている。十年の在京による戦費の負担も莫大であつたし、何より尼子氏の急激な膨張はもはや黙視できるものではなく、ついには帰国せざるを

得なくなつたのである。

正直なところ義興は、永劫に続くであろう京での権力争いにはほとほと嫌気が差しており、もっと早くに帰国したかった。しかし、幕府は名実共に義興の武力と富力によつて支えられていたから、義興が帰国の意思を表すと、仲違いしていた足利義植さえもが義興の足にすがりつくようにしてそれを思い留まらせようと躍起になつた。義興は文武に優れ、政治家としても器量が大きい英雄と呼ぶべき男であつたが、生来の貴族であるだけに根本的なところで人が好く、人の言葉を信じやすく、脇にやや甘さがある。性格として頼られることにも弱いために、足利義植の懇願を振り払うのに時間が掛かつてしまつたと言つていい。

余談になるが。

義興に捨てられてしまつた足利義植は哀れであつた。義興が大内軍と共に京を去ると、それまでどうにかバランスを保つていた細川高国との間も険悪となり、わずか三年後には京を出奔せざるを得なくなる。細川高国は新將軍を即位させ、義植の將軍職は廃位されてしまうのである。義植は淡路で再起を計るも敗れ、四国の阿波へと亡命し、そのまま阿波で失意のまま没することになる。

それはともかく。

尼子経久だけは許せぬ。

という想いが、義興にはある。

義興と経久は、京における最大の激戦であつた「船岡山の合戦」で先陣争いを演じたことがある。軍議の席で、主将である義興はその面目からも先陣を務めるが当然と突つばねたのだが、経久も先陣を主張して譲らず、あわや大喧嘩という争いを起こしたのである。経久は大内軍の上洛戦には直接参加しておらず、二年ほど遅れて京に参陣したこともあり、武名をあげるためにも大手柄を立てる場が欲しかったのであろう。

経久は義興より二十ばかりも年長で、裸一貫から戦国大名へとの上がつた男であるだけに、己の政・戦略の能力には絶対の自信を

持っていた。主将である義興に対してはそれなりの礼を尽くしていたし、接する態度も言動も慇懃ではあったが、その心中では義興を密かに小僧扱いしていたのである。義興は生まれたところがたまたま大名の跡取りであったというだけで、武将としての能力も人としての器量も、自分の方が遙かに優れているという強烈な自負があった。

そういふ匂いは言葉にせずとも自然と伝わるもので、義興は初対面のときから、尼子経久という男だけはどうにも虫が好かなかった。年寄りめ、身のほどを知れ。

義興は北九州から中国地方の大半を統べる日本最大の大名であり、同時に近畿に君臨する天下人である。たかだか出雲一国程度の出来星大名が、自分と張り合おうとしていること自体が笑止であり、片腹痛かった。

義興がそういふ気分である以上、経久の方も義興に親しむ気にはなれるはずがない。経久が義興を「敵」として意識するようになったのは、むしろ京で顔を合わせてからであつたらう。

尼子経久は、足利義種の旗下に参じながら、その政敵である細川澄元、六角氏などと密かに結び、義興には無断で出雲へと帰国し、近隣に触手を伸ばし始めた。火事場泥棒のようなもので、義興の留守をいいことに、中国地方の国々を勝手放題に荒らし回り、勢威を大いに膨らませている。

あの老人は、ただ欲のみで動く。

ということが、義興にはほとんど生理的に許せない。

経久が義興の上洛戦に合力したのも恩賞への欲からであり、勝手に京から帰国して敵方に寝返り、中国地方を切り取りまくっているのも領土拡張の欲からであろう。そもそも経久は出雲守護の京極氏を無法に追い、下剋上で国を奪った盗賊のような男であり、上を畏れ敬うような殊勝な気持ちを持ち合わせているはずがない。節義もなければ信義もなく、その心根のあさましさは獣にも劣るではないか。

わしはあの老人とは違う。

義興自身も決して無欲なわけではなく、それどころか権勢欲といったものは常人よりはるかに強烈であったが、義興は日本でもっとも富裕な武家貴族の家に生まれ、その当主になるべく育てられた男であるだけに、個人的な富貴や栄達を求める必要がそもそもなく、それらにはほとんど興味さえなかった。義興が求めるのは「名声」や「美」といった目に見えず手にも掴めない種類のモノで、それを求めるがゆえに義興は、大義と名分を重んずるといふ歴代の大内氏当主が持っていた美質をしっかりと備えていた。甘いとも言えは言えるが、それは真摯さや誠実さにも通ずる義興の美点で、清濁を併わせ呑むような大きな度量を人に感じさせるのである。

義興は前將軍たる足利義植を奉戴し、私欲のための戦いではなく天下のための義戦であることを諸国の大名たちに訴え、その協力を得て上洛戦を戦った。幕権と秩序を己の力で新たに立て直し、宸襟しんきん（天皇の御心）を安んじ、天下安寧に貢献するというような浪漫主義的な理想が、その若き胸裏には確かにあったのである。

義興が実利のみを求める男であったなら、十年もの長きにわたり、莫大な戦費を負担してまで幕府を援けようなどとはそもそも思わなかったであろう。本国からはるか遠い畿内の地で、反大内連合というべき連中と泥沼の戦いを続けているよりは、中国地方で地道に国の切り取りを続けている方がずっと現実的であったし、楽でもあった。それをしていけば、後に毛利元就が中国十ヶ国に強固な地盤を作り上げたように、揺るぎない大内王国が形成されていたに違いない。

この永正十五年、義興は数えて四十二になる。武將として脂あぶらが乗り切った時期と言ってよく、京における権力の暗闘を経ることで、政治家としてもさらに巨きく成長していた。

失われたこの十年を、取り戻さねばならぬ。

と義興は思う。

まずは尼子氏に浸食された国々を奪い返し、往年の大内氏の武威

を回復させねばならない。義興が大内軍の主力と共に帰国すれば、かつて臣従していた豪族たちの多くは再び義興に臣下の礼を取るであろう。その上で石見から山陰を攻めのぼり、憎き尼子氏を滅ぼし、出雲、隠岐、伯耆、因幡、美作といった国々を新たに併呑し、中国での覇権を確固たるものにする。

煌びやかな目標ではあるが、それを想う義興の心中はやや物憂い。若い頃には意識したこともなかった精神的な疲れを、不惑を超えたあたりからふと感ずるようになっていた。

国へ帰るといっただけで、大儀なことだ。

帰りも陸路である。道々、尼子方に与した備前、備中、備後といったあたりの豪族たちを再び臣従させつつ進んでゆかねばならないから、帰国にはかなりの日数が掛かるであろう。今年中には山口に入るつもりでいるが、途中で尼子方と大きな合戦になるようなら滞陣は長引く可能性もあり、いずれ先はまったく読めない。

初秋の真つ青な空はどこまでも高かったが、義興の心はその空のように晴れなかった。

季節は、安芸国にも平等に巡っている。

山深い吉田はすでに秋色が濃く、郡山の山々は黄と赤と緑の糸で織りあげられたタペストリーのように色づいていた。

大内義興が近々安芸へ入るといっ報告が、大内氏からの使者によってもたらされたのは、九月初旬。よく晴れた日の午後であった。

「お屋形さまが鏡山城に入られるのは、おそらく九月の中頃でありましょう」

使いとしてやって来たのは、内藤興盛という二十四歳の若者である。

内藤氏は大内氏譜代の重臣で、代々、長門国の守護代を務める名

門であつた。父が早くに死んだため、わずか八歳で内藤氏の当主となつた興盛は、大内軍の上洛戦が始まつた頃はまだ少年だつたが近習として義興につき従い、京で共に十一年を過ごした。文武に優れた若手の有望株で、義興のお気に入りと言つていい。この二十年後には、大内家中で随一の身代を誇る宿老にまで登り詰める男である。

「先代の治部少輔殿（毛利興元）が京から帰国なされて以来、毛利家の方々とは長く無沙汰となつておることもあり、またお屋形さまは、当代の幸松丸殿を一度ご覧になりたいとも仰せになっておられます。ご足労ながら、ぜひとも鏡山城までお出向きありたい」

懇切丁寧な喋り方だが、これはお願いではなく、あくまで命令である。

鏡山城は安芸の南部 賀茂郡の西条盆地に築かれた山城で、大内氏の安芸支配のための重要拠点であつた。義興はここに腰を据え、安芸の国衆を招集し、再び大内氏への帰属をはつきりさせようというのである。挨拶に出向いて来ない者は、大内氏の敵として討伐するぞ、という脅しも含んでいる。

「ご使者の趣きはよう解り申した」

対応したのは毛利家の執権・志道広良である。

「我ら国人一揆の衆が、大内のお屋形さまに忠を致すは今さら申すまでもなきこと。喜んでお迎えに馳せ参じます。しかしながら、幸松丸さまは御年四つのご幼少ゆえ、名代の者を差し遣わすことをお許し願いたい」

四歳の子供相手に政治向きの話ができないのは自明であるから、この点は内藤興盛もあっさりと折れた。

「されば、執権の志道殿か、幸松丸殿のご後見たる多治比殿か、いずれかということにして頂きたい」

若者は高橋氏と吉川氏にも使いせねばならぬらしく、広良から応諾の言質を取るといそいそと郡山城を辞して去った。

その翌日、広良は主立つ重臣に招集を掛け、評定を開いた。

早朝、元綱が郡山城の大広間に入ってゆくと、多治比元就をはじめ多くの重臣たちがすでに席に座って待っていた。

「今日はどろいという議題の集まりだ？」

元綱が訊くと、

「大内のお屋形さまが京より帰国なさるそうだ。途次、安芸もお通りになるらしい」

元就が教えてくれた。

「今後のことについて、皆とも話合っておかねばならんからな」

「ふむ……」

元綱はこの時点ですでに関心を失っている。議論の成り行きにも興味はなく、結論だけ後から聞かせてくれればそれで良いとさえ思った。が、それを口に出すわけにもいかない。黙って席についた。

志道広良が使者の口上などを説明し、毛利家としてこの招集に応じるべきかどうか、一同に意見を質した。

坂広秀が真っ先に応じるべきであることを説き、数人がそれに賛同した。井上元盛や桂広澄は、他の豪族の動きを確かめてから結論

を出すべきだと主張した。

「他の国衆たちがどう出るか。国人一揆の衆とも繋ぎを取り、話し合わねばなりませんまい」

「それが穏当でござろうな……」

言いながら広良は難しい顔をした。

表向き、国人一揆の面々は内内氏傘下として進退を共にすることを誓っている。しかし、豪族たちはそれぞれの思惑を腹に秘めているに違いない。密かに尼子氏に誼みを通じている者がいないと限らないし、ことに尼子氏との繋がり深い吉川氏は、内内氏に臣従する姿勢を続けるのかどうか、これは予断を許さない。

内内氏に公然と敵対している者と言えば守護の武田氏だが、武田元繁の敗死以来、威勢が大いに衰えているから、その傘下にあった豪族たちは、武田氏を見限り、内内氏に臣従する動きを示す可能性もある。しかし、敵の敵は味方という論理で、武田氏はいわば尼子方であり、尼子氏に通ずる者は武田氏の傘下を脱していくという側面もある。このあたり、政情はいかにも微妙で、どの豪族がどちらにつくか、ほとんど見通しが立たない。

「国人一揆は、結束してもものに当たってこそ、その存在が大きなものになる。他の豪族たちのことはともかく、一揆の衆の進退だけはなんとかひとつにしたい」

多治比元就が言った。

「高橋が尼子に靡くということとはござるまい。煎ずるところ、吉川がどう動くかという点に尽きますな。多治比殿、舅殿（吉川国経）から何かお聞きではありませんかぬかな」

「いや、私は何も聞いてない」

元就は首を振る。

「吉川には我らと進退を共にしてもらいたいものだ。妻の実家を攻めるようなことはしたくないからな。腹の裡なかのことはともかく、まずまず此度は、鏡山城まで出向いてもらわねばならん」

風聞によれば、尼子氏は先月来、出雲国内で内乱戦を戦っており、同時に東の伯耆を攻めてもいるらしい。安芸に大軍を出して大内氏と戦うような余裕はとてもないであろう。どう考えても、この時期に大内氏への敵対を鮮明にするのは得策ではない。

「吉川の意向は私が探ってみよう。舅殿と話してみる」

先のこととはともかく、今回はとりあえず大内氏に従う姿勢を見せておくという方が無難である。吉川氏が使者を出さないつもりなら、その線で説得しよう　と、元就は言った。

「大内のお屋形が安芸へ下られるまで十日ほどしかござらぬ。三、四日のうちには他の一揆の衆の意見も束ね、結論を出さねばなりません。お急ぎくだされよ」

広良が念を押した。

この時点で、大内氏から離れ、尼子氏に味方すべきだ、なぞと極論する者は、老臣の中には一人もいなかった。その意味で、毛利家は間違いない大内氏の傘下だったと言っている。

元綱には定見も先の見通しもない。

元綱は政治的な話題からは意識的に遠ざかっていたが、内心では

大内の色に染まることも尼子の色に染まることも好まなかった。あえて言うなら毛利の色でありたいというのがこの若者の気分であったが、それを口にすることも仄めかすことも一切なかった。

元綱が相合あひあうの屋敷へ帰ったのは日灯し頃である。

長屋門を抜けて庭に入ると、重蔵が長屋の前で虫干しにした巻物を片づけているところに出くわした。庭木と長屋の柱の間に紐を渡し、それに広げた巻物がぶら下がっている。

重蔵の旅の荷物は少ないが、その中に家伝の書物や巻物があつた。雨などで濡れぬよう油紙に包んで置いてあるのだが、年に二、三回は虫干ししてやらねば虫に食われたりカビが生えたりしてしまう。秋は乾燥した晴天が多い季節だから、虫干しには絶好であつた。

元綱は近づいて足を止め、巻物に描かれた絵に見入つた。

「『源氏物語絵巻』か。似合あひあうぬものを持つておるものだな」

巻物の中央に御簾みすが描かれ、その奥で若い男が病臥しており、もう一人の若い男がそれを心配げに見舞っている。左手の御簾の奥では女たちがさめざめと泣いている。そういう絵である。

はて。どこの場面だったか……。

元綱は文章博士ぶんしょうはくしの末裔しよという家に生まれ、その必要な教養として古典も一通りは学ばされている。しかし、鶴寿丸かくじゅまると呼ばれていた頃の元綱は、歌物や王朝物にはまったく関心が持てず、斜めに目を通しただけでそのまま通り過ぎてしまっていた。ひとたび集中して文字に向かい合えば無類の記憶力を発揮するというのがこの若者の特技ではあつたが、興味のない書物はどれほど読んでも不思議と頭に入らなかつたのである。当然ながら、絵から物語の場面を読み解くような能力はない。

眺めながら首を捻っていると、

「これは『柏木』^{かしわぎ}です」

と重蔵が微笑しつづつ言った。

「柏木　　というと、源氏の友の息子じゃなかったか？　すると、この見舞つておる男が源氏の子か……」

話の筋はなんとなく憶えているのだが、登場人物の名前までは出てこない。

「夕霧です」

「ああ、そうそう、そういう名だったな。これは　？」

「母の形見なのです。わしの母は何やらいう貧乏公家の娘であつたらしいのですが、輿入れするとき実家から持たされたそうで」

「ほう、お前のご母堂は公家の出か。さすがに上北面の家だな」

元綱は素直に感心したが、重蔵は自嘲気味に笑った。

「昔のことは知りませんが、当今の公家は乞食とたいして変わりません。米や銭が莊園からほとんど届かなくなり、よほど高位の者が手に職でもない限り、日々の米にさえこと欠くような暮らしぶりなのですよ。ましてわしの母などは、素性も怪しい下級公家が卑女^{はしため}に生ませた子であつたようです。とても誇れるような血筋ではない」

重蔵の部屋の戸は大きく開かれ、板間の床に数冊の書籍が無造作に置かれていた。元綱はその一冊を何気なく手に取り、適当に開い

た項を斜めに読んでみた。

流麗な女手で書かれている。『源氏物語』の「帚木ははきぎの巻」の写本で、いわゆる「雨夜の品定め」の場面であった。若き日の源氏とその友人たちが、どのような女性が素晴らしいということをおぼえたと議論している。左馬頭さまのかみという男が述べた女性論に、ふと目が止まった。

『すべて、よろずのことなだらかに、怨すべきことをば見知れるさまにほのめかし、恨むべからむふしをも憎からずかすめなさは、それにつけて、あはれもまさりぬべし。多くは、わが心も見る人からをさまりもすべし。あまりむげにうちゆるべ見放ちたるも、心安くらうたきやうなれど、おのづから軽き方にぞおぼえはべるかし。繋つながぬ舟の浮きたる例も、げにあやなし。さははべらぬか』

「総じて、どのようなことでも心穏やかに、嫉妬するようなことがあれば、知らぬ顔をするのではなくそれを上手にほのめかし、恨み言を言わずにはおれない時も、それとなく可愛らしく言えば、男の愛情はかえって増すことでしょう。男の浮気心というのは、妻の態度次第では収まったりするものです。浮気をまったく放任するのも、妻として賢明とは言えません。男も最初のうちは気楽でもあり、妻を哀れに思ったりすることもあるでしょうが、それが続けばだんだんと妻を軽く見るようになりましますからね。繋がれてない舟は漂ってゆくものじゃありませんか。違いますか？」

巧いことを言う……。

作者の紫式部は女の側から男の気持ち想像してこれを書いていくわけで、そこに面白さを感じた。子供の頃に読んだときにはほとんど何も感ずるところがなかったはずだが、それを面白いと思える年齢になったということかもしれない。

元綱はふと興をおこし、『源氏物語』を読み直してみようと思ひ

立った。秋の夜長の無聊を慰める退屈しのぎくらいにはなるだろう。母が何巻か持っていたはずだし、郡山城の書庫にはすべての巻が揃っていたはずだ。

とりあえず最初の数冊を取り寄せ、元綱はゆきの局しほでそれを読み始めた。

ゆきは夫の傍らに座り、積んである書籍の一冊を手に取って、思わず笑ってしまった。

「まあ、『源氏』ですか？」

軍記物語ならともかく、元綱と『源氏物語』という組み合わせがいかにも似合わない。

「可笑おかしいか？」

元綱は書物から目を上げずに言った。

「いえいえ。お茶でもお持ちしましょうか？」

慌てて誤魔化する。

この若者は母親の目の届くところでは拳措をそれなりに繕っているのだが、ゆきの部屋に入ると途端に行儀が悪くなる。この時も床に寝ころがって肘を立て、手で顔を支えながら文字を追っていた。

「可笑しそうな口ぶりだった」

「可笑しかったのではなく、嬉しかったのですわ」

「嬉しい？」

元綱はやつと顔を上げた。

「『源氏』を学ばれば、四朗さまもつと女心を解ってくださいるようになるかな」と

「俺はそれほど朴念仁か」

苦笑するしかない。

「自分ではそれなりに頭も使い、気を回してもいるつもりなのだがなあ……」

こつこつ不足を訴えた女は過去にはいなかった。人の心を察することがむしろ得意であるとさえ自分では思っていたのだが、どうも思い違いであつたらしい。

「『源氏』を学べば女心とやらが解るようになるのかね」

「それは判りませんけれど。『源氏』さえ解らぬようでは、女心は永劫に解らないでしょう、きっと」

「ふむ。女心とは難儀なものだな」

女心を解さぬ男と、男心を解さぬ女とでは、どちらが多いのか。とりとめもなく、元綱はそんなことを考えた。

「『源氏』は、五百年もの長きにわたつて世の人々に愛され続けてきたものです。それには必ずそれだけの理由があるのだと思います。前関白であられた一条兼良卿などは、『我が国の至宝は源氏の物語にすぎたるはなし』とまでおっしゃっておられますわ」

一条兼良というのは関白・一条家に生まれた俊才で、「日本無双の才人」とまで評され、公卿としては不遇をかこつたものの、学者としては不朽の名声を遺した人物である。元綱が生まれる十年ほど前に死んでいるのだが、その著書の写本が二冊ほど郡山城の書庫にあつたし、現代人が福沢諭吉を知っているのと似た感覚で、元綱もその名前と業績の評判くらいは聞いたことがある。

「『源氏』は日本の宝だったのか」

積まれた書籍を手で撫でながら、元綱はとぼけた口調で言った。

「兄者は何と云うかなあ。今度聞いてみよう」

同世代の若者に限れば、兄の元就ほど古典に造詣が深い人間を元綱は知らない。安芸中を探したとしても、兄に比肩しうる者は少ないだろうと勝手に思っている。

「物知り同士、お前は俺より兄者と話が合いそうだ」

「そんな」

ゆきは慌てて取り繕う。

「兼良卿は『源氏』の注釈書をお書きになつておられるのです。たまたま母がそれを持っていて、ゆきも読んだことがあつたというだけのことですわ。江家の末裔たる四朗さまやそのお義兄さまと比べられては、恥ずかしゆうございます」

「そいつはいらぬ謙遜だ。公平に見て、お前は俺より教養が深いだ

ろつ。お前ほど物を知っておる女も、お前ほど頭の巡りの速い女も、俺は会つたことがない」

この新妻との会話は、知的な意味で常に刺激的であり、元綱はそれが面白くてしょうがない。

元綱のこれまでの女性遍歴は、城下の庶民の娘や後家といった比較的身分の低い女によって占められていた。性質はそれぞれだったが、良くも悪くも女たちはそれほど教養を持ってはおらず、打てば響くような機智の煌めきがあるわけでもなく、骨のある対話相手とはとても言えなかった。あえて言えば姉のお松が教養深い女性であったが、恋愛対象としては、ゆきのような型の女にはこれまで接したことがない。

「ついでに言えば、お前ほど要領の良い女も他に知らぬな」

女には珍しいが、ゆきは仕事を仕切るのが上手く、宰領の才もあるようなのである。この屋敷に居つくや、お付きの女房たちをたちまち手なずけて家事を巧みに切り回し、武家の出である母とも上手に付き合い、来客の対応などにもまったく粗漏がない。

「お前がもし男であつたとすれば、さぞ良い武将になつたらうと思つよ」

言われて悪い気はしなかったが、ゆきはあえて不服そうな顔を作り、可愛く拗ねた。

「まあ。そのような申され方では、ゆきが何やら可愛げの欠片もない女子のようではありませんか」

「そういうことではない。俺は褒めている」

「褒めて頂いたようにはとても思えませぬ」

実際、ゆきはとびきり頭が切れるし、大家の姫と比べても引けを取らないだけの教養がある。酒席で座持ちを務めるには相手の知的レベルに合わせて喋らねばならないし、古典を踏まえた和歌のひとも詠めぬようでは「しよせんは下賤の女よ」と侮りを受けることにもなるであろう。そういう職業上の理由で、ゆきは歌物や王朝物の古典には当然通じていたし、有名な古歌はそのほとんどを諳んじていた。巫女は出自の点で卑しいだけに、京あたりの貴紳や地方の有力者から愛顧されるためには、深い教養と高い識見を持つことが不可欠なのである。だから子供の頃からそれなりに仕込まれたのだ。という意味のことを、ゆきは控え目に説明した。

「私たちは白拍子なども舞いますでしょうか？ 権門勢家から招かれるようなことも多いのです。ゆきは京にも二度ほどのぼりましたが、一条家や近衛家からもお招きにあずかったことがございます」

元綱はその言葉に仰天し、身体を起こして座りなおした。

「近衛家というのは、あの近衛家か？」

「その近衛家だと思いますけれど……」

ゆきは小首を傾げた。

「私の母は舞いと唄の名手でございました。その縁で」

「まことの話か……」

「ゆきは四朗さまに嘘などは申しませぬ」

にっこりと笑う妻を見つつ、元綱はあいた口が塞がらない。

近衛家は五摂家の筆頭、一条家も五摂家に数えられ、いずれも閑白、太政大臣にまで昇任することができる、天子にもっとも近い最高位の公家なのである。安芸・吉田の地頭職に過ぎない毛利家から見て、雲の上のさらに遙か上と言っていい。

ちなみに大江氏の京における直系は北小路家きたのこうじで、これが毛利家の本家筋に当たる。公家としては「半家はんけ」と呼ばれるランクで、堂上家（昇殿を許されている公家）のなかでは最下位の家柄であった。血統的に見て元綱はその枝葉の末の末に過ぎず、たとえば元綱が京にのぼったとして、一条家や近衛家の門を叩いたとしても、当主に面会など叶うはずもなく、よほどの錢でも土産にしない限り、犬猫でも追うように門前払いされるのがオチであろう。

「巫女とは偉いものだなあ……」

ため息をつくような気分で言った。ゆきという女を知るにつけ、元綱はたびたびこうして驚かされる。それがまた面白いところでもあるのだが。

「べつに偉くはございませんが。たとえば、ほら、静御前なども白拍子でございましたでしょう?」

ゆきは、元綱が理解しやすいであろう義経の周囲で例を挙げた。

「ああ。静御前は、後白河院や頼朝公の前でさえ、舞ったのだつたな」

『義経記』によれば、ある日照りの年、静御前が雨乞いのために

舞いを奉納すると、たちまち黒雲が現れて雨が降りだし、それが三日も降り続いたのだという。その舞いを見た後白河法皇は、「かの者は神の子か」と感嘆し、「日本一」の宣旨を贈ったとある。また『吾妻鏡』には、捕えられて鎌倉に送られた静御前が、頼朝や鎌倉の御家人たちの前で舞いを披露し、その見事さを絶賛されたことが記されている。

身分の垣根を軽々と超え、天子とも天下人とも言葉を交わし、その身につけた芸を披露できるというのが、芸能者という人種の特権であるだろう。

「静御前は絶世の美女であつたらしいな。俺には舞いの出来、不出来はよう解らぬが、そなたの美しさなら解る。その静御前にさえ、そうそう引けは取るまいよ」

「まあ、お上手」

ゆきは夫の肩にしなだれかかり、その身体を預けた。妊娠してからすでに半年ほどになるが、腹はまだそれほど目立たない。

「四朗さまは今義経。その妻になつたゆきが巫女というのも、きつと前世からの宿縁だったのでございますね」

元綱が義経なら、自分は静御前。静御前が天下一の舞姫と謳われた大先達であるだけに、この連想は心楽しいものであった。

しかし。

ゆきは教養としての古典には明るかったが、武家の盛衰に通じているわけではなく、『吾妻鏡』や『義経記』といった軍記物語には触れたことがない。義経や静御前についてもごく一般的な知識を持つているだけで、義経の悲劇的な末路や、静御前が生んだ子がその後どうなったか、といったことに関しては、連想が及んでいな

かった。

「お前が静御前なら、生まれて来る子は必ず男児おのこであろうよ」

元綱は妻を優しく抱き、笑顔でそう返したが、不吉なものを感じて思わずそこで口を噤くぐんだ。

静御前が生んだ義経の子は、男であった。しかし、男であったがゆえに、義経の兄である頼朝の命によって、生まれたその日のうちに鎌倉の海に沈められ、殺されてしまうのである。

やkutaiもない。

そのつまらぬ連想を、元綱は心中ですぐに打ち消した。

第三章 乱世の梟雄 永正十五年の秋（二）

その日、いつものように夜明け前に目を覚ました元就は、妻と継母と共に猿掛城の城頭に立ち、ご来光に手を合わせた。

「南無阿弥陀仏」

念仏を十度唱和し、家族の息災と毛利家の安泰を祈る。

しばらくの沈黙の後、それをわざと破るように、お杉が二度三度と手を叩いた。

「さあさあ、朝餉の支度はすでに整つてございますよ。お急ぎくださいませ」

振り向いた元就は、妻と微笑を交わして母屋へと戻り、湯漬けを掻き込んだ。

この日。 。
元就は、大内義興に謁見するために鏡山城へと出向かねばならぬのである。
具足をつけるために居室に戻ると、

「元就さま、お支度を」

久が畳んだ鎧下着と直垂ひたたれ、袴などを持って来た。

褌一本の素裸になった元就は、まず小袖に袖を通し、その上から鎧直垂よろいひたたれを着用し、短い袴をつける。足袋と草鞋で足元を固め、脛当てを片足ずつ脛に縛り付け、さらに佩楯はいだてを腰に巻きつける。ここまでは自分一人でも出来るのだが、腹巻の合わせ紐を締めることと、籠手、大袖をつけることは、一人ではできない。当然、介添えをし

てもらわねばならず、これまではお杉の方がその役を務めていたのだが、この朝は、お久が自らそれを買って出た。腹巻の紐を手早く締め、作法通り左手から籠手に手を通させ、大袖を腹巻の肩にテキパキと結びつける。

「さすがに鬼吉川の孫娘だ。手馴れたものだな」

鎧の着付けに関しては、明らかにお杉より手際が良いのである。元就は素直に感心した。

「これだけは幼い頃から厭になるほど仕込まれましたから」

久はにっこりと微笑むと、己の手を小袖の袖で隠し、太刀と脇差を捧げるように元就に手渡した。武士の大小には女性は直接手を触れるべきではない。この娘には武家の作法が見事に染み付いていた。脇差を腰に差し、太刀を左手に下げた元就は、空いた右手で妻を優しく抱き寄せた。

「ハキとは解らぬが、半月もせずに帰って来れるだろうと思う」

気軽な風情で言う。

「ご無事のお帰りをお待ち申しております」

「合戦あいくいに行くわけではないからな。心配せずともよい」

「はい」

久にとってはこの日が夫の初めての出陣である。危険はないと聞かされてはいるが、それでも心配にも不安にもなる。

「お留守はわたくしが守ります。お心おきなく」

久は努めて笑顔をつくり、夫を送り出した。

鏡山城は、現在の東広島市 賀茂郡の西条盆地にある。吉田の郡山からは南へ約八里。途中、武田方の熊谷氏の領地を迂回せねばならないから、道のりにすれば四十キロばかりの距離である。福原貞俊、坂広秀、井上元兼といった重臣たちを伴い、警護の意味もあつて三十騎ばかりの武者と二百ほどの雑兵を引き連れてゆく。

元就が郡山城にのぼった時、すでに軍兵は集まり終えており、荷駄などの準備もほぼ調っていた。

吉川氏からは吉川元経と嫡子の興経おきつねが、高橋氏からは若き当主の興光おきみつと隠居の久光ひさみつが、それぞれ鏡山城へ出向く。興経と興光にとつて大内義興は烏帽子親えぼしおやであり、顔見せとお礼の挨拶という意味もあつたであろう。いずれも国人一揆（豪族連合）の盟友であり、元就らと同道することになっていた。

吉川氏の大朝よりも高橋氏の横田よりも、毛利の吉田は南方に位置している。彼らにとつても経路の関係で通り道になるから、郡山城に集合することが申し合わせてあつた。距離的に遠い吉川氏はすでに昨夜のうちに吉田の城下に入っている。半刻ほど待つうちに、高橋氏も多治比を経て吉田にやつて来た。軍勢は三家で七百ほどにまで膨らんだ。

出発したのは巳みの刻（午前十時）の鐘を聞いた少し後である。この日の天は、刷いたような薄い雲が散らばる爽やかな秋空であつた。

「多治比殿は、大内のお屋形にお会いになられるのは初めてだったかな」

馬を並べた吉川元経が元就に話し掛けてきた。

「はい。謁見の折には、なにとぞよしなに」

「お屋形は器量が大きい。忠を尽くす者に無体な仕打ちをなさるような方ではないから、そのあたりは安気あんきに構えていなさるとよい」

大内義興への謁見をしくじると、家が滅びる可能性さえある。元就の不安を察して、氣遣つてくれたのかもしれない。

異母姉あねの夫である吉川元経は、今年が本卦返り（六十歳）である。亡き兄が叔父のように敬していた人物で、武勇に優れ、合戦いくさが巧い。鋭敏な才覚を感じさせる男ではないが決して魯鈍ろどんなわけではなく、年長者らしい懐の深さと落ち着いた風姿とを持っている。

元経は亡兄の興元と共に大内軍の上洛戦に従っており、大内義興にも愛顧されたようである。それだけに、尼子氏とも繋がり深いこの男の苦悩は深いであろう。元経は吉川氏の当主だが、祖父の「鬼吉川」や父の国経が健在であるだけに、その意向に引きずられる部分もあるに違いない。

舅である吉川国経と面会して得た元就の感触では、吉川氏は大内氏に無原則に服従してゆくつもりはないようで、将来、風向きの如何いかんによっては尼子氏に従う可能性があるということ为国経は否定しなかった。それを元就に明かしたのは、元就が愛娘まかむすめの婿ということもあるにせよ、毛利家をも味方に引き入れようという下心があったからであろう。これは乱世の豪族とすれば当然の処世ではあるが、その外交的態度は綱渡りのような危険を伴う。大内義興から憎まれれば、小豪族などはたちまち滅ぶのだ。

であるのに、この義兄は泰然として、表情に不思議なほど濁りがない。

見事な肚の据え方よ。

元経は、その時はその時のことと、武士らしくドライに割り切っているのである。妻の久にも共通する特徴だが、吉川家の人間は、物事を深く突き詰めてウジウジと悩むというような精神体質を持た

ないのかもしれない。内向的で心配性の元就には、その楽天的な思考回路が羨ましくさえあった。

一行は、その日のうちに向原に至り、坂氏の日下津城で一泊した。向原からは三篠川に沿ってさらに南下し、沙田郡さたに入る。及美氏のみという豪族が支配する地域だが、及美氏が大内氏に敵対するとは思えないし、通行の許可も取ってあるから、まず危険はない。そのさらに南方は平賀氏ひらがが勢力を張っていて、こちらは国人一揆の盟友である。不測の事故が起こるようなこともなく、行軍は予定通り遅滞なく進み、その日の日暮れには鏡山城下へと到達した。

西条盆地は安芸の商業の陸の中心と言ってよく、鏡山の麓には町屋が数百軒も立ち並んでいる。鏡山城は「応仁の乱」の頃に激戦の舞台となった場所で、大内氏と細川氏が何度も兵火を交え、城下の町屋も綺麗に焼き払われたはずなのだが、民衆の生命力というのは実に逞しい。

城下は、城に収容し切れない大内軍の軍勢と、これを馳迎ちげいするために集まった豪族たちの軍兵で溢れていた。総勢はおそらく二万を超えるであろう。安芸の豪族のほとんどが勢揃いしたと言ってよく、この参集に応じなかったのは、武田氏とその傘下の豪族と、穴戸氏あなとくらいのものであった。

穴戸元源は度胸がある。

穴戸氏は隣国・備後の三吉氏と強い同盟関係にある。その三吉氏は尼子傘下の豪族だから、穴戸氏は大内氏とは距離を取ってゆくつもりであるらしい。

元就は、使者を鏡山城へと走らせて、到着を伝えた。

「毛利家の方々には、ひとまずこちらの寺を宿舎として頂きます。お屋形さまからお呼び出しがあるまで、しばらくここにてお待ちくだされ」

内藤興盛の家来と名乗る男が即座にやって来て、一行を宿舎へと

導いた。すでに宿割りなどは出来ていたのだろう。

内藤興盛は毛利家へ使いしてくれた若者で、今回の謁見の奏者番（取次ぎ役）を務めてくれるらしい。なにしろ豪族の数が多いから、実際に元就が義興に会うには、さらに数日を待たねばならないかもしれない。

この滞在中、元就は、多くの豪族の当主やその重臣たちと面晤する機会を得た。先年の「有田の合戦」によって元就の名は鳴り響いており、彼らも元就の人物を知りたがっていたのである。元就にとっても初対面の人間が多く、世間が広がったという意味でも有意義な時間となった。

元就たちが鏡山城へ上るよう命じられたのは、その翌々日の昼過ぎであった。

西条盆地を見下ろす鏡山に築かれたこの城は、山腹に階段状の曲輪が多数あり、畝状の堅堀や堀切をいくつも配した堅城で、山頂に上下二段に分かれた「御殿場」と呼ばれる本丸がある。

内藤興盛の家来の案内で、元就たちはその城山を登り、御殿場の平屋の居館にあがり、控えの部屋でしばらく待たされた。

大内のお屋形さまとは、どのような御仁か……。

緊張や不安もあるが、同時に、大内義興という巨人を実際に見ることができるチャンスに、元就は少なからぬ興奮をも覚えていた。

陽が中天をかなり過ぎた頃、大広間へと通された。

左右には大内家の重臣が三十人ほど居並んでいる。元就は床板に視線を落としつつ静々と広間の中ほどまで進んだ。その後、重臣たちが続く。

一同は座につき、一斉に平伏した。

「こちらに控えましたるは、吉田郡山城主・毛利幸松丸殿が名代にて、多治比の猿掛城主・毛利少輔次郎元就殿にござりまする」

内藤興盛の声に合わせ、元就はずかに顔をあげる仕草をした。

「多治比殿は毛利幸松丸殿の後見役を務めておられます。先年亡くなられた治部少輔殿（興元）の弟御にございます」

続いて若者は、元就が差し出した名簿を見つつ重臣らの名を呼び上げた。

その間、元就らは小さくなって床の板目を眺めている。

やや間があつて、

「苦しゅうない。面をあげよ」

よく通る渋い声が遠い上座から降ってきた。

それに即座に応えては室町風の礼を失する。額が見える程度にわずかに頭を上げ、義興の威を畏れるように平伏を続けねばならない。

「お屋形さまの仰せでござる。ご一同、面をあげられませ」

内藤興盛の催促を待つて、元就は遠慮がちにゆっくりと威儀を正した。

中背の四十男が、一段高くなった上座に泰然と座っていた。黒を基調にした金欄きんらんの鎧直垂ひたたれに同系色の金欄の平袴、頭に引立烏帽子ひきたてえぼしを載せている。瓜実顔うりぢかほだが顔立ちにやや野趣があり、目鼻のパーツは大ぶりである。鼻筋が通り、眉は濃く、頬の肉が厚い。顔色が青白いのは薄い化粧を施しているためであろう。

男は正面から元就を見据え、

「ああ、治部少輔に面差しがよう似ておるな」

機嫌よさげに微笑した。

「余が義興である」

決して大柄でも肥満体でもないのだが、身体が何やら大きく感じ
てしまうのは、この男が全身から発する満腔の自信に、元就の気が
呑まれていたからかもしれない。

義興は十七歳という若さで大内家の当主となったが、家を衰耗すいもうさ
せるどころかその勢力を大いに伸ばし、二十年を掛けて大内氏の全
盛期を作りあげた。家中を束ね領国を治め、北九州での覇権を確立
し、さらに安芸、石見と勢力を広げ、ついには中国地方の過半を傘
下に収め、將軍を擁して畿内に天下人として君臨した。当時の守護
大名としてはまさに破格の人物であり、その武力と財力において日
本で右に出る者はない。ある種のオーラをまとうて見えるのも当然
であつたろう。しかし、その雰囲気は決して威圧的というわけでは
なく、友好的で明朗な温もりさえ感ずることができる。

「治部少輔は、心根が涼しく、ゆかしい男であつた。余にもよう尽
くしてくれた。その忠功は忘れておらぬ。病は天命とは申せ、惜し
い男を亡くしたものだ」

と、義興はまず兄の死を悼んでくれた。その言葉に軽佻けいちょうな響きは
なく、むしろ真心が込められている。

そのことに、元就はやや意外の感を持った。

義興ほどの男なら、安芸の小豪族に過ぎない毛利氏に対してもつ
と尊大で傲岸な態度であつても不思議はないのだが、この英傑は、
想像していたよりはるかに大度で、礼にも厚く、人柄に優しさと包
容力とを備えているらしい。

「果報なお言葉を賜り、恐悦至極に存じます。泉下の兄も喜んで

おりましよう」

心から言った。

「そなたの『有田』での忠戦のことは聞いておる。刑部少輔ぎやうぶしょうぶのしょうじ（武田元繁）を討ち果たした功は小さなものではない。あれ以来、安芸はずいぶんと静かになったようだな」

義興はそういう言葉で元就の働きをも賞した。

実際、武田元繁の敗死後、安芸では尼子方が一時的にはあるが勢いを失っている。尼子氏の影響力の浸透を食い止めたという意味で「有田の合戦」の意味は大きく、その合戦において主体となった毛利氏の存在感は、興元の存命当時よりさらに増していた。

「治部少輔亡き後も、毛利が変わらぬ忠心を示してくれておることを嬉しく思うておる。余を見限り尼子に通じた武田がことは、刑部少輔が死んだとはいえ、そのままにはしておかぬ。そう遠くない将来き、これを滅ぼすために再び安芸に参ることになろう」

「国許にて抜かりなく支度を調べ、ご出馬をお待ち申しまする」

元就の模範解答に、義興は大きく頷いた。

「ところで、少輔次郎」

「は」

「毛利の家督を継いだ幸松丸は、まだ四つであるやに聞いた。武将として兵馬を立派に指揮し、あるいは家政が執れるようになるには、あと十五年は待たねばならぬであろう。それまで、毛利の家督は、

「いつそそなたが預かることにすればどうか」

その台詞に元就は仰天した。

「いや・・・、それは」

「そなたは治部少輔の同腹の弟。刑部少輔を討った功もある。それに相応しいと思うがな」

唐突にして重大すぎる発言である。

しかし、義興にしてみれば、これは元就という男を試すためにあらかじめ用意していた設問であった。

義興は、多治比元就という男については噂以上のことは何も知らない。悪い印象を持っていたわけでもないが、ただ、元就が吉川国経の娘婿となった以上、元就は尼子経久とも縁戚であり、毛利家中における尼子派の中心人物と看做さざるを得なかった。義興は毛利の先代である興元のことは信頼していたし、信義に篤いその人柄を気に入ってもいたが、興元が死に、元就が幸松丸の後見役となって毛利家の舵を握っている以上、毛利はもはやいつ尼子側に寝返っても不思議はないと考えていたのである。

元就が味方であるか、敵であるか。その人物も含め、見定めねばならぬ。

というのが義興の存念であり、この会見の主要な目的でもあった。武家の次男や三男が「家督」に対して強い執着を示すのは珍しいことではない。元就がそのエサに飛びついて来るような男なら、その心を執るのは造作もないであろう。義興の口利き（というよりは横車）で元就に毛利家を継がせてやり、恩を売ることによって元就自身を大内側に取り込んでしまつつもりであった。義興にすれば毛利の当主が誰であるかなどということは大した問題ではなく、毛利家が自分の犬馬となつて尽くしてくれさえすればそれでいいのである。もち

るん「毛利家の家督をくれてやる」と言つたところで、義興自身は一銭の金銀も一片の土地も負担するわけではなく、懐はまったく痛まない。

元就は義興の発言の真意が量れず、一瞬返答に窮したが、努めて微笑を作り、屈託のない風情で返答した。

「格別のお心遣い、まことにありがたく存じますが。毛利の家督は、亡き兄の嫡子である幸松丸さまを措いて考えられぬというのが家中の総意でございました。私はすでに毛利本家を出て一家を立てておりますし、幸松丸さまをお輔けることが、亡き兄への供養になるものと心得ておりますので。」

「ふむ」

「幸松丸さまがご立派にご成人あるまで、我ら重臣一同、心を合わせてこれを守り立て、政務にも軍役にも遺漏なきよう努めて参る所存でございます」

その涼しげな返答に、亡き興元の面影がダブった。

欲望の強い男であれば、御しやすかつたのだが……。

どうやらこの若者は、その兄に似て目先の小利に奔るような浮薄な性情ではないらしい。義興は認識を改めた。

「そうか。頼もしいことよな。治部少輔は良き弟を持ったものよ」

義興の細心さは、元就の後ろに控える重臣たちにもそれぞれ懇ろに声を掛けたことである。「その方の『船岡山』での働きはよく憶えておる」とか「そなたの『有田』での奮迅ぶりは我が耳にまで聞こえておるぞ」などと、義興は実に滑らかに言葉を継いだ。

武士とはそもそも自己顕示欲の強い生き物であり、人に知られた

いという願望を抑えがたく蔵している。大内義興ほどの男に自分の名や武功を憶えてもらっていると知れば、これを喜ばぬはずがないのである。武断派の井上元兼などは無邪気に感激してしまっていたが、政略家としての資質に恵まれた元就には、義興の凄さと怖さがありありと解る。

これはただごとならぬお人だ。

言葉というものの威力を知り抜き、それを能く使うという意味で、義興は老獪な政治家であった。さらにこの男の恐ろしさは 先天的なものか後天的に身に付けたものかは解らぬが 人を惹きつける磁力のようなものを持っていることであろう。

なるほど大きい……。

器量が、である。近年の大内家の強勢は、ひとえにこの義興という男の人間力に因るのである。元就は心中で唸るような気分であった。

元就らは、半刻ほどで鏡山城の城山をくだった。

今回の謁見は、ひとまず成功裏に終わったと言えるであろう。義興は終始機嫌が良かったし、悪い印象を残すことなく御前を退くことができた、と、元就は自分に及第点を与えた。

ところで、この大内義興の帰国騒ぎに際して、山陽地方の豪族たちは、多くが毛利氏のように再び義興に臣下の礼を取った。しかし、吉川氏がそうであるように、裏では尼子経久にも密かに誼みを通じているという者が実は少なくない。

豪族たちは、大内軍が出て来ればこれに名簿を差し出し、尼子軍がやって来ればこれに人質を遣わすのである。このような鞍替えをこの時代の言葉で「現形」と呼ぶのだが、これは倫理的な意味での「悪」ではなかった。武家とはそもそも大いなる者には従うものであり、そのために寝返りをうち、あるいは裏切りをしても、「自家の生き残り」という究極の選択の末のことであれば、それは正当防衛であり、当然の権利の行使だと考えられていたのである。豪族たちは江戸期の武士のような儒教的な倫理観や忠誠心を持ってはいな

かったし、大内義興ほどの大大名であっても、傘下の豪族たちに対して専制君主のような絶対的な支配力を有しているわけではなかった。

義興は鏡山城に十日ほど滞在し、九月の下旬に諸将を散会させ、帰国の途についた。元就が多治比へ帰ったのは九月の末であり、義興が周防の山口へと帰り着いたのは十月五日である。

大内・尼子の激突は、すぐさま始まるかとも思われたが、冬が過ぎ、年が明けても、中国地方は不思議なほど静かだった。大内義興は溜まりに溜まった内政案件の処理と領国・分国の再統治に忙しかったし、大内家の武將たちにしても十年もの外征による経済的な負担が大きかったから、十分な休息期間が必要だったのである。

大内氏がついに腰をあげ、尼子氏との戦いが本格化するのは、三年後の大永元年（1521）を待たねばならない。この間、両雄に挟まれた安芸、石見、備後といった国々では、武力衝突の前哨戦と言うべき外交と謀略による戦いが、静かに、そして密やかに、激しさを増していった。

さて。

十月になって、吹く風に冬の気配が混じるようになった。

羽田重蔵は、目を落としていた書籍に箋（しおり）を挟んで、ひとつ大きく伸びをした。

相合の元綱の屋敷の裏庭である。重蔵は薪割り台の木に腰掛け、納屋の壁に背を預けて一刻ばかりも読書に没入していた。周囲が暗くなってやっと我に返ったのだが、いつの間にか陽はとっぷりと暮れ落ち、西の空にわずかな残照を残すのみとなっている。黄昏刻とか逢魔刻とか呼ばれる時刻である。

なんとも恨めしいな。

恨めしいのは、すっかり日が短くなってしまったことだ。

この時代、夜間の照明は富者の特権であった。たとえば蝋燭など

はほとんど輸入に頼っていて、よほどの大大名か富商、大寺社などしか所持していなかったし、灯明には荏胡麻油えしごまや鯨油けしゆなどを用いたが、油はいずれも貴重品で、収入のない重蔵ごときがおいそれと手に入れられるものではなかった。ちなみに菜種油が大量に生産され、照明用に安価で出回るようになるのは、この時代からさらに半世紀も後のことである。

唐土もろこしでは、ある者は集めた螢の光で書を読み、ある者は雪に照った月の光で勉学を続けたというが……。

真似できるものではないし、そもそも秋という季節には螢も雪も無縁であろう。

重蔵は天を仰ぎ、鼻から大きく息を吐いた。

重蔵の手にあるのは『孫子』という唐土の兵法書で、計篇けい、作戰篇、謀攻篇、形篇けい、勢篇せい、虚実篇までの六篇を訓み下し、一冊にまとめたものである。少年時代の元綱が自ら筆を取り、和綴わとじに製本したものだという。

それにしても、世にこれほど面白いものがあつたのか。つくづくと思つた。

重蔵は吉岡兵法所で軍略を学んでいたほどで、もともと向学心が強く、智を蓄えることに喜びを覚える体質であつた。身過ぎ世過ぎに懸命であつた頃はそれどころではなく、ほとんど趣味の領域を出なかつたが、相合で暮らすようになってから、その熱が再燃した。環境がそれを後押ししたと言つべきであろう。元綱の周囲には、重蔵が一度は読んでみたいと願いつつそれが叶わなかつた和書、漢籍の類が、何でも揃つていたのである。

その意味で、毛利家はまさに「特別な家」だつた。

たとえば元綱の部屋には、この『孫子』の写本が全十三篇すべて揃つた状態で無造作に置かれていたりする。こんなことは、日本中を探しても毛利家とその庶家以外ではまず考えられないのである。

この時代、地方の小豪族は漢籍を入手すること自体がそもそも至難だが、『孫子』はなかでも別格であつた。

『孫子』が日本へ伝来したのは古く、重蔵が生きるこの時代から数百年も昔に伝わっていたが、当然ながら一般人の目に触れるようなものではない。それを読むことができたのは、よほどの教養を持った貴族か僧侶に限られていた。平安時代になると、朝廷は文章博士の二家に舶来の書籍をすべて管理させ、漢文の読解と研究に当たさせた。その二軒の学者の家というのが、菅原道真すがわらのみちざねで有名な菅原家と、毛利氏の先祖である大江家である。以来、『孫子』は大江家が一元管理し、平安中期に大江惟時これときが訓み下し、平安後期に大江匡房まさひかさが大いに研究した。

大江匡房は日本独自にして最古の兵法書である『鬪戦経』とつせんきやうを著したと目される人物で、兵学の研究家であつたらしい。この大江匡房が、当時の武士の棟梁的存在であつた八幡太郎義家はちまん よしいえに『孫子』を教授し、その写本を与えたとされる。それが弟の新羅三郎義光しんらに伝わり、その直系の子孫である甲斐・武田氏に相伝されているのだが、これがほとんど唯一の例外であつた。大江家は「学識」で飯を食っているわけで、大江匡房は集めた膨大な漢籍を自邸の「大江文庫」と名付けた書庫に保管し、門外不出とし、授業料を取ってそれらを講読することはあつても、安易に書写などはさせなかつた。つまり『孫子』は大江氏の専売特許と言ってよく、名前だけは有名だつたものの、その実物に触れられる者はほとんどいなかつたのである。ちなみに大江文庫は「応仁の乱」の戦火で焼け、その蔵書も多くが焼失したらしい。

下野国しもつけの足利学校のような高等教育機関や、高位の公卿や大寺社などが古くから所持していた『孫子』の原本が、書写されて出回るといったことは、わずかにはあつたと考えられる。また、室町時代に入ると商人が急速に力を付けてくることもあり、私貿易によつて漢籍を得ることも可能であつたろうし、堺や博多などの港湾都市でそれを購入することもできたかもしれない。しかし、その絶対数はあまりに少なかつた。『孫子』の兵法を実践して戦国最強と呼ばれた武田信玄の影響などもあつて、戦国時代も末期になるとかなりの

数の写本が出回っていたようだし、教養時代と呼ぶべき江戸期に入ると兵学は興隆を極め、『孫子』も多くの知識人の目に触れるようになるのだが、戦国もごく初期のこの時代においては、数国を統べるような大大名ならともかく、地方の小豪族で『孫子』を持つている家などは、ほとんどなかったのである。重蔵が学んだ吉岡兵法所にしても、全十三篇のうちの数篇の不完全な写本があったのみで、それでも宝物のように扱われていて、実物は見せてももらえず、ただその講義を聴くことが許されるだけだった。

それだけに、元綱の部屋で『孫子』と出会った時の重蔵の衝撃は、非常なものだった。重蔵は大江氏の来歴などまったく知らなかったし、毛利氏に対する予備知識もなかったから、

なぜ『孫子』がこんなところに！？

と仰天させられたのである。

やや余談になるが。

大江氏の京における直系である北小路家きたのこうじは、武家の世となつて以後は、衰微してゆく朝廷に仕える下級官人というに過ぎなかった。大江氏の庶流としては、源頼朝の知恵袋として鎌倉幕府の功臣となつた大江広元の系統があり、広元は鎌倉政権における文官筆頭となつただけに、権勢という意味ではこちらが本家を圧倒した。その大江広元の子孫は武家化し、鎌倉中期に起こつた「宝治合戦」によつてほとんどが死に絶えたが、死を免れた者の中では広元の曾孫に当たる毛利時親ときちかがもつとも栄えた。

毛利時親は吉田の郡山城を築いた人物で、安芸・毛利氏の初代と言つていい。越後と河内にも領地を持ち、六波羅評定衆にも名を連ねるなかなかの有力者であった。また毛利時親は兵学の研究者としても知られ、かの楠木正成まさしげに『鬪戦経』をもつて軍略の奥義を授けたとする伝説が残っている。大江広元が所持していた膨大な蔵書は、この時親に引き継がれ、郡山城の書庫に収められたのであろう。その家に生まれた元綱や元就は、地方の小豪族とはとても思えないほどの恵まれた教育環境で育つたと言える。

話を戻すと。

この時代、教養といえば、一般に儒仏と歌学 儒教と仏教と和歌の知識 のことを指す。学術と教養の淵藪えんそくは京であり、あるいは叡山、五山、南都といったあたりの大寺社であり、その担い手は公家、僧侶、神職といった人々であった。漢籍を読める武士はそもそも多くなかったし、それを手に入れられる環境と財力がある者となるとさらに稀で、異国の兵法書に通曉している人間となると、よほどの変わり者と言うしかなかったであろう。京から遙か遠い安芸の片田舎で、重蔵が偶然にも仕えることになった人物が、それらの条件をすべてクリアしていたというのは、まさに奇跡であった。

類は友を呼び、同類相求あいむという。軍略や兵学といったものに対して同好の士であるということが判ると、重蔵と元綱の仲はさらに急速に接近した。

「京は往古から数々の合戦いくばくの舞台となった場所だが、お前がこれほど古今の合戦に明るいとは思ってもせなんだわ。なぜ今まで隠していた」

「別に隠していたわけではござらんが……」

重蔵が吉岡兵法所の話をすると、

「兵学の学び舎というわけか。俺も一度そこに行ってみたいものだ」

元綱は眼を輝かせた。

それ以来、元綱は、己の手元にある書籍を気軽に貸してくれるようになったし、郡山城の書庫にある和書、漢籍の閲覧と貸し出しをも許してくれた。元綱が郡山城に出仕する時、重蔵はその供をして城にのぼる。主人の下城を待つ間、城内の書庫で至福の時を過ごし、書籍を借りて帰るのである。無数の兵法書や軍記物語などをいくら

でもタダで読むことができるわけで、この環境はまさに望外の喜びだった。

わしが安芸にやって来たのも、四郎さまにお仕えするようになったのも、天の配剤であったとしか思えんな。

重蔵は神仏を信ずる心が薄かったが、このことばかりは天に感謝した。

元綱の方も、軍談や兵法書の解釈を肴にして酒が飲めることを無邪気に喜んでいるようであった。

元綱は優れた知能と想像力とを持っていたが、その知識はもっぱら書物から独習したものだから、認識や解釈が常に書物の著者の視点に限定され、現実世界からも遊離せざるを得ないという恨みがある。煎じ詰めて言えば、百聞は一見に及ばないということである。たとえば。

「お前は安芸に来る途次、山陽道を下ってきたと申ししていたな。それなら『一の谷』のあたりを通ったであろう」

ある夜、酒を飲みながら元綱が尋ねた。

「通りましたとも。『鴨越』でござるな」

元綱は義経とその周辺には異常に詳しく、この合戦に関しても複数の書物でその詳細を研究し尽くしているようで、書物に名の挙がっている武士に関してはその活躍から着ていた具足の色まで驚くほど克明に記憶していたが、軍記物語というのは絵図が載っているわけでも戦場の地理地勢が詳細に記されているわけでもない。

元綱は、現地を実際に見た人間による生の情報を、乾いた者が水を求めるような気分で欲していたのである。

「福原のあたりは地勢はどのようか。『平家』を聞くに、南に海が

迫り、北は断崖、東西に長い陣のように思えるが」

「左様、搦め手の戦場は『一の谷』の木戸（砦の城門）。大手の戦場である『生田の森』まで、四里ばかりはあつたと思われまするな。北は鉄拐山の山壁が須磨の海に迫つて平地は極めて狭く、要害と申すに相応しい地形でござつた。北の断崖は真つすぐに切り立つ壁のようで、その高さたるや、見上げた感じでは十五丈（四十五メートル）ばかりもありましたろうか」

「おお、十四、五丈という『平家』の語りと符合するな」

「あれを馬で駆け下つたとすれば、まさに鬼神の所業。義経がそれをなし得たというのは、この目で見ても信じられませなんだ」

そういう話をしている時の元綱は、実に楽しそうであつた。

重蔵は元綱に比べて知識という面では遙かに脆弱であつたが、山城、摂津あたりの古今の戦場の地勢は実際に我が目で見て知つていふという強みがある。また、著名な合戦に關しては京の吉岡兵法所で多くの優れた先達が長い年月をかけて議論し尽くして、その精華といふべき上澄みの部分を重蔵は学び取つていた。『一の谷の合戦』は古来もつとも有名な合戦のひとつだから、検討に検討を重ねられていふことは言つまでもない。

つまりとて重蔵は、書物だけでは得ることができない多くの知見を持つていたということである。それを元綱が喜ぶのも当然であつたろう。

元綱にとつて、重蔵は家来、郎党というより、もはや友というに近い。

「俺は毛利の家に生まれればこそ多くの書物に接することができたが、そのお陰で家に縛られ、この安芸から一步も出たことがない。

お前やゆきのように、諸国を旅できる者が羨ましく思えるというのは、皮肉なものだ」

「四朗さまの兄上は、ご当家の軍兵を率い、大内のお屋形に従って京にのぼっておられた。応仁の乱のときも、諸国の軍勢がこぞるようにして京へ集まって参りましたし、この先、四朗さまにも京にのぼるような機会がやって来ぬとは限りませぬよ」

「京か」

詠嘆するように言って、元綱は笑った。

その笑顔が、重蔵にはなぜか少しだけ寂しげに見えた。

第三章 乱世の梟雄 鉢屋の蓮次

この時代、川筋 とりわけ大河の川辺には、特殊な人々が住んでいる。

治水や築堤の技術が未発達であった昔、河原は梅雨時になると水没してしまうということもあり、一般に人が定住できる土地ではなかった。しかし、河川は、国と国、領地と領地の境になるために、誰からも支配されない空白地帯になることが多く、その結果として、故郷を捨て逃散した百姓や下人、罪を犯して国を遁^{のが}れたり追われたりした罪人、諸国を漂泊する遊行民などにとっては、まさに格好の住処となっていたのである。

触穢^{しよくえ}の思想において、川は「穢^{けが}れ」を流し清める「禊^{みそぎ}」の場所である。川辺や水辺は一般社会からは隔離された異界であり、常民とは異なる生き物が棲^{しかん}む彼岸であった。そこに暮らす者たちは、社会の死穢^{しえ}を引き受けながら、皮革、染物、竹細工、製鉄、土木、造園などの技術者となり、伎楽、散楽、猿楽、能、狂言、奇術、傀儡^{くわい}、語り物といった様々な芸能の担い手ともなった。彼らは「河原者」とか「河原乞食^{こっしき}」と呼ばれて差別を受けていたが、その役割と技術は、人間の集団が社会生活を営む上で必要不可欠なものでもあった。「河原者」といえば京の鴨川の川辺や摂津の淀川の周辺などに暮らしていたことが名高いが、多くの人間が住む都市部には、それに近接するようにそういう被差別集落が必ず存在したのである。

無論、安芸国もその例外ではない。

郡山の城下町から半里ほど離れた江の川の下流 毛利氏と宍戸氏の領地の境界に、その「河原者」の集落がある。文字通りの貧民窟だが、規模としてはなかなか大きく、数百の人間がそこで暮らしていた。

小汚い掘っ建て小屋が所狭しと並び、その多くがそれぞれの向きに傾いている。屋根は板の上に石を置いただけで、きちんと葺^ふかれ

たものなどひとつもない。竹を組んで筵むしろを天幕にしただけというよ
うな仮設住居も多い。台風にでも遭えば軒並み倒壊するであろうが、
ここに暮らす者たちは、雨季が来ることに住処を移すほどのバイタ
リティーがあり、潰れてもすぐに建て直してしまふ。そうして自然
に出来あがった路地や小路は実に複雑に入り組んでいて、さながら
小さな迷宮である。

その中のある路地を、木箱を背負った男が歩いていた。

歳は三十の前後であろう。やや小柄な体格で、月代さかやまは剃らず鬚まげ
小银杏こいちょうに結っている。旅塵で汚れた木綿の小袖を太帯で縛り、裁付たうつけ
袴ばかまを穿き、足元は脚絆きゃはんと草鞋わらじで固めた旅商人の姿である。帯に小刀
を差し、背の木箱には笠かさと合羽かっぱが括りつけてある。

鉢屋れんじの蓮次れんじである。

人やモノやゴミをひよいひよいと避けながら、足早に進んでゆく。
周囲はやたら雑然として、とにかく騒がしい。鶏や犬の鳴き声や、
何やら判らない動物の吠え声に混じって、男の怒声、女の罵声、病
人のうめき声、赤子の泣き声など、無数の声がある。それに加えて、
そこから槌の音であったり鉄かねを打つ音であったり、何かの作業
をする様々な雑音が耳に飛び込んでくる。

襪はく襪布を身体に巻き付けた子供が三人、嬌声をあげながら蓮次の
脇を駆け抜けていった。死んだ馬を載せた荷車が、前方の通りをゆ
っくりと横切つてゆく。その辻では、垢じみた僧衣をまとった聖ひつじが、
数人の観衆に向けてやかいかい声で説経を垂れている。道端では、
顔の皮膚が酷く崩れた者たちが日陰に座り込んで何やら談笑してお
り、別の路地では山賊のような格好の男たちが車座になって酒を呑
んでいる。ある者は酔い潰れ、ある者は今様を歌い、ある者は飯を
食い、ある者は女とじゃれている。

「お、薬屋じゃねえか。久しぶりだな」

などと声を掛けて来る顔馴染みもいる。

ちょうど夕飯時で、左手の河原では多くの炊煙が上がっていた。数十人の老若男女が、飯を炊いたりそれを食べたりしながらそれぞれに過ごしている。川の中では紺屋（染物業）の下人たちが染めた布の水洗いをしている。木刀でお手玉の練習をする男、猿に芸を仕込んでいる老人、琵琶を抱えた盲僧、死馬を解体している風景なども見える。その川から吹いて来る風には、饅えた腐臭と汚物の匂いが混じっていた。

まともな人間の住む処じゃねえが……。

人の生命の息吹をこれほど生々と実感できる場所も他にないと、蓮次は思っている。つい機嫌が良くなって、口元に笑みが浮いた。

鉢屋である蓮次は、ここの住人たちといわば同類なのである。

この青年は、出雲大社にほど近い賤民集落の屠家に生まれた。

屠家というのは、牛や馬などの動物の屠殺やその死骸処理を仕事にしている家である。動物の皮を剥いで皮革の製品を作り、その肉を食用に加工し、骨や腱や内臓などから膠を取り、あるいは薬を作るなどして、それらを売ることと活計を立てる。この稼業の者は、人々が忌避する死穢を引き受けるということで、穢れ多き者。「穢多」と呼ばれて差別を受けた。

穢れとは「不浄」を表す概念である。最悪の穢れは言うまでもなく死穢であるが、血、疫病、出産、月経、犯罪なども穢れと考えられていた。つまり出産を介助する産婆や、人や動物の死体を処理するような仕事に携わる者は、日常的に穢れに触れ続けるわけで、常民からは当然のように忌み嫌われ、蔑視を受けていたのである。

もともと、公家が我が世の春を謳歌していた平安の昔とは違い、人殺しを稼業とする「武士」に政権が移つてすでに三百年以上を経たこの時代においては、穢れに対する人々の抵抗感はやほど希薄になっっている。貨幣経済の発達と共に「金銭」という新しい価値の尺度が世に普及し、商人という新興勢力が台頭することによって、現実が旧来の社会通念を駆逐したということもあるであろう。穢れを

極度に嫌う公家でさえ河原者の芸能者と交友を持つ者が少なくなつたし、たとえば泉州堺の代表的な豪商である「会合衆」の今井宗及などは「皮屋」すなわち皮革商であつたが、その社会的地位は非常に高かつた。

しかし、根拠や価値や意味を失つてさえ、謂われない差別だけは厳然と残る。現代にまで根強く蔓延る同和問題を知る我々は、多くの人間が差別意識から無縁でいられないという哀しい性を現実として理解できるであらう。

屠家に生まれた蓮次は、蔑視されることの理不尽さを味わい尽くして成長した。幼い頃から小知恵が回り、腕つぶしも度胸もあり、「穢れた人間」として居直つてもいたから、悪さという悪さは一通りこなしたし、そのことに罪悪感も感じなかつた。不良少年がやくざからスカウトされるように、鉢屋の頭目から眼を掛けられるようになったのは自然の流れで、その使い走りをするうちに、この渡世に身を置くようになった。ちなみに頭目は鉢屋三左衛門という五十男で、「鉄堀り三左」の通り名を持つ鉄堀り人足の元締めであり、蓮次が生まれた集落の顔役だつた。

賤民集落は出雲にももちろん多くあり、鉢屋衆の党も複数存在している。鉢屋賀麻党の大親分である鉢屋弥之三郎を始め、賀麻党の主立つ者は、出雲の王である尼子経久からすでに土分を与えられ、武士となつていたが、その郎党まで含めても、常民の扱いを受けているのは鉢屋衆全体から見ればごく一部に過ぎなかつた。鉢屋者のほとんどはそのまま賤民集落で暮らし、彼らから仕事を請け負う形で働いていたのである。

そもそもが賤民である鉢屋の世界には、当然ながら穢れに対する差別意識がない。あるのは徹底した能力主義であり、同胞意識であり、ある種の仁義と俠気であつた。屠家という重い枷を背負つて生まれた蓮次にしてみれば、これほど居心地の良い場所はなかつたと言つていい。

「兄さん、遊んでつておくれよお。安くしとくからさあ」

薄汚れた布子一枚をまとった半裸の中年女が、蓮次に二の腕を絡めて小屋に引きずり込もうとした。

「悪いな姐さん、今ちよつと懐中が寂しくつてな」

女の瘦せた尻を撫でてやりつつ、蓮次は笑った。

「何だよ、景気が悪いねえ」

「また今度世話になるからよ」

その手を外して再び歩きだす。

身体を売つてなんとか食いつないでいるような最下層の貧民たちは河原に近い場所に小屋掛けしているが、河原者のすべてが貧苦にあえいでいるというわけではなく、皮革商や染物業、水運業といった仕事を取り仕切る有力者たちは、河原からやや離れた高台に広大な屋敷を持ち、吉田や甲立の城下町にもそれぞれ店舗を構え、並みの武士よりよほど裕福な暮らしをしている。一口に河原者と言ってもそれこそピンからキリまであり、たとえば能役者の観阿弥・世阿弥親子や連歌師の宗祇のように天下の人々から尊崇を集めるような芸能者もいたし、「馬借」や「車借」と呼ばれる運送業者や「ワタリ」と呼ばれる水運業者の中には、富力を蓄え、大勢の配下を組織化し、小豪族にも匹敵するような実力を持つ者さえ現れていた。

河原を背にしばらく歩いた蓮次は、とある辻の破れ築地の前で足を止めた。

こんな場所にもかつては寺があったらしい。長らく手入れされていないのは一目瞭然で、門は朽ち、境内は雑草が生い茂っていた。哀れなのは本堂で、屋根が落ち、壁が崩れ、盗まれてもしたのか本尊

さえ見当たらない。左手にある鐘突き堂にも鐘はなかった。これも盗まれたのであろう。

右手の奥に庫裏くぐりらしい建物があり、それだけは辛うじて外観を留めている。その傍にある井戸は今も使われているらしく、撥ね釣瓶はねつるべの縄が新しかった。

蓮次が庫裏の戸を開けてなかを覗くと、板間の奥で寝ころんでいた大男がのっそりと寝返りをうった。

「……誰かと思えば皮屋の倅せがれか」

歳は四十をいくつか過ぎているであろう。墨染の衣を着、頭髪を剃りこぼっているから僧ではあるらしい。疱瘡ほうそうの跡なのか、岩のようにゴツゴツした酷い面相をしている。

「おう、糞坊主、まだ生きてたか」

この男、蓮次とは古い馴染みで、岩阿弥がんあみという名の時衆じしゅうの聖である。

若い頃は諸国を遊行して、「南無阿弥陀仏、決定往生けつじやうせいじゆう六十万人」と書かれた札を売り歩いてきた。蓮次の故郷にもやって来たことがあり、その時に知り合った。いつの頃からかこの無住の寺に住みつき、病者の治療をしたり、人に念仏を勧めたりしながら暮らしている。近くで合戦があれば、頼まれもせぬのに賤民たちを連れて戦場に出掛けて行き、瀕死の武士や雑兵に十念を授けて引導を渡し、その成仏を祈り、遺体を埋葬してやつたりもするらしい。

「邪魔するぜ。 ああ、今日は疲れた」

蓮次は板間に腰掛けて木箱を降ろし、草鞋をぬいで布で足をぬぐった。

「朝から歩きづめでよ」

「その格好なりを見ると、まだ薬売りを続けておるようだな。また薬を持って来てくれたのか？ 癩らいに効く薬はないか？」

「アレを治しちまえるような薬は唐土せうしにもまだねえと思うが。万病に効く妙薬ならあるぜ」

蓮次は腰にぶら下げていた瓢箪ひょうたんを放った。

その栓を開けて匂いを嗅いだ岩阿弥は、

「おお、百薬の長か。こいつは有難い」

実に嬉しそうに笑い、ぐびぐびと飲んだ。

癩らいは、その言葉自体が現在は差別用語になっている。ハンセン病のことである。

古来、日本では、ハンセン病とそれと区別がつかないほどの重度の皮膚病を「天刑病」と呼び、その病に掛かった者を「非人」に落とし、コミュニティから追放することで隔離するというところまで行ってきた。不治の病者はその存在自体が強い「穢れ」であり、穢れた者は賤民なのである。たとえば宗教的な権威であった比叡山は、女人、三病者、細工を禁制とし、女性と、ハンセン病を含む三種の病人、河原者である職人を同列に並べて入山を禁じていたほどで、中でも病は人に感染する場合があるだけに、この差別は自衛の意味でも徹底していた。無論、叡尊えいそんや忍性にんじょうのように救癩活動に身命を捧げた立派な僧もいて、奈良の奈良坂・北山宿にはハンセン病棟が作られ、罹患者りかんしゃを収容して看護していたという例もあるにはあるが、全国の患者に対してその数は絶望的に少なかったというのが現実である。

つまり、故郷を追われ、僧侶からさえ見捨てられた病者にとって、賤民集落は逃げ込むことができるほとんど唯一の避難場所であった。当然の帰結として、そこには様々な重病患者が流れ込み、溢れることになる。常民が賤民集落を忌避するのは、このことも大きな理由であつたに違いない。

「まあ、手持ちの薬は残らず置いてくよ。銭と交換でな」

木箱を叩きながら蓮次が言った。

「布施行の善徳を積む機会をせっかく与えてやるうというのに、銭を取るとは見下げ果てたヤツだ。坊主に強請たかるとお浄土へ行けんぞ」

「地獄の沙汰も何とやらだ。あんたの十念で送ってもらおうたあ思つてねえよ」

十念とは「南無阿弥陀仏」の称名しちゅうみやうぶつを十度唱えることである。

蓮次は坊主から瓢箪を奪い、自らも酒を飲んだ。

「寝るところを貸してもらおうと思つて来たんだ。乾米かれいと干魚が少しあるんで、それなら布施してやってもいいぜ」

「おお、そいつは良い。ならば客人、夕餉ゆづげを饗して進ぜるゆえ、早う出せ。わしもちょうど腹が減つておつたところだ」

岩阿弥は嬉しそうに米と干物を受け取ると、土間に降りて米を炊ぎ、魚を焼き、菜を刻み、手早く夕食の支度を調べた。

二人でそれを食いながら、とりとめない話をする。岩阿弥が最近耳に入れた風聞や噂話などを聞かせてもらったためである。その地の近況を知ることが重要な情報収集であるし、時衆の遊行僧たちには

横の繋がりがあり、諸国の情報に通じているから、蓮次にとって何かと得るものが多い。

大内義興を馳迎ちげいするために、多治比元就が鏡山城に出向いているという情報も、宍戸元源もとよしがそれをしなかつたらしいという風聞も、この時に得た。もつとも、鏡山城がある西条には別の諜者が潜伏しているから、どの豪族が出向いて来たかといった詳細は、すでに出雲の尼子経久の元に届けられているであろうが。

「多治比の元就といえば。あの男は毎朝ご来光に十念をあげてるらしいな」

「ほお、よう知っておるな。多治比殿に念仏戒を授けたのは、わしの師匠の友じゃった御仁じゃ」

岩阿弥はなぜか自慢げに胸を張った。

「へえ、そうなのか。世間は狭えな」

「昔、吉田の井上なんとかの屋敷で念仏講を開いた時に、松寿丸と申された頃の多治比殿がそれに加わられたのだそうだ。それ以来、多治比殿は毎朝欠かさずご来光に十念をあげるようになったと聞いておる。若いに似ず奇特なものだな」

「ふん。信心深いこつた」

「その方はもともと法華坊主だつたらしいのだがな。寺暮らしが馴染まんと遊行ばかりしておるうちに、『南無妙法蓮華経』から『南無阿弥陀仏』に宗旨替えをしたんじやろう」

「そんなのどつちでも構わねえよ」

蓮次は苦笑した。この男は信心など鼻毛の先ほども持っていないから、宗旨のこととなるとさっぱり判らないのである。

「ご利益があるのかい」

「そりゃあ有難いものだぞ。松寿丸であつた昔の多治比殿は、家来に城を追い出され、乞食同然の暮らしをなさつておつたそうだが、念仏の秘事を授けられるやお城に返り咲かれ、立派なご城主におなりなされた。また先年は、初陣にして武田のお屋形の大軍に見事にお勝ちなされた。これみな念仏の功力だな」

「阿呆らしい。念仏で戦に勝てるかよ」

蓮次は鼻で嗤つた。

「武田のお屋形が、同じように毎朝十念をあげてたら、阿弥陀さんはどっちを勝たせるつもりだよ。困るじゃねえか」

「困りはせんわい。御仏はいず方にも同じようにお慈悲をお掛けくださる。勝つた方は御仏の功德に感謝し、負けた方は御仏の本願によつてお浄土へ導いていただけ。どちらも大喜びじゃろうて」

「その屁のような理屈はなんなんだよ。討ち死にして大喜びする武将がどこにいるってんだ。坊主は頭が良いんだか悪いんだか判らねえことを言いやがるから面倒臭え」

「それが商売だからな。縁なき衆生はそもそも度し難い。ためになる説経を拝聴したと有難がつておればいいのだ。文句を垂れると耳がつぶれるぞ」

岩阿弥は大きな身体を揺すって笑った。

鉢屋者と時衆の聖とは、実は何かと縁が深い。

そもそも鉢屋は飯母呂一族の末裔であるということは先述した。

平安中期、平将門の乱で敗れ、賤民に落とされた飯母呂の人々は、京にのぼって鴨川の河原に住みつき、夜盗を働くなどして食いつないでいたが、空也上人に諭されて悔い改め、念仏踊りで生計を立てるようになった。その際、門付けに叩く鐘がなかったので鉢を叩いて歩き、「鉢屋者」と呼ばれるようになった、ということもすでに述べたが、空也上人はその後、鉢屋の集団を朝廷に売り込んで、京の治安維持のために盗賊を捕らえる仕事を与えてもらうように斡旋し、その生活を助けたという。

鉢屋衆にとつて大恩人である空也上人というのは、布教の手段として念仏を唱えながら踊る「踊念仏」を考案し、「南無阿弥陀仏」の称名と浄土教の教えを貴賤を問わず民間に広く流布した人物で、「市聖」とか「阿弥陀の聖」と尊称された。各地を放浪しながら修業する遊行僧のことを「空也聖」とか「空也僧」と呼ぶことでも判るように、その後の仏教界に多大な影響を与えた仏教史上の大物である。

鎌倉中期、その空也上人に倣って踊念仏を人々に勧めながら諸国を遊行したのが「捨聖」と尊称された一遍上人であり、その一遍上人から始まった遊行僧の教団が、時衆なのである。

空也上人に念仏踊りを授けられた鉢屋の者たちは、出雲に移つて年頭の恒例に「千秋万歳（萬歳）」を踊るようになった。「踊り」という芸能が、鉢屋と時衆を強く結びつけている。ちなみに空也聖は、瓢や鉢を叩きながら念仏や和讃（仏徳賛美の歌）を唱え、市中の家々を廻り歩いて布施を受けていたので、「鉢叩き」とも呼ばれたという。

岩阿弥は、その「鉢叩き」時衆の聖を自称しているのだが、不思議と踊らない。いや、踊るのかもしれないが、踊念仏をしてい

るところを蓮次は見たことがなかった。

蓮次が知っているのは、この僧が女犯じょぼんも酒も大好きな生臭坊主だということと、戦場で埋葬してやった武士や雑兵の持ち物を剥はいで売り、そうして集めた銭を投じて食糧や薬を買い、貧民や病者を救っているということである。寺で経をあげたり学問なひを弄なつたりしている行儀の良い僧侶と比べると、この男はよほど風変わりではあるが、「救済」が宗教者の使命であるとすれば、一本太い筋が通っている。

だからこそ蓮次はこの坊主が気に入っているのであろう。

翌朝、蓮次は吉田の城下に入った。

この城下町は、江の川の水運を使った交易の中継点である。日本海側の物産を安芸へもたらす玄関口と言ってよく、川筋の舟着き場には商家の納屋なや（倉庫）が並び、大小様々な店舗が軒を連ねている。その一等地から少し離れた辻の角に、小さいながらも薬種を扱う店がある。

蓮次がその店先を覗くと、顔見知りの手代が人懐こい笑顔を見せた。

「ああ、小西屋の弥兵衛やへえさんでしたね。久しぶりでございますねえ」

「お久しぶりでございます」

蓮次は努めて柔和な笑みを作り、深く頭を下げた。

「こちらには四月ぶりでしたでしょうか。しばらく山陰の方を廻っておりましてもので」

「ああ、そうでしたか」

「実は、また行商の荷をわけて頂こうと思ひましてね」

「はいはい、どうぞどうぞ。まずはお上がりになって」

男は愛想よく蓮次を店のなかに招き入れた。

蓮次の「表」の顔は、泉州堺の薬種問屋である「小西屋」に籍を置く弥兵衛という名の歴とした売薬商人である。この男は、頭のキレと小器用さと度胸の良さを買われ、尼子家と取引のある小西屋に身分を隠して奉公に出されていた。

堺の薬種問屋の鑑札かんさつを持っていれば、全国のどこの座でも薬の仕入れや販売ができる。身分証であると同時にほとんど万能の通行手形であり、諸国を渡り歩くのにこれほど便利なものはないのである。蓮次はすでに十年以上をこの稼業で過ごしつつ、尼子家の謀者の一人となって働いていた。

この時代、薬の行商人は、山間の寒村などでは移動病院のように重宝がられた。

医療といえ古来から巫女や僧侶の領分で、加持祈祷や民間療法に頼るしかなかったのだが、室町以降、医学が仏教から切り離されて独自の深化を遂げたこともあり、また中国の漢方薬の研究、開発が飛躍的に進み、それが堺へもたらされたこともあって、日本でも薬の効用が広く認知され、爆発的に普及し始めていた。その値段は一般には高価なものだったが、正規の学問を修めた医者はそもそも数が少なく、その診療を受けるための労力と対価に比べれば、薬を買う方が遥かに手軽で安価であったから、人々に喜ばれたのである。薬は、値段が高い割りに需要が多いから路銀が稼ぎやすい上に、荷自体が軽いので運搬の苦勞をせずに済む。病者やその家族には感謝されるから、人の信賴を得やすいという利点もある。その処方には専門知識が必要だからそれを学ばねばならないが、そこさえクリアできれば謀者が扱うにはうってつけであった。

ちなみに薬売りといえば越中富山が有名であるが、越中の売薬商人が登場するのは江戸時代の初期で、この物語のこの時期から百五十年ほど後のことである。この時代、最新の医療薬である漢方薬はほとんど輸入に頼っていたから、堺がその最大の卸し元であった。独自の私貿易を行っている大名はともかく、諸国の豪族や地侍たちによれば、漢方薬を手に入れるには堺の薬種問屋の筋に頼るしかなく、その鑑札を持つ者を関所で止めるわけにはいかなかったのである。

木箱に商品を補充した蓮次は、城下の通りに出た。

おゆきと一度繋ぎを取るか。

清神社へ足を向けてみると、不思議なことにゆきたち一行が長屋から消えていた。

色々聞き込みを試みたが、その居所が掴めない。歩き巫女は放浪してゆくことが当然で、一所に長く留まることの方が珍しいわけだから、誰に尋ねても要領を得ないのである。

吉田からは動いてねえはずだが……。

蓮次は首をひねった。

諜者としての新たな命令はゆきに出していないから、そのまま毛利氏に張り付いているはずなのである。

歩き巫女は、出雲大社への喜捨を集めて回ることもその重要な仕事で、広く諸国を廻り、かつ巫女同士がかぶらないように、それぞれ年ごとにテリトリーが設定されている。その大まかな動きは彼女らを束ねる長老たちによって把握されているから、ゆきが安芸を出て他国へ行ったというようなことはまず考えられない。あるいは住处をよそに移したただけなのかもしれないが、それなら消息を知る者がいても良さそうなものだ。

ちよつと間が空いちまったからなあ。

この夏、尼子氏は伯耆国^{ほくし}に出兵しており、蓮次を含め多くの諜者が戦場諜報や後方攪乱などの仕事に掛かりきっていた。その後、出雲で内乱が起き、経久の後継者である政久が討ち死にするという凶

事も重なったために、尼子氏としても安芸の小豪族の動静などに気を回している場合ではなかったのである。

とりあえず相合の元綱の屋敷を当たってみるか。

元綱がゆきを我が屋敷に住ませた可能性はあるだろう。

風聞によれば、元綱は三月ほど前に坂氏の縁者の娘と婚儀をしたらしい。新婚で妾まで屋敷に囲うというのも不埒な話だが、あり得ないことではない。

蓮次は、郡山の威容を右手に見ながら相合川に沿って歩いた。

元綱の屋敷までは四半刻ほどである。

田園の中に、船山を背負うようにして低い土居に囲まれた小ぶりの屋敷がある。

さて、どうするか。

裏門に回って、門扉を叩いた。

「もうし。お願いでございます」

しばらくすると、老僕が扉を開けてくれた。

その老人の顔はよく見知っている。

市兵衛爺。

探る手間がはぶけた。

「みどもは薬の行商を致しておる者でございます、泉州堺の薬種問屋、小西屋の弥兵衛と申す旅商人あきんどでございます。頭痛あたまいた、歯痛はいた、熱取り、腹下しなど、唐土渡りの様々な漢方薬を扱っております、もしご入り用がございましたら、お申し付けいただければと思ひまして推参致した次第でございます」

蓮次の顔を見た市兵衛は、わずかに驚いた風情を見せたが、すぐに表情を消した。

「ほお、左様でございましたか。薬の行商を」

今夜亥いの刻（午後十時）、その河原で。

蓮次の小声に、老人は眼だけで頷いた。

「生憎あいにくと当家の主人はご不在でございましたなあ。お方さまにお取り次ぎ致しましょうか」

「ああ、いえいえ」

すでに目的は達している。

「そういうことでしたら、後日またあらためてお伺いしますので

」

蓮次は深く頭を下げ、踵を返した。

その夜、蓮次は相合川の河原に降りた。

狭い河原には腰丈ほどの葦あしが生い茂り、隠れる場所はいくらでもある。川魚を獲る漁師の粗末な小屋が二、三見える他に人家はなく、月光の他に灯りもない。

時折強い川風が吹いて、葦の原がざわめいた。

四半刻ほど待ったであろうか。市兵衛老人らしい人影が川辺に現れた。

蓮次が近づいてゆくと、老人の方も気付いたらしい、こちらに向かって歩いて来た。

二人は葦に沈み込むように座った。

「後につけられてねえな？」

蓮次が質すと、

「大丈夫じゃろうと思うがな」

老人が背後を振り返りながら応えた。

「爺さんが元綱の屋敷にいるたあ、ちと驚いたぜ。おゆきもあそこにいるのか？」

「いざっしやる」

「妾として囲われたか」

「おゆきさまは、四朗さまの妻めにおなりなされたわ」

「なんだと？」

蓮次は仰天した。

「すると、坂広秀の縁者の娘ってのは、おゆきのことだったのか？」

探しても判らないわけである。河原者のゆきを妻として迎えるために、その素性を隠したのであろう。たとえゆきの顔を見知った者でも、「元綱の妻」の顔を見た者でなければ、両者が同一人物とは判らない。その秘密を知る者はごく限られた人間だけであろうし、緘口令も敷かれているに違いない。吉田の領民あたりがそれを知らなかったのも当然である。

「おゆきさまは身籠っておられる」

その言葉に、蓮次は二度驚いた。

「元綱の子をか？」

老人は鼻先で笑った。

「それは愚問じゃわな。男親などと申すものは、契った男の中から女が名指して決めるものよ。おゆきさまが四朗さまのお子じゃと申せば、父御とくごが四朗さまの他にあらうはずもない」

蓮次はまだ驚きが覚めず、言葉を失っている。

「身重で旅などは出来んでな。いずれ何処かに身を落ち着けねばならなんだ。相合のお屋敷に置いていただけるとなつたは、むしろ良かったと思つておるよ」

長い沈黙があった。

風が止み、川のせせらぎと虫の音だけが聞こえる。

月が雲間に隠れ、闇が来た。

「……あの女は、アルキの稼業を抜けて、武士の妻女になるつもりなのか？」

それは、世間から「人間以下」と位置づけられている河原者が、「人間」へ昇格するという重大な意味がある。

「さて。それはおゆきさまのお気持ち次第じゃろうよ。このまま四朗さまの妻めとして生きてゆかれるのかもしれないし、旅の空が恋しゆうなれば、また歩き始めるのかもしれない。いずれ、おゆきさまが心安らかに暮らしてゆけるのであれば、この年寄りにはどちらでも良

いことじゃ」

市兵衛老人は、ゆきがまだほんの小娘の頃から共に旅をし、従者とはいえ祖父のような気持ちをもってその成長を見守り続けてきた。ゆきが何処に棲みつこうが、巫女を続けようが廃業しようが、ゆきが幸せでさえあれば、それでいいと思っっている。

「爺さんの忠義心は解つたがよ、出雲の社家への義理はねえのか？ あんたもあの女も、杵築大社の賽銭で飯を食わせてもらってきたんだろ」

「義理というなら、お前さんこそ、出雲のお屋形に忠義顔する義理はあるまいよ。お前さんらのお頭目は、河原乞食から人らしゅうしてもらつた大恩があるので、孫子の代まで忠義を尽くさねばならんのかもしれんが、お前さんは侍じゃあなかるう。ただの鉢屋だ。わしらと同じ河原乞食だらうさ」

「まあなあ」

蓮次はガリガリと頭を掻いた。

「だが、同じ河原者でも、鉢屋は巫女とは違つてな。お頭目を裏切つたり仲間を抜けたりすりやあ殺されるのが掟だ。抜けたところで暮らしていける当てもねえしな」

「因果な稼業よな」

老人は憐みを込めた目で若者を見た。

「因果でない稼業なんぞ、この世にねえだらうよ。巫女は公界、侍

は修羅道、皮屋や猟師は殺生で地獄必定だ」

虚無的な笑みを浮かべた蓮次は、

「様子は解った。またそのうち世話になるぜ」

と一言残し、川下に向けて歩き去った。

第四章 吹き荒れる腥風 破局の萌芽

永正十六年（1519）が明けた。

松が取れた正月八日、郡山城では最初の評定を行うことが慣例になっていた。その年の年貢や徴税、労役などについて話し合うためである。

その日、ゆきは早朝に夫を送り出したのだが、どういいうわけか元綱は、昼さえ待たずに早々と相合の屋敷に帰って来た。

「今日はまたずいぶんとお早いお帰りでございましたね」

「ああ、評定どころじゃなくなってるな」

元綱は明らかに不機嫌そうな顔でそう言った。

「太郎左たろうざと井上河内かわけが広間で喧嘩を始めおつたのよ。お互いに脇差を掴んで、あわや殺し合いという大騒ぎだ」

「殺し合いって。お二人ともご当家の宿老おとなではございませんか。……」

喧嘩の原因は、高尚な理想のぶつかり合いでも相容れぬ思想的な衝突でもない。詳細を聞いて、ゆきは驚くよりむしろ呆れた。

この発端は、井上一族の長老である井上元兼が、広間での席次を乱し、太郎左衛門 渡辺勝すけのり が座るべき席に勝手に座ったという、ただそれだけのことだったのである。

ただし、この事件にはその前段があった。

正月元日に行われた新年の参賀でのことである。

元日は、重臣と譜代家臣たちが主君である幸松丸に年頭の挨拶を

し、そのまま宴席になるのが毛利家の慣例であった。ちなみに二日は一門衆の祝宴、三日は休みで、四日に新付しんぷ（新参者）の家臣たちのための祝宴が開かれる。

大広間の上座に五歳になった幸松丸が座り、そのやや後ろには母であるお夕が控え、居並んだ重臣たちが順番に進み出て主君に賀詞を奉ずる。この挨拶の順番も、重臣の序列によって決められている。執権の志道広良、福原広俊・貞俊親子、坂広時・広秀親子と順序良く進んでいったのだが、譜代家臣の筆頭である渡辺勝わたべかつの番が回って来た時、井上元兼が順番を無視して主君の前に進み出たのである。

当然だが、重臣たちは仰天し、後回しにされた渡辺勝は怒声をあげた。

「河内殿かわち、なにゆえ順序を乱される！」

「おお、渡辺殿か。わしの番ではなかったかな。これはとんだ粗相をした。どうも大晦日の酒が抜けておらなんだようじゃ」

主君の前に座った井上元兼は、赤ら顔を歪めて笑った。

「まあ、今さら席に戻ってやり直すのも面倒な上に滑稽じゃ。此度はまずまず堪えてくださらんかな」

おめでたい年頭拝賀の最中ということもあり、この時は渡辺勝も怒りを収めたのだが、それに続いて今度が二度目なのである。

当然、渡辺勝は激怒し、井上元兼に掴みかからんばかりに詰め寄った。

しかし、井上元兼はもともと確信犯だった。この日は凶太く居直り、「有田の合戦」での井上党の活躍とその被害の甚大さを声高に述べ、これに対する恩賞の薄さを言い立てたのである。

「我ら井上の一族の者たちは、ご当家のため、幸松丸さまのため、身命を賭して戦った。決して恩賞のために働いたわけではござらぬゆえ、生き残った我らのことはよい。しかし、あの合戦で一族にどれほどの人死に出たとお思いか。その家族には乳飲み子を抱えた寡婦もあり、働き手を喪った老母もある。その者たちは何ひとつ報われておらぬ。未だご加増を受けておらぬゆえ、我らとしてもその者らに何もしてやれぬ」

実際、有田合戦における井上党の損害は他の族党に比べて突出しており、百人を超える死者とそれ以上の負傷者を出していた。厚い恩賞が下されるのが当然であったが、有田合戦は吉川氏の有田城を救援する戦いであり、その勝利で領地が大きく増えるということもなかったから、毛利家としても台所事情が苦しく、大きな加増がでなかつたのである。

主君を後見する多治比元就は、有田合戦が終わるや、すぐさま幸松丸の代筆をして大量の感状を発行し、薄報の武士たちの感情面をなだめるよう努めたし、家政を預かる志道広良は、昨年一年間に限つて井上党の普請役（労働義務）を免除し、棟別銭（宅地税）や諸役（雑税）を減免するなどして加増に代え、どうにか帳尻を合わせしてお茶を濁していた。

しかし、年度が変われば、一年限りの優遇措置は終わる。

「このままでは、討ち死にした者は死に損であり、遺族の者たちは泣くに泣けぬ。お家に適当な欠所（空いた領地）がないと申されるなら、せめて我ら一族への扱いを重うでもしてもらわぬことには、釣り合わせではないか」

井上元兼は、加増が行われるまで税の優遇措置を延長するよう求め、それができぬなら、せめて井上党を譜代家臣として扱うよう要求した。

毛利家の当主である幸松丸はまだたった五歳で、家中をまとめられるはずもない。重臣の合議で家政を執とっている現状では、十五老臣のなかで四つもの席を占める井上党の発言力は強力であった。ゴネれば無理も通るはずと、井上元兼は夕力をくくっていたのである。要するに、主家からさらなる利益を引き出すための強弁であった。

それはそれとしても、人間のなかには「名誉」を命より重しとする者がある。序列を奪われるのは己の「価値」が低下することと同義であり、渡辺勝には耐えられるものではなかった。

「それとこれとは話の筋が違う！ たかだかこの数十年の新付に過ぎぬ井上ごときが、譜代の中でも筆頭かしらたるこのわしの上座に座ろうというのか！」

勝ひんぐすが怒鳴ると、

「井上ごときとぬかしおつたな！」

赫怒かくどした井上元兼は渡辺勝の胸倉を掴み、掴まれた渡辺勝は元兼を突き飛ばす。離れた両者は睨みあって脇差に手を掛けた。左右の者が慌ててその身体を押さえたが、他の井上党の老臣たちまでが殺気立ち、譜代家臣で血の気の多い者たちは渡辺側に加勢する気配を見せた。

元綱はこの手の政治的な泥仕合が大嫌いで、最初は無視を決め込んでいたのだが、両者が殺し合いをしそうだとなれば黙っているわけにもいかず、渡辺勝を背中から羽交い締めにして力づくで広間から引きずり出した。一門衆の老臣たちも間に割って入り、鎮静に回ったのでどうにか事なきを得たが、評定はそのままお開きとなった。新年早々、家中に大きなしこりを残したのである。

「太郎左は嵯峨源氏の末裔すえでな。自尊の心がやたらと強い。いったん怒らせると手がつけられんのだ」

元綱は渋い顔で腕を組んだ。

ゆきは武家には詳しくないから、話が見えず、首を傾げた。

「嵯峨源氏と申しますと？」

「ああ、知らぬか。源頼光みなもとのみつひは知っておるか？」

「えっと、たしか大江山の酒吞童子しゅてんどうじとか京の土蜘蛛つちぐへとか、怪物退治をなされた方でしたよね、大昔に」

御伽草子で語られる伝説の豪傑である。その名くらいは子供でも知っている。

「そうそう。その頼光の家来 四天王の筆頭わたなべのつなが、渡辺綱わたなべのつなだ。嵯峨源氏・渡辺党の棟梁むねらぎだな。太郎左はその血を継いでる。一字の名乗りがその証しだ」

漢字一字の諱いみなというのは珍しいが、嵯峨源氏は初代・融しゆめい以来それが慣例で、その嫡流たる渡辺党の後裔には一字名を用いる者が多いのだという。

「渡辺綱といえは鬼をも斬ったという豪勇だろう。先祖の誉ほまれのことでもないんだろうが、太郎左のヤツも、いったん『敵』と思えば、相手が鬼だろうが仏だろうが斬って捨てるというような気の荒さがある。普段は温厚だし、ものの解らぬ男でもないんだがな。思い込みが強いというか、執念深いというか、怒らせると厄介なんだ。まあ、そんな男だからこそ戦場では役にも立つんだが」

「それにしましても……」

ゆきはやや当惑している。

「広間で座る場所というのは、もちろん大事なものでございましょうけれど、お命を取る取らぬというほどにまで重いものなのでございましょうか」

「武士にとってはな。名は命より重いさ」

「席次が名なのですか？」

このあたり、ゆきにはどうも解りにくい。

渡辺勝の怒りを理解してやるには、少しばかり解説が必要であるう。

毛利氏の家臣団は、おおむね三種のグループに大別される。

ひとつは、安芸・毛利氏の初代である毛利時親ときちかが安芸に下向した際、これに従って安芸にやって来た郎党たちの子孫である。渡辺氏、赤川氏、栗屋氏あわや、飯田氏などがこれに当たり、この時代の毛利家において「譜代の家臣」と言えばこのグループを指す。

次のグループは、歴代の毛利家当主の兄弟が分家して枝葉のように広がった一門衆である。いずれも毛利本家から分かれた庶家で、福原氏、坂氏、桂氏、志道氏、長屋氏、平佐氏、兼重氏かねしげなどがあり、多治比元就などもここに含まれる。いわば親類縁者だが、家臣としての代が重なっている家については「尊貴な譜代家臣」と考えてもいいし、庶家からさらに分かれた家については一門の範疇はんちゆうに含めない場合もある。

最後のグループは、もともと安芸に暮らしていた豪族や地侍が、毛利氏の傘下に入って家臣化した者たちである。井上氏、国司氏くにし、

中村氏などがそれで、臣従した事情も勢力の大きさもそれぞれに違うが、いずれも毛利家臣としての年月が浅いだけに、身内というより外様（いづま）という匂いが強い。

つまり、同じ「十五人の宿老」の中に名を連ねていても、「譜代の重臣」である渡辺勝と「新付」の井上元兼では、家中における毛並という点で大きな隔たりがあった。

「譜代」の家に生まれた者には、先祖代々、二百年以上にわたって毛利家のために身を捧げて尽くしてきたという強烈な誇りがある。

「自分たちは創業の頃から主家と苦楽を共にし、今日まで毛利家を支え続けてきたのだ。動員力で新付の豪族たちに及ばなくとも、歴代積み重ねて来た主家への貢献度では自分たちが大きく上回っている」

そういう自負である。その想いがあればこそ、貧苦にも文句ひとつ言わずに耐えたし、主家が危機に瀕すれば一蓮托生のつもりで命を捨てて働いてきた。広い意味での「主筋」に当たる一門衆には一歩譲るとしても、最近になって毛利家に加わったような新参者に大きな顔をされるのは、感情的に許せないのである。

井上一族は、元綱の祖父・毛利豊元（とよもと）の時代に毛利から嫁を迎え、同盟者としてその傘下に入った。毛利家臣となってからすでに半世紀以上の歳月が流れているのだが、それでも「譜代」の人間から見れば「新付」ということに変わりはない。まして勝（さく）の渡辺家は譜代家臣の中でも随一の家格を誇っており、当然ながらすべての譜代衆を代表してその名誉を背負う立場にある。こと「家格」という点において、「新付」の下風に立つことなどできるわけがなかった。

しかし、井上元兼にも彼なりの言い分があるであろう。

井上党は毛利家中で最大の動員力を誇り、合戦においては常に先手となって目覚ましく働き、もっとも多くの血を流して主家を援けてきた。その貢献は巨大であり、毛利豊元の時代から、弘元、興元、

幸松丸と、すでに四代にわたって毛利家に尽くしているという実績をも考え合わせれば、そろそろ譜代並みの扱いを受けても罰は当たらぬであろう。一門衆には半歩譲るとしても、家臣のなかでの序列はもつと優遇されて良いはずだ。

我らをいつまで外様扱いする気だ。

そういう想いが、常に井上一族の人間の不満になっている。元兼は井上一族の長老であり、その利益を代表せねばならぬ立場だから、彼の傲岸さも理由がないわけではなかったのである。

「兄上がご存命であつた頃は、ここまでひどい争いは起こつたことがなかつたのだがな……」

元綱が渋い顔で言った。

井上元兼の狷介な性格は昨日今日始まつた話ではないが、長兄の興元が生きていた頃は、まだその手綱が利いていた。興元は喧嘩口論を捌くのが巧く、訴訟事にも一貫して公正無私な姿勢を崩さなかつたから、井上一族の者たちをも含めて家臣団からの信望が篤かつた。その裁定はそのまま家中のコンセンサスになり、さしもの井上元兼も理不尽な横車を押し通すことはできなかつたのである。

渋い顔をしているのは、なにも元綱ばかりではない。

郡山城の一室では、多治比元就と志道広良が苦虫でも噛み潰したような顔を突き合わせていた。

「新年早々、困つたことになりましたな」

志道広良が暗い声で言い、

「兩人とも我が強いからな……」

元就がため息まじりに応えた。

「井上河内の言い分にも理がないわけではないが、やり方が無法に過ぎたな。あれでは太郎左衛門が怒るのも当然だ」

「理がどれほどあるにしても、井上党の普請役やら諸役しよえきやらを今年も免除するわけには参りませんぞ。ここで甘い顔を見せれば、この先、来年も再来年も同じように無理をかぶせて来ぬとも限りませぬ。家中の振りあいの上からも、ここは思案のしどころでござる」

「だが、恩賞に宛て行つような土地はないのだらう」

「それはその通りでござるが、ご加増を我慢しておるのは何も井上だけではありませぬでな。井上だけに許せば、他の者たちが収まりますまい」

人は、貧苦は我慢ができて、不公平には耐えられないのである。恩賞の不公平は武門にとって最悪の害毒と言ってよく、元就や志道広良が井上党だけを優遇したように受け取られれば、家中の信頼関係が立ちゆかなくなるばかりか、家臣たちは気持ちを腐らせ、真面目に奉公する意欲を失い切るであろう。

「兄上がいらしてくれただ頃は、このような気苦労を感じることなどなかったのだがな。合議で家政をとってゆくというのも色々難しいものだ」

元就は長嘆息した。

幼少の幸松丸に興元の代わりが務まるはずもない。後見役の元就や、家政を預かる志道広良は、幼君の代理者として群臣に臨んでいるわけで、依怙えこや好き嫌いで政治を行っていると思われることだけは絶対に避けねばならなかった。

それにしても、困った。

「譜代」の家に生まれた者たちにはこだわりや誇りがあり、「新付」である井上党にはわだかまりや憤りがある。元就は「一門」の側に生まれた人間で、どちらの心情に寄り添うことも難しかった。その元就の感覚で言えば、「譜代」という名誉を与えてやるだけで井上党の気が済むのなら、安いものだという気分がないでもない。しかし、それをすれば渡辺勝をはじめ譜代衆が黙ってないであろう。

あちらを立てればこちらが立たぬ……。

井上元兼と渡辺勝の双方を満足させ、かつ八方から不平が出ぬような妙案があるうとは、元就には思えなかった。もし根本的な解決策があるとすれば、毛利家が領土を拡大し、家来たちに公平で厚い恩賞を宛て行うことの他にないであろう。もちろんそれは現状では不可能なのだが、しかし、元就や広良は評論家ではなく実務者だから、今すぐにも何らかの結論を出し、処置を決めねばならない。

志道広良は、原則論に戻ってこう言った。

「喧嘩は両成敗でなければなりません。井上、渡辺の両人は、評定の場で喧嘩口論におよび、脇差にまで手を掛け申した。この事をそのままにしてはおけません。まず両人の序列を降格させましょう」

そのケジメをつけておかないと、今後、評定の威厳が保てなくなる。

「井上党の扱いについては、評定で正式に議題として取り上げ、衆議によって決することにすればどうでござろうかな」

井上一族は、宿老に四人、重臣にも数名が名を連ねるだけでなく、家中の要路の者たちと嫁取り、婿取り、養子縁組などで繋がっており、味方が多いから、その影響力は実に大きかった。そのまま衆議に諮れば、おそらく井上元兼の主張が通るであろう。志道広良はそ

ここまで見切っていたが、あえて渡辺勝の側に手心を加えてやることはしなかった。「譜代の名誉」より「井上党の武力」を優先したと解釈できぬこともない。それが正解かどうかは広良にも判らなかつたが、井上党との軋轢あつれきは避けたいというのが本音であつた。

志道広良は、執権として家中の融和を第一に考えている。幼君に代わつて家政を預かるこの男にしてみれば、「譜代」であろうが「新付」であろうが、幸松丸の役に立つてくれる者こそが「良臣」であり、家臣としての年功で「良臣」を区別せねばならぬ理由を見いだせなかつた。広良も毛利本家の「一門」であり、譜代衆とはそもそも立場が違ふのである。

有田合戦の恩賞に不満を持つ者は少なくないから、この問題を蒸し返されると家中に様々な悪影響が出るのは間違いない。井上党だけを優遇するなどでは話ではなく、それができぬとすれば、井上元兼のもうひとつの要求を呑むしか選択肢はなかつた。それが「政治判断」というものであつたらう。

「衆議で決めるか・・・」

「この際、皆の肚のなかに溜まつておるものを全部吐き出させてやるのが宜しかろうと存ずる。どういふ結果になるにしても、その方が後に遺恨が残らぬのではござるまいか」

「なるほど。そうかもしれない・・・」

元就はまだ若く、この問題に対して確たる自論が持てずにいる。老練な志道広良の判断に任せることにした。

数日後、毛利幸松丸の名で二人に処分が下つた。

渡辺勝は、十五老臣の中での序列を三番から四番へ降格され、繰り代わつて坂広秀が三番に上ることになった。一方、騒ぎの原因を作つた井上元兼は、井上党の宿老・四人の中で最下位へ 具体的

には八番から十三番へと下がった。序列の昇格、降格といつても、広間での席次などが変わるといっただけのことで、「名誉」以外に実害はない。

さらに井上党の処遇に対する評定が持たれ、喧々諤々の議論の末、以後は「譜代家臣」を名乗って良いということが正式に定められた。実質的に何が変わるわけでもないが、格式において渡辺らと同等の扱いを受けられるようになったということである。渡辺勝ら譜代の重臣たちは頑強に抵抗したが、最後は多数決で敗れ、口を噤まざるを得なかった。

おのれ……！

渡辺勝にすれば、井上元兼も憎かったが、それよりむしろ井上党の味方に回った一門衆の面々が腹立たしかったであろう。主家の一門の者たちが譜代衆を擁護してくれねば、なんのためにこれまで主家に尽くしてきたか判らぬではないか。

その批判の矛先は、執権の志道広良に向けられた。

「先祖代々ご当家を支え続けてきた譜代の臣は、お家の宝でござるぞ！ それを大事にせず、新付の者を臍履するとは片手落ちもいところじゃ。日ごろの執権殿とも思えぬ不見識よ！」

広良は能面のように表情を消し、淡々と答えた。

「わしは、いずれにも、依怙も臍履もしたつもりはござらんよ。譜代であれ新付であれ、ご当家に仕える臣であるということに変わりはあるまい」

「これはしたり！ 譜代も外様も同じと申されるのか！」

「ご幼少の幸松丸さまがご立派に成人あるまで、家政は合議によって行つと定めてある。衆議で決したことを皆に守らせるのが、わし

の務めじゃ。そうでなくば、お家は立ちゆかぬ。そもそも忠義とは、主人のおため良かれと思つ心でござろう。渡辺殿に譜代としての忠義がおりなら、我を張る前に、それが幸松丸さまのおために良いのか悪いのか、そこをまずお考えくだされ。重臣同士がいがみ合い、家中の和を乱すことは、ご当家の敵を利するだけではござらんか」

「ぬ……！」

広良は論点をすり替えているのだが、主人の名を出され、主人のために重臣同士が争つようなことはやめよ、と言われてしまつと、反論のしようがない。渡辺勝は眼を怒らせたが、やがて肩を落とす、悄然と引き下がっていった。

元綱は、終始中立の立場で、どちらの味方もしなかった。

まずまず穏当な結果になつたか。

感情的には渡辺勝がやや哀れにも思えたが、結果として渡辺勝は相変わらず譜代衆の筆頭であり、井上党を譜代として扱うことにはなつたものの、井上元兼の序列は大きく下がっている。措置として片手落ちとまでは言えぬであろう。

それにしても、くだらぬことじゃ。

こういふ家中の小政治が、元綱は煩わしくてしょうがない。

さて。

雪化粧を終えた相合の屋敷では、ゆきが産み月を迎えていた。

ゆきは仲間の巫女の出産には何度か立ち会つたことがあり、その助産をした経験もあるが、知識として知っているのと実際に体験するのではやはり大違いだった。自分の裡なかで胎動する新たな命を実感するのは愉たのしいものだったが、たびたびやってくる腹痛やおう吐感といった体調不良には閉口させられたし、昨年の暮れ頃から腰痛がひどく、年末年始の何かと忙しい時期に動くことさえ億劫であつ

た。
そんなゆきを、義母と義妹が献身的と言えるほどの入れ込みで支えてくれている。

「大丈夫ですよ。女手は足りてるのですから、何も心配はいりません」

義母となった相合の方は、機智に富み、ユーモアのセンスもあり、ゆきとは妙に相性が良い。出産という大業を四度も経験した先達であるだけに、実に頼りになった。情に篤く面倒見の良い女で、それがややお節介に映ることもあって、そのあたりを元綱は煙たがっているようだが、ゆきにとっては仕えやすい姑であった。

一方、義妹のお竹は十六の娘盛りで、いたって屈託がない。

「お義姉さまのお腹、本当に大きくなりましたねえ」

などと言いつつ、ゆきの腹を撫でたりする。

「でも、ここに子供が入っているなんて、どうしても思えませんわ。この正月うちには生まれるのかしら」

「そうね。たぶんあと半月くらいで出てくると思うのだけれど」

十月十日で計算するなら、今月の中旬から下旬がおよその予定日ということになるはずだった。

「弟か妹が生まれるような気分なのです。本当に楽しみだわ」

門地の低い家に生まれた相合の方に比べ、毛利家の姫として育てられたお竹には下賤な河原者に対する偏見が強かったのだが、しか

し、実際にゆきに接し、その教養の深さを知るに及んで、それまでの認識をすっかり改めていた。今ではゆきを尊敬し、和歌や舞いの手ほどきまで受けている。

「お義姉さまは男の子と女の子とどちらが良いのですか？」

「どちらでも。神仏がお決めになることですもの」

笑顔でそう答えながらも、生まれて来る子が男であるということ、ゆきは疑問の余地なく信じていた。なぜと言えば、

清神社の神域で授かった子ですもの。

素戔嗚尊が天照大神との誓約によって生み出した五柱の神は、すべて男神なのである。ゆきが神女として素戔嗚尊の神力に感応したとするなら、子は男でなければならぬであろう。そして、生まれたのが本当に男子であったとすれば、その子には必ず神の霊力が備わっているはずだ。

ゆきが属した出雲大社の祭神は大国主神で、これは素戔嗚尊の子、あるいは五世の孫とされている。八岐大蛇退治の伝説でも解る通り、素戔嗚尊は出雲の神話伝承の中核を成す重要な神であり、出雲の巫女であったゆきにとってみれば、思い入れが深くなるのも当然であつたろう。

それからしばらく経ったある日、尋常でない腹痛がゆきを襲った。予想よりやや早く陣痛が始まったものらしい。

「う、生まれるのか!？」

こつこついう場面に男は無力なもので、脂汗を流して苦しむ妻を見つ、元綱はひたすら周章狼狽するのみであつた。

一方、相合の方の対応は落ち着き払っていた。

「さあ、男は部屋から出てゆきなさい。しばらく時間が掛かります。場合によっては半日経つても出て来ないかもしれませんからね。気を楽にして、気長にお待ちなさい。無事に済みましたら、誰かを呼びにやりますから、それまで決して部屋に入ってはなりませんよ」

医僧や取り上げ婆（産婆）と共に産を介助し、実際に子を取り上げたのも産湯を使わせたのも母であったという。

ゆきの出産は、初産にしては比較的楽な部類であったろう。それなりの苦しみも味わったが、耐えられぬほどの苦痛に満ちたものはなかった。それでも、無事に子を産み落とし、その産声を聞いた時には、恍惚とした達成感を味わうことができた。

「よく頑張りましたね。元気な男の子ですよ」

相合の方が抱いた産着の中で、珠たまのようなと形容するに相応しい丸々と太った赤子が、懸命に泣き声をあげていた。

それを見たとき、ゆきの目には自然と涙が溢れてきた。

母子ともに健康であったこと、生まれた子が男であったことを、元綱は素直に喜んだ。周囲の者たちが心からこれを祝福したことは言うまでもない。

報せを聞きつけた者たちが集まって、その夜はそのまま祝宴となった。

「おめでとつござりまする！」

近侍の若者たちが叫び、

「いやいや、まことにめでたい」

坂広秀が笑顔で祝杯をあげた。

「若、和子のお名を考えねばなりませんな」

と言ったのは、渡辺勝すべのである。

「ああ、それならもう決まっている。俺の最初の男の子だ。幼名は『鶴かくじゅまる寿丸』しかあるまい」

このことは、武家にとって非常に重要な意味を含んでいる。なぜなら、武士が自分の幼名を子に与えるのは、その子を相続権を有する嫡子と認めたことになるからである。側室　しかも卑賤の女が生んだ子を嫡子にするというのは、まず異例と言えるであろう。

「お待ちください、それはご浅慮と申すものじゃ」

渡辺勝が慌てて反対した。

「若は今、喜びで頭が一杯でござろうから、止むを得ぬところもありましょうが。脇腹の子を嫡子と決めてしまえば、後々ご正室にお子が生まれたときに、必ず困ったことになりますぞ。若の幼名はひとまず柵にあげておいて、別のお名を与えるのがよろしゅうござろう」

「先々問題になると言つなら、正妻を置かねば済む話だ」

「またそのようなことを」

「誰の腹から生まれようが、俺の子であることに違いはあるまい」

たとえこの先、正室を迎え、その正室に男子が生まれたとしても

あるいはさらに別の側室や妾を持ち、子をませたとしても

母親の身分で子に序列を付けるようなつもりは元綱にはなかった。生まれた順にしたが遵したがつて、長男は長男、次男は次男として、嫡子も庶子も平等に扱ってゆくつもりだったのである。武士でこういう考え方は少数派だが、実例がないわけでもない。庶子として生まれた元綱にとってみれば、それがごく自然な結論だった。

「名は鶴寿丸を措いてない」

元綱は我意を貫き、和子はその日から鶴寿丸と呼ばれることになった。

その翌日は、家中の武士や近所の百姓、吉田の有力商人など祝い客が多く訪れ、屋敷は賑やかであった。

さらにその七日後、ゆきと鶴寿丸は産褥なまじやくを払い、七夜の祝いで近所の百姓たちに餅を配り、改めて祝宴を張った。

正式の祝いの席だから、この日は毛利本家の重臣たちもそれぞれ顔を出しに来たし、兄の元就も酒樽を土産にやって来てくれた。

「ほう、鶴寿丸と名付けたか」

元就はさほど驚かず、穏やかに微笑した。

「お前らしいな」

「アレが清神社で素戔すさ鳴尊のみかみの夢を見たと申していた。それで生まれた子だからな」

「靈夢か。ならば必ず嘉よいことがあるう。鶴寿丸は将来、天下に知られる武将になるかもしれんな」

「そうあつてもらいたいものだ」

元就は酒を嗜まないが、祝いの席ということで形ばかり盃に酒を満たし、その縁を舐めるように飲み、わずかな量で顔を赤くしていた。

「妻を得たのは私の方がわずかに早かったが、子ではお前に先を越されたか」

「なんの。義姉上にもすでに子が授かったと聞いているぞ」

「ご懐妊の兆しあり、という噂を、元綱は小耳に挟んでいた。

「いつごろ生まれるのだ？」

「まだ半年ほどは先だろう。お前のところにあやかつて、男児おのこが生まれて欲しいものだ」

そう言つて、元就は朗らかに笑つた。

第四章 吹き荒れる腥風 穴戸氏の武威

安芸の東隣にある備後という国は、政情が少々ややこしい。

この時代、備後の守護は山名氏であったが、最盛期には十一ヶ国の守護を兼ね、日本の六分の一を支配したというこの名門守護大名も、「応仁の乱」で本家と庶家が割れて争ったために弱体化し、大内氏、尼子氏、赤松氏、浦上氏などに領国を次々と蚕食され、あるいは地元の豪族たちが支配を脱して独立するなどしたために、領国の大半でその実権を失い、わずかに但馬、因幡、伯耆の三国を保持するまでに衰微していた。

守護の支配が利かなくなつた備後では、守護代を務めた山内氏（山内首藤氏）が北中部に大きな威勢を持つようになり、南部には守護・山名氏の庶家と桓武平氏の名門・杉原氏が勢力を張つた。

備後北中部には、三吉氏、和智氏、多賀山氏、宮氏、田総氏、馬屋原氏、有福氏などの豪族がある。これらはもちろん一枚岩ではないが、勢力の大きさと門地の尊貴さにおいて山内氏が頭ひとつ抜けており、彼らの盟主のようになっていたわけである。

ところで、安芸の北部において備後と境目を接しているのは、高橋氏、穴戸氏、毛利氏である。このうち高橋氏は明確に備後への侵出を企図しており、その高橋氏と同盟している毛利氏も、高橋氏に引きずられる形で備後の国衆とはたびたび兵火を交えていた。

一方、穴戸氏は先代の頃までは備後とは不仲だったのだが、穴戸元源の代になつて山内氏の当主・山内直通の娘を嫡子・元家の妻に迎え、これと同盟した。穴戸氏は膨張を続ける高橋氏によつて常に領土を脅かされており、これに対抗するために備後の山内氏の傘下に入り、敵の敵を味方につけたわけである。

大内義興が上洛戦を起こしたときは、山内氏はこれに協力し、備後の豪族たちも多くがそれに従つた。安芸と備後の国衆が同じ旗の元に属したわけで、芸・備の境目でも一時的に兵火が途絶えていた

のだが、しかし、尼子経久が大内義興と敵対し、備後に触手を伸ばし始めると、山内氏はいち早く尼子氏と婚姻関係を結び、これと同盟した。以来、備後北中部は尼子氏の影響下にあり、宍戸氏を含め山内氏傘下の豪族たちも尼子方についている。

芸備国境で高橋氏・毛利氏と実際に戦っているのは、山内氏ではなく、その傘下の三吉氏である。

当主を新兵衛尉 政高まさたかといい、その嫡子を隆亮たかすけという。両者とも年齢が確定できる資料がないのだが、子の隆亮は七十年後の天正十六年（1588）まで生きているから、没したのが仮に八十年代であったとすれば、このとき十代の少年ということになる。父の政高はこの二十五年後にも現役であった証拠せきこの起誓文きしやもんが遺のこっているので、このとき三十代と考えるのが無難であろう。

三吉氏は三次盆地みよし東方の比叡尾山城ひえおやまに本拠を置き、備後北西部に五万石ほどの勢力を持つ大豪族であった。兵の動員力で言えば毛利氏の二倍以上を集めることができる。ちなみにこの時代、三次は備後でも有数の商業都市で、数百軒の商家が軒を並べていたという。これが三吉氏の富強の種であったろう。

その三吉氏は、安芸の高橋氏とはとにかく仲が悪い。

膨張を続ける高橋氏は古くから東の三次盆地への侵出を企てていて、三吉氏との戦いを繰り返していた。四年前にはその合戦で高橋久光の嫡子であり先代当主であった元光が討ち死にしてさえおり、高橋氏にすれば三吉氏はまさに仇敵であったろう。合戦はほとんど年中行事のようになっていて、毎年数回は銚を交えているのだが、この永正十六年（1519）もその例外ではなかった。

雪が融け、戦火の季節になると、さっそく高橋久光が郡山城にやっつて来たのである。

「明後日あした、我らは三吉の加井妻城かこいを攻める」

毛利家の重臣たちを集め、久光は開口一番そう言った。

加井妻城というのは安芸と備後の境目にある山城で、別名を青屋城あおやとも言い、三吉氏の重臣・青屋友梅あおやともへという入道武将が守っている。支城の茶臼城、勝山城と共に三次盆地みやじへの入口を扼やくする重要拠点であり、青屋友梅はその門番と言っている。地理的には郡山城から北東へ四里ほど。宍戸氏の五龍城からは二里ばかり北にある。

「毛利は甲立に兵を出し、宍戸を釘付けにしてみたい」

この要請が、久光の主たる目的であった。

宍戸氏は三吉氏と強い同盟関係にあるが、毛利軍が南から甲立へ攻め入れれば、宍戸氏も北方の加井妻城などに援軍を出している場合ではなくなる。宍戸氏の援軍が得られねば、三吉方の戦力は半減するのである。先代・興元の時代から何度も繰り返されているお馴染みの戦略であった。

「久々の合戦あいくだな」

元綱は眼を輝かせた。鎧を着るのは、昨年の晩秋に宍戸氏と小競り合いをして以来である。

嬉々としている御曹司をことさら無視し、

「百姓に迷惑を掛けとうはござらぬゆえ、田植えの時期までには済ませてもらいたいものですな」

と志道広良が思案顔で釘を刺した。

「そのあたりは我らも心得ておる。長引くようなら兵を退くゆえ、懸念は無用よ」

久光は気軽な口調で返した。

この老人にしても、なにも乾坤一擲の戦いを仕掛けているつもりはない。久光が合戦を繰り返しているのは、三吉氏を打倒し、三次盆地を手に入れたという大目標もあるにせよ、より現実的には、大内方として尼子方の敵と戦う姿を見せることで国人一揆のなかでの高橋氏の存在感を際立たせると共に、嫡孫の興光おきみつに采配の振り方を教え、戦場経験を積ませ、武勇の実績を作ってやろうというような思惑が強かったであろう。

高橋氏が加井妻城を奪えば、三次盆地を常に脅かされる形勢になるから、三吉氏としても守勢に立たざるを得なくなる。三次と甲立を繋ぐ最短経路が封鎖されるわけで、宍戸氏も三吉氏との有機的な連携が取りにくくなる。手伝い戦ではあるが、毛利にとっても悪い話ではなかった。

「幸松丸さまの祖父殿じじいの頼みでは、断るわけにもいくまい」

多治比元就の言に重臣たちも同意し、出兵が決定された。

毛利が陣触れすれば、吉田の城下に暮らす宍戸氏の謀者によって半刻後にはその速報が五龍城へと届けられる。宍戸元源もとよしもただちに陣触れを発し、防戦の態勢を整えた。

宍戸氏の本拠である五龍城は、宍戸領の南部を守る要の城である。南から北流してきた江の川に北西から流れてきた本村川が流れ込む合流点に、半島状に北東に伸びた小高い丘陵があり、その稜線に直線連郭式に曲輪を配して築かれている。東西が八百メートルと長く、尾根に沿って三十ばかりも削平地が作られ、城全体が巨大な堀切で三分割されている。独立した砦が尾根に三つ並んでいると思えばいい。江の川に突き出た低い東側が大手口で、西に向かって山は高くなり、南西に搦め手（裏口）がある。

南から蛇行しながら北へと流れてきた江の川は、五龍城の足元を洗いながら東向きを変え、甲立盆地を横断し、東の山裾にぶつかってさらに北へと流れを変える。甲立の城下町はその北岸にあり、

宍戸氏に経済的打撃を与えるには江の川の線を越えねばならないのだが、五龍城の一里ほど北方には祝屋城いわいやがあつて、宍戸元源もとよしの実弟である深瀬隆兼たかかねがこれを守っている。毛利軍が不用意に江の川を越え、宍戸領に深く踏み込めば、深瀬隆兼が必ず城から出戦し、五龍城の兵と呼応して毛利軍を挟撃するであろう。江の川で退路を断たれる形になるから、下手をすると全滅さえしかなない。つまり、毛利単独の兵力では、五龍城を攻略せぬことには江の川を容易には渡れないのである。

五龍城の南東 南北に流れる江の川の東岸にやや広い平野があり、地元で「高田原」と呼ばれている。吉田から江の川に沿って進んできた毛利軍は、高田原から十町ばかり南で江の川を渡河し、東岸の原で軍列を整えた。このあたりが毛利氏と宍戸氏の領地の境界で、南には河原者たちの集落があり、五町ばかり北には宍戸氏の関所がある。

「四朗、とりあえずあの関所を打ち壊してきてくれ」

大将である元就が、それを命じた。

元綱は、渡辺党と赤川党の兵を中心に三百ばかりの人数を預かり、先鋒の大将を務めることになった。

「ゆくぞ」

元綱隊は、関所に詰めていた二十人ばかりの敵兵を追い散らし、番所を焼き払い、柵を打ち倒させて、宍戸軍が出張つて来る前にさつと引きあげた。本格的な合戦の前の下準備と言つていい。

宍戸軍は出戦しなかった。山上から毛利軍を睥睨へいげいし、待ち構えているらしい。

毛利軍はさらに北進し、高田原に入り、城から南東に七町ほどの距離をおいて陣を敷いた。

「いつ見ても、なんとも厭らしい城だな」

城山を見上げながら元綱が言った。

五龍城の山の斜面は急角度で、麓から山頂までの比高が百三十メートルばかりもあり、おまけに江の川が天然の外堀となつている。江の川はこのあたりでは河岸が崖のように谷深く、登り降りには時と手間が掛かる。しかも城側である西岸は山裾の平地が極端に狭くなつており、大軍を自由に進退させることができないから、非常に攻めにくいのである。江の川を渡河して山腹に取りつくような素直な攻め方をすれば、頭上から無数の投石や飛矢を浴び、怯んだところに白兵突撃を食らつて、江の川の崖下へ叩き落とされるであらう。

「いつそ南の山に兵を登らせ、尾根伝いに搦め手から攻める方が、まだ見込みがあるんじゃないか」

元綱が言つと、

「あの山は穴戸の者たちにとっては庭も同然だ。少数の兵では、城の曲輪まで辿りつくことも難しいだらう」

元就が冷静に応じた。

山に大軍を登らせたところで、山中には道などはなく、尾根も狭く、大軍を有機的に進退させられないから、結局は少人数を小出しにする形になる。小部隊では地理を知り尽くす穴戸方に良いように翻弄されるだけで、戦果は期待できないだらう。悪戯に死傷者を増やすだけということになりかねない。

もちろん元綱もそれは解っていたが、毛利の軍勢だけであえて城攻めをするなら、そういう手でも使つしかしょうがない、と言つてみただけである。

そもそも城攻めには守備側の十倍の兵力が要するというのが常識である。五龍城は穴戸氏の本拠であり、どんなに少なくとも五百以上領内の支城の人数を集中していれば千人近い兵が守備についているであろう。これを力攻めで短期間に落とすには一万ほどの軍勢が必要ということになるが、毛利の動員力は限界までかき集めてもせいぜい千五百であり、今回引き連れて来たのは千人ほどに過ぎない。

「やはり穴戸が城から出戦するのを待つて、懸合かけあいの戦（野戦）で叩くしかないか」

元綱の言葉に元就は首を振った。

「いや、そもそも無理をして血を流す必要はない。我らは穴戸を釘づけにしておけばそれで良いのだ。しばらく滞陣しておれば、高橋の方の戦も終わる」

「ふむ。まあ、その通りだが、なんとも張り合いがないな」

「お前は雅楽頭つたのかみ殿（穴戸元源）をずいぶん買っていたな。戦いたいのだろっ」

擲掬かひかうような口調である。

元綱は苦笑した。

「いや、あの仁はどうも戦いにくい。負けるとは思わぬが、勝てるという気もせんのだ。どちらかと言えばやりたくない相手だな」

「ほう」

元就は意外そうに息を漏らした。

「お前らしい賛辞だな。やりたくない、か。私も同感だ」

宍戸氏とは父・弘元の代から二十年近くにわたって小競り合いを繰り返しているが、この争いは毛利にとつてまったく益がなかったと元就は思っている。兄である興元が死んで、自身が毛利家の舵を握るようになってから、元就は宍戸氏を味方にできぬものかと考えるようになっていた。

が、宍戸氏は高橋氏に領地の西部を三割ほども奪われていて、これを仇敵視している。毛利がその高橋氏と同盟している限り、手を結べるわけがないであろう。

「いずれにしても、城攻めはもつてのほかだ。此度はじっくりと様子を見て、宍戸の動きに応じて手を打つとしよう」

「それならば、夜討ち朝駆けには用心することだ。宍戸雅楽頭は必ず仕掛けてくるぞ」

毛利軍はそのまま野陣を敷き、柵を立て、矢楯を並べるなどしつつ、宍戸軍の出戦を待った。

早春とはいえ、山深いこのあたりにはまだ根雪が多く残っている。川筋に吹く風は冷たく、夜間はじつとしていられないほど寒い。兵たちは篝火を普段の倍近く据え、夜襲の警戒をすると共に寒さをしのいだ。

この日、天は厚い雲に覆われ、月も星もない。
その初更の頃。

毛利軍の後方の陣屋で、突然、複数の炎が上がった。荷駄が火を発したのである。火勢は川風に乗ってたちまち大きくなり、悲鳴と怒号が上がった。

「敵じゃあ!」

「夜討ちじゃ!」

叫び声があちこちで上がる。

放れ馬が興奮して暴れまわり、人々が消火に駆けまわる。

闇が騒然となった。

本陣の奥で諸将と軍議をしていた元綱は、刀を引きつけて苦笑した。

「さっそく夜込みか。打つ手が早いわ」

夜込みとは、夜中に敵の陣地を荒らすことである。

「大軍が動くような気配はなかった。後方の騒ぎはどうせ困だらう。風上から火を掛けたということは、風下から斬り込んで来るか、あるいはこの本陣が目当てということもあるかもしれぬ」

元綱の言葉に、元就と諸将は頷いた。

「本陣まわりを固めよ。敵は寡兵じゃ、慌てず迎え撃て」

元就の声に、使い番の武者たちが駆けだした。

「俺は先陣に戻る」

床几から立ち上がった元綱に、渡辺勝と赤川兄弟が従った。

その頃、先陣の陣屋では、五十人ばかりの穴戸兵が闇の中から魔物のように躍り出し、急襲を行っていた。

毛利軍の武者たちは、夜襲を警戒して半数は鎧をつけたままであ

つたが、憩んでいた者たちは慌てたであろう。夜の戦いは敵の数が判らない上、暗がり素早く動く影は敵味方の区別がつけがたく、人の恐怖心を煽り立てる。

元綱の幕舎にいた重蔵は、すぐさま槍を取り、元綱の近侍の若者たちと共に外へ出た。三人が元綱について本陣へ行っているため、残った六人に重蔵を合わせ、七人が集団を作っている。

戦いの喧騒があちこちから響いてきた。

篝火は多く据えてあったが、それでも闇には濃淡がある。まして先鋒大将である元綱の幕舎は、渡辺党、赤川党の陣屋に囲まれ、奥まっていることもあり、物陰に死角が多く、遠くを見通すことができない。

「敵がご本陣を衝くつもりなら、陣の中ほどを横から襲うでしょう。この先陣を目がけての夜討ちとなれば、敵の狙いは、先陣の大將たる四朗さまではありますまいか」

と言ったのは、井上又二郎である。

「そうかもしれません」

重蔵は頷いた。

「四朗さまがご本陣におられたは、逆に幸いであつたやもしれませぬな」

武將たちは本陣に集まっているから身は安全であつたが、裏返せば、兵を指揮する者がいないということである。防戦は物頭がそれぞれの場合で行うしかなく、軍勢としての機動性と連携を欠くことになった。

重蔵たちが戦いの様子を音で聞いていると、防備の手薄なところ

を突破したのであろう、しばらくして二人の武者の影が闇のなかから駆け現れた。

重蔵たちはお互いに少し距離を取り、槍を構えた。

「敵か！」

又二郎の誰何すいかに返答はない。

無言のまま前に出た一人は、黒漆塗りの札さねを黒糸で威した漆黒しっこくの鎧よろいに身を包んでいる。同色の筋兜すぢかぶとに前立てはない。黒い面頬めんほおをしているので顔は解らないが、その眼は 血走っているのか、あるいは篝かほの火明りを反射してか 鈍い赤光を放っているようで、どこか獣めいて見えた。

七人を一瞥した黒武者は、右手に下げた大薙刀の切っ先をピタリと重蔵に向けた。

その瞬間、絶望的な悪寒が重蔵の背を走り抜けた。虎か獅子が入った檻かごに放り込まれたらこんな気分であらう。食う者と食われる者

その圧倒的な力ちからの差に対する直感が、重蔵を戦慄せんれつさせた。

足軽稼業で暮らしていた頃の重蔵であれば、迷わず遁にげを択えらんだであらう。戦場では人ごみに紛れてしまえばそうそう捕まるものではないし、この男が別の相手と戦っている隙ひまにその場から遠ざかるようなことだってできる。いずれ命あつての物種であり、死んではどうにもならないのである。そういう柔軟さが、重蔵をこれまで生き延びさせてきた一因であつたとも言える。

しかし、いまの重蔵は逃げることはできなかつた。

絶対にこの男を四朗さまの前に立たせるわけにはいかん。

重蔵には解るのである。眼前がんぜんにいるのが、人の姿をした化け物であるということが。

大薙刀の切っ先が小さな円を描いたと見えた瞬間、男が黒い風となつて動いた。

「手を出すな！」

重蔵は迎え撃つべく距離を詰め、渾身の槍を突き出した。その刹那、槍の穂先が斬り飛ばされて宙に飛んだ。

薙刀の旋回は止まらず、夜気を切り裂きながら重蔵の胸元に伸びる。

槍の柄を立ててその斬撃を受けつつ、重蔵はとつさに身体を開いた。堅い檜材の柄が竹のように両断されたのは予想の裡だったが、凄まじい速さの切っ先をわずかにかわし切れず、腹巻から数枚の小札が干切れ飛んだ。さらにその切っ先は8の字を描いて三撃目が続けて伸び、反射的に後ろに跳んだ重蔵の佩楯を斬り、その太ももを薄く傷つけた。

鎧を着ていなければ、この時点で致命傷を負っていたであろう。

「くっ　！」

重蔵は短くなった柄を投げつけ、男が薙刀でそれを払う隙に腰の大刀を抜き、正眼　つまり守り重視の構えを取った。

男の神速の手練　生き物のように伸び縮みするその薙刀の動きは、重蔵の目にはほとんど魔術か奇術に見えた。照明は篝火のみであり、あたりの暗さが男の太刀筋をさらに速く感じさせるのである。

「おのれ！」

左右にいた近侍が二人、ほぼ同時に男に突きかかって行った。

「よせ！」

重蔵は叫んだが、遅かった。男は舞うように動き、二太刀で二人

を斬り倒し、しかもその目は油断なく重蔵に注がれている。
うめき声をあげて地に転げる二人を目の端に収めつつ、

「あやつに寄るな！ 弓矢で討ち取れ！」

重蔵は鋭く言った。

その声に反応し、又二郎ともう一人が弓を取りに幕舎へ走った。
あとの二人は重蔵の左右の後ろで槍を構え、脇を固めている。
男が面頬の奥の目だけで笑った。

「先陣の大将を討つつもりで来たが、まさか足輕姿のおぬしが元綱
ではあるまい。今義経の他にも、少しは遣える者がおつたと見える」

声が洪い。

「名乗ってみよ」

「……羽田重蔵」

「やはりそうか。わしに書状を書いて寄越した兵法者だな」

「では、あなたが」

「われは穴戸又四郎。五龍城主の弟よ」

穴戸家俊！

重蔵が探していた司箭院 興仙その人ではないか。

事態に気づいたのである。周囲の闇が騒がしくなり始めた。口
々に叫ぶ声が聞こえ、足音が集まり始めている。弓を握った又二郎
たちも駆け戻ってきた。

「司箭流しせんの薙刀の技、いま少し見せてやりたいが、多数の弓矢の相手するのはかなわぬな。挨拶も済んだことだ。ここは退かせてもらおうか」

待て　とは、重蔵は言えない。立ち向かえば必ず負けるということが重蔵には解るからである。むしろ、「此度は見逃してやろう」と言われたようにさえ感じた。

「大蔵だいぞう、退くぞ」

穴戸家俊が背後にいた若い男に声を掛け、若者は鋭く指笛を吹いた。

ジリジリと後退した二人は、別の幕舎の死角に逃げ込むように走り去った。

それを追って駆けだそうとする近侍たちを、

「おやめなされ」

重蔵は厳しい声で制した。

「追えば死にますぞ」

緊張の糸が切れた重蔵は、その場にへたり込みそうになるのを辛うじてこらえていた。

元綱たちが先陣に戻ってきたのは、その直後である。

指笛が合図だったのだろう、周囲の戦いの気配もすぐに遠ざかった。穴戸軍の奇襲はわずか四半刻ほどで、一時の混乱が嘘のように、その後は再び夜の静寂が訪れた。

倒れた近侍は二人とも重傷ではあったが、鎧を着ていたことが幸

いし、命だけはなんとか取り留めた。毛利方の損害は、負傷者二十数名、死者七名である。その他に、付近の哨戒に当たっていた雑兵の死骸が五つ、翌日になって発見された。宍戸の兵の遺体は残っていないかったから、死者はなかったらしい。火災の被害の方は、馬糧と材木、幕舎などが少々燃えただけで、たいしたことはなかったという。それより繋がれていた馬の綱が切られ、多くの放れ馬が出たことの方が深刻で、その回収に手間取ったようだった。

ちなみに毛利軍の陣から一里ほど南に渡辺氏の長見山城があり、それが宍戸氏と戦う際の後方基地になっている。食糧にせよ馬糧にせよ、一月程度の滞陣なら補給の心配はない。

翌朝、近侍を見舞った元綱は、憩んでいる重蔵を見つけて声を掛けた。

「宍戸は昔から小戦が巧みなんだが。此度の手並みは鮮やかだったな」

宍戸氏はゲリラ戦術を得意とし、少数の兵での奇襲が巧い。強大な高橋氏を相手に城を守りぬいていることでもそれが解るであろう。毛利も先代・興元の頃から何度も煮え湯を飲まされている。

「夜討ちの将は宍戸又四郎と名乗りました。おそらく宍戸家俊殿です」

「例の修験者か。安芸に帰っていたのだな」

「そのようです。恐ろしいばかりの手練れでした」

「飛行自在の怪人は、夜込みも夜討ちもお手の物、か……」

「修験者は山野の地理に精通しています。このあたりの山々で、あ

の男が知らぬ道はないでしょう」

裏道も抜け道も獣道も知り尽くしているに違いない。つまり、神出鬼没の働きができるということである。穴戸家俊が五十人の精兵を率いれば、夜戦であれば五百人を相手にしても戦えるだろう、と重蔵は思う。

「また厄介な敵将が増えたものだな」

元綱の口元に苦い笑いが浮いた。

「先陣の大將を討ちに来たと申しております。あの者は本気でそのつもりだったろうと思います。今後も狙って来ぬとも限りませぬくれぐれもご用心ください」

「お前より技が上か」

「遙かに」

重蔵は主人と目線を合わせず、淡々と答えた。

「一騎討ちであったなら、わしは死んでおったでしょう」

「……わかった。俺も一人で立ち向かうのはやめよう」

元綱はやや不満げな顔で言った。

ところで、この時代の軍勢には、必ず多くの非戦闘員が帯同している。荷運びをする人夫、土木作業をする黒鍬くろくわ、陣小屋などを建て

る大工、外科医である金創医きんそうい、易や吉凶を占う陣僧や修験者などがそれで、長陣になれば、物売り、薬売り、野鍛冶、遊女といった人々も戦場にやって来たという。

軍勢に同行する陣僧は、鎌倉の昔から伝統的に時衆の聖ひじうが務めることが多い。寺に定住せず、全国を遊行する時衆の僧は、諸国の道に通曉していたし、何より身軽で野宿を嫌がらなかったからである。時衆は芸能集団とも深く結びついているから、公家から政権を奪った武家に結びつき、それをパトロンにしようというような意図もあつたと思われる。

時衆の聖たちは、近くで合戦が始まつたと知ると、どこからともなく集まつて来る。彼らは敵味方の区別なく負傷者の治療に当たり、戦没者を埋葬し、その回向えうきうをするのである。殺し合いをする武士たちも、こうした宗教者には手を出さないというのが暗黙のルールであつた。だからこそ、謀者のなかには空也僧に化ける者が少なくなくなつたし、逆に本物の聖が特定の大名の謀者を務めるといった例もあつたであろう。

岩阿弥がんあみを名乗る時衆の聖が、十人ばかりの河原者を引き連れて毛利軍の陣に現れたのは、合戦が行われている場所からいつても、いわば必然であつた。

観音大悲は船筏ふないかた 補陀落海ふたらくかいにぞうかべたる

善根もとむる人しあらば 乗せて渡さむ極楽へ

などと鼻歌を歌いながら、岩阿弥は毛利軍の陣屋の後方をうろつろつと歩き、あたりを哨戒していた足輕を捕まえて話しかけた。

「この寒中に戦とは、ご苦労なことじゃな」

「おお、岩阿弥殿か」

何度か戦場で顔を合わせたことのある男である。

「陣借りに来てやったぞ。誰ぞ大将の元へ連れていってくれぬかな」

「あはは。何が陣借りじゃ。坊主が槍をとってはまずかろうが。しばらくここで待っておれ」

男は上役にそのことを伝えにゆき、しばらくすると黒鍬頭くろくわがしの武士が五人ばかりの雑兵を引き連れて現れた。

「おう、岩阿弥殿、息災じゃな」

「南無阿弥陀仏」

岩阿弥が手を合わせて会釈すると、男は厭な顔をした。

「よせよせ、縁起でもない。お浄土は良いところと聞くが、わしはまだ行きとつはない」

岩阿弥はにんまりと笑った。

「此度は大戦になりそうですかな」

「高橋の手伝い戦よ。いつものように小競り合いで終わるのではないかな」

「それは景気の悪い話じゃな。ようけ死んでくれぬことには、わしの懐中なつかが温まらんわ」

「なにをぬかすか、この生臭坊主め」

男は苦笑した。

「さつそくじやが、昨日死んだ雑兵に、引き取り手のない者が三人あつた。その者らの着物と持ち物を布施するゆえ、回向えこうしてやつてもらえぬか」

「承つた」

「それが済んだら、離れてしばらく模様眺めでもしておれ。戦に巻き込まれてはつまらんぞ」

「そうさせてもらいますわ。飯を食いながら戦の様子を眺めるのがわしの法楽じやによつてな」

岩阿弥たちは、毛利軍の陣の東にそびえる毛宗坊山もそうぼうへ遺体を運び、山麓で埋葬を済ますと、そのまま山を登つた。仲間の獵師小屋に腰を据え、合戦見物をするつもりである。

陽が傾き始めた頃、毛利軍の陣に動きがあつた。

「おお、なにやら始めおつたぞ」

岩阿弥の眼下で二百人ほどの小部隊が出陣し、江の川の際まで進み、火矢をもつて対岸の町屋を無差別に攻撃し始めたのである。毛利方にすれば、昨夜の夜襲の報復であつたろう。

城下町を焼かれては経済的な大打撃になるから、宍戸軍は五百人ばかりが城から出戦し、川を隔てて矢戦が始まつた。一部の兵たちは消火に駆けまわり、燃えた家屋を必死で潰したりしている。

「こりやつまらんな。動きが小さいわい」

岩阿弥は失望したように言った。

蟻より小さく見える人間たちの集団が、ダイナミックに進退を繰り返すような合戦模様なら遠望していて面白いのだが、矢戦では地味すぎて何をやっているのか判らない。

日暮れと共に毛利軍は兵を退き、宍戸軍も城へと帰っていった。

この夜、毛利軍の陣では数え切れないほどの篝火が焚かれ、そのあまりの多さに岩阿弥は驚くよりむしろ呆れた。陣から離れた周囲にまで無数の捨て篝火が据えられ、江の川から毛宗坊山の山裾までが照らし出されている。

「昨夜の夜討ちによほど懲りたか」

これほど明るければ、たとえ忍びの名手であっても気付かれずに陣に近寄ることは不可能であろう。

五龍城の城頭からその様子を見下ろしていた宍戸元源も、苦笑しながら岩阿弥と同じ台詞を吐いた。

「毛利め、昨夜の夜討ちによほど懲りたと見えるな。いかにお前でも、さすがにもう同じ手は仕掛けられまい」

元源の隣に立っていた宍戸家俊は、

「多治比の元就とは遊び心のない男であるらしいわ」

無然とした口調でそう言った。

この男、歳は四十の前後であろう。陽によく焼けてはいるが、決して野卑な感じではなく、その顔立ちは妖艶と言えるほどに整っていた。ただ、眼つきにやや陰があり、眼光には異様な冴えがある。二十年ほど前には時の幕府管領・細川政元に仕え、「第一の家臣」

と呼ばれるまでに寵遇されているのだが、その頃は花も恥じらうほどの美貌だったに違いない。

「まあ、遊びは一度で良い。二度やれば裏を取られよう」

元源は渋い声で続けた。

「いずれ毛利は高橋の手伝いをしておるに過ぎぬ。この城を本腰を入れて攻めようとは思っておるまい。防ぎはわし一人で充分じゃ。お前は夜陰に紛れて城を抜け、祝屋城へゆき、弾正だんじょう（深瀬隆兼）と共に三吉を援けよ」

「兄上は相変わらず義理がたいな。この五龍が攻められておるに、その上まだ三吉まで援けるか」

「青屋友梅は連歌の友でな。あれを殺すに忍びぬ。まして加井妻城かいづめを高橋に取られてはかなわぬわ」

「わかった。わしも、この宍戸の家が滅ぶのは本意ではない。しばらくは兄上の手伝いをしてゆこう」

二人の背後に若者が控えている。歳は思いのほか若く、まだ十代の半ばであろう。

振り向いた家俊は、

「雪が解けたら旅立つつもりであったが、もうしばらく出立はお預けじゃ。大蔵、よい機会ゆえ、お前も戦場をよう知っておけ」

「は
」

低頭した若者は、名を河野大蔵と言い、家俊の兵法の一番弟子である。

それ以来、五龍城では昼間の小競り合いばかりが半月も続いた。毛利、宍戸の双方が怪我をしないように戦っている感じで、岩阿弥にとつては退屈の極みである。特に攻める側の毛利方に戦意が乏しく、江の川を越えて城山に取りつこうともしない。まともに城攻めをする気がそもそもないのである。

「これでは商売にもならんのお」

遠矢をもつての矢戦程度では、怪我人は出ても死者はほとんど出ないのである。実際に戦っている武士たちはそれこそ命懸けであるのだから、高みの見物を決め込んでいる連中は気楽なものであった。

毛利軍の陣に、

「毛利は何をやっておる！」

と高橋氏の使者が怒鳴りこんできたのは、そろそろ二月が終わろうかという頃であった。

「加井妻城に宍戸の援軍が現れ、後ろ巻きに遭った我らは手痛い負けを喫したぞ。宍戸の後詰めを許すとは、どれほど手ぬるい戦をしておったのじゃ！」

加井妻城を攻めていた高橋軍は、現れた三吉氏の援軍と戦い、ことう着状態になっていたのだが、そこに思いもよらぬ方角から宍戸軍の奇襲を受け、動揺したところを城兵と三吉軍による総攻撃を食らい、壊乱したのだという。

これにはさすがの元綱も驚いた。

宍戸氏の動員力は毛利と大差ないから、五龍城の守備兵を引き抜き、祝屋城の兵と合わせて援軍に向かわせたのである。城内の兵がそれほど減っていたとはまるで気付かなかった。

「宍戸雅楽頭うたのかみはたいしたものだな」

高橋氏が兵を退いたとなれば、毛利軍が滞陣を続ける意味はない。元就は撤兵を決め、元綱がしんがり殿軍となつて毛利軍は整然と兵を退いた。

第四章 吹き荒れる腥風 嵐の前の静けさ（一）

梅の季節も終わり、山野のあちこちで桜がほころび始めた。

よく晴れたある朝のことである。郡山の満願寺の鐘が「明け六ツ」を告げてから半刻ほど後であつたから、時刻で言えば午前七時ごろであろう。

相合の元綱の屋敷の裏門に、ふたつの人影が立った。

両者とも異装である。草臥れた白小袖の上に色褪せた柿色の篠懸すずかけを重ね、括袴くくつぽかまを穿き、総髪くさげの頭上に六角形の頭巾とぎんを戴き、首には結袈裟いけざを掛け、手甲てがま、脚絆きゃはんで手足を固めている。右手には錫杖しやくじょう、腰こしに小太刀を差し、螺緒かいのおをぶら下げ、背には大きな笈おいを背負っている。山伏さんぶつとか修験者しゆげんじやとか呼ばれる風体だ。

一人は四十年配で、中背にして瘦身そうしん。女なら思わず見惚れてしまふような、妖しいほど整った顔立ちをしている。その背後に立つもう一人は二十歳にも満たぬ若者で、やや長身で骨太な身体つきである。

「頼み申す」

年配の男が声をあげた。錆びの利いた実に良い声である。

「頼み申す」

何度目かの男の訪おもいに、門扉が薄く開かれ、老僕の市兵衛いちべゑが顔を覗かせた。

市兵衛は、まず男たちの装束を眺めて訝いぶしみ、次いで男の美貌びぼうに気づき、真昼に幽霊でも見たような顔をした。

「はて、見慣れぬ行者やこ殿どのじゃ。当家になんの御用でござらうか」

「こちらは毛利家の御曹司　四朗　元綱殿のお屋敷であるな」

「左様にござるが　」

「羽田重蔵と申される仁がこちらにおられるはずじゃ。取り次いで頂けぬかな。野僧は愛宕大権現あたごを奉ずる修験しゆげんの行者にて、司箭しせんと名乗りおる者」

司箭院　興仙こうせん　。穴戸家俊である。

話を聞いた重蔵は仰天し、まず長屋に詰めていた三人の若者に声を掛け、一人を元綱の部屋へと走らせて事態を伝え、残る二人に半弓を持たせ、裏門へと駆けた。

門の脇に、二人の修験者が立っている。

「お二人は長屋の陰より見張っておってください。万一、わしに不測のことがあれば、あれらには決して近づかず、矢で仕留められよ」

重蔵は厳しく念を押した。近侍の仲間が二人、かの穴戸家俊によって不具にされてからまだ一月と経っていない。彼らの眼には怒気と殺気が漲みなぎっていた。

重蔵はゆっくりと裏門へ近づき、二人から四間ほどの距離を置いて足を止めた。

「おお、羽田殿、一別以来でござるな」

穴戸家俊が軽く会釈し、背後の若者がそれに倣った。

重蔵は、相手の気配を油断なく探りながら、どのような動きにも即応できるよう四肢の力を抜いた。やや歩幅を広げ、心持ち重心を低くする。

「先日は面頬おもてほにてお顔を拝見できませんでしたが、そのお声は忘れもせぬ。穴戸又四郎殿とお見受け致す」

「いかにも。じゃが、その名は呼んでくださるな。今は司箭しせんと名乗りおる修験の行者に過ぎぬ」

「して、わざわざのご来駕らいが、本日はどのような御用の向きにござろうや。当家の主人あてしの首でも獲りに参られたか」

「そう構えられることはない。ここは芝居（戰場）ではあるまいよ。このわしにしても、無闇矢鱈やたらに他人の命を奪う者ではない」

家俊は片頬に笑みを浮かべた。

「実は我ら、これより再び安芸を離れる。まず厳島に参って厳島大明神に衆生済度しゅじやうしやうどと旅の無事を祈念し、その後は四国と九州に渡り、修験の山を巡り歩いて修行を重ねるつもりじゃ。次に安芸に戻って参るまでには長い月日が開こうゆえ、そなたに一度会つておこうと思つてな」

厳島神社へ行く道すがら、わざわざ立ち寄ってくれたらしい。

「書状を寄越されたは、わしに用があつてのことであろう？」

事情を諒解した重蔵は、自分が安芸にやって来た経緯を短く説明した。

「義経流の蘊奥うんおくを極めたという司箭院殿しせんに、ぜひ一度お会いし、教えを乞いたいと存じ、はるばる京より流れて参りました」

興深げな顔でその話を聞いていた家俊は、

「義経流の兵法か」

と詠嘆するように言った。

「鬼一法眼きいちほうげんが義経に授けたと伝えられる兵術の妙理みょうり。わしはそれを由利刑部ゆりきょうぶと申される方より学び、愛宕山あたしは太郎坊に伝わりたる古えの剣術けんじゆによって兵法の理りを悟った」

「愛宕山の太郎坊……」

重蔵は呻くように呟いた。

愛宕山の太郎坊といえは、愛宕山に棲んでいたという大天狗の名である。愛宕山にはその名を冠する僧坊があり、修験の行者と兵法修行を志す人間たちが集い、修行のための行場ぎょうばのようになっていた。重蔵自身も短い期間ではあったがそこで修行をしているし、重蔵が「司箭院 興仙」の名を知ったのもまさにその場所であった。つまり、重蔵と穴戸家俊とは、同じ根の兵法を学んだということになる。

かの男とわしの差とは、天が与えし器量の差ということか。古えより家に伝わる剣術を身につけ、研鑽も積み修羅場も潜り、同じ場所で修行までしているにも関わらず、穴戸家俊が到達した「兵法の理」に重蔵は到ることができなかった。

「それを義経流と呼ばれるのはそなたの勝手だが、薙刀、居合、小太刀、棒術、柔やわらの技に至るまで、悟り得た理を元にわしが独自に工夫したものだ。ゆえに司箭流と称してある」

「司箭流」

「そなたが求めるモノと、わしが編み出したるモノとは、別である
うよ」

「それでは、兵法の理とは　！？」

「さすがのような重蔵の声に、家俊は即答する。

「言葉で表すなら、天地自然の理と申すよりない」

「しゃん　！」

右手の錫杖が地を叩き、先端で遊環が乾いた金属音を立てた。

「たとえば天地は理あるがゆえに寒暑が巡り、日月は理を得て昼夜
が巡る。一事一物一動一静の微に至るまで、理の有らざるものはな
い。心にその理を具え、技にその理を施す。技をもって心を治め、
心をもって技を治める。内と外とがこもごもに治まれば、すべてが
自然の理に循つ」

「重蔵はその言葉を懸命に咀嚼している。」

「察するところ、そなたは導き手を欲しておられるわけじゃな。羽
田殿、わしの弟子になるか」

「……以前は、確かにそのつもりでござった。さりながら、今
わしは当家の元綱さまにお仕えする身。司箭院殿とは敵味方の間柄
でござるし、この地を離れるわけにも参りませぬ」

「　離れたくば、離れても構わぬぞ」

背後から声が掛かった。

重蔵が振り向くと、母屋の方から元綱が歩いてくる。

「四朗さま……！」

「主従と申しても、俺はお前に禄も扶持も与えておるわけではない。お前にはお前の生きる道があるう」

「これはこれは。毛利の今義経殿でござるな」

重蔵の隣に立った元綱へ向けて、男が目礼した。

「司箭と申す修験の行者でござる。お初にお目に掛かる」

「先の合戦では我が郎党が世話になった。貴殿に斬られた二人は、命こそ取り留めたが、二度と芝居には立てぬ」

「ほう、あの者ら、死ななんだか。それは由なきことをした」

家俊の苦笑は、年齢による己の力の衰えを自嘲したのかもしれない。

「で、仇討ちでもなさる気か」

「合戦は私怨でするものではない。貴殿がたとえ親の仇であっても、芝居でのことを持ちだしはせぬよ」

「さすがは毛利家の御曹司、若いながらも弁えておられる、と言いたいところだが。それにしても、殺気が表に出過ぎてござるな」

「穴戸又四郎殿に遺恨はない。が、それとは別に、司箭院しせん興きょう仙という修験者がどれほど遣つかうかには興味がある」

修験者の鋭い眼に危険な色が灯り、その周囲の雰囲気が変わった。

「教えを乞いたいと申されるのか。それとも仕合いをご所望か。仕合うとなれば、こちらも手加減は致さぬが」

「四朗さま、なりませぬぞ」

重蔵が厳しく言った。

馬上槍をとって戦うならともかく、平装でこの男と一対一で斬り合うとなれば、いかに元綱でもまず勝ち目はない。穴戸家俊がその気になれば、この屋敷にいる人間を皆殺しにすることさえ容易たやすいであらう。

重蔵は元綱を庇うように前に出た。

「重蔵、邪魔をするな」

「四朗さまにお仕えする者として、主人に先に死なれるわけには参らぬ。どうしても司箭院殿と仕合われると申されるなら、わしが死んだ後にして頂く」

歩幅を広げ、身体を前傾し、居合の構えを取る。

自分の言葉を聞いてもなお、元綱の殺気に揺らぎはない。重蔵は、眼前の化け物に本気で斬って懸かる覚悟を決め、大刀の鯉口を切った。

「無益なことじゃ。羽田殿、命を大事にされよ」

「無益は承知……」

勝てぬことは、重蔵自身が誰よりも解っていた。

兵法を極めた者の間合いは、一種の結界と言っている。そこに殺意を持って踏み込めば、その瞬間に地獄の門が開く。

重蔵は、泰然と佇立する家俊を凝視し、心気を高めた。身を沈め、じりじりと足の指で「死」への間合いを詰めながら、呼吸を計る。

次第にその息が細くなり、やがて重蔵は勝ち負けも生死も忘れた。誰も口を利かず、空間が凝固したように動かない。

緊張感が極限まで高まるうとしたその刹那。

「！」

けたたましい赤子の泣き声があった。

我に返った重蔵が反射的にその方に視線を向けると、厩うまやの脇に赤子を抱いた女が立っていた。ゆきである。夫を心配して様子を見に来たのであろう。血の気を失い切った顔で呆然とこちらを眺めていた。その胸で、鶴寿丸かくしゅまるがひきつけを起こしたように泣き喚わめいていた。殺気に満ちた異界はすでに霧消し、固体化したようだった空気が再び動き出した。その場にいた全員の、張り詰めていた気持ちの糸が弛ゆるんだ。

「重蔵、やめよ。俺が悪かった」

重蔵の肩に元綱の手が乗った。

「司箭院殿、非礼を詫びよう」

「いや、それには及ばぬよ」

家俊の表情からも険呑さが消えている。

「羽田殿、今の貴殿の気組みはなかなか良かったぞ」

しゃん　と錫杖が鳴った。

「芸は極めることができるが、心は極めるところがない。技は心に循したがつものじゃ。技を磨くことの究極は、心を磨くことと心得られよ」

後年、穴戸家俊は自らの流派を「貫かん心流」と称する。「心を貫く流儀」　いかにこの人物が心の研鑽を重要視していたかが窺えるであろう。

「……ご教示、心の深き処に刻みおきます」

「お互い生きておれば、またどこかで逢うこともあろう。精進なさることじゃ」

二人の修験者は、元綱に目礼し、静かに門を出て行った。
元綱がひとつ大きく息を吐いた。

「追わなくてよいのか。師とするに足る漢おとこにやっと出会えたのだろ
う」

「いえ、よいのです」

重蔵は首を振り、微笑した。

「わしにはわしの生きる道があるのですから」

新緑の香りを乗せた春の風が、重蔵の顔を撫でてゆく。
青く澄んだ空に、鶴寿丸の泣き声だけが響いていた。

さて。

それからしばらく経ったある日、志道広良が郡山城に主立つ重臣たちを招集した。

「集まってもらったは他でもない。実は井原の弾正殿（元造）が、ご当家からご嫡男の嫁を迎えたいと申しておられてな」

井原の荘は吉田から三里ほど南方で、坂氏が領知する向原と志道氏の領地である志道村に挟まれた地域である。戸数で言えば二百軒ばかりの山間の小さな集落で、現在は井原市の名で呼ばれている。その井原の荘を領する井原氏は、藤原氏をその祖とし、二百五十年にわたって代々井原の地頭職を務めた名門であった。

現在の当主を井原元造といい、その子を元師という（訓み方には異説あり）。すでに毛利に臣従している国司氏とは遠祖が兄弟である。

この井原氏は、実は毛利とは昔から仲が悪い。

少々昔話をするようになるが。

安芸・毛利氏の初代・時親が安芸に入部して以来、毛利氏は吉田から南に向けて勢力を伸ばしており、時親の孫・親衡の代になって向原まで侵出し、日下津城（坂城）を築いた。そこに居を据えたのが親衡の次男・匡時で、彼が土地の名である「坂」を姓とし、その初代となった。坂氏が向原に本拠を据えたのは百年ほど昔ということになるが、その頃から隣郷の井原氏とは小競り合いを繰り返しているのである。井原氏は五千石にも満たない小豪族だが、小戦が巧く、兵は精強で、坂氏が侵攻するたびにそれを跳ね返していた。坂

氏にとって井原氏は、百年来の小うるさい敵であったと言っている。ところで、その井原の莊のすぐ西にあるのが志道村である。三十年ほど前にそこに城を築いたのは坂元良もとよしという男で、志道広良の父であった。もともと元良は坂氏本家に生まれた四男で、本家から分家して志道城に居を据え、その地名を姓としたのである。坂氏にすれば、分家を西に配することによって井原氏を東西から圧迫しようというような意図もあつたのであろう。

この志道元良は割りあい穩健な人物で、井原氏を敵視する坂氏本家とは政治的に一線を画していた。坂氏と井原氏の長年のいがみ合いに終止符を打つためにも、井原氏を毛利に臣従させようと考え、その働きかけをするようになった。

その頃の毛利氏は、先代の弘元が若くして隠居し、幼少の興元が家を継いだばかりで、家中にまとまりがなく、大規模な外征を起こすほどのエネルギーもなかったから、井原氏にとってさほどの脅威ではなかった。しかし、長じた興元は家中をよくまとめ、大内義興からも愛され、やがて安芸国人一揆（豪族連合）の盟主と目されるほどの存在感を持つようになった。井原氏の南方には国人一揆の盟友である平賀氏が大きく勢力を張っており、毛利氏と平賀氏に挟はさまれている井原氏にすれば、毛利とあからさまに敵対することは憚はばらざるを得なくなり、やがて井原氏の家中にも、志道元良の話を受け、毛利と同盟を結ぼうと考えるような動きが出始めた。つまり、毛利から嫁を迎え、同盟者としてその傘下に入ろうとしたわけである。

この話は水面下でまとまりかけていたのだが、肝心の興元が突然に病死したことによって、話がそのまま棚上げされる形になってしまった。興元亡き後の毛利がどうなるか。それを見極めぬことには、井原氏の側も動きが取れなかったわけである。

しかし、その後の毛利は家中が分裂したり内紛を起こしたりすることもなく、強大な武田氏の侵攻さえ跳ね返して見せた。さらに昨年には吉川氏から姫を迎えて同盟の絆を深くし、相変わらず国人一

揆の中核として存在感を発揮し続けている。

その様子を注視していた井原元造は、

これならまずまず大丈夫であろう。

と判断し、毛利から息子の嫁を迎えることを条件に、その傘下に入る決断をした。

「井原のご嫡男、小四朗殿（元師）と申されるのだが、歳は二十四と聞いてござる」

広間に集まった重臣たちを前に、志道広良はそう続けた。父が長年掛かってまとめた縁談話を、ついに評定の議題に乗せたわけである。

「相合の竹姫さまをと、わしは考えておるのだが。この事について、皆みな意見を聞かせてもらいたい」

「・・・・・・・・」

唐突に妹の名が出たので、元綱は仰天した。まったく思いもかけぬところから奇襲でも食らったような気分である。大きく息を吐いて腕を組み、そのまま黙り込んだ。

毛利家の姫といえは、先代・興元にも娘が一人あり、幸松丸の姉に当たるのだが、この姫はまだ八歳で、嫁に出すにはさすがに早過ぎた。婿になる井原元師は二十四であるという。年齢的にこれに見合う娘となれば、先先代・弘元の末娘である竹姫をおいて他にない。

「井原が縁戚となれば、百年続いた争いも終わるであろう。ご当家にとっても色々と益があるつかと存するのだが」

その広良の言葉を遮るように、

「これは執権殿とも思えぬことを申されるものよ」

と大声をあげたのは、坂広秀である。

「井原のような小家、攻め滅ばせば済む話ではないか。何もこちらから人質を出してまで縁を結ぶ必要があるうか」

坂一族がどれほど井原氏を憎んできたか忘れたか、と言わんばかりの口吻である。坂氏本家の当主である広秀にすればそれも当然で、井原氏とは父祖の代から小競り合いを続ける犬猿の仲であり、井原の兵によって命を奪われた家来も多くいる。その井原氏を毛利家臣の列に加えてしまえば、これまでの復讐ができなくなるばかりか、井原の荘を奪って領地を拡大するという坂氏の悲願さえ頓挫してしまうのである。

まして竹姫を出すなどは、広秀にとっては論外であった。

先先代の弘元が病死して以来、広秀は元綱の後見役を自ら買って出て、寡婦となり後盾を失った相合の方の相談をも親身に聞いてやり、たとえば米塩の援助をしたり、屋敷が破損すればその修築をしてやるなど、何くれとなく世話を焼いてきた。元綱の妹である竹姫は、いわば広秀の庇護のもとで育ったと言つてよく、広秀にすれば己の「手駒」という意識が強いのである。

「竹姫さまには、もっと大いなる家へ嫁いで頂いてこそ、ご当家の益となるう。井原のごとき小家に嫁るには釣り合わぬわ」

竹姫は毛利本家でただ一人の適齢の姫であり、しかも養女ではなく弘元の実の娘で、元就、元綱の妹であるばかりか、当主・幸松丸の叔母である。当然、その婿は元就、元綱の義弟となり、「毛利家当主の叔父」という立場を手に入れることになる。これに見合う婚

家といえ、毛利と同格かそれ以上の實力を持つ豪族でなければならぬであろう。實力が伴わぬとすれば、せめて尊貴な家格の家こそが相応しい。

国人一揆の盟友か、あるいは大内氏の重臣という手もある。

広秀は密かにそう考え、その線でまさに嫁ぎ先を探しているところであった。

広秀が調べた縁談で竹姫が強大な豪族に嫁げば、当然、その豪族とのその後の外交でも広秀が大きな役割を担うことになるであろう。それは広秀自身の毛利家中における権勢を増すことになり、発言力もそれだけ強くなる。つまり竹姫は、広秀にとって掌中の珠たまのような存在であった。それを仇敵の井原氏などに嫁がせ、拳句に政敵と言すべき志道広良の手柄のダシにされるとあつては、とうてい承服できる話ではなかった。

そんな広秀の胸中を、志道広良はあらかじめ察している。冷静かつ的確に反論した。

「確かに井原は小家でござる。さりながら、鍋谷城なべたにを武力で落とすとなれば、数百人の血が流れるは必定。まして井原は二百五十年もの長きにわたりかの地を治めてきた族でござる。臣下になろうとせつかく申してくれておるものを、味方に付けることをせず、逆にこれを攻め滅ぼしたのでは、人の道に悖もるばかりでなく、かの地に住まう領民の間にご当家に対する骨髓こつすいの恨みが残るでござろう。地の者が懐なついてくれぬ土地は、たとえば手に入れても難治なんぢ。必ず一揆の温床となり、ご当家の敵に通ずるような輩やからも出て参ろう」

広良はひとつ唇を湿らし、たつぷりと間を取った。

「ここは、武に依よることなく、百年の敵を味方に変えることこそ上策。わしはそう勘考つかまつる」

それは先代・興元の外交方針にも通じており、充分な理がある。坂広秀もそのことは認めざるを得ず、怒りで赤くなつた顔を歪めた。

「百歩譲つて井原をご当家に加えるにせよ、竹姫さまの婚家としてどうかという点が残る。執権殿がどうしても井原と婚姻を結びたいとお考えなら、福原殿の娘御でも出して頂けばどうか。井原ごときの嫁としては、それでも過分に過ぎよう」

過去、毛利家では乱立した庶家が大いに力を持ち、本家を圧倒して家中が分裂しかけた時期があつたのだが、庶家・福原氏の初代である福原広世ひろよは一貫して毛利本家を援けて尽力し、本家による総領支配と現在の毛利家の繁栄に多大な貢献を成した。以来、福原氏は一門衆のなかでも別格の扱いを受けており、その家格は家中の首座と定められている。その福原氏の娘なら、井原氏程度の小豪族の嫁に出すには釣り合いとして充分過ぎるであろう。

しかし、志道広良は、

「いまだ五歳の幸松丸さまの養女にせよと申されるのか」

と呆れ顔で言った。

この点も、幼少の当主を戴く毛利家の不利であつた。妻を持ち子を成せる年齢の者が当主であれば、その養女を作ること書類一枚で済むのだが、当主が五歳の幼童では「毛利家の姫」を新たに作るはずもない。

「いずれにしても、この縁談はなひ、わしはきつぱりと反対でござる。竹姫さまには、それに相応しい婚家を、このわしが探して進ぜる」

「長門ながと（坂広秀）はああ申しておるが

」

多治比元就が苦笑しながら両者の間に割って入った。

「四朗、お前はどうか考える？」

相合の家の総領は元綱であり、当然ながら竹姫の法的な保護者も元綱である。話を振られ、元綱は少し首を傾げた。

「女の幸せが、婚家の大小や尊卑で決まるとは俺は思わぬ。井原の小四朗殿といえ、安芸でも聞こえた弓の達者だ。武勇において不足はないが」

その返答にやや迷いがある。

「小四朗殿がどういう人柄の仁であるか、俺は知らん。お竹は大事にしてもらえようか？」

「小四朗殿は武勇に優れるばかりでなく、若いながら律儀の人と評判でござる。その人柄は涼しく、思いやりの深い仁と見受け申した。相合殿の妹御を、ゆめ疎かには致しますまい」

すかさず応えた志道広良を、坂広秀が横目で睨んだ。

「いや、四朗殿、婚家の大小は女の幸せにも大いに関わりがござるぞ。この乱世、小家こやけは明日滅んでもなんの不思議もござらぬ。嫁よめぎ先を間違えば、女は家の滅びに殉ぜねばならぬようになる。竹姫さまを殺さぬためにも、婚家はよくよくお考えになって選ばれるべきじゃ。それを、よりもよって井原なぞと」

志道広良はその視線を平然と跳ね返した。

「長門殿は婚家が大なるが良しと申される。それはその通りであるが、たとえばご当家と肩を並べるほどの家に嫁いだとなれば、風向きの如何によっては、婚家のご当家と敵味方に分かれるようなことも起こり得る。それが乱世でござる。」

そこで広良は元綱に顔を向けた。

「女子にとって、婚家と実家が争うほど辛いことはない。竹姫さまの婚家を攻めねばならぬとなれば、相合殿もお辛いであろう。」

「ふむ……。」

「井原のような小家であればこそ、ご当家の姫を迎えられれば、先方は大いに感激される。ご当家のために尽くそうという気にもなる。この縁談がまとまり、ご当家が小四朗殿を相応に遇すれば、井原がご当家の敵に回るようなことは金輪際ござるまいよ。」

両者の言に、それぞれ理がある。

二人の発言が止むと、重臣たちも思い思いの考えを述べた始めた。志道広良の意見に賛成する者、坂広秀に賛同して反対する者、おむね半々といったところだが、賛成派の方がやや多かったかもしれない。

元綱は考え込まざるを得ない。

「いずれ即答はできぬ。お竹の気持ちも聞いてみねばならぬ。しばらく考える時間をくれ。」

「もつともだ。」

元就が頷いた。

「ただ、そう長くも待てぬ。お竹を出さず、別の娘を出すとすれば、先方も面白くないであろうからな。色々と根回しも必要になる」

「わかっている」

志道広良の老獪さは、その数日後、志道城に元綱と井原元師もとかすをそれぞれ招き、懇親のための酒宴を設けたことであろう。

将を射んとすれば、ますその馬を、というわけである。竹姫の兄である元綱が「ぜひともこの婚儀を進めたい」と後押しすれば、家中の者たちの反対があつたとしても押し切れるであろう。広良は交渉の過程で井原氏の鍋谷城には何度か足を運んでおり、婿になる井原元師とも会つたことがある。その涼しげな人柄を知っていたから、いつそ元綱と引き合わせた方が話早いと思つたのである。

狙い通りというべきか。

井原元師を見た元綱は、

いい漢おかしだ。

と一目で好印象を持つた。

元師はまことに気象のよい武人で、拳止や言動に軽々しさがなく、その温顔にも表裏がないと見えた。

元師の方も、今義経の異名を取る元綱の噂は聞いており、その武勇に敬意を持っていた。お互い歳も近く、武辺者肌でもあり、たちまち意気投合したのである。

酒宴は深夜まで続き、二人は快く酔つた。

「毛利家の姫は、四朗殿の妹御であると聞いた。我が妻にもらえようか」

と元師が言つたとき、

「小四朗殿であれば、俺に異存はない。こちらからもお願いしたい」

元綱は丁重に頭を下げた。

翌日、日暮れ頃に屋敷に戻った元綱は、中庭に面する部屋 亡
き父の居室の濡れ縁に腰掛け、そこへお竹を呼んだ。

もともと相合の屋敷というのは、元綱の父である弘元が側室との遊樂のために建てた休息所のような場所で、広さはないものの中庭などはなかなか潇洒しゅうしゃな作りになっている。天然の湧泉ゆうせんがあり、洲浜かじわには柏の古木が枝を広げ、景石けいせきが置かれている。母屋の周囲には矢竹が植えられており、生垣は太い竹で組まれている。

やがて廊下をわたってお竹がやって来、元綱の背後に座った。

「兄上さま、何か御用？」

この妹は、姉のお松ほどではないにせよ、充分美人の範疇はんちゆうに入るのであろう。身体つきは薄く、手足は細く、肌は血筋が透けて見えるほどに白い。艶やかな黒髪は母譲りである。全体にまだあどけなさが抜けておらず、面貌かおの雰囲気も固まってはいるが、末は良い女になるだろうと元綱は思っている。

「話がある」

「はい」

笑顔で小首を傾げる。その仕草がいかにも小娘じみて見え、元綱はやや話しづらかったが、あえて真面目腐った顔を作って尋ねた。

「そなた、男を知っておるか？」

言われたお竹はどういう顔をしてよいか判らず、頬を少し染め

て視線を庭の植え込みに移した。

「わたくしはこの数年、このお屋敷のほかで寝泊まりしたことはございませぬ」

自分の元に通う男があるとすれば、元綱の耳に入らぬはずがないではないか、ということである。

「この屋敷の長屋にも、若い男はある。あの者どもとて木石ではあるまい。そなたと言い交わした者はないか」

「おりませぬ」

近侍の若者たちがお竹に向ける眼差しに多分の憧れが込められていることを元綱は知っていた。お竹が気に入った若者があるようなら、夫婦めおとにしてやっても良いとさえ個人的には思っていたが、お竹は「毛利家の姫」であり、部屋住みの彼らでは身分的に釣り合わず、本家の老臣たちが許さぬであろうということも元綱は解っていた。だから、「妹に手を出せば許さぬぞ」と冗談交じりに釘を刺してもいたのだが、どうやら連中は律儀に言いつけを守っていたらしい。

「あの殿方とのがたはら輩は、兄上さまを怒らせるようなことはなさいませぬでしよう」

「俺を怖れて誰も忍ばなんだか」

「たれも」

そうか　と呟いて、元綱は再び庭に身体を向けた。

「武門の姫に生まれるというのも、色々と不自由なものだな。女にとってそれが幸せであるか哀れであるかは、行く末を見てみぬことには判らぬが……」

お竹は勘が良い。兄が何を話そうとしているのか、すでに察しがついている。

「わたくしに縁談があるのですね？」

「ああ」

元綱は鷹揚に頷いた。

「お相手はどなたでありますしょう」

「井原いはいの小四朗殿せうしろうという。井原もととなり元造殿のご嫡男だ。井原の荘は、吉田から南に三里ほどかな」

それほど遠くはない、と続ける元綱の台詞を聞いて、お竹は小さく笑った。

お竹はほとんど吉田から出たことさえなく、地理など説明されたところで判らない。毛利家中の武士に嫁ぐならともかく、他家へ嫁入りするとなれば、離縁でもされぬ限り相合へは帰って来られないわけで、遠かるうが近かるうが関係ないのである。

「わたくしも武門の女です。何処いしよであろうと、兄上さまが嫁ゆけと申された処へ嫁くだけですわ」

元綱は頷いて笑みを見せた。

「小四朗殿はいい男ぶりだったぞ。あれほどの男なら、義弟にしても悪くない。お前のことも大事にしてくれるであろう」

「はい」

「婚儀はおそらく今年の暮れだ。調度なども揃えねばならんな。これから忙しくなる」

元綱がそう肚を決めたことよって、この婚約が正式に決まった。家中の大半の者がそれを祝福したが、坂広秀の怒りは相当なものだったようで、病と称して一月ばかり出仕さえしなかったし、その後は志道広良とほとんど口を利かなくなつた。

この年は、慶事が続く。

梅雨入りの頃に、多治比元就の正妻であるお久が、女子を出産したのである。

こちらも母子ともに健康で、お久の産後の肥立ちも良かったのだが、生まれた子はやや早産だったためか子柄が小さく、その発育と健康が懸念された。しかし、元就もお久も初子の誕生を心から喜び、お杉の方などと共にその幸福に浸つた。

珍しくしばらく戦もなく、安穩に季節が巡っている。毛利家の二人の貴公子に続けざまに子が生まれ、さらに姫君の輿入れも決まり、吉田に暮らす家臣も領民も、どこか平和な気分のなかで月日を過ごしていた。

しかし、この閑日月は、後から振り返れば「嵐の前の静けさ」と呼ぶべき一時の嵐に過ぎなかつた。

第四章 吹き荒れる腥風 嵐の前の静けさ(二)

この時代、全国の街道や川の渡し場などには驚くほど多くの関所がある。

交通量の多い街道ではそれが特に顕著で、たとえば伊勢では、伊勢神宮への参拝客を当て込んで、松坂から伊勢神宮・内宮までのわずか五里ばかりの間に数十ヶ所もの関所が作られ、どのルートを選んでも片道百文以上の関銭が必要であつたらしい。在地領主にすれば、通行税は貴重な現金収入源であり、それを取ることは当然の権利だつたのである。武士や百姓といった土地に定住する人々は、地方をまたいで長距離移動をすることはそもそも稀なのだが、旅行などしたくともできないというのが実情であつたろう。

現代に比べて人の移動が少なく、通信手段も限られているから、当然ながら情報の伝達経路は格段に少なくなる。そんな中世においては、関所を素通りできる宗教関係者の存在が、情報の伝播に非常に重要な役割を担っていた。

出雲の尼子経久が、杵築大社（出雲大社）の遷宮を独力で執り行ったという噂を元綱が聞いたのは、遠乗りの帰りにふらりと常楽寺に立ち寄つた時だつた。

「『天下無双の大廈』と讃えられるあの杵築大社ですよ？ ご遷宮ともなれば、いったいどれほどの費えが掛かるのか、正直なところ想像もつかない。大したものだと思いますね」

墨染の直綴姿の清げな少年が、尼子経久の偉業を口を極めて褒めた。

年齢は十七、八であろう。奇麗に剃りこぼつた頭の下で、切れ長の眼がいかにも利発そうに輝いている。元綱の父である弘元の四男坊で、元綱の腹違いの弟である。僧名を就心という。

「毛利じゃあこの寺を建て替えることさえ難しいでしょう？ 今の日本で杵築大社のご遷宮を成せるほどの財力があるのは、大内のお屋形さまを除けば、西国では出雲のお屋形さまか、阿波・細川家の執事である三好筑前殿（之長）くらいじゃないかなあ」

「法衣を着てるくせに、えらく娑婆くさい事を言うじゃないか」

元綱が擲掬と、

「私のような長袖者は、浮世を離れておるからこそ、浮世の娑がよう見えるのですよ。たとえば川に棲む魚は、己が棲んでおる川の姿を見ることはできぬでしょう？ それと同じです」

弟はなぜか大いに威張った。長袖者というのは、公家、僧侶、神職、学者といった人々を指す。

「実はつい先日、越前のご本山から人が参りましてね」

修行のために西国を遊行していた僧が常楽寺に立ち寄り、道々見聞きした話を色々と聞かせてくれたのだという。

ちなみに常楽寺は曹洞宗の禅寺である。禅はこの時代においてもつともモダンな思想的流行であったが、同じ禅宗でも、この時代ですでに十四の宗派が乱立する臨済宗と違い、開祖・希玄道元が宗派を名乗ることを禁じた曹洞宗では宗派が分立することはなく、その大本山として福井県の永平寺と石川県の總持寺が並び立ち、この二寺が全国の曹洞宗の寺院を総覧していた。戦国期に曹洞宗の寺院がどれほどあったかは判然としないが、現在は全国で一萬三千余を数えるという。明治期の廃仏毀釈運動が起こる以前はそれよりさらに多かつたであろうことを思えば、曹洞宗の情報網がいかに充実して

いたかが想像できるであろう。中央政権と結びついて学芸・文化の中心として君臨した臨濟宗が、室町幕府の凋落と共にやや停滞し、生彩を欠いたことに比して、曹洞宗は戦国期に地方の豪族や庶民と結びついて大いに勢力を伸ばしているのだが、それも理由のないことではなかったのである。

その曹洞禅の堂宇で春秋を送っている就心は、自然、諸国に対する広い眼を持つている。

「大内のお屋形さまが京を去られて以来、上方ではひどい争乱が続いているのだそうですよ」

と言った言葉にも、十分な論拠があった。

大内義興が京を去って以来、政治的・軍事的バランスが崩れた畿内では、大内軍に京を追われた細川澄元が本拠の四国・阿波あわで勢力を盛り返し、足利義植を擁して京を牛耳る管領・細川高国と激しく争っていた。細川政元が暗殺された「永正の錯乱」から十年以上にわたって続くこの細川氏の内訌を、俗に「両細川の乱」と呼ぶのだが、このことによって細川氏は決定的に勢力を弱め、その家来であった三好氏の台頭を許すことになる。

「公方さま（足利義植）は管領殿（細川高国）との仲がいよいよ陰悪となり、敵であった細川澄元殿と結ぼうとなされておるといふ噂さえあるそうです」

「ふむ」

元綱は鼻から息を吐いた。

「いずれ雲の上の話だなあ」

対岸の火事どころか、別世界の出来事という顔である。
少年はやれやれと首を振った。

「その雲の上の争いが、こんな安芸の大田舎にまで及んでくるから、侮れぬのではないですか。『応永の乱』でも『応仁の乱』でも毛利は兵を出しています。父上が若くして隠居されたのも、大内のお屋形さまが幕府と喧嘩をしたからでしょう」

その通りなのである。

父の弘元は、幕府　つまり管領である細川氏　から現將軍・足利義澄の命に従うよう迫られ、臣従していた大内義興からは庇護する前將軍・足利義植に味方するよう命じられ、進退が極まった末に、三十三歳の若さで隠居するという奇策をひねり出したのだ。当時まだ八歳だった兄の興元に家督を譲り、大内義興にその庇護を頼むと同時に、自らは多治比の猿掛城に居を移し、幕府の命を奉じる姿勢を取ったのである。毛利家を大内派と幕府派にあえて割り、双方に良い顔をするという実に際どい外交を、病死するまで七年間も続けていたらしい。

毛利のような地方の小豪族でさえ、中央の政情にそれほど大きな影響を受けるのだ。

「多治比の兄上は、『他国の話を耳に入れたらどんなことでも報せてくれ』と私に頭を下げに来ましたよ。幸松丸さまを後見するお立場だから、色々と気苦労も多いことと拝察しています。相合の兄上は部屋住みだからと気楽に構えておられるが、政治向きのことにも少しは関心を持つたらどうですか」

「はは。耳が痛い」

苦笑せざるを得ない。

「だが、『船頭多くして船山を登る』ということもある。そうでも今は衆議で家政を執っておるのだから。俺などは遊んでるくらいでちょうど良いのさ。俺がお前のように口煩くさえずってみる。兄者はそれこそやりにくいだろう」

武士の人生の主題は、単純であるほど良いと元綱は思っている。元綱が現代人であれば「シンプルに生きたい」とでも表現したであろう。自分が毛利家の役に立つことといえば、戦場の働きしかない。毛利家のために戦い、いずれどこかの戦場で死ぬ。

俺の生は、ただそれだけでいい。

武門の家に庶子の三男坊として生まれついてしまった以上、それ以外の生き方はむしろ考えるべきではないのである。そこがブレさえしなければ、人生が余計な迂路に入り込むこともないであろう。

文章博士もんじょう　つまり歴史学者の家系に生まれた元綱は、「政治」が、ときに悪魔的な運命を織りあげるものだとということを知っている。どれほど多くの武家が内部抗争によって滅んでいったかを知っている。兄弟や肉親が争い、親が子を殺し、兄が弟を殺した実例を、いくらかでも挙げる事ができた。

たとえば義経は、平家打倒という目的のためだけに生き、すべての情熱をその一点に注いだはずだが、後白河法皇に取り込まれ、政争の具にされたがために、兄である頼朝の手によって滅ぼされねばならなかった。その悲劇の人生は「物語」にはなったが、すべての栄光と功績を否定され、慕った兄から憎まれ追われ、惨めな形で望まぬ死を強制されたことは、義経にとって血涙を流すほどに不本意であつたろう。

義経を研究し尽くした元綱が、それと同じ轍を踏みたくないという想いを抱くようになったのも、ごく自然な成り行きであつた。

「俺は芝居（戦場）で働いておれば良いのさ」

という元綱の台詞は、「政治」からは極力遠ざかっておきたいというその信条を、逆説的に表しているのである。
が、弟の理解はそこまでは及ばなかったらしい。

「兄上は親になっても合戦しぐさのことばかりですねえ」

と、呆れたように言った。

「まあ、欲がないのは悪いことではないけれど。いずれ兄上もどこぞに領地をもらって家を立てることになるでしょう？ それを継がせる子も出来ましたしね。己の家を持てば、おのずと考えるところも違つてきますよ」

「そうかもしれんな」

この話を続けるのも面倒なので、元綱は曖昧に頷いてみせた。

ちなみにこの弟は、後に還俗して武士に戻り、北きた氏の名跡を継ぎ、北就勝なりかつと名乗ることになる。足が悪かったこともあり、戦場働きは不得手だったようで、目立った武功の記録は残ってないが、毛利元就の弟として私心少なく毛利本家をよく支えた。

余談の余談になるが、弘元には侍女に手をつけて産ませた息子がもう一人ある。見付元氏みつけもとじという名で知られる人物で、弘元の庶子としては遇されず、家臣として毛利家に仕えたらしい。母は井上一族の井上元信という男の娘であったという。元綱の兄に当たるのか弟になるのか、その年齢は不明としか言いようがないのだが、この物語では、見付元氏を弘元の五男とし、現在は井上元信の元で素性を隠して養育されていることにおきたい。

元綱は、しばらく弟と笑語して、日暮れ前に相合の屋敷に帰った。その夜、ゆきの部屋で盃を傾けつつ、出雲大社の遷宮の事を教え

てやった。

「あつ、ご遷宮は無事に終わりましたか」

ゆきはパツと顔を明るくした。

「本当に、よろしゅうございました」

感慨深げに瞑目し、両手を合わせた。

尼子経久は、出雲大社の遷宮のための仮殿かりでんの造営を、永正五年から始めていたのだが、この初夏、実に十一年の歳月を掛けてついに落成し、仮殿遷座せんざを実現してのけたのである。出雲大社に残る記録によれば、このとき経久は、境内に大日堂、三重塔、輪蔵、宝庫など仏式の建物をも建立したという。四月二十八日に行われたというその遷座祭が、諸豪の度肝を抜くほどの盛大さで執り行われたことは言つまでもないであろう。

「杵築大社きつきのおおやしろか。一度はこの目で見てみたいものだ」

梅雨明けしたばかりで、夜だというのに部屋はやけに蒸し暑い。酒器を置いたゆきは、扇子を広げ、優雅な手つきで夫に風を送り始めた。その背後には小ぶりな蚊帳が吊られ、中で幸さいちが鶴寿丸かくしゅまるをあやしている。

「本殿は雲をつくような高さで聞いたことがあるが、実際どのようだ？」

「四朗さまもお聞き及びとは思いますが、天下無双の大廈たいがと讃えられます御本殿は、神代かみよの昔には三十二丈（九六メートル）もの高さがあったと伝わっております」

「三十二丈！？ 本当か？」

元綱は仰天した。ほとんど小山ではないか。

「そんな建物を人の力で作ることができるものなのだ。しかも、大昔のことなのだろう？」

「そのように伝えられておりますわ。けれど、残念なことに、それほどの高さの殿舎を建てるだけの技術わざが、今では失われてしまったのです。それでも平安の頃までは大和（奈良）の大仏殿よりも高かったそうなのですが。今は十丈（三十メートル）ほどに過ぎません。造営しておりました仮殿の方も、同じくらいの高さになっておるものと思います」

「十丈でもまだ小さいというのか……」

元綱がこれまで目にした中で最大の建築物と言えば、幼い頃に参拝した巖島神社である。海面にそびえる朱塗りの大鳥居は圧巻で、その大きさに驚倒したものだ。高さはせいぜい五丈ほどだったはずだ。十丈もの高さの拝殿というのは、もはや想像を絶している。

「出雲のお屋形の富強のほどが知れるな。いったいどれほどの銭が必要になるのか、想像もつかん」

「お屋形さまには、銭や材木など、多くの寄進をして頂きました。私たちのような巫女や、御師おしの方々も、諸国を巡り歩いてご喜捨を集めておりました。長年の念願でありましたから、ご遷宮が無事に行われたと聞けば、素直に嬉しゅうございます」

妻の笑みを眺めつつ、

「さもあるうが……」

元綱は思案顔になって盃を含んだ。

「これで出雲のお屋形は、国内での仕事にひとつケジメをつけたこととなる。大社の神威を光背こうはいのようにして、権威にもさらに箔が付いた。ご遷宮の祝いに駆けつけた豪族たちの結束も強くなったであらう」

ゆきが何かに気づいたように顔を上げた。

「他国に打って出るおつもりじゃと……?」

「そうなるような気がするな。まず狙うは、石見か、あるいは備後か。この安芸も、遠からず必ず騒がしくなるう」

嵐がやって来るような不安を、ゆきは覚えた。

日差しが真夏のものになって、多治比川の川面の輝きも変わった。お久は、生まれたばかりの我が子を抱きながら、猿掛城の城頭からその輝く帯を眺めていた。

安らかな寝息を立てている愛娘に、夫の元就は菊きくという名を付けた。

蝉の声がかまびすしい。

「お方さま、新庄のお父上さまがもうお着きになりますよ」

老女のお静がそれを報せに来た。

「判っていますよ。ここからお父さまの一行が来るのを眺めていたの」

父である吉川国経が久方ぶりに多治比にやって来ることは、先触れによつて昨日のうちに知らされていたのである。

「まあ、それでは何をのんびりとなさつておいですか。早くお出迎えのお支度をなさいませんか」

「お料理の支度などはもうすべて済んでいるでしょう？ わざわざ着替える必要もないし。お静は何を慌てているの？」

「いいから早くお部屋にお戻りください。お殿さまがお待ちになつておられますよ」

「あら、旦那さまが？ それなら最初からそう申しなさい」

お久が早足で庭を廻り、局つぼねの前まで来ると、その濡れ縁に夫が座つていた。

「申し訳ございません。お待たせを致しました」

「ああ、いいんだ。今しがた先触れの者が来たのでな。もうおつつけしゅつせ舅殿も到着なさるであらう」

「はい」

元就が手を出したので、お久は幼児を夫に手渡した。

馴れぬ手つきでやや恐々と赤子を抱いた夫は、その無垢な寝顔を眺め、優しげに微笑した。

「孫を抱くというのはどういう気分なのであるのかな。我が子を抱くより嬉しいものだろうか」

「さあ、どうでしょう？ でも、父にはもうたくさん孫がおりますから」

特別珍しいことでもないだろう、とお久は思う。お久には兄が三人と姉が一人おり、それぞれすでに子を成している。

しかし、その国経にとっても、お久の生んだ子はやはり特別であったらしい。お久は老境になってから授かった末娘であり、格別に可愛がっていたのである。孫を抱いた国経は、顔をくしゃくしゃにして喜んだ。

「でかした!」

抱き上げた菊を高く掲げ、上下左右から眺め回し、眼は父親似だとか口元は母に似ておるなどと、他愛ない感想を言って笑った。

「気の早い話だが、次は是非とも男児おのこを産んでくれよ」

言われたお久は苦笑せざるを得ない。隣で元就も同じような顔で笑っていた。

「父上はお前をよう可愛がってくださいな。この子を見ればどんなにかお喜びになるだろうが」

国経の口調が珍しくやや気弱げである。

「お爺さまがどうかなされたのですか？」

鬼吉川 吉川経基つねもとは、次の正月で九十三になる。

「うむ。実は、先ごろから病みつかれてな。具合があまり良くない」

「……お悪いのですか？」

「お年がお年だしの。どこが悪いというより、天寿を迎えようとしておられるのやもしれん」

お爺ちゃん子であつただけに、お久は胸を締め付けられるような切なさを感じた。仏教では生老病死しじょうぶじを「四苦」と呼び、怨憎会苦おんそりえく、愛別離苦あいべつりく、求不得苦くふとくく、五蘊盛苦ごうんじょうくと合わせてこの世に「八苦」があるとし、人の営みの一切を「苦」であると説く。生まれて来る命があれば、老い衰え、失われてゆく命があることも自明であり、そのことはお久もよく解っているつもりであつたが、解っているからといって愛別離苦あいべつりくの悲哀から逃れられるものでもないであろう。

しんみりとしてしまった場を仕切り直すように、国経は声を明るくした。

「そうそう、お前の叔母上から手紙ふみを託ってきたのだ」

国経は菊をお静に返し、持参した文箱から書状を取り出した。

お久の叔母 国経の妹は、尼子経久の正室となり、出雲の月山富田城で暮らしている。歳が三十近くも離れており、お久が生まれ
た頃にはすでに出雲へ嫁いでいたこともあって、その顔を見たこと
さえないのだが、お久が吉川家にいた頃は、四季の手紙のやり取り

や贈り物の交換といった形で交流は続いていた。

「アレにとつて、お菊は姪孫てっそんになる。祝いも送ってくれたのでな、持ってきた」

手紙は流麗な女文字で、無沙汰を詫びる型通りの挨拶と、お久の初子の誕生を祝う言葉が並んでいた。

「お前の耳にも入っておるやもしれんが、お菊が生まれる少し前に、杵築大社の遷宮が無事に行われたそうじゃ。出雲のお屋形が十年を掛けて仮殿を建てたのだそうだな。お前からも叔母上に祝い状を書いておきなさい。大朝へ届けてくれれば、あとはわしの方から出雲へ送っておこう」

叔母の縁を頼って、さりげなく尼子氏との誼みを深めておけ、という裏の意味も込められているのであろう。それに気付けぬほどお久も元就も鈍くはない。

その夜、お久たちは父の一行を饗応した。

酒豪の国経は痛飲し、酒を飲まぬ元就はその応接に苦労させられたようであった。しかし、その国経も政治的な話は一切しようとはしなかった。

大内、尼子という二大勢力に挟まれた安芸に住む豪族たちは、両者の鼻息を窺いながら去就を決めねばならない。それは当然のことだが、お久は、大内氏や尼子氏がどれほどの軍事的・政治的実力を持っているか、といったことを実感として知っているわけではなく、両者を比べようもないから、どちらにつくことが自分たちの身の安全に繋がるのかというもつとも肝心な部分に定見が持てないでいた。実家の吉川氏が尼子氏寄りであることは解っているものの、その選択が正しいかどうかまでは判断できないのである。

小豪族は「自家の生き残り」を真つ先に考えるべきであり、その

ためには勝つ方につかねばならない。大内と尼子のどちらが勝つか。どちらが安芸を支配するのか。元就にその定見があるのなら、聞かせてもらいたいとお久は思っているのだが、毛利家は大内氏に臣従しているという公然とした事実がある以上、大内氏への裏切りを暗示するようなことを直接的には訊きにくく、これまでその話題には触れずに過ごしてきた。

が、いつかは通らねばならぬ道であろう。

翌日、父が帰った後、お久はあらためて元就に訊ねてみた。

「ご当家は大内のお屋形さまを主君と仰いでおりますが、わたくしが出雲の叔母と懇意にしておるなどと世に聞こえれば、元就さまのお立場が危ういことになりはしませんでしょうか」

しばらく考えた元就は、ことさら気軽い口調で言った。

「……まあ、大事あるまい。答礼は当然の礼儀だしな。そもそも私のような小身な者のことなど、それほど気に掛けておる者もあるまいし」

「けれど、元就さまは幸松丸さまのご後見としてご当家の家政を司っておられます。いざ合戦となったとき、総大将としてご当家の軍配を執られるのも元就さまでございましょう？ 大内のお屋形さまにせよ、他家の方々にせよ、そういう目で元就さまを見ておられるはずですわ」

「ほう、よう気付いた」

元就は微笑した。

「お久は知恵者だな。物がよう見えておる」

「またお擲掬からかいになって」

「いや、本心からそう思って感心している」

「わたくしが姪であるからといって、出雲へ余計なお気遣いはご無用でございますよ。そのことで元就さまが大内のお屋形さまより睨まれ、苦しいお立場に立たされるようでは困ります」

子を生んだことで、お久の裡なかで少なからぬ変化が起こっている。優先順位が変わったと言ってもいい。吉川家よりも毛利家よりも、多治比家こそが大事だと、心から思えるようになっていた。

思案顔で腕を組んだ元就は、今度は慎重に言葉を選ぶようにして言った。

「正直なところ、大内からも尼子からも睨まれたくはないな。毛利のような小家こやけは、長い物には巻かれるしかない。が、同じ巻かれるにしても、上手に巻かれてゆかねばならぬ。紆余も曲折もあるだろうが、生き残らねば何もならんからな」

微笑とも苦笑とも見える笑みが口元に浮かんでいる。

「まあ、そんなわけだから、周防へはもちろん礼を尽くさねばならんが、出雲へも義理は欠けぬ。叔母上への礼状は懇ろに書いてくれ」

場合によっては尼子に寝返る、という意味に取れぬこともない。

ご本心かしら。

お久のような豪族の姫は、他家に嫁いだ瞬間から、外交官と間諜を兼ねたような役割を担うことになる。婚家と実家の友好のシンボルになることはもちろんだが、婚家の情報を密かに実家に伝えたり、

場合によっては実家の利益のために夫を動かすことさえ求められるのである。夫の元就も当然のこととしてそれを承知しているわけで、婚家と実家の利害が明らかに相反するような時、いかに夫婦といえど肚を割って話せぬことはあるし、話さぬ方がお互いにとって良い場合だつてあるだろう。

それとも何かご思案があつて、韜晦とうかいしてらつしやるのかしら。問わずとも、語らずとも、夫の心情が判るようにならねば本当の妻とは言えない。お久は己の未熟さが齒痒こげかゆかつた。

だが、当の元就にしても、未来に対して確固たる展望があるわけではなかつた。

大内、尼子のいずれが安芸を取るにせよ、安芸の豪族たちのなかで毛利を安泰な位置に置いておきたい。

というのが、口には出せぬ元就の本音なのである。

高橋氏という大樹の陰に隠れつつ、国人一揆（豪族連合）という特殊なカードを陰に陽に利用しながら、大内・尼子という二大勢力が起こすであろう大波に吞まれぬように毛利家の舵を切つてゆく。

この時期の元就の思案といえは、そのあたりが精一杯であつたろう。

さて。

相合の元綱の屋敷の裏側は、ほんの一町も行くと藪に覆われた小山になつている。

郡山の西尾根に当たる天神山の山裾に盛り上がった丘のような山で、地元では船山と呼ばれている。比高にしてわずか三〇メートルほど。その鼻先を山部川という細流が巡り、相合川へと流れ込んでいる。

独り静かに剣を振りたくなつたとき、重蔵はよくその山に登つた。山頂付近に藪のない広場のような場所があり、しかも樹木に囲まれて人目につかないから、重蔵のお気に入りであつた。

剣術は合理である、と重蔵は思っている。

その型は先人たちの長い研鑽と練磨の果てに作りだされたものであり、それが型として残った以上、勝つべくして勝つ理由、相手を打ち負かす道理がそこに必ず込められている。

あとは、その動きをどれだけ速く行えるか、であろう。筋力や体力はもちろん必要ではあるが、それに頼って身体を「動かして」いるうちは本質ではなく、あくなき反復練習によって身体が反射として動くようになって、やっと「入口」に立てたことになる。そこからさらに基礎的な筋力や体力を鍛え、技を磨き込んでゆかねばならない。

船山に登った重蔵は、そこで型を反復し、そのひとつひとつの動きに無駄がないことを点検する。あえてゆっくりと動き、身体に染みついた動きにズレや歪みがないかを入念にチェックし、それを終えると、今度は限界まで動きを速く行ってみる。

「技は心に循うものじゃ」

穴戸家俊の言葉を思い出し、重蔵はふと動きを止めた。

わしの技に心はあるのか。

反射の動きに心の介入する余地があるのか。刹那の時間に凶刃が交錯している瞬間、心は何かを想っていただろうか。

無我の境地ということもある。

同じ動きを心が擦り切れるまで続けていると、ある瞬間、意識がふっと消え、身体がひとりでに動いているような錯覚を覚えることがある。無我に没入しているその時、身体は、技は、心に循うしたがいると言えるのだろうか。その瞬間、穴戸家俊と重蔵とでは、心事がまったく違うのであろうか。

そのようなことを考えていると、ふと思い当たることがあった。

戦場でたびたび経験したことなのだが、まさに戦っている最中、周囲のすべての動きが急にゆっくりになり、そのスローモーション

の世界で自分だけが普通の速度で動いているような、不思議な錯覚に襲われたのである。敵兵の槍先、太刀先が鮮明に見え、それを容易にかわすことが出来、自分の槍、太刀は面白いように正確に敵の急所を襲った。まさに一瞬の出来事であるのだが、その一瞬を、重蔵は数秒間にも感じた。普通ならいちいち物を考えることなどできるはずのない一瞬に、いくつもの思考をし、行動を選択したことを覚えていた。

どういう契機きっかけでそれが起こるかは解らない。自ら意識的にその状態を作り出すことも今の重蔵にはできない。しかし、通常では意識できない刹那の瞬間を、心のままに動いていたことになるのではないか。

それは穴戸家俊が示唆したものと違っているかもしれない。まったく別のことであるかもしれない。しかし、どこかで相通ずる部分があるようにも思える。

解らぬことだらけだ。

そういう自問自答を、これまで重蔵は己に課したことさえなかった。あの修験者が、自分のどれほど先を歩いているかを、そういう部分でも思い知らされる。

それとはまた別に、穴戸家俊の言葉で、重蔵の頭を離れぬものがある。

「鬼一法眼きいちほうげんが義経に授けし兵術の妙理」

あの修験者にあつて、自分に足りないものはそれだ、と重蔵が単純に思ったわけではない。しかし、ああいう言い方をされると、それがどんなものであつたかを知りたくなるのが人情であろう。

鬼一法眼というのは、「京八流」の祖と言つべき半神的な兵法者であり、秦家はたに伝わる義経流の剣術においても遠祖と言つべき人物である。同時に呪術を極めた陰陽師おんみょうじであり、兵法家でもあつたと伝わっており、重蔵の裡なかでは人間というより天狗や仙人に近いイメー

ジがあつた。

その鬼一法眼が、義経に授けたという兵術の妙理。
それを会得した義経は、軍を率いて負けたことがなく、天才的な戦術を駆使して平家軍を次々と撃破し、日本史上未曾有の功績を打ち立てたのである。それだけに、その「妙理」がいかにも神秘的な風韻を帯びたものに思えてくる。

なにやらいわくありげな……。

それは修験の行にも通ずる怪しげな秘儀なのだろうか。あるいは単に戦術の引き出しか。それとも兵法の技にも通ずる合理であろうか。

一日、酒の席で、考えも纏まらぬまま、そのようなことを口に出してみた。

その話を聞いていた元綱が、

「ああ、『六韜』のことだろう」

と事もなげに言ったので、重蔵は仰天した。まさか回答が得られるなどとは思ってもいなかったのである。

「りくとう!? りくとうとは何です!?!」

「唐土の兵法書だ」

元綱はさも当然という顔で答えた。

古代中国、周の軍師・太公望が著したとされ、武経七書にも数えられる代表的な兵法書である。俗に『六韜三略』、単に『六韜』とも呼ばれ、全六篇・六十節で構成されている。

「『義経記』に『義経鬼一法眼が所へ御出での事』という段があつてな。そこで義経は鬼一法眼に会つてこう言っている」

元綱は宙を睨むようにしてそれを暗唱した。

「『御坊は異朝の書、将門まさかどが傳つたへし六韜兵法と云ふ文（書物）てん、殿上じょうじょう（朝廷）より賜はりて秘蔵して持ち給ふとな。其の文私わたくしならぬ物ぞ。御坊持ちたればとて、読よみ知らずば教へ傳ふべき事もあるまじ。理ことわりを枉まげてそれがしに其の文見せ給へ。一日の中に読よみて御辺にも知らせ教へて返さんぞ』」

六韜兵法　確かにそう聞こえた。

「まあ、実際、鬼一法眼が義経に授けたのかどうかは判らんがな。『義経記』では、義経が法眼の娘を籠絡たごらし、『六韜』を騙して奪い取ったように書いてある」

「そうなのですか……」

重蔵の認識では、牛若丸と呼ばれた頃の義経は、鬼一法眼によつて剣術と兵術を授けられたものだとばかり思っていたのだが、『義経記』ではそういう書かれ方はなされていないらしい。

「なんだ、読みたいのか？　妙に説教臭いし、別に大したことも書いてなかったように思うが。読みたいなら郡山城にあるぞ。いや、今は兄者が持つておつたのだったかな」

数日後、元綱は約束通り『六韜』を兄から借りて来てくれた。

と、同時に、もう一冊、古びた和綴じの小冊子をも貸してくれた。表紙に『鬪戦経とうせんきょう』と題書がなされている。

「……これは？」

「江家に代々伝わる軍略の奥義の書だそうだ。毛利の当主が相伝してきたものらしいが、どういっわけか、父上はそれを俺にくだされた」

「ご当家の、いわば家宝のごとき書ではありませんか。そのような物を、わしのような者に読ませてもよろしいのですか」

畏れ多い、という感覚ではない。毛利が大江氏の末裔なら、重蔵だって上北面・秦出羽守の歴とした末裔であり、血の尊貴さにおいてそう引けを取るものではないのである。ただ、家にはそれぞれ家法というものがあり、毛利家が門外不出としているであろう書物を自分のような門外漢が読んでも良いのか、というところに重蔵の躊躇と遠慮がある。

しかし、元綱は、

「構わんさ。文字はしよせん文字に過ぎんからな」

まったく気にした様子もなくそう言った。

「それを読んだとして、それで軍略の蘊奥（奥義）を極められるというなら、毛利の武将は合戦の天才だらけということになる。知ったところで解る者と解らぬ者があり、血肉になる者とならぬ者があるのだ」

「そういうものですか・・・」

「いや、実は今のは父上の受け売りだ」

元綱は照れたような笑みを見せた。

「父上は、読んだら忘れよと申ししていた。忘れたらまた読めとも申していた。そうしておれば、そのうち何やら解ったような気になれる」と……。その書に書かれておることは一字一句まで憶えてしもうたゆえ、今さら忘れることも難しいのだが、俺自身、その真髓を解っておるのかおらぬのか、未だに自分でもよう判らぬ」

開いてみると、『六韜』はもちろん、『鬪戦経』も漢文で書かれている。重蔵には読解が難しそうである。

「兵術と兵法は別のものだが、裏を取ったり虚を衝いたり 人を相手にするという点では同じだ。お前の兵法に、その書から何か得るものがあれば、儲けものだろう」

その殊遇に重蔵は感動し、嬉し涙が溢れてきた。

四朗さまにお仕えできて良かった。

と、この時ほど思ったことはない。

「ありがとうございます しばらくお借りします」

重蔵は二冊の書籍を胸に抱き、主人に深々と頭を下げた。

第四章 吹き荒れる腥風 暗闘（一）

言うまでもないことだが、現在の広島県は安芸と備後を合わせた地域である。

ごく大ざっぱに言えば、広島県の西側 広島湾を囲む地域とその北が安芸の国であり、三次市と三原市を繋いだラインより東側が備後の国になる。

律令制の行政区画が定められて以来、安芸は八つの郡こおりに区分けされている。西から佐伯郡さえき、安芸郡、賀茂郡かも、沼田郡ぬたが瀬戸内海に面していて、その北に高田郡と沙田郡さたがあり、最北の山県郡やまがたと高宮郡で石見と国境を接している。

毛利氏は、高田郡の過半と山県郡の一部を領有しており、本拠である吉田は高田郡の東の端にある。その北の高宮郡と高田郡の一部を高橋氏と宍戸氏が奪い合っていて、北西の山県郡は過半を吉川氏が押さえている。南方の佐伯郡と安芸郡は守護・武田氏が大きく勢力を張る地域で、その東の賀茂郡、沼田郡、沙田郡には、国人一揆の盟友である小早川氏、平賀氏、阿曾沼氏、天野氏といった豪族たちが割拠し、独立系の豪族としては井原氏、及美氏、野間氏などがある。さらに瀬戸内海には大小の島々が無数に浮かんでおり、能美のみ氏、多賀谷氏、村上氏といった海賊衆が大内氏に従属する形で制海権を握っていた。

一方、備後は安芸とほぼ同じ面積だが、郡の数は十四もある。

吉田の郡山城から、東へ直線距離で三里も進めば備後に入ることができる。吉田の南東が世羅郡せら、東が三谿郡みたに、その北で石見と出雲に境目を接しているのが三次郡みやじである。ちなみに世羅郡と三谿郡は毛利領と隣接しており、毛利氏は備後にもわずかながら領地を持っている。毛利氏はまさに芸備の境目に根を張る豪族であり、備後に対して「異国」という感覚はまったくなかったであろう。

中国山地の山々が連なる安芸の北部はそのほとんどが山林であり、

山壁の隙間に無数の小盆地があり、盆地を連結するように川が流れ、街道が通っている。芸備国境は、平佐山、毛宗坊山、権現谷山、大土山といった山々で、いくつかの峠道や街道が両国を繋いでいた。

その境目の山々を左手に眺めながら、山間の街道をゆっくりと南進してゆく行列があつた。女輿を中心にして、五十人ほどの男女が歩いている。

毛利家の姫　お竹の花嫁行列であつた。

兄であり保護者でもある元綱は紋服姿で馬上にあり、その馬の口を重蔵が取っている。毛利本家の代表として志道広良が同行し、元綱の近侍を含め、護衛のための兵が三十人ほど。あとは道具持ちや侍女などである。元綱には経済力はないが、お竹は「毛利本家の姫」として飾られたから、輿入れのための衣裳や道具類はそれなりの物が用意されていた。

季節は初冬　秋の取り入れが無事に終わり、いよいよ雪が落ち始めようかという時期である。

一行は、陽が西に傾き始めた頃に向原の日下津城に入り、食事を取ってしばらく休息した後、日没後に再び出立し、三篠川みさのに沿う形で南西に向かった。

目的地である井原氏の鍋谷城は、向原から二里ばかりの距離にある。坂氏が管理する関所を通り抜け、左右が山によつて塞がれた谷状の街道を進んでゆくと、井原氏の家来の人数が花嫁を受け取るために待っていた。

「遠路はるばるようお越しくだされた」

井原氏の重臣らしい初老の男が、人の善い笑みを浮かべて頭を下げた。

「お出迎え、痛み入る」

元綱は下馬して挨拶を返した。

輿の担ぎ手が毛利家の者から井原家の者へと交代する。

元綱はそこで護衛の毛利兵を帰らせ、再び一行は南進を始めた。しばらく進むと井原氏の関所があり、それを抜けると左右の山陰がやや開けた。暗くてよく解らないが井原の集落に入ったらしい。正面に、闇色の山々を背景にして、奇麗な紡錘形の小山の稜線が篝火によって浮かび上がっていた。

井原の領民たちがやや遠巻きに見物するなか、城山を目指してさらに進む。

その山麓に竹林に隠れるようにして井原氏の居館があり、やはり篝火が盛大に焚かれていた。

井原氏の家来たちが門の前にずらりと居並んでいる。

思っていたより井原は富裕そうだな。

と元綱が感じたのは、その居館に石垣が用いられていたからだ。

井原は小さな集落だが、安芸の経済の陸の中心である西条から近く、山間の街道が集まる中継点のような位置にある。いわば重要な商路を押さえているわけで、その分だけ現金収入が多いのであろう。

「四朗殿、ようお出でくだされた」

花婿である井原元師もとかずが、その父母と共に玄関の式台に立ち、元綱と花嫁を出迎えた。

うつむくお竹の横に立った元綱は、

「小四朗殿、我が妹でござる。ふつつか者ですが、よろしゅう頼みます」

丁重に頭を下げた。

一行は別室でわずかに休息した後、広間に導かれ、そこで祝言と祝宴が行われた。

祝宴は、簡素ながらも行き届いたものだった。

「今日より小四朗殿は毛利の一門となった。井原の弓が味方についてくれたことは、心強い」

元綱は、妹の前途には何の不安も覚えていない。良い伴侶を選んだという自信と、盃を傾ける義弟の屈託ない笑顔が、元綱をさらに陽気にした。

実際、この婚姻は毛利家にとって大きなプラスとなった。井原元師は毛利家の有力な武将となり、家政に参与する重臣に名を連ねているし、その子や孫も各地を転戦して武功を立てている。ことに元師の曾孫の元尚もとなおは頸弓けいきゅうの誉れ高く、戦国時代の末期 すでに鉄砲が全盛の頃である 毛利軍が四国に遠征した際、その武名を敵味方に轟かせたという。

翌日、元綱は上機嫌で相合へと帰った。

相合の屋敷の門を潜ると、母である相合の方が、亡き父の部屋の濡れ縁に腰掛けて夕暮れの中庭を眺めていた。

息子に目をとめた相合の方は、

「このお屋敷もすっかり静かになりましたね」

と寂しげな笑顔で言った。

相合の方には元綱の他に三人の娘があるが、みな他家に嫁いでしまっており、ついに末娘のお竹までが手元を離れてしまった。相合の方はまだ知命ちめい（五十歳）に届かぬ年齢であったが、母としての務めが終わったという想いが、彼女の心境に大きな変化をもたらしたのである。

「わたくしはそろそろ髪をおろそうかと思えます」

と出家の意志を示したのである。
さすがに元綱は大きな衝撃を受けた。

「前々から考えてはいたのだけれど、お竹も無事に片付いたし、心に区切りがつかしました。多治比の悦叟院えそういんに庵室あんしつを建てて頂けるよう、あなたから多治比の殿にお願いしてもらえませんか」

亡父の菩提寺で静かに余生を送ろうというのであろう。

元綱がとっさにどういふ返答をすべきか迷っていると、ゆきの局じゆから鶴寿丸かくしゅまるの泣き声が遠く響いてきた。

その方に顎を向けた元綱は、

「子が増えれば、またここも賑やかになります。御仏に仕えるのはもう少し先でも良いではありませんか」

やんわりと再考を促した。

考えてみれば、側室であるゆきは「鶴寿丸の母」という以外になんの身の保証も持たず、吉田に知る辺もなく、根なし草も同然である。せめて母にはその後ろ盾になってもらいたいし、子の扶育を援けてももらいたい。ゆきは母とは仲が良いようだから、この屋敷にいてくれるだけでも心強いであろう。

母は冬枯れた庭木に視線を移し、

「年老いたわたくしをまだ煩わせる気ですか」

と明るい声で咎めた。

「出家が叶わぬのは、浮世に雑事が残っておるといふことを、御仏がご存知だからですよ」

元綱は自分が孝子だとは思ってない。ことさら親に反発したり逆らったり悲しませたりした記憶もないが、孝行らしい孝行といえ、孫を抱かせてやれたことくらいしか思い当たらない。「親孝行したときには親はなし」というが、世俗との縁を切られてしまえば、孝行のしようもなくなってしまう。

「吉川家のご老体は、卒寿そじゅ（九十歳）を過ぎても戦場に出るほどお元気であられた。母上はまだその半分のお年でしよう。老け込まれるには早すぎます」

言いながら、

孝行とは何であろう。

ふと考えた。

自分が親になってみて知ったのは、元綱が鶴寿丸の世話をするとき、自分も子から何かを享受しているという実感を持ったことであった。多くはそれは喜びであり、幸福感であったり充実感であったり、あるいは将来に対する漠然とした明るさであったりする。その意味で子の世話を焼くことは、元綱にとって無償の奉仕ではなかった。

何かを与えることは、何かを得ることでもあるのかな。

そう考えれば、親の手を煩わせることも、一種の親孝行ということにならないか。

鬼吉川ほど長生きできる者は稀であろうが。

まだまだ母上には浮世で雑事にかまけていてもらいたい。

と元綱は思ったりした。

ところで、永正十七年（1520）が明けると、その鬼吉川が死ぬ。

死因は伝わってないがおそらく老衰であったろう。九十三歳の大往生であった。

鬼吉川 吉川経基は、「応仁の乱」で数々の合戦に勇戦し、こ
とに「相国寺の合戦」において鬼神の如き働きを示し、天下に堯名けいめい
を馳せた。京の兵火が全国に飛び火すると、東軍を側面支援する形
で備後、河内、播磨などを転戦し、負け知らずの戦いぶりを示して
いる。その際、出雲の尼子経久とも敵として戦ったらしいのだが、
鬼吉川の武勇に感服した経久が、その娘を貰い受けたいと懇請し、
妻にしたというエピソードまで残っている。

十年を一昔とすれば、経基は五つも昔の武将である。しかし、そ
の存在が、安芸北部において巨大な重石おもしの役を果たしていたことは
間違いない。「鬼」とまで呼ばれたその武名は畏敬の対象であつた
し、いまや山陰の覇者と言うべき尼子氏を筆頭に、安芸の笠間氏、
小河内氏、綿貫氏、石見の三須氏、出雲の多賀氏、波根氏に娘を、
安芸の毛利氏、石見の福屋氏には孫娘を、それぞれ送り込んでいる。
経基は子福者で、記録に残っているだけで六人の息子と九人の娘が
あつたと伝わっているから、「鬼吉川の孫」や「鬼吉川の曾孫」と
なるともう数え切れない。その影響力は安芸一国に留まらず、石見
から出雲にまで及んでいたのである。

中でも特記すべきは、経基の末娘が京の万里小路家の当主である
賢房かたひさの正妻になつていふことであらう。

万里小路家は藤原北家の勸修寺流から分かれた公家で、名家めいがのラ
ンクに属し、名家の極官が大納言であるにも関わらず、内大臣まで
出したことがある名門である。養子としてその万里小路家を継いだ
賢房は、左大臣・勸修寺教秀のりひでを実父に持つ権勢家で、エリートコー
スを歩んで順調に出世し、四十歳で参議と右大弁うだいべんを兼ね、従三位じゆさんみま
で昇っている。残念なことに永正四年に四十二の若さで没してしま
つたが、もう三年も長く生きていれば大納言にもなれたであらう。
晩年は朝議の中枢に参与する立場であつたことは間違いない。

藤原北家の流れを汲む吉川氏にとって、勸修寺家や万里小路家は
いわば宗家筋に当たるのだが、そこに娘を送り込み、朝廷との直接

のパイプを持っていたところに、吉川経基という巨星の視野の広さと器量の大きさを窺うことができる。

娘婿である尼子経久はもちろん、日本最大の大名である大内義興も、この老将には一定の敬意を払っていたし、安芸と石見の政・戦略を立てるに当たっては、その影響力を常に考慮に入れねばならなかった。吉川経基とはそれほどの大物であり、それが死んだとなれば、当然、安芸における政治と軍事の天秤は、大きく揺れざるを得ない。

国人一揆の盟友たちにとっても、尼子方の豪族たちにとっても、この訃報は大きな衝撃であったに違いないが、

年寄りめ、やつとくたばりおったか。
と笑った者もいる。

高橋氏の隠居・久光であった。久光にすれば、鬼吉川さえ死ねば、安芸に憚らねばならぬ相手はないのである。

久光の動きは素早かった。すぐさま自ら周防の山口へと赴き、大内義興に拜謁し、今後の安芸の仕置きや尼子氏対策などについて様々な相談をした。

そもそも安芸の国人一揆とは、反大内の立場を取る武田氏、尼子氏、山名氏といった大勢力に対する対抗措置として、安芸の大内方の豪族たちが結合して出来あがった軍事同盟である。その九家の豪族の中で最大の勢力を持ち、安芸北部で尼子軍の侵入を防ぐ防波堤のような役割を果たしているのが高橋氏であり、現に久光は尼子方の備後の国衆などとも活発に戦い続けている。

大九朗は私利を追って働いておるに過ぎぬ。

ということを義興は見抜いていたが、それが大内の利益に繋がるなら、利用することに躊躇はなかった。

義興は寡欲で清廉な人物を好む傾向があり、アクの強い久光にさほど好意を抱いてはなかったが、実際問題として、愛顧した毛利興元が病死し、吉川氏が尼子に通じているという風聞さえある現状では、国人一揆の新たな盟主に相応しい武将といえれば、勢力の大きさ

から言っても武勇の実績から見ても、高橋久光こそがその最右翼であった。久光が大内のために犬馬の勞を取ってくれるというなら、多少の便宜は図ってやっても良いという気分になった。

そうして義興の信頼を勝ち得た久光は、

「高橋と毛利が堅く結んでおれば、吉川もそう易々と尼子に転ぶことはできませんまい。毛利の幸松丸は我が孫ゆえ、毛利がお屋形さまを裏切るようなことは、わしが致させぬつもりであります。ただ、幸松丸を後見する多治比の元就は、吉川国経の娘を娶り、かの尼子経久とも縁戚でござる。元就が密かに尼子に通じておらぬとは言い切れませぬ。ここは、元就より証人（人質）を取っておくことこそ肝要。尼子が何やら手を伸ばして来たとしても、初子ついでを証人にしておけば、元就の心が動くことはござるまい」

と提案し、しかもその人質を自分が預かるということを義興に承諾させたのである。毛利の人質を高橋が受け取るということは、事實上、高橋が毛利を傘下に収めるということであり、義興はそれを黙認したわけである。

帰国した久光は、さっそく郡山城にやって来て、

「以前した約定の通り、多治比殿の娘御を貰い受けたい」

と志道広良に要求した。

言われた広良はさすがに周章した。

「いやいや、お待ちください。多治比殿の姫御は、生まれてよりまだ一年にも満たぬ乳飲み子でござるぞ。わずか二歳で輿入れするなぞという話がどいかにござる乎」

「輿入れなぞと、そう重く考えられることはない。わしが元で養育

しようと思すのよ。無論、ゆくゆくは興光の子と娶せるつもりじゃ。それは確約しよう」

「しかしですな……」

「執権殿よ、ここだけの話だが」

久光は広良に顔を近づけ、深刻そうな声音を作った。

「実はな、山口で大内のお屋形にお会いした際、多治比殿より証人を取るつもりであるとお屋形が申されたのだ。多治比殿はご内室を通じて尼子殿と縁戚であり、お屋形が懸念なさるのも当然であろうとわしも思ったのだが」

大内義興が毛利に疑いの眼を向けている、と言われたのも同じであり、さしもの広良も狼狽が顔色に出た。

久光は内心で嗤った。

「しかしながら、頑是ない幼子が遠い異国で人質として暮らすとなれば、哀れに過ぎよう。そう思ったゆえ、『多治比殿の娘御はわしの曾孫に娶せる約定であったから』とわしが強く申して、難色を示すお屋形に枉げてご納得頂いたのよ。そういう事情を、執権殿にはよう汲み取ってもらいたい」

むしろ恩を売るような口調で続ける。

「山口はあまりに遠いが、阿須那ならば多治比から一日の距離じゃ。多治比殿もいつなりと会いに来ることができよう。姫御はゆくゆく高橋の跡目の正室となる。我ら両家にとって良縁となるつよ」

元就から人質を取るとは大内義興の意向であり、そのことはすでに動かし難い。同じ人質を出すにしても、娘を山口に送れば、女という意味で二流の人質という扱いを受けるに過ぎないが、阿須那に送れば、高橋氏の跡目の正妻として迎えられる。毛利と高橋の繋がりをもさらに深めることができ、大内義興も納得済みということである。その疑いも晴れる。後者の方が毛利にとって得というものである。お菊が高橋の当主の正妻となれば、当然、元就はその岳父ということになる。実質的に人質であることに違いはないが、婚姻ということにすれば耳触りのけわしさがずいぶん薄れるのである。そういう曖昧さの中に事態を埋没させ、当事者の悪感情を中和してやるのも政治の技術であり、そこに久光の老獪さがあつた。

いずれにしても大内義興の名が出た以上、久光の言葉に逆らうことは難しい。

志道広良にすれば、

「多治比殿とも家中の重臣たちとも相談せねばなりません。しばし時間を頂戴したい」

と言って、数日の猶予を願うのが精一杯であつた。話を聞いて、

「馬鹿な！」

と憤慨したのは、当事者の元就ではなく、意外にも元綱であつた。

「なにゆえ我らが高橋に人質を出さねばならん。大内のお屋形が人質を要求されたというなら、山口へ人を送るのが筋ではないか。国人一揆はそもそも対等の盟約であり、家々の間に上下の差はないはずだ。高橋が人質を取るといふなら、我らも高橋から人質を受け取らねば道理が立たぬ」

形式論としてはまさしく正論である。しかし、政治においては正論が必ず通るとは限らず、むしろ多くの場合、強者の横車が道理を粉碎する。

「四朗、解り切ったことを事々しく申すな」

元就が常でない語気の鋭さで言った。

「隠居殿は鶴寿を寄越せと申してきたわけではないだろう。黙っておれ」

ムツとした元綱が睨むと、兄は眉間に深い皺を刻んで瞑目していた。

これは選択の余地がない。

という現実を、懸命に飲み下そうと努めていたのである。

もし元就が人質を出すことを拒めば、高橋久光は、

「多治比元就の逆心は明らかである」

と大内義興に讒訴ざんそするに違いなく、そうなれば来月には山口から訊問の使者がやって来ることになる。毛利家とすれば、元就の首を差し出して大内義興に詫びを入れるか、使者を追い返して大内氏と断交するか、いずれかを扱えらばねばなくなる。窮地に追い込まれるのは自明であった。

大内氏に敵対するということは、当然ながら高橋氏をはじめ国人一揆の盟友たちをも敵に回すことを意味する。

戦えるか。

と自問してみれば、尼子氏に通じ、吉川氏、穴戸氏などと共闘したとしても、まったく勝算が立たないのである。

強大な大内氏に対抗するには、高橋氏を尼子氏と結びつけることが絶対条件であった。いざ大内軍が安芸に攻めて来たとなった時、出雲からいつでも尼子軍が援軍にやって来られるようにしておく必要があるからである。安芸北部を丸ごと尼子色にし、出来れば国人一揆の盟友たちをも尼子方に引き寄せ、武田氏や備後、石見の反大内勢力とも共闘体制を築く。最低でもそれだけの下準備がなければ大内氏から離反などできるものではないし、それ以前に、そういう政治状況を実現させぬことには、毛利家中の大内鼯鼠の重臣たちを変心させ、家中を反大内で結束させることなど不可能であった。

たとえば元就が、ここで大内氏から離反すると宣言し、独断専行の形でそれを行おうとすればどうなるか。

先の見込みも展望もなく、娘可愛さの情によって毛利家を滅ぼすつもりかと、重臣たちが猛反発するのは目に見えている。坂広秀、井上元兼といった大内鼯鼠の者たちは、幸松丸を擁する高橋久光と直接結びつき、元就とその与党を排除しようとする謀^{はか}るかもしれない。そうなれば「幸松丸を後見する」ということで成り立っている元就の政治的立場が瓦解するばかりか、最悪の場合、元就は反対派によって肅清され、「毛利幸松丸の忠誠の証し」として首を山口に送られかねない。

私の考えが甘すぎた。

元就は心中で臍^{ほそ}を噛んだ。

吉川国経を舅にしている以上、元就はそうでなくとも尼子方に通じていると疑われやすい。火のない処に煙は立たぬと言うが、元就の場合は火種がまつたくなかったとも言い切れず、そこに煙を幻視する者がいたとしても少しもおかしくはないのである。それを前提に、出処進退は明らか過ぎるほど明らかにし、周到に手を打っておかねばならなかった。

しかし元就は、高橋久光という野心家に対する認識が甘く、大内氏への手配りで完全に後手を踏んだ。

「元就をわしの言いなりにするか、それができぬなら、いつそ元就を排除する」

そのあたりが久光の魂胆であり、毛利の間接支配をより徹底するために、もつとも簡単で手っ取り早い手段を拵えらんだというだけであろう。鬼吉川が死んだと知るや、その喪も明けぬうちから久光がここまで露骨な手を打つてくるとは、正直なところ元就は予想だにしていなかった。

私が政略において隠居殿に負けたのだ。

現状、元就に可能な選択といえば、愛娘を差し出して白旗を振る以外になかったのである。

「大内のお屋形がご納得なされておるとなれば、このことに関してはもはや議論の余地はない。隠居殿の申される通り阿須那あすなへお菊を送る」

努めて表情を消し、元就は厳乎げんことして言った。

この元就の態度を見て、広間に集まった重臣たちは内心でやれやれと胸を撫で下ろした。庶家の人間が本家のために犠牲になるのはある意味で当然であったし、「幸松丸さまのご後見」として、この程度の問題は政治で割り切ってもらわねば困るのである。情によって選択を誤るようでは家の舵取りは任せられない。

「よう申してくだされた」

深く頷いた志道広良が、短い言葉で元就の決断を褒めた。

この決定にもつとも大きな衝撃を受けたのは、言うまでもなくお久であった。

「そんな……」

夫から事情を聞いたお久は、信じられないという顔をした。

「お菊はまだたった二つでございますよ」

歩くことさえできぬ幼児ではないか。

武門に生きる者にとって人質は乱世の習いとはいえ、血と肉を分かち与え、我が腹を痛めて生んだ子を奪われることは、女にとって肉体の一部を失うのにも等しい。ましてお久が愛娘と過ごした歳月は一年にも満たないのである。お久は乳が張るたびに我が子を思い出し、情愛を注ぐべき対象を失った寂しさに泣かねばならぬであろう。

「お前の辛さは痛いほど解る。だが、こればかりはどうしようもないのだ」

家臣には決して見せられぬ苦渋の表情で、元就は頭を下げた。

「すまぬ……。こうなってしまったのもすべて私の無力のせいだ」

そう言つて責任を背負つたが、

わたくしが出雲のお屋形の姪だからだ。

ということが解らぬほどお久は魯鈍ではない。そして理由が解つてしまえば、誰に恨みをぶつけようもなかった。

「元就さまのせいでは」

お久は唇を噛んだ。悲憤の涙が溢れ、頬を濡らして落ちた。

元就にできることといえば、嗚咽する妻を抱きしめ、悲哀を共に

することしかない。

「お菊は人質として扱われるわけではない。高橋では大切にしてくれるであろう。十年先、興光殿のお子が成人なされば、お菊はその正室となる。もともと婚約はできていたのだ。藤掛城に住み、幼い頃から共に過ごしておれば、きっと仲睦まじい夫婦めおとになるう」

それが何の慰めにもならないと知りながら、それでも元就は言葉を継いだ。

この想いは忘れぬ。

後年、元就は情け容赦ない謀略によって高橋久光の親族たちを殺し、高橋氏を滅ぼすことになるのだが、その遠因のひとつは、この時の無念さに根ざしていたに違いない。

この年から、高橋久光の軍事行動はさらに活発になる。大内義興から安芸の豪族たちへ出陣令を出してもらおうよう手回しし、備後への侵入をたびたび企てるようになった。

国人一揆の毛利氏、吉川氏、平賀氏、小早川氏らの兵を集め、三吉氏が堅固に守る備後北部はあえて避け、備後中部の世羅郡へと討ち入るのである。尼子方である備後の国衆と戦うことで、国人一揆の豪族たちをなし崩しに私兵化してゆこうというのが、久光の裏の思惑でもあつたらう。

「おのれ、高橋め……！」

この高橋氏の動きに激怒したのが、尼子氏の重臣・亀井秀綱であった。

尼子氏が安芸を取るには 安芸へ兵を出すには 安芸北部の豪族たちを傘下に収めることが絶対条件であり、最大の豪族である

高橋氏の向背がその鍵を握っていた。尼子経久から安芸の豪族を味方につけるよう命じられた秀綱は、高橋氏に対する調略を密かに続けていたわけだが、脅^{おと}そうが賺^{すか}そうが高橋久光は頑として尼子に靡かず、それどころかあからさまに敵対行動を取り始めたのである。

面目を丸潰れにされた形の秀綱は、主君の尼子経久に請い、自ら兵を率いて備後に乗り込み、備後の国衆と共に安芸の豪族連合軍を追い払った。

ちなみにこの合戦には毛利家も兵を出しており、元就や元綱が従軍したことは言うまでもない。戦闘は、備後の世羅郡 赤屋^{あかや}という地で行われた。これ以前もこれ以後も、安芸と備後の国衆の間で合戦が繰り返されている場所である。

尼子方の城を奪われることこそなかったが、高橋久光の存在は、尼子にとってもはや看過できるものではない。

「厄介な年寄りよ……」

秀綱は吐き捨てるように言った。

しかし、尼子氏の力をもってしても、高橋氏と直接戦うには時期尚早であった。備後路を使えば出雲から安芸北部へ行くことは可能であったが、石見はまだ尼子氏の勢力範囲に入っていなかったし、そもそも高橋氏ほどの大豪族を滅ぼすとなればよほどの兵力と時間が必要になるであろう。尼子経久はこれからまさに石見へ兵を向けようとしていることもあり、安芸に兵を割^さいていられるような政治状況でもなかったのである。

もはや手段は選んでおれぬ。

武力によって直接手を下せないとすれば、謀略をもって臨むほかないであろう。

秀綱の焦りを見透かしたように、

「要は、高橋の隠居一人を亡きものにすれば済む話でござろう」

と言ったのは、鉢屋弥之三郎である。

弥之三郎は尼子家の忍者集団・鉢屋衆の棟梁であり、調略、謀略といった仕事に関して秀綱の手足となつて働いていた。ちなみに三十年前の月山富田城奪回戦の時、尼子経久に助力したのは先代の弥之三郎で、彼の父に当たる。当代の弥之三郎は、まだ四十代であつた。

「当主である興光は未だ十七、八の小僧。隠居の大九朗さえいなくなれば、高橋は死に体となりましょう」

「それは申すまでもないが」

実際、高橋久光さえ消えてくれれば、いくらでも手の打ちようはあるのである。久光の甥である盛光もりみつとはすでに繋がりができており、久光さえいなければ、かの男を指喉しゅうして内訌しゅうを起こさせることさえ不可能ではなかった。もともと盛光は興光が家督を継いだことに不満を持っているから、尼子が後盾になると確約してやれば、盛光は高橋の家督を奪うために喜んで興光を殺そうとするであろう。謀反が成功しようが失敗しようが、高橋家中は二つに割れて大混乱となるに違いなく、大きく力を失うことは間違いない。

「どつやる？」

「藤掛城に忍び込み、寝首を掻くまでのこと」

「暗殺か……」

秀綱は露骨に厭な顔をした。

手っ取り早くはあるが、実に陋劣ろうれつな手段である。

。 武士の真似をしておるが、こいつもしょせん河原者が……

武士らしからぬ行為と断ぜざるを得ない。

秀綱の主君である尼子経久は、月山富田城をわずかな手勢で奪還したことでも実証されるように謀略において鬼才であり、たとえば間諜を用いて敵将を騙したり調略によって人を寝返らせたりすることとは名人のように巧みだが、その経久にしても暗殺という直接的な手段だけは用いた事がなかった。逆に言えば、敵将は必ず合戦によって葬ってきたというのが経久の偉さであろう。合戦で敵を斃すのはいわば武士の本分で、戦場でどれほど悪辣な詐術を用いてもそれは「武略」であり、倫理的な意味での「悪」ではないのである。

人をまとめてゆくには威と徳が必要であり、どれほど威があっても徳のない者に人は心服しない。悪徳を重ねれば人が遠ざかってゆくという機微を、苦勞人の経久は知り尽くしていた。暗殺などという後暗い手を使えば、「尼子経久は陰湿である」ということで衆望を失ったであろうし、今日の尼子家の興隆もなかったであろう。武将は知恵と勇氣と兵馬によって道を切り拓いてゆくべきなのである。秀綱は目的のためなら手段を選ばぬ冷徹さを持っているが、

お屋形さまの名に泥を塗るわけにはいかぬ。

という想いはある。秀綱が高橋久光を暗殺したのだとしても、それが尼子の仕業だと世に顕あわれれば、経久の命によるものと世間は思うであろう。自分が悪名を得る分には構わぬが、主君を貶めるわけには断じていかない。

「尼子の名が世に出てはならぬ。家中の土を使うわけにはいかぬぞ」

尼子家の武士に偽りの罪を被せて浪人させ、高橋家に仕えさせ、隙を見て久光を刺させる、などという方法は使えないということである。

弥之三郎は首を捻った。

「では、我が手の者を使うわけにも参りませぬな……」

刺客を放つにしても、弥之三郎子飼いの鉢屋衆を使って万一それが捕えられることにでもなれば、やはり尼子の仕業ということが露見してしまふ。

「さすれば、他国者で腕の立つ者を密かに集めましょう。その分、多少時間も掛かりますが」

「お屋形さまが石見を取るまでにはしばらく時が掛かるう。それまでに仕遂げねばならぬ」

「お任せを」

弥之三郎は口元に冷笑を浮かべ、軽く低頭した。

第四章 吹き荒れる腥風 暗闘（二）

生ぬるい風が吹いている。

その風を頬に受けながら、元綱は濡れ縁近くの柱に背を預け、庭に落ちる雨の風情を眺めていた。

膝元には膳があり、酒器と簡単な肴が乗っている。思い出したように手酌で酒を汲んだ元綱は、とろりと濁った液体を喉のどに流し込んだ。

この若者はほとんど日課のようにして酒を飲む。近侍の若者たちと共にわいわい飲やるのも好んだが、妻の部屋で静かに飲むことも多かった。

元綱の傍らで、ゆきが鶴寿丸かくしゅに乳を含ませている。ちよつど授乳が終わったようので、

「お腹がいつぱいになると、すぐにおねむ」

愛児の背中を軽く叩いてゲップを出してやりながら、優しい笑みを浮かべた。

ゆきは鶴寿丸を蚊帳の中に寝かせにゆき、元綱は会話の相手を失った。

隅に置かれた屏風びやうぶの横に、童女が行儀よく控えている。

「幸さいも眠ねいか？」

元綱が優しく訊ねると、幸は大きく首を振った。

「まだ眠ねつはありませぬ」

「ならば『仏』を唄うたうてくれぬか」

嬉しそくに頷いた幸は、板間の部屋の中央あたりに立ち、扇子を開いてそれをヒラヒラと舞わせつつ、唄い始めた。

仏は常に在せども 現ならぬぞあはれなる
人の音せぬ暁に ほのかに夢に見え給ふ

この歌は『平家物語』にある。平清盛の愛妾・仏御前が唄ったという今様で、歌謡に疎い元綱でさえ知っている数少ない歌のひとつである。

仏は常に在せども 現ならぬぞあはれなる
人の音せぬ暁に ほのかに夢に見え給ふ

神仏は常に人のすぐ傍にいてくださるのに、それは見ることも触れることもできない。けれど、たとえば物音ひとつせぬ明け方に、うつつの夢の中でなら、ほのかにそのお姿を垣間見せてくださることもある。

幸はまだまだ幼く、情感に込めるべき人生経験も足りず、その道の上手であるゆきに比べれば歌の技巧ははるかに拙かったが、その声音は透き通って若々しく、春の野辺に響く鶯の音のような風情がある。

戻ってきたゆきが元綱の隣に座り、酒器を取り上げて酌をしてくれた。その盃を二つ干す間に、幸は同じ歌を五度唄った。

愛弟子に優しい目を向けて微笑していたゆきが、続けて唄った。

仏は様々に在せども まことは一仏なりとかや
薬師も弥陀も釈迦弥勒も さながら大日とこそ聞け

弥陀の御顔は秋の月 ? 蓮の眼は夏の池

四十の齒ぐきは冬の雪 三十二相春の花

仏も昔は人なりき 我等も終には仏なり
三身仏性具せる身と 知らざりけるこそあはれなり

幸がゆきの節を真似てそれに倣う。

さらにゆきが歌を変え、幸がそれに続いた。

わが子は十余に成りぬらん 巫してこそ歩くなれ

田子の浦に汐ふむと 如何に海人集ふらん

正しとて 問ひみ問はずみ騁るらん

いとをしや

悲しくも切ない母心を歌った今様だ。

歩き巫女の娘は、歩き巫女になるのが宿命である。十余になつた我が子は、あちこちを巡り歩いてるだろう。田子の浦あたりの海辺を歩けば、漁師や水夫といった海の荒くれ男たちが寄り集まつて来て、占いが当たるの当たらないのと言つては難癖を付け、騁りものにされるのだ。ああ、なんと可哀そうに。

自らも歩き巫女であつたその女は、それに似た経験を幾度もしたに違いない。我が身の来し方を顧み、我が子の行く末を想い、この今様を唄つたのだろう。

繰り返し唄う幸の聲が震え、眼にうつすらと涙が浮かんだ。

幸の母も歩き巫女だつたのだろうか。あるいは孤児か、人買いに売られた童女だつたのか。幸の母は我が子を想つて泣いているだろうか。ゆきの母も、ゆきを想つて泣いただろうか。

ゆきが曲調をガラリと変えた。

遊びをせんとや生れけむ 虚れせんとや生れけん
遊ぶ子供の声きけば 我が身さえこそ動がるれ

ゆきの節に続いて、幸が手足を舞わせながら唄う。

遊びをせんとや生れけむ 虚れせんとや生れけん
遊ぶ子供の声きけば 我が身さえこそ動がるれ

歌の文句をそのまま読めば、無邪気に遊ぶ子供の純真な愛らしさに感動したという意味だが、遊びとは遊女あそびめを指し、戯れとは性交のことを指す。男の慰み物なぐさになるために生まれた。ただ性を奉仕するだけの存在としてこの世に生を受けた。そんな女でも、穢れなき子供の遊ぶ声を聞けば、我が身の罪深さに心が慄おのく。そういう遊女の哀しみが裏に込められている。

遊女の好むもの 雑芸 鼓 小端舟
大傘翳し 艦取女 男の愛祇る百大夫

恋ひ恋ひて
邂逅たまさかに逢ひて寝たる夜の夢は 如何見る
さし さし きしと たくとこそみれ

女の盛りなるは 十四五六歳廿三四とか
三十四五にし成りぬれば 紅葉もみぢの下葉したばに異ならず

幸の舞いを眺めながら、元綱は次々と盃を干した。
ゆきは幸の師として、こうして歌を通じて巫女の生き様を伝えてきたのであろう。

「あと十年もすれば、ゆきも紅葉の下葉です。邂逅たまさかに逢ひて寝たる四朗さまからは相手にして頂けなくなつて、愛あひが欲しいと百大夫さまに泣きつくことになるのですよ」

と、ゆきは大真面目な顔と声を作つて幸に言った。

「でも、その頃には幸が女の盛りです。四朗さまにたとへて可愛がつて頂きなさい。四朗さまのお子を身籠れば、側室おそばにして頂けます」

「おいおい……」

元綱は苦笑したが、童女は顔をほころばせて無邪気に頷いた。ゆきと同じ立場になり、ずっと一緒にいられるということが嬉しかったのだらう。

ちなみに百大夫というのは遊女の間で信仰されている恋愛の神様で、地藏尊のようなものと思えばいい。それに祈れば男の愛を繋ぎとめられるという俗信があつた。

飲み始めてから小半刻も経つたらうか。気づけば陽も暮れ落ちて、すでに庭は闇色に塗り込められていた。部屋から漏れるわずかな火明りが、雨に濡れた植え込みや敷石や庭木などの輪郭を幽かに浮かび上がらせている。永正十七年（1520）は六月の次にもう一度六月があり、今は二度目の閏六月うるしづき。梅雨の真まつ最中であつた。

「雨のお陰で昼間よりずいぶんマシだが、今宵は蒸すな」

ゆきが扇子を広げ、夫に風を送り始めた。

蔭みかげに落ちる雨粒が静かな音を立てる。

相合あひあひを濡らすその雨は、二里ばかり北の横田にはまだ落ちていなかった。

横田は闇夜であつた。

天は厚い雲に覆われ、月も星もない。

腐葉土と木の匂いが濃密な空気は重く、不快なほどに蒸し暑い。時おり湿り気を帯びた風が吹き抜け、辺りの雑木の枝を静かに揺らした。

そろそろ降り出しそうだな。

と、蓮次は思った。

雨音はあらゆる気配を隠してくれる。計画決行の日にこの空模様になったのは、蓮次たちにとっては僥倖と言えるほどに好都合であった。

周囲は山林の急斜面である。暗くていちいち見分けはつかないが、太い木々の影が無数に視界を覆っている。蓮次は割りあい夜目が利く方であったが、その眼をもつてしても、数間先は闇に溶けて判然としなかった。

獵師道か獣道か 道とも呼べぬほどの小道を、両手足を使って探るようにして進む。その前を、蓮次と同じ黒装束に身を包んだ数人の男たちが、野生動物のような軽捷さですいすいと山肌を登ってゆく。蓮次はそれについてゆくの^{けいしよつ}が精一杯であった。

大狩山の南麓に並ぶ尾根をひとつ越え、谷をひとつ下った。

目指す松尾城は、山肌をさらに登り、尾根伝いに南に下ったところにある。時おり木々の切れ間から、遠い稜線上にちらほらと火が見えた。

雑木を伝うようにしてさらに急斜面を登る。汗が滝のように流れ、息があがった。

尾根に出たところで、黒装束の男たちが足を止めた。

やや遅れた蓮次が彼らに追いつくと、

「我らの脚について来なさるとは、たいしたものじゃ」

頭格の男 土山ノ^{つちやま}墓目^{めめ}と名乗った が、感心したように蓮次を褒めた。

「必死だったよ。あんたたちや凄えな」

皮肉でなくそう返した。蓮次も足腰には相当の自信を持っていたが、上には上があったらしい。男たちには息を乱したような様子もなかった。

一行の到着を待っていたかのように、ぽつぽつと小雨が落ち始めた。

足元の遙か先に、松尾城の篝火が燃えている。

「お前さまはこのあたりまででよろしかろう。ここより先は足手まといでござるゆえな」

「ああ、俺も血生臭いのは御免だ。ここから見物せてもらおうとするよ」

「仕留めても仕損じても、事が終われば我らはそれぞれ散り、ここには戻って来ませぬぞ。明日の夜、三国山の荒れ寺にて落ち合いましょう」

「承知した。仕事はしっかり頼むぜ」

「ご念には及ばぬ」

蓮次が雑木の根方に腰を下ろすと、男たちは無言のまま森の闇に消えた。

あれが化生けしやうってヤツか……。

蓮次の胸にあるのは、掛け値ない感嘆と畏敬の念であった。

この年の春のことである。

蓮次は出雲に呼び返され、月山富田城の鉢屋平なりという曲輪の組屋敷まで上がるよう命じられた。蓮次のような下っ端の謀者には異例なことである。

行商人の姿で城にのぼった蓮次は、下土に案内されて屋敷の庭に通された。

白洲に座って待っていると、現れたのは見知った組頭でさえなく、なんと鉢屋衆の棟梁である鉢屋弥之三郎であつた。これも極めて異例なことで、戦陣で謀報の報告をする以外では、蓮次は弥之三郎とは直接口を利いたこともない。

濡れ縁に座つた弥之三郎は蓮次を見下ろし、前置きもなく、

「高橋久光を仕物しものに掛ける」

と言つた。

暗殺、あるいは謀殺する、という意味である。

「お前は高橋の領地に明るかろう。手と知恵を貸せ」

蓮次は慌てた。

「やつがれは夜盗の真似はできませんが、刃物三昧ざんまいは不得手でございまして」

弥之三郎は下等動物でも見下すような目をし、冷笑した。

「何も仕手を務めよと申しておるわけではないわ。討ち手は別に用意した」

「は。それは」

「世に名高い甲賀の忍び武者どもよ」

蓮次のような裏の世界に生きる人間で、甲賀忍者の名を知らぬ者はない。

あの『まがり鈎の陣』の甲賀者が……。

声に出さずに呟いた。

鈎たかよりの陣とは、三十年ほど前、時の將軍・足利義尚よしひなが、南近江の六角高頼を攻めたときの事件である。八千の幕府軍の陣容を見た六角高頼は防戦を諦め、近江南端の甲賀郡へと退却し、幕府軍はそれを追って甲賀郡へ侵入、鈎まがりという地に陣を敷いた。

六角高頼は、甲賀郡の地侍たちを使ってゲリラ戦を展開した。甲賀者たちは幕府軍を山中に誘い込み、地の利を生かしてさまざまに奇襲をかけ、夜ごと幕府方大名の陣地を次々と焼いた。幕府軍の陣屋では火事が続発し、朝が来るたびに雑兵の死体があちこちで発見された。さらに総大将である足利義尚の陣所が夜襲を受け、義尚自身は逃げ延びたものの、本陣が焼かれ、側近衆も逃げ惑うという大失態を演じた。わずか四百人ばかりの甲賀衆が、八千の幕府軍をさんざんに悩ませたのである。

將軍・足利義尚はさらに二度にわたって南近江を攻めたが、六角高頼はそのたびに甲賀郡へ遁のがれた。甲賀攻めは足掛け三年にも及んだが、幕府軍は甲賀衆のゲリラ戦術に手を焼き、戦果らしい戦果を挙げることはできなかった。しかも悪いことに、総大将である足利義尚が陣中で病没してしまったため、幕府方の武士たちは動揺し、「公方さまは甲賀衆に毒殺されたのだ」とする雑説がまことしやかに囁かれるようになった。

甲賀衆は夜の闇に乗じて魔物のように跳梁ちやうりやうする。神出鬼没のゲリラ戦術とその火術は諸国の武士たちを驚かせ、「甲賀者は魔法を用いる」とまで評された。このことによって甲賀武者　いわゆる甲賀忍者の噂は、天下に響き渡ったのである。

以来、諸国の大名や大商人の間では、甲賀者を密かに雇い入れ、

情報収集や裏の仕事に用いるという例が少なくなかった。蓮次の表の顔は堺の売薬商人であり、そういった噂は色々と漏れ聞いていた。ところで、出雲の尼子氏と南近江の六角氏とは 地理的には遠く離れているが 実は何かと縁が深い。

そもそも六角氏は近江源氏と呼ばれた宇多源氏・佐々木氏の分かれで、出雲守護の京極氏とは同族であった。京極氏の本拠は北近江であり、南近江の六角氏とは近江の覇権をめぐって長く敵対していた。尼子氏はもともとその京極氏の家来で、出雲の守護代を務めていたのだが、尼子経久は出雲を横領して独立を果たした。京極氏からは当然仇敵視されていたが、敵の敵は味方という論理で、六角氏とは関係が悪くない。ちなみに大内義興が足利義植を擁して上洛した時、六角氏は細川澄元に助力してこれと敵対した。尼子経久が大内氏から離反したのも、直接的には六角高頼からの要請を受けたからなのである。

尼子経久が上洛した時、亀井秀綱は主君の近侍として京へ従軍しており、謀議のために接触して来た六角氏の重臣と知り合う機会を得た。秀綱はその旧知の筋を使って、高名な甲賀衆を十人、錢で雇い入れたのだが。

そういう細かい経緯いきわづらひは、むしろ蓮次が知るはずもなく、弥之三郎にしてもいちいち説明する気はない。

弥之三郎の家来が、革袋を三つ載せた三方を持ってやって来、それを蓮次の前に置いた。

「支度金じゃ。甲賀衆にも分けてやれ」

手に取るとずしりと重い。中身はおそらく銀の粒であろう。

「お前はなかなか才覚があるやに聞いておる。方法手段はお前の勝手に任せるが、期限は半年としておこう。事が巧く運んだ暁には、錢でも領地でも望みのものをくれてやる」

領地をくれるということは、武士にしてやるということである。蓮次はそのことにさして興奮も覚えなかったが、こういう裏の仕事自体は不思議と嫌いではない。いや、嫌いどころか、喜びにも似た冥い情熱がふつつつ湧いて来るのを自覚した。

「半年も頂ければ、手はずは万端調べてみせます。が、首尾の方は、その甲賀の者どもの技量次第で。仕物はやつがれの分を超えますよ……」

「人にはそれぞれ領分がある。お前はお前の埒を守って仕事に励めばよい。それより」

弥之三郎はどろりと濁った三白眼で蓮次を睨めつけた。

「この仕事、決して尼子の名を出してはならぬ。そこでお前は出羽の遺臣の縁者ということにせよ」

「出羽の……」

その一言で、蓮次は弥之三郎が書いた筋書きをほぼ察した。

高橋氏は勢力を急拡大した豪族であるだけに、これに滅ぼされた小豪族の遺臣からは強い恨みを買っていた。なかでも本拠である阿須那の隣郷 出羽という地に根を張る出羽氏は、高橋氏によって百五十年ほど昔に一度は滅ぼされ、その領地のほとんどを奪われていた。一族で生き残った者たちが旧領の返還を求め、幕府や石見守護の大内氏などに泣きついたため、高橋氏はやむなくその調停を受け、奪った七百貫の領地から二百五十貫だけを返還し、出羽氏を再興してやったのだが、以来、出羽氏は高橋氏に従属しつつも決して心服せず、失地回復を悲願にし続けている。その出羽氏に縁のある

者なら、高橋久光の暗殺を企てたとしても何の不思議もない。

この謀略に関して、亀井秀綱も弥之三郎も一切表には出ない。甲賀衆を雇ったのは出羽の遺臣ということになっているらしい。手飼いの家来を使わず、蓮次のような河原者を用いるのは、万一のときに尼子氏との繋がりを見せぬためであろう。

要するに蓮次の役割は、甲賀衆の監視とその後方支援であり、さらに暗殺の主犯を出羽氏に押しかぶせるところにあった。

「お前は、出羽の遺臣・荒川何某の縁者　三右衛門と名乗れ。お前を裏で指喉しごうしおるのは、毛利ということにしておこう。高橋と毛利を離間できればそれはそれで儲けものだ」

と弥之三郎は続けた。

そういう噂を後で流せ、ということであろう。どうせやるなら、それを利用して高橋氏と毛利氏の間が険悪になるよう仕向ける方が無駄がない。

手の込んだ悪巧みをしやがる。

蓮次は顔に出さずに冷笑した。

甲賀衆と落ち合うための場所を決めねばならぬという。蓮次は、出雲と石見と備後の国境にそびえる三国山の中腹にある朽ちた寺を指定した。蓮次がたまにうぐすく峙つに使う場所で、ほとんど人が寄りつかない。

十日後、そこで待つよう命じられた。

「良い報せを聞きたいものだ。巧く謀れよ」

弥之三郎は切り上げ口調で言い捨て、濡れ縁を歩き去った。

なんだか面倒な仕事を押し付けられちまったなあ。

心中で愚痴りつつも、蓮次は半ば面白がっていた。天下に名を轟かせた甲賀者と仕事を共にできるというのも稀有なことで、好奇心

が勝ってしまったている。

城下に戻った蓮次は二日で旅の支度を調べ、出雲から出雲往還を歩いて赤名あかなに入り、魚切うおきりの深谷を経て江の川筋に出、そのまま江の川をさかのぼって口羽村くちばに到った。

口羽村から半里ほど南に浄福寺という大きな寺があり、その東にそびえるのが三国山である。

蓮次は口羽村の旅籠で二日ほど身体を休め、約束の日の朝から三国山を登り、八つ（午後三時）頃に中腹にあるうち捨てられた寺に着いた。

人が棲まなくなつて数十年は経っているであろう。山門の屋根は崩れ落ち、境内には雑草が茂り、荒れ放題に荒れている。建物も半ば以上が朽ちているが、狭い本堂の屋根は瓦で葺かれており、これだけは朽ちてない。お陰で雨風をしのぐことができる。

蓮次はその本堂に入り、荷物を置き、足拵えを解いて、ゴロリと横になった。

客が現れるまで寝るつもりである。

どれくらい眠つたであろう。戸が開く気配に蓮次が目を覚ました時、本堂の中はよほど暗くなっていた。もう夕刻かもしれない。

逆光で真つ暗になった人影が、戸口から中を覗いていた。

「これは、先客がおられましたか」

どこか蛙に似た顔の男が、愛想良く笑った。年は四十を幾つか越えているであろう。背は低く、痩せている。蓮次と同じ旅商人の格好をし、蓑をかぶっていた。蓮次が寝ている間に、雨が降り出したらしい。

「いやいや、よう降りますな。一夜の雨宿りをおもつてお邪魔を致した次第でございますが、同宿させて頂いてようございまするかな」

「ああ、構わねえよ」

蓮次は何気ない口調で返しながら、横目で油断なく男を観察した。部屋の端に、破れていくつも穴が空いた屏風びょうぶがある。男は蓑を取り、背の荷物を降ろし、濡れた衣服を脱いで水気を絞り、屏風にそれを掛けた。

おや？

禪ひとつになった男の身体はどちらかと言えば貧相で、武技で鍛えたような筋肉の盛り上がりはなく、戦場傷の痕あともない。

この男が甲賀の忍び武者か？

当然そうだと思いついていた蓮次は、やや戸惑った。

男は荷袋の中から乾いた布を取りだし、それで身体を拭った。

「お見受けしますところ、お前さまもご同業でございますな。売り物は 薬種でございますようか」

「ご明察だ。よく解りなさったね」

「餅は餅屋と申しますからな。判るのでございますよ。他にも判ることは色々ありますな」

「ほう、たとえば？」

「お前さまは堺の薬種問屋、小西屋の弥兵衛さま、とは仮の姿で、その実、出雲のお屋形さまの謀者を務めておいでじゃ。今は出羽家の遺臣・荒川三右衛門などと仰々しいお名を名乗っておられるが、元は、素性もない河原乞食といったところでござろう」

思わず蓮次の顔色が変わった。じろり、と男を睨ねめつける。

「こりゃ驚いた。何から何までお見通しかい」

「ご同業でございますからな」

男は人懐こい笑顔を浮かべた。

「なるほどご同業か」

それにつられたように蓮次も笑った。

「どうやって調べた？」

「なに、種を明かしてしまえば造作もないことござるよ」

男は荷物の中から小袖を引きずり出し、それを身につけながら語った。

これはまったくの偶然であつたのだが、連れて来た甲賀の仲間の中に、蓮次と同じように堺の小西屋に潜り込んで働いている者がいたのだという。謀者の勤務きで、その者は蓮次が尼子氏の謀者かもしれぬと予断を持っていたのだが、この荒れ寺にやって来た蓮次の姿を見て驚き、その情報を洗いざらい男に報告した。あとは簡単な推論と鎌掛けである。

「蛇の道は蛇つてヤツだなあ」

実際、蓮次と同じような目的を持って薬の行商に身をやつしている者は少なくない。彼らの中の暗黙の了解としてお互いを深く詮索することはないが、蓮次もそれらしい人間を何人か思い浮かべることができた。

「その者、小西屋では善兵衛ぜんべえと名乗っております。存じよりでございましょう」

知っていた。小西屋では蓮次よりも古株で、蓮次がまだ駆け出しの頃、行商の仕方をアドバイスしてもらったことさえある。主に西国筋で商売をしていたと記憶しているが、あれが甲賀者だったとはまったく気付かなかつた。

これは謀者としては負けたことになる。蓮次はその事が愉快でなく、話題を変えた。

「十人雇ったと聞いているが、あんたあ頭目かい？ 名はなんと呼べばいいのかね」

「忍びに名などは符蝶ふちょうに過ぎませぬが、甲賀者の間では土山ノ墓目つちやまのみめなどと呼ばれておりますな」

「あとの九人は？」

「見張りを除いた七人はこのお堂の周りに控えております」

見張りは山麓で山の登り口を押さえているという。気付かなかつたが、蓮次がこの寺に登って来るところも監視されていたのである。

「何かから何まで手回しの良いことだ」

「用心に越したことはございせんからな」

「違いねえ」

「では、そろそろ仕事の話を見せて頂きましょうか」

「その前に、断っておくが、俺は出羽家の遺臣・荒川三右衛門ということにしてもらおう。あんたたちの口からそれ以上のことが漏れることはねえだろうな」

「愚かな念を入れられる。無用の心配でござるよ。甲賀の忍び武者は、仲間と仕事は死んでも裏切らぬ」

依頼主が自分の素性を偽っていたことについて、墓目には関心がないらしく、気分を害した風もなかった。与えられた仕事をこなし、その報酬をもらうことで甲賀衆の商売は成り立っているのである。仕事の背景をいちいち気にしてはキリがないし、彼らにとってはどうでもいいのである。

墓目が床板をトントンと三度叩いた。

床下から応答があり、しばらくすると、七人の男たちがばらばらと堂に入って来た。

物売り姿の者もあり、樵のような格好の者もあれば農夫の姿の者もいる。御師や遊行僧に化けた者もあった。蓮次を見てニヤリと笑ったのは、例の善兵衛である。薬を詰めた木箱を背負っていた。

「高橋の隠居　久光を殺せというご依頼でござったな」

「ああ」

「して、方法は？」

「それを考えなきゃならねえ。もっとも成功しやすい手段を選びたい」

「成功しさえすれば、毒殺であろうが闇討ちであろうが手段は選ばぬということでごさるな。城に忍び込んで寝首を掻ければ、それが一番簡単じゃが」

暮目は腕を組んだ。

「高橋久光は阿須那あすなの藤掛城に住している。ここから乾せいぬい（北西）の方角に二里ばかり行った山にある城だ。まずはその城の縄張りを探るところから始めよう」

「承った」

その日から、甲賀衆と蓮次は、高橋久光の動向を探り、同時に久光が住む藤掛城に対する探索を始めた。

まず、城内の見取り図を作ることである。城外から城の構えを眺め、城に出入りのある商人などから噂を集めたりして、忍者独特の知識、経験、勘を総動員して城の内部を想像して絵図を描いてゆく。無論、実際には解らぬ部分が多く、出来あがるのは空白だらけの図面だが、さらに実際に忍び込んで情報をそこに描き加えてゆくのである。

一月ばかりでおよその見取り図が出来あがった。

「三右衛門殿よ、これは難しゅうござるわ」

絵図を眺めながら暮目が言った。

藤掛城はさすがに高橋氏の本拠であり、警備が非常に厳しかった。城内に忍び込むことはできても、本丸まで近づくことは容易ではないという。実際、絵図の上でも、城の最奥にある本丸部分だけは櫓の位置以外は空白のままであった。

「たとえば火つけや夜襲の手引きをするというなら造作もないが。城主の首を掻くとなれば本丸の最奥まで到らねばなりませんな」

幕目じきめは渋い顔で続ける。

「城主がどこで憩んでおるかが解らんことには、つまりは本丸の屋形の正確な絵図がないことには、まず成功はおぼつかぬ。失敗すればそれまでじゃ。一度騒ぎを起こせば、その後の警護はさらに厳しゅうなりますからの」

高橋久光は藤掛城に籠りきっているわけではなく、月に何度かは毛利氏の郡山城に出向く。

その移動中を襲うことも考えたが、移動するのは必ず昼間である。陽の当たる刻限では甲賀衆の異能を生かせなかつたし、護衛の武士が五十人はいっているため、甲賀衆がどれほど武技に長けていたところで、わずか十人では久光を討つことはまず不可能であった。久光は年相応に用心深い男で、移動に馬を使わず輿を使うから、毒矢で狙うこともできない。

「いっそ通り道に火薬でも埋めておいて、吹き飛ばしますかな」

幕目は自分が言った冗談で笑ったが、さすがに蓮次は賛成しなかつた。火薬は十四世紀には日本に伝わっていたらしく、火術を得意とする甲賀者はその製法と使用に長じているようであったが、これはさすがにやり方が特殊すぎる。「出羽氏の遺臣」に思いつくような芸当ではないであろう。

「藤掛城は無理でも、たとえば松尾城なら何とかならねえか」

久光は、阿須那から毛利の吉田へ出向く時、郡山城に滞在することもあるが、多くは横田の松尾城を宿にしていた。松尾城ならば藤掛城に比べれば警備は薄いし、城が手狭で曲輪の数が少なく、その分だけ城内を探し回る手間も省けるであろう。

甲賀者たちはその線で松尾城を探り始めた。

松尾城は、多治比の猿掛城から一里ほど北 高田郡の美土里町にあり、そのあたりは当時は横田村と呼ばれていた。城主は高橋重光^{しげみつ}という男で、高橋久光の次男であり、当主・興光の実父に当たる。城の見取り図は割りあい簡単に出来あがった。松尾城は大狩山の南尾根に築かれているから、大狩山の上部から見下ろせば城内を俯瞰^{かん}できるのである。曲輪の配置や城内の建物の位置などはほぼ完全な形で図面が完成した。

墓目も、本丸までも忍び込むことが出来ると自信ありげに断言した。

「ただ問題は、久光の寝所がどこかという点でござる。本丸の屋形には重光がござろう。そこで寝ておるのか、あるいは二の丸あたりの居館に宿を取っておるか」

こればかりは調べようがなかった。たとえば久光が二の丸を定宿にしているとしても、決行の当日、何かの偶然で本丸の屋形で過ごしているというような可能性がないとは言えないのである。

決行を逡巡しているうちに、困ったことが起こった。高橋氏が合戦支度を始め、久光は二千以上の兵を引き連れて出陣してしまったのである。

高橋軍は、毛利氏、吉川氏、平賀氏、小早川氏らの兵と共に、備後中部の世羅郡へと攻め入った。早春に続いて今年早くも二度目の侵攻である。

こりやまずい。

蓮次は大いに慌てた。二月、三月の長期滞陣にでもなれば、約束

の期日を過ぎてしまう。

蓮次たちは備後に潜入し、合戦の様子を遠巻きに探った。

「考えようによっては、城入りより事が容易であるやもしれませぬぞ」

久光が戦陣にあることを逆に奇貨きかとし、この機に久光を闇討ちすることを幕目が提案した。

甲賀衆は闇夜に乗じて高橋軍の陣屋に忍び込んだ。が、高橋側の夜警は思いのほか厳しく、本陣の最奥まで辿りつく前に事が露見し、計画は失敗に終わった。その際、甲賀者が二人斬られて死にさえした。

「敵もどうやら忍びか兵法者を飼うておるようでごさる。侮れぬ手て練れが何人かおりましたわ」

帰ってきた幕目は悔しげに言った。

蓮次にとっては幸いなことに、この合戦は一月も掛からずに終わった。出雲から尼子氏の援軍が再び現れて、備後の国衆と共に安芸の国人連合軍を追い払ったのである。合戦自体は小競り合い程度で、双方ともに大きく傷ついた様子はなかった。

もうぐずぐずしてられねえな。

高橋氏が軍勢を三度動かせば、計画は時間切れとなり、久光を暗殺する機会は永久に失われるであろう。

「久光が次に松尾城に入った夜に、決行しよう」

蓮次は幕目にそう告げた。

決行は、永正十七年閏六月うるふじの某日。ある雨の夜と決まった。

第四章 吹き荒れる腥風 暗闘（三）

その夜、世鬼^{せき}新太郎が感じたのはほんのわずかな違和感だった。いや、違和感というにはそれは幽^{かそ}け過ぎて、虫の報せという方が近かったかもしれない。

前方の闇を睨む。

見えないほどの細かな雨が静かに落ちていく。

眺める世羅^{せら}盆地の風景に異常はない。敵陣の様子にもこれといった変化はなく、黒々とうずくまる山の闇の中に篝火の小さな明りだけが無数に明滅していた。

気のせいか。

もちろんそうに違いない。

しかし新太郎は、己のそういう勘働きを大事にしていた。過去の多くの戦場で、それに何度となく救われてきたからだ。

新太郎は数日前に組みあがったばかりの物見櫓の上にいた。屋根板の隙間から垂れる滴が鎧の袖を容赦なく濡らして、霧雨と汗のせいで鎧下着は重く湿っていた。

もう一度闇に目を凝らす。

この辺りは楕円形のお盆の縁のように低い丘が隆起している。盆地の中心を川幅広い芦^{あした}田川が前方へ向けて流れ、半里ほど先には世羅の集落がある。田植えを終えたばかりの田が川の左右に並び、田には一面に水が張られている。あと二刻もすれば夜も明け、昨日までと変わらぬ風景が眼前に広がるはずであった。

備後の世羅郡はもと高野山の荘園が多くあった地域で、武家の横領によって飛び地の領地が錯綜したため、統一的な支配が難しく、この辺りでは大きな豪族が育たなかったらしい。新太郎が属する高橋氏の軍勢は、安芸の国人一揆の同盟軍と共に、向原のあたりから東進して一気に世羅郡の中心まで進み、現在の世羅町役場がある世羅盆地を東に望む小高い丘のような山に布陣した。その左右の

高地には、友軍である毛利氏、吉川氏、小早川氏、平賀氏などの軍勢がそれぞれ陣を敷いている。半里ほど先の右手にそびえる甲山とその周囲の高地が敵の陣である。そこに布陣するのは備後中部の豪族である有福氏と、山内氏傘下の豪族たちだ。

この闇の中で見えるものと言え、それらの陣で燃える篝火くらいしかない。

「小太郎」

新太郎は櫓の下で憩んでいるはずの弟に呼びかけた。夜の陣中で大声を出すわけにはいかないから、ほどほどの小声である。

三度ほど呼ぶうちに、弟が下から梯子を使って上がって来た。

「なんじゃ、兄者」

「すこし早い、見張りを代わってくれんか」

「それは構わんが、何かあったのか？」

新太郎の様子に不審を持ったのであろう、弟は訝しげな顔をした。

「いや、何ということもないんだが、何やら厭な感じがしてな。そこらを少し歩いてくる」

「厭な感じ か……お得意の勘働きだな」

弟は茶化さなかった。今宵は月も星もなく、おまけに雨まで降っている。夜込みや夜襲を行うにはうってつけの条件なのである。

「兄者の勘は悪い方ばかりよう当たるからな。わかった。代わる

う

小太郎は軽捷な動きで櫓の中に入り込み、入れ替わって新太郎は櫓の柱に取りついた。

ちなみに弟は諱を政矩いみな まさのりといい、新太郎の三つ下である。新太郎の諱は政定まさたかという。年齢は二十六になる。

櫓を降りた新太郎は、傍にいた数人の下士に本陣周りを油断なく警護するよう命じ、山頂に築かれた即席の陣屋を見回り始めた。

静かな夜である。異変の気配は微塵もない。

新太郎は、足の向くまま幕舎と幕舎の間を歩いた。それぞれの周りに篝火が焚かれ、警備の雑兵が立っている。雨は霧のごとく細かく、篝火の火勢を弱めるほどではないが、白い煙が薄くたなびいていた。

まっすぐに歩くと本軍の陣所を仕切る木柵に突き当たる。

少し山を下ってみるか。

柵に沿って数間ごとに篝火が燃えており、その先に木戸がある。

木戸の傍に二人の武者と十人ばかりの雑兵が守りについていた。

「お、誰かと思えば新太郎殿ではござらんか。なんぞありましたか」

物頭らしい男が慇懃に訊ねた。

「いや、ただのそぞろ歩きです。ついでにそこらを見回っておこうと思ひましてね」

気軽な口調で返した。

新太郎の父である世鬼政時は、高橋家中で忍兵頭を務めている。いわば警備責任者と言ってよく、その長男である新太郎を知らぬという者はこの陣所の中にはいなかったであろう。

異常がないことを確認した新太郎は、木戸を抜けて坂を下り始め

た。

山頂付近は雑木が切り払われ、重臣たちのための陣屋や幕舎が建てられているが、坂を下り始めるとそれらがなくなり、雑木の隙間やわずかな平地に小部隊がそれぞれに駐屯し、板や幕で小屋掛けして雨をしのぎつつ憩んでいる。山麓まで山肌をあちこちで篝火が焚かれ、その付近に必ず不寝番の武者が警備に立っていた。高橋軍は総勢にすれば二千人以上の大軍勢である。新太郎と同じ様に、少なくとも二百人以上の男たちが今この瞬間も変事に備えているはずであった。

人がおらぬ場所は雑木と雑草が生い茂り、夜空を覆うほどに枝が繁茂している。木々の陰、下草の間には黒々と闇がうずくまり、明りはほとんど届かない。見通しは悪く、夜目が利く新太郎の眼をもつてしても歩くことに難渋した。

時おり生ぬるい風が南から吹いて来る。それに気付いた新太郎は、風下の北に足を向けた。忍びは一般に音や匂いが伝わりやすい風上を嫌うからである。

四半刻もそうして山肌を歩いただろうか。

新太郎はさすがに己の勘が取り越し苦労であったように思えてきた。

そろそろ戻るか。

何事もなければ、それはそれで良いのである。

踵かかとを返してしばらく歩いた時、梟ふくろうだろつか、夜鳥の鳴く声が幽かに聞こえた気がして、新太郎は動きを止めた。

気配を断ち、そろそろと木の陰に身を隠す。

しばらくすると、別の方角でも同じような夜鳥の鳴き声が響いた。また別の方からも聞こえた気がした。夜鳥が鳴き交わすことは珍しくないが、雨夜は梟さえ狩りを嫌がるものだ。

新太郎の疑念は確信に変わった。

犬を連れて来るべきだったな。

犬の嗅覚、その危機察知能力は、人のそれよりよほど信頼できる。

藤掛城には警備のために数頭の犬を放し飼いにしているし、主君の外出時は常時連れて歩いていたのだが、今回は戦陣ということで置いてきたのである。

本来であれば、この時点で呼子よびこを吹き鳴らし、陣中に警戒を促すべきであつたらう。騒ぎが大きくなれば、あるいは曲者もそのまま何もせず去つたかもしれない。

しかし新太郎は、曲者の出現をむしろ望んでいた。曲者を斃すか捕えるかして、敵の正体を知ろうとした、というのが自分に対する言い訳であらう。実際は、派手な手柄を立てたいという若々しい欲がこの若者を動かしていた。

新太郎は己の頸くびさには満腔の自信を持っている。六尺を超える雄偉な体軀は肉厚な割りに軽捷けいせつで、相撲を取っても駆け比べをしても家中で新太郎に敵う者はない。その刀術は「念流」という古流剣術の系譜を引き、世鬼家の先祖が駿河にいた時代から連綿と練つてきたものだ。世鬼一族の武技は高橋家中では評価が高く、中でも父の政時は家中随一の剣の遣い手とされているのだが、新太郎の力と技は、すでにその父の全盛期をさえ凌ぐと父自身が認めるほどであった。

新太郎は気配を消したまま少し道を戻った。陣所と陣所の隙間の闇の濃い場所で、灌木が比較的少ない地点を見つけると、その下草の闇にうずくまった。

雨が物音を消し、さらに視界を悪くしている。

新太郎は息を細くし、五感を磨ぎ澄まし、意識を集中した。

ずいぶん長く待つたようにも感じたが、時間にすればほんの十分か十五分であつたらう。小枝を踏み折るような音を幽かに聞いた気がした。

新太郎は耳を地に付けるように顔を下げ、闇を透かした。

見えた。

動悸がにわかに激しくなった。

木陰から木陰へ、闇を拾うように素早く動く影がある。数は二つ。

やや距離を保ちながら山肌をすいすいと登って来る。この夜中に松明も持たず、怪しげな動きをしているという時点で、敵と断定すべきであろう。

新太郎は曲者たちの登り道を想定してじりじりと自分の位置を変えた。音を立てぬように細心の注意を払う。役目から新太郎は物見などに出ることも多く、鎧が発する音を嫌って鉄ではなく皮の札さねを緘おとした鎧を着ている。雨も幸いしたのであろう、敵に気づかれた様子はなかった。

片方を斬り、もう片方を捕える。

一人目をあえてやり過ぎ、二人目の影がほんの二間ほど先まで近づいた時、下草の間から矢のように飛び出した。

影はぎよつとしたように一瞬動きを止めた。前の影が通った跡は安全と油断していたことがこの男の地獄であった。新太郎は駆け違いざま、とつさに宙に跳ねあがるうとした男の胸を抜き打ちに斬った。

！？

金属が擦れ合う耳障りな音がした。

刀から伝わる手ごたえの異様さに新太郎は事態を悟った。曲者は鎖帷子くさりかたびらを着込んでいたのである。刀は「引き斬る」ことで最大の威力を発揮するが、鎖帷子が相手では刃こぼれするのが関の山で斬れたものではない。刃は肉まで通らず、血がしぶくこともなかった。

が、新太郎の凄まじい斬撃は曲者を吹き飛ばし、その肋骨の二本を砕いていた。折れた骨が内臓に刺さったのであろう、地に落ちた男は転がって悶絶し、血反吐を吐いた。人間は内臓だけは鍛えることができないものだが、しかしこの男は呻き声さえ洩らさなかった。それが忍びとしての最後の誇りであったらう。

この瞬間、男に止めを刺すだけの時間と余裕が新太郎にはあった。しかし、

生きたまま捕えられる。

という甘い観測がそれを躊躇させた。

先に駆け過ぎた影が背後で起こった異変に気付き、腰帯の後ろに差していた刀を逆手に抜き、無言のまま斜面をすべるように駆け降りて来た。

それに正対した新太郎は刀を正眼に構え直す。

男と新太郎との距離はまだ五間（約九メートル）以上離れていたであろう。いきなり黒装束が宙に跳んだ。さらに雑木の幹を蹴って高く舞い上がる。

「！！！」

その異常な跳躍ぶりは新太郎の想像さえはるかに超えた。男は空中で持ち替えた刀を振りかぶり、白刃が凄まじい速度で落ちて来る。新太郎は間合いの算定を完全に誤り、迎撃する余裕を失った。

「曲者ぞ！」

叫びつつ左に転がり、即座に態勢を立て直し、さらに大声で叫んだ。

「おのおの、出合え候え！ 曲者じゃ！」

その声が終わらぬうちに、男が投じた「何か」が新太郎の鎧の大き袖に突き刺さった。

ほとんど同時に男の白刃が迫る。

新太郎は刀の握りを返し、峰で敵の刀身を下から弾き上げ、体勢の崩れた影を大上段から袈裟けさに打ち据えた。一連の動作が凄まじい早業である。純粹に刀術だけで比べれば、男は新太郎の敵ではなかった。その一撃は男の左肩の骨を粉碎し、鎖骨を割り、胸骨の二本目までを折った。

仕留めた。

と思った。

それが新太郎の油断であつたらう。

男は新太郎に身体を預けるように崩折れながら、佩楯はいだての横から新太郎の太ももに針のような物を突き刺したのである。

氣付いて反射的に跳び離れたため、それは肉に一寸ばかり突き立ちながらも深々と刺さる前に抜け、地に落ちた。長さ七寸ばかりの鉄の棒で、片方の先端が鋭利に尖っている。大袖に刺さっている物と同じ　棒手裏剣と呼ばれる武器だ。

毒！？

その恐怖がよぎつた。

すぐに小柄こづかを抜き、片膝をついて袴を破り、太ももの傷を露出させると、その傷口まわりの肉をえぐり取つた。血がどつと噴きこぼれる。

「ぐっ……！」

軽い目眩がした。わずかながら毒が身体に回つたらしい。

その状況で新太郎が背後の幽かな異変に気づくことができたのは、長年の兵法修行の成果というより、むしろこの若者独特の勘働きであつたらう。振り向いた新太郎が見たものは、先に斃した方の男が、地に伏したまま星型の手裏剣を飛ばした瞬間であつた。

濃い闇の中のことであり、男が何を投げたのか、正確には新太郎には見えていない。しかし、考えるより先に身体が反応した。反射的に地に身体を投げ出し、必死にその「何か」をかわした。

転がって起き上り様、新太郎は脇差を手裏剣打ちに投げた。恐怖に対する反射のような行動である。男は満足に動くことさえできぬ身体であり、脇差は狙いを違たがわず首元に深々と突き刺さる。断末魔さえ上げず、男は力尽きたように顔を伏せ、動かなくなつた。

「……」

新太郎は地に屈んだ姿勢のまま荒く呼吸しながら、あたりを窺った。

黒装束の男たちは二人とも動かず、息遣いさえ聞こえない。脇差を受けた男は間違いなく死んでいるであろう。うつ伏せに倒れているもう一人の方に恐る恐る近づいてみると、男は自ら棒手裏剣を首に突き刺し、すでに自死していた。

「こやつら、いったい何者だ……！」

慄然^{りっぜん}として呟いた。

これまで戦場で出会ったいかなる敵と比べても、男たちはまったく異質であった。終始一言も喋らず、音すら立てずに死んでいたというだけでも異様である。物の怪と戦ったような不気味さだけが残った。

先ほど叫んだ声に反応したのであるう、すでに周囲では宿直^{とくち}の者たちが騒ぎだしている。新太郎があらためて呼子を強く吹き鳴らすと、憩んでいた者たちも次々と目を覚まし、すぐさま活動を始めた。本陣の警護に駆けてゆく者、敵を逃がさぬために陣屋の木戸を閉ざして警戒する者、篝火を増やして回る者、賊を探して右往左往する者。

やがて山全体が無数の松明の動きで騒然となった。

「おお、世鬼殿のご長子か。曲者を仕留めなされたか」

近くの陣所にいた武士が数名の雑兵と共に駆けつけてきた。

新太郎は太ももの止血をしながら状況を手短かに説明した。

「忍びの死骸などめつたに拝めるものではござらぬぞ」

そんな軽口を利いて笑ったのは、萎えそうになる気力を奮い起こすためだ。先ほどから全身に脂汗が流れ、悪寒がひどい。

曲者の遺体を本陣へ運ぶよう男とその家来たちに頼むと、新太郎は足を引きずって山肌を登り始めた。

陣所の中はどこも人の動きが慌ただしい。ただ、騒ぎ回っているのは高橋方の雑兵や武士たちばかりのようで、戦いの喧騒といったものは聞こえて来ない。賊はあの二人の他にもおそらく複数いたはずだ。あるいは騒ぎを怖れて逃げてくれたものか。

本軍の陣所の木戸を抜け、本陣の周囲に植えられた木柵の前まで来ると、父の政時が十数人の家来を従えて防備にしていた。弟の小太郎の姿も見える。

「新太郎！」

息子の様子が尋常でないことに、政時はすぐさま気付いた。その武技の力量を誰よりも知っているだけに、驚きは小さなものではない。

「手傷を負ったのか」

「かすり傷です。毒を抜くため自分で肉を削ぎました」

「毒」

「殿はご無事ですか？　こちらに賊は参りませなんだか」

「ああ、大事ない」

逃走する二つの影を見はしたが、取り逃がしたという。

その言葉を聞いて安堵したのであろう、新太郎は崩れるように倒

れ、そのまま意識を失った。

息子を金創医の元へ運ばせた政時は、引き続き本陣まわりの警護を続けた。

しばらくすると、戸板に載せられた曲者の遺体が本陣へ運ばれて来た。

「これが新太郎が斃したという賊か……」

明るい場所で検分してみると、男たちの衣服は黒ではなく、正確には深い濃紺であった。筒袖の小袖の下に鎖帷子たつげはかまを着込み、裁付袴たつげはかまを穿き、手甲、脚絆で手足を固め、頭巾をかぶり、覆面で目から下を覆っている。持っていた刀が特徴的で、柄つか（握り）の部分が長く、無反りで刀身が細く、しかも毒が塗られていた。さらにその懐からは、星型に刃が付き出た車剣くるまけん（手裏剣）、棒手裏剣、苦内くない、鉤縄、石筆、毒薬などといった忍具が出て来た。どれも特殊な道具であり、野伏りあたりの持ち物ではない。いずれ筋目ある忍び武者であろう。

甲賀者か、あるいは伊賀者か……

政時も裏の世界の人間であり、甲賀、伊賀といったあたりの忍者の噂はかねて聞いていた。しかし、実際にそれと戦ったのは初めての経験である。

おそるべき者どもよ。

曲者たちが使った武器にはことごとく毒が塗られ、いわば暗殺に特化していた。同じ忍び武者でも、元が武士である政時やその家来とは根本的に価値観が違うのであろう。

「どこの誰が雇い入れたものか……」

敵の正体が知れぬだけに、問題は厄介であった。

騒ぎは徐々に鎮静化した。佐々部、岡、湯浅といった重臣たちが、家来を引き連れて本陣に集まって来た。

持ち寄った情報を総合すると、曲者は死んだ二人の他にも複数いたらしい。二人一組で行動していたようで、曲者を発見した（出会ってしまったというべきであろう）高橋方の雑兵たちは、多くが飛び道具によつて傷つけられ、実に三十人近くが毒に苦しみ抜いて死んだという。

「なんとということだ……」

政時は暗澹とした気分で呟いた。

敵の忍びを防ぐことは、忍び武者を統べる政時にとつてもっとも重要な役目である。大事に至らなかつたのは幸いであつたが、政時が忍兵頭となつて以来、最悪の醜態であつたと言つていい。確かに手下には多少の油断があつたかもしれないが、警備態勢に手落ちがあつたとは政時には思われぬ。それだけに、その警戒網を潜りぬけて陣中深くまで潜入し得た敵の技量を認めぬわけにはいかなかつた。

その頃、外の騒ぎで目を覚ました高橋久光は、本陣の幕舎の寝所で、そのりと身体を起こした。

枕元の刀を引きつけ、

「たれかある」

と声を掛けた。

鰻幕一枚を隔てて、十人の宿直の武士がそれぞれ刀を引きつけて座っているはずである。

宿直とくのいの小姓が返事をし、数人の人間が動く気配がした。

「幕を開けよ。陣中のことゆえ礼は無用じゃ。騒ぎの元はなにか。」

甚介じんすけが近くにおれば、ここへ来るよう申しつけよ」

駆けだした小姓は、本陣の柵の前で目当ての世鬼政時と行き会った。

政時が寢所へ伺候すると、主君あるじの久光は不機嫌あゝそうな顔で横臥し、肘枕ひじまくらについて待っていた。その枕元には、若殿わかしらである興光おきみつが小具足姿で座っている。

「敵の夜込みか？」

「は。何者かが殿のお命を奪わんと陣中に忍び入ったもののようにござる。愚息が二人までは討ち果たしましたが、他はとり逃がしました」

ふん、と鼻から息をついた久光は、

「経久めもついに知恵の泉が尽きたか。忍びを使ってわしを暗殺しようとは、姑息な手を選んだものよ」

と吐き捨てるように言った。

「いや、必ずしも尼子経久の仕業とは限りませぬぞ。今宵の賊は、野伏り夜盗の類ではござらぬ。彼奴あいつらが使った得物にはことごとく毒が塗られておりました。おそらくは甲賀、伊賀といったあたりの忍び武者でござろう」

不思議なのは、敵軍が動かなかったことである。忍びを夜込みに使うなら、高橋軍の陣の混乱に乗り、夜襲を仕掛けるというのが戦術の常道であろう。当然そうあるものと政時は覚悟し、重臣たちに進言して全軍に戦支度をさせたのだが、尼子方の豪族たちの陣に目

立った動きはなく、山野は静まり返っている。

政時がそう指摘すると、

「それは、まあ、確かに腑に落ちぬな……」

久光は首を捻った。

今夜の騒ぎと敵軍とは連動していなかったのか。

だとすれば、忍びを放った人間を特定するのは難しくなる。甲賀者、伊賀者といった連中は金さえ積みばどこの大名の仕事でも請け負うらしいから、久光に恨みを持つている人間、久光を消したがっている人間はすべて怪しいということになるが、それらをいちいち数えあげれば両手の指を合わせても足りないのである。

尼子氏に限らず、隣郷の穴戸氏や三吉氏も久光を仇敵視しているし、備後の山内氏、江田氏、和智氏、有福氏などもたびたび備後侵入を企てる久光を憎んでいるであろう。これまで高橋氏が滅ぼしてきた小豪族の縁に連なる者の仕業ということだってあり得る。今は高橋の傘下に収まっているが、たとえば出羽氏いすはあたりなら、暗殺を仕掛けて来たとしても何の不思議もない。

いや、怪しいのは何も敵ばかりとは限るまい。国人一揆の味方でも、たとえば吉川氏や毛利氏はシロとは断定できない。吉川氏とは昔から仲が悪いし、多治比の元就なども自分を恨んでいるに違いない。あるいは小早川氏、平賀氏といったあたりが、立て続く備後遠征の負担に腹を立て、あるいは国人一揆の盟主の座を奪うために、自分を亡き者にしようと謀ったということも可能性としては低いが、絶対にあり得ない話とまでは言い切れまい。

いやいや、味方というなら、高橋の一族の中にさえ自分に不満を持つ者はあるう。たとえば鷲影城の盛光、あの欲望の強い愚か者なら、誰かに言葉巧みに唆そそかされれば、どのような愚拳に手を染めぬとも限らない。

そこまで考えて、

ようもこれほど人から恨まれたものよ。

と自嘲が浮かんできた。

戦国乱世は食うか食われるかの時代である。停滞は後退と同義であり、常に食う側にあらねば強者から格好の標的にされる。久光が高橋氏の富強に努めたのは、言うまでもなく高橋に属する人々を守るためであり、一族と家来、さらにその家族の繁栄のためであった。久光は武士としてこれまで敵はすべて戦場で葬ってきたし、暗殺などという卑劣な手段を用いたことはなく、自ら天に恥じるところもない。にも関わらず、こうして刺客に命を狙われるような羽目になっている。

「因果なものよな……」

その眩きには苦い響きがあった。

翌朝、高橋氏の本陣に毛利氏、吉川氏、小早川氏、平賀氏といった国人一揆の武將たちが軍議のために集まってきた。

元綱が兄の元就らと共に高橋氏の陣屋に赴くと、本陣の前に獄門台が据えられ、貧相な瘦せ首がふたつ、それに架けられていた。

「昨夜この陣所に忍び入った曲者らしい」

と元就が教えてくれた。

「あれが俺の寝る間を奪った元凶か」

元綱は不機嫌そうに返した。

高橋軍の陣が騒然となったのはほんの三刻ほど前である。山一帯で松明が無数に揺れ動き、すわ敵の夜討ちかと、毛利軍の陣でも防戦の準備で大騒ぎになった。元綱も夜中に叩き起こされ、朝まで寝ずに過ごすことになったのだが、結局敵軍に動きはなく、ただ睡眠

時間を奪われただけで終わった。

「噂では伊賀、甲賀あたりの忍びであるというぞ」

「ほう」

元綱も「まがり鉤の陣」の昔話くらいは耳にしたことがある。

「名高いけしやう化生の首か……」

ふたつ共にどこといって特徴はなく、篤実な農夫と実直なこめきんと小商人といった顔つきである。

「鬼にも魔物にも見えんな」

元綱が素直な感想を漏らすと、

「そもそも姿形で目立つようでは忍びは務まるまい」

と言って元就は苦笑した。

本陣に入ってゆくと、そこに集まった武将たちの間でもその噂で持ちきりであった。ことに賊が毒を用いたという点が人々の関心を引いていた。

この軍の名目上の主将は高橋氏当主の興光だが、実際の指揮はその祖父の久光が執っている。賊はおそらく久光を狙ったのである。それが、それに味方している武将たちにすれば凶刃が自分たちに向けられぬとも限らないわけで、他人事ではない。

「やはり出雲のお屋形のお仕業であろうか」

誰かが述べた声に、

「いや、そうとも限るまい」

と返したのは、吉川元経だ。

「出雲のお屋形は、わしの知る限り、暗殺、毒殺などという陋劣な手は用いたことがない」

「では、誰が」

「それは判らぬが、たとえばわしが大枚を叩いて忍びを雇うとすれば、夜討ちの手引きに使うな。雑兵を少しばかり毒殺したところで合戦の大勢に影響はあるまい。夜込みを仕掛けておいて敵が軍を動かさなんだ点も気になる。あるいはこの合戦とはまったく関係のない筋から、ということも考えられる」

「なるほど……」

「まあ、忍びの跳梁が一度で終わるとは限らぬし、次は夜討ちか火つけに使うのかもしれない。要するに、敵の狙いがはつきりせぬ上は、何も判らぬということだ。今は考えたところで無駄だな」

高橋久光は無然とした表情でその雑談の様子を眺めている。

集まった武將たちの顔つきや眼つき、その言動の端々までをじつと観察し、

この連中の中に首謀者はおらん。

という確信を得た。

久光も、海千山千の武將たちを相手に戦国乱世を泳ぎ渡ってきた男である。陰謀を腹に秘めた人間の貌や、殺したい相手を見る時の

人間の眼というものを幾つも見てきた。その経験と勘から言えば、武將たちはどれもシロであった。彼らは自分に好意を持ってないが、害意を抱くほどの恨みも蔵してはいない。

そもそもわしを殺せるほどの器量の者がおらんわ。

久光は、盟友の武將たちと交わした友誼や誓紙や言質などは爪の先ほども信じていなかったが、己の人物眼だけは信じていた。

人を信じるということは、その人間を見抜く己の眼を信じることだと久光は思っている。そう考えていれば、たとえ人から裏切られても、己の眼が曇っていたことを咄えわらばよく、誰を恨む必要もなくなるからである。恨み、怒り、好悪などはいずれも感情であり、感情で政治をすれば必ず道を誤る。大名は政治家である以上、政治判断から感情は排除すべきであり、久光は高橋の家督を継いでからこの三十年、そのように努めることを己に課していた。その見切りの正確さと凶太さのほどは、劫きりを経た政治人間特有のものであつたろう。

世鬼政時は、翌日から陣中の篝火を増やし、夜警の人数を倍にした。

自らも夜間はほとんど眠らず、敵の忍びの侵入に備えたが、それ以後、同様の騒ぎは二度と起こらなかった。

合戦自体は小競り合いに終始し、やがて出雲から尼子軍が援軍にやって来たところで久光は滞陣を打ち切った。国人一揆軍は一月ほどで備後から退却したのである。

高橋軍は石見の阿須那に帰り、政時も藤掛城の警備の任に戻った。

「先日は防ぎ得ましたが、敵が再び同じ手を使ってこぬとも限りませぬ。警護の士を増やすことはもちろんですが、念のため、殿には日ごとに憩まれる部屋を変えて頂きとつごころ」

帰国したその夜、主君である久光に進言した。

「寝所を増やすか」

久光は、面倒だ　と言わんばかりに苦笑した。

「お前から見て、この城は忍び入るにたやすいか」

「戦時は城内に人が溢れ、篝火や松明が闇を払いますゆえ忍び入るのは難しゅうござるが、平時であれば、忍びの達者に入れぬ城などはござらぬ。ご当家の城もしかり。拙者が愚息なら苦もなく出入りができましよう」

「苦もなく、か」

「殿をお守りしておるのは、城ではなく、人なのです」

忍びの達者に守られている城こそが忍びに対しては堅城なのである。

久光は政時の言を容れ、警備をすべて一任することにしたが、

「わしよりも興光の警護を厳にせよ」

といったあたりは、さすがの剛腹さと言つべきであった。

長子の新太郎は　毒抜きの処置が早かったことが奏功したのであろう　順調に体調を回復していた。足の傷口の肉も盛り上がり、半月もすると元のごとく走れるようになった。

しかし、身体が回復するにつれ、

不覚を取った。

という事実と自らの甘さに対する怒りが、新太郎の腸はらわたを焼き始め

た。

阿須那に帰ってからも新太郎の表情は冴えない。

幼い頃から兵法修行によって自らの心身を錬磨してきた新太郎には、ある種の求道者のような執拗さがある。その力量・技量を自ら自負していただけに、あの夜の敵の技法や価値観が己の想像を超えていたことに強い恥辱を覚えた。

甲賀、伊賀あたりの忍び武者……。

その卓越した術技の噂は聞いてはいた。が、何より驚くべきは、声さえ立てずに死んでいった忍びとしての精神の強靱さであろう。連中は、それだけの凄まじさを心に棲まわせていた。

刀術では俺の方が遥かに上だった。

しかし、忍び武者としてはどちらが上であったか。

あの者たちに対する畏敬の心が、激しい敵愾心てきがいしんに変わった。

あれらの狙いが主君・高橋久光の暗殺であれば、時機を待って必ず再び仕掛けて来るに違いない。その時こそ、自ら働きで先日の恥はてを雪ぐ。

二度と不覚は取らぬ。

新太郎はそう心に期した。

そして事件は、永正十七年閏六月うるしの某日 横田の松尾城で起こる。

第四章 吹き荒れる腥風 暗闘（四）

雨脚が少し強くなった。

鼻をひくつかせてその匂いを嗅いだ墓目は、

良い塩梅あんばいじゃ。

と独りほくそ笑んだ。

この雨が明け方まで続けばほとんどの篝火は消えてしまうであろう。まるで今宵の仕事を天が援けてくれているようではないか。

墓目たち八人の甲賀衆は、大狩山の南尾根を中腹まで下り、樹林の斜面を伝い、木陰の闇に溶けながら、鼠の群れのように山肌を横断していた。

誰も口を利かず、ほとんど物音も立てない。

やがて城を頭上に見上げる西側の断崖へと到った。

松尾城は本丸が上下二段に分かれており、それぞれに居館がある。上の段の屋形は城主である高橋重光しげみつの住居で、下の段のそれは客殿であるらしい。墓目たちが探ったところでは、標的である高橋久光は、下の段の居館を定宿にしているという。

本丸の北側と東側には階段状に五つの曲輪まがわが作られていて、尾根になっっている北西と南には巨大な堀切が横たわっている。一方、城の西側と南尾根の東側は断崖となっており、人が這い上げられるような傾斜ではないから曲輪は築かれていない。

頭上に警戒しながら本丸の裾を巡るよう移動した墓目たちは、南側の堀切の底を這って横断し、その尾根の東側斜面に降りた。そこから慎重に城の南側へ廻り込み、本丸の下の段の真下を目指す。

笹の藪の中を野生動物のように這い進んでいた墓目は、茂った下草の間に細い紐が張り渡されていることに気付いた。足でも引っかけようものなら、番小屋の鳴子ななこが鳴る仕掛けなのである。

用意の良いことじゃ。

無言のまま手振りや仲間注意を促し、さらに斜面を渡ってゆく。

本丸は十丈（約三十メートル）四方ほどの広さがあり、周囲を土塁と板塀で囲われている。南東の端に二の丸へと続く虎口があり、その大きな櫓門は物見櫓も兼ねているらしい。敷地の四隅には二層建ての角櫓がある。そのすべてに不寝番が立ち、闇を睨んでいるに違いない。

尾根も中腹までは樹林で覆われているのだが、城頭からの視界を確保するため、城の周囲は樹木が切り払われ、下草だけになった山肌が露出している。月夜であれば身の隠しようもなく、侵入者の影は櫓から丸見えであつたろうが、この闇夜である。よほど夜目が利く者でも発見は困難であらう。

もつとも闇が濃いあたりを選んで、暮目たちは蜘蛛のように斜面に張りついた。両手の鉤爪を山肌に食い込ませ、少しずつ身体をせり上げてゆく。

音立てぬように慎重に。

やがて本丸の板塀の影が闇夜に浮かび上がった。南の角に角櫓があり、その屋根の下から幽かな明りが洩れている。

粗忽な者があつたものよ。

暮目は内心で嗤った。明りに慣れた眼では闇はまったく見通せないのである。せつかくの不寝番が意味を成さぬではないか。

暮目たちは呼吸を計り、一気に斜面を登り、素早く板塀に張り着いた。もし敵に発見されていれば、この時点で呼子が鳴り、松明を持った武者が騒ぎ出したであらうが、幸いにもその兆候はない。城は相変わらず静まり返っていた。

板塀には矢狭間が切られている。暮目はそこから城内を覗き、影たちはそれぞれ地面や板塀に耳をつけ、付近の気配を窺った。

人の動くような気配はない。

板塀の高さは一間半ばかりである。一人が鉤縄を投げ、それを使って慎重に板塀を越えた。

しばらくの沈黙があり、板塀がコツリと一度鳴った。

合図である。残る七人が縄を伝って塀を越えた。

地に降りると、まず土塁に沿って据えられた数個の篝火が目に入った。雨のために火勢は弱まり、よほど光量が減っている。正面に二棟の居館があり、桧皮葺の屋根とそれを囲う板垣、中庭の庭木などが見えた。板垣に沿って左手に角櫓、右手に巨大な櫓門がそびえ、それぞれの窓からわずかな明りが洩れている。

それらを素早く見て取ると、八人は無言のまま連携を取りつつ居館の中庭に侵入し、庭木の影、板垣の影、庭石の影などに身を溶け込ませた。雨と風の他に何の音もない。見事な技術であった。

中庭に篝火はなく、板垣の内側は非常に暗い。

もつとも厄介なのは犬が飼われている場合である。念のために毒入りの肉団子も用意してきたのだが、どうやら必要はなさそうであった。

忍びという生き物は、敵の城池の闇に身を浸していることに密やかな愉悅を覚える。昼間の城は武士たちのものでも、夜の城は、その闇が続く限り己のものだという忍者独特のねじれた感性であり、血反吐を吐くほどの修練の果てに身に付けた己の偷盗術に対する自己陶醉と言ってもいい。

しかし今宵の暮目は、その酔いが少しも湧いて来なかった。

この城入り、容易であり過ぎたわ。

そのことが逆に厭な予感となつて、悪い酒でも飲んだときのよう不快さだけが喉元にへばりついている。

が、それでもここまで来て手ぶらで引き返せるものではない。

暮目は手で合図し、それに応じて二つの影が母屋に近づいた。

音も立てずその杉戸を外し、廊下を窺う。

室内に灯火はなく、光は漏れて来ない。

二人は床に耳をつけて音を聞き、人の足音がないことを確認すると、脱いだ草鞋を懐中に入れ、縁にあがった。その足袋の足裏には綿が縫いつけてあり、音は皆無である。

暮目たちの探索では室内の間取りまでは判っていない。中庭に面するもつとも大きな部屋に当たりをつけた。

その敷居に油を流し、音を立てずに障子を開いたとき、

「放て！」

という声と共に、暗闇の中で弓弦ゆまを弾く音が立て続けに響いた。

杉戸が倒れ、十数本の矢を浴びた影が縁から転がり落ちる。

ほとんど同時に呼子よこいが夜天に鳴り響いた。

罨か。

そう悟った暮目は、

「散れ」

と鋭く命じ、庭木の幹を蹴ってその太い枝へ跳び上がった。

他の五人もそれぞれの方向に飛んでいる。

呼子に呼応して櫓門では半鐘が打ち鳴らされ、闇の室内からは床板を踏み鳴らす複数の足音が殺到した。

暮目は腰の袋から五寸ほどの竹筒を三本取りだし、懐中の胴火ふところ（携帯用の火種）で導火線みちびに素早く火を点け、それをひよいひよいと投げた。これは「爆竹」と呼ばれる一種の手榴弾で、竹筒には火薬が詰められている。

甲賀者の死骸のあたりで閃光が起こり、爆発が連続した。死んだ甲賀者たちの面貌を潰すのと同時に、室内から出て来た敵を轟音と爆風で驚かせ、その出足を牽制するのが狙いである。その狙い通り、部屋の奥から飛び出した十人ばかりの武者が爆発に巻き込まれた。彼らにすれば想像もできない反撃法であつたらう。もちろん現代の手榴弾ほどの殺傷力はないが、それでも爆発を間近で受けた者は大怪我をし、あるいは吹き飛ばされて気を失うなどして、一時的に敵方が混乱した。

甲賀の下忍は幼い頃から様々な術技を身体に叩き込まれるが、一般に刀術や槍術といった武技は学ばない。武技で身体を鍛えれば特

定の筋骨が発達し、そのことで変装が見破られる可能性が増すからである。多くの甲賀者にとって白兵戦は必ずしも得手ではなく、その欠点を補うために戦闘は暗殺に特化し、毒を塗った得物や飛び道具で敵を仕留めることを主とした。幕目もその例外ではなく、たとえば刀術などは並みの武士にも劣ったが、この男は火薬の製法と扱いに長じ、その火術は仲間の間でも一目置かれるほどであった。しかし、その幕目の術技をもつてしても、この状況を打開するのは容易ではない。

どういう仕掛けかは判らぬが、幕目たちがこの夜に松尾城に忍び込むことを敵方は察知し、待ち構えていたらしい。樹上から周囲を見渡すと、城内の建物という建物から武者が溢れ出し、本丸の上の段でも、二の丸、三の丸あたりでも、おびただしい松明が揺れていた。こうなると逃走経路は曲輪のない西方か南東の崖を転げ落ちるしかないが、そこには必ず兵が配されているであろう。

これは覚悟せねばなるまい。
と内心で呻いた。

飛鳥のように闇空に身を躍らせた幕目は、跳ねるように中庭を駆け抜けつつ、周囲の篝火の鉄籠かねかごに続けざまに煙玉を放り込んだ。轟音と共にそれが爆ぜ、朦朧もうもろうたる白煙が周囲を包む。雨が降っているので効果はほとんど期待できないが、わずかな時間稼ぎにはなるであろう。

幕目の意図を察して、五人の甲賀者たちがそれぞれの方向に駆け
た。

弓弦ゆみを弾く音が連続した。鋭い風切り音と共に後方と左方から無数の矢が飛来する。めくら撃ちだが、運のない二人がその矢をまともに急所に受け、地に転がった。矢や槍のような刺突系しゅうしつの武器は、角度によつては鎖帷子では防げないのである。

幕目も薄手を負ったが、頓着している場合ではない。

曲輪の端は五尺ほどの土塁となっており、その上に矢狭間やのまを切った板塀が立っている。幕目は白煙を突っ切り、そのままの勢いで跳

躍し、土塁を飛び越えて板塀の裏の木柵に取りついた。

さらに横木を蹴って身体を跳ねあげようとした刹那、右方から夜気を切り裂いて手矢が飛んで来た。

「！」

辛うじてそれを刀で払う。

雄偉な体躯の若い武者が、土塁の上で待ち構えていたのである。

世鬼せき新太郎であった。

新太郎は距離を詰めつつ二本、三本と続けざまに手矢を投げた。

それを必死で払う暮目に、さらに刺突の形で殺到する。片手で身体を支える暮目がその槍先から遁のがれるには土塁から飛び離れるしかない。

暮目は舌打ちし、トンボを切って大きく後方に飛び、再び白煙の中へと落ちた。

敵の攻撃をかわすことは身体に染みついた反射のようなもので、考えての行動ではない。時間にすればわずか五秒ほどの出来事であり、行動を選択するゆとりも後悔するヒマもなかったのだが、しかしあえて指摘すれば、これは暮目の判断ミスであった。たとえ手矢を身体で受けても、槍で串刺しにされても、ともかく塀を越えて崖へと落ちねばならなかったのである。その傷が致命傷になるかどうかは食らってみねば判らぬわけで、同じ賭けならわずかでも生き延びる可能性がある方を選択すべきだった。

曲輪の中に戻ることは、そのまま死を意味する。

これまでじゃのお。

そこが地獄であることを暮目は知っていた。

「懸かれ！」

新太郎の声に、角櫓かどぐらと櫓門ぐらもんに潜んでいた武者たちが左右から白煙

に向けて駆け込んだ。その数は五十に近い。飛び道具を警戒してか多くの者が戸板や矢楯に身を隠し、その背後の者は多数の松明を掲げている。もはや姿を隠してくる闇も払われ、火遁かとんが利く状況でもなく、幕目の刀術ではどうにもならない。

せめてもの死土産に、甲賀の忍び武者とはどのようなものかとくと見せてやるうわ。

幕目は素早く爆竹に火をつけ、それを腰の袋に戻し、殺到して来る武者たちの中心に飛び込んだ。

突き出された槍が、胸を、腕を、腹を、背を、深々と貫く。

己の身体を貫く槍を両手に握った幕目は、壮絶な笑顔を見せた。

そのまま爆竹が爆発し、その炎熱が袋の中の残りの爆竹を誘爆させた。薄れつつある白煙の中で凄まじい爆音が連続し、周囲の武者たちを巻き添えにして幕目の身体は四散した。

残る三人の甲賀者は、手持ちの飛び道具を投げ尽くすと、一人は敵の武者を道連れにして自死し、二人は死兵となって最後まで抵抗したが、全身に槍を受けてほどなく討ち取られた。

「終わったか」

主君・高橋久光の身代わりとなって本丸の下の段の屋敷の寝所に陣取り、討ち手の指揮を執ったのは、世鬼政時である。

政時が呼子を吹いてから、時間にすればほんの数分で戦闘は終息した。

戦場となった中庭や土塁付近を検分した政時は、

「これほどの手負いと人死にが出ようとはな……」

と苦々しく呟いた。

死者が十余人、軽傷まで含めると負傷者はなんと四十余人である。完全武装した兵をあらかじめ要所に配し、賊を城内深くまでおび

き寄せておいて退路を断ち、いわば袋の鼠にしての殲滅戦であつたにも関わらず、たった八人を仕留めるのにこれほどの血が流れると、このは、想像をはるかに超えていた。

「一網打尽か」

二の丸にある屋敷の一室で、高橋久光はその報告を受けた。

「その何とかという笛師の申しした通りであつたな」

「は」

政時はやや曖昧に頷いた。

「半信半疑　というより、十中八九は虚言か計略と想つておりましたが。実際に賊がやって参りました上は、眞実を申し述べておつたと考えるよりないかと……」

「次郎左衛門」

久光は顎をあげ、重臣たちのはるか下座に控える湯浅次郎左衛門ゆあしという四十男に声を掛けた。

「その笛師に褒美を取らさねばなるまい。明日にでも城にのぼらせよ」

「あ、ご引見くだされますか」

これは己の手柄をも認められたことになる。次郎左衛門は嬉しげに平伏した。

この一日前の話である。

深更の頃、松尾城の警備をする世鬼政時の元に、城主・高橋重光の重臣である湯浅次郎左衛門の家来がやって来た。

次郎左衛門の屋敷は城下の横田村の集落にあるのだが、なんでもこの夜中に旅芸人が屋敷の門を叩き、容易ならぬ注進をしたのだという。

「我が主人あのしが申しますには、その芸人の話、いかにも面妖で、怪しいとは思うものの、内容が内容だけに笑って済ませるわけにもいかず、どうか世鬼殿に屋敷までご足労頂いた上、吟味して頂きたいとこのことで」

容易ならぬ内容というのは、高橋久光暗殺の謀計であるという。その旅芸人が偶然にも盗み聴いてしまったというのだ。

そんな都合の良い偶然があるか。

と政時は思い、むしろその男が敵方の謀者でないかとさえ疑った。深読みすれば、それ自体が政時を松尾城から遠ざけるための姦計ということだっており得る。

が、湯浅氏は高橋家中では一門衆に名を連ねる重臣であり、次郎左衛門はその傍系とはいえそれなりの有力者である。話の内容が内容だけに、警備責任者たる政時の立場では放置することもできかねた。

政時は息子たちに松尾城の警備を任せ、山を降りて城下の横田村へ向かった。

徒歩でも四半刻もあれば次郎左衛門の屋敷につく。

その門扉をくぐり、家来に案内されるまま母屋の廊下を渡っていると、中庭を通して書院から見事な笛の音が響いてきた。

思わず足が止まった。

政時は歌舞音曲には疎い。が、その音色が尋常でないということ
は判る。

これは素人芸ではない。

曲名は知らなかったが、その音色はどこまでも澄み、心が震えて
しまっほどの哀調を帯びていた。

客間に入つてゆくと、上座に座る次郎左衛門を前にして、連歌師
のような格好をした男が笛を吹いていた。

「ああ、世鬼殿、わざわざのご足労、申し訳ない」

次郎左衛門の声で笛の音が止まった。

再び男の方に顔を向けた次郎左衛門は、

「いや、実に見事なものだ。わしはこれでも十年ほど前に上洛した
ことがある。京では観世座かんせの猿楽を見、そこで様々な笛師の音を聞
いたが、そちの笛は松垣本ひがきもとの彦兵衛ひこへえと比べても、優るとも劣らぬ」

などと男を激賞した。

「とんでもない。笛彦兵衛ふえひこへえと申さば、今や天下と目される名人
。わたくしなどは比べられるのも烏滸おしがましゅうございます」

「いやいや、そのように謙遜したものではないぞ。巖島の神人しんじんなど
にも笛の達者はあるが、これほどの音ねを出せる者はまずおるまい」

次郎左衛門はズレた話だが 政時の到着を待っている間に、
すっかりこの旅芸人の笛の音に惚れ込んだものらしい。この男は武
士としては臆病で、武将としては無能というに近かったが、文化的
素養は低くなく、たとえば和歌をよくしたし、鼓つづみを打たせればな
なかの達者であった。だからというわけでもないのだろうが、妙に

通人ぶつたところがある。

「先年討ち死になさつた出雲のお屋形のご長子が、笛の名手であつたと聞いたことがあるが」

そのくだらない話題を、政時は強い咳払いで一掃した。風流は武士の嗜みたしなかもしれないが、政時はその点においては朴念仁で、歌舞音曲には興味もなければ理解もない。

次郎左衛門の右手に席を取つた政時は、下座の男を観察した。

年は四十代半ばといったところか。丸めた頭の上に宗匠頭巾を載せ、垢じみた墨染の衣を着ている。背は五尺に満たぬであろう。眉が太く、眼も鼻も大きい。顎がよく張つており、髭の剃り跡が青々と濃い。どこか狛犬に似た強面こわもてだが、刷毛で描いたような眉尻が下がり、困つたようなその表情には奇妙な愛嬌がある。

「拙者は世鬼政時と申す。役儀により尋ねるが」

政時の問いに、男は素直に答えた。

「わたくしは銀兵衛と申します。笛師を生業なりわいにしております」

両手を揃えて土下座のような辞儀をする。

このような半僧半俗の芸術家は、この時代、そう珍しくはない。たとえば連歌師、傀儡子くくし、絵師、琵琶法師、太平記読み、放下師ほっかじ（曲芸師）、声聞師しょうもんし、彫師、鞠師、算置かすおき（占い師）、陰陽師などがそれで、つまり身に付けた芸を活計たつきにしている人々である。多くの芸能にはそれぞれ「座」があり、それに属して一所に定住し、集団で芸を披露しているような者もあれば、宿場や市を流れ歩いて放浪している者もある。この笛師は後者なのであろう。

こうした職能民たちは、もともと技術や芸能をもって朝廷に奉仕

する供御人くしんごであつたり社寺の神人であつたりして、朝廷や社寺から庇護を受け、全国の関所を自由に往来する権利を古くから認められていた。土地に定住しない遊行民や芸能者は謀者が化けるには格好の存在で、それ自体は珍しくないとは言つても、怪しい相手であることに違いはない。

「して、この夜更けにわざわざ湯浅殿の邸宅に駆け込んだ仔細とは」
政時が質すと、銀兵衛は次郎左衛門に語つたであらう内容をもつ一度順序立てて語りだした。

この男は、安芸から石見へ抜けるためにこの横田を通つたらしいのだが、横田の集落に入つたあたりで陽が暮れたため、集落の外れにある辻堂つじだうに一夜の宿を取つたのだという。雨漏りがひどかつたが、須弥壇しゅみだんの裏あたりが比較的それが少なかつたので、そこで横になつた。夜中にふと目を覚ますと、外　つまり本堂の裏手で　ひそひそと話す声がある。物の怪でも出たかと恐ろしくなつたが、聴きたくなくとも声は耳に入つて来る。その話の内容が、どうも尋常ではなかつた。

「畏れ多いことでございますが、聴こえたまを申しますと、『明夜の深更』とか『松尾の城』とか『久光の首を取る』とか何とか。わたくしはもう、恐ろしゅうなりました。久光さまというのがご当家の大殿さまというのは先ほど教えて頂いたばかりなのでございますが、」

「それで？」

「はい。しばらく息をつめて震えておりましたが、やがて声は聞こえなくなりました。わたくしはそれからまたしばらく様子を窺つておりましたが、誰もおらぬようなので、須弥壇の裏から這い出

しまして、ともかくもこの事を誰かにお報せせねばと、この辺りで一番大きいお屋敷の門を叩いたという次第で

「ふむ……」

「狐にでも化かされたのかとも思いますが、話の内容が内容でございませし、黙っておっては後生も悪うございます。夜中にご迷惑かとも思いましたが、一刻も早くお報せする方が良いかとも思ひまして

」
どうにも話が出来過ぎている。

政時の感覚では、備後での暗殺者たちはその道の玄人である。大事がこのような形で漏れるとは考え難い。

こんな胡乱うごんな話を信じられるか。

とも思ふのだが、しかし、万が一ということもある。

政時は松尾城に戻り、賊を取り込めて返り討ちにする計略を立て、武装した兵を要所に配し、兵たちには作戦と毒や飛び道具への対処を周知し、主君の高橋久光を密かに二の丸に移すなど、翌夕までに迎撃態勢を万端整えた。

無論、銀兵衛が敵方の謀者という可能性も捨て切れないわけで、次郎左衛門の屋敷に逗留するという形でしばらく軟禁することにしたのだが。

その結果が、今夜の大立ち回りである。

笛師の言葉の通り賊は松尾城に侵入し、それを待ち構えていた高橋方は敵を文字通り殲滅した。事前に入念の準備をしていたからこそ、逃がさず討つことができたと言えるであろう。

政時は人並み以上の猜疑深さと用心深さを備えていたが、

あの笛師、少なくとも当家に害ある者ではないらしい。

と理解せざるを得なかった。

その翌日、高橋久光は銀兵衛を松尾城に招き、褒詞と褒美を贈っ

た。

「わたくしなぞは何もしておりませぬのに、もったいないことでございます」

「そちは見事な笛を吹くと次郎左衛門から聞いた。阿須那あすなを通る折りあらば、藤掛城を訪ねて参るがよい」

久光の言葉に恐縮し、殊勝な顔で頭を下げながら、銀兵衛は内心で嗤っている。

高橋家中に知己を作ること。

その信頼を得ること。

標的である高橋久光の顔を実際に見ること。

甲賀衆をダシにし、湯浅次郎左衛門に仕掛けた銀兵衛の「忍術」は、ほぼ目論見通りに成功した。

半月ほど時間を遡らねばならない。

出雲の月山富田城。

その大東平おおひがしなりと呼ばれる曲輪にある屋形の書院で、亀井秀綱は酒を飲んでいた。

備後で安芸の国人一揆軍と戦い、それを追い払い、まさに戦陣から帰国したばかりである。ようやく激務から解放され、多少の気のゆるみもあつたかもしれない。普段は夜食に寝酒を嗜む程度であったが、この夜は量が違っていた。主君である尼子経久が開いてくれた慰労の宴で同僚たちと酒を酌んだ後、屋敷に帰ってから飲み続けているのである。もはやどれほど干したか判らぬほどであった。

灯明の芯が幽かな音を立てながら燃えている。その焰ほむを見つめていた秀綱は、だらしなく崩した足を組みかえた。

今宵あたり、来ぬかな。

この若者は、ある男の来訪を待っていた。

備後の戦陣から父の永綱に手紙を送り、京へ使いを出してもらったのは十日ほど前である。忍びの中には一夜で二十里を駆ける者もあるという。あの男なら、秀綱の帰国を待っていたように眼前に現れたとしてもおかしくはないであろう。

いや、そもそも銀兵衛がわしの呼び出しに応える気があるかどうか。

使者はまだ帰国してないから、首尾がどうなっているかは判らない。

ただ、あの男がいずれやって来るであろうことを、不思議と秀綱は疑っていなかった。

銀兵衛に初めて会ったのは、もう二年ほども前のことになる。時間が経つてから思い返してみると、あの時のことは不思議なほど腹が立たず、それどころか奇妙な懐かしささえ感じてしまっている自分がある。

思えば、あれに似た型の男を、わしは他に知らぬ。

同じ鉢屋者である鉢屋弥之三郎などと比べても、銀兵衛の言動や振る舞いはよほど変わっていた。

傍若無人にして、唯我独尊。

その態度は、職人氣質かたぎにも通じる精神と、己の技に対する矜持とをもつて、たった一人で世間と対峙しているかのようなだった。あの男が誰にも仕えず、何にも属していないからであろう。

秀綱は主人のために働くことを至上の原理とする武士であり、その社会の中で生まれ、その組織の優秀な官僚として生きてきた。そこから逸脱することはあり得ないが、一方で秀綱も一個の男である以上、己の力のみを頼りに自由気ままに生きる銀兵衛のような存在に、ふと、ある種の羨望を覚えぬでもない。自分の裡なかのその傾斜こっけいに気付いた時、秀綱は、銀兵衛のような男に、悲痛でもあり滑稽こっけいでもあるその存在に、微笑を向けてやりたいような気にさえなった。お屋形さまも、先代・銀兵衛の話になさる時は、好よい貌かおをな

されていたな。

御殿育ちのこの若者が、人として少し大きくなった証左と言えたかもしれない。

「すごした」

と独りごちて、秀綱は盃を伏した。

かなり酔いが回り始めている。

そろそろ寢所に引き取るうかと考えた時、

「能登殿よ」

という声が、どこからか響いた。

秀綱は周囲を見回した。が、部屋に異変はない。

「ずいぶんと酔っておられるようじゃ。今宵は出直した方が良くないかな」

笑いを含んだ声がする。しかし、姿はない。

相も変わらず不埒なヤツじゃ。

中庭に面する障子を開け、夜の庭に眼を凝らす。闇の中までは見通せないが、光の届く範囲には異変は見当たらない。

次いで次室の襖を勢いよく開くと、そこに控えていた近侍が驚いたように平伏した。その部屋にも他の人影はない。

「如何なされました」

「屋根裏か、床下か、曲者が入り込んでおる」

苦笑しながら言った。

「人を入れてあらためよ」

「は。しかし」

「なんじゃ」

「その必要はなかるうかと存じまする」

と応えた近侍が、急に面を上げた。

さしもの秀綱も一瞬絶句した。声や衣服こそ近侍のものだったが、しかしその顔は、近侍のそれではなかったのである。

「銀兵衛」

ボサボサだった蓬髪を武士らしく結びあげてはいるが、どこか狛犬に似た特徴的なその顔は忘れるものではない。

「お久しぶりでござるな。能登殿も壮健そうで何よりじゃ」

銀兵衛は屈託なく笑った。

「いつも人を喰った現れ方をするな。ここにおったはずの男はどうした？」

「連日のお勤めでお疲れであったのであろう。この次の間で寝ておるよ」

言葉もないとはこのことである。

「そのように酔つておられては足元がおぼつかぬ。転ぶ前に座られたらどうか」

「余計なお世話じゃ」

秀綱は苦く吐き捨て、文机の前のいつもの位置に腰を下ろすと、「お前も入れ」と銀兵衛に促した。

銀兵衛は気軽に立つてずかずかと敷居をまたぎ、客の位置に座った。

「さて、わざわざ呼ばれた御用は何じゃ」

「折り入って、仕事を頼みたい」

「ほうほう」

銀兵衛はニヤニヤと笑った。

「能登殿ともあるう方が、このわしに仕事を、な。鉢屋の手は足りておるのではなかったかな」

「厭味を申すな。用がなければわざわざ呼びはせぬ」

「ふむ。そりや道理じゃな」

その率直な言葉が気に入ったらしい。銀兵衛はやや表情をあらためた。

「して、その仕事とは？」

「少し待て。弥之三郎をここへ呼ぶ。その方が話が早い」

報せを受け、鉢屋平なりという曲輪の屋敷から鉢屋弥之三郎が飛んで来た。

次室に入って来た弥之三郎は、敷居をまたぐや開口一番、

「能登守さま、なにゆえこのような胡乱うらんな者をお呼びになられたのか」

と露骨に不満げな顔をした。

「不服か」

「不服、とまでは申しませぬが、面白うはありませぬな」

弥之三郎と銀兵衛は同世代である。同じ鉢屋賀麻党がまに属した過去があり、幼馴染と言ってもいい。銀兵衛の父である先代・銀兵衛が出雲を去って以来、二人はもう三十年近く顔を合わせてないはずだが、弥之三郎は不快そうに銀兵衛に一瞥をくれただけで、声さえ掛けなかった。

「我ら賀麻党の者にとって、先代の銀兵衛は党を抜けた裏切り者でござる。三十年前、お屋形さまの格別のご慈悲により、罪は不問とすることになりましたが、そうでなければ我らの手で誅ころしておりまするわ」

「あはは、面白いことを申されるな」

銀兵衛が嘲笑した。

「お前さまの手の内に、わしや親父殿を討てるほどの手練れがあるものか。もしそれがおるとすれば、わしがこつも易々とこの城に忍び込める道理があるまい」

その言葉に弥之三郎は眼を怒らせた。

馬の合わぬ相手、いけ好かぬ相手というのは実際あるもので、それは餓鬼の時分も壮年となった今でも、そうは変わらぬのであろう。

弥之三郎め、よほど銀兵衛が嫌いに見える。

普段はほとんど感情を表に出さず、肚の読めぬ男であるだけに、秀綱はそのことが可笑しかった。

「まあ、古い話はこの際どうでもよい」

秀綱は話を仕切り直し、雇った甲賀衆が備後の戦陣で高橋久光を討ち損じた顛末を短く語った。

「噂には尾ひれが付くものでござる。化生けしやうなどと大げさに語られてはおつても、実際はたいしたことがなかったというだけでござろう。やはり我が手の者どもを使つべきでござつた」

弥之三郎が言うつと、

「虚仮こけなことを申されるわ」

銀兵衛は失笑した。

「弥之三郎殿よ、わしは京で暮らしておるゆえ、甲賀、伊賀といったあたりの忍び武者のことはよう知つておる。存じよりの者もある。甲賀者の忍びの術技は、お前さまなどはその足元にも及ばぬほどに優れておるぞ。詳しくうは知らぬが、甲賀の衆が陰忍いんにんで事を仕損じ

たということ、その高橋久光、忍びか兵法の手練れに幾重にも守られておるといふことであるうよ。甲賀の者らができぬことを、お前さま手飼いの衆が仕遂げられるわけがあるまい」

「なんだと」

弥之三郎は顔色を変えた。

「まあ、怒るな」

銀兵衛はニタニタと笑っている。

「お前さまやその手下の者どもは、すでにご当家の侍じゃ。侍には侍の得手があり、忍びには忍びの領分があるといふことよ。侍が忍びの気分だけを真似たところでどうにもなるまい」

弥之三郎のこめかみのあたりがヒクヒクと動いた。よほど頭に来ているらしい。

秀綱は苦笑した。

「銀兵衛、なぶるな。この仕事、尼子の名が頭あじわれるわけにはゆかぬゆえ、いずれご当家の者は使えぬのじゃ。それはそれとしても

」

思案顔で腕を組む。

「その甲賀の忍びの優れた技をもつてしても討てぬとあれば、大九郎を仕物に掛けるは、無理か……」

「無理とは申しておらぬ。なに、陰忍では到れずとも、陽忍やうにんならで

は到れる場所もござろうわい」

「昔から口だけは達者よな。銀兵衛、お前は高橋の隠居を陽忍で刺せると申すのか」

弥之三郎の声が自然と挑発的になる。

陰忍とは己の姿を見せずに敵に仕掛けることを指し、逆に陽忍とは己の姿をさらして敵に仕掛けることを言う。闇夜に乗り、後ろから敵を刺すのが陰忍なら、堂々と我が姿を見せ、前から敵を斬るのが陽忍である。

「『術』の何たるかを知らぬお前さまは口出し無用に願おう。能登殿よ、わしにすべて任せるか？ 能登殿が辞を低うして『頼む』と申されるなら、親父殿の事も、一度限りは手を貸してやらぬでもないぞ」

銀兵衛は不敵に笑った。

どこまでも不遜な男よ。

それが頼もしくもあり、腹立たしくもある。

「お前なら出来るか。出来るというなら、手段を問う気はない。どれほど時間が掛かる？」

「すでに一度仕損じたようじゃからな。そのほとぼりが冷め、相手の気が緩むまでは待ってもらわねばならぬ。まず半年から一年というところかな」

「……よかるう」

秀綱は不快さをぐっとこらえ、

「銀兵衛、頼む」

と頭を下げた。

第四章 吹き荒れる腥風 元綱の城

毛利家中で「坂のご隠居さま」と言えば、坂広秀の父である坂広時のことを指す。向原の日下津城下でこの老人について尋ねれば、子供までが好意的な笑顔を浮かべ、その日常を色々教えてくれるであろう。

広時は、城下に市が立つ日など、しょっちゅう町なかに現れるのである。賑やかな市の喧騒と、町歩きが好きなのだ。露店の小商人たちはそのことを知っており、この老人を見かけると、荷をさばきながら、値の駆け引きをしながら、ことさら大声で商売をした。「日下津城の大殿さま」に自分たちの働きざまを直接見てもらえることが嬉しいのだ。

この老人は、いつも粗末な麻の胴服を着、茶人のような頭巾を頭に載せ、青竹を一本持っている。顔は細長く顎が尖り、肌はなめし皮を煮固めたように浅黒く、皺が深い。頭は禿げあがり、蓄えた鬚は半ば白くなっている。すでに六十の坂を幾つか越えているのだが、腰も曲がっておらず、足取りはしつかりしたものである。その左右の後ろを、若党が二人ついて歩くのが常であった。

若党の一人が持つ道具箱には日替わりでちよつとした食べ物が入っていて、それを心得ている子供たちは、この老人を見かけると歓声をあげて集まって来る。広時は顔をくしゃくしゃにして笑いながら、子供たちの頭を撫でてやり、餅や菓子を配るのである。

隠居の身軽さもあって、この老人は三日に一度は城山を降りて来る。城下の寺社や富商の屋敷などには気軽に立ち寄り、同世代の老人たちと茶を喫んだり酒を呑んだり、暮を打ったり和歌をひねったりして日暮れまで遊び、興が乗るとそのまま泊まっていくこともある。話好きで、物腰や言動に飄逸味ひょういつみがあり、たまにとぼけた洒落を言って周囲を笑わせたりもする。その風姿は乱世を生き抜いた武人というより商家の楽隠居といった方が相応しく、そうと知らぬ者は

この老人が「日下津城の大殿さま」であるとはとても思えなかつたであろう。

坂一族が、毛利氏の庶流で代々毛利家の執権を務めた名門であることはすでに触れた。

かつて毛利家では乱立した庶家が本家を圧倒するほどの力を持ち、一族が分裂して内紛を起こしたことがあつたのだが、庶家の中で福原氏と坂氏が毛利本家を援けて尽力し、あくまで本家の支配を拒絶しようとする麻原氏などの庶家を討ち滅ぼし、現在の毛利家の発展と本家による総領支配体制の確立に多大な貢献を成した。その功により、福原氏の当主は代々家臣筆頭の座につき、坂氏の当主は代々執権を務めることが定められたのである。

長命して長く執権職を務めたのが坂氏の三代目である広秋ひろあきという男で、坂広時はその次男であつた。

ある事情で兄が分家して桂氏を立てたため、坂氏本家を継ぐこととなつた広時は、父の隠居後、短い期間だけ執権の座についたのだが、毛利家の先々代・弘元が政略的な理由で若くして隠居すると、権力の交代に伴つて自らも四十代で早々と隠居した。

広時の奇妙さは、その隠居に際して、執権職を息子の広秀には譲らず、末弟の子である志道広良を推挙し、その重責を担わせたことであろう。志道広良の器量と聡明さを見抜いていたということであろうが、それにしても、坂氏本家が世襲すべき執権職を分家の子に譲つたのだから、よほど私心の薄い、清廉な人物であつたらしい。同時に、家族の反対を押し切つてまでそれを断行するあたり、一度こうと決めたら挺てい子でも動かぬような頑固者でもあつた。

思わぬ成り行きによつて重職に就くことになつた志道広良は、その持てる能力の限りを尽くして伯父の信託に応えた。先代・興元が幼少の頃からこれを輔弼ほひつし、軍事にも外交にも家中の調整にも文句のつけようのない手腕を発揮した。興元没後も幼君・幸松丸のためには誠忠を尽くしており、今や毛利家の柱石と呼ぶべき存在になつてゐる。この甥なやみつ子を抜擢した広時の措置は、結果として毛利家を大

きく援けたと言えるであろう。

しかし、広時の息子の坂広秀からすれば、それが面白がるうはずがなかった。

この時代、同じ血族集団に生まれた者の中でも、たとえば兄と弟、正嫡と庶子、本家と分家の間には、主人と家来というほどの厳然とした格差がある。宗家の嫡子、本家の総領といえ、一族の先祖の祭祀を司る存在であり、血族集団の中で絶対に近い権能があったのである。

広秀の祖父が毛利家の執権であった時代、幼き日の広秀にとって従弟である志道広良は「分家の孺子」であつたし、同じく若き日の志道広良にとつて広秀は「ご本家の跡取りさま」であつた。両者の「格」を比べれば広秀が遙かに上であり、その認識は二人にとつてごく自然なものだつた。広秀は当然のように志道広良を見下して、たし、家柄は言うまでもなく、その能力においても自分が劣るなどとは考えたこともなかつた。

しかし、二十年ほど前、志道広良が毛利家の執権となつた時から、両者の政治的地位がにわかに逆転した。志道広良は毛利家の家臣団を上から総覧する位置につき、広秀は十五人いる宿老の一人であるに過ぎない。広秀にとつてそれが愉快なはずはなく、「分家の息子」に対して激しい嫉妬心を抱いたことも当然であつたらう。

坂広秀は、洒脱で軽妙が持ち味の父とはさほど似ていない。奇矯な面の少ない常識家で、与党や子分に対しては面倒見の良い親分肌の男であつた。理屈屋で口うるさく、やや優柔不断で独善的である点を割り引いても、政治家として無能ではない。処理能力と調整力とがあり、政略的な創造力には乏しいが、経験に裏打ちされたそれなりの識見を備えていた。この男がたとえば大工や左官の棟梁の子として生まれていけば、配下の職人たちをよく使い、日々怠けることなく家業に励み、その技巧で評判を取れずとも、仕事の確実さと工期を守る律儀さで世間から信頼される親方になつたであろう。あるいは商家に生まれていけば、堅実な商売で着実に家産を殖やし、

晩年は父のように周囲から好かれる楽隠居になって、安楽に世を終えたかもしれない。

しかし、平安の昔から七百年を閲した大江氏の末裔 毛利氏の庶家のなかでも屈指の名門とされる坂氏の宗家に長男として生まれついてしまったことが、この男にとつての不幸であった。

坂一族（坂氏、桂氏、光永氏、志道氏）は毛利庶家の中でもっとも大きな枝葉を広げた族党で、井上党が毛利家に加わる以前は家中で最大の勢力を誇っており、現在も毛利本家を支える中核勢力と言っている。その宗家を継いだ広秀が、

わしこそが坂一族の総領ぞ。

という誇りを持つことはごく自然な感情であり、その矜持が強烈であるほど、その裏返しとして、自分が毛利家中で冷遇されている現状に不満を感じざるをえなかった。

実際は、自身が思っているほど広秀は軽く扱われているわけでもない。十五老臣での序列は上から三番目であり、他の宿老たちからもそれなりの敬意を払われていたし、坂一族の者たちからは本家の当主として相応の礼遇を受けてもいた。しかし、広秀にしてみれば分家の志道広良の下風に立っているというだけで不快であり、その一点で強い不遇感を抱いてしまうのである。

世に不遇感ほど人間を歪ませるものはないであろう。

坂一族の総領でありながら権力の枢要に座れないという劣等意識と、志道広良に対する敵愾心が、広秀の裡で知らず知らずのうちに肥大化し、いつしかこの男は、毛利家中で志道広良に対抗できるだけの独自の「勢力」を築くことを志向するようになっていた。たとえば毛利弘元が病死した際、遺児である元綱の後見役を自ら買って出たのも、その表われであつたらう。

元綱がどう思っているかはともかく、広秀にとって元綱はもつとも有力な手駒であり、己の与党であった。書類の上でのことだが広秀はゆきの養父であり、元綱の義父ということにさえなっている。その元綱を、いつまでも部屋住みの御曹司として飼い殺しておくの

は、いかにも能がない。

一日、郡山城にのぼった広秀は、たまたま溜まりの部屋にいた多治比元就を捕まえ、

「四朗殿もよいお年でござる。そろそろ分家を立てることを考えられては如何でござろうかな」

と提案した。

多治比で分家を立てている元就のように、元綱にも城と領地を与え、独自の兵力を持たせようというのである。城と兵という後ろ盾があればこそ政治力や発言力は実質を伴うのであり、それを得れば元綱の家中での重みもいや増すであろう。

この手の話はまず執権の志道広良に諮るとい^はかのが自然であったが、お竹が井原氏に嫁いで以来、広秀は志道広良とはほとんど口を利いていない。顔を見るのも厭であり、同じ空気を吸うことさえ不快であった。それで、幸松丸の後見として権力を握る元就に話を持ち込んだのである。

「ああ、そのことは、私もかねて考えていたところなのだ」

と、元就は返した。

元綱はすでに二十三である。もし兄の興元が生きており、状況が許してさえいれば、すでに一家を立てていたはずだと元就は思っている。

「だが、今すぐに、というわけにもいかぬ。お家には適当な欠所^{けっしょ}(空いた領地)もないしな」

「もちろん、今すぐどうこうというふうな話ではござらんよ」

広秀は鷹揚に笑った。

「さりながら、いざ欠所が出た、あるいはご領地が増えたとなったとき、いきなり四朗殿に二百貫、三百貫という大領を与え、それを任せるといふのも、いろいろと不安でござろう。領主となるには学ばねばならぬことが多い。家来を養ってゆかねばならぬし、人をまとめてもゆかねばならぬ。民を安んじ、地を栄えさせるのも領主の務めでござるしな」

領主は経営者の貌かおを持たねばならず、戦場の勇者というだけでは務まらないのである。

要するに広秀の提案というのは、元綱が実際に分家して家を立てる前に、その予行演習をさせてはどうか、ということであった。

「四朗殿に城を築かせ、それを任せてみては如何かと思いましたが、自らの城を持ち、家来を持つ者の気分を疑似体験すれば、色々と学ぶことも多いに違いない。」

「四朗殿の相合の屋敷の裏手に、船山という小山がござろう。天神山の山裾の。あれに砦を築くというのはどうでござろうか」

郡山城は郡山の南尾根に築かれた小城で、郡山の山頂方向から尾根伝いに攻められると弱い。郡山の西尾根に当たるのが天神山で、その山裾にあるのが船山である。そこに砦を築いておけば、敵軍が天神山から郡山の山上に登ることを防ぐことができる。

「ふむ……」

元就は腕を組んで考え込んだ。

広秀がどういう意図でそれを言い出したのかは知らないが、その提案自体はそう悪い話でもない。

「この場で即答はできかねるが、考えておこう。執権殿とも話をしてみる」

「ああ、そうしてください」

広秀は満足げに頷いた。

ところで、室町後期から戦国初期というのは、連歌の全盛時代である。

連歌はもともと京都貴族の文芸遊びであったが、京の文化に憧れる地方の武家の間にもすでに広く浸透しており、公家、僧侶なども巻き込んで、一種の社交界を形成していた。

連歌を大成したのは言うまでもなく宗祇であるが、八十歳まで長命したこの天才も十五年ほど前に鬼籍に入っている。その弟子としては宗長と宗蹟の名が高く、ことに宗長は宗祇亡き後の連歌界を主導し、大内義興、今川氏親、細川高国、上杉房能といった全国の有力大名とも広く交流を持っていた。連歌所の宗匠（家元）となるような高名な連歌師は、風雅を愛する武士たちからは篤い尊敬を受けていたのである。

連歌師は半僧半俗で全国の関所を素通りできる上、世の争い事からは超然としているから、朝廷や公家の使者として全国の大名に手紙を届けたり交渉の橋渡しをするにはうってつけの存在であった。彼らが旅をすれば、道々の大名や小名は大喜びで宿所を設け、酒食をもってこれを歓待し、連歌会を開いたり和歌の指導を仰いだり、あるいは古典文学の講義を頼んだりする。京文化の地方への伝播に、連歌師は大きく寄与していた。

毛利氏は、多くの優れた歌人を輩出した大江氏の歴とした裔すえであり、その家風には濃い文雅の匂いがある。和歌、連歌などは家中でも盛んで、歌会、連歌会などもよく開かれていた。

一日、元綱は、兄の元就から連歌会に招かれた。

観月の席で百韻連歌を興行するから、お前も来いというのである。

なにゆえ俺を呼ぶのだ。

元綱はその申し出に困惑した。

文事で聞こえた江家の末裔に相応しく、元就には並々ならぬ詩才がある。元就は自ら詠んだ和歌や連歌を書き留めているのだが、その作品群は、元就の死の翌年、『春霞集』という書題でまとめられている。当時において屈指の歌人にして古典学者であった三条西実澄すみは、元就の作品の質の高さに驚き、自ら『春霞集』の編纂に関わり、和歌に評語を加えた。その跋文はつがんの中で、

「天下の人は元就の勇士なる誉れをのみ賞して、風雅の道に遊ぶ志の深きことをいまだ知る人はいない」

と嘆き、

「この詠草一巻（『春霞集』）により、文武兼備の美誉びよほつせい芳声は永久に朽ちることはあるまい」

と元就の作品に最大の賛辞を贈っている。また『春霞集』の連歌の部には、当時最高の連歌師であった里村紹巴はつむじが評語と跋文を寄せている。

元就の詩才とはそれほどのもののだが、しかし、そういう兄とは対照的に、元綱はこの手の言葉の遊戯がどうにも体質に合わない。はっきり言えば大嫌いだっただ。

和歌は、歌枕を覚え、典拠となるべき古歌や名歌をふんだんに記憶し、その言葉やフレーズを下敷きにし、あるいはそれを直喩や隠

喩に巧みに用いて己の詩情を表現するというのが基本だが、元綱はそもそも歌枕を知らないし、古歌、名歌の類もまるで覚えていなかった。それをわざわざ暗記したところで日常生活に何の役にも立たず、無駄としか思えないからである。連歌はその点の縛りが多少ゆるいが、前者が作った句の情景や情趣を踏まえて己の句を作らねばならず、その「他人の詩情に寄り添う」というもつとも重大なルールが、元綱は鳥肌が立つほど嫌いであった。たとえば平安貴族が己の恋心を女に伝えるために心情を和歌に託すというなら情緒もあり、理解もできるが、むさい男ばかりが何人も寄り集まって、己の詩情を披歴し合うというのが、照れくさいというか、何やら気持ち悪いのである。

亡兄の興元が連歌好きだったこともあり、これまで歌会や連歌会に呼ばれることも少なくなかったが、元綱はなんやかやと理由をつけて出席せずに済ませたり、出たとしても酒食を共にするくらいで和歌など詠んだためしかなかった。そういう元綱を、元就はよく知っているはずなのである。

元綱はもつと直截的に身体を使う遊戯を好んだ。それは蹴鞠けまりであっても遠乗りであつても良いし、弓の腕比べでも良ければ相撲を取ることも良く、木太刀で殴り合うことでも良い。旺盛すぎる生命力を持って余しているようなこの若者にすれば、身体を使って汗をかく事の方がよほど愉しかった。

しかし。
せつかく誘つてくれたものを、行かぬというのも角が立つ。
とも元綱は思った。

この若者はやや気ままなところはあるものの、名家のお坊ちゃん育ちだけに基本的に行儀が良く、協調性にまったく欠けるというわけでもない。他人に対して意外に気を使う一面も持っていた。

その当日、元綱は、「所用が出来て遅参するから先に始めておいてくれ」という遣いつかを郡山城に出し、わざと一刻半ほど遅刻して城山に登った。

会場は、本丸の居館の大書院である。

開け放たれた杉戸の外では、少し欠けた月が薄い雲をまとって煌々と輝いていた。

元綱がその部屋の柱の傍に静かに座ったとき、百韻連歌はすでに終盤であった。控える小姓に小声で訊くと、すでに八十句を越えているという。

居並ぶ連衆は、兄の元就、執権の志道広良、坂広時・広秀親子、福原広俊・貞俊親子、僧である異母弟の就心、郡山の満願寺の住職吉田の興禅寺の貫主、連歌好きの国司有相、井上光兼などである。酒をもつて来させ、手酌でそれを酌みながら、元綱は眺めるとなくその情景を眺めた。

珍かな面子だな。

と元綱が思つたのは、志道広良と坂親子が同席していたからだ。

元就や元綱がまだ幼かつた頃、坂広時の詩歌は家中でもっとも評価が高く、その実力から歌の点者（判定役）を務めることも多かった。今ではそれが慣例のようになっていたので、広時がこの座に居ることは不思議に当たらない。

元綱が意外だったのは、坂広秀が同席していたことである。

お竹の婚儀があつて以来、坂広秀は志道広良への不快感を隠さず、その接触を露骨に避けていて、評定などで同座することがあつてもほとんど口も利こうとしない。志道広良の方も超然とした態度を崩しておらず、自分から折れてまで強いて関係を修復しようとは思つてないらしい。その二人が座に連なつて連歌を詠んでいる風景には、奇妙な違和感があつた。

ほどなく元就によつて結句が詠まれ、百韻の連歌が終わつた。

無論、一座の人々も遅参した元綱の存在に気付いている。

独り酒を飲む弟の方に顎を向けた元就は、苦笑に似た微笑を浮かべ、

賢しきと物言ふよりは 酒飲みて 酔哭きするし まさりた

るらし

と詠んだ。

賢者ぶって生きるより、酒を飲んで酔い泣きする人生の方がよっぽど素晴らしい、といったただの意味である。が、元綱の気分にはよく適あっている。

「聞いたことのある和歌だ」

「『万葉集』だ。大伴旅人おおとものたびと」

「ああ、『万葉』の歌人の中で随一の酒好きとかいう人だろう」

大伴旅人は、奈良時代初期に生きた歌人であり、軍人であり、政治家である。『万葉集』には七十八首が選ばれており、「酒を讃むるの歌十三首」で名高いが、軍人としては「征隼人持節大將軍」に任じられて九州の隼人（鹿児島地方に居住した一族）の叛乱鎮圧などに活躍し、政治家としては大納言、従二位にまで昇っている。従二位は左大臣・右大臣相当の官位であり、その位は人臣を極めたと言っている。こういう事績について元綱が詳しく知るわけではないが、いわゆる「大化の改新」が行われた直後の時代を生きた歌人、という程度の理解はある。

「さすがに八百年をけみ読いした古えの歌人の言葉には含蓄がんちくがある。たまには兄者も酒を嗜たしなむべし、だ」

「お前は酒に淫いんしすぎだな。たまには嗜まぬ日があってもよさそうなものだ」

「嗜まぬ日はあるさ。自慢ではないが、俺は戦陣では一滴も飲まん

ぞ

元綱が大真面目で返すと、元就は笑った。

「そのあたりがお前の変わっているところだな。普通の者は、戦さが恐ろしいゆえ、出陣前には気を大きくするために酒を飲むものだが、お前は戦陣では酒が必要なくなる。要するにそれは、戦さに酔うておるからだろつ」

「酒に酔い、女に酔い、戦さに酔う。それが漢わんと生まれた者の愉しみだろつさ」

「まあ、そうかもしれぬ」

「そういう兄者は、酒を飲まぬ。女に酔ったという話もついぞ聞かぬ。戦さにでも酔わねば、常に醒めていることになる」

元就はわずかに唇の端を歪めた。

先年の「有田の合戦」において、元就は戦さに酔って我を忘れ、大きな失敗を犯した。あれ以来、戦さにだけは二度と酔わぬと誓ったのだが、その心情を口に出す気にもなれず、軽やかに話を逸らした。

「せっかくの座であったのに、結局このままではお前の句は聞けずじまいだな。そう披露を惜しむこともあるまい。『夏の月』で一句詠まぬか」

「別に惜しんでるわけじゃない。兄者のような詩才がないというだけさ」

元綱はバツが悪そうに苦笑した。
やがて一座の人々のために酒食が運ばれてきた。
座をあらためると、

「ところで四朗」

本題とばかりに元就が話題を変えた。

「お前、城を持ってみぬか」

「城？」

「お前も、いつまでも御曹司だ部屋住みだというわけにもゆくまい。
いずれ家を立てねばならんが、その前に、一度己の城を持ってみる
方が良いかと思つてな」

「ふむ……」

元綱は思案顔で盃を口元に運んだ。

「何も難しゅう考えることはない。相合のお前の屋敷の裏手に小山
があるだろう」

「船山のことか」

「ああ、その船山に砦を築いてもらいたいのだ。規模は、そう
だな、百人ほどで守れる大きさを手ごろだろう。無論、敵が吉田
に攻め入って参った時は、お前がその守将を務めることになる。平
時の在番の士は、本家から二十人ばかり輪番で出そう」

船山砦の戦略的役割を、元綱は即座に領解した。敵軍が天神山から郡山の山上に登れぬようにするつもりなのである。

「ふむ……」

元綱は、正直なところ面倒がつている。築城そのものにもあまり興味はなかったが、兄は好意で提案してくれているのだろうし、それを強いて断るほどの理由もない。

「兄者がやれと言うなら、まあ、やっても良いが……」

「そうか。ともあれやってみよ。城造りや人使いを実地で学ぶ良い機会になろう。お前にとって損にはならん」

元就は気楽な様子で続けた。

「縄張りなどは太郎左衛門（渡辺勝）や左衛門尉（桂広澄）などに相談するがいい。あれらは築城にも練達だ。人手は、普請役の者から選んで百人ほどを回す。黒鍬の組頭たちにも話は通しておこう。船山で足りぬ木材は天神山から切り出してくれていい。資材や兵糧は、この城に備蓄してある分で充分賄えるはずだから、必要な分だけ使ってくれ」

「及ばずながら、わしも手伝いをさせて頂きますぞ」

と続けたのは坂広秀だ。人数と兵糧を出してくれるらしい。

「鍬入れの日は策雲殿に占ってもらった。来月の三日が吉日らしいから、そうする」といい

元就の言葉に、興禅寺の貫主である策雲立龍りつりゅうが微笑しながら目礼した。一般にこの時代の禅僧は占いに堪能で、元就はそれを頼んでおいたのであろう。

用意の良いことだ。

元綱は苦笑せざるをえない。要するに船山砦の築城はすでに既定路線で、それを元綱に伝えることが今夜の眼目であったのだらう。

その翌日、元綱は渡辺勝すくもらと共にさっそく船山に登り、砦の大まかな縄張りを定めた。

船山は麓からの比高が十丈（約三〇メートル）にも足りぬ小山で、周囲もさほどの大きさはない。山頂部を本丸、西に延びる尾根を二の丸とし、その間に空堀を切って独立の曲輪にする。本丸の北側は登攀とっはんが難しい断崖で、これはそのまま利用できる。傾斜がゆるい南側には階段状に帯曲輪おびくるわを置く。本丸の東側は天神山へと続く尾根になっっているから、大きく掘り崩して断崖にすることにした。

その大筋に従って絵図を描き、必要になる資材を算定し、資材や兵糧を相合の屋敷に集積するなどしているうちに、七月が終わった。

翌八月の三日を待って鍬入れの儀式を行い、工事の無事と順調な進捗を山の神に祈念し、いよいよ砦作りが始まった。

まずは山頂付近に茂る雑木を伐採し、その根を掘り起こし、曲輪となる平地を地ならしせねばならない。伐採した雑木は材木に加工し、天神山からも木材を切り出し、それで居館や蔵、兵舎、塀や柵などを建てる。井戸も掘らねばならないし、曲輪の周囲には土塁も積みねばならない。何より本丸の東の尾根を掘り崩す作業が大変な重労働だった。

「四朗さまが城主になられる」

ということとは、当然ながら近侍の若者たちを喜ばせた。猛暑をもともせず、彼らが嬉々として働いたことは言うまでもない。重蔵も、率先して材木を担ぎ、土を掘り、大工の真似をするなどして、

初めて体験する築城に生き生きと汗をかいた。

その作業を続けるうちにやがて夏も過ぎ、秋が日に日に深まっていった。

そんなある日の夕暮れ。

多治比の方から歩いて来た旅商人風の青年が、ふと足を止めて船山の築城の様子を遠く眺めた。

あんな小山に城を築いてやがるのか。

青年は背中に担いだ木箱を背負い直し、さして関心もない風情で再び足を動かし始めた。

鉢屋の蓮次である。

そのまま相合を通り過ぎ、多治比川に沿って吉田の城下に入る。

「葵屋」と牌（看板）のあがった旅籠の前で再び足を止めた。

さて、どうしたもんか。

西の空の残光を眺め、もう一足伸ばすかどうか、蓮次は考えた。

その表情は心が鬱した者のように暗く、眼は蛇のように光っている。客引きの女が、声を掛けることを一瞬躊躇してしまっほどの凶相だった。

「もうしお客さん」

女に腕を取られて蓮次は我に返った。別人のように人懐っこい笑顔を作る。

「どちらへ行かれるかは知りませんがねえ。次に旅籠があるような村へは、今からじゃあどんなに急いだって、着く前に真っ暗闇になっちまいますよう。山の夜道は色々と危ないですからねえ。今日はお泊りになるのが上分別つてものでございますよう」

「ああ、姐ねえさんの言う通りかもしれないなあ」

蓮次は引つ張られるままに暖簾をくぐり、式台に腰を下ろして草鞋を抜いた。

何度か利用したことがある宿である。この手の旅籠は大部屋で他の客と相部屋になるのが基本だが、幸い今日は空いていて、個室も残っていた。

「女はどうなさるね」

挨拶にやって来た宿の主人が気を利かせて訊ねた。

「呼んでもらうかな。この間の おキネさんだったか 手が空いてたらアレに頼めるかい。ついでに酒と、何か食い物があれば有難いんだが」

胴巻きから多めの銭を出して主人に手渡した。

この時代、旅籠では基本的に食事を出さない。鍋釜を借りることはできるが、焚き木となる薪を買って自炊するのが原則で、料理を出してもらうには食材と薪の代金と手間賃を別に払わねばならなかった。現代でも安価で粗末な宿泊所を木賃宿きちんなどと呼ぶが、これは薪代を払っていた中世の名残りである。ついでながら傀儡女くわいめを買えば、給仕から夜の伽とぎまでを務めてくれる。この手のいわゆる宿場女郎は江戸期には「飯盛めしもり」などと呼ばれ、幕府の厳しい取り締まりの下に置かれたが、日本に統一政権が生まれる以前のこの時代、法などはあつてないようなもので、私娼は多かつたらしい。しばらくすると膳を抱えたキネが部屋にやって来た。

「ああ、弥兵衛やへえさんじゃったねえ、薬売りの。呼んでくれてありがとう」

さほど美人ではないが、笑顔が人懐っこい三十女である。

「久しぶりじゃねえ。今度はどちらへ行きんさったの？」

キネは蓮次の膝元に膳を置くと、盃に酒を注ぎながら訊ねた。

「ああ、石見の方を廻ってたんだがね。次は安芸にするか備後に行こうか迷ってね。とりあえず吉田まで出て来たんだが」

「備後といえ、三次みよしの市はえろつ繁盛しとるらしいねえ」

「旅籠はつかいの数なんかもこのあたりでは一等多いだろつなあ。まあでも、廿日市には及ばねえよ。海から遠いからなあ」

「あたしは海なんて見たこともないよう。ああ、そうそう、廿日市といえ、あたしも死ぬまでに一度は厳島の大明神さまにお参りさせてもらいたいと思つとるんじゃないけど、弥兵衛さん、今度連れてつておくれよう」

蓮次が特にこの女を呼んだのは、すでに身体の繋がりがあって気が知れているということもあるが、キネがとにかく話好きで、問わずとも色々な事をよく喋つてくれるからであつた。

謀者にとつて妓おんなは格好の情報源である。その土地のなまりを覚えたり最近の様子を聞き込んだりするために、蓮次は他国に入るとまづ女を買うことにしている。

「お前さん、いける口だつたね。まあ飲みなよ」

蓮次が勧めると、キネは最初こそ盃の縁を舐めるように遠慮して

いたが、もともと好きな性質たちなのだろう、少し酔いが入ると陽気になり、蓮次が注ぐたびに断りもせず次々と干した。

飯を食いつつ、取りとめのない話をする。

先ほど相合で築城の様子を見たと言つと、元綱の城を築いているらしいということキネが教えてくれた。

この女は若い頃に吉田の農家に一度は嫁いだらしいのだが、数年経つても子を生めぬために離縁され、実家に出戻つたのだそうだ。実家はすでに兄夫婦のものになっていて、厄介者の彼女にすれば食いつ持くらいは自分で稼がねば肩身が狭いから、この旅籠で働くようになったのだという。飯炊きや掃除、接客といった仲居の仕事をしているわけだが、気に入つた客が相手なら遊女の真似もするらしい。

蓮次が飯を食い終える頃にはキネはほど良く出来あがつていた。その膝の線は崩れ、裾からほつそりとしたふくらはぎが覗く。薄暗い部屋の中でそこだけが鮮やかに生白く、蓮次の好き心を刺激した。蓮次はキネの腰を抱きよせ、裾の合わせ目に手を割り込ませた。

「あ、手悪さしたらいけん」

その深部に指を遊ばせると、キネは蓮次の肩にしなだれかかつて切なげな吐息をついた。

「酒をくれねえか」

女が捧げる盃から蓮次は酒を飲み、それを口移しにキネにも飲ませてやる。

「そういえば、三月ほど前か、横田を通つたんだが、その河原ほたに腐れ首が八つも並んでたんだ。ありや何だつたんだろうなあ。近くの村の衆が一揆でも起こしたのかねえ」

ふと思い出した、という風情でそう水を向けると、

「あら、知らんじゃった？」

頬を真っ赤にしたキネは潤んだ眼で蓮次を見上げた。

「高橋のご隠居さまを亡きものにするのに、松尾の城に忍び込んだ曲者なんじゃて」

「へえ、そりやまた一大事だ」

指の反応を愉しみながら、適当に相槌を打つ。

「あたしは直接見たわけじゃねえけど、元が何だか判らんくらいグチャグチャに焼けた首があったじゃろ？それが親玉やいうてね。高橋のお侍に槍で突かれて、今わの際に火の玉になって燃えたあいう話じゃて」

「火の玉に？ そんな阿保なことがあるかい」

「本当なんじゃて。あたしは、高橋のお侍から直接聞いたって人から話を聞いたんじゃけえ」

横田と吉田はすぐ隣郷であるだけに、噂もよく伝わっているらしい。

「いったい、誰がそんな大それた事を企んだのかねえ」

「なんでも、石見の方の、出羽家の遺臣いすはがやったって話じゃけど

「

女はやや声を落とした。

「お、大きな声では言えんけどね……」

「うん？」

「多治比の次郎さまが、出羽の遺臣を指噉そそのかしたんじやろつて」

「多治比さまが？ そんなはずはねえだろつ」

「ほじゃけど、多治比さまは郡山城のご幼君のご後見を務めておいでじやろ。同じくご幼君を後見する高橋のご隠居さまを亡きものにして、毛利家の舵を一手に握ろつとなさったのじやなかるうかて、みんなそう噂しよるよう」

「へえ」

「多治比さまは、吉川から来たご内室を通じて出雲のお屋形さまとご縁戚じやろつ？ 裏で出雲のお屋形さまが糸を引いとられるに違いないつて……」

なるほど庶民の見る眼というのもなかなか侮れない。

そもそも出羽の遺臣の仕業というデマを流したのは蓮次自身である。一犬虚おんに吠ゆれば万犬実じつに伝うというが、流した流言に勝手に尾ひれがついて、噂話に奥行きと信憑性が増し、むしろ現実味を帯びているのが面白い。

出雲のお屋形さまが黒幕つてことになってるのは上手くねえが……。

まあどうでも良いか、とも蓮次は思う。

「お床の支度が出来んようになるから、ちょっと待って……」

意地悪な指の動きに堪えられなくなったのか、キネが掠れた声で訴えた。

「そんなもん後でいいさ」

口元で笑った蓮次は、そのまま女を板間の床に押し倒した。

蓮次が自分で床を延べ、腰が立たぬキネをそこに寝かせてやったのは、一刻ばかり後のことである。責められ続けたキネは無駄口を利く余裕もなかったようで、すぐに幸せそうな寝息を立て始めた。

手桶で濡らした手拭いで身体をぬぐった蓮次は、衣服を身につけると、脱ぎ散らかしたキネの小袖や帯を器用に畳み、それを枕元に置いた。女には優しい男なのである。

壁に背を預け、膳の上の徳利を掴み、残っていた酒を飲み干す。

「火の玉になつて燃えた、か……」

キネの言葉で、あの気の良い甲賀者のことを思い出した。

暮目^{ひきめ}たちの仇^{あだ}を早く取つてやらなきゃなあ……。

蓮次は吉田には用はなかった。彼が向かおうとしているのは北

。隣国・備後の三吉氏の属城である加井妻城^{かいつめ}である。

その縄張りを探るよう蓮次に命じたのは、銀兵衛という名の笛師であつた。

第五章 安芸激震 争乱の引き鉄

烏帽子山えぼしの稜線に陽が没しようとしている。

羽田重蔵は、船山山頂の物見櫓に上り、夕闇に暮れつつある南の空を眺めていた。

田植え前の枯れた田畑に西日が差し、そちこちに建つ大小の百姓家も夕日に染まっている。眼下のほんの一町ばかり先に土居に囲まれた元綱の屋敷があり、重蔵が暮らす長屋の屋根も赤く輝いていた。船山はその四方をより高い山々によって囲まれており、北方の眺望はないに等しい。重蔵の目線の先 南方の数町先で東西に長々と横たわっているのが光井山で、その山裾を多治比川が右手から左手に向けて流れ、船山の山裾を洗った相合川がそこに流れ込んでいく。視界は多治比川に沿って東西に広く開けていた。

季節は永正十八年（1521）の春である。相合では梅の時期も終わり、山桜の蕾がそろそろほころび始めている。

船山の砦にはすでに兵舎や櫓、兵糧蔵や厩うまやなどが建ち、本丸の居館の普請もおおむね終わっていた。眼下の帯曲輪おびくわなどでまだ工事は続いているが、田植え時期までにはそれも終わるであろう。

「重蔵殿、飯が炊きあがりしましたぞ！」

井上又二郎の声が櫓の下から飛んできた。

身軽に櫓を降りた重蔵は、若者と共に出来あがったばかりの居館の濡れ縁をあがった。

廊下をわたって裏手の台所に回ると、相合の屋敷の卑女はしためたちが炊きあがった飯を握り、あるいは汁を椀によそってそれを配っていた。土間や建物の裏手では、下土や人夫や大工といった雑多な人間たちが談笑しながらそれぞれ握り飯を頬張っている。近侍の若者を含めて武士は三十人ほど、武士以外の間人は五十人ほどもいるであろう。

板間では、元綱と近侍たちが車座になってすでに食事を始めていた。

元綱は美食にはまるで関心がなく、戦場ではもちろん、平時でも郎党たちとまったく同じものを食べている。主人がそんな調子なので、相合の屋敷では粗食が当たり前となっており、相合の方やゆきが食べる物さえ、卑女や老僕とほとんど変わらない。元綱がする贅沢といえば、酒を飲むことくらいであった。

重蔵と又二郎がその車座の輪に加わり、飯を食いつつ取りとめない雑談をしていると、いつしか話題が女の話になった。若い男ばかりの集団であるから珍しいことでもない。

その流れのなかで、

「重蔵殿は妻を娶らぬのですか」

と又二郎が訊いた。この若者は昨年の暮れに妻に迎えたばかりである。

「そつえば聞いたことがなかったな」

興味を持ったらしく、元綱が言葉を継いだ。

「お前ももう三十半ばだろう。いい加減身を固めても良い年齢だ」

「はあ、まあ……」

「それとも京に妻女を残して来たか」

「いえ、そんな者はありませんが」

重蔵は苦笑した。

「わしは長く足輕稼業のその日暮らしてしたから、妻を娶ることなどこれまで考えたこともありませんでした」

女が欲しいと思った時は、祇園社あたりの花街で遊女を買えばそれで済んだ。

「お前に安芸で骨を埋める気があるのなら、女房の世話もしてやりたいところだが。上北面の末裔すえたるお前に相応しい女となると、毛利の領内で探すことは難しいか・・・」

「上北面の秦家はたはすでに滅んだものと思っています。今さら門地にこだわるようなつもりもないのですが」

武士の婚姻とは家と家との結びつきであり、身ひとつで何の後ろ盾も持たない重蔵に娘を縁づけたいと願うような親は、武士ではまずおらぬであろう。それが解っている重蔵は、無理に妻を得ようとは思っていなかった。

「庶民の娘でも構わぬのであれば、吉田の乙名おとな（町年寄）などに話を通してやるぞ」

その元綱の気遣いを、重蔵はやんわりと謝辞した。相合の屋敷で暮らしている分には飯を食わせてもらえることもあり、身の回りにさほど不自由しないということもある。そもそも重蔵には禄ぞくも扶持ふちもなく、己の家を持てる道理がないのである。身軽な方が気楽だった。

食事が済む頃には空は闇色になっていた。

普請作業は明け方から始まり、陽が暮れる前には終わる。元綱は人夫や大工たちに労いひいの言葉を掛けて解散させ、砦の留守の武士た

ちに後を頼んで、重蔵らと共に城山を下った。

船山砦の守兵として、毛利本家と各族党から引き抜いた百人ほどの下士が配属されていた。彼らと元綱の関係は正確には主従ではないが、彼らは戦場では元綱を大将と仰ぎ、いずれ元綱が分家して自分の領地を持つようになれば、正式に転籍してそのまま元綱の家来になることとなる。さしあたり平時は、彼らが輪番で砦を守衛する。無人の砦に山賊などが棲みつかぬように番をするのである。

船山砦は戦時には郡山城の支城として活用され、元綱がその守将となるのが決まっているが、平時も元綱がそこで暮らすというわけではない。本丸の居館の普請中はもちろん、それが住める状態になった後も、元綱はそれまでと変わらず、陽が暮れると城山を下って自分の屋敷に帰っていた。

城主になったとはいえ、元綱の日常に大きな変化はない。この若者は相変わらず気ままな暮らしを続けており、砦の工事に目鼻が付いてからは気が向いた時だけ船山にのぼり、在番の雑兵たちを鍛えたり、彼らと酒食を共にしたりしている。この若者にとれば、ヒマ潰しの選択肢がひとつ増えたという程度の意識であつたらう。変化らしい変化と言え、元綱の麾下の兵を食わせるための兵糧が毛利本家から支給されるようになり、それを計算したり管理したりする手間が増えたことと、相合の家の維持のために本家から毎月出していた食禄に、わずかばかりの役料が加わったことくらいであつた。

元綱の相合の家にはこれまで家宰かさいと呼べるような存在がなく、面倒事は後見役の坂広秀が何くれとなく世話を焼いていた。元綱がいずれ分家を立てるとなれば、当然のこととして家政を取り仕切る者が必要になるわけだが、元綱はその辺りのことには関心がないのか、あるいは単に気付いていないのか、家政の外向きことは坂広秀などに、内向きことはゆきや母に、それぞれ任せ切っていた。

実際のところ、元綱は権勢欲にも物欲にも実に淡泊で、衣・食・住がそれなりに足りている現在、その暮らしに不平を抱くことはなかったし、愛欲を満たしてくれる妻にも情愛を注ぐべき子にも恵ま

れており、私生活には何の不満もなかった。このまま十年一日の如く時が過ぎてゆくとしても、元綱はやはり不満を抱かなかつたであらう。

そういう元綱であるから、新たに毛利本家から出て一家の主となり、現状の環境が大きく変化してしまうことに対しては、雀躍つばくやくとした気持ちの弾みなどはあるはずがなかった。領主となれば、当然ながら自らの責任において家来を養ってゆかねばならないし、領地の徴税に心を砕いたり民心の掌握に気を配ったりもせねばならぬであらう。そういう細々したことが、元綱は考えるだけでも億劫なのである。

元綱が分家を立てることに対して、もつとも無邪気に喜びを表していたのは、あるいは元綱の近侍の若者たちであつたかもしれない。近侍の若者たちは、毛利家の各族党の本流から外れた部屋住みの身である。自家に帰れば平時は厄介者、戦時は雑兵という立場に甘んじざるを得ないわけだが、元綱が一家を立てるとなれば、彼らはその家の重臣になることが約束されている。それぞれ相應の家禄を与えられるに違いなく、戦場では元綱が大将となる一軍の物頭となり、兵を任されることにもなるであらう。彼らはその日が来るのを心待ちにしているのである。

「次の戦さでは、四朗さまに大手柄を立てて頂くために、我らが働きに働かねば」

というのが、彼らの共通の想いであつた。元綱が大きな手柄を立てれば、それに見合つた大きな領地が与えられるに違いない。

しかし、物事はなかなか思い通りには運ばないもので、あの「有田の合戦」以来、行われた戦さといえ、領地の増える余地がほとんどない小競り合いばかりであつた。安芸国人一揆に属さない毛利の敵といえ、穴戸氏や熊谷氏などがあるが、これらは毛利とほとんど互角の兵力を持っており、一朝一夕に滅ぼせるような相手ではな

いのである。領地の拡大という観点から言えば、むしろ高橋氏がたびたび行っている備後遠征の方が、若者たちにとっては魅力的だったかもしれない。

その高橋氏は、戦費が高くつく割りにさほど戦果のあがらぬ備後遠征より、隣郷の三吉氏との争いに重点を置き始めたらしい。雪融け直後の早春に続き、田植えが終わったばかりの初夏にも、青屋友梅ばいが守る加井妻城かいつめに兵を出したのである。

高橋氏の隠居の久光は、当然のように毛利にも出陣を要請し、毛利軍は宍戸氏の動きを封じるために甲立に出兵した。

此度は、これまでの小競り合いとは違うぞ。

今回の戦さに対して、久光はひとつ勝算を持っていた。思いもかけぬ筋から、加井妻城の縄張りの絵図を手に入れたからである。

それを久光にもたらししたのは、息子の重光しげみつに仕える湯浅次郎左衛門という四十男であった。

「銀兵衛と申す笛師を憶えておいでござりましょうや」

久光に拝謁した次郎左衛門は得意顔で言った。

「あの者、青屋友梅とは風雅の友で、加井妻の城にもたびたび遊びに参っておるそうでございますな」

青屋友梅は、「梅の友」というその風流な号でも解るように風雅を愛する男で、連歌や和歌をよくし、歌舞音曲にも堪能であった。

銀兵衛は、かつて友梅の前で笛を披露し、その見事さを賞されたことがある、それ以来、備後に巡って来たときは必ず加井妻城に立ち寄り、青屋友梅に笛の指南をするようになったのだという。銀兵衛と接触するうちにそのことを聞き知った次郎左衛門は、銀兵衛を

口説き、頭を下げ、加井妻城の絵図を描いてくれるよう頼み込んだ。これは風雅の友を破滅に追い込む所業であり、銀兵衛はかたくなにその依頼を拒んだが、次郎左衛門の懇請の言葉が次第に脅迫の色を帯びるようになり、それが命の安危に関わるところにまで及ぶと、さすがに観念したように承諾したのだった。

しよせんは河原者よ。武士のごとき性根はないわ。

次郎左衛門はほくそ笑んだが、銀兵衛の方も内心で嗤わらっていた。実際には銀兵衛は青屋友梅とは面識がなく、並べたのは嘘八百である。

銀兵衛が二晩を掛けて描き上げたという絵図を見て、次郎左衛門は大いに満足した。山の尾根の様子、曲輪の並び、城門や櫓の位置まで、実に克明に描いてある。次郎左衛門は喜び勇んで自ら阿須那あすなの藤掛城に赴き、大殿の久光に絵図を献上したのである。

加井妻城を何度も攻めている久光は、その絵図が実際の城の縄張りを極めて正確に描いていることをすぐに看破した。

「ようした。これは戦場の功にも勝まさる大手柄じゃぞ」

小躍りするほど喜び、銀兵衛に褒美を与えることはもちろん、次郎左衛門にも過分なほどの加増をしてくれた。

まったく良い男と知り合ったものよ。

あの笛師は、高橋氏にも次郎左衛門にも、大きな利益を二度も運んでくれたことになる。

久光は、春の農繁期が終わるのを待って、横田の松尾城に三千余の大軍を集結させた。満を持して全軍に出陣を命じたのは、六月の上旬である。

高橋軍は横田から中国自動車道に沿うようにして東に進み、加井妻城を北に見上げる江の川の河畔に布陣した。この少し南には青河あおが村という小さな集落があり、出雲往還に沿ってさらに南に進むと穴戸氏の関所がある。

加井妻城の城山を見上げた久光は、重臣たちを前に、

「此度こそ、この城を我が物にしてくれようわ」

と壮語した。

加井妻城は、山裾を流れる江の川が外堀の役目を果たし、河岸からすぐに山が屹立するというその地形的要件のために、非常に攻めにくい城である。江の川は広いところでは半町（五〇メートル）ばかりも川幅があり、水深も深く、これを渡河しているところを山上から攻められると苦戦は免れない。青屋友梅は歴戦の武将であり、その麾下の兵はなかなか精強で、これまで城攻めは捗々しい成果を挙げる事ができずにいたのだが。

今回の久光には秘策がある。

夜陰に乗り、北ノ丸を奇襲する。

次郎左衛門がもたらしてくれた絵図が、それを思いつかせてくれた。

少数の兵を山中に密かに侵入させ、城の正面を大きく迂回し、別の尾根から背後の北ノ丸を急襲するのである。久光は、忍兵を統べる世鬼政時に絵図を示し、その成功の可能性について検討させた。

世鬼政時は入念な男である。絵図など信じず、わずかな手勢と共に実際に山中に忍び入り、三夜を掛けて現地地の地勢を確かめ、敵の警戒線などを下見した。

その結果、

やれる。

という感触を得た。

城の南方に布陣する高橋軍から見て、本丸の背後を守る北ノ丸はもつとも遠い位置にあり、その守備兵はせいぜい数十人である。少数の精鋭をもって夜陰に乗じて侵入し、城門を確保して兵を導き入れれば、敵兵を全滅させることもさほど困難ではないであろう。

これこそ忍び武者の腕の見せ所よ。

新太郎をはじめ、世鬼家の者たちは大いに勇んだ。世鬼一族とその郎党の忍び武者は合わせて三十人ほどである。それに百人ほどの兵が付属することとなった。

この間、青屋勢の眼を引きつけるために、高橋軍は正面からの城攻めを繰り返している。

「よし、今夜やれ」

ある夜の初更、久光は決行を命じた。

「ゆくぞ！」

世鬼政時自らが大将となり、忍兵たちが夜の闇に消えた。

北ノ丸に忍び込んだ新太郎たちは、城門を守る十数人の兵を闇に乗じて暗殺し、門を内側から開き、待機していた兵を城内に導き入れた。曲輪の各所に火を放ち、慌ててろくに防戦もできない北ノ丸の守備兵をあっという間に殲滅し、北ノ丸を占拠したのである。

「さすがは甚介よ。巧くやりおつたな」

本陣の床几に座り、二刻ばかりも頭上の闇を睨んでいた久光は、北ノ丸から炎があがるのを遠望し、会心の笑みを浮かべた。

「この上は一息に攻め潰すぞ！ 懸かれ！」

久光が采配を振ると、高橋軍の本軍が無数の松明の群れとなって江の川を渡河し、武者押し声を轟かせながら城山に取りついた。

青屋勢の兵たちは慌てたであろう。青屋友梅は夜襲を警戒してはいたが、本丸の背後の曲輪が火を発したことで、城兵たちは裏切り者が出たのかと疑心暗鬼に陥り、さらに正面から大軍が攻めて来る

に及んで、ほとんど恐慌パニックを起こしたのである。

戦勢は一方的となった。勢いに乗る新太郎たちは続いて二の丸に突入し、高橋本軍は正面の城門を破り、城内にどつと乱入した。久光は、軍の主力をもって城の正面である南方から突撃させ、さらに別働隊を城山の西尾根から攻めさせた。東方はわざと空けてある。

逃げたい者は、そこからどんどん逃げてくれれば良い。青屋方の武者たちは、ある者は本丸へと退去し、ある者は東の尾根を伝って城を落ちていった。

戦況を眺めるうちに、東の空が徐々に白み始めた。

北ノ丸に続き、三の丸と二の丸が落ち、枝葉の曲輪を無視すれば、残すは本丸のみである。もはや形勢は決したと言ってよく、青屋友梅の首が運ばれて来るのは半日後か、あるいは明日か、いずれ時間の問題であろう。

ただ、加井妻城を救援するために三吉氏の援軍がやって来る可能性があり、できる限り急がねばならぬことに変わりはない。

久光は、

「旗本の者どもも、功名せい」

と一声発し、本陣を守っていた兵をも戦場へ解き放った。

手柄の場を与えられた武者たちは勇躍し、嬉々として駆け出して行った。

「興光殿、お前さまもゆかれよ。この戦さの大將は、あくまでお前さまでござるぞ」

久光は孫に慈眼を向けた。

「は。では、お言葉に従いまして」

崇敬する祖父に一礼した興光は、近習と自らの旗本を率いて出陣した。

高橋軍のほとんどすべての武者が出払った形である。本陣周りに詰めている人間が極端に減った。

その時である。

「狂い馬じゃあ！」

という叫びが鰻幕の外でし、人々が立ち騒ぐ気配と馬のいななきが交錯した。

「誰ぞ止めてくれえ！」

「そちらはご本陣じゃぞ！」

暴れ狂う馬が本陣の周りの矢楯を蹴散らし、鰻幕を破って走り込んで来たのである。

「馬鹿者！ 何をやっておる！」

「早う鎮めんか！」

人々が立ち騒ぎ、ある者たちは馬を取り押さえようと群がり、またある者は馬から離れようと逃げ、たちまち本陣が騒然となった。ある男が馬に取りつき、その背に跨って手綱を捌き、どうにか騒ぎが収まったとき。

本陣の最奥では、彼らの主人の首がすでに身体から離れていた。

「大殿！？」

久光が座っていたはずの床几の背後に三人の敵兵がおり、その一人が久光の髪を掴んで首を高々と掲げ、

「うぬらの大将の首、頂戴したわ！」

と叫ぶや、背後の鰻幕を跳ね上げて脱兎のごとく逃走したのである。あとの二人も何か叫びながらそれに続く。

残されたのは、仰向けに倒れた主人の首のない骸だけであった。

「馬鹿な……！」

側近や重臣たちは呆然自失するしかない。

三人の雑兵たちは、本陣の背後の山林に駆け入った。

本陣に居合わせた武者たちは怒り狂ってこれを追ったが、男たちの脚力は驚異的であった。夜明け前の薄暗い山林で、視界がほとんど利かぬということもあり、追手はたちまちその姿を見失った。

男たちは駆けながら具足の留め紐を切り、腹巻を脱ぎ捨てた。その下から現れたのは濃紺の忍び装束である。別の方角から二人が合流し、五人に増えた一団は、風のように林間を駆け、山の斜面を走り、ある崖に突き出た杉木立の根元で足を止めた。空がずいぶんと明るくなって来ている。

「銀兵衛殿」

首領格の男が声を発すると、忍び装束をまとった銀兵衛が頭上の太い枝から落ちて来た。

「首尾は」

「まず手はず通りに」

男は高橋久光の首を銀兵衛に手渡した。
銀兵衛はしげしげとその顔を確認する。

「確かに高橋久光に間違いないな。ようしてくれた」

「なに、あそこまで支度を調べてもらえば、造作もない仕事でござるよ」

男は別段誇る風もなく、淡々と応えた。

「では、お前たちは消えよ。約束の金は、京の四条河原で我が親父殿から受け取るがよい」

「承知した」

男たちは樹林の影に溶けるように去った。

それを見送った銀兵衛は、足元の崖をみると下った。崖下は再び山林になっており、茂みのなかに獵師道のような小道が通っている。道なりに進んで尾根をひとつ越え、谷をひとつ渡ると、やがて粗末な獵師小屋に行きついた。

銀兵衛は無造作に小屋に近づき、戸を開いた。

戸口から差し込む薄い光が小屋の闇を払う。

土間に敷いた寝藁で寝ていた男が身を起し、眼を細めて戸口を睨んだ。

鉢屋の蓮次である。

「ほれ」

逆光で影になった銀兵衛が、何かを投げた。

蓮次が受け止めたそれは、初老の男の生首である。苦悶や無念さに満ちた　というより、何か困惑したような表情で、眼は大きく見開いたままであった。

「これは……」

「高橋の隠居殿の首よ」

さすがの蓮次も絶句した。蓮次は作戦の詳細を知らされていたわけではなく、ただこの小屋で待つように言われただけだったから、銀兵衛の水際立った手際に仰天せざるを得ない。甲賀衆があれだけ苦勞して得られなかった首である。この男はいとも簡単に刈り取って来たというのか　。

「隠居殿は手練れの忍びに幾重にも守られておつてな。これまでなかなか手出しができなんだ。好機が巡つて参るとすれば戦場であるうと思つて策を弄してみたが　。まあ、思いのほか事が巧く運んだというだけのことよ」

銀兵衛は面白くもなさそうに言った。

「三吉の援軍が馬洗川はせがわが江の川に合流するあたりまでやつて来ておるそうじゃ。その連中にでもくれてやれ。戦さの勝敗がひっくり返るぞ」

銀兵衛は土間に置いてある水瓶を横にどけ、その床に空いた穴から墨染めの僧衣を取りだし、忍び装束を脱いでそれをまとった。

「わしの役目はこれで仕舞いじやによつてな。弥之三郎殿には、元の笛師に戻つたとも言うておいてくれ」

脱いだ装束を穴に入れ、土をかぶせて埋め、再び水瓶を上に移動させる。

「こうして仕事を共にしたのも何かの縁じゃ。京にのぼることがあれば、四条河原を訪ねて参るがよい。京洛の酒と妓おんなを馳走してやるう。わしもあちこちと歩いたが、京の妓は日の本一だぞ」

銀兵衛はニタリと笑い、飄々と小屋から出て行った。

化け物め……。

しばらく途方に暮れたように立ち尽くしていた蓮次だったが、まだ大仕事が残っている。ともかく言われた通りにするしかないと腹をくくった。

蓮次は、青屋兵の遺体から剥いでおいた具足と指し物を身につけ、ボロ布に包んだ久光の首を小脇に抱えて山を下った。黎明の薄暗い山道を北へと走り、援軍にやって来た三吉軍の中に駆け入ったのである。

「高橋の大将の首でございます！ 首実検をお願い申しまする！」

「何者か!？」

たちまち捕えられ、先陣の武将の元へと引き立てられる。

「青屋友梅さま家臣、槍組・佐藤新之助さまが手の者にて、青河村あおがの小作、権平けんぺいと申します。敵の陣屋に忍び入り、大将と思しき武者の首を掻いて参りましたゆえ、どうかご検分を」

實在の物頭の名であり、實在する村の名ではあるが、青屋勢の侍帳でもその場には限り、雑兵の名前なぞいちいち三吉軍の武者に

判るはずがない。

「なにゆえ青屋殿の元へ首を持ってゆかぬ」

などと尋ねる者もあつたが、

「加井妻の城はすでに三の丸、二の丸が落ち、敵の兵が城内に満ちております。もはやそれがしなぞが本丸へは戻れませぬ」

と訴えて切りぬけた。

いずれにしても火急のことで、細かな詮議などできる状況ではない。久光の顔を見知った者が「この首は確かに高橋の隠居に相違ない」と証言すると、それ以後は誰も蓮次を疑わなくなった。

「お味方は苦戦しておりますが、敵も大将を失い、大きに慌てておるはず。時は一刻を争います。なにとぞ疾く疾く後詰めくださいたく」

「心得たわ。権平とやら、大手柄じゃぞ。後の褒美を楽しみにしておれ」

蓮次は三吉の先鋒軍について加井妻城の山麓まで進み、三吉軍が高橋軍に攻め掛かるや、山林に紛れ入って戦場から離れた。具足と指し物を捨て、百姓姿に身を変え、山を登って合戦見物の者たちの群れに混じる。

眼下では、三吉軍が高橋軍を圧倒していた。総大将である久光を失った高橋軍は指揮系統が大混乱を起こしており、腰が抜けた雑兵たちは我先に逃散を始め、ろくに防戦もできない。城内に攻め入った高橋方の武者たちも、事態が伝わると城から転がり出し、四散して逃げ散っている。

その様子を遠望した蓮次は、口元だけで薄く笑った。

これで高橋も終わりだな。

死んでいった暮目たちの無念も少しは晴れるであろう。

「大殿さまが討ち死になされただと!？」

加井妻城の二の丸でその報告を受けた世鬼政時は、仰天した。

「虚仮なことをぬかすな! そんなはずがあるか!」

と家来を怒鳴りつけたのは、味方が狼狽して壊乱するのを防ぐためである。それが事実であると否とに関わらず、大将である政時は、麾下の兵たちを無駄に死なせぬよう最善を尽くす責務がある。

家来を本陣へ走らせ、事態を確かめさせる間に、政時は兵たちをまとめ、青屋勢の反撃を許さぬよう奪った北ノ丸まで後退し、防戦に徹した。

ほどなく駆け戻ってきた家来によると、本陣はすでに收拾のつかない状況になっているという。呆然自失している者はまだ良い方で、雑兵などは四散して逃げ散り始めているらしい。

なんとという事だ……!!

政時は久光の身辺警護を受け持つてはいたが、自身が物頭であり、戦さ忍びとして戦場で働いている以上、久光に四六時中張り付いているわけにはいかず、その働きには限界があつた。今回のように夜討ちの大将として前線に出てしまえば、同時に本陣の警護などできるはずもない。

その隙を、敵に衝かれた。

計画的なものか悪い偶然が重なったものかは判らない。しかし、いずれにしても今は、後悔や悔恨に打ちひしがれている場合ではない。

「新太郎！ 小太郎！」

政時は二人の息子を呼びつけた。

「こうなつては、もはやこの地では敵を支え切れぬ。我らが総崩れになれば、それを追い討つて敵が横田へ雪崩れ込んで来るは必定。味方のこの体たらくでは松尾の城が落ちてしまわぬとも限らぬ。お前たちは毛利の陣へ行き、多治比の元就殿と執権の志道殿を動かし、横田に加勢を出させるのだ」

高橋の加井妻城攻めを側面支援するために、毛利氏は甲立に兵を出し、五龍城のあたりで宍戸氏と対峙している。これがもつとも早く横田に駆けつけることが可能な友軍であろう。国人一揆の盟友である吉川氏や平賀氏は本拠が距離的に遠く離れている上、急使から事情を聞き、陣触れして軍勢を調べ、それから横田まで出張るとなれば、急場にはとても間に合わない。

「父上は？」

「わしは何としても若殿を戦場からお落とし申す」

興光はすでに三の丸に入って攻城に加わっている。城内からの退却を無事に成功させねば、捕り込められてしまいかねない。

「腰が抜けておらぬ者たちと、敵を斬り防いで時を稼ぐわ。早うゆけ！」

二人は城山を駆け下ると、鎧を脱いで身を軽くし、小具足姿で馬に飛び乗った。

混乱の戦場を離脱し、朝靄に煙る山道を疾風のように駆ける。

加井妻城から毛利軍が陣を据えている五龍城へは直線なら二里ほどの距離だが、敵対する宍戸氏の領地を通ることはできないから、大回りになるがいったん西に五里ばかり駆けて横田まで戻り、多治比を経て吉田へ向かい、さらに北上して甲立を目指さねばならない。新太郎たちは馬を責めに責めて横田の松尾城に駆け込み、留守の重臣らに事態を伝え、防戦の準備を頼むや、馬を乗り換えてさらに駆けた。

松尾城から多治比を経て吉田へ。距離にして三里ばかりである。

言うまでもないことだが、高橋久光は毛利家の当主・幸松丸の祖父であり、その母・お夕の父である。幼少の幸松丸は事態を理解できぬであろうが、郡山城の女城主であるお夕には、実父の討ち死にを伝えねばならぬであろう。新太郎は弟を郡山城へ遣わし、自身はそのまま吉田を素通りし、宍戸氏の甲立へ向かった。

毛利軍の陣に辿りついたのは巳みの刻（午前十時）あたりである。本陣に通された新太郎は、居並ぶ毛利家の重臣たちを前に声を張り上げた。

「大殿・久光さま、加井妻城攻めにて討ち死になされました！」

「隠居殿が！？」

元就、元綱をはじめ、毛利家の錚々たる武将たちが一様に驚きの声をあげた。

「お味方はいったんは敵城を乗っ取る勢いでございましたが、手薄となった本陣に敵が忍び込み、大殿の御首みしるしを奪われたよにござります。そこに折悪しく備後より三吉の援軍が現れ、高橋方は苦戦に陥っております。若殿・興光さま、当家ご重臣の方々は、横田へ

兵を退かれる決断をなされ、今まさに退却中と思われませんが、我らが退けば、それにつけ入って三吉が松尾の城へ攻め寄せは必定。毛利家の方々には、早々にこの地を引き払われ、松尾へ加勢をお願い申しまする！」

総大将である元就の決断は速かった。

「事は一刻を争う。ただちに兵を退き、横田へ行かねばならぬ」

と大方針をまず示し、

「先陣の四郎にそのまま殿軍しんがりを任せる。退き陣は、井上河内かわち、福原左近を両先鋒に、私と執権殿が本軍を率いる。なにぶんにも急な事で、いかなる不測の事態が起ころぬとも限らぬ。手の者に私語を禁じ、整然と退くよう申し伝えよ。万一の用心のため、郡山城には執権殿の手の勢を残す。余の者は城下を素通りし、多治比の猿掛の山麓まで速やかに駆け、そこで兵馬を調べよ」

と即決した。

新太郎は、自分より年若いこの大将の風姿を惚れ惚れと見上げた。

これが多治比の元就殿か。

この急場に直面してさえ、元就の言動は颯爽さつそうとし、凜乎りんことした威厳がある。

あの「有田の合戦」が行われるまで、元就は武将としてまったく無名であり、新太郎もこれまで面識はなかったのだが、実際に我が目で間近に見れば、その器量は実感として解る。高橋家が絶体絶命の窮地にあるだけに、それを援けようとする元就の真摯さと頼もしさ、新太郎の胸に沁みた。

本陣を出るために歩き出した元就は、

「穴戸は必ず追い討ちを掛けて来るぞ。くれぐれも用心せよ」

すれ違いざま弟の肩を叩いた。

「任せてくれ。穴戸を毛利の領地には一步も入れぬ」

元綱は昂然と言い切った。

毛利軍の撤退を見て、五百ほどの兵が五龍城の城山を駆けくんだり、追撃を掛けてきた。

元綱隊は三百ほどであったが、元綱は穴戸軍が江の川を渡河したところを進んで痛撃し、敵の勢いを止めておいてさつと退却に移った。

この退却を援けたのが、井原勢の弓である。

「おお、小四朗殿！ かたじけない！」

井原元師もとかずは自慢の頸弓けいきゅうをもって元綱隊を援護し、追いつがる穴戸軍へきんぎを辟易させた。

元綱は絶妙のタイミングで退却と逆撃を繰り返し、敵の追撃の氣勢を削いだ。穴戸元源もとよしもさほど深追いしようとはせず、元綱隊はほとんど無傷のまま、郡山城へと引きあげたのである。

一方、多治比へ急行した毛利軍は、そこで軍列を調べ、横田への道を北上した。

青屋勢を吸収した三吉軍は、潰走する高橋軍を追撃してすでに横田へ到り、まさに松尾城を攻めようとしているところであった。

元就が三吉軍を逆包囲すべく兵を動かすと、退路を断たれることを嫌った三吉軍は慌てて城の包囲を解き、毛利軍をあしらいつつ退却を始めた。高橋軍は深手を負ったとはいえ、それでも毛利軍を加えればその兵力は三吉軍を上回るのである。せっかくの大勝をフィにしてもつまらないから、決戦を避けたのであろう。

三吉軍を追い払うと、元就は深追いを禁じて兵をまとめ、松尾城へ入り、高橋興光と対面した。

「多治比殿、此度の毛利のご助勢、心より感謝致す」

興光は丁重に頭を下げた。

加井妻城をあと一歩で落とせるところまで追いつめながら、三吉氏に悪夢のような逆転負けを食らい、敬愛する祖父さえ喪った興光は、さすがに憔悴の色を隠せない。泣き腫らしたらしい眼の跡が痛々しかった。

「我が家の痛手は深く、今すぐ弔い合戦を行うことは出来ぬが、爺殿の仇あだ 青屋友梅は、いずれ必ず討つ。その折りは毛利の加勢を頼めようか」

元就は力強く頷いた。

「隠居殿は、幸松丸さまにとっても祖父君であられた。その仇を討つに、我らが力を貸すは当然のことでごぞる」

「おお、ありがたい」

興光は未だ十九の少年である。六年前から高橋氏の家督を継いではいしたが、偉大な祖父が実権を握り続けていたこともあり、自ら物を裁断した経験もほとんどない。高橋氏は七万石もの強大な豪族であるだけに、興光がこれから家中を束ねてゆくにはよほど苦労をするであろう。

三吉軍を退散させたことで、高橋家の滅亡はひとまず避けられたが、良い意味でも悪い意味でも「英傑」であった高橋久光の死は、高橋氏にとっての痛恨事というだけでは済まず、近隣に与える影響

はことのほか大きいであろう。

思いもかけぬ事になった。

というのが、元就の偽らざる実感であった。

元就にとつて久光の死は、正直に言えば痛し痒しかゆである。久光には娘を奪われた恨みがあつたし、毛利家の家政へ介入してくる強引さは確かに迷惑してもいたが、これまで毛利は高橋氏という大樹の陰に隠れ、その武力の傘に守られていたことも事実であつた。高橋久光が屹立きりつとして立っていてくれることで、尼子氏の安芸への侵入を防いでいたという側面も否定できぬところであつたから、今後の情勢の変化に対しては不安を感じざるを得ない。吉川経基つねもとに続き、久光までが現世うつしよを去つたことによつて、安芸の先行きはまったく見えなくなつてしまつた。

遠からず大津波が来るぞ。

と思えば、陽気な気分になどなれようはずもない。

ところで、この永正十八年（1521）は、八月二十三日をもつて改元され、大永元年となる。ちなみに甲斐の武田信玄が生まれたのがこの年である。

高橋久光が「討ち死に」したその直後の八月、出雲の尼子経久が、自ら一万余の大軍を率いて石見に侵攻している。

第五章 安芸激震 鬼謀躍る

大永元年（1521）八月。

出雲の尼子経久は、一万余という大軍を動員し、隣国の石見に攻め込んだ。

三千の先鋒軍を率いる大将は、経久の弟の久幸^{ひさゆき}。勇氣と胆力を備えながらも性質は沈毅で思慮深く、これまで数え切れぬほどの戦場に立ちながら、まずい戦さをしたことがないという男である。このとき四十九であり、武将としての実績に老練さを加え、士卒からの信望も篤い。まず名将と言えるであろう。

尼子の先鋒軍は、敵対する城は攻め潰し、恭順する地侍は吸収しながら、枯れ草でも薙ぐような勢いで進み、石見銀山を支配する大内方の小笠原氏の兵を鎧袖一触^{かいろしゆいつく}で蹴散らし、これを降伏させ、この巨大な銀脈を奪い取った。

石見はその国土のほとんどが山地で、東部の安濃郡^{あのう}、邇摩郡^{にま}といったあたりは背の低い山々が折り重なるように並び、豪族とも呼べない小土豪がそれぞれの山に砦を構えて割拠しているという地域である。つまり、尼子の大軍を足止めし、大内の援軍がやって来るまで粘れるような大豪族は存在しなかった。

石見南東部の邑智郡^{おほち}に根を張る高橋氏は焦ったであろう。本拠である阿須那^{あすな}からわずか五、六里の距離にまで尼子軍に迫られたのである。尼子経久がその気になれば、二日後には「四つ目結^{よつめい}」の尼子家の旗が山野を覆い尽くすことになる。

「弱り目に祟り目とは、これか・・・」

高橋興光は、藤掛城で籠城の支度を調えつつ、嘆息せざるを得ない。

祖父の久光はこれまで一貫して大内方を表明し、尼子氏とは敵対

姿勢を取ってきた。その久光が討ち死にし、高橋軍が大敗を喫した直後のこの時期を選んで、尼子の大軍が石見に侵攻して来たのである。高橋氏が標的にされたものと思っただのも無理はなかった。

尼子軍の襲来に高橋家中は大いに動揺したが、逆に勇躍した者もある。

久光の甥の高橋盛光である。

盛光は、尼子氏の重臣・亀井秀綱と密かに誼みを通じており、もし尼子軍が高橋領に攻め入って来れば、その機に乗じて謀反を起こし、興光を追い落とし、尼子の後盾を得て高橋の家督を奪えるものとはくそ笑んでいたのである。尼子の武威を利用したつもりであったろうが、尼子経久という男はそうやすやすと利用できるようなタマではないということを知り、盛光はすぐに思い知らされることになる。

それはともかく。 。
尼子軍の快進撃は、しかし、意外な方向からの思わぬ横槍によって停滞を余儀なくされた。

「国の静謐せいひつのため、尼子は大内と争うのはやめよ」

足利亀王丸かめおうまるという少年が、和睦の斡旋に乗り出してきたのである。亀王丸は、将軍・足利義植よしたねの没落後、管領・細川高国に擁立されている人物で、この時わずか十一歳。この三ヶ月ほど後の十一月二十五日に第十二代将軍として即位し、足利義晴よしはるとなるのだが、この和睦の斡旋は、むしろこの少年の意志であつたはずがない。これを擁立している細川高国が行わせたものであろう。

細川高国は、幕府管領として権力を一手に握っていたが、内にも外にも政敵が多く、京で孤立している感があつた。その高国にすれば、大内義興の武力と財力はやはり魅力的であつたのだろう。後日のためにも義興に貸しを作っておきたかったのかもしれないし、あるいは戦備の調つてなかつた大内義興の方が、時間を稼ぐために細

川高国を動かしたのかもしれない。

いずれにしても、やがて征夷大將軍という最高権力者となることが確約された人物からの和睦の調停である。石見銀山を手に入れたことで最大の目標をすでに達していた経久は、とりあえず一度は幕府の顔を立ててやることにし、この時はいったん兵を収めた。

それが幕府の面子を立てるための方便に過ぎなかった証拠に、経久はそのわずか半月後の九月中旬には再び兵を発し、石見へ再侵攻している。

尼子軍は無人の野を行くように進撃し、一気に江の川筋の江津市まで進み、九月二十六日には今井城を囲み、福屋氏に属する都治^{つじ}氏を滅亡させた。

しかし同じ石見でも、江の川の河口より西は大豪族が覇を競う地域で、小粒の地侍ばかりであったこれまでとは少々勝手が違ってくる。

石見南東部にはまず高橋氏があり、江の川の下流域には福屋氏があり、さらに中部から西部にかけては周布^{すふ}氏、三隅^{みすみ}氏、益田氏、吉見氏といった大豪族が並んでいた。なかでも益田氏は石見最大の豪族であり、清和源氏の名門である吉見氏は大内義興の信任が厚い重臣と言っている。いずれも一筋縄ではいかぬであろう。

経久はこの時も巧妙であった。武威を見せつけた後は、大内軍が出張って来る前に威力外交で手早く事を済ませようとし、まず福屋正兼^{まさかね}を脅しつけて服従させ、さらに高橋氏に対しては、高橋盛光を焚きつけるだけ焚きつけ、高橋家中の内紛の危機を煽りたてておいて、困窮する高橋興光に救いの手を差し伸べたのである。

藤掛城に使者を送った経久は、

「大九朗殿とはかつて京でお会いしたことがあるが、まことに名將と呼ぶべき傑人であった。祖父君を喪われた興光殿の心中、お察し致す。わしと大九朗殿がこれまで敵味方に分かれておったのは、乱世の習いと申すべきもので、別にかの人に恨みがあったわけではな

い。わしと同年輩の大九朗殿が、天寿を待たずに亡くなられたことを、むしろ残念に思っている」

と久光の死を悼み、これまで高橋氏が尼子に敵対してきた過去を一切問わなかった。

それどころか、

「風聞によれば何やら家中が騒がしいようだが、高橋は興光殿を当主としてゆくのが当然である。無用な心配かとも思うが、もし不心得者が謀反を起こし、興光殿がその退治に手を焼くようなことがあれば、いつなりとわしに申されよ。望むだけの兵をお貸しするであらう」

という確約さえ与えた。

使者が降伏と臣従を勧めに来たものとはかり思っていた興光は、その温言に驚き、驚きが醒めると、何やら百万の味方を得たような気分になった。

「経久公とは、これほど巨おほきいお方であったのか……」

この若者は決して暗愚でも臆病でもないが、この時はまさに苦境にあつた。

久光の死によつて突然に家政の実権を握ることになった興光だが、実際には久光時代の重臣たちに囲まれ、高橋氏という大所帯をまとめることにさえ手を焼いていた。興光の家督相続に不満を持つ伯叔父の盛光が謀反を起こすという風聞さえあり、傘下の小領主たちは疑心暗鬼を深め、家中がふたつに割れて内紛になるのではないかとさえ囁かれている。

興光には覇気も勇気もあり、その自尊心に見合うだけの能力も持っていた。盛光については歯牙にも掛けていながつたが、拳兵した

盛光が尼子軍と結ぶようなことにもなれば、尼子の武威に恐れをなした者たちが大挙して盛光側に奔ってしまう可能性がある。そうならば尼子軍に抗戦するどころではなく、興光は破滅せざるを得ないであろう。

そんな折りも折り、当の尼子経久から、これほど思いやりに溢れる言葉がもたらされたのである。苦境に立たされている興光にすれば、地獄に仏という気分になるのも当然で、経久から巨大な恩を受けたように感じた。

経久公には仁と義がある。

尼子に敵対し続けた祖父の感情に引きずられていた興光は、これまで経久に好意を持ったことがなかったのだが、その認識がまったく一変した。

他者への思いやりがない者に武士の棟梁は務まらない。一度は河原者同然の境涯に落ちながら、一代で大勢力を築き上げた尼子経久には、多くの武士たちが心服するだけの器量があるのであろう。

対する大内義興はどうか。

興光の主観では、祖父の久光は大内方として奮戦し続けた。いわば大内義興のために戦い、その戦いのなかで討ち死にしたのである。それほど尽くした高橋氏の危機を遠目に見ながら、大内義興はいつたい何をしているのか。そもそも義興は石見の守護であるのに、石見の国衆が侵略者と戦っていることを知りながら、一人の援兵さえ送って来ぬではないか。

「格別のお心遣い、興光が心から感謝しておつたと、経久公にはくれぐれもよしなお伝えくだされ」

興光は使者に向かって丁重に頭を下げた。

この瞬間、この若者は経久に飼いなされたと言っている。六十年代半ばの経久と二十歳にも満たぬ興光とは人間としての年輪が違すぎ、謀略外交ではそもそも勝負になるはずがなかった。

この経久の措置にもっとも大きな衝撃を受けたのは、高橋盛光を調略した亀井秀綱であつたらう。

お屋形さまの、なんと凄腕であることか……。

盛光に叛乱を指嚇し、内訌を起こさせることは、実際のところ簡単である。秀綱が盛光にそう指示すれば、欲深い割りに知恵の足らぬあの男は嬉々として行動を始めるであらう。

しかし、高橋氏がふたつに割れて相討てば、それは高橋一族の殺し合いというだけでは済まない。これまで心ならずも高橋氏に従属していた小豪族などは、この機をとらえて必ず独立しようとし、あるいは政争に加担するであらう。高橋氏の周囲に根を張る豪族たち、穴戸氏、三吉氏、毛利氏、吉川氏などは、絶好の機会とばかりに高橋領を蚕食し、小豪族たちを調略して傘下に収めてしまふに違いない。高橋氏は決定的に弱体化し、最悪、そのまま磨滅してしまふかもしれない。そうなれば、高橋氏が誇る七万石の軍勢、総勢五千に近い兵力が、周囲の豪族たちに吸収され、彼らを肥らせる結果にしかならないのである。高橋氏があくまで尼子に敵対し続けるというのであれば、敵を減らすという意味でそれも悪い手ではないが、高橋氏の兵力をそのまま尼子方につけることができるなら、それが最善手であることは言うまでもない。

つまり盛光は、興光を心服させるためのピエロに過ぎなかったのだ。

それに気付いたとき、秀綱の背筋に戦慄が走った。

お屋形さまの調略の芸は、とてもわしなどの及ぶところではない。

その智略の冴えと人心操作の巧みさは、恐ろしいばかりである。

「石見はひとまずこれでよい」

経久はにこりとませずに呟いた。

石見中西部は大内色が根強く、これにかかずにあつても時間

を浪費するばかりで、益は少ない。石見東部を切り取り、石見銀山さえ押さえおさえれば、戦果としては充分であった。

経久は、高橋興光には何も求めず、その領地には一歩も足を踏み入れないまま、奇麗に兵を引きあげた。

高橋氏は尼子に人質を出したわけでもなく、表面的には依然として大内方のままである。しかし、次に尼子軍が石見や安芸へ侵攻した時には、興光は大内義興に義理立てすることなく、喜んで経久を馳迎ちげいするであろう。もしその思惑が外れ、興光があくまで尼子に敵対し続けるようなら、その時こそ盛光に内訌を起こさせれば良い。高橋氏を滅ぼすのはその時でも遅くはないのである。

結果を先に言えば、興光はこれ以後、経久を師父のように崇敬するようになり、利害損得を超えた尼子鼻眞になった。この翌年には尼子軍を領国内に導き入れ、公然と大内氏に敵対することになる。興光の経久への傾倒は終世変わらず、後年、大内・毛利の連合軍によって攻められた時も徹底して抗戦し、再び大内方に寝返るような醜態を見せず、死ぬまで節を曲げなかったのである。

「秋の取り入れが済んだら、また兵を動かすぞ」

本拠の月山富田城に帰還した経久は、初冬に再び軍を発し、南方の備後に侵攻した。

経久の次の目標は、安芸の制覇である。

言うまでもないことだが、出雲という国は地理的に安芸の北東にある。安芸北部の豪族である吉川氏はもともと尼子氏と強い同盟関係にあり、同じく安芸北部で尼子氏に敵対していた高橋久光はすでにこの世にない。その久光の死を契機として尼子経久が軍事行動を起こすとすれば、尼子軍は当然北から侵攻して来ることになる。安芸の豪族たちはごく素朴にそう考えていたし、大内氏の側もそれ

と同様の観測をしていたに違いない。

大内氏の安芸における本拠は、安芸南東部の西条にある鏡山城である。

鏡山城には二千ほどの大内駐屯軍があり、鏡山城を囲むように大内方である国人一揆の豪族たちがいる。小早川氏、平賀氏、阿曾沼氏、天野氏、野間氏がそれで、これらの軍勢をすべて合わせれば、野戦用の決戦兵力だけで六千ほどにもなるであろう。吉川氏はその向背が解らぬものの、毛利氏と高橋氏は大内方であり、北から尼子軍がやって来れば、これを防ぎ止めるための防御拠点は多い。高橋氏の藤掛城なり毛利氏の郡山城なりで尼子軍を足止めし、安芸にある大内方の軍勢でこれを援ければ、一月や二月は時間を稼げる。その間に、周防から必ず援軍がやって来るであろう。大内義興が全力で出撃すれば、その兵力は二万を超えるはずで、尼子軍を撃退することも充分に可能である。まして山陰地方は豪雪地帯であり、冬が深まれば補給などに悩まされるであろうから、尼子軍がどれほど精強でも長期滞陣は難しいはずだ。

しかし経久は、そのような観測をあざ笑うかのように備後に入れた軍勢を素早く南下させ、一気に瀬戸内海沿岸まで軍を進め、いわば南から安芸に攻め入ったのである。

まさに電光石火の早業だった。

備後の国衆はそのほとんどが尼子方であり、彼らの軍勢を吸収した尼子軍は総勢二万に近い。経久はその大軍をもつていきなり鏡山城を囲み、安芸南東部の国人一揆の豪族たちを恫喝し、同時に安芸中南部を押さえる武田氏に挙兵を促した。

安芸守護の武田氏は、武田元繁の敗死後、嫡子の光和が家督を継いでいた。大内義興が京から帰国する際、大内軍が安芸に入ると、権謀としていったん大内氏と和睦していたのだが、むろん心服したつもりはなく、武田氏は再反抗の機会を待っていたのである。

武田光和は尼子軍の襲来を喜び、これと機を合わせて決起した。

広島湾岸を押さえる武田氏が兵を挙げたとなれば、大内軍は鏡山

城への陸路を失うことになる。大内方である国人一揆の豪族たちによれば、大内軍の素早い援軍が期待できない以上、自家保存のためには尼子に降らざるを得ない。そして同じ降るなら、ぐずぐすと逡巡した末にイヤイヤ降るより、自ら進んで尼子軍を馳迎する方が遙かに印象が良くなるであろう。

この時期、安芸の南東部で最大の勢力を持っていたのは小早川氏である。

小早川氏は内情のややこしい族で、備後の沼田ぬた小早川と安芸の竹原小早川の二家に割れており、備後の方が本家、安芸の竹原小早川はその分家であった。

本家の沼田小早川では、遺伝的なものか不思議と虚弱な当主が続き、夭折する者が多かった。この時代の当主である興平おきへいは、父の早世によってわずか四歳で家督を継ぎ、現在は十七歳であるが、この人物は二十三歳の若さで病死してしまうことでも解る通り、やはり腺病質な体質であった。幼い頃はもちろん、成人となってからも軍務には耐えられない。その興平を、分家である竹原小早川の当主・弘平ひろへいが後見するという体制が採られていた。

小早川弘平は剛直にして私心の少ない傑物で、大内義興からも愛されていたらしい。「応仁の乱」以降、本家の沼田小早川は大内氏と敵対する細川氏との繋がりが濃く、大内氏の与党とはいえなかったこともあり、先代が早世した際、大内義興は沼田小早川の家督相続に介入し、小早川本家を分家の弘平に継がせ、大内氏の与党として両小早川家を一本化しようとしたことがあったのだが、小早川弘平は本家の血筋と誇りに遠慮し、自ら幼い興平の後見役を務めるということで大内義興を納得させ、本家の消滅を回避した。以来、険悪だった本家と分家の融和を図るよう努めつつ、現在に至っている。

つまり解りやすく概括すれば、備後の小早川本家は伝統的に反大内であり、その本家の当主を後見する分家の小早川弘平は親大内だったわけである。

そして、尼子経久の慧眼が、まさにここにあった。

経久は、安芸に侵入する以前に、備後の小早川本家を軍事的に押さえてしまったのである。

もともと大内嫌いの沼田小早川にすれば、尼子軍の圧倒的軍事力にさらされてしまえば、これに敵対するという選択はありえない。むしろ進んで恭順するはずだ。そして、小早川本家さえ押さえ込まれば、本家を尊重する小早川弘平もこれに同調せざるを得ないであらう。

経久の読みは当たり、小早川弘平は人質を携えて経久の元へやって来た。

「両小早川家が尼子についたと知れば、このあたりの豪族たちは雪崩をうつように大内から離れ、わしに頭を下げに来るであらうよ」

どれだけ巨大な岩でも、どれほど硬い石でも、そこに鑿たがねを入れれば容易に砕けるといふポイントが必ずある。経久の狙い通り、国人一揆の盟友である平賀氏、阿曾沼氏、天野氏、野間氏は、小早川氏の寝返りを知って慌ててこれに同調した。尼子軍はほとんど一戦もしないまま、安芸における大内・尼子の勢力地図がガラリと変わったのである。

周防すおうに近い安芸南西部を除き、安芸の南半分はまったく尼子一色となった。安芸北部の吉川氏はもともと尼子と強い同盟関係にあり、高橋氏の当主・興光はすでに飼いならしている。現状、有力豪族で旗色が不透明なのはもはや毛利氏のみだが、国人一揆の盟友たちが揃って尼子に靡いた以上、毛利もこれに同調せざるを得ないであらう。

お屋形さまは、わずか数日で安芸を取ってしまった。

亀井秀綱は、呆れるような気分でそのことを思った。神算鬼謀とは、まさしくこの主君あみこのことであらう。

鏡山城は陸の孤島のように孤立した。

西条への通路を塞がれてしまった大内氏にすれば、武田軍を撃破して陸路を押し通り、しかも補給線を確保し続けるほどの大軍を集めるにはどうしても時が掛かり、急場の援軍はとても間に合わない。鏡山城を救援するには軍船を使って兵を送り込むくらいしか手の打ちようがないわけだが、安芸南東部の豪族たちが軒並み尼子側に寝返ってしまえば、それも事実上不可能であった。大内氏は瀬戸内の海賊衆を従属させており、制海権を握ってはいしたが、地元の豪族たちの助力が得られなければ上陸作戦を敢行することは難しい。軍兵の上陸地点は容易に尼子軍に察知されるであろうし、そもそも軍船で輸送できる兵力には限りがある。無理に上陸したところで補給線も通っておらず、退路も海にしかない。逐次投入する兵を尼子の大軍に各個撃破されるのがオチであろう。

結局、大内義興は海からの援軍派遣を諦め、陸路を選択した。まず間に合わぬであろうことは解っていたが、分国への尼子軍の侵攻に対し、援軍も送らず黙視したとあつては、義興の武門の面目が立たないのである。

重臣筆頭たる道麒麟入道・陶興房を総大将に、二万余の大内軍が遅ればせながら安芸へやって来た。

しかし、大内軍が廿日市のあたりまで進み、武田氏傘下の豪族たちと対陣しているうちに、鏡山城は孤立無援のまま陥落してしまう。鏡山城の救援という当初の戦略目標が失われた以上、大内軍は撤退するしかないであろう。

大内軍がすこすこと安芸を去った瞬間、安芸の支配者は、大内義興から尼子経久に代わったと言っている。

「鏡山城が落ちたと……」

使者の言葉を聞いた多治比元就は、ほとんど呆然と呟いた。

国人一揆の盟友である小早川氏、平賀氏、阿曾沼氏、天野氏、野

間氏が、揃って尼子方に寝返ったというだけでも驚きなのに、尼子軍が大内方の最大の拠点である鏡山城を落としたというのである。この数日の政治状況の激変に、元就は目を回しそうであった。

「国人一揆の盟約を結びたる者は、たとえ上意（將軍の意）であれ、諸大名よりの仰せであれ、一人の才覚で進退を決すべからず。必ず一揆の衆中で相談し、一揆として進退をひとつにすべきことを、神前で約したはずでござるな」

衝撃が醒めぬのか志道広良の語気にも力がない。

「左様。我らも心苦しゅうはござったが、火急のことゆえ事後の承諾にならざるを得ませなんだ」

使者は平賀氏の重臣である。さすがに苦しげな表情であった。郡山城の大広間には毛利家の重臣たちが居並び、上座の元就と志道広良に正対する形で使者が座っている。場の空気は重苦しく、咳払いをする者さえいない。

「この上は、毛利も我らと道を共にし、出雲のお屋形に従われるがよろしかろうと。これは我が主人・弘保一人の言葉ではなく、平賀、小早川、天野、阿曾沼、野間の総意とお考えください」

「・・・・・・・・」

元就はとつさに返事もできず、腕を組んで押し黙った。

平賀弘保の生没年は不明だが、今から二十年ほど前に家督を継ぎ、この三十年後にも史書に名が現れることを考えると、このとき三代後半と推定するのが自然であろう。毛利と平賀氏は盟友として長く付き合いがあることもあり、大内義興の帰国騒ぎの時や高橋氏の

備後遠征などの際に顔を合わせていることもあって、元就は弘保の人となりはよく知っていた。思慮深く落ち着いた男で、智勇共に優れているが、その才気を表に顕あひわさず、常にのんびりとした温顔を浮かべているところに、弘保の人としての風韻がある。

「安芸は芸州人が治めてゆくのが良い」

というのが弘保の自論で、大内・尼子がどうのというよりは、安芸国人一揆の結束こそが大事だと、かつて元就に述べたことがある。それは元就の心情にも通じていたから、大いに共感したものだ。弘保は元就に好意を持ってくれており、毛利のためを想って寝返りを勧めてくれていたのであろう。

我らはまさに四面楚歌か……。

この時期、まだ元就は高橋興光の変心を知りはしなかったが、反大内の武田氏が挙兵した事實は把握していた。吉川氏が尼子氏と強い同盟関係にあることを考え合わせると、毛利・高橋の四方はまさに尼子一色に塗り替えられた格好なのである。

このような事になろうとはな……。

大内義興への忠誠を表すために、元就が愛児を高橋氏へ差し出したのは、ほんの一年前である。一年後に尼子の勢威がここまで大きくなると解っていれば、元就はあのととき大内氏からの離反を決断していたかもしれない。

しかし、あの時点で現在の政治状況を予見することはまったく不可能だった。

高橋久光という男の死が、歴史の歯車を大きく動かしたと思うようがない。

「尼子が動いたとなれば、次は必ず大内が挽回を期して安芸に攻め入って参ろう。平賀は、いや、他の家の方々も共に、大内のお屋形へは何と申し開きをなさるおつもりか」

大内鼯鼠の井上元兼が厳しい口調で質した。

「その時はその時のことと申すよりござらぬ。尼子は二万を超える大軍、これに歯向かえば、我らが一朝に滅ぼされることは火を見るよりも明らかでござった。先のことはともかく、まずまず此度は、出雲のお屋形へ名簿みよづかを差し出すほか、道がござらなんだ」

げんぎょう 現形 自家が生き伸びるための緊急避難的な寝返りであり、この時代の小勢力にとっては当たり前前の選択と言っている。

「いずれにしてもこの場で即答できるような問題ではないな」

元就がため息まじりに言うつと、

「左様。高橋、吉川の意向も確かめてみねばなりません」

志道広良がそれに応えた。

使者は頷き、高橋氏と吉川氏にも同様の報告をすべく郡山城を去った。

その後、広間は激論の場となった。

大内義興への忠を貫くべきか、一刻も早く尼子経久に通じるべきか。

井上元兼、坂広秀などは、強硬に大内方に留まることを主張した。

「尼子軍が安芸で越冬するとは思えず、主力は遠からず出雲へ帰るでござろう。安芸の奪還を期し、来年になれば大内軍が必ずやって来るはず。ここで尼子に寝返っては、その時に大内のお屋形に会わせる顔がござらぬぞ」

というのがその論旨である。尼子軍がいる西条は吉田からはまだ遠く、いきなり尼子軍が吉田に雪崩れ込んで来るとも思えない。それだけ精神的に余裕があったと言っべきであろう。

吉川氏と進退を共にすべし、という意見も少なくない。

「伊豆殿（吉川国経）は経久公の義兄でござる。娘婿である多治比殿が頼れば、悪うは扱われますまい。そもそも国人一揆は衆中が進退を一致させてこそのもので、他の多くの家が尼子に与くみしてしまつた以上、我らだけが大内方に留まるというのは、一揆の趣旨にも反する」

吉川国経に尼子への橋渡しをしてもらい、穏便に事を済まそうと
いうのである。

が、主流派は、大内・尼子のどちらにつくというより、高橋氏とよく相談し、共同歩調をとるべきだとする意見であつた。

郡山城の女城主と言うべきお夕は高橋久光の娘であり、主君である幸松丸は久光の孫である。久光が死んだとはいえ、毛利と高橋の紐帯は強く、両者が力を合わせればそれなりの軍事力となる。尼子に頭を下げるにせよ、大内方を貫くにせよ、高橋氏の意向に合わせれば毛利だけが特別に目立つということにもならぬであろう。武門の進退としては主体性に欠け、ずる賢く卑怯な印象でもあるが、政略的には悪い手ではない。

場の議論がやや落ち着きを見せ始めた頃、元就は弟に目をやった。元綱はどうしたわけか終始無言である。

「四朗、何か思うところはないか」

そう訊ねると、

「ないな」

弟はやや憮然とした表情で言った。

元綱は、個人的には大内義興からも尼子経久からも恩を受けた憶えはない。毛利家が長く大内傘下にあつたとはいえ、顔も見たことがない大内義興に対して主君あまじという実感を持ちようがなかった。尼子経久に対しては、その武勇と智略、伝説的とも言える実績に敬意を抱いており、経久の人となりや言動について出雲出身の妻から色々聞いていたこともあつて、大内義興よりはむしろ親しみがある。逆に言えば、好悪についてはその程度の差があるに過ぎなかった。毛利がどちらにつくにせよ、それを決めるのは自分ではない、と達観してもいた。

「ただ、大内のお屋形に従うならそれを貫くのが良く、もし尼子のお屋形に従うというなら、今後はそれを貫くのが良い。右に左にと寝返りを繰り返せば、必ず世人から侮りを受け、後世の嘲りあざわらひを買うことになる。そんなみつももないザマになるのだけは御免だ」

「なるほど……」

いかにも元綱らしい、と思い、元就は苦笑した。

この一本気な弟は、政治が持つ曖昧さを嫌い、武士として進退の明快さこそを愛している。大内・尼子のどちらにつくにせよ、旗幟きしは一刻も早く鮮明にするのが良く、ひとたび旗色を決めたら、たとえ滅亡の危機に瀕したとしても節を曲げず、滅びるまで初志を貫くのが良い。そこにこそ、意地と忠義に殉ずる武士の美しさがある。大内軍がやって来ればその沓くつを舐め、尼子軍が雪崩れ込んでくればそちらに尻尾を振り、寝返り裏切りして生き延びたとしても、誰もそれを褒めてはくれぬであろう。

武人の生き様としては、それはそれで正しい。

と元就も思う。

元就は 精神的にはよほど老成しているとはいえ まだまだ二十五の若者であり、その若さ相応の血の熱さと、美を愛する詩人としての体質を濃厚に持っている。武門の名家に生まれた男として、武士の美に対する抒情的な憧れは非常に強いのだが、しかし、同時に元就は毛利家の舵を握る立場にあり、毛利に属する数千人の人々の生命と生活を守るといふ重すぎる責任を現実に背負わされてもいた。感情に流され、あるいは好悪に囚われ、毛利家を滅びに導くような選択をするわけには断じていけないのである。

「皆の意見はよう解ったが、いずれにしても、当家の進退を決めるのは、高橋と吉川の意向を探ってからのことだ。高橋と吉川が尼子に属すと言え、我らだけが内方に留まれるものではない。その逆もわかりだ。幸松丸さまの名代として、舅殿（吉川国経）と興光殿に、私が直接話をしてみよう」

元就が総括すると、志道広良が大きく頷いた。

「急がねばなりませんぞ。いつ尼子から臣従を求める使者がやって来ぬとも限りませぬでな」

「わかっている」

元就は、その日のうちに吉川国経、高橋興光に手紙を送り、翌々日にはそれぞれと面談を行った。場所は、三者の間あたりにある、壬生みぶの八幡神社である。

予想していたことではあったが、吉川氏はすでに尼子経久と繋ぎを取っていた。たとえ大内義興から軍を出すことを求められても、これに応じず、尼子軍とは戦わないという默契が出来ていたらしい。

「経久殿は、少々怖い仁だが、戦えば大内に負けることはあるまい。

安芸の国衆は、経久殿の下でまとまってゆくのが良い」

というのが吉川国経の意見である。

息子の元経は、大内義興から愛顧された男だが、こうなっては尼子に従わざるを得ないと肚をくくつたらしかつた。

元就が意外だったのは、高橋興光が尼子に従うべきであることを積極的に主張したことである。

「義兄たる伊豆殿（吉川国経）が申されるなら、経久公は怖き仁であられるのやもしれぬが」

と前置きした上で、

「大内のお屋形は確かに大いなる力をお持ちだが、その腰は常に重たい。素早い援軍が期待できぬ以上、これを^{たの}恃みとして尼子と戦うことはできない。対して経久公は、ひとたび軍を動かせば、その^は疾きこと風のごとだ。此度の鏡山城攻めの顛末を聞くに、その軍略の凄まじさは申すまでもない。これに伍するほどの大將は、この中国には見当たらず。いずれを^{たの}恃みにすべきかは、もはや論ずるまでもないと思う」

と興光は述べた。

祖父の久光が聞けば激怒したであろう、と元就は思ったが、興光は尼子経久に傾倒し始めたらしい。

ともあれ、吉川、高橋が共に尼子寄りの姿勢であるなら、毛利とすればそれに倣うほかない。

「すでにお聞き及びのこととは存ずるが、小早川、平賀、阿曾沼、天野、野間、揃って経久公に人質を遣わしたよにござる。国人一揆の衆中は進退を^い一にすべきであり、我らも尼子に従うというの

が穩当であろうかと存ずる」

と元就が言うと、吉川親子も、高橋興光も、これに異を唱えなかった。

三豪族の代表として、経久の義兄である吉川国経が鏡山城へ赴くことになった。

尼子経久は、三豪族からの申し出を鷹揚に受諾し、この時は安芸北部に軍事的圧力を掛けようとはしなかった。追い込めば、鼠でも猫を噛むことがある。人質を要求したり、武門の体面を傷つけるようなことをすれば、せつかく味方になろうとしてくれている豪族たちへ手を曲げるかもしれない。尼子に公然と敵対する者が出れば、経久とすればそれを軍事的に討たざるを得ないわけだが、たとえば高橋と毛利が手を組んで徹底抗戦するような事態になれば、これを滅ぼすにはよほど時間が掛かるし、再び大内軍を呼び寄せる結果にもなりかねない。帰属は曖昧なまま、なし崩しに尼子与党ということにしておいて、後日、機を見てその帰属を確実なものにする方が遙かに安全なのである。

外交家としても政治家としても、経久はいかにも老獪であった。ともあれ、こうして毛利氏は尼子氏の傘下に入った。

この帰属は、「国人一揆の衆と進退を共にする」という意味での消極的な帰属であり、毛利が尼子氏に臣従したかと言えば、そこに曖昧さがある。毛利はこの時点では尼子氏に人質を出しているわけではなく、見方によっては大内方であったとも言えるのである。

曖昧なままの両属というところにこの時代の小勢力の処世の知恵があるが、逆にこの煮え切らぬ態度が、大勢力の不信と怒りを買うもとにもなる、ということを、元就は遠からず思い知らされる。

第五章 安芸激震 王者の反撃

大粒の牡丹雪がひらひらと無数に舞い落ちている。

数日続いたこの大雪のせいで、山深い吉田は一面の銀世界となっていた。

腰まで埋まるほどの雪で地が覆われてしまえば、もはや畑仕事も戦さもできない。人々は雪下ろしを終えると、家に閉じこもって無聊をかこつしかないわけで、この季節こそが、芸を売り歩く者たちにとつては格好の稼ぎ時であった。

岩阿弥と名乗る薄汚い聖が、琵琶を背負った盲僧の杖を引いて相合の元綱の屋敷にやって来たのは、大永元年（1521）の暮れ。ある雪の日の夕刻であった。

「お耳汚しではございますが、ご迷惑でなければ何か演らせて頂けぬものかと思ひまして、推参致した次第でございます」

推参とは呼ばれもせぬのに現れることで、門付芸人や行商人などの常套句である。

盲僧は名を勝一という。安芸では多少は名の通った琵琶と『平曲』の達者で、吉田の城下に暮らす武士や庶民には愛顧する者が少なくない。

勝一は、河原者の集落で知り合つた岩阿弥に道案内を頼んで、この冬は吉田や甲立の得意先を巡り歩いているのだという。

「わたくしどものように世間の見えぬ者は、この季節は難儀なものでございましてなあ。足で憶えております道も、雪でさっぱり解らぬようになつてしまいます。こうして誰ぞに杖を引いてもらわねば、危のうて歩けませぬ」

案内役の岩阿弥にすれば一文の得にもならないのだが、酒宴のおぼれで酒食にありつけることが多いと知るや、それに味を占め、最近はこの法師をむしろ進んで引つ張り回していた。老僕の市兵衛からそのことを聞いた元綱は、

「おお、格好の肴がやってきた」

と大いに喜んだ。数日雪に降りこめられ、退屈していたところだったのである。さっそく近侍などを集め、酒宴を張ることにした。

「『曾我物語』の次は、『平家』ですか……」

重蔵は苦笑した。つい先日、語り芸の警女しせいを屋敷に呼び入れて、曾我兄弟の敵討ちかたきの物語を聞きながら終夜にわたって痛飲したばかりなのである。この困った主人あるじは、何かと名目を作っては酒宴を開こうとする。

ちなみに警女というのは盲目の女芸人のことで、数人で旅をしながら大鼓おおかを打って門付けし、諸国の噂話や滑稽譚を語り、『おぐり』、『さんせう太夫』、『しんとく丸』といった御伽草子や説教を物語り、警女歌と呼ばれる歌謡を披露し、あるいは身体を売るなどして飯錢を稼ぐ。失明してしまった者の自立と暮らしを救済するため、琵琶法師や按摩あんまなどの座は鎌倉時代から結成されているのだが、光を失った少女たちは、土地土地の警女宿と呼ばれる座で女親方から芸を学び、放浪しながらそれを売り歩いて暮らしていたのである。江戸時代になって三味線が世に普及してからは、それを弾き歩くようになったという。

それはともかく。

「こんな調子で飲んでおつては、買い置いてある酒が春まで保ちませぬぞ」

酒が嫌いではない重蔵だが、さほど強いわけではなく、主人の酒があまりに過ぎるとつい小言が出る。

「なに、飲み尽くせば、吉田の乙名おひな（町年寄）にでも強請わたればよいさ。俺がどれほど飲んだところで、酒手さかてで連中の身代が傾くようなことはあるまい」

「左様左様。わしもこの法師殿も、宗旨こそ違えど同じ仏弟子でござる。仏に布施をし、陰徳をひとつ積まれたと思えば、安い買い物であるつよ」

どうやら酒にありつけそうなので、岩阿弥は上機嫌である。

ゆきが侍女たちを宰領し、酒食を運んで来た。ゆきは元綱の隣に座り、女たちはそれぞれ男たちの間に座る。酌をしつつ語りの芸を鑑賞するつもりである。

ゆきの容姿を見た岩阿弥は、その美貌にしばし絶句し、みるみる笑み崩れた。

「その女性メカゴは、相合さまの「内室うちむろでござりまするかな」

「ああ、そうだが？」

「いやいや、思わぬ眼福でござった。麗しき女性をこうして眺めることができるのは、目明めあききの我らならではの法楽ほらでございますなあ。勝一法師が気の毒でならん」

勝一は微笑して首を振った。

「煩惱は悟りの妨げ。御仏は、わたくしのような者が心おきなく彼

岸に渡れるよう、女人の美しさを知り得ぬように致してくださいたのでございましょう。岩阿弥殿こそ、そのように美女を見かけるたびに心を残しますと、三途の川の船筏ふないかたから転げ落ちますぞ」

「わしのごとき乞食坊主は、そもそもその船筏に乗せてもらえぬわい。渡し賃の六文が都合できんでな」

この坊主は座談が面白く、平曲を聞くより、しばらく歓談で酒が続いた。

聞けば、岩阿弥は時衆の聖であるという。若い頃は諸国を遊行し、南は九州・鹿児島から北は陸奥みちのく・津軽の恐山まで、日本中をくまなく歩いたというのが自慢であった。

元綱は、多くの軍記物語を精読しているだけに、各地の地名、地方方に根を張る豪族の名などには妙に詳しい。その博識は、あちこちと歩き廻っている岩阿弥をさえ驚かせた。

「ところで、御坊が演やるのは平曲のみか」

元綱が勝一に訊ねた。一般に琵琶法師は『平家物語』が専門だが、「語り物」の芸能者であることに違いはなく、客の好みに応じて複数の物語を語ることが出来る者もある。

「説教物ならば、『さんせう太夫』や『しんとく丸』などはつかまつります。あとは御伽草子がいくつかと、『義経記』ぎけいぎなどは少々。目明あきの者ならば書物さえあれば読み語ることもできるのでございましょうが、わたくしにはそのあたりが精一杯でございまして」

盲僧は当然ながら文字から物語を憶えることは不可能であり、すべて耳から聞いて記憶したはずである。それが職能であるとはいえ、

大変な習練と時間が必要であつたらう。

「御坊は『義経記』も語れるのか。語りの芸をする者は、やはり判官うがんひいき鼻びな貞まことが多いな」

義経を主人公にした御伽草子は少なくなき、『判官都話』みやしばなし、『皆みな鶴つる』、『御曹子島渡り』など、枚挙にいとまがない。薄命の英雄として義経を愛惜し同情する風潮は庶民に根強く、語り芸で世を渡る者たちにとってはまさに格好の売り物であつたのだらう。

ちなみに『義経記』は作者不明の書物で、いつ成立したのかも定かでない。これは『平治物語』や『源平盛衰記』なども同じで、軍記物語はむしろ作者が特定されるものの方が珍しいのである。『義経記』を誰がいつ書いたのか、元綱はそれが長く疑問であつたのだが、その点を訊ねてみると、この琵琶法師は、時衆の僧や語り物の芸人の存在を指摘した。

「すると御坊は、『義経記』は誰か一人が書いたものではないと申されるのか」

はいはい、と勝一は二度首を縦に振つた。

「盲めしいたわたくしは世間が見えませぬが、たとえ目明あきの者であつても、東は奥州から西は壇ノ浦まで、一人の人間が見て回つてアレを書いたとは、とても思われませぬ」

「確かになあ。それで陣僧か……」

時衆の僧は、陣僧として合戦に付き従い、戦場の伝聞を語り、しかもそれを文字で記録することができる。また語り物の芸能者たちは、各地の伝説、伝承を、口碑として伝え残す。陣僧たちによって

語り継がれ、あるいは書き継がれてきた義経の物語や、地方地方に残る言い伝え、創作された御伽草子などが、長い年月を経るうちに次第に纏められ、重複する部分は切り捨てられ、取捨選択が重ねられ、やがて現在の『義経記』になった、ということであろう。それならば、作者がいないのも、完成年代が特定できないのも、納得できる。

「そういうことか？」

「はいはい。おっしゃる通りでございます」

勝一は嬉しそうに頷いた。

「官製の『吾妻鏡』^{あづまかがみ}を除き、ほとんどの軍記物語は似たような事情で出来あがったものでござりましょう」

岩阿弥が口を挟んだ。たまにしか飲めぬ酒を過ぎたためか、その岩のような顔はすでに真っ赤になっている。

「書いた者が八キとしておるのは『平家物語』くらいではなからうか」

兼好法師の『徒然草』^{つれづれぐさ}によれば、『平家』は、鎌倉時代の初期、^{しなののぜんじ}信濃前司行長^{ゆきなな}という人物が書き上げ、^{しんぶ}生仏^{しんぶつ}という盲僧にそれを教え、^ね琵琶の音に乗せて語らせた、ということになっている。これが後の琵琶法師の起源であるという。

「たとえば奥州と九州では、これが同じ言葉かと思うほどなまりが大きく違っておりましてな。わしが聞き知っておる限りでは、同じ話でも地方地方によって内容もところどころ違っておったように思

いまするな。もつとも、わしの頭かしらはいたって巡りが悪いゆえ、語り物どころか説教物も、ひとつもまともに憶えてはおりませぬが」

「御坊の大頭なら、さぞ多くの説教が詰まっておりますなものだがな」

井上又二郎が茶化すと、

「左様左様。鉢こそ大きゆうござるがな。中身はどうやら空っぽと見えて、このように頭を左右に振りますと、中で脳髓がカラカラと音を立てまする」

岩阿弥は滑稽な顔を作つて頭を振り、それを見た一同は大いに笑つた。

「いずれ衆生しゆじやうは文字に暗い者がほとんどでござる。御仏はその者たちを哀れみ、この勝一法師のごとく物覚えの良い者を世に遣わしてくだされたのでござろう。わしのような徳の低い坊主は、この法師のような方の杖を引いて歩くことで世の役に立ち、こうして酒にありつける。有難いことありがたいことだ」

実際、文字が読める者はこの時代にはそう多くはなく、武士や商人はともかく百姓の大半は文盲と考えていい。そういう者たちの耳に訴えかけるのが語り芸であり、中世においては文字よりむしろ声が文芸の中心であったと言えるかもしれない。

琵琶法師や瞽女こにょのように門付けする芸人もあれば、大勢で座を組み、小屋掛けして興行する芸人集団もある。

年が改まった大永二年（1522）の正月下旬。旅芸人の一座が吉田にやって来て、興禅寺の境内に小屋掛けするということがあった。

その噂は、広くもない城下でたちまち評判になった。冬の山村に娯楽は少ない。暇を持て余している民衆にとって、これほどの余興はめつたにないのだ。

それを小耳に入れてきたのは井上又二郎である。

「文五郎一座？ 確かにそういう名なのですか？」

思わず重蔵が叫び、その剣幕に又二郎は周章した。

「噂ですよ、噂。わしも人から聞いただけで、本当にそうなのかまでは存じません。見て来たわけではないのですから」

部屋の奥で鎧の繕いをしていた元綱が、興味を引かれたように顔をこちらに向けた。

「なんだ、知っておるのか？」

「わしが安芸へやって来るとき、播磨あたりから芸人一座と旅路を共にさせてもらうたという話はしたことがありますな。それと名が同じなのです」

「ああ、そういえばそんなことを申ししていたな」

「青幕宿あおまきしゆくの文五郎一座といえは、同業の中でも妓おんなの歌舞では右に出る者なし、などと自慢しておりましたが……」

「青幕宿？ 美濃のか？」

「たしかそのように申しておったと思いますが。わしは京より東のことはほとんど知らんです。四朗さまは何かご存知なのです」

か？」

「まあ知ってる。といっても、書物の上でのことだがな」

高橋氏の備後遠征に従軍したことを除けば、元綱は安芸から一歩も出たことがなく、その知識はもっぱら書物から得たものである。

「美濃の青墓宿といえば、頼朝公の父である義朝公よしともが、『平治の乱』で敗れて都落ちした時に身を寄せられた宿場だ。傀儡女長者くわいめと呼ばれた大炊おおいという女が、義朝公の妾めかけであった縁でな。あとは、そう、後白河院に今様を伝授した乙前おとまえという芸人も、青墓宿に住んでいたと何かで読んだ憶えがある。後白河院といえば四百年も前の人だ。その青墓という宿場には、芸で身を立てる者たちが大昔から集まっていたんだな」

「はあ、そうなのですか……」

ちなみに元綱の先祖である大江匡房まさいふさは、平安後期において屈指の知識人であり大学者でもあったが、風変わりなことに芸能者が好きだったようで、『傀儡子記くわいし』や『遊女記』といった随筆を書き残している。それと同じ血が、どうも元綱にも流れているらしい。

「まあいずれにしても、行って確かめてみればよい話ではないか。良い退屈しのぎになる」

元綱はすでに大乗り気である。この若者は餓鬼の頃から祭礼が大好きで、喧騒や人混みに血が浮き立つ性質たぢなのだ。

元綱は、母と侍女、近侍や家の使用人など十五人ばかりを連れ、興禅寺に行くことにした。当然のように妻と子も連れてゆくつもりであったのだが、

「とんでもない。この寒いなか何刻も外を連れ回しては、鶴寿かくしゅが風邪を引いてしまいます」

とゆきに叱られたので、そちらは断念したのである。

境内は大変な賑わいであった。広い寺領の一角に竹矢来が組まれて場が仕切られており、鰻幕が張られ、外から中が覗けないようになっていた。木戸銭を払った者だけが幕の中に入れるのである。幕の中からは人々の嬌声やざわめきが絶えず、木戸の前は人だかりで埋まり、周囲は順番待ちの人で溢れていた。家中の武士の姿も多く見られる。便乗商売で、焼いた餅や甘酒などを売る露店までが出ていた。

「これは木戸を抜けるのも一苦労だな……」

空は厚い雲に覆われ、小雪がちらつく生憎の天気で、とにかく寒い。こういう状況で長く待たされるであろうことを、あの賢明な妻は見越していたのであろう。

重蔵は、竹矢来の組み方や鰻幕の模様などから何かを悟ったようで、勝手知ったる様子で脇から裏手に回ってゆき、しばらくして中年の男を連れて戻ってきた。

「この者は？」

「座長の文五郎という者です。文五郎殿、こちらはわしがお仕えする、相合の四朗さまじゃ。四朗さまは毛利家の御曹司であられる」

男は小腰を屈め、元綱に懇慫に頭を下げた。

「今義経のご雷名は、安芸を通りますたびに耳にしておりますた。

わざわざお運び頂きまして、ありがとうございます。一座を束ねます文五郎と申します。毛利さまには、此度の興行をお許し頂きまして、重ねてお礼申し上げます」

寺社の領地は地頭の権限が及ばない不入の地で、興行許可を出したのも実際には興禅寺であったが、領主の縁者の機嫌を取り結んでおいて損はない。

「どの土地にゆきましても義経を扱った猿楽（狂言）などは特に喜ばれるのですが、毛利さまのご領地には生きた義経さまがおられるゆえか、どうも不評でございますな。演目に苦勞致しております」

などと、如才がない。

「良い見世物に領民たちも喜んでいる。たんと銭を稼いでゆくがよい」

元綱は笑顔で応えた。

「この重蔵が、以前そなたの世話になったと聞いたが」

「はいはい。羽田殿とは旅の空を共に歩いたことがございます。このようなところで再会できようとは、まったく驚き入りました。相合さまにお仕えしておると聞き、二度驚いた次第でございます」

「

文五郎はやや痩せ型の四十男で、言動に礼節があり、物腰に卑しさがない。どことなく武家の匂いがする。

また夜にでもゆっくり遊びに来てくだされ、と重蔵を誘った文五

郎は、元綱に礼をすると、そそくさと鰻幕の裏手に戻っていった。舞台は開演中であり、何かと忙しいのであろう。

それからさらに一刻半ほど待たされた。

木戸銭を払って幕間に入ると、内部は観客で埋まっていた。人いさきのせい、中は妙に暖かい。

正面に八間（約十五メートル）ほどの広さの舞台が設えられている。

しばらく待っていると、太鼓と鉦が打ち鳴らされ、舞台に先ほどの文五郎が現れた。

「遠く濃州青墓宿（うすごしゆく）より、百里の道をはるばると、罷（ま）り越したるこの一座」

などと口上をつらつらと並べ、さらに観客に感謝の辞を述べる。

座長が引つ込むと、演目の開始である。

まず二人の放下師（ほっかじ）（曲芸師）が現れ、ジャグリングの芸を始めた。三本の抜き身の短刀を器用に空中に舞わす。さらに二間ほどの距離をおいて向かい合い、二本の短刀が両者の間を飛び交う。短刀の動きは一瞬も止まらず、それがいつの間にか四本に増え、やがて六本に増えた。観客たちは口を開けてその妙技に見入り、会場は驚きの声と割れんばかりの喝采で満たされた。

次に出てきたのは滑稽芸の男たちで、独り相撲を取る者、動物の形態模写をする者、猿回しの芸をする者などが会場を笑わせた。

武張った芸もある。舞台中央に立てた的に、会場の端から手裏剣打ちで短刀を突き刺す技を持つ男は、最後は目隠しをしてその芸をやったのけた。よほど修練を積まねば武士でも出来る者は少ないであろう。元綱も素直に感心した。

それらの演目が済むと、笛と太鼓に囃されて、舞台の左右から華やかな薄物を纏った美女が十数人も現れた。

花は主ある女郎花ぬし おみなべし よし知る人の名に愛めでて
許し申すなり 一本折らせ給えやひともと
なまめき立てる女郎花 うしろめたくや思おもうらん
女郎と書ける花の名に 誰たれ偕かい老ろうを契ちぎりてん
かの邯鄲かんたんの仮枕かりまくら 夢は五十年いそじのあわれ世の
例ためしもまことなるべしや 例もまことなるべしや

小歌を唄いながら淫猥な舞いを見せる。

私たちは主人に飼われた女郎花。その事情を知るお優しいあなた（観客の男）のお名に免じて（肌を）許しましょう。お望みならばどうぞ一本お手折りください。いかにも艶めかしい姿で立つこの女郎花。気になってしょうがないでしょう？ 「女郎」と書くその名に戯れて、夫婦めおとの契りを結ぼうとした者もあつたのよ。あの邯鄲かんたんの仮寝かりねの夢の五十年、その栄華さえ泡のように消えるのだから、儚はかなき人の世の一夜の例ためしにもきつと真実があるでしょう。

彼女らは、芸妓であると同時に遊女である。その舞いの妖艶さ、見事さは、観客を大いに喜ばせ、大興奮させた。

が、ゆきの舞いを見慣れた元綱には、これは何やら物足りない。いかにも華やかではあるが、客への媚びが露骨すぎて、興を殺がれるのかもしれない。このあたりは好みの問題でもあるうが、

薄物も悪くはないが、白拍子のごとき男舞いの方が面白いななどと思ったりした。

公演は一刻ばかりで終わった。

木戸の外に出ると、すでにあたりは夕暮れ時である。竹矢来の周囲には篝火が焚かれ、人の賑わいは少しも衰えていない。出た観客と入れ違い、続々と人が木戸の中に吸い込まれてゆく。

「お前はあの舞台上で剣の技を客に見せておったわけか」

元綱が笑いながら言った。

「はあ。お恥ずかしい限りです」

重蔵は苦笑するしかない。

その夜、最後の公演が終わるのを待つて、重蔵はその舞台裏を訪ねた。昔の仲間たちとゆつくりと酒を酌み、大いに旧交を温めたこととは言うまでもない。かつて馴染んだ女もまだ一座に残っていた。朝帰りした重蔵は妙に脂の抜けた顔をしていたが、意味を察した元綱はニヤリと笑っただけで、むろん咎めたりはしなかった。

その翌々日の初更、吉田の坂広秀の装束屋敷に入つてゆく数人の人影があつた。

文五郎と芸妓たちである。

この一行をたまたま見かけた領民たちは、坂広秀が艶美な酒宴でも張るのだらうと思ひ、羨んだり囁き合つたりしたが、その屋敷の最奥の一室に招じ入れられた文五郎が、広秀の父である坂広時と人を遠ざけて何やら密談していたことを知る者は、屋敷の中でもほんの一握りしかいなかった。

多治比の猿掛山にも雪は深深と降り積もっている。

灯明の火を吹き消したお久は、夫が待つ夜具の中へ身を滑り込ませた。

帯を解き、単衣ひんえの中をまさぐる元就の手の動きにもすでにぎこちなさはない。妻の身体ねのどこを押せばどんな声が出るか、元就もすつかり解るようになっていた。

底なしの快樂けらくに陶然と酔う時間が過ぎると、お久は夫の胸のなかで小さくため息をついた。

「なんだか毎日が平穩で。それがかえって不思議な感じが致します」

安芸の支配者が大内義興から尼子経久へと変わった。毛利家は内から尼子に仰ぐ旗を替えたという。いわば、昨日まで白かったものが今日からは黒になったというような、あるいは天と地がひっくり返ったというような、それほどの大変化であるはずなのに、大内の軍兵が安芸に攻め寄せて来るわけでもなく、毛利家で大内鼯鼠の重臣たちが叛乱を起こすでもなく、毛利領では十年一日のごとく、昨日も今日も同じように平穩な時間が流れている。

「このままこの一年が安穩と過ぎてくれればと思いますけれど・・・」

「そうだな・・・。だが」

元就は静かに、けれど厳然と言った。

「大内のお屋形は、安芸をこのままにはしておかぬだろう。こうして静かに暮らしておれるのも、春の雪解けまでだ」

元就にとってそれは予測というより確信であった。

実際、大内義興は何も遊んでいたわけではない。

十一年にも及ぶ在京によって経済的に疲弊した家来たちを休ませねばならず、国を空けていた間に溜まりに溜まった内政案件の処理に忙殺されていたということもあるが、京から帰国してこの三年間、義興の視線は主に西方 北九州方面に向いていたのである。とりあえず平穩を保っていた安芸や石見にさほど注意を払っていなかった、というのが正直なところであつたらう。

北九州というのは、筑前、筑後、豊前、豊後、肥前の五ヶ国のこ

とを指す。この地域では、秋月氏、筑紫氏、高橋氏、蒲池氏、宗像氏、渋川氏、少弐氏、龍造寺氏、千葉氏、小田氏といった名門豪族たちが覇を競い、筑前と豊前を押さえる大内氏や、豊後の大友氏といった大勢力がその紛争に介入するために、政情は常に混沌としていた。なかでも少弐氏は、律令時代に太宰少弐（室町時代で言う「九州探題」の次官）を務めたところからその姓を名乗ったという名門武家貴族で、最盛期には筑前、豊前、肥前の守護を兼ね、この地域に根強い影響力を持っていた。周防から筑前に勢力を伸ばした大内氏とは仇敵の間柄で、百年にわたって血みどろの抗争を繰り返していたのである。

この物語の現在から二十四年前、若き日の大内義興は、九州探題たる渋川氏を援ける形で大宰府を押さえ、少弐氏を滅亡に追い込み、筑前と豊前を平定した。その後、足利義植を奉戴して上洛戦を戦ったわけだが、義興自身が主力軍と共に十一年もの長きにわたって国を留守にしていれば、その支配のタガは緩まざるを得ない。少弐氏の遺児で肥前に逃れていた資元という少年が、豊後の大友氏やかつての旧臣たちから支援を受けて少弐氏を再興し、肥前を支配していた千葉氏の内紛に乗じてその支配地域を乗っ取るなどして勢力を盛り返し、本領・筑前の奪回戦を挑むまでに成長を遂げていたのである。

京から帰国した義興は、まず北九州における覇権の確立を急がねばならず、筑前・豊前の再統治と従属豪族の引き締め、少弐氏とそれに味方する豪族たちに対する手当てなど、政戦交えた手を打ち続けていた。そういう時期に東で尼子軍が暴れ始めたのだから、義興は腹立たしかつたであろう。

「尼子経久め……！」

分国である石見を侵され、石見銀山を奪われるという一大事が起こった以上、もはやあの老人を放置しておくことはできない。

義興は、幕府管領・細川高国を仲介に動かし、少弐氏との間で和睦を成立させた。少弐氏の肥前支配を公認してやるから、大内領の筑前には手を出さなよ、という政治取引を行ったのである。この和睦を受けて、細川高国は少弐資元を肥前守護に補任してやっている。そうして北九州をとりあえず鎮静させた義興は、尼子氏との全面対決を決意し、長期外征に向け本腰を入れて戦備を調べ始めた。

尼子軍が電撃的に安芸に侵攻したのは、まさにその矢先である。さすがの義興も、尼子経久のこの早業にはやや虚を衝かれた感があった。

安芸の豪族たちは、武田氏とその傘下の豪族を除いて、ほとんどが大内方であり、たとえ尼子軍が侵攻して来たとしても、大内の援軍が到着するまで時間を稼ぐことくらいは出来るはずだと義興は考えていた。それだけに、国人一揆の豪族たちが軒並み尼子方に寝返り、わずか数日のうちに安芸の旗色が一変してしまうというのは、予測の範囲を超えていたのである。尼子経久の智謀がそれだけ冴えていたとも言えるわけだが、しかし、もはや義興も黙視しているつもりはない。

戦さは来春、雪が解けてからだ。

それまでは外交で稼げるだけ利を稼いでおくべきであろう。

尼子軍に鏡山城を奪われたことで、安芸南部の豪族たちは揃って尼子に靡いてしまったらしい。義興は彼らに密かに密使を遣わし、来春には大内軍の大反攻があることを伝え、手向かわず寝返るよう内応工作を施した。

一方、安芸北部の豪族たちは、尼子軍に対して沈黙を守っていたと聞いている。芸北は地理的に出雲に近いだけに、豪族たちはすでに密かに尼子に通じている可能性が高いが、もともと尼子氏と強い同盟関係にある吉川氏はともかく、高橋氏や毛利氏が寝返ったという証拠はない。これが敵か味方かを見極めておかねばならず、そのためには連中が義興の命に従うかどうかを見ることが一番手っ取り早い。

大永二年（1522）二月中旬、義興は、

「国人一揆の衆と共に、備後へ兵を出されよ」

と高橋興光に命じた。かつて高橋久光がそうしていたように、安芸の国人一揆の兵を集め、尼子方の備後の国衆と戦わせようというのである。これは一種の踏み絵と言ってよく、この命令に応じない者を「大内の敵」と見做せばいい。

下知を受けた高橋興光は困惑した。

興光は密かに尼子経久に心を寄せていたが、経久と正式に主従の盟を結んだわけではなく、依然として大内氏に人質を預けたままになっている。高橋にとって備後の三吉氏などは仇敵であるから、備後衆と戦うこと自体に異存はないのだが、そのことで尼子氏に敵対したと見做されては堪らない。

興光は、同盟する毛利氏、吉川氏にも義興からの命令を伝え、どう対応すべきであるかを相談した。

むめい
無名の師だ。

話を聞いた元就は最初から乗り気でなかった。どう考えても本来必要のない戦さで、戦略的な目標さえ定かでない。要するに芸北の豪族たちが大内義興の命令に従うかどうかを見定めることだけが目的なのである。

元就が察した程度のごとは、当然のように吉川元経も見抜いている。

「我らが備後の国衆と連年にわたって兵火を交えておることは、経久公ももちろんご存知だ。備後を攻めたとして、それで我らが尼子に敵対したということにはなるまいよ」

それは大内・尼子の戦いとは別の話だ、と吉川元経は明快に規定した。

「大内と尼子が雌雄を決するのは、まだまだ先の話よ。ここはひとまず義興公の機嫌を取っておくのも悪しゅうはない」

このとき元就は二十六であり、興光にいたっては二十歳になったばかりである。これに比べて六十四になる吉川元経は経験が圧倒的に豊富で、心事にも常にゆったりとした余裕がある。もともと元経は大内義興に愛顧された男であり、尼子経久とも強い繋がりを持った人物だから、その元経の言葉なら間違いないであろうということで、三豪族による合同出兵が決定された。

だが、運命というものは誰にも計れない。

三月二日、備後の世羅郡・赤屋という地で行われた備後国衆との合戦で、吉川元経が流れ矢を浴び、なんと戦死してしまったのである。

総大将を喪った吉川勢は崩壊しかけたが、それを支えた毛利勢の奮戦もあって、合戦自体はどうにか痛み分けて終わった。連合軍は大きな敗北感を抱えたまま、ほどなく備後から兵を引きあげた。

吉川元経の戦死は、戦うことを命じた大内義興にとってもまったく想定外であつたらう。元経は毛利興元と共に国人一揆の中核として安芸の国衆を主導し、大内軍が上洛戦を戦った時も骨惜しみせずよく働いてくれた。元経は武人としての風姿が爽やかで、義興はあの初老の男が決して嫌いではなかった。さらに言えば、吉川家を継ぐことになる嫡子の興経は未だ十五の少年で、家政を執るには若すぎるから、当然、隠居の国経が後見として実権を握ることになる。吉川国経はかの尼子経久の義兄なのである。元経が死んだことによつて、かえつて吉川氏から大内色が薄れたということになる。

が、後悔したところでどうなるものでもない。

義興は、春の雪解けを待って、満を持って行動を開始した。

「芸備を治むるは誰であるか、天下に示さねばなるまい」

三月中旬、自ら二万余の大軍勢を率いて山口を出陣したのである。義興の政略手腕は錆びの浮いたものではない。

自ら安芸に乗り込んだ義興は、まず神主職の相続問題で分裂している敵島神領家の内紛に介入し、謀略で桜尾城（廿日市市）を接收した。さらに勇将として鳴った己斐宗端が「有田の合戦」で死んで以来、勢威が振るわなくなった己斐氏の己斐城（広島市西区）を同じく謀略で奪い取った。

武田光和は慌てたであろう。武田軍は一戦もせぬうちに、南方の防御拠点を次々と奪われ、本拠である銀山城かなやまを剥き身にされたのである。

銀山城は武田山を要塞化した堅城で、長年安芸を支配した守護・武田氏の本拠に相応しく、防備が非常に堅い。これをまともに抜くとなれば、当然多くの時間と血を浪費することになる。義興はその愚を犯さず、五千ほどの兵を銀山城の抑えに配し、主力を率いてそのまま沿岸部を東進した。

広島湾の東部に根を張る白井氏、野間氏、阿曾沼氏などは、この威圧をまともに受けることになった。彼らの動員力は千にも満たず、一万五千を超える大内軍に太刀打ちなどできるはずもない。慌てて大内軍の本陣に馳せ参じ、義興に詫びを入れて再び大内氏に臣従した。

大内軍はそのまま陸路を押し通り、尼子氏に奪われた鏡山城を囲んだ。

この鏡山城こそが、安芸の向背を決める要の拠点と言っている。これを尼子から奪い返せば、鏡山城の周囲に根を張る豪族たちも再び大内に臣従を誓わざるを得なくなるだろうし、敵対している武田氏も尼子軍との連携を取ることができなくなり、孤立する。さらに大内軍が安芸から備後へと侵攻するための橋頭保ともなるのである。この時期、すでに尼子経久は主力軍と共に出雲へ帰っており、鏡山城を守るのはわずかな守備兵に過ぎなかった。

本来であれば、鏡山城に大兵力を駐屯させ、尼子方の恒久的な防
御要塞とすべきであったが、それをすれば、この時点で大内軍との
決戦にならざるを得ない。

大内と雌雄を決するには、まだ機が熟しておらぬ。

と経久は考えていたのである。

本拠の出雲から遙かに遠い遠隔の地で決戦を行うなら、地元の豪
族たちと信頼関係を深め、その協力を得ることが不可欠であるが、
安芸の豪族たちは尼子に臣従したとはいえ、長く大内傘下にあった
こともあり、これがいつ大内側に寝返るか知れたものではない。本
当に信頼できる家は、どこどこか。それを見極めぬ限り決戦
などできたものではないのである。

経久にとつて、昨年の安芸南部への電撃侵攻は、「尼子はいつで
も安芸を奪えるぞ」といった程度の政治宣伝であり、大内義興への
宣戦布告に過ぎなかった。

国を奪うとは、人を奪うことだ。

と経久は思っている。

本当の意味で安芸を尼子の分国にするなら、まず安芸北部の豪族
たちを味方につけ、主従の盟を結び、その家臣化を確実にした上で、
そこからじわりじわりと南方へ勢力を浸透させてゆくのが戦略の王
道であり、それ以外に道はないのである。

安芸で反大内の家といえは、まず武田氏がある。義兄の吉川国経
も尼子に味方してくれるであろう。しかし、他の豪族たちはまったく
く当てにならない。特に国人一揆の連中は、尼子軍にあっけなく恭
順したように、大内軍が安芸に出張ってくれば簡単にこれに寝返る
に違いない。

そう見極めきっている経久は、大内軍襲来の報告に接しても、こ
の時は軍を動かさなかった。鏡山城に残した守将には、死戦を行わ
ぬよう命じてある。籠城して半月ほども敵を支え、武門の面目を潰
さぬ程度に戦えば、あとは城を明け渡して退去すればいい。それよ
りも、大内軍の侵攻に対して、尼子に臣従したはずの豪族たちがど

ういう振る舞いをするか、というところに、経久の視線は冷然と注がれていた。

安芸南部の豪族たちは再び選択を迫られることになった。

心ならずも尼子に臣従していた天野興定は進んで大内軍を迎え、抗戦の無駄を悟った平賀弘保も大内氏に「返り忠」する意思を示した。苦境に立たされたのが小早川弘平で、本家・沼田小早川をどうにか説得し、再び大内方に帰参を果たした。

義興は、尼子から大内に寝返った豪族たちを先頭に立て、鏡山城を連日にわたって攻めた。

火の出るような猛攻　と書きたいところだが、安芸の豪族たちの士気は高くなかったであろう。が、大内への忠誠を試される立場の諸将は手ぬるい進退を行うわけにもいかず、尼子軍の防戦の矢石に手を焼き、いたずらに流血を増やすばかりであった。義興はその戦いぶりが不満であったが、滞陣の長期化はさらにおもしろくない。城兵の無事を条件に開城を打診し、ともかくも城を奪い返した。

このような醜態は二度と繰り返してはならぬ。

義興は重臣の蔵田房信に城を預け、その修築と再軍備に当たらせた。

鏡山城に入った義興の眼は、北に向けられている。安芸の北部では、吉川氏、高橋氏、毛利氏、宍戸氏などが、沈黙したままこの城攻めを見守っていたはずであった。

数日して、高橋氏と毛利氏から戦勝を祝賀する使者が来た。

「大朝からは、人は来ぬか・・・」

吉川氏から何の会釈もないことが、義興は腹立たしい。しかし、ここで事を荒立てるのは短慮というものである。

武田氏が安芸南部で反攻を続けている限り、これをそのままにし

て安芸北部へ踏み込んでゆくには危険が伴う。たとえば吉川氏を武力で攻めれば尼子軍が救援に現れぬとも限らないし、滞陣中は常に背後の武田軍に気を配らねばならず、補給線の心配もある。不安要素が多いだけに、安芸北部に対しては外交で事を済ませたいというのが義興の本音であった。

先にも触れたが、この時点で高橋氏と毛利氏は尼子氏に人質を出してはならず、表面上、依然として大内傘下であり続けている。去就の解らない吉川氏さえ大内に恭順の意思を示せば、国人一揆はすべて大内方と判断できぬこともない。

「道麒よ」

軍議の席で、義興は重臣筆頭たる道麒入道・陶興房に訊ねた。

「大朝の次郎三郎（吉川興経）は、余に従う意思がないと思うか」「いやいや、次郎三郎はまだほんの小倅こせがれでござる。自らの考えで動いておるわけではなく、隠居の伊豆殿（吉川国経）の言いなりになつておるのでございませう」

ちなみに陶興房はこのとき四十八。義興がもつとも信頼する腹心であり、武将としても外交家としても年相応に老練で、立ち技だけでなく寝技も利く男である。

「次郎三郎は、お屋形さまから偏諱へんぎを賜り、またお屋形さまは烏帽子親でもありますゆえ、いわば子のごとき者でござる。ご当家に従う意志さえ示せば、あえて吉川家を滅ぼすまでの事はせずともよろしかろうと存ずる。それがしにお任せ頂ければ、伊豆殿と話をつけましよう」

「ふむ……」

義興は興房の献策を容れ、大朝に使者をやることにした。

「それにしても、『応仁』以来、我が家は鬼吉川には何かと手を焼かされるわ……」

義興はやや慚然として呟いた。

大内氏は『応仁の乱』では西軍の中核となったが、鬼吉川 吉川経基は東軍の武将として鬼神のような奮戦ぶりを見せた。紆余曲折があり、吉川氏は大内氏に臣従し、上洛戦にも協力してくれたが、吉川経基はあの尼子経久の舅になっているのだから始末が悪い。義興は吉川元経のことは個人的に気に入っていたのだが、義興が命じた本来必要のない戦いで戦死してしまい、結果として隠居の国経を表に引つ張り出すことになった。国経は尼子経久の義兄であり、元経よりはるかに御しくい。

うまくゆかぬものよ。

家と家との間には、歴史的相性とでもいうべきものがある。大内家と吉川家はどうにも噛み合わせが悪いように思われて、義興の眉宇に苛立たしさが漂った。

第五章 安芸激震 肅清（一）

大内軍が安芸へ侵攻したという噂は、その三日後には安芸北部の吉田まで届いている。

その風聞を事実と確認した志道広良は、宿老と主立つ家臣をすぐさま招集し、この事態にどう対処すべきか相談することにした。

その評定の席に、普段は顔を見せない坂広時がひょっこりと現れて、並み居る重臣たちを驚かせた。

「大内のお屋形が安芸へお入りになったとなれば、我らがそれをお迎えするのは理の当然。一刻も早う鏡山城へ兵を出し、城攻めの先手に加わえて頂かねばならぬ。ゆるゆると評定などをし、いたずらに日を送っておったところで、お屋形の機嫌を損ずるばかりじゃ。今からでもよい、早う陣触れの太鼓を叩きなされ」

と、広時はふくよかな声で言った。

この老人は二十年以上も前に隠居しており、執権職を志道広良に譲って以来、家政に嘴くちばしを入れるようなことはかつてなかった。それだけに、この老人が自ら動いたということが、事態の重大さを表しているかのようであった。

老臣、重臣の面々は、坂広時より一世代かそれ以上に若く、前執権であり名門・坂氏の長老であるこの老人に対しては、多少の遠慮を持たざるを得ない。その意見に不服な者も正面きつては異を唱えず、ただ左右の見まわして同僚の顔色を読んでいる。

そういう空気を察したのか、福原広俊が白い髭をしごきながら言った。

「そうは申されるがな、兵部ひょうぶ殿よ。我らは昨年、吉川の伊豆殿（国経）に仲介を頼み、出雲のお屋形に誼みを通じたばかりじゃ」

広俊は家臣団の長老的存在であり、坂広時よりさらに十ばかりも年長である。過去の功績において広時に対抗できるのはこの老人くらいしかない。

「尼子に大内にと、そう腰が軽うては、世人の侮りを受けまいか」

「はは、これは海千山千の式部殿しきぶいんの言葉とも思えませぬな」

広時は泰然とした微笑を浮かべている。

「昨年の冬、ご当家は尼子にあえて敵対せなんだ。が、それはそれだけのこと。一時の権謀と申すものでござろう。ご当家は出雲に人質を出してはおらず、尼子の軍門に降ったわけではありません。ご当家と大内家との主従の約は、未だ反故ほんこになつてはおりぬ。つまり我らは依然として、大内のお屋形からお指図さしずをたまわるべき立場じゃ。そうではないかな河内殿かわち」

話を振られた井上元兼は、

「いかにもご老体の申される通りじゃ」

と大いに頷いた。

「わしは、昨年の冬にも尼子に通ずることには反対じゃった。今日のような事態を招くであろうことは、あの時からわかりきっておったからじゃ。案の定、尼子は安芸を去り、雪解けと共に大内がやって来た。ご当家はもともと大内に従つて参つたのだから、大内のお屋形に臣下の礼を取るのが当然のこと」

この男はもともと大内鼯肩であり、否やがあるうはずもない。

「しかしご老体」

譜代衆を代表して渡辺勝が声をあげた。

「ご当家が出雲のお屋形に臣下の礼を取ったことは事実でござる。これは高橋、吉川とも相談した上で決めたこと。ひとたび旗色を決しておきながら、それを簡単に覆すのは、義に悖るのではありますまいか」

「義」とは「正しい行いを守ること」である。その言葉を聞いた老人は、邪気のない笑みを浮かべ、うんうんと二度頷いた。

渡辺勝は際立った才智があるわけではないが、剛毅朴訥とか質実剛健といった四字熟語がよく似合う男で、いかにも古武士然とした醇篤な性質と主人への忠誠心を持ち、毛利家譜代の筆頭たることを誇りとし、何をするにも骨惜しみをせず率先して働き、戦場では死をも恐れず戦い抜く。広時はそういう勝の人間性に大いなる好意を持っており、

この渡辺のような男こそ、毛利家の宝である。

と思っているから、返す声音は子に対するよりも優しい。

「太郎左の申すこと、いかにももつともじゃ。じゃがな、ご一同」

一座をぐるりと見回し、老人は言葉を継いだ。

「まあ考えてもみなされ。悦叟院さま（弘元）が大内の先代・政弘公より偏諱を賜って以来、ご当家はもう五十年近くも大内を主家と仰いで参った。秀岳院さま（興元）にいたっては、義興公より偏諱

を賜ったばかりか、いちいち数えられぬほど多くのご陰助を頂いておる。上洛し、京畿けいきで働いた際には、義興公は我らを大いに賞してください、そのお陰をもつて秀岳院さまは、『安芸に毛利興元あり』と他国にまでその名が響くようになられた。安芸の国衆と一揆を結ぶに際しても、義興公のお指図、お口添えがあつたればこそ話がまとまった。ご当家が今こうしてあるのは、それらの結果であることは明らかじゃ。これに対して、ご当家は出雲のお屋形から何か恩義を受けたであろうか？」

真正面からそう問われれば、これに応えられる者はいない。毛利家は尼子経久から一反半畝いつたんはんせの土地ももらつてはおらず、貸しもなければ借りもないのである。

「強き者に従うというだけが武門のあり方ではあるまい。武士には果たさねばならぬ義理がある。近頃の安芸は何かと騒がしいが、このような非常の時であればこそ、大内のお屋形へ忠義を尽くすことが、受けた恩義に報いる道であろうよ。義とは、そういうものではないかな」

論理に筋が通っている。さすがの渡辺勝も返す言葉がなかった。

広時は坂一族の長老である。その影響力は坂氏本家だけに留まらず、分家である桂氏、光永氏、志道氏にまで及ぶ。さらに井上一族の長老である元兼までが広時を支持する姿勢を鮮明にしているから、その雰囲気の中であえて尼子方を貫くべきだと主張する者は誰もおらず、衆議の方向性はおのずと定まった。

元綱は、腕を組んで瞑目し、眉間に深い皺を寄せたまま議論の成り行きにじつと耳を傾けていた。内心は反吐が出るほど不快であり、

「お前たちはそれでも武士か！」

と何度か叫びそうになつたが、その衝動を我慢して抑えていたのである。

ひとたび尼子方につくと決めたからには、たとえその先に滅びが待っていていようと、どこまでもそれを貫くのが武門の面目であり、そこにこそ忠義と意地に殉ずる武士の美しさがある　と、元綱は信じている。大内氏から受けた恩を云々するならそもそも尼子氏に通じるべきではなく、昨年の冬の時点から大内方であることを鮮明にしておけば済んだ話なのである。尼子軍がやって来た時は大内氏の恩を忘れ、大内軍が出張って来れば尼子の旗を弊履へいりのごとく捨てる。恥知らずと誹そしられて当然の態度であり、そのどこに武士の美しさがあるか。

そう思うのだが、しかし、

この議論には、俺は口を出してはならぬ。

ということも、この若者は弁えていた。

もしここで元綱が尼子方を貫くべきことを強硬に主張すれば、内心で尼子寄りの者たちが密かに元綱に同調し、元綱を核として親尼子の派閥を作ってしまうことになりかねない。先々代・弘元の血を受け、毛利本家の連枝という立場の元綱は、たとえば当主の幸松丸が急逝するようなことがあれば、毛利の家督を継ぐ資格がある。あるいは次兄の元就が失墜すれば、幼君の後見役として権力を握り得る。派閥の旗頭として担がれて、政争の具にされかねないのである。そうなれば尼子氏も元綱一党を利用して毛利の家政へ介入しようとするであろうし、大内氏の側からは毛利家中の癌として目の仇にされるであろう。尼子派と大内派の確執が先鋭化すれば、最悪、毛利家がふたつに割れて内訌が起きぬとも限らない。幼い幸松丸に政治力がなく、衆議で家政を執とっている現状においては、連枝たる元綱が政治的立場を鮮明にすることは、それほど危険で有害な行為なのである。そこを弁えているからこそ元綱は、これまで「政治」からは極力遠ざかるという態度を取り続けてきたのだ。

兄上がご存命あれば……。

嘆息するような気分でそのことを想った。

亡兄の興元が健在であれば、元綱もここまで気を使う必要はなかったであろう。いや、そもそもあの誠実な兄なら、大内義興との主従の約を遵守し、尼子経久からどのような圧力を受けても不動の姿勢を貫いたに違いない。

大内だ、尼子だ、という議論を耳の端で聞きながら、

俺は、大内義興にも尼子経久にも仕えた憶えはない。

と想い直し、元綱は自らをわずかに慰めた。毛利家が大内・尼子のどちらにつくにしても、己の主君が代わるわけではなく、その誠心のあり方を変えるわけでもない。元綱にとって主君とは亡兄の興元であり、その遺児の幸松丸であり、それ以外にはあり得ないのである。毛利家のために命を捨てて戦場で働く、というところに元綱の矜持があり、たとえ毛利家がどちらに向かって進んでゆくにしても、元綱は己のスタンスを微動だにせぬつもりであった。

「四朗、何か思うところがありそうだな」

元綱の浮かぬ表情を気にしたのであろう、兄の元就が発言を促した。

「いや、ないな」

短く応えた元綱は、苦く笑った。

「今日はどうも腹の具合が悪い。途中で悪いが、俺は先に帰らせてもらおう。評定の結論はまた明日にでも聞かせてくれ」

元綱は席を立ち、重臣たちの様々な視線を受けながら、広間を去った。

執権である志道広良はもともと大内寄りであり、本家の長老であ

り恩人でもある坂広時の言葉に逆らう気はない。福原広俊にしても、大内の大軍が吉田から二日の距離にまで迫っているという現実がある以上、これに積極的に敵対すべきとまでは考えていなかった。

結局、「大内へ返り忠すべし」というのが議論のコンセンサスになり、「国人一揆の衆中と進退を共にする」という消極的な寝返りが無難であろう、というところで衆議は落ち着いた。

多治比元就という男は、外から見ると優柔不断と映るほど決断や選択においては慎重である。

たとえば何か政治的な決断を下さねばならぬときも、元就は常に時間を掛けて考えに考え抜く。後から後悔したくないからである。しかし、たとえどれほど熟慮を重ねた末の選択であっても、性格が内向的で粘り強い元就は、己の決断に対しても常に懐疑的であり、もっと良い選択があつたのではないか、もっと他に道があつたのではないかと、後から必ずうじうじと思ひ返し、思ひ返しては後悔する。

下手な考え休むに似たり、か……。

そうも思い、自嘲したりもするのだが、それでも後から後悔したくないがために、何度も何度も同じことを考えてはため息をついている。

この局面においても、

どうすることが毛利家にとって最善手なのか。

ということをや元就は考え続け、決断しかねていた。

衆議は再び大内氏に通ずることを決したが、実際問題としてそう簡単には動けない。もしここで軍勢を出して大内軍に加勢すれば、それは尼子氏に敵対することを世間に宣言するのと同義であり、必ず尼子経久の怒りを買うことになるからである。尼子軍が鏡山城の救援に出て来る可能性もまだ残っていたし、よしんば尼子経久がこの時期の決戦を避けたとしても、いずれ安芸を再奪取すべく大軍を率いてやって来るのは間違いない。安芸北部に根を張る毛利は、そ

のとき最初の標的にもされかねないのだ。

大内も怖い、尼子も恐ろしい。

それが元就の本音だった。

大内氏は日本で最大にして最強の大大名である。その経済力と動員力の規模はおそらく元就の想像さえ及ばぬほどであり、大内義興にはまさに王者と呼ぶに相応しい風格がある。が、一方で、尼子氏には昇竜のような勢いがある。尼子経久は武略と謀略において生きた伝説と呼ぶべき鬼才であり、常識では計れないような、何をしてかしても不思議でないような、そんな不気味さがあった。

五年前の初陣以来、合戦についてはそれなりに場数をこなしてきた元就だが、「万」の単位の人間がぶつかり合うような大合戦はこれまで経験したことがない。わずか三千貫（約二万石）の毛利家から見れば、大内氏や尼子氏のような数国を統べる大大名は「巨人」としか表現しようがなく、彼らが動員しうる大軍に対しても、巨大な津波が迫って来るといような漠然とした恐怖感しか持ちようがなかった。この青年は極めて優れた洞察力と想像力と計算力とを有していたが、それでも体験してないことを実感として捉えることは難しい。大内軍や尼子軍が巻き起こす大津波が具体的にどれほどの高さで、どれほどの破壊力を持つか、というようなことを元就は見切れておらず、最終的にどちらが安芸を取るかという点にも未だに定見が持てずにいる。

それを見極めるまでは、首鼠両端しゅねりょうたんを続けてゆくしかない。

大内・尼子のどちらか一方を信じ、滅亡を賭してそれについてゆくというような肚くの括り方が、元就にはできないのである。

元就はそうして決断を保留し、事態の推移を見守っていたが、国人一揆の面々が次々と大内方に「返り忠」をし、さらに大内軍が鏡山城を陥落させたことを知るに及んで、ついに断を下さざるを得なくなつた。

元就がこのまま沈黙を続け、大内義興に何の会釈も示さなければ、毛利は「中立」あるいは「消極的敵対」という態度を取っているこ

となる。「毛利は大内に敵対しない」という意思表示をしておかなければ、大内軍が吉田に攻めて来ぬとも限らない。

西条に使者を遣わそう。

幸い世の中には「儀礼」という便利なものがある。大内義興に戦勝祝賀の使者を送れば、「毛利家は大内傘下である」と表明することになり、それでいて「帰属」という点には曖昧さを残しておけるから、尼子経久への刺激も少なくて済むであろう。

元就にすれば、少なくともこの時点においては、「毛利はあくまで国人一揆の衆と進退を共にしてゆくのであり、進んで尼子に敵対するわけではない」という建前を堅持しておくことで、尼子軍が再び安芸にやって来た時の逃げ道を残しておきたい。毛利家の生き残りを最優先するのが元就の立場であり、それを卑怯とも優柔不断とも思わなかった。

いずれにしても、この局面でもっとも重要なのは、毛利領の北方を守ってくれている高橋氏の向背であろう。毛利と高橋は共同歩調を取るべきであり、尼子経久に傾倒したらしい高橋興光を再び大内方に翻意させねばならないが、「先々の事はともかく、とりあえず戦勝祝賀の使者だけは出しておこう」という線なら、まだしも説得しやすいと元就は考えた。

元就は同様に吉川氏をも勧誘しようとし、舅いひぢの吉川国経と面談を行ったが、国経は話に乗ってこなかった。

「婿殿よ、それはいらぬ氣遣いじゃ。婿殿が大内のお屋形に頭を下げるといふなら、それを止めはせぬがな」

年老いた義父は不敵に笑った。

「我らは大内に敵対するようなつもりはない。が、お屋形が攻めて参るといふなら、弓矢でお相手するまでよ。吉川の爺おぢいがそう申しておったと、婿殿から伝えておいてくれぬかな」

来るなら来い、という態度であり、土下座外交はせぬというところに武勇で鳴った吉川氏の矜持がある。

吉川国経はこのとき七十九。『応仁の乱』の兵火を直に潜った男であり、父の経基と共に「相国寺の合戦」を戦い、西軍・三万余が攻める陣地を千にも満たぬ寡兵で守り抜き、敵を敗走させたという無類の戦歴を持っている。野戦で戦うならともかく、本拠の小倉山城で籠城するのであれば、たとえ大内軍が二万余の大軍であっても、やすやすとは負けぬという自負があった。

もし大内軍が吉川家を滅ぼすべく大朝へ雪崩れ込んで来るなら、尼子軍を呼び寄せ、南方の武田氏とも結び、百日でも戦い続けてやるぞ、と国経は肚を据えていた。いや、据えている振りをして見せた、という方がより正確であろう。吉川が強気に出れば、戦陣を長引かせたくない大内義興の側が折れて、なんらかの妥協案を示してくると国経は踏んでいたのである。外交とは一面で駆け引きのゲームであり、強く出ることがかえって利益を引き出せる場合がある。この老人は外交の力学と「戦争」という外交カードの使い方をよく知っており、日本最大の大名である大内義興を向こうに回してさえ、タカの括り方というものを心得ていた。

「ところで婿殿よ」

生臭い話はこれで仕舞いだ、とでもいうように、国経は好々爺然とした笑顔を見せた。

「久しく顔を見ておらぬが、お久は元気でやっておるかな」

「はい。お陰さまで風邪ひとつ引かずに」

「お菊を高橋に取られてしもうたことは、返す返すも残念じゃった

が、こればかりは今さら言つても詮もない。この上は早う跡取りを作つて、この爺にも孫息子を抱かせてくだされや。わしも明年には八十になる。そうそう長うは待てぬでな」

などと言つ割りに、国経は腰も曲がつておらず、実に矍鑠かくしゃくとして
いる。

「婿殿はまだまだ若いのじゃからな。毎夜でも励はげんで、お久にどんなと子を成してもらわにやらんぞ」

艶つやめいた話を嬉しそつにするあたり、精神的にもよほど若いのであろう。

吉川家の男は代々不思議なほど長命で、戦死した元経は六十代にして戦場で駆け回るほど元気であつたし、鬼吉川 吉川経基は九十三まで生きた。この舅殿も、あと五年や十年は平然と生き続けるように思われて、元就は微笑した。

達者なものだ。

人の寿命は計りがたいものだが、自分はともこの義父ほどは生きられないだろうと、元就は思う。父も兄も病で早世している。あるいは義兄の吉川元経のようにいつ戦場に斃たおれるかもわからない。二十代半ばの青年が己の五十年後を想像するのは一般的にもなかなか難しいが、武家の興亡が激しい戦国乱世にあつて、それは尚更であつた。

結局、元就と高橋興光は揃つて西条へ使者を遣わした。

その「臣下の礼」を、大内義興は鷹揚に受け取つた。

吉川氏は動かなくつたが、元就の心配をよそに、大内軍は安芸北部へは侵攻しようとはせず、しばらくして武田氏と和睦し、安芸から兵を引きあげた。石見銀山を一刻も早く奪い返したい大内義興は、尼子氏との決戦についても石見を想定しており、安芸で長々と時間を費やすつもりはなかつたのである。

吉川には何のお咎めもなし、か……。

正直なところ、元就は大いに安堵した。

もし大内義興が吉川氏を攻めると決断したとすれば、毛利も出兵を命ぜられたに違いなく、元就は妻の実家を攻めねばならぬ八メになつていた。大内軍が動かなかったということは、大内義興と吉川国経の間で何らかの妥協が成立したと見るべきで、大内氏が名を取り、吉川氏が実を取った、極めて政治的な取引が行われたと考えるべきであろう。

元就はそう察し、義父の見切りの見事さに改めて感心した。

結果として吉川氏は寸毫も姿勢を変えていないわけで、弱者の外交としてはこれ以上ないほどの成功であろう。あの大内義興を相手に、安芸の一豪族に過ぎない吉川氏が、外交で堂々と渡り合ったのである。それが現実可能なのだと知ったことは、元就にとって大きな発見であつたと言つていい。

さすがに舅殿は、ものに古りておられる。

吉川国経と元就とでは、老獪さにおいて年季が違う。元就は後世の人から「戦国最高の智将」の一人に挙げられるほどの男だが、古今東西のいかなる智将も智将として生まれてくるわけではなく、それぞれに早熟や晩成といった違いはあるにせよ、成長のための糧と熟成のための時間が必ず必要になる。元就が世間に対するタカノ括り方といったものを悟得し、政戦略と謀略という分野でその才能を開花させるのは三十代後半に入ってからであり、このときからさらに十年余の歳月を経ねばならなかつた。

暴風が過ぎ去り、安芸はとりあえずの平穏を取り戻した。

梅雨も明け、季節はすでに盛夏である。天にはたくましい雲が立ち、痛いほどの日差しが天神山の翠緑を輝かせ、樹間に濃い翳を作っている。

かまびすしい蝉の音に、ときおり幼児のはしゃぎわめく声と、元

綱の笑い声が混じった。

相合の元綱の屋敷である。

鶴寿丸は四つ（満年齢では三歳）になっていた。すでに会話が成り立つ年齢であり、

「お父上さま」

などと舌足らずな声で呼ばれると、元綱はなんとも言えずむず痒いのだが、同時に嬉しくてまたらない。まったく親馬鹿な話だが、元綱はこの初子が可愛くてしょうがなかった。

鶴寿丸はいたって健やかに育っている。同世代の子供と比べてもその体格は立派な方であろう。聡明さの度合いを判断するにはまだ早すぎるが、知恵の巡りは悪くないようで、去年の暮れ頃から少しずつ仮名が読めるようになり、ゆきから筆の持ち方や墨の摺り方などを教授され、今では簡単な文字を書けるまでになっていた。

そろそろ真名（漢字）を習わせるか。

自分がかつてそうさせられたように、郡山の満願寺にでも通わせようかと元綱は考え始めている。毛利家は文章博士の末裔という族であり、元綱が当然と思っている教育の水準は、他の一般的な小豪族や地侍などと比較すれば、レベルが格段に高かった。

相合の屋敷には女手が充分に足りているので、元綱は息子のための乳母は雇わなかった。実母であるゆきを除けば、もっとも長く幼児に寄り添い、その面倒を見ていたのは、ゆきの従者の幸であったろう。鶴寿丸はやんちゃな子供であったが、幸のことは姉のように慕って懐いており、この少女の言葉にだけは奇妙なほどの素直さで従った。

鶴寿丸のお気に入り入りの玩具は重蔵が作ってやった小さな木刀や木槍である。軽い桐材から削り出したまさにオモチャのような武器で、これを振り回して廊下や庭を駆け回り、侍女たちを手こずらせたりした。元綱は親としては諸事子供に甘かったが、そういう時だけは

烈火のごとく恚り、

「男は女子に手をあげるものではない！ まして武具をもって打つとは何事か！」

と息子を叱りつけた。

元綱自身は父との縁が薄く、叱られたことも怒られたこともなく、まったく放任されていた。父親の代わりを務めていたのが傳人の渡辺勝で、その教育方針は厳格にして愚直なまでのスパルタ式であった。父親としての元綱は、その二人のいずれをも真似なかつたと言えるであろう。

この日、元綱は裏庭で鶴寿丸と相撲の真似事をして遊んでいた。

「そろそろコレに武芸も仕込むか。幼い頃からお前が鍛えれば、いずれ俺を超える漢に育つだろう」

目を細めている主人を見て、重蔵は苦笑した。

「さすがにまだ早すぎると思います。お育ち方にもよりますが、再来年あたりから、ゆるゆるとで、よろしいでしょう」

「早ければ早いほど良い、というわけでもないか」

「今しばらくは、こうして遊んでおられるだけで十分です。和子さまは四朗さまの血を継いでおられるのですから、山野を駆け回れるほどのお年になれば、放っておいても武芸に関心を持つようになりますよ」

今義経の薫陶を受けて育つ子が、懦弱な男になるわけがない。加えて鶴寿丸には文事で鳴った江家の血が流れている。粗暴なだけの

男になるといふことも決してないであろう。文武の双方に優れた才能を秘めているに違いなく、育て方さえ間違わなければ、未は必ず良き武将となるはずだ、と重蔵は思っている。

熱気を含んだ真夏の風が、長屋の翳かげに立つ重蔵の頬を撫でて過ぎた。

その風の音に混じった幽かな雑音に気づいて、重蔵は振り返った。早馬の駆ける音である。徐々にこちらに近づいて来る。

元綱も気づいたのであろう、鶴寿丸を肩車して、表門に向けて足早に歩きだした。

「ご注進！ ご注進！」

その大声に急き立てられるように市兵衛が門扉を開く。

馬上の男は、元綱もよく知る本家の使い番であった。

「執権殿よりの仰せでござる！ 急ぎ評定すべきこと出来しめつたい！ 早急にお城に登られるべし！」

下馬もせず話をするなど無礼この上もないが、非常時の使い番にはそれが許されている。それは事態の緊急性を表しているとも言えた。

「承知した！」

元綱が叫ぶと、

「先を急ぎまするゆえ、乗り打ち御免！」

男は馬首を返し、多治比の方角へ向けて駆け去った。

元綱は手早く着替えを済ませると、馬を駆って郡山城へと出向い

た。

吉田の屋敷に在宅していた者はすでに広間に座っていた。自領に帰っていた重臣たちも三々五々登城し始める。

すべての宿老と重臣が大広間に揃うと、上座に座した志道広良が、沈痛な面持ちでまず口を開いた。

「尼子の大軍が石見へ侵攻し、おみち邑智郡に入ったとの報せがござった。先手の軍はすでに出羽までやって来ておるらしい」

その言葉は、集まった重臣たちを震撼させた。

「すでに出羽まで……！」

どの男の顔からも血の気が引いている。

出羽という地は石見と安芸の国境にあり、高橋領の西方、吉川氏の大朝から北東へ二里ほどのところにある。吉田からはわずか一日の距離である。

出羽に進駐した先鋒軍はおよそ四千。亀井秀綱、しんじつねよし宍道経慶、三沢ためただ為忠の三将が率いている。

尼子軍は、六月二十八日に月山富田城を出陣し、七月初旬に石見南東部のおみち邑智郡に電撃侵攻した。邑智郡は高橋氏の領地であり、高橋興光は尼子軍に抵抗せず、むしろ進んで馳迎ちげいしたらしい。尼子経久自身が率いる本軍は、高橋氏の軍勢を加えたことで一万五千を超え、邑智郡の山野に満ち満ちているという。

これが出雲のお屋形おやがたの恐るべきところだ……。

元綱は心中で呻いた。
今度の尼子軍の石見侵攻は、昨年しんねんの安芸攻略がその布石となっている。

尼子経久は、大内義興がこの春の雪解けと共に安芸へ出陣することを見越しており、その様子を遠く眺めながら、出陣の呼吸を計つ

ていたのであろう。大内軍が安芸を再奪取し、山口へ引きあげた直後を選んで石見に攻め込んだわけで、そのタイミングはまさに絶妙であった。

たとえば大内軍が安芸に滞陣している最中に尼子軍が石見へ侵攻したとすれば、大内義興は安芸から軍勢を北上させ、石見へ入って尼子軍と対陣したに違いない。安芸北部の豪族たちは大内軍に加勢せざるを得ない状況になったはずである。しかし、大内軍はすでに山口へ帰還しており、大内義興が改めて石見に出兵するとすれば、周防から長門を経由して北回りで進軍するしかない。

加えて経久の周到さは、石見で軍を進めるに際して、行軍が容易な日本海沿いを進まず、あえて山岳地帯を南進し、まず邑智郡へ深く侵攻したことであった。この戦略が実に抜け目ない。邑智郡は石見東部の南端であり、なかでも出羽は四方に道が通ずる要衝で、ここに大軍を侵出させれば石見西部にも安芸北部にも睨みが利くのである。高橋氏を押さえることと吉川氏と連携することが同時にでき、そこから西方にも北方にも、南方の安芸にも、自在に軍を動かすことが可能になる。

元綱はそこまで見抜き、尼子経久の政戦略の見事さに舌を巻いた。芸北の死命を制せられた。

思わざるを得ない。

大内義興は石見へ出陣するであろうから、それで手一杯のはずであり、安芸へ援軍を送ってくれるとは思えない。安芸北部の豪族たちは、大内の援軍が期待できない以上、尼子につくほか選択肢がないということになる。

大内義興が大軍を動員しにくい春の農繁期に軍を動かさざるを得なかったのに対して、尼子経久は田植えや稲刈りの時期を外して外征を起こしているという点も、指摘しておくべきであろう。

実際この時期、動員力や経済力などを純粹に比較すれば、大内氏は尼子氏を圧倒するだけの實力を持っているのだが、しかし、尼子経久は常に先手先手と動き、有利な状況を作り出すことによって兵

力的な劣勢を世間にまったく感じさせない。逆に大内義興は常に後手を引かされており、その力を發揮しにくい状況を強いられているために、両者の実力がよほど拮抗しているように見えてしまうのである。

「出雲のお屋形は、石見の福屋正兼まさかねを討つおつもりであるらしい。確かなところは判然とせぬが、すでに福屋は城を捨てて逃げたという風聞もある」

志道広良が言った。

福屋氏は昨年に尼子氏に臣従したが、相変わらず大内氏にも通じていたから、尼子経久の逆鱗に触れたのである。この際、攻め滅ぼすつもりになったらしい。

「出雲のお屋形から、参陣を求める使者があつたのか？」

元綱が問うと、兄の元就が首を振った。

「それはまだない。が、吉川の舅殿から、我らが尼子の本陣へ出向くつもりであれば、仲介の労を取ろうという申し出があつた」

高橋、吉川と同盟する毛利とすれば、両者が尼子軍に協力する姿勢を取っている以上、これに同調するのが自然で、この局面で尼子に敵対するというのはむしろ不自然でさえある。

「尼子の軍が出羽まで来ておるということは、高橋が尼子方についていたことは明白じゃ。我らも沈黙しておるわけにはゆきませぬぞ」

と声を上げたのは、中村元明もとあきという男である。元明は十五老臣の一人であり、老臣の中では首座の福原広俊に次ぐ二番の地位を与え

られている。

「この際、経久公からの参陣の求めを待っておるのではなく、こちらから進んで尼子の陣に馳せ参すべきと存ずる。そうしておけば、経久公の覚えも多少は良くなるでござろう」

もはや曖昧な態度は捨て、尼子方に身を投ずるべき、というのである。

これに坂広時が強硬に反対した。

「宮内殿（中村元明）は臆されたか。ご当家の主家が大内であることは、先だっても確認したばかりではないか。尼子にあえて敵対する必要はないが、経久公が攻めて参ると申すなら、大内の援軍がやって来るまでこの城に籠って戦うまでのこと。今さら無用の逡巡はやめなされ」

大内鼻肩の井上元兼、坂広秀がこれに加わり、尼子に寝返るべしと考える者たちとの間で激論となった。

元就は考え込まざるを得ない。

大内軍は石見へ出陣するであろうから、安芸へ援軍を出してくれとは思えない。安芸南部の国人一揆勢と鏡山城の大内駐屯軍は友軍ではあるが、吉田まで援軍に来て、尼子軍と戦ってくれると期待できるであろうか。

とても当てにはできまい。

というのが元就の感触である。

大内軍がすぐさま出陣し、石見に乗り込み、尼子軍とがっぷり四つに組み合うという状況になれば、尼子軍が安芸へ侵攻して来ないという可能性は残されている。しかし、万一尼子軍が吉田に攻め入って来れば、毛利家は孤立無援のまま滅びざるを得ない。

で、ある以上、

尼子に敵対はできぬ。

これは大前提であろう。

元就は「国人一揆の衆と進退を共にする」という態度を貫いてゆきたかつたのだが、芸北と芸南の豪族で尼子方と大内方に割れてしまった現在、すでに国人一揆の進退を一致させることは不可能であった。

高橋、吉川と共に尼子に通ずるか、あるいは危険を承知で大内方を貫くか。

軍勢を出して尼子軍に加勢するか、「中立」の姿勢をとって静観するか。

いずれどちらかを選らばねばならない。

外堀がどんどん埋められてゆく。

進退を曖昧にして首鼠両端を持してゆくのは、もはや限界であった。

議論はこの日はまとまらず、翌日も翌々日も続いた。

衆議が決するまでは、元就も結論を出せない。

いたずらに日が過ぎ、この間、尼子軍は西進に西進を重ねて福屋氏を追いたて、丸原の雲井城を破却し、市原城を抜き、本拠の本明城（江津市）を包囲して攻めていた。

毛利氏の沈黙は、尼子経久にとって不愉快であったろう。同盟している吉川氏と高橋氏が公然と尼子方になっているのに、それらより弱小の毛利氏が「我れ関せず」というのはどういうことであろう。

多治比の元就は、迷うておるのか。

決断すべきときに決断できぬ者は、愚者である。毛利家は幼君を戴き、衆議で家政を執っている。若い元就には衆議をねじ伏せるだけの政治力がないのか。それとも大内氏への忠節を貫く肚なのか。あるいは常に決断を先送りにする凡愚な男であるのか。

経久にはその判断が付きかねたが、いずれにしても、決断せぬ者を相手にしているのは時間の無駄である。

経久は毛利氏を無視し、江津からさらに西進して浜田の湊を次々

と占拠し、さらに美保関から水軍を回して日本海岸の周布^{すふ}氏の諸城を攻めた。

大内氏の大軍が石見に乗り込んで来たのは、この頃である。

吉見氏、三隅^{みすみ}氏、益田氏ら石見西部の豪族の軍勢を加えた大内軍は、三万に近い。これが浜田のあたりで尼子軍と激突した。

大内軍は尼子軍を数で上回ったが、尼子経久の戦さの巧さは大内義興に優る。経久は慎重に「負けない戦さ」を演じ、この対陣はほぼひと月に渡って続くことになる。

秋の農繁期には誰もが戦さをしたくない。秋口になると両者の間で和睦が成立し、両軍それぞれに兵を引きあげた。

が、勝敗はおのずと明らかであろう。

後手に回った大内義興は石見銀山を奪還するどころではなく、石見西部を守るのが精一杯であった。尼子経久は石見の東半国と安芸北部を奪い、しかも大内義興自らが率いる大軍と互角の対陣をしてみせたのである。

尼子氏の威勢は、高まるばかりであった。

第五章 安芸激震 肅清（二）

大永二年（1522）の夏、尼子経久は一万数千の大軍を率いて再び石見に侵攻した。

その戦略目標は石見の東半国を奪うことにあり、なかでも石見南東部に強大な勢力を持つ高橋氏を完全に取り込んでしまふところにあった。安芸へ攻め込むようつもりは最初からなかったのだが、しかし、安芸と石見の国境にある出羽^{いすは}まで軍を侵出させ、安芸北部に睨みを利かせたことは、今後への布石として重大な意味がある。芸北の豪族たちの動静を観察し、どの家が味方でどの家が敵かを見極めることで、安芸経略の道筋が見えてくるからである。

尼子軍が邑智郡^{おおち}に入ると、高橋興光^{おきみつ}は軍を率いて経久を馳迎した。興光は事前の調略よって尼子方につくことを確約しており、この参陣は既定路線であったが、国人一揆の盟主的な存在である高橋氏が大内氏から離れ、尼子方につくことを公然と表明したわけで、これはやはり重大な画期とすべきであろう。

経久は高橋興光を温顔で迎え、その来援を謝し、あえて高橋氏から人質を取ろうとはしなかった。これは臣従というより同盟者として遇された形であり、若い興光はこの処遇に感動し、経久への崇敬をさらに深くした。

義兄の吉川国経が来援してくれたことも、経久を喜ばせた。

「おお、伊豆殿が自らおいでくださるとは」

国経はすでに七十九歳であるから、尼子軍に協力するにしても、重臣に兵を授けて参陣させればよさそうなものであったが、自ら鎧をまとい、十五になる嫡孫を伴って、尼子軍の本陣まで老軀^{らく}を運んで来たのである。それが誠意の表現というものであり、そのことが解る経久は、この義兄を賓客^{ひんきゃく}のように礼遇した。その礼の篤さは国

経の孫の興経にも伝わり、少年の心を感動させた。

「次郎三郎（興経）はようやく弓矢が持てるようになったばかりで、戦さを知らぬ。経久殿、わしに代わってこの孺子に兵馬の駆け引きを仕込んでやってくだされ」

国経が言うと、経久は慈愛に満ちた笑みを少年に向けた。

「祖父君はあのように謙遜されたがな、次郎三郎殿。そなたが弓の名手という噂、風に乗って我が耳まで届いておるぞ。こうして間近で見るに、とても十五とは思えぬ見事な若武者ぶりじゃな。向後も祖父君の申されることをよう聞き、弛まず励まれよ。そうすれば、ゆくゆくは亡くなられた鬼吉川のごとく、天下に名の知られた武将になれよう」

英雄を見るような眼で経久を見上げた興経は、澁刺とした笑顔で応えた。

「ありがたきお言葉、曾祖父の名に恥じぬ漢になれますよう、誓って精進いたします」

元綱の姉の子であるこの少年は、後に「今鎮西」の異名を取る豪勇の武人に成長する。鎮西とは、鎮西八郎・源為朝のことを指す。平安末期に天下に名を轟かせた武将で、五人張りの強弓を軽々と引くほどの剛力を誇り、無双の弓の巧者と謳われた伝説の武人である。興経の弓はそれに喩えられるほどで、戦場で対峙した者を震え上がらせた。

興経は、元服に際して大内義興から偏諱を受け、四年前には鏡山城で直に義興と対面し、臣下の礼を取った過去があったが、そのときは満年齢でわずか十歳であったに過ぎない。父に遠方の城へと連

れてゆかれ、訳もわからぬまま「偉い人」に頭を下げたというだけであつたらう。しかし十五にもなれば、政治的な判断もある程度できるし、自分の意見も持てるようになる。興経はこのときから尼子経久への傾倒を強くした。

穴戸もとよし元源も尼子軍の本陣へやって来た。穴戸氏はもともと備後の山内氏やまのうちのと同盟しており、備後国衆と共に尼子方の姿勢を貫いていたから、これも規定路線であつた。

経久は、「人を大切にする」という思想をその経略の根本に据えている。苛烈な侵略もするし血生臭い粛清もやる男だが、進んで尼子に協力しようとしてくれる者に対しては胸襟を開き、他国の国衆で臣従しようとする者は同盟者のように礼遇し、信頼する家からは人質を取ろうとさえしない。

ただし、尼子に非協力的な家に対しては、話が別である。

「毛利は人を寄越さぬか……」

芸北の豪族で尼子に協力しようとしなないのは、もはや毛利氏のみであつた。同盟している吉川氏と高橋氏が当主自ら来援してくれているのに、それらより弱小の毛利氏は使者さえ送つて来ない。沈黙は「中立」という態度表明であり、「消極的敵対」とさえ言えた。

経久から見れば毛利氏などは取るに足らぬほどの小勢力であり、実際のところさほど気にも留めてなかつたのだが、昨年には尼子に臣下の礼を取りながら、毛利氏のこの煮え切らぬ態度は、経久に大きな負の印象を与えた。

老巧の吉川国経は、そんな義弟の感情の所在がわかる。たまらず助け船を出した。

「毛利は幼君を戴き、衆議で家政を執っておりますでな。なかなか衆議がまとまらぬのでござるつ」

この老人は愛娘が暮らす毛利家を滅亡の淵に突き落とすたくはない。娘婿の元就に参陣するよう勧め、自分が仲介しようとしてまで申し送っていたが、毛利家からは未だその返事がなく、気を揉んでいた。「ご承知の通り、毛利の幼君を後見しておる多治比殿は、我が娘婿でござる。婿殿はものの道理を弁えた男ゆえ、我らの敵に回るようなことはありませんまいよ」

「ふむ……」

経久は曖昧に頷いた。

智略縦横というべきこの男は、人を騙したり出し抜いたりすることに誰よりも長けている。そうした人間に共通する性癖として、自分が人から騙されたり出し抜かれたりすることを極度に嫌うし、そういう臭いをわずかでも嗅いでしまえば常に疑いの眼をもつて対象を見るようになる。進退に明快さのない人や家を好むはずがなく、

毛利には信を置けぬ。

という想いを強くしたことも当然の心の動きであった。

実際このとき元就は尼子氏に悪感情を持っていたわけではなく、むしろ恐怖感を抱きつつも長いものに巻かれようとする受け身の立場であったのだが、この経久の不信の気分が、尼子家と毛利家の関係を後々までこじれさせる遠因となり、そのこじれがやがて両家を不倶戴天の敵対関係にさせ、この四十四年後、経久の曾孫の義久の代で、尼子家は元就によって滅ぼされてしまうのだから、歴史の綾というのはまったく計りがたい。

芸石国境の石見側　出羽に進駐した尼子先鋒軍の主将は、亀井秀綱である。

経久は、自らの懐刀というべき秀綱に、ゆくゆくは芸備方面の軍団長を任せようと考えていたのである。安芸の豪族たちを調略するよう命じたり、備後への援軍派遣などの際に主将を務めさせるな

どして、この若者に着々と政戦の経験を積ませていた。すでに三十二歳になった秀綱は、生来の鋭敏さと才覚に加え、尼子家の重臣筆頭に相応しい貫禄を身につけ始めている。

主君から安芸の経略を任されているという自負があるだけに、秀綱は安芸の小豪族の動静にはよほど注意を払っていた。

「毛利は動かぬか」

多治比元就あたりが軍勢を率いて駆けつけて来るだろうと当然のように考えていただけに、秀綱はこの毛利氏の沈黙が不快であった。

「いつそ横田のあたりまで兵を進め、恫喝するか。」

と思わぬでもなかったが、主君の戦略目標が石見にあることをこの青年は弁えていたし、毛利氏が高橋氏や吉川氏の同盟者であることも知っている。毛利家を滅ぼすことを吉川国経などは望まぬであらう。

経久は、毛利氏が態度を決するまで無為に日を送るようつもりはない。高橋氏と吉川氏を味方につけた時点で南方への備えは万全であり、安芸のことはひとまず忘れることにした。

「先駆けし、まず丸原の雲井城を攻めよ」

その命を受けた亀井秀綱は、佐将の宍道経慶しんじつねよし、三沢為忠ためただと共に出羽を出陣し、西進を開始した。が、毛利氏をそのまま放置しておくのも何やら腹立たしい。独自の判断で吉田に使者を送り、毛利軍の参陣を促すことにした。

そのころ、毛利家では連日評定が続けられていたのだが、坂広時らが頑強に大内方を貫くことを主張するために、依然として衆議がまとまっていなかった。尼子軍が西進を始め、どうやら安芸へは侵入して来ないということが判ると、大内派の者たちがさらに勢いづくき、「このまま中立の態度を続けていても大丈夫ではないか」とい

う雰囲気がむしろ支配的になりつつあった。

が、元就個人は、尼子氏に対しても好誼を保っておきたいという気分が強い。尼子経久から憎まれれば、どのような目に遭わされぬとも限らないのである。

出雲のお屋形へも礼だけは尽くしておこう。

吉川国経の娘婿である元就は、妻を通じて尼子経久とも縁戚である。交誼を厚くしておくだけでも無意味ではないであろう。元就は独自の判断で、「幸松丸の名代」としてではなく、「元就の名代」として使者を尼子軍の本陣へやり、陣中見舞いをさせることにした。この使者には中村元明もとあきを選んだ。元明は尼子方につくことを強く主張したくらいだから、尼子氏から悪感情を持たれてはいないであろうし、「元就個人の使者」に十五老臣でも二番目の席次を持つ重臣を選んだというところに、元就の深微しんびな政治判断がある。

ところで、丸原に入った尼子軍は雲井城を囲んだが、福屋氏はすでに城を捨てて退去しており、実際には戦闘は行われなかった。尼子軍は雲井城に火を掛けて破却し、逃げた福屋氏を追って市原城へ迫り、これを一日で陥落させ、さらに西に進んで福屋氏の本拠である本明城ほんみやうを包囲した。福屋氏がこれまで抵抗らしい抵抗を示さなかったため、尼子軍は元就が予想もなかった速度で進むことになり、わずか二日間で実に三十キロ以上を移動した。

この尼子軍の足の速さが、小さな不幸を生んだ。吉田へ向かった亀井秀綱の使者と、尼子軍に追いつこうとする中村元明が、行き違うということが起きたのである。

使者が郡山城に到着し、亀井秀綱の言葉として毛利家の参陣を要求したとき、中村元明はまだ尼子軍に追いついてはおらず、当然ながらその首尾の復命も行われていなかった。元就はその状況を正直に使者に伝え、中村元明が復命するのを待ってもらいたいと返答した。そうするほかなかったと言っべきであろう。

これが、亀井秀綱と元就にとって、最初のボタンの掛け違いであった。

ここで中村元明という人物についても触れておかねばならない。

元就などから見ると、古沼に棲む鯨か何かのように、よく腹の解らぬ顔つきをしている。学問はないがそれなりに才覚はあり、戦場では勇敢で、小部隊戦闘の指揮などをさせるとなかなか達者である。年齢ははつきりしないが、おそらくこのとき五十の前後であつたろう。宮内少輔くくないのしょうを私称している。

この男は毛利本家の一門でもなければ、先祖代々毛利家に仕えていた譜代の出身でもない。毛利家臣となつてから二十数年しか経つておらず、外様の老臣の中でもっとも新参者なのだが、にも関わらず、十五老臣での序列は、福原広俊に次ぐ二番の席次を与えられていた。

これには無論、理由がある。

元明の中村氏は、もともと山県郡に根を張る小領主で、安芸守護の武田氏に仕えていた。この物語の現在から二十数年前、元綱の父である毛利弘元は、敵対している武田氏の勢威を削ぐために、中村氏を調略して毛利家に寝返らせようとした。

当時の中村氏の当主は中村繁勝しげかつという男である。繁勝の「繁」の字は武田元繁から授かった偏諱へんぎであり、この男は武田家に忠節を誓つていて、弘元からの調略を歯牙にも掛けず峻拒した。

そこで弘元は、繁勝の弟である元明に眼をつけた。

元明は武勇で聞こえた男で、欲が深く我が強く、兄と不仲であるという噂もあつたから、弘元は御しやすいと踏んだのであろう。

「刑部少輔殿せいぶしょうぶのしゆう（武田元繁）は、大内のお屋形さまと争つておるが、これは大いなる間違いよ。大内の力は強大であり、それに敵対しておれば、武田は遠からず滅ぶであろう。中村は武田家の譜代の臣でもないのに、その武田に殉じて名門の血を絶やすのは馬鹿げている。私はそう思うゆえ、道理を尽くしてあなたの兄を説いたのだが、か

の人は頑迷で、どうしても私の申すことをわかつとせぬ」

元明を密かに郡山城に招き、酒を勧めつつ弘元は語った。

「元明殿、いつそ繁勝殿を排し、あなたが中村家を継ぐことにすればどうか。それが中村の家名をあげ、先祖の祭祀を絶やさぬ道ではないか。あなたが決意するなら、私は毛利家を挙げてあなたをお援けしよう」

兄の繁勝を殺すか追放するかして、中村家を乗っ取れ、と指嚇しつぱくしたのである。

「毛利に寝返れと申されるわけござるな」

若き日の中村元明は、ギラつく欲を隠さなかった。

「毛利のご家中で、首座の席に座らせて頂けるならば、兄を討ち、武田と断ち、毛利家にお仕えしよう」

毛利家で第一の重臣にせよ、と逆に条件を出したのである。

弘元はさすがに不快であったが、それを顔には出さず、穏やかに微笑した。

「我が家では、家中の首座には福原が座る。毛利の一門のなかで福原は別格の家であり、このことは動かし難い。だが、首座に次ぐ次席でよければ、用意しよう」

当時の毛利家臣団の序列では、首座が福原広俊、次席が譜代筆頭の渡辺、三番が執権の坂広時である。弘元は渡辺勝すくもの父に頭を下げ、次席の座を空けさせた。

「一番か……」

元明はそれでもやや不満げであったが、やがて首肯した。

「欲が過ぎれば身を滅ぼすか。承知いたした。次席でよろしゅうござる」

元明は家中でクーデターを起こし、兄を殺し、中村家の家督を奪った。同時に武田氏から離反し、毛利に通じたのだが、これに激怒した武田元繁は、中村氏を攻めて城を陥落させ、小領主としての中村氏を滅ぼした。

城と領地を失った中村元明は、家臣と家族を連れて毛利領に亡命し、弘元に約束の履行と新たな領地を要求した。中村氏の城と兵力を手に入れたつもりの弘元にとっては思惑違いであったろう。しかし、約束は約束だから、弘元はこの男に老臣の座と次席の序列を与え、嫡男・興元の側近の一人に加えたのである。

以来、中村元明は毛利興元の側近として働き、毛利軍が上洛したときにもこれにつき従い、主に軍事面で若い興元をよく支えた。が、経歴が経歴であるだけに、譜代の家臣たちからも外様の重臣たちからも、決して好かれていない。なかでも傲岸で我的強い井上元兼などは、新参であるにも関わらず自分より高い序列を得た元明のことを、毒虫か何かのように嫌っていた。

人柄が誠実な興元に十余年仕えるうちに、元明も若い頃の欲気がやや抜けた。もともと保身感覚には鋭い男であったから、他の老臣たちから憎まれぬように出過ぎた言動を慎み、諸事控え目に振舞っているうちに、不惑を超えたあたりからは、老臣の中でもあまり目立たぬ存在になっていた。

中村元明とは、そういう男である。

さて。

元明は元就の内命を受け、わずかな供だけを連れて石見に入り、尼子軍を追う形で北西に走り、本明城を囲む尼子軍の本陣に赴いた。

尼子の軍とは、これほどのものか。

元明は武人としては無能ではない。尼子軍の二万に近い軍容を眺め、その布陣の重厚さ、士卒の兵気の鋭さ、土気の高さなどを実感し、背筋に冷たいものが走った。もしこの軍勢が吉田に攻め入って来れば、郡山城のような小城は十日と保たずに攻め潰されるであろう。

もともと元明は、西国に尼子経久を超える大将はいないと思っ
ている。尼子方につくことを主張しているのも、彼らしい保身感覚と
その軍事感覚で、大内軍よりも尼子軍の方が強いと感じるからであ
り、紆余曲折はあるにせよ、いずれ安芸は尼子経久の手に落ちるだ
ろうと考えていたからであった。実際に城攻めをする尼子軍の様子
を見ることで、その想いは確信に変わった。

「毛利家家臣、中村元明と申す。吉田郡山城主・毛利幸松丸さまを
後見する、多治比元就殿の名代として罷り越しました。出雲のお屋
形さままでお取り次ぎあります」

尼子経久への拜謁を願ったのだが、実際に元明を迎えたのは、
亀井秀綱の冷眼であった。

「すでに戦さは始まっておる。お屋形さまは、兵を率いぬ者にはお
会いにならぬ」

軍勢も率いず鎧もつけず、お前はいったい何をしに来たのか、と、
その眼が責めている。

「遅参の儀は、重ね重ねお詫び致します。当家の主人は未だ幼く、
家政は重臣どもの衆議によって執り行っておりますゆえ、物事を即

断即決するというわけにも参りませす 「

「はっ」

秀綱は露骨な侮りを込めて笑った。

「毛利の方々は、吉田の城下に敵軍が参っても、戦さをするかせぬか、長々と話し合いをなさるおつもりか。のんびりとしたご家風で結構でござるな」

この青年は才人であるだけに無能者が大嫌いで、頭からそれを軽蔑するようなところがある。決断すべきときに決断できぬ者は愚者であり、尼子軍に馳せ参じようとせぬ毛利家の連中は、秀綱からすれば無能者の集団としか見えない。

なぜ多治比元就が自ら出向いて来ぬ。

というところにも秀綱の腹立たしさがある。幼君の幸松丸が戦さに出られぬ以上、その後見役たる元就が会釈に来るのが当然の礼儀ではないか。

「毛利の方々には、当家に合力してくださる気がおありにならぬようじゃ」

とまで言われて、元明はうつろたえた。

「いやいや、そうではござらぬ。我らは昨年より、出雲のお屋形さまを主君と仰いでおります。家中の者どもはそのつもりで戦支度をしており、出陣のお下知を待つておった次第で」

「毛利の家中には、当家に従つを潔しとせぬ者もおるやに聞いておるがな」

「それは」

元明は口籠り、とっさに利害を計算した。

亀井秀綱は、若くして尼子家重臣筆頭の地位にあり、尼子経久の寵がことのほか厚い人物と聞いている。元明は、むしろこの青年に自分を売り込んでおくべきではないかと思った。毛利家は遠からず尼子の軍門に降るであろう。これまで大内派だった老臣たちの政治力や発言力は極度に低下する。家中の権力構造が変わるわけで、そこに新たな自分の席を用意しておくべきではないか。毛利家中では自分こそが尼子派の代表的存在であると秀綱に認識しておいてもらうことは、先々を考えれば悪い手ではない。

なに、事実を話すまでのことよ。

いつそ秀綱に毛利家中の内情を正直にさらしてしまう方が、自分への心証が良くなるであろう。別に嘘をつくわけでもないから、罪悪感もなかった。

「左様、日下津城の隠居殿が、しきりと家中の者たちを説き、毛利を大内方に翻意させようと画策しておるようでござるが」

「日下津城の隠居というのは？」

「坂広時殿のことでござる」

秀綱は、坂広時が現役で活躍した時代を知らず、その人物についてもほとんど知識がなかった。が、それでも坂氏が毛利家中でどういう位置の族であるかということくらいは承知している。

「坂と言えば、毛利では代々執権を務める名門と聞く。その影響は大きいのでしょうか」

「よくご存知で。毛利家においては、坂と福原は別格の家でございます。さりながら、坂の隠居殿に加担する者は決して多くはなく、また幸松丸さまを後見する多治比殿は、ご内室を通じて出雲のお屋形さまともご縁戚でございます。拙者を始め、家中の多くの者は、ご当家に心を寄せております」

「ふむ……」

秀綱は意地の悪い笑顔を見せた。

「それで、貴殿は臣従の証人として、遣わされたというわけでございますか」

お前が人質になるのか、と言われて、元明は大いに狼狽した。

冗談ではない。

人質などにされたら、その後の出世どころではなく、風向きの次第ではいつ殺されぬとも限らない。しかし、もはや「手ぶらで陣中見舞いに来た」と言えるような生やさしい雰囲気ではなく、元明にすれば逃げを打つほかどうしようもない。

「拙者がここに残りますと、能登殿のお話を主家に伝える者がおらず、また多治比殿に復命することも叶いませぬ。それに拙者は毛利家では新参の身、人質としての価値も軽うござる。証人のことは、いずれ近いうちに、しかるべき者を遣わすことになりましょう」

臣従の証しとして人質を出すことを独断で確約し、元明は逃げるように吉田へ帰った。

郡山城に帰り着いた中村元明が首尾の報告を行つと、重臣たちは大激論を始めた。

「人質を出してまで尼子の軍門に降る必要があるうか！」

と叫んだのは、坂広時である。

「昨夜帰り着いた我が手の者の話では、大内のお屋形は五万の大軍を催し、出陣は間近ということでござつた。今ごろはすでに山口を出ておるかもしれん。いずれにしても半月の内には石見に入り、尼子と戦さを始めなさるであろう」

「五万……！」

この数字はもちろん誇張だが、大内義興は大内軍の武威を誇大に宣伝するために、内外にそのように呼号していた。

「もはや尼子に安芸を攻めるほどの余裕があるはずはなく、ここで我らが戦わずして降るなどは、何の意味もない。我らが今なすべきことは、ただちに塀を高くし、堀を深くし、城の防備を固めることだ」

「しかし、すでに高橋、吉川が尼子方についておる以上、彼らと同盟する当家のみが大内方であり続けることは、危険に過ぎよう。こはひとまず尼子に人質を遣わしておくが、穩便でござる」

独断で尼子に臣従することを確約してしまった手前、中村元明も必死である。

吉川氏や高橋氏と共同歩調を取ってゆくべきだとする立場から、元明に賛同する者も少なくなかつた。

「それにしても、大内のお屋形と尼子のお屋形が、ついに直接に戦いなさるか……」

福原広俊が呟くと、重臣たちもそれぞれに複雑な表情を浮かべた。大内義興と尼子経久。

西日本きつての両巨頭が、それぞれ主力を率いて激突するという意味では、これが最初の戦いなのである。

どちらが勝つのか。

この一戦が、あるいは西国の覇権を決める戦いになるかもしれない。

戦争にはそれまでの政治状況を一変させるだけの力がある。たった一度の合戦で、たとえば尼子経久が討ち死にしてしまうようなことさえ、可能性としては皆無ではないのである。その逆もまたしかりであり、毛利家の重臣たちは、ともかくもこの合戦の行方を見守りたいという気分を濃厚にした。裏返せば、この戦いの勝敗が決まるまでは、旗幟を明らかにしたくない、という日和見ひよりみの気分である。たとえばこの時点であえて尼子に人質を送り、大内氏から離れることを鮮明にしたとすれば、大内軍が戦さで大勝し、石見の覇権を奪い返すような事態になってしまったとき、言い訳ができない。ともかくも勝敗の帰趨を見極め、その上で左右を決めれば良いではないか。

大内寄りの重臣も尼子寄りの者たちも、結局はそのあたりで意見を落ちつけた。元就は衆議の決定を受け、尼子に人質を送ることは思い留まり、中立の姿勢のまま石見の情報収集に努めた。

このあたりが、衆議で家政を執ることの難しさであろう。

毛利家にとつての不幸は、尼子経久が大内義興に負けなかったことであつた。

二万余の尼子軍は三万近い大内軍と互角の対陣をし、一月ほど後には、尼子経久と大内義興の間で和睦が成立したのである。

大内・尼子の両軍が陣を払い、石見から兵を引きあげることになった。

経久は、浜田からの帰路に日本海沿いの道を取らず、来た道に戻る形で再び軍を南下させ、邑智郡へ兵を入れた。吉田からわずか一日の距離に、二万の尼子軍が迫って来たわけで、そのことを知った毛利家の重臣たちは蒼白となった。

経久は、行き掛けの駄賃に毛利氏を恫喝し、臣従を確実にさせておくつもりでいる。

もし毛利があくまでわしに従わぬというのであれば……。

そのときは吉田に軍勢を雪崩れ込ませ、郡山城を一撃のもとに攻め潰してもいい。大内氏との和睦は石見での話であり、安芸で毛利氏を攻めてはならぬというような和睦の条項はないから、法理論上も違約には当たらない。たとえ毛利が大内義興に援軍を頼んだとしても、義興はまだ帰路の途中であり、周防に帰国さえしていないから、急場の援軍などはとても間に合わぬであろう。もはや毛利氏の生殺与奪の権を握ったも同然であった。

「多治比の元就というのも、さほどの漢ではなかつたな……」

あの武田元繁を一戦して屠^{ほぶ}った元就の武略を、経久は甘く見てはいない。毛利が何か企んでおるかもしれぬと多少は警戒する気分を保持していただけに、やや拍子抜けすると同時に、ある種の同情を禁じ得ぬような、複雑な気分になった。

元就に毛利家中を主導するだけの政治力があり、乱世を泳ぎ渡るための知恵と図太い演技力が備わっていれば、いくらでも巧く立ち回ることができたはずなのである。たとえば尼子軍が邑智郡に入つた時、高橋興光、吉川国経と共に、元就が軍を率いて現れておれば、毛利・高橋・吉川が対等の同盟関係を持つ豪族であるだけに、経久としても毛利氏だけを格下扱いするわけにはゆかず、吉川国経などと同等の処遇をせざるを得なかつた。経久は元就に疑いの眼を向け

るどころか、縁戚の誼みで信頼を深くし、好意さえ持っていたかもしれない。

しかし毛利氏は、尼子と大内を両天秤に掛け、最後の最後まで日和見を決め込み、経久に対して何の誠意も示そうとはしなかった。

毛利氏は、高橋・吉川と進退を共にしていればこそそれなりの勢力だが、毛利家単独では哀れなほどの小勢力に過ぎない。経久は高橋氏や吉川氏を同盟者として遇したが、もはや毛利氏をそれと同様に扱うつもりはなかったし、その必要もまったく感じなかった。

自らの陣所の奥に亀井秀綱を呼びつけた経久は、

「毛利の扱いは、お前に任せよう」

と、面白くもなさそうな顔で言った。

経久は、芸備方面では秀綱を軍団長に据えるつもりでいる。軍の編成上、安芸の国衆は秀綱の組下に入ることになり、いずれ秀綱は豪族たちを手足の如く使わねばならぬ立場になるわけで、その処分くらいは任せてやっても良いであろう。この明敏な青年を次代の尼子家の柱石へと育てるべく、経久は事あるごとに秀綱に課題を与え、刀匠が鋼を打つようにして鍛えている。

「恩を売って赦してやるも良く、不埒と思えば攻め滅ぼしても良い。お前の存分にやってみよ。ただし、長々と時間を掛けてはならぬ。

稲穂の取り入れまでには兵たちを国に帰してやらねばならぬからな」

期限はせいせい半月といったところであろう。

「承りましてござりまする」

秀綱はごく慇懃に、崇敬する主君に頭を下げた。

毛利家は、絶体絶命の窮地に立たされた。

首鼠両端しゅそりょうたんを持ち、強者に対して曖昧な態度を取ることは、よほど慎重に相手の感情を繕い続けなければ、結局は自分の首を絞めることになるのである。己の見通しの甘さと、衆議で家の舵取りをしてゆくことの難しさを、元就は痛感した。

毛利が尼子に敵対せぬということ、何とか納得してもらわねば……。

こうなってしまった以上、相手の脊くを舐めてでも戦争を回避せねばならない。

「私は幸松丸さまの名代として尼子の本陣へ赴く。お前にも同行してほしい」

と元就が言ったとき、お久は自分が果たすべき役割をすぐさま領解うけした。

「人質でございますね」

元就には男子の子がなく、娘はすでに高橋氏に取られている。人質を出すとすれば我が妻しかない。

お久はわずかに目を潤ませたが、武門に生まれ育った女の頸つよさで、凛として夫の言葉に従った。その健気さを見た元就は、自分が妻をどれほど愛しているかを強く実感した。

「出雲のお屋形は、お前の叔父御であられる。決して粗略には扱われぬであろう。何も心配することはない」

気休めにもならぬ言葉を吐きながら、

お久を失ってたまるか。

という想いが、元就の胸を突きあげるように打った。

元就が妻を伴って吉川軍の本陣へ赴くと、義父の吉川国経が堅い表情で出迎えてくれた。

久しぶりに愛娘の顔を眺めてさえ、国経は心からの笑みを浮かべることができない。

「舅殿に、出雲のお屋形さまへの取りなしをお願い致したく」

頭を下げる娘婿を見つめ、

来るのが遅い！

と国経は心中で罵った。

毛利家は最後の最後まで日和見を続けた。その態度を尼子経久が怒るのも当然で、もはや国経としても取り繕いようがない。

「やるだけはやってみよう。じゃが、経久殿は、会ってくれぬやもしれぬぞ」

しばらく吉川軍の本陣で待たされた元就は、戻ってきた国経に同行してもらい、尼子軍が本陣にしている寺院へと赴いた。

八畳ほどの暗い一室に通され、長く待たされた。

陣中とは思えぬ静寂のなか、時おり名も知らぬ鳥の鳴き声が幽かに聞こえてくる。

やがて背後の障子が開き、端正な顔つきの若い男が下僚と共に部屋に入ってきた。

亀井秀綱である。

上座に座った秀綱は、平伏する元就に向けておもむろに口を開いた。

「尼子家老臣、亀井能登守と申す。吉川の伊豆殿より、何やら毛利からお話があると伺ったが……」

「吉田の郡山城主・毛利幸松丸の叔父、多治比の元就でござる」

元就は一度顔を上げ、再び土下座のように平伏した。

「このたびは、当家に対していきなりのご征伐と聞き、驚き入っております。当家がお屋形さまに対し、いかなる失態や不敬がありましたらうか。我らはかつてお屋形さまに楯突いたことはなく、尼子家に不為^{ふため}を働いたこともございませぬ」

元就は、毛利が尼子家に対していかなる邪心も抱いていないことを切々と訴えた。

今さら何を申しておるのか。

秀綱は元就に冷眼を向けた。もはや事態は言葉で取り繕うことができるような段階を過ぎている。

「毛利は、盟約の証人を出すと申しておきながら、今日までついに人を寄越すこともなく、我らに何の会釈もござらなんだ。お屋形さまは、毛利の不埒な態度にご立腹さなれ、すでに当家の敵と見做しておられる。降^{こう}を乞いに来たというならともかく、今さら弁明で事を済まそうというのは、少々お考えが甘すぎるのではないかな」

「人質の件は、当家の幸松丸さまが未だ幼く、子もおらず、適当な者を選ぶことに少々日が掛かってしまったまでのことにて、他意はございませぬ。吉川の陣屋まで我が妻を連れて参っております。私には子がありませんゆえ、どうか妻を陣中にお留めくださいますよう」

「せつかくのお覚悟だが、それはご無用である」

元就は幸松丸の後見役ではあるが、毛利本家を出て一家を立てており、その人質をもつて毛利家の誠意と看做すことはできない。まして人質を女で済ませようというなら、幸松丸の実母でも出してもらわねば、話にならない。

ものの頼み方さえ解つておらぬ。

秀綱の眉宇に苛立たしさが漂った。

「多治比殿のご内室が、お屋形さまの姪御に当たられることは、私も承知している。貴殿を疑うておるわけではないのだ。さりながら

」

秀綱の要求は、元就が想像したより遥かに苛烈であった。

「毛利のご家中で当家に従おうとせぬ者どもの首魁が、日下津城にある。まずはその者の首を持参し、当家に二心ふたごころなきことを示し、お屋形さまに誠心誠意お詫びなされよ。そうすれば、お屋形さまのお気も変わられるやもしれぬ」

まず大前提として坂広時を肅清せよ。それをしないなら臣従することさえ認めない、と、大上段から斬つて捨てたのである。

「それは……」

「多治比殿がそれを行うことが出来ぬなら、私が代わって日下津城を攻め落としてやってもよい」

と秀綱は親切ごかした。

その場合、日下津城は尼子に奪われ、坂氏の領地である向原一帯は尼子の城代が支配することになる。奪った城と領地を無償で返還してくれるなら親切とも言えようが、そんな甘さを見せるはずが

ない。結果として毛利領が大きく削られるわけで、元就の立場でそんな提案が呑めるわけがなかった。

「・・・・・・・・」

元就は苦しげに黙考した。

それを見下ろす秀綱の眼には、強者がごく自然に持つ酷薄さがある。その口元にやや加虐的な笑みが浮いた。

「いずれ、是非には申さぬ。当家に従わず、大内を^{たの}恃みとされるなら、それもよろしかろう。急ぎ郡山城に帰られて、防戦の支度をなされよ」

要求を呑まぬなら、あとは戦さだ。

これが最後通牒だと秀綱は言っているのである。

元就は全身に冷汗が湧き、尻の穴から魂が抜け落ちるような虚脱感を覚えた。

どうにもならぬ。

戦って勝ち目がないことは火を見るよりも明らかであった。

大内義興に援軍を頼んだとしても、その要請で義興が動いてくれるという保証はまったくない。そもそも大内軍は今ごろは長門へ向けて帰路を行軍中であろう。たとえ義興が援軍を出す気になつてくれたとしても、周防へ帰国した大内軍が安芸北部までやつて来るには、どんなに早くとも半月以上は掛かる。武田氏がその進路を妨害するようなら、二月待っても到着しないかもしれない。いずれにしても、その前に郡山城が陥落するのは目に見えている。

つまり、ここで戦さを回避できなければ、毛利家は滅ぶ。

天穂日命を祖とする江家の末裔、毛利時親が安芸に^{ときちか}入部してから数えて十一代・二百年続いた安芸・毛利氏の血統が、幸松丸の代で絶えてしまうのである。幼い幸松丸には何の咎もなく、その責任は

すべて後見役たる自分に帰されるべきであろう。

泉下の兄上に顔向けできぬ……。

元就は、己の無能と無力さを、腹の底から呪った。

いや、問題はそれだけでは済まない。

武門の屋根が墜ちれば、その家に暮らしている者は圧死せざるを得ないのである。武士は言うに及ばず、毛利領に生きる三千人以上の無辜の民草を兵火に巻き込むことになり、吉田の城下は焼かれ、人々は生命と財産を残らず奪われ、わずかに逃げ延びた者たちも生活の基盤を根こそぎ破壊され、その後は貧苦のどん底であえぐことになる。

絶対に、戦さにはできない。

である以上、坂広時に腹を切らせてその首を差し出し、意地も誇りも何もかも投げ捨てて尼子経久の憐みにすがるしかない。

無残なほどに惨めだが、元就にはそれ以外に選べる選択肢がなかった。

第五章 安芸激震 肅清（三）

時日がやや前後する。

多治比元就が毛利家を救解すべく尼子軍の本陣へと赴いた、その二日前のことである。

冴えた月から蒼い光が煌々と降り注ぐ中秋（陰曆の八月）の初更。

相合川の川べりに、ひときわ大きな石に腰を下ろし、流れに釣り糸を垂れる老人の姿があつた。

白々と浮かび上がる河原の周囲には葦やスキが生い茂り、その穂先を静かに揺らして爽やかな川風が通り過ぎてゆく。肌心地よい夜気は、絶え間なく続くせせらぎと騒がしい虫の音で満ちていた。老人は思い出したように時おり竿を上げ、鈍く輝く流れに再び針を放り込むという作業をゆつたりと繰り返している。

四半刻もそうしていただろうか。

カサカサと草を掻き分ける乾いた音がかすかに聞こえ、周囲から虫の音が絶えた。やがて老人の背後の葦原が割れ、闇のような影が湧いた。

「市兵衛爺」

と声を掛けたのは、旅商人風の身なりをした青年である。蓮次という名の鉢屋者であつた。

「待たせたかい」

老人は振り向きもせず応えた。

「秋の宵は良いものじゃなあ。こうして月を眺めて、川のせせらぎ

を聞いておるだけで、何やら性根が洗われてゆくような気がせんか」

なに寝とぼけた事言つてやがる、と毒づいて、蓮次は憫笑した。

「あんたみたいな爺とお月さん眺めたところで、色気も何もあつたもんじゃねえや」

「違いない」

市兵衛も背で笑つた。

「で、話というのは？」

「ああ、あんたらにとつちや一大事の報せのはずだ」

蓮次はたつぷりと間を取り、勿体をつけて次の言葉を吐いた。

「尼子の大軍が近々吉田に攻めて来るぜ」

「なんと……」

「今度はずいぶん長いこと一処ひとところに尻を落ちつけてたが、茶番もそろそろ仕舞いだなあ」

長い沈黙があつた。

痺れを切らした蓮次が言葉を重ねた。

「元綱なんぞにくつついてると巻き添え食つて死ぬつて言つてんだよ。今のうちに逃げたがいい」

老人はひとつ大きいため息をついた。

「おゆきさまがどういうご気性か、お前さんも知らんわけじゃなからう。そうと知ればなおさら、四朗さまのお傍を離れようとはなさるまい」

「おいおい爺さん、こりや意地張ってるような時じゃねえ。あんたもわかってるだろ」

蓮次の語気が強くなった。

「高橋も吉川も尼子についた。大内の援軍も来やしねえ。毛利にや百にひとつも勝ち目はねえんだよ。もう尼子の軍は邑智郡おおちまで来てる。明日には安芸に入って、ひよっとすると横田の辺りまで出て来るかもしれねえ」

「.....」

「戦さが始まりや毛利は滅亡だ。たぶん半月と保たねえぞ」

その言葉に市兵衛は首をひねった。

「いや、それはそうとも言い切れまいよ。毛利が滅ぶかどうかはお屋形さまのお肚ひとつである。臣従させれば良しとお考えになつておられるなら、わしらが死なずに済むということもあるかもしれぬ」

この老人は見た目こそもっさりとして冴えないが、血のめぐりは悪くない。

お屋形さまは、遺恨で毛利を攻めるわけではあるまい。

長く生き、多くの武家の興亡を世間の裏側から眺めてきた市兵衛である。その知恵には老人らしい奥行きがあつた。

毛利家の主君は幼少の幸松丸で、この幼児に政治力は皆無であるから、あえて殺すまでもない。毛利家は重臣たちの衆議によって家政を運営しているわけで、つまり家中の大内派の重臣を排除するだけで簡単に尼子与党になり得るのである。戦争というものは生き物だから、実際に戦さになつてしまえば、その先どう転がつてゆくかは誰にも解らないという面は確かにあるが、毛利があくまで尼子氏の支配を拒絶し、最期の最期まで徹底抗戦するというような愚かな選択をしない限り、臣従して生き延びるといふ道はおそらく残される。

それが老人の観測であつた。

「毛利を滅ぼしてみたところで、さして得にもならぬしの」

毛利氏は二百年にわたつて吉田を治めてきた歴とした地頭であり、悪政を行つていたわけでもないから、吉田に暮らす領民からは非常に慕われている。この地で四年も暮らした市兵衛にはそのことが実感として解る。その毛利を滅亡に追い込み、別の領主を据えたとなれば、領民たちは尼子氏に骨髓の恨みを抱き、長く新領主に親しまぬであろう。その地に暮らす人の心を宥めることができなければ、占領統治はうまくゆかず、本当の意味で領地を支配したことはないのではないのである。

また、毛利は吉川・高橋両氏との紐帯が非常に強い。両氏は毛利に同情的であろうし、これを滅ぼすことには消極的でもあろう。さらに毛利は国人一揆の中心的存在であり、大内方に寝返つた芸南の豪族たちとも繋がりが深い。毛利はこれまで尼子氏に敵対したことさえないのに、尼子経久が毛利の一族を殺し尽くすような血生臭い処分を行えば、芸南の豪族たちは経久に恐怖と嫌悪を抱き、これに親昵しんじつする気をなくし切るであろう。

本拠で籠城するであろう毛利軍を攻め滅ぼすには手間も掛かるし、攻める側の尼子軍にも多くの無駄な血が流れることになる。経久はゆくゆく安芸一國を併呑するつもりであるに違いないので、毛利を族滅することの功罪を両面から計量して、より恨みの少ない落とし所で妥協するのではないか。外交で事を済ます方がよほど経済的だし、現実的だ、と市兵衛は思う。

が、若い蓮次の思考には老人のような迂路がない。先年滅ぼされた石見の都治氏のように、毛利も滅亡するものと頭から思い込んでいる。

「あんたが説得できねえってんなら、俺があの女を盗み出してやるよ。男どもはこれから戦さ支度で大わらわになる。相合の屋敷も手薄になって必ず隙ができるだろ。あんたが手引きしてくれりゃあ、何とかやれるかもしれねえ」

蓮次が相合まで駆けつけて来た理由がこれである。

ゆきとはまんざら知らぬ仲でもない。毛利が滅ぼうが元綱が死ぬが知ったことではないが、あの女だけはその戦禍から救い出してやるつもりであった。ゆきの身柄が郡山城などに移されてしまえば、蓮次あたりが近づくこともできなくなる。やるなら、ゆきが相合の屋敷にいる間しかない。

また長い沈黙があった。やがて老人はひとつため息をつき、

「そのようなことをしたところで、おゆきさまは喜ぶまい」

と乾いた声で言った。

「喜ぶとか喜ばねえとかの話じゃねえだろが。悠長に構えてる場合かよ。あんたもおゆきも、あの幸まゆって小娘も、みんな殺されちまうんだぞ」

「それがおゆきさまの選ばれる道ならば、致し方あるまいよ。幼いお幸坊には哀れとも思うが、わしのような年寄りは今さら浮世に未練もないでな。おゆきさまに従うだけのことじゃ」

蓮次の眉間にみるみる怒気が湧いた。

人が親切で言っただけでやっつてのによ。

それだけに余計に腹が立ち、頭をガリガリと掻きまわった。

「お前さんが、らしくもない仏心でお節介を焼いてくれとるのは、ようわかった。おゆきさまに伝えるだけは伝えておくが。おそらくは無駄であろうよ」

「だらくそが……！」

馬鹿野郎 と吐き捨てた蓮次は、

「ともかく忠告はしたぜ。あとは手前てまえらの勝手にしろ」

と言いつつ、再び葦原の中へと消えた。

尼子の大軍が石見から安芸に侵入し、その先鋒軍が隣郷の横田まで迫っている。

その噂は、瞬く間に吉田の城下まで伝わった。

「出雲のお屋形さまが毛利をご征伐なさるおつもりなのじゃ」

「高橋や吉川も尼子についたらしい」

「穴戸や武田と戦うのとはわけが違つぞ」

「戦さが始まれば町屋は焼き払われよう。家財をまとめて早う逃げよ」

武士はもちろん、戦える年齢の男たちは武具や食糧を抱えて続々と郡山城に入城し、防戦の支度に忙殺された。女子供や老人、商家の者などは、保護を求めて郡山城に逃げ込む者はむしろ稀で、ある者は家財道具をまとめて山野へと隠れ、ある者は毛利領の南方へと避難し、あるいは寺社の領地に逃げ込むなどして、吉田の城下からまったく人影が消えた。

相合の屋敷にもそれらの噂はもちろん伝わっている。夕刻になつて郡山城から帰つてきた元綱が、

「話がある」

と、いつになく深刻な表情で言ったとき、ゆきにはすでに心の準備ができていた。

「尼子の大軍が攻めて来た。先手の軍はすでに横田のあたりまで来ておるらしい。明日、兄者が出雲のお屋形のもとに詫びを入れに行くことになつたが、もしこの話合いが不調に終われば、数日のうちにも敵がこの辺りまで雪崩れ込んで来よう」

武士の妻になると決めた時から、いつかこのような日が来るかもしれぬと、心のどこかで覚悟していた。相合で暮らすようになって四年。あつという間ではあつたが、ゆきの人生の中でもっとも心穏やかに過ごせた歳月だった。その時間が確かにあつたから、ゆきは自分の選択に後悔はない。

「四朗さまと共に死ぬのなら、怖くはございませぬ」

夫の眼を見つめ、ゆきは強く言った。

「馬鹿め。死ぬなどと申すな」

妻の決意をはぐらかす様に、元綱はことさら気軽な笑みを見せた。

「武士が戦さで死ぬのは、それが務めなのだから当たり前のことだが、何もお前まで死ぬことはない。お前は鶴寿かくしゅを連れ、今宵のうちにこの地を離れよ」

ゆきの瞳に怨の色が出た。

「なぜそのようなつれなきことを仰せになるのです」

この巫女あがりの女は、たおやかなその姿態にそぐわぬほどの激しい気性を裡つちに秘めている。馬鹿にするな　　という想いが、頭に血をのぼらせた。

「ゆきは今義経の妻であることを誇りに思っております。義経が都を落ちたとき、静御前はどこまでも義経に従ったではありませんか」

かつて静御前は、没落した義経にどこまでもつき従い、愛した男と運命を共にする女の覚悟をその行動で示した。二人が離れ離れにならざるを得なかったのは、女人結界の吉野山に静御前が入山できなかつたからで、義経の足手まといになることを察した静御前が身をひいた結果に過ぎない。その後、捕えられて鎌倉に送られた静御前は、頼朝が激怒することを承知の上で、衆目の前であえて義経を慕う歌を唄ってみせたではないか。

「静御前にあつた覚悟がゆきにはないと四朗さまがお思いなら、恥辱でござります」

覚悟や意地は、何も武門に生まれた女の専売特許ではなく、白拍子や巫女にだってそれはある。

ゆきがそういう意味のことを早口で訴えると、

「違う違う。そうではないのだ」

元綱は困つたように苦笑した。

「俺はそなたの覚悟を疑いはせぬし、生まれを卑しめるつもりもない」

「それなら」

「まあ聞け」

元綱はゆっくり言葉を継いだ。

幸か不幸か、自分は武門の家に生まれ、武士として育つた。生き方にせよ考え方にせよ、今さら変えられない。まして毛利家の主君あまじは、敬愛した亡兄の子である。幸松丸が死なねばならぬという時に、その叔父の自分が逃げ出すわけにはいかない。そんなことをすれば、あの世で兄に合わせる顔がなくなってしまう。

「だが、これは俺の勝手な料簡だ。その巻き添えで鶴寿まで殺すことはない」

子の名を出され、ゆきの眉根に迷いが湧いた。

「出雲のお屋形は、毛利をどうするつもりなのか。臣従なり降伏なりを許してくれるなら良いが、もし毛利を滅ぼそうと考えておるとすれば、毛利本家の一門、連枝は必ず処断される。武門の子は怖いものだ。お屋形も後に禍根を残すような甘いことはすまい。鶴寿が毛利の領国の中におつては、たとえ寺社に匿ってもらったとしても、必ず探し出されて、首を刎ねられるか、磔にされるだろう」

「・・・・・・・・」

「お前は俺とは違い、心も身体も自在だ」

歩き巫女であつたゆきには、武家に生まれた自分などにはない自由さがある、という意味のことを元綱は言った。

「この先どう動いてゆくか、戦さになるのかならぬのか、それさえまだハキとは判らぬが。毛利家の処遇が決まり、鶴寿が殺されることはないとはつきりするまで、お前に鶴寿を隠してもらいたいのだ。旅の空は歩き巫女の棲家すみかだと言つたな。武門に生まれた女にはとうてい持ちえぬ才覚が、お前にはある。鶴寿を野たれ死にさせようなこともあるまい。お前なればこそ、俺も安んじて任せることができるんだ」

こうでも言わなければ、この気位の高い女は、夫を死地に残して自分だけ逃げることを決して承諾しないということをや元綱は知っている。母の心を動かすには子の将来を想わせるのが最良の策で、それが結果として愛する妻を戦禍から遠ざけることにもなるのである。武門の男なら誰もが持つ知恵であつた。

「鶴寿を・・・・・・・・」

妻として夫の滅びに殉ずることに、ゆきはためらいはない。しかし、自分が「毛利家の女」であるという実感は薄く、我が腹を痛めて生んだ子を家の滅びに巻き込むことには、小さからぬ感情の痛みが伴う。それを恬淡と受け入れられるほど、ゆきは冷徹ではない。

「いや、それほど深刻に考えずともよい。正直なところ、俺はまったく死ぬ気がせぬし、毛利家も何事もなく生き延びるのではないかとさえ思っている。だが、用心しておくに越したことはない」

「・・・・・・・・」

「転ばぬ先の杖というヤツだ。それだけのことだ」

長い黙考の末、ゆきは静かに口を開いた。

「出雲のお屋形さまが軍と共に去れば、ゆきは鶴寿を連れて戻って参ります。それでよろしいですね」

「申すまでもない。お前に帰ってきてもらわねば俺が困る」

その夜、久しぶりに巫女の装束に袖を通したゆきは、夫の所望に応じて白拍子の舞いを舞った。

しづやしづ しづのをだまき くり返し 昔を今に なすよし
もがな

吉野山 峰の白雪 ふみわけて 入りにし人の 跡ぞ恋しき

静御前が頼朝の前で唄ったとされる歌である。手足を舞わせつつ、

ゆきは実に美しい声でそれを唄った。元綱は我が子を膝に乗せ、静かに酒を飲みながらその舞いを眺めた。

鶴寿丸を抱いたゆきが夜陰に紛れて相合の屋敷の裏門を出たのは、夜更けである。幸と市兵衛がそれに従ったことは言うまでもない。

密かな出立を見送った元綱の背に声が掛かった。

「和子さまと奥方さまを落とされましたか」

重蔵である。

「俺は手前勝手だな。たとえ毛利が滅ぶにしても、妻子を巻き込みたくはない」

遠くの間を見詰めたまま元綱は応えた。

重蔵は微笑し、うなずいた。

「ようございました。実はわしも和子さまのことが気懸かりだったのです。これで心置きなく戦さに専心できます」

「お前も、この地を離れるなら今のうちだぞ。お前には極めんとする道があるう。俺に殉じて中道に斃れることはない」

「四朗さまから受けたご恩は、この命をもってお返しすると、いつかも申したはずです」

「馬鹿め」

振り向いた元綱は重蔵と似た笑みを浮かべていた。

「敵は二万を超す大軍と聞きます。どれほど討ちまくったところで

不足がありますまい。存分に暴れてやりましょうぞ」

「ああ、そうするか」

元綱はあえて明るく言った。

あの尼子経久が自ら率いる大軍を相手に、十分の一以下の寡兵で戦って、勝ち目などあるはずがない。そのことはこの主従にはわかり過ぎるほどわかっていた。しかし、いずれ負けるにせよ、毛利一門の人間が殺し尽くされ、毛利家が滅亡するというような最悪の事態だけは絶対に避けねばならない。

毛利家を確実に延命する方策は、実はある。

家を二つに割ることだ。

兄弟や親族が敵味方に分かれるのは、血統を絶やさぬための武門の知恵と言っている。

たとえば元綱と元就が、それぞれ尼子派と大内派の旗頭になり、めいめいに重臣を抱き込み、兵を集めて、あえて内訌を起こしたように見せかける。尼子派は使者を走らせて尼子経久と結び、幼い幸松丸の責任を問わぬことを条件に尼子家に忠誠を誓い、尼子軍を後ろ盾にして大内派を攻撃し、降伏させるのである。この手なら、当面の危機はおそらく回避できるであろう。

しかし、家中を二つに割る以上、毛利の武士同士で殺し合わねばならなくなるし、結果として大内派の主立つ者は処断するか国外に亡命させるしかなくなる。まして騙そうとする相手はあの尼子経久である。戦さぶりを眺めるその眼光に甘さはあるまい。そこに詐術の臭いを嗅げば、後にどんな処断が待っているか知れたものではない。

いや、そもそも元綱は、陰謀で事を動かすことを好まない。

武士の進退は明快であるべきだ。

甘いと言われようが子供と嗤われようが、それが元綱の信念であった。卑怯、臆病、恥知らずと後ろ指を指されるくらいなら、死ん

だ方がマシ、と言いつれてしまつところはこの若者の気質がある。この潔癖さは、若くして死んだ兄・興元の影響もあるであらう。生前の興元は他人に対して権詐けんざを用いたことがなかった。その生き方は、そのまま元綱の理想になっている。

大内氏の援軍が期待できない以上、最終的に尼子氏に降ることにするのは致し方ないにしても、戦つて戦つて毛利の武士の頸つよさと意地を天下に示し、その上で誇りをもつて降りたい。

そのためには。

ともかく一日でも長く時を稼ぐことだ。

いかに尼子経久でも、稲の取り入れ時期に長期滞陣するのは愉快ではないはずだ。籠城して手強く戦い、大軍の波状攻撃をしのぎにしのぎ、十日、二十日と時間を浪費させておれば、事態がどう推移してゆくかは誰にもわからない。短期の城攻めで結果が出なければ、尼子経久の気分も変わるかもしれないし、吉川国経あたりが和睦の斡旋に乗り出してくれるかもしれない。

武門の誇りと面子を保つた上での臣従。

そのあたりが現実的に考え得る最善の道であらう。出来得れば、尼子側から和議を言い出させるところまで何とかもっていききたい。現状で見通しはまつたく立たないが、より良い条件を引き出すためには、尼子軍にも相応の血を流させねばならぬであらう。

「百万一心だな、兄上……」

闇色の天を見上げ、元綱は呟いた。

今こそすべての者が「百万一心」の心で人事を尽くし、領国の地の利を最大限に生かして戦い抜くしかないであらう。そこに天の佑たすけが加われば、奇跡が起きることもある。

夜明けまで眠つた元綱は、日が高くなる前に母や侍女や家僕などを郡山城に避難させ、同時に相合の屋敷に貯蔵していたわずかな資産や穀物なども郡山城へ運び込ませた。その作業を終えると、近侍

と共に船山を登り、砦の守備についた。

多治比元就が郡山城へ帰ったのは、その日の日没後である。

元就は重臣らが待つ大広間へは渡らず、まず自分の御用部屋に入り、そこに志道広良だけを呼び、事情を告げた。

「坂の隠居殿の首を差し出せと……！」

「尼子に二心なきことを示さぬうちは、臣従さえ認めぬと能登殿は申された。戦さを避けるには、兵部ひょうぶ（坂広時）に腹を切らせるしかない」

元就の顔は憔悴し切っている。

「腹を切らせると申しても……。どうなさるおつもりか。死んでくれると頭を下げれば済むという話ではござらんぞ」

坂広時は筋金入りの大内派である。尼子に降るためにその首を差し出せと命じたところで素直に聞き入れるはずがないであろう。

広良にとって坂広時は尊敬する伯父であり、その人柄は知り過ぎるほど知っている。あの老人は主家のためなら水火も辞さぬという性質たぢで、その誠心にもまったく疑いはないが、絶体絶命の危機に追い込まれた人間は時として思いも寄らぬ行動を起こすことがある。

身の危険を察した広時が、

「主家が大内との盟約を棄すて、尼子に寝返るといっているのであれば、坂は主家には従えぬ」

などと声を挙げ、坂一族を糾合して日下津城ひげつに籠り、自立するよ

うな事態になることが、広良はもつとも怖い。何と言っても広時は坂一族の長老なのである。志道氏も坂氏の分家であり、広良自身はこれに同調する気はもちろんないものの、志道家の家中からも本家に奔る者が出るかもしれない。同様に、桂氏、光永氏みつながの人数も吸引するであろう。これまで大内寄りであった井上党をはじめ、尼子に屈するを潔しとしない者がこれに加われれば、下手をすると五、六百の兵力が毛利家から離反することになりかねない。

「この話を不用意に公表すれば、家中は大変なことになりましょう」
その深刻さが、広良にはありありとわかる。

「しかし。では、執権殿はどうすれば良いと申されるのか」

元就の声に、広良は苦しげに黙考した。

すでに二十年も前に隠居して一線を退いたとはいえ、坂広時は政略家としても外交家としても凡庸ではない。かつて毛利弘元が大内氏と幕府とを相手に二面外交を展開していた時、執権として弘元を支え、外交を実際に切り回していたのがあの老人であり、乱世の政争のなかで練り上げられた胆知を持っている。

隠居殿が我らの敵に回れば……。

やたらと喉が渴き、広良は生唾を飲み込んだ。

仮に坂広時が毛利家から離れる決断をしたとすれば、広時は毛利が尼子に寝返った事実を大内義興に訴え、坂氏を大内家の直臣にしてくれるよう懇請し、同時に援軍を要請するであろう。坂氏が自立して生き延びる道があるとすればそれ以外になく、広良が広時の立場でもそれだけの手は打つ。

日下津城は毛利領の南東端にあり、大内氏の軍事拠点である鏡山城からわずか一日半の距離にある。大内の駐屯軍と芸南の豪族たちが坂氏を援けるために援軍を発するような事になれば、今は一応静

観している尼子軍も軍事介入を始めるに違いなく、事態は毛利家内部で収拾できるレベルを遥かに超える。そんな状況を招くことだけは、絶対に避けねばならない。

長い沈黙の末、やがて広良は絞り出すような声で言った。

「隠居殿を仕物に掛けるほかござるまい……」

元就は眼を見開き、掠れた声で呟いた。

「ば、謀殺すると……！」

「苦渋の選択でござる」

実直にして公明正大な志道広良ほどの男が、恩人である伯父を騙し討ちで殺すと決断せねばならぬところに、政治というものの救い難い業深さがある。

亀井秀綱の要求は広時の首ひとつであり、坂氏本家を族滅せよとか日下津城を落とせとか命じられたわけではない。内訌という最悪の事態を回避するには、坂広時が行動を起こす前に、先手を打ってこれを謀殺してしまうしかない。殺すのはあくまで広時一人に留め、罪を周辺には及ぼさず、息子の広秀にこれまで通り坂氏をまとめさせる。それがもつとも流血が少なく済む方策であろう。

元就は眉間の皺を深くした。

「そのようなこと、ながと長門（坂広秀）が承知するはずもあるまい」

父を謀殺されたと知れば、坂広秀は当然激怒するであろう。日下津城で兵を集め、暴発せぬとも限らない。たとえ広時の首を尼子氏に差し出しても、広秀が坂一族を率いて反逆するようでは結果は同じである。

が、その程度のことは、志道広良も当然わかっている。

坂広秀は狭量であり、父の広時ほどの衆望はない。広時が決起を呼び掛ければ、分家の桂氏、光永氏、志道氏はもちろん、家中も大きく動揺するであろうが、広秀では反逆の旗頭としては役不足であり、それほど人数は吸引できないはずだ。

たとえ長門殿が謀反を起こしたとしても……。

その叛乱の火は毛利の独力でどうにか鎮火できる、というのが広良の観測である。これは絶対に口外できない陋劣な計算だが、最悪の場合、坂氏本家だけを尼子軍に滅ぼしてもらおうという手もある。

尼子氏からの要求を突っぱね、戦さになってしまえば、最終的に降伏して毛利家が生き延びることができたとしても、武士と雑兵だけでおそらく数百人は死ぬことになる。巻き添えを食って殺される領民の数まで含めればどれほどの血が流れるか想像もつかない。

坂氏本家の百数十人だけを生贄いけにえの祭壇に捧げることで、毛利家の武士と領民の安泰を計ることができたら、悪い勘定ではない。

そう考えざるを得ないのが、執権という立場の責任の重さであつたらう。

「隠居殿は、我が伯父でござる。このことは、わしにお任せくださらぬか」

と広良は言った。

謀殺などという卑劣な処置を元就が行えば、家中の者たちは元就の冷血さを嫌悪し、その人格を信じられなくなるであらう。殺すべき対象は敵ですらなく、一門のなかでも別格とされる坂氏の長老なのである。元就は幸松丸の後見役として今後も家中をまとめてゆかねばならぬ立場であり、その徳望を傷つけたくはない。

これからの毛利を背負ってゆくのは、多治比殿しかない。

広良はすでに五十六である。幼い幸松丸が一人前になるまでほひつ輔弼を続けるにはやや老い過ぎている。若い元就には長く毛利家の支柱

となつてもらわねばならないし、それが出来るだけの英邁えいまいさと勇氣と決断力が元就にはある、と広良は見ている。

憎まれ役は、この年寄りがやればよい。

それが広良の真情であつた。

広良の氣迫と眼光の強さに、元就はやや押し込まれた。

「……わかつた。では、すべて執権殿にお任せしよう」

坂広時は功臣である。何の罪もないあの老人を殺さねばならぬという現実は、元就にとつても辛く、重かつた。それを引き受けるという志道広良の言葉は、元就を気持ちをわずかに救つたと言えなくない。

ところで、肝心の坂広時は、評定で尼子氏に臣従するという決定が行われると、交渉に赴いた元就の帰城を待つことさえせず、裾を払つて自領に帰つてしまつていた。

「事は急を要します。ただちに隠居殿を登城させますぞ」

志道広良は日下津城に急使を派し、重要な評定を行うから郡山城に来てもらいたいと広時に申し送つた。広時を郡山城に招き寄せ、取り込めて討つつもりである。

しかし、広時は何かを察したのか、この招集に応じず、二日待つても城に引き籠つて動こうとしなかつた。

まずいことになった。

復命した使者の話では、日下津城では人の秀囲氣が殺伐とし、城内に兵の姿が多く、籠城支度をしているようにさえ見えたという。あの老人はすでに自立を決意し、行動を始めているのかもしれない。尼子氏との交渉の結果をいつまでも隠しておくわけにもいかない。広良と元就は、ここで初めて重臣たちに事情を伝えた。

時間を与えれば、坂広時は味方をどんどん吸引するかもしれず、

大内の援軍を呼び寄せられるかもしれない。家中の重臣たちにも、迷いや同情を生じさせることになりかねない。拙速せつそくとわかっていても、ここは断固として即断せねばならぬであろう。

広良は、主家の命に応じない坂広時を「謀反人」と見做し、ただちに日下津城を攻めることを強引に決定した。

尼子氏の命に従う形で日下津城を攻める限り、毛利家は尼子の被官として行動していることになる。この間、郡山城は手薄になるが、尼子軍が郡山城に攻め寄せることはないであろう。そもそも尼子経久は、その気になればいつでも郡山城を攻め落とすことが可能であり、臣従した後の毛利家を好きなように処分することもできるわけで、悪名を増やしてまで謀略で郡山城を奪う必要がない。しばらくは毛利軍の動きを静観するはずだ。

幸い郡山城には籠城に備えて千余の兵が集まっている。元就はその軍兵を率いてそのまま出陣し、領内の枝城にも早馬を走らせ、武将たちに本軍に合流するよう命じた。

毛利家は、一門の坂氏を売ることによって、目前に迫っていた尼子軍の牙爪がそうを辛うじてかわしたと言えるであろう。

毛利軍はその日のうちに向原に到り、日下津城の城山を見上げる山麓に布陣した。

元就は城攻めを急がず、兵に攻撃を禁じ、城に矢文を射込ませた。尼子に降るために坂広時の首が必要になったことを正直に告げ、坂氏自体を滅ぼす意思がないことを明言し、抵抗せず開城するよう求めたのである。

このような事態になってしまったことに忸怩じくじたる想いがあるが、それでも、

無駄な血は出来る限り流したくない。

というのが元就の偽らざる真情であったろう。

城山を見上げる攻城軍の中には元綱の姿もある。

なぜ家中で殺し合いをせねばならんのだ。

元綱は心中で何度も呟いた。

尼子軍が相手なら、元綱はそれこそ死をも厭わず戦い抜く覚悟であった。しかし、眼前にある敵とは、昨日までの同僚朋輩なのである。ことに坂広秀が元綱の後見役を務めてくれていた縁から、日下津城内には元綱の友人知人も多い。何の罪もない彼らに弓を向け、容赦なく射殺するような気にはとてもなれない。

幸松丸さまを殺させず、毛利家を生き延びさせるためだ。

と自らに強く言い聞かせるが、割り切れぬ想いはどうしても残った。

流れる血の量と失われる人命の数で事の善悪を判じるなら、元就と志道広良の決断はおそらく間違っていない。尼子軍との戦さを回避するには尼子側の条件を飲むしかなく、坂広時の首を差し出すことがもつとも流血を少なく事態を治める方策であるだろう。

しかし。

本当にこれしか道はなかったのか。

尼子に大内にと揺れに揺れ、態度を曖昧にしてきたことが、この無様な結果を招いたのではないのか。

兄上が生きておられれば……。

このような事には決してならなかったはずだ、と元綱には思えるのである。

身を捨ててこそ浮かぶ背もある。意地を貫いてこそ辿りつける場所もある。戦うべき時に戦いを避け、功臣の首を差し出してまで尼子経久に媚び、それで臣従が許されたとしても、その在り方をいったい誰に誇れというのか。

「やり切れぬ……」

秋の高い空はいつもと同じように長閑のびやかで、大小の雲がゆつたりと流れている。色づき始めた山野の美しさも常と少しも変わらないが、

それを眺める元綱の心には虚しさしかない。多くの兵たちが同じ気分のため息をついていたであろう。

この時、城内の坂広時の心中は、虚しさを通り越して悲愴というしかない。

この老人はもともと寡欲で私心が少なく、主家のためであれば喜んで腹でも切るといふところに忠誠の在り方を据え、毛利家の繁栄を自らの喜びとしてこの半世紀以上を生きてきた。毛利家を離れて自己の存立を計るといふような気分は寸毫すんこうも持ち合わせておらず、積極的に叛乱を起こすような意思もまったくない。ただ身を守るために日下津城に籠らざるを得なかったというだけであり、その行動はあくまで正当防衛であった。

毛利軍の出陣を知った息子の広秀が、

「こうなれば戦うほか致し方ありませんまい！ 座して死を待つおつもりか！」

と迫っても、広時は首を縦に振らない。鏡山城の大内軍に援けを求めようとせず、坂一族を糾合することも味方を募ることもしなかった。

内証で家を衰耗すいせうさせるほど馬鹿げたことはない。

ということを広時は知っており、なるべく血を流さずに事態を收拾する方策を考え続けていたのだが、元就からの文を読み、ついに決断した。

「わしは腹を切る。お前はこの首を多治比殿のもとに届けよ」

と息子に命じたのである。

坂広秀は墳怒した。

「なにゆえ父上が腹を切らねばならぬ！ 我らが何をしたというの

です！？ 理不尽は主家にあり、父上が首を差し出さねばならぬ謂われはどこにもござらぬぞ！」

「家中の者同士で殺し合うて何になる。喜ぶのは周りの敵ばかりではないか。この年寄りの首ひとつで事が収まり、主家も我が家をも保つことができるなら、それでよい」

「父上……！」

「憂き世とはよう言つたものよ。死ぬことより生き続けることの、どれほど辛く苦しいことか……。広秀、多治比殿や執権殿を怨んではならぬぞ。この父のことは忘れ、怨みも怒りも何もかも素知らぬ振りをして、これまで通り幸松丸さまにお任せせよ。これは我が遺言と思え。お前が遺恨を肚に溜め、主家に怨みの眼を向け続ければ、坂の家は必ず主家によって滅ぼされよう。それを忘れるな」

広時は厳しく念を押し、家族や重臣らに別れを告げた後、見事に腹を切つて果てた。

涙を流しながら父の首級を首桶に収めた坂広秀は、自らその首桶を抱えて悄然と城山を降り、毛利軍の本陣へと赴いた。

親の首を差し出して降を求めめる子の気持ちというのは、筆舌に尽くし難い。広秀は生涯でこれほどの辛酸を舐めたことはなく、その心は血涙で溢れた。悲しみと怒りで身体が震え、首桶がガタガタと音を立てている。

鰻幕が張られた本陣では左右に諸将が居並び、最奥で元就と志道広良が床几に座していた。

老いた功臣の首級を実検した元就は、合掌して瞑目し、

「すまぬ……！」

と絞り出すような声で言った。

坂広時の英断によって、毛利の武士同士が殺し合うという最悪の事態はどうか避けられた。尼子氏へ臣従する道も拓けたと言えるであろう。その死の価値は、戦場で討ち死にすることに遥かに優る。諸将は口々に広時の死を悼み、その潔さと主家への献身を褒めちぎった。

「兵部の無念はいかばかりであったか……。長門をはじめ、坂の者たちの心中を想うと、詫びの言葉もない……」

元就は、坂広秀の罪を問わぬことと坂氏の所領をこれまで通り安堵することを諸将の前で明言し、ただちに軍を返したのだった。

内訌はこうして一日にして終息した。

しかし、人の心に怨みは残る。

「広良と元就のことは、死んでも赦さぬ……!!」

血の滴るような想いでそう誓った男がいたことに、元就は気付いていない。

第五章 安芸激震 肅清（四）

毛利軍が向原へ出陣し、日下津城を囲み、坂広時を自刃させたこと知った亀井秀綱は、片頬に笑みを作った。

「存外早く片付いたな。もう少し事がこじれるかと思つたが」

事態の展開次第では、毛利家が二派に割れて内訌が起こり、そこに尼子軍が軍事介入して日下津城を奪い取ることさえ出来るかもしれない。などと、秀綱は密かに目論んでいたのである。秀綱の放った謀略の火矢は、大火に発展することなく、小火のうちに消し止められてしまったらしい。

まあ、致し方あるまい。

毛利氏を降すという目的自体は、秀綱はきつちり果たしているのである。尼子軍の兵の血を一滴も流さず、わずか三日で毛利氏を屈服させ、同時に毛利家中の大内派の首魁をも排除したのであるから、まず上々の成果とすべきであろう。今後の毛利家は尼子派の重臣によつて主導されてゆくことになり、つまり毛利が再び大内方に寝返るような芽をも事前に摘んだと言える。

しかし、秀綱がその報告を主君に行ったとき、尼子経久はまったく喜色を見せなかった。

「ふむ……」

と腕を組んでしばらく押し黙り、遠くを見るような眼を宙に向けた。

上・中・下で言えば、まず中か。

下策とまでは言わないが、決して上策であつたとは褒められない。それが率直な感想だつた。

毛利氏自身の手で大内派の首魁を処分させる。着想は悪くないにしても、手段がやや陰湿である。たしかに尼子軍の兵に犠牲は一人も出ず、時間も掛けずに毛利氏を降したわけだが、経久に言わせれば、それはそれだけのことであった。

謀略とは本質的に陰湿なものであるから、人はそれに好感を抱かない。最高の謀略とは、謀略が行われたこと自体を誰にも気づかせぬほどの巧緻さを備えたものである。それが出来ぬなら、せめて陽性な明るさを世間に印象づけるなり、目の覚めるような鮮やかさで衆目を驚かせるなりして、陰湿さを糊塗ことしてしまうのが賢いやり方と言える。

能登はまだまだ苦勞が足りぬな。

経久は口元だけで苦笑った。

名将と呼ばれるような人間は、戦った相手に畏怖されると同時に尊敬もされるものだが、毛利家の者たちは、秀綱を憎悪したり畏怖したりすることはあっても、好感も信頼も抱きようがない。毛利家がどう処分されるかを注視している芸南の豪族たちにしてもそれは同じであろう。

それでは駄目なのである。

人は恐怖には決して頭を下げない。たとえ下げる形を示したとしても、内心では舌を出しているか、あるいは怨怒えんごを肚に溜めている。人に心底から頭を下げさせるには、結局のところ、威徳と福德とをもつて敬服させる以外ないのだが、秀綱はそのあたりに理解が届いていないのであろう。

毛利氏を降すのは最終目標でもなんでもない。ひとつの戦い、ひとつの政治的措置に、今後の戦略を有利に運ぶための含みを持たせ、その常人には見えぬ連続性のなかで安芸制覇の大略を描いてゆくという知恵の深みが欲しい。亀井秀綱といえは尼子家の重臣中の重臣であり、次の世代の尼子家を背負ってゆくべき支柱の一人であり、ゆくゆくは芸備二国をやすやすと取りさばけるほどの男になってもらわねばならないのである。

そう思いつつ、経久はそれを言葉にはしない。毛利氏の処分は任せる、と言った以上、後からあれこれ口を挟むべきではないであろう。

経久が言ったのは、

「勝ち方や負け方には人の性根が顕あられる。お前はもつと徳を積まねばならぬな」

ということであった。

亀井秀綱はタイプで言えば官僚型の秀才で、知恵のめぐりは尋常ではなく、処理能力も高く、何をやらせてもそつなくこなす才覚と器用さを備えているが、人としての肌触りにはやや冷たさがある。己の知恵を誇りたがり、己より能力の劣る者を軽侮けいぶするような悪癖があるのも事実で、それを韜晦とうかいするような人格の厚みにも欠ける。敵にゆずって勝つ、というのが勝ち方の最善の形であるが、相手をとにかく屈服させねば勝った気になれぬというところが秀綱の若さであろう。その料簡の狭さが、器量をひとまわり小さくしている。経久にすればそこが歯痒いのである。

なにかご不満であったのか。

自分の成功に主君が満足していないらしいと悟って、秀綱はやや鼻白んだ。

「唐土もろこしの聖賢に、取らんと欲する者は先まず与えよ　と言った者がある。存じておるか」

「『老子』でしたか・・・」

秀綱は学問においても俊才であり、その程度の知識はある。

「この世に人の怨みほど恐ろしいものはない。その災禍から無縁で

おられるのは聖人しかなく、その災禍を未然に避けられる者を賢人というが」

我らは武士であり、武士とはしよせん功名の餓鬼がきに過ぎぬ、と経久は断じた。飢えと渴きに苦しむ亡者のように功名を欲するのが武士だ、という意味である。

「争いを嗜たしなむ者は聖人にはなれぬ。賢人になり得る者も、世に幾人もおらぬであろう。凡愚である我らは、せめて積徳せきとくに努めねばならぬ。それが、家を保ち身を全うする道よ」

「積徳、でございますか・・・」

この主君こそが賢人である、と秀綱は信じているが、その言葉に反駁するわけにもいかず、不承不承という表情でうなずいた。

秀綱は少年の頃から常に経久に近侍し、その成功を見つめながら成長し、大きな敗北も挫折も知らずにここまで来た。そういう気鋭の青年に、この手の「老人の箴言しんげん」は沁しみにくい。人は結局その身をもって思い知ったことしか解らないものであり、知るということと解るということは別なのである。経久の賢明さはそれさえ弁えていることであり、

自分で学べ。

と、この青年を突き放していることであろう。

人格は学問だけで練れるものではなく、才智や徳量は不断の努力によって高かさ上げしてゆくしかない。失敗も糧かてになるのである。人は慢心した瞬間から成長をやめるということを想えば、己の足りなさを識しり、常に学ぶことを心掛ける謙虚さこそが肝要であろう。

臣下の不徳はそのまま主君の不徳と世間を見る。それも承知の上で、忍耐をもってこの青年の成長を見守っているところが、経久の主君としての器量の大きさであった。

経久ほどの男から見れば、秀綱はまだまだ未熟ではあるが、それでも、

能登には見所がある。

と思わせるものを確かに持っている。

秀綱は、経久を主君であるという以上に智将として崇敬している。経久の言動から何かを吸収し、己を高めようとする気概がある。譜代の臣として尼子家に対する忠誠心も申し分なく、己が尼子家の枢要にあることに強い誇りと責任感を持っている。何より重要なのは、若いということであった。これからさらに様々な経験を積み、人格を育てれば、嫡孫である三郎四朗（後の尼子晴久）の輔弼ほひつを任せられるかもしれない。

いや、

そうなってもらわねば困る。

というのが正直なところであつたらう。

秀綱を下がらせた経久は、

「又四朗が生きておれば、な……」

と愚にもつかぬことを呟いて、ひとつため息をついた。

経久はすでに六十五である。人の生涯に四季があるとすれば、己の人生がすでに晩秋に差し掛かっていることを、経久自身が誰よりも強く自覚していた。ここからさらに何年生きられるかは神のみぞ知るところだが、馬に乗ることができるのは、せいぜいあと五年かそこらであろう。人生の冬枯れを迎える前に、なんとか安芸と石見の経略に目鼻をつけ、大内氏の影響力を周防・長門の国境線まで押し返し、中国地方における尼子の覇権を確固たるものにしておかねばならない。

嫡男の政久が健在であれば、こんな懸念はそもそも必要もなかったであろうが、この稀代の智将は、そういう幽かな焦燥と苛立ちのなかで、この大永二年（1522）という年を生きていた。

首桶を携えた多治比元就が、副使の中村元明とわずかな近習を連れて尼子軍の本陣となっている寺へと再び赴いたのは、その翌日である。

表情を消した元就が首桶を差し出すと、亀井秀綱の家来がそれを丁重に受け取り、桶から首を取りだし、主人の前にうやうやしく置き据えた。

秀綱は坂広時の顔を知らない。

「伊豆殿」

求めに応じ、吉川国経がその首を実検した。

「日下津城の坂兵部大輔殿ひょうぶたいふに間違いござらぬ」

うなずいた秀綱は、

「お屋形さまがお会いになられる。多治比殿、ついて参られよ」

とごく事務的な口調で言い、席を立った。

尼子経久に拝謁が叶うということは、臣従を許されたと解釈して良いであろう。元就はわずかに安堵したが、亀井秀綱の冷淡な態度にはやり切れなさが残った。

能登殿は私を軽侮けいぶしている。

保身のために重臣の首を差し出す。その容儀の悪さを元就自身が誰よりもよく自覚しており、身が震えるほどの羞恥と屈辱に耐えているのだが、亀井秀綱はそんな元就を冷然と見下して憚らない。秀才が落ちこぼれを見る時の眼と言えばそれに近いであろう。その拳措や言動は礼を踏み外すことこそないが、いかに丁重に振舞おうと

心が籠っていないのだから、慇懃無礼というしかない。この男は元就に親しもうという気が八ナからないのである。

秀綱は元就らを伴って回廊をわたり、寺の本堂と思しき建物に入った。軍議などをする広間代わりに使われているのだらう。

外の明るさと対照的に、堂内は薄暗い。その幽冥ゆうめいのなかに、二十人ばかりの人影が黒々と並んでいる。先に入室した吉川国経がその列に加わった。

最奥に、本尊を背にして中背瘦身の男の影が座している。暗さに眼が慣れてくると、左右に居並ぶ諸将の顔も見えるようになった。

高橋興光、宍戸もとよし元源などもそこに混じっている。

亀井秀綱が最前列の席につき、元就と中村元明は戸口に近い遙か下座で平伏した。

「毛利幸松丸殿が名代、多治比の元就殿をお連れ申しました」

秀綱の声に合わせ、元就はわずかに額をあげた。

「多治比元就にござりまする」

上座の男は穏やかな笑みを浮かべた。

「そなたが多治比殿か。我が室しむ(妻)などからお噂はかねがね聞いておった。ようやっと対面が叶うたな」

元就が恐懼きょうくする姿勢を見せると、その頭上からさらに声が降ってきた。

「お手をあげられよ。そのように遠くでは、お顔がよう見えぬ。遠慮のう、もそっと近う寄られよ」

その言葉に躊躇なく従えばいかにも不遜に見えるであろう。元就
は威を畏れるように平伏し続けた。

「多治比殿は我が姪御の婿　我らはいわば叔父・甥の間柄である。
そのように畏まられることはない。お気をくつろげなされよ。遠慮
のう、もそつと近う」

こうまで言われれば肚を据えざるを得ない。元就は腰をあげて数
歩進み、再び平伏してから威儀を正した。

これが尼子経久か。

えんじ色の小具足姿。頭には菱烏帽子もみえぼしを載せ、鉢巻を締めている。
すでに六十代も半ばのはずだが、目尻の皺と鬢びんのあたりに白い毛が
目立つほかは、老いの翳かげはさほど濃くない。細面で端正な顔立ちで、
眼はやや眠たげに細まり、口元に微笑がある。

厳峻げんしゅんな威容を想像していただけに、その優しげな容貌は元就には
やや意外であった。が、穏やかに細められた眼と視線が合った瞬間、
息苦しいほどの重圧を感じた。眼光から放射する何かが、元就を強
烈に打つたと言っている。

この人は、鷹だ。

と元就は直感した。鷹はあらゆる鳥のなかでもっとも賢く、もっ
とも獍猛で、しかも誇り高い。一度狙いをつけた獲物は執拗に追い
回し、決して逃がさない。

視線を床に下げた元就の背に冷たい汗が流れている。位負けした
自分を感じた。

人物を観察しているのは経久も同じである。

元就の眼を見た経久は、

ほどが良い。

という第一印象を持った。柔弱ではないが粗暴でもなく、軽忽けいこつ
からは遠いが決して魯鈍ろどんでもない。軽くはなく、重すぎもしない。そ
んな感覚である。

ただ、あの武田元繁を一撃で屠^{ほぶ}った男にしては、武の匂いが薄く、線が細い。そもそも毛利氏は大江氏から繋がる学者の家系であり、その血が濃く出ているのだとすれば、そういう男が蛮勇とも言える戦い方で武田元繁を討ったというところに、経久は面白みを感じた。

「向原の辺りが何やら騒がしかったようだが、多治比殿が胆知によつて事を治めたと聞いた。祝着であったな」

音吐に力がある。

「それがしなどには何の功もございませぬ。血濡らすことなく城門が開きましたのは、ひとえにお屋形さまの御威光によるものと」

微笑を崩さず、けれど経久は厳然と言った。

「多治比殿、わしは諛言^{ゆげん}を好まぬ」

「は……」

「わしに光のごとき威徳があれば、もっと早うに多治比殿にお会いできたであろう。坂兵部大輔^{ひょうぶたいふ}に気の毒をすることもなかった」

その通りだと思いつつ、元就は頭を下げた。

「幸松丸さまを後見する重責を負いながら、家をまとめられず、遅参しましたる我が身の不明を恥じ入るばかりでございます」

「いや、多治比殿を責めておるのではない。わしの不徳の致すところと申しておる」

老人はやや苦い笑いを浮かべた。

「此度のことは、毛利家を守護する御先祖の霊と、毛利家の長久を願う多くの者の想いに感応した神仏が、兵部大輔を動かしたのである。弓矢の沙汰に及ぶことなく、多治比殿がこうして参会してくれたことは、当家にとって大慶である。このことが芸北のみならず、安芸一国にとっての吉慶となり、延ひいてはこの中国全体の静謐せいひつに繋がれば良いと、わしは思うておる」

中国の静謐　中国地方を尼子が統一すると解するべきであろう。気宇の大きさが桁違いであると、元就は認めざるを得ない。元就は安芸一国どころか、毛利領を守ることにさえ汲々としているのに、眼前の初老の男は、あの大内義興をさえ覇気で圧倒しようとしている。大内義興が王者なら、尼子経久はまさに覇者であろう。

この人があと十年若ければ……。

中国平定どころか、京に旗を樹たてることさえ可能かもしれない。そう感じた元就は、尼子経久という人間の巨大さを実感したと言っている。

一方、経久の心事は、元就とはまったく異なる。経久にとって元就は子の世代よりさらに若い。そういう孺子こを競争相手として見る気はまったくなく、歯牙にも掛けてないというのが正直なところであったろう。経久はいわば勝者であり、亀井秀綱が行ったやや非道な措置への負い目もあって、降将に対する宿怨ゆぐんの気分をもって元就らを眺めているから、特別なこだわりも負の感情もない。

「中村宮内少輔なかにのみちのすけとはそこもとか。話は能登から聞いておる。当家と毛利家のために色々と奔走してくれたそうだな」

元就の背後で畏まっている中村元明にまで気さくに声を掛け、そ

の労をねぎらった。

お互いに言葉を交換したことで、場の空気がややほぐれてきている。

ふと思いついた、という風情で経久は話題を変えた。

「ところで多治比殿、幸松丸殿はおいくつであられたかな」

「御年八つでござります」

「明年は九つか・・・」

経久は首を傾け、伊豆殿　と吉川国経に呼び掛けた。

「ご嫡孫の次郎三郎殿は、おいくつで元服されたのであったかな」

「九つのときでござった」

国経は錆びの利いた声で答えた。

「なるほど。少々早いですが、早すぎるということはないか・・・」

聞こえる声で独語した経久は、

「明年わしは、瀬戸内の海を眺めるために、再び安芸に参るつもりである。そのとき幸松丸殿の烏帽子親えぼしおやを務めて進ぜるゆえ、左様心得られよ」

と軽みのある口調で言った。

「元服の祝いには、稚児着ちいしの具足でもお贈りしようかな。その鎧を

着た幸松丸殿の若武者ぶりを見るのを、今から楽しみにしておこう」

来年再び安芸南部に侵攻し、鏡山城攻めを行うから、その戦さに幸松丸を出陣させよ、という諷意が込められている。

戦さに出るには一人前の大人であることが前提であり、当然ながら元服を済ませねばならないが、毛利が尼子家に臣従した以上、烏帽子親は主君である経久が務めるのが至当である。毛利家の小身を想えば、経久ほどの大物にその役を務めてもらえるのは、むしろ名誉と言わねばならぬであろう。威福をほしいままにするとはこのことで、経久は人に福徳を授けつつその威徳に染めてゆく。

元服は十五歳の前後で行うのが一般的であり、来年九歳の幸松丸には明らかに早すぎるが、吉川興経の元服が九歳であったと釘を刺されてしまえば、幼少を理由に辞退はできない。元就にすれば、

「格別のお心遣い、恐悦至極に存じまする」

と平伏するほかどうしようもなかった。

会見を終えた元就らは、別室に導かれ、そこでしばらく待たされた。

とてつもない男だ。

それが素直な実感である。

負けた、と認めてしまうことは、実は簡単であった。小さな自我や矜持を捨て、尼子経久という人間に敬服し、心酔し、思考を止めてしまう方が、元就にとってはむしろ楽であつたらう。

しかし元就は、

いつかあの男を超えてやる。

と自らに誓うことで、敗北感をむしろ闘志に変えた。

この心の動きは、我ながら不思議だった。

かつて元就は、天下人たる大内義興に拝謁したことがある。あのとき、元就は大内義興に吸い寄せられるような自分を感じた。しか

し尼子経久に対しては、なぜか反発してしまう自分があるのである。これは心理学的には近親憎悪とか同族嫌悪とかいった感覚に近いであろう。自分と経久が同じ種類の人間であると元就は直感しており、経久の器量や能力が自分より遙かに巨大だということを痛感したがゆえに、敗北を受け入れぬためには無意識のうちに反発するしかなかったのである。

五年や十年では足りぬ。そのもつと先を見よ。

と元就は己に言い聞かせた。

現在の元就の人間としての総合力は、尼子経久にはとうてい及ばない。しかし、そのことに絶望したところで何の意味もない。四十年後の元就が、今の経久を凌駕すれば良いのである。そしてそれは、まったく不可能である、ということにはならぬであろう。元就は己の未熟さを知っている。あの偉大な先達を心の師と仰ぎ、己を高め続けてゆけば、いつか師を超えることだってないとは限らない。若さとは可能性であり、元就が成長を止めない限り、未来に向けて可能性は無限に広がっているのである。

経久が生きているうちに勝つことはできないかもしれない。しかし、尼子経久という巨大な「個」をいつか超克するということなら、できるかもしれない。

何年掛かってても、必ず追いつき、追い越してみせる。

そうとでも思わなければ、負け犬のように頂垂れるしなくなるではないか。

元就は歴史学者の家系に生まれた男である。自分という存在を歴史の中に置いて俯瞰ふかんして眺めることができる心の眼を持っている。

その眼で眺めれば。

経久はすでに六十五であり、その嫡孫の三郎四朗はわずかに九歳である。人は必ず死ぬわけで、尼子家を継いだ三郎四朗が少壮を迎えるころ、経久はおそらく世におらぬであろう。後継者であった政久の死が、尼子家の将来に冥くらい翳を落としている。そして元就は、その頃にまさに壮年を迎えるのである。これは天の配剤であり、今

の元就が持っている経久に対するただひとつのストロングポイントであろう。

そんなことを考えているうちに半刻ほどが過ぎた。

「お待たせ致した」

亀井秀綱とその下僚が部屋に入ってきた。臣従の盟約における実務面の交渉を行うためである。

「証人のことでござるが」

元就は言わねばならない。

毛利家当主の幸松丸はまだ幼く、当然ながら子もいない。人質として適当な男子はないので、重臣をもってそれに代えさせてもらいたい。

「証人は、当主の男子のお子か、あるいはご兄弟を出して頂くというのが、当家の定めでござる。幸松丸殿にそれがなく、重臣で代えたいと申されるなら、二人は出して頂かねば、他家との釣り合いが取れぬ」

秀綱は厳然と言った。

出される要求はそのまますべて呑むしかない。

「承知つかまつった」

郡山城に帰った元就は、さっそく重臣を集め、人質の人選について相談した。

人質とは盟約の証人であり、毛利家と尼子家の主従の盟約が続く限り吉田へは帰れない。人質となった人間は別に牢に放り込まれる

わけではなく、出雲の月山富田城下に屋敷を与えられ、そこで暮らすことになる。むしろ尼子家に仕えると考えた方が実情に近いであろう。毛利がその盟約を破らぬ限り殺されることはないが、主従関係が円満に何十年も続くとすれば、そのまま出雲で客死し、異郷の土にならねばならない。

さすがに広間は静まり返り、気まずい沈黙が流れた。

ここで赤川就秀が、

「拙者が参ります」

と自ら声をあげた。

赤川氏は譜代の中でも筆頭の渡辺氏に次ぐ家格を誇る族で、就秀は赤川宗家の次男として生まれた。長兄であった元光は、毛利家の老臣を務めていたが、ある合戦で奮戦の末に討ち死にした。先代・興元はその死を大いに悼み、元光の弟である就秀と元保もとやすを評定衆に抜擢し、老臣の地位を与えたのである。兄弟は五人であったが、長男がすでに戦死し、三男は出家しているから、実質的には三兄弟であり、次男の就秀が赤川党の当主と言っている。

「拙者は秀岳院さまより過分な処遇を頂きながら、これまでさしたる働きもできませなんだ。譜代の家に生まれた者として、主家が危難のこの時にこそ、お役に立ちとうござる」

この男はそういう形で先君の恩に報いるつもりなのである。

さらに家中で話合い、一門衆から光永秀時みつながという男を出すことにした。光永氏は坂氏の分家で、秀時は坂広時の甥に当たる。長老を殺された坂一族が、それでも尼子に服従するという証しにもなるであろう。

一人は譜代の老臣、一人は一門の重臣であり、この人選なら尼子家の側から文句の出ようもない。

「往つてくれるか……。すまぬ……。」

元就は二人に向けて土下座のような辞儀をした。

その翌日、毛利家と尼子家の盟約は無事に成立した。

調印と人質の受け渡しなどを終えた元就は、尼子軍の陣払いを見届けた上で、郡山城へ帰って報告を行った。

さすがに心身ともに疲れ切っている。

数日ぶりに多治比の猿掛城へと帰り着き、着替えを済ませて暗い居室に落ちついたとき、すでに深夜に近かった。

元就は酒を嗜まない。身体はぐったりと疲れていたが、頭の芯が疼くように眠る気にもなれず、だらしなく足を崩した姿勢で闇を睨みながら鬱々と考え事をしていると、衣擦れの音を幽かに響かせながらお久が現れた。

「まあ、灯りもおつけにならずに」

お久は灯明に火を入れ、夫の傍らにそっと座った。

「あの、元就さま」

「……」

「お話があるのです」

「どうした？」

「あの……。これまでハキとはしておりませんでしたし、お家が色々大変な時期でもございましたので、言いそびれていたのですが」

お久は恥ずかしげに俯いて続けた。

「ややが出来たようなのです。悪阻つわりがあったので、間違いないと思います」

まったく意表を衝かれ、一瞬呆けたような顔をした元就は、

「ま、まことか・・・！」

我に返ると弾かれたように立ちあがり、喜びを爆発させた。

「でかした。お手柄じゃ。いや、そうか。それはよかった・・・！」

疲れも鬱屈も一時に吹き飛んだ想いである。

悲喜こもこも交とはよく言ったもので、人生辛いことばかりが続くわけでもない。翌年生まれてくるこの赤子こそが、元就の嫡男となる毛利隆元たかもとである。

さて。

大永二年（1522）の八月といえば、毛利元就が壬生城みぶを攻め落としたという記録が残っている。

壬生城は山県郡の壬生にある山城で、吉川氏の有田城から半里ほど北東にある。山県氏（壬生氏）という小豪族の本拠である。山県氏はもともと武田氏に属していたが、有田合戦で武田元繁が敗死すると毛利方に投降し、山県郡での吉川氏の優位が確立すると吉川氏に従うようになった。

つまり、壬生城は吉川氏の属城であったわけだが、それを同盟し

ている毛利氏が攻める、というのは、不思議な話である。まして元就に壬生城を攻めるように命じたのは大内義興であつたらしい。これもまた奇怪な構図と言うしかない。

この時期、毛利氏は尼子氏に臣従した直後である。それでも大内氏の命に従つて軍事行動を起こしているのだから、毛利氏は相変わらず大内・尼子の両属という姿勢を保持していた、ということがはつきりと解る。尼子氏に臣従しながら、大内氏との繋がりを切らぬよう画策した者がいたわけで、それはおそらく外交家として胆知と図太さとを備えた志道広良であつたらう。

安芸南東部の西条には大内氏の軍事拠点である鏡山城がある。

鏡山城を預かっているのは蔵田房信ふさのぶという大内家の重臣で、この男は安芸駐屯軍の主将でもあり、安芸の豪族たちを統御する軍団長のよつな役割を担つていたと思われる。

蔵田房信は尼子軍の安芸侵攻と芸北の豪族たちの去就を注視していたに違ひなく、たとえば「芸北の豪族たちは揃つて尼子に寝返つた様子でござる」などと大内義興に報告されてしまえば、毛利としては言い逃れができない。毛利は芸北では鏡山城からもっとも近い位置にいる豪族であり、仮に大内氏が芸北征伐を発動したとすれば、最初の攻略目標にされるのは間違いないのである。

志道広良は憂慮したのであろう。

亀井秀綱の非道によつて伯父を殺されている広良は、尼子氏に対して親しみも信頼も持ちようがない。このまま尼子に従うことが毛利家の安泰に繋がるとは思われず、元就とも密かに話合つたに違ひない。

「尼子に降るのは致し方なかつたにせよ、大内とこのまま断交するわけにも参りませぬ。預けてある人質のこともござるし、後々のことも考えておかねばなりません。ここは、やむなく降つたという態ていにしておくことが肝要かと存ずる」

広良は、安芸から尼子軍が去るや、大内氏から問責の使者がやって来る前に、いわば先手を打つ形で、自ら密かに鏡山城に赴いたか、あるいは重臣を遣わすかしたであろう。

「我らは、大内のお屋形さまから受けた恩義と大内家の多年にわたるご助成を、決して忘れてはおりませぬ。当家は微力でありますから、大内の援軍が望めぬ状況では尼子に屈するほかござりませぬ。だが、しかしながら、これはあくまで一時の権謀、詐りの和睦にて、当家は大内家に叛くようなつもりは毛頭ござりませぬ。なにとぞ、当家のとき小家の苦衷をお汲み取り頂きたく」

などと、蔵田房信に訴えたのではないか。

無論、そんな言葉だけで易々と納得してはもらえなかったであろうが、芸北での尼子派の首魁は、なんといても尼子経久の義兄である吉川国経である。毛利氏は吉川氏と共に寝返ったという意味で共犯ではあるが、少なくとも主犯ではない。また大勢力に迫られた弱小勢力が反覆を繰り返すのは、いわば当然の生理現象のようなもので、決して珍しい事例ではない。蔵田房信としても、いきなり毛利氏に制裁の兵を向けようとまでは思わなかったであろう。

「毛利は一戦もせずニ子に降ったというではないか。口先だけなら何とでも申し開きができるわ。毛利が我らの味方であるというその方の言い分が、本当だというなら、証しを立てよ。吉川を攻めてみせよ」

大内方であるということを証明するために、尼子派の首魁である吉川氏と戦ってみる。去就の踏み絵のつもりで、それくらいのこととは言ったのではないか。

元就にせよ志道広良にせよ、吉川氏との盟友関係を壊したくはなかったであろうから、どうにか戦った振りができないか、密かに吉

川国経に相談したに違いない。

ここでさらに推測に憶測を重ねることになるが、前述の山県氏はもともと武田氏傘下の豪族であり、武田元繁の敗死後、吉川氏に属することになったものの、吉川氏との折り合いが悪かったのではないか。吉川氏に従っていることに憤懣ふんまんがつもり、たとえば吉川国経が尼子軍を馳迎ちげいするために兵を集めた時、その動員に従わなかったとか、再び武田氏に通じようとしたとか、何かその手の不都合があり、吉川国経を激怒させていたのではないか。

国経が山県氏を制裁する肚つもりをこの頃すでに固めていたとすれば、なんとか筋が通る。

実際、制裁といっても難しい。半端な武力行使に出れば山県氏を武田氏の元に奔らせることになるし、山県氏を族滅して壬生一帯を奪うというのではあまりに血生臭く、吉川氏に従う他の小豪族たちも眉をひそめるであろう。敵の本拠を城攻めするわけで、味方に大量の血を流させることにもなり、いずれ上手くない。

それならいっそ、毛利軍を使って壬生城を攻めさせるというのは一案ではないか。毛利は同盟勢力であり、山県氏を武田方に奔らせて武田氏を肥らせるより、毛利に従うようにさせる方が、結果としてはマシである。毛利に貸しを作ることにもなる。

「そういうことであれば、壬生城を攻めなされ。そうすれば表向き吉川と毛利が戦ったことになるう。毛利には有田合戦での借りがあるからのお。壬生の辺りは婿殿に進呈しようではないか」

というようなことを国経が言ったとすれば、実質的には毛利と吉川が合意の上で傘下の小豪族の帰属変更を行うようなものであり、この軍事行動を尼子氏に政治問題化されるというような懸念もいらない。

大名間の外交の機微はそもそも玄妙で、証拠書類が残っているような事例は非常に少ない。まして大内・尼子という二大勢力に挟ま

れた安芸の豪族たちの去就は複雑怪奇というしかなく、実態は非常に掴みにくい。「大永二年八月、大内義興の命によって毛利元就が壬生城を陥落させた」という歴史的事実から、無理やり舞台の裏側を想像するなら、毛利氏、大内氏、吉川氏の間で、これに近いやり取りが密かに行われていても不思議はない　と筆者は考えるのだが、牽強付会けんきょうつごかいであろうか。

いずれにしても、この八月中旬、元就が毛利軍を率いて山県郡に出陣し、壬生城を攻めた、ということは間違いない。当然、元綱もこれに従軍したであろう。

「壬生城は小城だが、なかなか堅そうだ。まともに攻めては手間が掛かりそうだな」

と元綱が言ったとすれば、

「今回は秘策がある。懸念は無用よ」

と元就は自信ありげに笑ったであろう。

壬生城の城主は山県信春という男で、名門・壬生氏の嫡流だけに気位が高く、若さもあって驕慢そのものという人であったが、その叔父の山県元照は割り合い穏健な人物で、吉川国経などとも親しく話が解る。この山県元照であれば、山県氏の本領安堵さえ認めてやれば、調略にも応ずるだろう、と吉川国経から教えられていたのである。

元就にとってこの合戦は、吉川氏と戦う形を大内氏に見せるだけでよく、山県氏を族滅するつもりなどはそもそもないわけで、調略で事を済ませられるならこんな有難いことはない。それで山県氏が毛利に属し、壬生が毛利領に加わるなら、万々歳である。

元就は、城内の三の丸を守っていた山県元照と密かに渡りをつけ、夜陰に乗じて毛利兵を城内に導き入れさせ、一気に城主・山県信春

を自刃に追い込み、城を陥落させた。八月十六日のことである。

山県元照はそのまま壬生城主となり、毛利家に臣従した。元就が山県元照に宛てて発給した本領安堵と新領給付の起請文が遺っている。元照の嫡男は元就から偏諱へんきを受け、山県就照なりてると名乗り、以後は毛利家臣として活躍したらしい。

ところで、大内義興が石見の戦場から周防の山口に帰り着いたのは、壬生城陥落の前後であつたらう。蔵田房信から一連の報告を受けたのは、八月下旬であつたに違いない。

毛利氏が吉川氏を攻めたという事実を知つて、義興は悪い気はしなかつた。尼子方に寝返つた芸北の豪族たちのなかで、唯一毛利氏のみが大内方に心を残しているということを行動で示してくれたのである。

実際のところ、毛利氏は尼子軍に何の抵抗も示さず、大内派の重臣を殺してまで尼子に臣従しているのだが、その醜悪な事実が、吉川氏の城を攻め落とすという毛利軍の行動によつて、まんまと糊塗ことされる形になつた。

「すると毛利は権謀で尼子に従つた振りをしたわけか……」

話を聞いた義興は、生前の毛利興元の信義の篤さを思い出し、

「やはり家風よな。毛利は義理堅いことよ」

などと呟いて、毛利氏に対する評価をやや改めたかもしれない。預かっている人質を誅殺することも思い留まつた。

外交や政略においても重要なのは、時機である。志道広良が用いた策は非凡なものではないが、即座に動いたそのタイミングが割切がいせつであつたとは言えるであらう。

第五章 安芸激震 幸松丸（一）

鶴寿丸かくじゅまるを抱いたゆきが帰ってきて、相合の屋敷はそれまでと変わらぬ日常を取り戻した。

同じ安芸のなかでも、山深い吉田は瀬戸内海の沿岸に比べるとやや冬が早い。秋の取り入れが無事に終わった頃には、吹く風に少しずつ冬の厳しさが混じり始めた。

そんなある日の夕刻。

元綱は、兄の元就から郡山城に呼び出された。

「宮島へ往ってもらいたいのだ」

と元就は言う。

「宮島？ 厳島のことか」

「そう。その厳島神社だ」

安芸あきの一宮いっみやたる厳島神社は、芸州人にとっては別格の聖域である。宗像むなかた三女神 海上交通の平安を守護する三柱の女神 を祭神とするこの古社は、平安末期に平清盛が壮麗な社殿を建立して以来、平家の守護神として尊崇され、平家が滅びた後も歴代の天皇や時の権力者から篤い崇敬を受けている。瀬戸内の海に生きる人々はもちろん、安芸の武士たちがこの神社に向ける敬信の念は強く、大小名の当主自らが宮島へ渡り、あるいは代人を送るなどして神に物や銭を献じ、田畑の寄進を行い、戦勝を祈念したり武運長久を祈ることは、ごくありふれた風景と言っている。

「出雲のお屋形のお煎りで、幸松丸さまが明年に元服されるのはお

前も知っているな。元服なさるとなれば、それまでにどうしても厳島大明神にご挨拶をしておかねばならん」

「幸松丸さまのお供というわけか……」

元綱は即座に事情を領解（りやうかい）した。

毛利家では、本家の男子が幼少時に厳島神社を参拝することが吉例となっており、亡兄の興元も目の前のいる元就も、元綱自身も、十歳前後のときにそれを行っている。幸松丸はまだ数えて八歳だが、来年に元服して「大人」になるというなら、「子供」であるうちに宮島へ行っておくべきであろう。

「尼子が来年のいつごろ安芸にやって来るのかはわからぬが、来春早々にも動くとすれば、雪解けまでのんびり構えているわけにもいかん。この事は執権殿とも相談していたのだが、直前になって慌てるよりは、今年のうち済ませておく方が良くということになつてな」

そこで御用部屋の襖（ふすま）が静かに開き、小姓が膳を運んで来た。

元就の膳には餅（もち）と白湯（ちやうゆ）が、元綱のそれには肴（さかな）と酒（さけ）が、それぞれ載っている。

弟に酒を注いだ元就は、餅をひとつ取って齧（かじ）った。

「もう冬になる。行くなら、雪が深くなる前の今のうちが良いだろ
う」

「それはそうだが。そもそも幸松丸さまがご自身で出向かれる
というのは、危険すぎはしないか？」

言いつつ、元綱は盃を口に運んだ。

元綱や元就が畿島に参拝したのは十五年ほど昔のこと、その当時、安芸は完全に大内氏の属領であった。有力豪族の多くは大内義興に従って上洛していたわけで、どの家も軍の主力が出払っている状況であり、安芸国内は比較的平静としていた。

しかし、現在はそうではない。

宮島とその対岸の廿日市はつかいちのあたりは武田氏が影響力を保持する地域であり、つまり宮島へ行くことは、そのまま敵地を往復するということを意味していた。

毛利と武田氏は祖父・豊元の時代から仲が悪く、元就が「有田合戦」で武田元繁を討ったこともあり、武田氏にとって毛利はまさに仇敵となっている。この四年ほどはまったく断交状態であり、数にも入らぬ下士ならともかく、毛利家当主である幸松丸が武田領にいると知れば、武田氏の側が黙ってないであろう。いや、そもそも武田方の関所を通ることさえできないのではないか。

「俺が幸松丸さまの代人として参拝するというのはどうだ」

元綱の提案に、元就は苦笑した。

「お前、また姿を変えて密かに往来することでも考えておるのだろう。そんなことはさせぬよ。第一、それでは意味がない。幸松丸さまがご自身で往かれることが大事なのだ」

元就は白湯で喉を湿らせてから続けた。

「まあ考えてもみよ。私もお前も、幼い頃に畿島に参拝するまでは、毛利の領国から出たことも、海を見たこともなかったはずだ。此度のことは、幸松丸さまに広い世を見て頂き、色々なことを直に感じて頂くための、格好の機会になる」

大きな声では言えぬが　と、元就は声をひそめた。

「ごういうことでもなければ、お袋さまは幸松丸さまを城の外へ出そうとはなさらぬだろう」

お袋さまとは、幸松丸の生母であるお夕を指している。

幸松丸は、不幸にも亡父・興元の腺病質な体質を継いだらしい。風邪をひきやすく、季節が変わるたびに必ず熱を出して寝込むし、内臓も弱いのか食が細く、同世代の子供と比べても身体の発育が遅かった。お夕はそれを心配し、幸松丸を外風の風に当てることを好まず、ほとんど城から出そうとしないのである。今回の巖島参拜に關しても、お夕はややヒステリックと映るほど強硬に反対し、これを説き伏せるのにえらく手間を食った。

頑かんせはない幼児のうちならともかく、幸松丸はあと二ヶ月もすれば九歳であり、普通ならずでに野山を自らの足で駆け回り、弓を引き馬にも乗り、同世代の子供を相手に喧嘩のひとつもし、遊びから様々な経験を積んで己を育ててゆかねばならぬ年齢に達している。お夕はそれを妨げているわけで、この「お袋さま」の過保護ぶりが、元就や志道広良にとって頭痛の種になり始めていた。

義姉あねづえ上のお気持ちもわからぬではないが……。

元就は小さくため息をついた。

お夕は毛利家に嫁いでさほどの年月も経たぬうちに夫の興元を亡くし、さらに先年、父である高橋久光まで喪い、後ろ盾となつてくれる者がいなくなっている。もはや「幸松丸の母」という以外に彼女の地位を保証するものはなく、我が子にもしもの事でもあれば、その存在意義を失いかねないのである。過保護になるのもやむを得ない部分はあるが、しかし、いつまでも温室育ちで良いはずがない。幸松丸はこの乱世を武将として生きねばならぬ男であり、来年には初陣の場を踏むことさえすでに決まっているのである。虚弱な体質自体は急に改善されるものではないが、あのひ弱げな甥っ子に、

少しでも多くの経験を積ませ、わずかでも知見を広げる機会を与えてやりたい。幸松丸を立派な主君へと育てることは、毛利家にとってもっとも重要な「政治」である、とさえ元就は思っていた。

「道中の危険については私もよくわかっているつもりだ。道々の領主に対しては打てるだけの手は打った。武田方の許諾も、実はすでに得てある」

元綱は驚いた。

「よく武田が許したな」

「毛利も武田も同じ尼子方だからな。やりようはあるさ」

武田氏は反大内の家であり、尼子氏とは強い同盟関係にある。毛利が尼子家に属することになった現在、同じ旗を仰ぐ味方であるとも言えた。元就はこのことを利用し、尼子経久に話を通し、尼子氏の側から下拵えをしてもらった上で、武田光和みつかずに使者を遣わしたのである。

これは、武田との関係を修復する契機きっかけにもなり得る。

と考えたのだから、元就も抜け目がない。

余計なことかもしれないが、この頃の武田光和の正室は、吉川元もと経つねの娘である。この女性は元綱の姉である松姫が生んだ子ではなかったかもしれないが、吉川国経の孫娘であることに違いはなく、元就の妻であるお久から見ると姪に当たる。元就はこちらの筋からも働きかけをしたに違いない。

ついでながら元就には同腹の姉（宮姫）がおり、武田氏の一族の武田信正という男に嫁いでいた。亡父・弘元が武田氏との関係を改善するために行った政略であったろう。この武田信正というのは資料の少ない人物で、当主・武田光和との関係も不明なのだが、嫁い

だ宮姫の年齢から推測するなら、光和の従叔父か、再従兄いとこあじというあたりが妥当であるかもしれない。この当時、宮姫はすでに亡くなっていたとする説もあるのだが、もし存命であったとすれば、元就はこの姉にも手紙を送って側面支援を依頼したであろう。

ともあれ、話を聞いた武田光和は、露骨に不快な顔をした。

「元就め、ようもぬけぬけと申してきたものよ」

この若者にとって、元就は父を討った憎むべき仇であり、好意を持ってようはずがなかった。

光和はこのとき十九歳である。豪勇で鳴った父から受け継いだ立派な体躯を持っており、その膂力じりぢりぢくの凄まじさは、六、七人張りの剛弓をやすやすと引き、放った矢が人馬を重ねて射通すほどだったと『吉田物語』にある。まさに剛強の武人というべきだが、しかしその性格は一廉ひとかどの政略家であった父より遙かに粗雑で、自尊心が強く人や物に対して好悪が烈しく、ひとたび物事にのめり込むと欲望に自制が利かなくなるという悪癖がある。

この時も政治をまったく顧慮せず、

「毛利の幼君がわざわざ首を運んで来るといふのだ。望み通り獄門台に据えてやればよかるう」

などと放言した。

しかし、この青年の周囲には、名門・武田氏を長年にわたって支える有能な重臣たちが揃っている。強大な大内氏と敵対する武田氏にとつて、尼子方の援軍はまさに命綱であるから、内藤修理亮しゅりのすけ、木民部大輔みんぶだいすけ、品川左京亮さきまのすけ、伴五郎といった者たちが、感情に走りがちな若い主君を口々に諫めた。

「ご短慮はなりません。よくよくお考え頂きたく」

尼子経久からの要請を突っぱねれば、諸豪族の盟主としての経久の面目を潰すことになるであろう。「有田合戦」の当時からすでに時勢は変わっており、毛利は今や尼子に属する味方なのである。まして幸松丸は十歳にも満たぬ子供であり、先君の戦死にはまったく係わりがないし、その幼さで自ら政戦を行っているはずがないから殺したところで毛利家が弱体化するわけでもない。わずかな鬱憤晴らしのために、尼子経久の機嫌を損じ、尼子方の諸勢力との関係が悪くし、毛利氏の怨みと世の悪評を買っ、というのでは、まったく間尺に合わないではないか。

光和は不愉快極まる顔でそれらの切言を聞いていたが、理屈がわからぬほど暗愚な男でもない。

「その方どもがそれほどまで申すなら……」

としぶしぶ折れ、幸松丸一行が武田領を通行することを黙認したのである。

しかし、用心深い元就は、この黙許をそのまま信じてはいない。幸松丸が関所で捕えられたり武田方が表立って軍を動かしたりすることはないだろうが、たとえば裏で密かに浪人や無頼漢を雇い入れ、土匪（賊）を装って幸松丸を襲撃させる、といった可能性はないとは言えない。幼君の護衛には屈強な武人を付ける必要があるであろう。

「関所を通してもらえるのは、供を含めて十人までと釘を刺された。そこで、お前に幸松丸さまの警護を頼みたいのだ」

と元就は言った。

元綱の武勇は家中でも屈指であり、戦場における機転を見れば応変の才覚があることも解る。その郎党がつわもの揃いであることも

知られている。これ以上の人選を元就は思いつかなかつた。

「話はわかつたが、俺が厳島に行ったのは、かれこれ十五年も昔のことだ。幼かつたし、道もほとんど憶えておらんぞ。案内の者は付けてくれるのだらうな」

「もちろんだ」

元就は鷹揚にうなずいた。

この時代、寺社参詣のための旅の世話は、御師と呼ばれる人々が務めている。御師というのは参拝客の道案内や宿所の世話などをする下級神職と思えばいい。一般に庶民の間で寺社詣りがブームとなるのは江戸期のことだが、この時代にも相応の数の御師がいたことが知られており、一例を挙げれば、たとえば伊勢神宮の場合、室町期ですでに宇治山田に百数十軒・数百人の御師がおり、日本全国を行脚して喜捨を集め、参拝客を誘致していたという。

この時代の寺社は、莊園や領地を武家に横領されて経済基盤を失いつつあり、参拝客が落としてゆく銭や寄進が重要な財源になっている。大名や豪族は寄進の額が大きい大檀那であり、いわば上客であるから、その応接は丁重で、案内役には上級神職が自ら出向いて来ることも珍しくない。

「道中のことは厳島の棚守に頼んである。お前も昔世話になつたはずだから知つているな」

棚守というのは厳島神社の上級神職で、社務を運営し、様々な神事を執行する純然とした神職であり、神主家の相継争いや諸勢力の紛争といったものからは半ば超然としている。大宮棚守、客人宮棚守、外宮棚守という三職があり、毛利家では父祖の時代から、大宮棚守の家の者が御師役を務めるのが慣例になつていた。

「この数日のうちに、大宮棚守から人が来てくれることになっている。道案内や宿所などのことはすべて任せておけばよい」

手酌で飲みつつ元綱は確認した。

「関所を通れるのは十人だと言ったな。棚守やその従者もそこに含めるのか？」

「いや、棚守は毛利の人間ではないから数に入れずともよいだろう」

「ふむ」

「言い忘れたが、幸松丸さまには傳人子めづりの福原弥五郎やじろが随従する」

福原弥五郎は長老・福原広俊の曾孫で、元就の伯父である左近允ささねのじょう貞俊の孫に当たる。このとき十一歳。福原氏は歴代の当主の諱いみなが広俊 貞俊 広俊 貞俊と繰り返すために非常に紛らわしいのだが、この少年は元服後に下総守貞俊しむすねのかみと名乗ることになる。ちなみに弥五郎の父が出羽守広俊でわのかみで、幸松丸の傳人めづりを務めている。

「ならば護衛は俺を含めて八人ということだな……」

旅程としては、吉田から可部街道を通って南西に四里ほど進み、国境に近い井上氏の阿賀城あがで一泊する。翌日、武田方の熊谷氏の領国に入って二里ほど歩き、可部の川湊かわみなとから舟に乗って太田川を下る。河口の五箇所ごかしょ（広島）からは五日市を経て廿日市まで歩く。廿日市で一泊し、翌日、宮島へ舟で渡る。

虚弱な幸松丸のことも考慮し、かなりゆったりとしたスケジュールである。

「大雨でも降れば別だが、片道三日、往復で六日ほどと考えている」
ふたつ目の餅に手を伸ばした元就は、それを口には運ばず、手のなかで弄びつつ続けた。

「幸松丸さまをお守りするには万全を期したい。何か策があれば言ってくれ」

「可部からは舟で川を下るのだったな……」

元綱は考えながら呟いた。

「五箇所の舟着き場には番所があったはずだ。あれは武田の番所ではなかったと思うが」

太田川下流の水運を押さえているのは白井氏という半独立の小豪族である。白井氏は大内氏に属しているから、武田氏に従っているわけではないが、そのあたりは元就も抜かりはない。鏡山城の城代である蔵田房信ふさのぶから密かに手を回し、通行の了解を取りつけておいた。

「それなら舟に乗ってしまえば大事はないか。危ないのはやはり熊谷の領地だな」

「『中井手』で民部少輔みんぶのしょうぶ（熊谷元直）を殺してしまったから……」

元就が憂鬱な顔をした。

盟主である武田氏の側から話を通っていたらしく、熊谷氏に打診

したところ関所の通行は許可してくれたが、武田氏と同様、熊谷氏にとつても毛利は仇敵なのである。熊谷氏は武家の名門であることに強い誇りを持っている族だから、わずか八歳の幼童を騙し討ちで殺して快哉を叫ぶほど陋劣ではないと信じたいが、たとえ首脳陣にその気がなくとも、勝手に暴走する跳ねっ返り者というのはどの家にもいるものであり、樂觀は許されない。

「腕の立つ下士を二十人ばかり、浪人や物売りなどに化けさせて、一行を密かに守らせようと思うが」

元就の提案に元綱はうなずいた。

「悪くないな。土匪が出たときなどには役に立つだろう。で、それを誰に束ねさせるつもりだ？」

「左衛門太郎ではどうだ」

桂元忠もとただのことである。元就が幼い頃からその近侍を務めている青年で、老臣・桂広澄きひろみの次男坊である。煌めくような知恵才覚があるわけではないが、性質に厭いやな癖くせがなく、強い責任感と堅実な実務力とを持っていて、仕事に骨惜しみをしない。

「ああ、あの男なら良い。軽率なことだけはせぬからな」

「武田にせよ熊谷にせよ、あからさまに軍を動かすことはないはずだが、万一ということがある。何かあればすぐに関所を破って駆けつけられる兵を、国境くにがきに伏せておこうと思うが、どうだ」

これには元綱は失笑した。

「無用だ。何かのはずみで熊谷方と小競り合いにでもなれば、それこそ話がややこしくなる」

「それはそうだが」

「あのな、兄者。我らは敵地のと真ん中を歩くのだ。武田なり熊谷なりが、なりふり構わず幸松丸さまを殺しにくるとすれば、護衛が八人やそこらでは、どれほど腕利きの武人を揃えたところで、どのみち防ぎようがない。国境に兵を伏せておいたとしても間に合わぬさ」

「おいおい、防ぎようがないでは困る」

元就は気色を険しくした。

「策というのはそこまで計算に入れた上で立てるものだ」

「……どうするといふのだ」

悪童のような笑みを浮かべた元綱は、身を乗り出して兄に顔を近づけ、声を落として言った。

「俺が宰領する一行には幸松丸さまの影武者を立てる。これはいわば囷おとくりだな。本物の幸松丸さまには、たとえば巡礼などに姿を変えて頂き、二、三町ばかり後ろを歩いてもらえばよい。無論、屈強の者を一人護衛に付ける。前をゆく一行に変事があれば、この者が幸松丸さまを即座にお落としする」

元就は堂目した。

毛利の家中以外で幸松丸の顔を見知っている者などほとんどいな

いから、たとえ巡礼姿の子供を見たとしても、それを毛利家の当主と見破れる者はまずおらぬであろう。最悪、一行が全滅しても、幸松丸一人は逃がすことができる。

「万全を期すというならこれしかあるまい」

元綱は事もなげに言った。

元就は優れた戦略家であるが、戦術家としてはおそらくこの弟に及ばない。その差であると言ってしまうえばそれまでだが、具体的な実施面における元綱の発想や手腕には、やはり非凡なものがある。

「人に虚実を悟らせぬのは、『孫子』の兵法へいほうだな。人を致いたして、人に致されず、か……」

敵を思い通りにさせて、敵の思い通りにならない、ということである。孫子の兵法へいほうの極意と言っている。

「このことは他言無用だ。敵を騙すにはまず味方からというからな。知っておるのは兄者と左衛門太郎だけ、ということにしておいてくれ」

相合の屋敷に帰った元綱は、主立つ者たちを集めて事情を説明し、従者の七名を選抜した。近侍と配下の雑兵のなかから武術に優れる者を六人、何かの時の連絡要員として足が速く度胸の良い男一人を選んで連れてゆくことにした。

さらに配下の家族のなかから幸松丸と同世代の子供を密かに用意し、重蔵には、本物の幸松丸を護衛する密命を与えた。

「重大なお役目ですな」

重蔵が重々しい声で言った。

「危ないとすれば熊谷の領地だと思っが、蔵島神領家の廿日市に入るまでは安心はできぬ。見ることができぬギリギリまで離れて、俺の一行の後ろを歩いてくれ。土匪のたぐいが出たくらいのことなら大事にはなるまいが、万一、敵が軍を動かして俺たち一行を襲うよなことがあれば、その時はこちらに構わず、お前が幸松丸さまを毛利の領内までお落としするのだ。できるか？」

重蔵は正直なところ元綱と行動を共にしたい。が、ここは、毛利本家の若き主君を自分に託してくれた主人の信頼に応えねばならぬであろう。

「一命に代えても、必ず」

使命感に駆られた重蔵は、強くうなずいた。

「装束は巡礼ではなく、修験の行者の物を用意して頂けますか。わしは昔、鞍馬山や愛宕山の修験者と接しておりましたので、あの者らの真似ならばすらすらとできます。番所の役人にも見破られぬ自信がござる」

「ほお、役人でも謀ることができるか。まるで『安宅』の弁慶のようではないか」

「ありませぬ勸進帳を読みあげることにはできませんが。それでも不動真言や天狗真言くらいなら空で言えます」

元綱の軽口に笑って応えた重蔵だが、失敗が絶対に許されない役目であることは重々わかっている。

重蔵は、翌日から二日を掛けて毛利領と熊谷領の国境を自ら歩き、万一のときの逃走経路 関所を迂回できる山越えの間道 を下見して回った。

重蔵が相合に戻ってきてから三日後、厳島神社から大宮柵守の使いが荷担ぎの小者一人を従えて吉田にやって来た。

「父の代人として罷り越しました。野坂房頭と申します」

鮮やかな藍色の狩衣を着、風折烏帽子をかぶっている。年は意外に若い。まだ三十に届かぬであろう。中背にしてやや小太りで、頬の肉がふくよかである。目蓋が厚く、目尻が垂れていて、いかにも人の良さそうな面相をしている。

「向後はわたくしがご当家の御師の役を務めさせて頂くこととなりますので、どうぞよろしくお願い申します」

と、房頭は丁寧に頭を下げた。

厳島神社は、今後はこの若者を通じて毛利家と師檀関係を結ぶらしい。碎いて言えば、房頭が毛利家を担当することになった、ということである。

ところで、郡山城の南山麓には「お里屋敷」と呼ばれる居館がある。城は籠城のためにあるもので、評定や公式行事も城の大広間で行われるのが常だが、お夕や幸松丸は日常的にはこちらの居館で暮らしているのである。

このお里屋敷に房頭を迎え入れた元綱は、元就らを交えて旅程の打ち合わせを行った。

話してみても、

兄者とは相性が良さそうだ。

と、何となく思った。

元綱が好む武辺者肌のタイプからは遠いが、房頭の言葉づかいはいかにも文化人といった雅味があり、職業から学問があるのは当然としても、その性質にはやわらかさを伴った敏活さがあると見た。一を聞いて十を知るとは言わぬまでも、六とか七くらいは察しそうなほど頭が良く、それを厭味と思わせない謙虚さをも備えている。

房頭は大宮柵守の代人であり、いわば葦島神社の代表である。その夜は居館に重臣たちを集め、宴を催して大いに歓待した。

房頭は座談が巧く、人当たりも良い。酒が進むと、座のあちこちで陽気な雑談に花が咲き、賑々しい宴席となった。

この陽気な空気のなかで、独りうち沈んだ気を発している者があ

る。

お夕であった。

お夕は上座にあつて幸松丸の隣にひっそりと座っている。よほど思いつめているのか、額のあたりの血筋が透けるほど蒼白となっており、濃いまつげのあたりに憂愁がただよい、灯火に浮かび上がるその美貌は、月光に照らされた花のようであった。

その淑美を見るたび、

薄幸な女ひとだな。

と元綱は思い、少なからぬ同情が湧く。

兄の興元が生きていれば、もつと穏やかで心豊かな春秋を謳歌できたはずであるのに、現在のお夕は心頼みとする人を次々と喪い、我が子に対する想いばかりが強くなつて、寝ても醒めても心休まる時がないのであろう。

実際、お夕は幸松丸を危険な敵地に入れることが心配でならず、居ても立ってもいらぬような不安のなかにある。彼女の悲愴な胸中を理解しない男どもの無理押しのでいで、もはや事態は動かし難いところまで進んでしまっているのだが、できるものなら今からでも葦島参拝を中止させたいというのが本音であった。

口にこそ出さないが、

「多治比殿と執権殿は、幸松丸を殺そうとしているのではないか」

と邪推するところまでお夕は思いつめている。

幸松丸が死ねば、毛利家の家督を継ぐのは先君・興元の弟である元就か元綱であろう。幼長の序からいって、元就がその座につく可能性は極めて高い。元就が家督を欲しているとすれば、幸松丸さえいなくなれば願望を遂げることができるわけで、これを弑する機会をうかがっていたとしても不思議はないのである。この思考の飛躍は、高橋久光の娘であるお夕にしてみれば飛躍でもなんでもなく、圧倒的な恐怖感を伴う切実な現実であった。

そもそも高橋氏は吉川氏と長年敵対していた歴史があり、お夕の父である高橋久光は、吉川氏と何度も戦火を交え、国人一揆の盟約を交わした後も内心で吉川氏を嫌い続けていた。元就が吉川氏の姫を正妻に迎えるや、元就を毛利家中の吉川派の首魁と見做して政敵視し、その娘を人質に取ったことでもそれがわかるであろう。夫の興元亡き後、お夕はその父を唯一の後ろ盾として過ごしていたわけで、当然のように父と同じ感情に染まっている。

多治比殿は信用できぬ。

高橋久光によって娘を奪われた元就が、久光の娘であるお夕に好意を抱くはずがないであろう。そのお夕が生んだ幸松丸を愛してくれるか　と考えれば、暗澹あんたんたる気分にならざるを得ない。

お夕はそういう感情の眼で元就を眺めているから、元就と昵懇である志道広良に対しても信頼を抱きようがなく、その二人が強引に推し進めようとする敵島参拜には、伏魔殿ふくまてんのごとき禍禍まがまがしさしか感ずることができない。

口元を引き締めて決然と顔を上げたお夕は、

「相合殿

」

と強い声で元綱を差し招いた。

元綱が罷り出て御前に座ると、お夕は床に両手をつき、

「相合殿、幸松丸のこと、よろしゅうお頼みします」

と言つて、丁寧に頭を下げた。

この道中、我が子を守ってくれるのは、神仏以外には元綱しかないのである。この現実が、お夕の危機感を強烈に刺戟していた。

幸松丸に代わつて評定の席に座ることもあるお夕は、元綱がどういふ男かということに彼女なりに観察している。

この義弟の性情は、誠実で温厚であつた亡き夫にどこか通うものがある。やや気ままで身勝手なところはあつたものの、権力に執着するよつな性質は持つておらず、党派的な色合いもない。あえていえば高橋久光とは相性が悪かつたようだが、かといって吉川氏にことさら肩入れしたこともなく、お夕自身に冷眼を向けてきたこともない。

いや、そういう考察の以前に、

この人は、わたくしと幸松丸に悪しゅうはせぬ。

ということが、お夕にはわかるのである。女には男の真価を一瞬に洞察する眼があり、その直感が彼女にそう囁いていた。

「幸松丸にもしものことがあれば、わたくしは生きてはおれませぬ。相合殿、後生です。どうか幸松丸のことを守つてやってください」

お夕は必死な眼でそう訴えた。

元綱は弱者に対する憐憫の情が強いところがあり、女から頼られることには特に弱い。それが幸薄い美女から出た哀願となれば、何をかいわんやである。

「心配は無用です。幸松丸さまは必ず無事にお歸し致しますゆえ、

どうか安んじてお待ちください」

ことさら頼もしげに答え、隣に座る甥っ子に笑みを向けた。

「幸松丸さま、宮島行きは楽しゅうござるぞ。厳島の壮麗な社殿、天にそびえる唐様の五重塔、青い海に立つ真つ赤な大鳥居などは、その美しさ、素晴らしさ、筆にも言葉にも尽くせず、安芸に生きる我らの誇りとするところぞござる。その目でご覧になれば、きつと肝を潰しますぞ。また、山育ちの我らにとって、海の雄大さ、瀬戸内に浮かぶ島々の景色の面白さは、また格別ぞござる」

少年は無邪気に眼を輝かせた。

「叔父上、早う見てみたい」

「あはは、いましばらくのご辛抱ぞござる。今宵を入れて、あと二度お眠りになれば、明後日の夕刻には宮島を遠くに眺められましよう」

はしゃぎ気味の少年の隣で、その母は何かをこらえるような沈鬱な表情を変えなかった。

翌朝、日が高くなる前に元綱たちは居館を出立した。

元就は旅費とは別に、厳島神社への進物として拵えの見事な太刀を一振、般若心経の写経一巻、時服一重を用意し、さらに米十石（二十五俵）が買えるだけの銭を用立ててくれていた。実際に米を運ぶのは手間だから、その分の銭を寄進するのである。

「別当の大聖院にも必ず参拝し、寄進を届けてくれよ」

「承知した」

馬上の幸松丸を中心に、主立つ人々はみな馬に乗り、護衛の兵が五十人ほどその前後を囲んでいる。

「ゆくぞ！」

と元綱が声を張り上げると、一行は歩武を揃えて進み始めた。

吉田の集落を抜けて多治比川を渡り、江の川に沿って南西へと進む。山々は冬枯れて生彩を欠いているが、天気は悪くない。やわらかな陽を浴びながら元綱も馬に揺られた。

初日の移動は四里ほどであるから、ゆっくり歩いても半日も掛からない。途中で一度昼の休息を挟みつつ、山壁の間を縫うように可部街道をひたすら進み、日があるうちに阿賀城あがに入った。

阿賀城は井上光貞みつさだという男の城である。井上一族は族人が多く、宗家と分家、兄弟や親戚関係の把握が非常に困難のだが、光貞の弟の元貞もとさだが十五老臣に名を連ねているから、光貞の系統は井上一族の中でもそれなりの有力者であつたらしい。

「よつこそお出でくだされた。今宵はごゆるりとおくつろぎください」

主君を我が城に迎えるのは名誉であるから、井上光貞は満面の喜色を浮かべて一行を歓待した。

翌日はあいにくの曇り空だった。

この時期、日の出は遅い。ゆっくりと朝餉を取り、出立の支度を終えると辰たつの刻（午前九時）を過ぎた。

元綱は一行を集め、叔父として若き主君に呼び掛けた。

「幸松殿」

「はい」

「我らは今日より毛利の領国を出て、いわば敵の地を歩きます。武田、熊谷などにとって、毛利は先君の仇であるによって、幸松殿を殺めんとする不埒者が現れぬとも限らぬ。おわかりになるうか」

「わかります」

少年の顔つきが真剣なものに変わった。

「私を害そうとする敵があるかもしれぬのですね」

「たとえ敵が現れようとも、我らは必ず幸松殿をお守りし、毛利の領国にお歸しせねばならぬ。そこで、敵の目を欺くために、今日一日、幸松殿には我らから離れて歩いて頂くことにした」

幸松丸は考えるような目つきをした。

この少年は頭が良い。毛利家は文章博士の末裔という家であり、その当主として恥ずかしくない教養を身につけさせるべく、お夕は幸松丸の教育には熱を入れ、郡山の満願寺に早くから通わせていた。その教本は『源氏物語』のような古典はもちろん、四書五経や『史記』といった漢籍にまで及んでいる。むろん資質は書物に精通するだけで開花するというわけではないが、歴史を知るということは過去に実際に行われた人の営みを知ることであり、聖賢が遺した言葉や古人の行蔵について考えることは、人の思考に幅を与えてくれる。幸松丸は優秀な受容力を持っており、体質こそ虚弱だが、その知能は同世代の凡百と比べてはるかに優れていた。

「一行に私がいるように見せかけ、私は一行から離れるというわけですね」

「我らがお側そば近くにおらぬのはご不安でもあるうが、廿日市という町に着くまでのことでごござる。ご辛抱頂けようか」

「私にはわからぬことばかりで、どうすることが最善であるのかもわかりませんが、叔父上がお考えなされたことならば、それがもっとも良いのだと信じます。叔父上のお言葉の通りにします」

うなずいた元綱は、修験者に姿を変えた重蔵を呼び、少年の前に控えさせた。

「この男は、京の御所を守る『北面の武士』の末裔すえにて、羽田重蔵と申す刀術の達人でござる。今日よりはこの男が、付きつきりです。幸松殿をお守りします」

「重蔵とお呼び捨てくだされ」

重蔵が頭を下げると、少年は鷹揚にうなずいた。

「重蔵、よしなに頼む」

元綱は幸松丸を着替えさせ、小さな行者を作った。

毛利領を移動するだけの一日目は馬を使うが、舟に乗る関係で二日目からは全員が徒歩かちになる。旅の荷物や奉納の品などは菰こもや布袋に包んで背負って歩くわけだが、元綱はその中に半弓を一張り忍ばせることにした。

衛兵に囲まれた元綱の一行が阿賀城を出立すると、それにやや遅れて、修験者に姿を変えた重蔵と幸松丸が街道を歩き始めた。

第五章 安芸激震 幸松丸(二)

薄曇りの空を切り裂くように疾る孤影が見えた。

大きく翼を広げたその影は、どこかくすんだ山並の上をすべるように飛び、二度、三度と美しい弧を描いて旋回した。

幸松丸は足を止め、白い天を見上げた。

あれは何という鳥であろう。

傍らに立つ男にそれを問うてみた。

顎をあげた男はしばらく空を眺め、

「隼か。いや、もっと大きゆうござるな。鷹か鷲か、いずれか
でござろう」

と曖昧なことを言った。

この少年は、隼も鷹も鷲も、間近で見たことがない。

「隼というのは鷹や鷲より小さいのだな。では、鷹と鷲とではど
が違うのか」

「あらためてそう問われると答えにくうござるな……」

男 重蔵は、苦笑しつつ首をひねった。

「似た鳥でござるが、小さなものが鷹、より大きなものが鷲、であ
りましょうか。鷹野、鷹狩というのはありますが、鷲野、鷲狩とは
言いませんから、あるいは、人が飼いならせるものを鷹、人に懐か
ぬものを鷲、という風に分けておるのやもしれません」

「ふむ……」

少年は前方に視線を戻した。

山壁が迫る谷状の街道は左右にぼつりぼつりと百姓家が建ち、わずかに畑が拓かれている。三町ほど先に元綱らの一行の後尾が小さく見え、さらに行商人風の男、柴を山のように背負った百姓夫婦が歩いている。

少年が再び足を動かし始めると、右手に握った杖の先で遊環ゆかんがリズムを刻んだ。

「鳥にも、人に懐く鳥と懐かぬ鳥があるのか」

「ございます。多くの鳥は、餌を与えて飼うておれば自然と慣れてゆくものですが、たとえば雀すずめなどは、性が恩知らずなのか、どれほど餌をやってもちいとも懐きませぬな。まあ、同じ種類の鳥でも、懐きやすいものとなかなか懐かぬものがあります。そのあたりは人と同じであるやもしれません」

「重蔵は鳥に詳しいのだな」

「いえ、特に詳しいというわけではありませんが」

「これまで私に鳥のことを教えてくれた者なぞ一人もおらぬ。皆、知らぬからであるう。皆が知らぬことを知っておるのだから、そなたは詳しいのだ。違うか」

幸松丸の論理には子供なりの明晰さと曖昧を嫌う厳しさがある。適当な答えを返せばこの少年を失望させそうだと感じた重蔵は、やや気構えをあらためた。

「拙者は、京の西の愛宕山あたごという山の近くに生まれました。生家は

貧しく、山の恵みに援けられて育ったようなものゆえ、山稼ぎで暮らす者たちにも少しは知り合いがあるのです。それらのなかに、鳥を獲ることを活計たくぎとしてゐる者がおりました。鳥に詳しくしたのはその者で、拙者はその者から少々教わつたに過ぎません」

「ふむ。もつともつと詳しい者がおるといふのだな。では、その者のことを聞かせよ」

「名を与助よすけと申しまして、歳は四十がらみで、三十年も鳥を獲つて暮らしておると申しておりました。与助は飛んでおる鳥を弓矢で射落とすことはできませんだが、木々の間に網あみで罟おを仕掛けたり、鳥の巢を探してそこから雛ひなを盗つたりして、鳩や雉きし、山鳥や雁かりがねなど、食える鳥なら何でも獲つておりましたな。ごく稀にですが、鷹や隼なども得られることがあります、そればかりは食わずに売つておりました」

「鷹を売るのは鷹匠たかじょうではないのか」

「鷹匠も鷹を売りましょうが、鷹匠の仕事は、売ることよりも、鷹が人に懐くように躡しつけ、狩りができるように仕込むところにあるのです。これは根気の要る仕事でして、立派な鷹に育てるまでには長い年月が掛かります。ゆえに、欲しがる者に売つてしまつ方が手つとり早いわけです。鷹狩は銭の掛かるものですから、それを好む者は、必ず高位の公家か、武士でもよほど大身の者です。鷹や隼の子供を持ってゆけば、喜んで多くの銭を出すのだそつで」

「面白い。そのような商売があるのだな」

少年の眼が好奇に輝いている。

「山には、百姓のように田や畑で作物を作るといふことをせず、山の恵みだけで暮らしておる者たちが大勢おります。木地師きじしや炭焼き、漆掻うるしかき、四ツ足の獸を巧みに獲る獵師もおりますし、山菜やまなや薬草やくそうに詳しい者のなかには、松茸まこ茸を探す名人や、山芋やまいも掘りの達人などおられます。この辺りの山々にも、そのような者たちが必ず暮らしておりますよ」

「ふーむ、そういうものか」

幸松丸は感心したように大きく息を吐いた。

自分が考えたこともないような方法で暮らしている人間が、この世にはたくさんいるらしい。世知をはぐくむ機会の少ないこの少年にとつて、このことは新鮮な驚きであつた。

幸松丸が日常的に接する人間といえば、家僕や母に仕える侍女などを別にすれば、そのほとんどが武士であり、いずれも自分にかしづく家来たちである。わずかな例外を挙げるとすれば、学問の師である満願寺の住職とその弟子たち、興禅寺の医僧いそうや吉田の薬師くすりし、清すが神社の神主、たまに屋敷にやつて来る町年寄りや大百姓といったところであろう。それ以外の種類の人間とは口を利いたこともなく、せいぜい「この世には様々な物を売る商人と、様々な物を作る職人がいる」という程度の知識があつたに過ぎない。それだけに重蔵の話は面白く、心の視界が開けてゆくような快感があつた。

思えば、この重蔵のような者ともこれまで接したことがない。家来の家来　つまり陪臣ばいしんと直に話をしたのも、この日が初めてだつたかもしれない。ましてこの重蔵という男は、自分の周囲にいる「普通の武士」　代々毛利家に仕えている者たち　と比べると、かなり毛色が違っている。

叔父である元綱の言葉を信じるなら、重蔵は「刀術の達人」であるという。しかし幸松丸は、重蔵から鋭気や怖さや不気味さといったものを少しも感じない。重蔵が発している雰囲気はむしろ平凡で、

その人柄の良さ、話ぶりの誠実さといったものは、子供の感受性に素直にかよつてくるところがある。重蔵より乱暴な男や強そうな男なら毛利家中にいくらでもいるのだが、しかしこの善良そうな重蔵が、ひとたび刀を抜けば、それらの男をたちどころに斬り殺すことができるというところに、刀術、剣術といった技術の玄妙さがあると言えるであろう。

考えてみれば、血に飢えた獣のような猛気を常に発している男がいるとすれば、それはただの狂人である。

平素は平凡で、その平凡が一瞬で非凡に変わる。

だからこそ達人なのだろう、と少年は考えた。

文事にかたよった教育を受けてきたとはいえ、幸松丸とて武士として生まれた男であることに違いはなく、武勇に憧れる年頃でもある。傍らを歩く重蔵という男に、少年は強い興味を持った。

「重蔵は京の都の近くで育ったと申したな。京は、この安芸からずいぶんと遠くにあるのであろう。であるのに、そなたはここに居り、あいあう相合の叔父上の家来である。なぜか」

「話せば長いような、短いような」

重蔵は困ったように笑った。

「長くともよい。聞かせよ」

少年は機嫌の良さそうな口調で言った。歩き続けて温まった身体に、初冬の風が心地良い。

重蔵は自分の半生と安芸にやって来た経緯などをつらつらと語った。初めて耳にする単語や事柄が多かったはずが、それでも幸松丸は時おりの確な質問をし、理解力の良さを示した。

幸松丸さまとはこういうお子か。

世俗から隔離するようにして過保護に育てられた虚弱な若殿

というイメージだけを重蔵は持っていたのだが、しかし、こうして直に接してみて、ただひ弱なだけの子供ではないということに気付いた。

幸松丸の眼には強い理知の光があり、その拳措や言動には自然の威のようなものさえほの見える。加えてその声が良い。声変わり前であるから音はやや甲高いが、聞く者に快活さが沁みて来るような明るい響きがある。わずか二歳で父を亡くし、以来、母の過度なまでの愛情と群臣の期待のなかで育ったというこの少年が、放恣に奔ることも、周囲の重圧に押し潰されることもなく、その性質に厭な歪みやねじれを生じさせなかったのは、毛利家にとって実に幸いであつたと言わねばならない。自身の賢良さに囚るところも大きいだろうが、おそらく傳人（養育係）の教導が良く、学問の師にも恵まれたのであろう。

将来が楽しみな若君よ。

と重蔵は想い、毛利家の未来に明るい光を見たような気分になつた。

街道は、多少の起伏はあるものの、おおむねなだらかな下りである。二里ばかりの行程は一刻ほどで終わった。凶事は何事も起こらず、幸松丸にしてみれば、あつという間に時間が過ぎたような感覚だつた。

行く手の正面に屹立するのが松尾山である。その山が視界のなかで大きくなってゆくにつれ、街道を往来する人の数が多くなつた。畑より田が目立つようになり、人家もずつと増えた。

「にぎやかになってきた」

と呟いて、少年は独り笑つた。

旅というものの楽しさを、幸松丸はそろそろ実感し始めている。

未知の土地にゆくことは、眼にするものすべてが目新しく、どちら

を向いても飽きるということがない。

松尾山には熊谷氏の本拠城が築かれており、その山麓に可部の城下町がある。可部街道（出雲街道）と石見街道が交わるこの町は、太田川（当時は佐東川と呼ばれていた）の水運にも恵まれ、交易の中継点として栄えていた。町屋は吉田に劣らぬほど多い。

阿武山の裾を巡るように西から流れてきた太田川は、可部の城下で大きく湾曲し、南へと流れを変える。川辺には多くの納屋（蔵）が建ち、広々とした河原に川湊がある。河原へ降りる土手に番所が建てられ、そのすぐ脇に木戸が置かれ、木柵が通行を遮っていた。

木戸に並ぶ人の行列の最後尾で重蔵たちが足を止めると、元綱たちの一行が川辺で舟を待っているのが見えた。

口調や態度から素性を怪しまれぬように、人があるところでは喋らないように幸松丸には念を押してある。

「追いつきましたな」

と眼で語りかけると、幸松丸は無言で笑貌を返してきた。

見守るうちに、元綱たちが乗り込んだ舟が岸を離れた。舟が出るたびに人が次々と木戸に吸い込まれてゆく。

やがて重蔵らの番が巡ってきた。

五人ばかりの番士が木戸と番所の周囲に立っている。

修験者は世俗を外れた宗教者であり、関銭は取られない。重蔵が会釈して木戸を抜けようとすると、番士の一人が槍の柄で通行を妨げた。

「行者殿、生国とお名、どちらまで行かれるかを明かされよ」

その男の顔つきを見て、重蔵は内心でホッと胸を撫で下ろした。

重蔵は五年前、この城下の熊谷孫次郎の屋敷に二ヶ月ほど寄寓していたことがあり、城で行われた御前試合にも出場したので、熊谷

家の武士のなかには重蔵の顔を憶えている者も当然あるはずである。その点だけは懸念していたのだが、幸いなことにこの番士は、修験者に姿を変えた重蔵をかつての兵法者であると見破ったわけではな
いらしい。

しゃん。

重蔵は錫杖じゆんげうで地をひとつ叩き、昂然と胸を張った。

「拙僧は愛宕大権現あたしを奉ずる修験の行者にて、生国は山城国葛野郡かどのこおり名を妙善坊みょうぜんぼうと号す。京の愛宕神社を創建された神変大菩薩じんべんだいぼさつさま（役行者）の足跡そくせきを辿り、遠く豊前ぶんぜんは英彦山ひしこへとゆく廻国修行の途次にてござる」

あらかじめ考えてあつた台詞をすらすらと口にした。

ちなみに妙善坊というのは重蔵が愛宕山で剣術修行をしていた頃に懇意になつた行者の名である。重蔵は足腰を鍛えるためにこの妙善坊について山岳修行を行ったことさえあるから、修験者の振舞い方や言葉遣いなどについてはよく知っており、ハツタリを利かせる程度の語彙ごいもある。

「ふん、行者が修行の旅を足で歩かずに、舟を使うか。訝いぶかしいのお」

男はいかにも胡散臭いといった表情で重蔵を眺めた。この時代、密使や諜者は、僧か神職か物売りに化けるものと相場が決まっている。

熊谷氏の領内に入るとき、重蔵たちはすでに一度関所を越えている。それで度胸がついたのか、あるいは重蔵にある種の信頼を置くようになつたからか、幸松丸は不安そうな素振りも見せず番士と重蔵のやり取りを眺めている。

その幸松丸に向け、

「そちらの童子こわらは供か」

と番士が顎で指したので、重蔵はわざといきり立った。

「無礼な！ 従者はわしの方である。貴殿は、愛宕山の大天狗・太郎坊たろうぼくを知らぬか！」

その剣幕に男は明らかに気押された。

「いや、その名を聞いたことくらいはあるが……」

「この神州に八匹の大天狗あり。愛宕山の太郎坊は、その神通力の凄まじさから八大天狗の筆頭にも挙げられる、それは恐ろしい大天狗さまじゃ。こちらの太郎さまは、その大天狗・太郎坊から数えて十八代の裔孫えいそん、愛宕大権現の本地仏ほんぢぶつである勝軍地蔵しょうぐんじぞうの生まれ変わりであり、この修行の旅を無事に終え、神通力を身に付けられた暁には、我ら愛宕の山伏を統べることとなる、それは尊いお方である」

周囲の人々の視線が集まり、騒ぎに驚いた他の番士が駆け寄って来た。

重蔵はかつて旅芸人として日に何度も舞台に立ち、客の前で芸を見せていたことがある。けれど味たつぷりの台詞回しや人あしらいのコツもそのときに身に付けた。その経験は重蔵の肝も凶太くしたようので、衆目にさらされても気後れするということがない。

「勝軍地蔵の功德くわんてくをご存じか。戦場いくさばにおいては飛矢が身を避け、敵の刀槍にも触れず、しかも武運に恵まれ、功名間違いなしという、それは有難いものじゃ。しがしながらひとたびこれに無礼をなせば、霊障れいしょうたちどころに顕あわれ、必ず武運に見放されようぞ。そのところをよう料簡して物を申されい」

重蔵の目力めちからに番士はたじろいだ。

「わかった。わかったから、そうまくし立てるな」

修験者などに因縁をつけてしまったことを男は後悔し始めている。触らぬ神に祟たたりなし、というではないか。

「もしや今のでわしの武運が悪しゅうなったということはあるまいな」

「知らずにしたことは申せ、無礼は無礼であろう。次に戦場に立てば、貴殿は必ず怪我をする。せいぜいお命まで奪われぬように気をつけなさいことじゃ」

「おいおい、脅かすものではない」

男は泣きそうな顔になった。

神仏などさまで信じているわけではないが、宗教者からこんな言葉を投げつけられたのでは呪われたも同じで、気色が悪いこと甚だしい。真面目に役目を果たそうとしたがために神仏の怒りを買い、戦場で死傷するというのは、正直たまったものではない。

「無礼というなら詫びる。なんとかならぬか」

「ふむ……。確かに、貴殿に悪意があつたわけではなく、哀れと言えば哀れではある」

笑いを我慢して思案顔を作った重蔵は、たつぷりともつたいをつけた。

「……よろしい。拙僧の験力げんりきにて靈異りょういを封じて進ぜよう」

重蔵は懐から数珠を取り出し、それを手に絡めて片合掌し、耳で覚えた天狗真言を五度ばかり朗々と唱え上げ、中空で派手に九字くじを切るや、

「ええいつ！」

裂帛れっぼくの気合いと共に番士の胸を二本指で突いた。

男は声にならない悲鳴をあげてその場に尻餅をついた。

「これで貴殿は、しばらくは天狗の通力にて災厄からまぬがれよう。
「ご安心めされ」

「そ、そうか」

男に手を貸して立たせた重蔵は、

「では、これにて御免くだされよ」

野次馬と番士が口をあけて見守るなか、幸松丸を伴って悠然と木戸を抜けた。

舟は二十人ほどの客を乗せて岸を離れた。

幸松丸は舟に乗ることも初めてである。昼飯代わりの餅を頬張りながら、棹を操る船頭を興深げに眺め、流れてゆく川辺の風景に眼を輝かせた。

川面は空よりも明るく、銀色の小波こなみが立っている。

半里ほど下流へ進むと、東から流れてきた三篠川みよたなが合流して川幅が広くなり、山ばかりだった視界が広々と開け、景色が一変した。広島平野に入ったのである。

「あれに見えるが武田山でござる」

重蔵が右方を指差した。

開豁かいかつな平野の奥に牛の背のような山がそびえている。武田氏の本拠である銀山城かなやまである。

太田川は広いところでは一町以上の川幅があり、水量は実に豊かである。雪解け時期や雨季にはたびたび氾濫を起こし、下流域に暮らす人々を苦しめるが、平時の水勢はゆるやかで、景色はゆったりと流れてゆく。客を乗せた舟の他に、何かの荷を満載した舟や、川漁をする漁夫の舟、切り出した材木を組んだ筏なども往来していた。さらに三里ほど下ると、川は次々と枝分かれを始める。河口近くは広大な三角州となっていて、島のような大きさの中州が五つあるところから、当時この辺りは「五箇所ごかしょ（五ヶ庄）」と呼ばれていた。ちなみにこの地を「広島（廣島）」と改名したのは元就の孫の毛利輝元てるもとで、戦国の世が終焉し、豊臣政権が定まると、輝元はこの中州の一角に巨大な広島城を築き、吉田から本拠を移すことになる。それ以前の広島湾は「鯉ノ浦こい」と呼ばれていたらしい。この時代はまだ干拓がさほど進んでおらず、干潮時には広々とした干潟が現れる。舟はもつとも西寄りの太田川本流を進んでゆく。やがて吹く風に汐しほの匂いが混じり始めた。

「海じゃ」

舟端を握った少年は、興奮を隠さずに呟いた。

にび色の冬の海に大小の島が鎮座している。もつとも手前にあるのが似島、その奥に巨大な西能美島と江田島があり、砂浜が続く右

手の先に敵島の弥山みせんが遠くそびえる。海原のあちこちに、大きさや形の異なる船や筏がたくさん浮かんでいた。

河口の船着場で重蔵たちは舟を降りた。

この辺りを草津という。

番所を抜けるとすぐに茶屋があり、そこで元綱らの一行が休息していた。幸松丸の到着を確認した元綱は、さりげなく重蔵に視線を送り、何事もなかったように一行を出発させた。

「さて、我らも参りましょう」

先発した一行から充分に距離を取り、重蔵たちも再び歩き始めた。草津からは二里ほどの陸路である。

浜辺に沿う道をしばらく歩くと井口の集落があり、さらに進んで八幡川を越えると五日市の町に入る。このあたりは武田氏傘下の己こ斐い氏の支配地で、勇将・己斐宗端そうたんが「有田合戦」で死んだ後、子の直之なおゆきが城地を継いでいたが、今年の春、大内軍が安芸へ侵攻した際、大内義興は謀略によって己斐城を奪い、己斐氏を追った。己斐直之とその家臣団は武田氏の銀山城へ逃れ、己斐城は現在、大内家の重臣・内藤孫六が城番として入っている。

浜辺では、塩焼きをする者たちもあれば網をつくろう漁師もあり、海藻や貝を採る女たちや水辺に遊ぶ子供たちの姿も見える。それらの様子を楽しげに眺めながら、幸松丸は生き生きと歩いた。が、一里ばかり歩いたところで顔をしかめて足を止めた。

「足が痛い」

道の端に少年を座らせ、足掬えを解いてみると、マメが潰れたらしく、親指の付け根から血がにじんでいた。長い距離を歩くということがないこの少年の足には、やや負担が大きかったらしい。

重蔵は手拭いを薄く裂き、患部に幾重にも巻いた。

おぶつてやることはできるが、今日の旅程は子供でも苦行というほどキツイわけではないから、自分の足で歩き切つて欲しいという想いがなくてもない。達成感とは自ら成し遂げてこそ得られるものである。

「廿日市までもう一息でござる。」辛抱できますか」

「平気じゃ」

気丈に答えた少年に、重蔵は笑顔でうなずいた。

人家がまばらになつた道をさらに半刻ほど歩くと低い土手が見えてきた。破壊され無人となつた己斐氏の関所の跡があり、土手の向こうは細い佐方川が流れている。

重蔵は幸松丸の手を引いて川を渡つた。

対岸の土手を上ると、そこで元綱らの一行が休息しつつ待っていた。

「い無事でようございました」

傳人子めいしの福原弥五郎が幸松丸を見つけて真つ先に駆け寄つて来た。

「ようお歩きなされた。お疲れでござつたらう」

笑顔で迎えた元綱に、

「疲れておらぬ」

幸松丸も笑顔を返した。

土手から見渡すと、まず海に突き出すように小高い山がある。桜尾城の城山である。右方にそびえる天神山が海際まで迫り、ごく狭

い平地を蔽いつくすようにおびただしい人家の板屋根がある。松の疎林が並んだ浜辺では、荷揚げ作業のために無数の人夫が忙しく立ち働いているのが見えた。沖には二十余隻の大型船が浮かび、多くの舳はしが船と浜との間を行き来している。その背後で海にそびえる緑の山塊こそが、目指す巖島である。

「あそこに巖島神社があるのだな」

幸松丸が指差した。

「社殿はちょうどあの山の裏側にありまして、この辺りからは見えません。明日、海が荒れなければ、舟にてお渡り頂こうと思っております」

棚守たなもりの房頭ぼうけんが教えた。

「日暮れまでまだ時がございますので、今日のところは廿日市の市などを見物なさってくださいませ」

房頭の案内で、一行は桜尾城の山裾を通って堂々と町の木戸をくぐり、廿日市の中心地に入った。大小の様々な店舗いっしょかが薨いっしょかを並べる大通りは、行き交う人と車でごった返し、

「今日は祭礼でもあるのか」

と幸松丸が思わず房頭に訊ねてしまったほどのにぎわいである。この町が廿日市と名付けられたのは室町期に入った頃で、都市としては比較的新しい部類に入る。その名の通り市場が作られた地であり、瀬戸内の水運の発達と共に瀬戸内貿易の中継点として栄え、いまでは安芸でも有数の港町になっていた。上方から運ばれて来る

産品はもちろん、唐船でもたらされた異国の名品珍宝さえわずかながら流通しているし、安芸の産物も多くがこの湊から輸出されている。ちなみに安芸の特産品といえば、木綿もめん、染料の藍あゐ、鉄、紙などが挙げられ、海産物も非常に豊かである。それらの物品を扱う交易者がこの廿日市に集まり、巨富を成していた。

少々余談をすると。

廿日市を膝下に押さえる桜尾城は、現在は山が削られて桂公園となっており、その周囲も埋め立てによって風景が一変してしまっているが、この当時は海に突き出すようにそびえる四〇メートルほどの小山で、周囲を一望できる要衝であつたらしい。ここに本拠城を築いた厳島神主家は、神主職を世襲してはいるものの、その実態はほとんど武家と変わらない。

神主家は、先代・藤原興親おきちかが大内義興の上洛戦に従い、永正五年（1508）に京でそのまま病死してしまつて以来、興親の二人の従兄弟の間で神主職の相続争いが起き、神領衆が東西に分かれて争う事態になっていた。この争いは実態がよく掴めないが、結局のところ武田氏が後援する友田興藤おきふじが桜尾城を奪取し、実力で神主職の座についたらしい。

この物語の現在から半年ほど前、大内軍が安芸に侵攻した際、大内義興は重臣の陶興房すえおきひらに桜尾城の攻略を命じた。大内軍は二の丸までを攻め落としたが、義興としても、神主家の人間を殺し尽くして神罰をかぶりたくはないし、戦さを長引かせて廿日市の町衆の怨みを買いたくもなかったから、力攻めにはこだわらず、外交で素早く城を押さえた。友田興藤を隠居させ、その兄の子である藤太郎とうたろうに神主職を相続させるという条件で和睦したのである。神主家は大内氏に屈し、臣従する姿勢を取ったわけだが、藤太郎はまだ幼少であるから、大内軍が安芸を去った現在、再び友田興藤が家を主導する状態となっている。

大路を先導した房頭は、

「今宵はこちらの紀ノ屋さんのお屋敷でお泊まり頂きます」

と言つて一行をある商家へと導いた。

紀ノ屋は醤油しょうゆの醸造・販売で財を成し、金貸しや貿易業でその財を膨らませた厳島でも有数の豪商である。廿日市にも屋敷があり、御師たちが上客の宿泊所としてよく使わせてもらっているらしい。

房頭がおとないを入れると、一行は丁重に迎え入れられた。

広大な敷地のなかには母屋の他に使用人のための長屋が二棟と大きな蔵が三つも建ち、さらに宿泊客のための離れ屋がある。中庭から導かれた離れ屋には四つの部屋があり、その一棟が宿舎としてまるまる提供されるらしい。間取りは広々とし、調度は豪華で、襖絵などは大名家もかくやというほど金が掛かっている。そこに湯殿まで付属していることが、紀ノ屋の富裕ぶりを如実に表していた。

奢侈しやうには興味がない元綱も、

「たいしたものだな」

と素直に感心し、その言葉に周囲がうなずいた。実際、これほどの商家は吉田には一軒もない。紀ノ屋の経済力は、元綱の相合の家などは比較にもならず、兄の多治比の家さえ圧倒するであろう。

考えてみれば、商人は百姓や職人のように自らの手で何かを作り出すというわけではないのに、右から左に商品を動かすことで魔法のように銭を生み出してしまふ。厳島の一商家でさえこれほどの財を蓄えているわけだが、たとえば噂に聞く堺や博多の大商人ともなれば、日本を飛び出して異国と交易をなし、その富は大名をさえ凌ぐという。安芸北部の山奥に暮らす元綱たちにとって、およそ想像の届かない世界だが、

大きな富を生み出しているのは、つまりは海か。

ということは、なんとなくわかった。

陸の上には限られた道しかなく、その道にも無数の関所があり、

自由な通行を妨げている。物品が動くスピードは人が歩く速さと同じであり、人力で運べる荷の量も高が知れている。それに比べて海は、日本どころか異国にまで繋がっており、そこに大きな船を浮かべれば、大量の物品を快速で動かすことができる。もちろん海には海なりの困難や危険があるのだから、それを乗り越えた上で富を蓄えた紀ノ屋のような商家がこの廿日市だけで何軒も栄えているし、極論すれば、大内氏が日本最大の勢威を誇るようになったのも、唐土との勘合貿易で桁違いの富を得続けているからであろう。

以前に廿日市を訪れたときは元綱もまだ幼かったから、ここまで深く考えることもなかったのだが、毛利と同じ立場の安芸の豪族に限ってみても、たとえばこの廿日市や厳島を押さえる厳島神主家や、太田川の河口に盤踞する白井氏、安芸南東の沿岸部に根を張る小早川氏などは、領内に良港を持っている。おのずと集まってくる商業資本を支配下に置くことになり、関税による収入も毛利よりはるかに巨大であろう。備えている水軍力は平時には交易に利用することもできる。そうした人や物の動きに伴い、遠方の多くの情報も迅速に得られるに違いない。

毛利の領国には海がない。

という地理的な条件が、何やらとてつもない不利に思えてきた。一行が旅装を解き、着替えなどを済ませて落ち着いた頃、主人が挨拶に現れた。恰幅のよい五十男である。着ている小袖や帯などはいかにも上等なあつらえで、異国の布で作られたらしい羽織には異様な光沢がある。

「紀ノ屋でございます。本日は遠路はるばるようお越しくだされました」

丁寧に頭を下げた。

物腰や言葉遣いはやわらかく、表情もいたって温和である。が、その眼は幸松丸を値踏みでもするように油断なく光っていた。

紀ノ屋は瀬戸内海の海運業を商売の主軸としており、安芸北部の山間に根を張る毛利氏とは繋がりが薄く、利害関係もないに等しいのだが、しかし、安芸の情勢は大内氏と尼子氏のせめぎ合いのなかで今後どのように変化してゆくのかまったく見通しが立たない。現状はともかく、この「毛利の幼君」の成長次第では、十年後、二十年後の毛利家が大成長を遂げるということだっただけならいい。限らない。わずかな時間で、

この若君は、線は細いが、賢良だ。

と見抜いた紀ノ屋は、毛利家と誼みを深めておいても損はない、と密かに思った。

「ご用がございましたら、どうかお気兼ねなく、なんなりとお申し付けくださりませ」

世話係の下女を二人残し、紀ノ屋は上機嫌で引きあげていった。夕暮れまでにまだ一刻ほど時間がある。

房頭の提案に乗って、元綱たちは市場と湊を見物することにした。

「わあ」

物と人で溢れる市場も、大型船が沖に浮かぶ湊の光景も、好奇心の強い少年たちにとっては実に面白い。幸松丸はどちらを向いても眼を煌めかせ、

「弥五郎、あれを見よ」

などと傳人子と共にはしゃぎ、しゃべり続けていた。

かつて俺もこのような眼をしておったのかな。

十五年前の自分を振り返って、元綱は微笑した。

記憶のなかにある絵に比べ、目の前の風景はずいぶん賑わいを

増したという印象がある。沖に停泊している船の数も多く、なかには和船とは明らかに姿が違ふ船さえ見える。船首の外板がいばんに人の眼のような模様が描かれ、全体にケバケバしく装飾された異様な船である。

「あれは」

それを元綱が指差すと、房頭が応じた。

「ああ、戎克ジャンクとか申す唐船からふねでございますな」

「唐土もろこしの　つまり明国みんこくの船か」

「左様でございます。そう多くはございませんが、昔からこの辺りにもたまにやって来ておりますよ」

「そうなのか。俺は初めて見る」

「もつとも、あの船に乗っておるのは明国人ではなく、ほとんど倭人じんのようです。船主は早田せうたなにがしという、対馬つしまだか壱岐いぎだかの者だと聞いたことがございます」

対馬や壱岐がどのあたりにあるのか元綱にはわからない。

「この辺りの海で商売をしておるのかな」

「早田の船は、年に二、三度はこの湊にやって参りますが、唐土へも毎年のように渡っておるそうですよ。吹く風の向きの関係で、冬にしか大陸たいりくへはゆけず、一度行くと夏になるまで日本にっぽんには帰って来られぬのだとか」

「それは大変だな。唐土まではどれほど日数が掛かるのだ？」

「それも風次第でしょうが、九州の博多のあたりから、順調にいつでも半月以上は掛かるらしいですね。高麗コウレイ（朝鮮）までならそれよりずっと近いそうですが」

房頭もさほど詳しくなさそうである。

こういふ話は、むしろ紀ノ屋に聞くべきだな。

あの商人の配下なら、実際に異国へ渡った者さえいるかもしれない。

日が暮れたので、元綱たちは宿所に帰った。

「お食事の支度はできておりますので、すぐにお持ち致します」

女たちが運んで来た膳は実に豪華なものだった。獲れたての魚介の料理がいくつも並び、酒も備前から取り寄せた名酒であるという。山間の吉田では鮮魚はめったに食べられない。魚といえは川魚が乾物しか知らず、焼いて食べるものだと当然のように思っていた幸松丸と弥五郎は、彩り豊かに盛りつけられた刺身を見て目を輝かせ、まだ生きている海老えびや牡蠣かきを見ては驚き、その美味さにいちいち歓声を放った。

この少年たちにとって、今日という一日は驚きの連続であったろう。興奮し過ぎたからか、あるいは疲れが一気に出たのか、幸松丸は夜半から発熱し、周囲の大人たちを慌てさせたりした。

幸いこの熱は翌朝には引いた。幸松丸は元気そうな様子であったが、この日は朝から小雨がぱらつくあいにくの天気だったこともあり、予定を変更して一日ゆっくり休息に充てることにした。

この一日の停滞が、ひとつの出会いを生むことになる。

第六章 鷲の羽を継ぐ… 海の男（一）

安芸の有力豪族である小早川氏には、安芸南東の竹原を本拠とする竹原小早川と、芸備国境の沼田ぬたから三原あたりに勢力を張る沼田小早川の二家があるということは以前に触れた。

その竹原のすぐ東隣に、高崎という名湊めいしんがある。

近世以降は隣の竹原港が大規模に整備されたためにその役割を奪われ、干拓が進んだこともあつてすっかり往時の面影を失ってしまったが、平安時代の以前から遣唐使船なども寄港する瀬戸内でも有数の湊であり、中世においては山陽沿岸航路の重要な中継寄港地として大いに栄えていた。ちなみにこの地を支配する高崎氏は、小早川氏からわかれた庶家であり、高崎湊は竹原小早川家の外港的役割も果たしていた。

内浜川の下流に開かれた町はさほど広くない。河口の三角州は大きな干潟になっていて、その北東側は葦あしや荻おぎが生い茂っていた。河口の南西側には半島状に海に突き出した丘陵があり、高崎氏の城が築かれている。この時代の港湾は浚渫しゅんせつができないから、川からの堆積土砂が海底を浅くしてしまうことが湊にとつて大きな問題であったが、海流の関係からか南西側の丘陵付近では水深が深く保たれ、大型船の停泊にも適した入り江となっていた。

河岸や河口の浜辺にはいくつもの棧橋はしけが作られ、百を超えるはしけ船や漁船が舫もやわれている。やや鋭角に陸おかに切れ込んだ入り江には、積載量が千石を超える大型船・四艘を筆頭に、大小の荷船が五十艘ほども錨を降ろしていた。早朝の寒風に旗や幟はたけがはためき、どこか虚しげな海鳥たちの声が遠く響いている。この日は未明から小雨がしのつく悪天であつたからか、荷揚げや積み込みをしている船はさほど多くない。

湾内に浮かぶ荷船の群れのなかに、一艘の地味で小汚い老朽船があつた。

幅は二間半、長さは六間ほど。船首と船尾が反りあがった、ずんぐりした形の荷船である。帆柱は一本、甲板の中央に筵帆むしろほが折り重なり、左右の舷側にはそれぞれ五つの櫓穴が開いている。

「弁天丸」と名付けられたこの船は、十一反帆、百五十石積みの「人船」。つまり小型の客船である。讃岐さぬき（香川県）沖の塩飽島しわくから、山陽沿岸を陸伝いに寄港しつつ進み、周防の南東に浮かぶ屋代島やしろうまで、一人につき百文の運賃で運んでくれる。天候と風に恵まれれば二日から三日ほどの船旅で済むから、陸おかを歩くよりは遙かに利便性が良い。もっとも、海が荒れたり風向きが悪かったりすると、どこかの入り江で身動きが取れぬまま日数を費やすこともあるし、どれほど船が進めるか、どの湊に寄港するかも、つまりは天候次第である。そのあたりは実にアバウトで、たまたま寄港した湊では新たな乗客を拾うし、客がどこで船を降りてもらっても構わない。その弁天丸の甲板で、雨を浴びつつ曇天を仰いでいた船頭ふながしらの源吉げんきちが、

「天気は悪いが、風は悪しゅうはない。今日はどうにか出られるかと独りごちた。

北東の天に横たわる烏帽子形山えぼしがたから風が吹き下ろしてくる。入り江を出て阿波島を過ぎれば東風こちに変わるであろう。この雨はやまぬだろうが、風は強くないから海はそれほど荒れない、というのが源吉の勘である。いずれにしてもその後の風次第ということになるが、進めるところまでは進んでおきたい。

この高崎で、弁天丸はすでに丸二日も風待ちをしているのである。船が動かなければ無駄飯を食って過ごすしかないわけで、それだけ一航海あたりの利益が薄くなってしまう。

甲板上では、すでに朝飯を終えた水夫たちが出航の準備に取りかかっている。

源吉が浜の方に視線を向けると、棧橋から十人ほどの人を乗せた

舳はしが出て、こちらに漕ぎ寄せてきた。先ほどから船と陸とを往復している弁天丸の舳である。狭くて不衛生な船内で、波に揺られながら眠ることを嫌った乗客の一部は、わざわざ町の旅籠に宿を取っていた。「人船」が停泊していることを昨夜のうちに知り、その船便を利用する気になった新たな客もあるから、それらを一緒に運んでいるのである。

舷側にはすでに縄梯子が降ろされている。蓑笠をつけた客たちが、それを使って順序よく船に昇ってきた。錢勘定を任せている水夫頭かこがしらの男が、甲板に辿りついた新顔の客から錢を受け取っている様子を、源吉は品定めをするような眼で眺めた。

「おつ
」

最後に昇ってきた浪人風の身なりをした大男が、こちらを向いて笠をあげ、人懐っこい笑みを見せた。

顔が真っ黒に日焼けしているから、歯の白さが際立っている。眉が濃く、眼鼻立ちがくつきりした実に精悍な顔立ちである。いかにも頑丈そうな顎には堅そうな無精髭がびっしりと生えている。六尺を超える長身で、蓑を着ていても胸の厚さと肩の肉の盛り上がりがわかるほどの偉丈夫いじやうぶである。年は三十過ぎであろう。

「源吉、久しぶりじゃな」

潮錆うしほびた渋い声である。

「こりゃ、新九郎さんじゃねえですかい」

慌てて大男に駆け寄った源吉は、

「馬鹿、このお人からは錢は取らんでいい」

と水夫頭を押しつけた。

「いやいや、お久しゅうございますな。まさか新九郎さんが人船なぞにお乗りになるとは思いもみせんので、驚きましたわ。高崎では何かご商売で？」

「ああ、ちよつと仕事を頼まれてな」

その言葉を遮るように、舳から大声がのぼってきた。

「お頭あ、お客はこれで最後じゃぞー！」

新九郎と呼ばれた大男は、話は後で、というように手で合図した。出航直前の船乗りがどれほど忙しいかはよくわかつている。船頭の顔に戻った源吉は、新九郎に小さく頭を下げると、

「よおし、舳を引きあげたら船を出すぞー！ 錨いかりをあげよ！ 漕こぎ手は櫓この座につけーい！」

と大声で怒鳴り、船尾の方へ足早に歩き出した。

片櫓むしるほで器用に船首を回した弁天丸は、そのまま櫓走で入り江を出て、篷帆むしるほをあげた。

ゆるい北東風きたしちを受けて帆は小さく膨らんだ。船尾の左右両舷では、えんじ色の旗が音を立ててはためている。に「上」の字を白く染め抜いた「村上海賊衆」の旗である。この辺りの海域を安全に航行するための通行証と言っている。

乗客だけで数十人が乗り込み、しかも備後の鞆ともに寄港したときに商売用の大豆まで積み込んだものだから、上下二層の胴の間はまさにすし詰め状態である。雨に濡れるのを承知で甲板に立っている乗

客も少なくない。それでも客たちが不平を言わないのは、源吉の設定した運賃が、他の「人船」に比べて比較的安いからであろう。

左右の櫓の座についた十人の水夫が、太鼓の音と水夫頭の掛け声に合わせ、声をあげつつゆったりと櫓をこいでいる。小雨がしの降る悪天だが、風がさほど強くはないので、波は荒くない。

船尾にある舵の座で、新九郎が舵取りの男と談笑しているところに、源吉が顔を見せた。

「新九郎さん、先ほどはどうもご無礼を」

源吉は丁重に頭を下げた。

この青年を怒らせてしまうと、塩飽の船頭である源吉は、商売が何かとやりにくくなる。新九郎は、三島村上氏のひとつ因島村上氏に強い繋がりを持った男なのである。

三島村上氏というのは、瀬戸内海において最大にして最強の海賊衆である。瀬戸内に浮かぶ能島、因島、来島をそれぞれ本拠とし、東は讃岐沖の塩飽諸島あたりから、西は周防の屋代島あたりまで、瀬戸内海の中央海域をほぼ支配下に置き、水運を牛耳っていた。

三家の村上氏は同族ではあるが、一枚岩というわけではなく、それぞれ独自に家を運営し、それぞれに外交を展開している。三家の嫡流的存在である能島村上氏は独立志向が強く、備後に近い因島村上氏は小早川氏との繋がりが多い。伊予（愛媛県）に接する来島村上氏は伝統的に伊予守護である河野氏の被官（家来）である。三家の間で海域の縄張り争いや小競り合いをすることも少なくなかったが、外敵に対しては一致協力して事に当たるといった伝統があり、たとえ室町將軍でも、幕府管領・細川氏でも、西国の覇者である大内義興であっても、村上海賊衆を無視しては瀬戸内海を往来できないというほどの実力を有していた。陸の上のいかなる権力も、瀬戸内

の海を支配することはできなかったのである。

その三島村上氏のひとつ 因島村上氏の先代棟梁である村上吉直が、新九郎の父であった。

新九郎は、村上吉直がまだ若かった頃、敵島の湊の遊女屋で馴染みになった女を孕ませて出来た子で、吉直にとつて最初の男子に当たるのだが、因島村上家のなかでは、嫡子どころか庶子とさえ認められない、言つなれば厄介者であった。吉直には正妻が生んだ尚吉という立派な嫡子がおり、この村上尚吉が現在は因島村上氏を束ねている。しかし、新九郎が村上吉直の長子であり、当主・村上尚吉の腹違いの兄であることは紛れもなく、村上海賊衆に属する船乗りの間では、このことは公然の秘密となつていた。

十二歳のときに母が病で死に、因島の城に引き取られることになった新九郎は、このときようやく当主の庶子として正式に認知されたのだが、家中では最初から異分子であった。正妻腹から生まれた弟の正嫡は定まつており、相続争いのゴタゴタを嫌つた重臣たちから新九郎は腫れ物のように扱われた。青年になつても自分の持ち船さえなく、家ではこれといつて定められた役目も与えられなかった。が、新九郎はもともと権勢欲が薄く、弟から家督を奪い取ろうとするようなアクの強さはない。少年の頃から船に乗り、水夫かこの仕事と海の知識を一通り身につけると、商船警備の警護船に乗つたり、船戦さがあれば武者働きに加わり、島では手に入らない物資の買い付け仕事などがあればそれを引き受けたりして、その日その日を気ままに過ごしていた。

雄偉な体躯から「豪放磊落」というイメージを人に与えてしまう新九郎だが、その性格には細かいところをおろそかにしない繊細さと緻密さがあり、約束は必ず守るといふような律儀さをも持つていて、因島村上氏麾下きかの海賊衆ばかりか、商売相手の商人たちからも信頼された。二十代も半ばになると、瀬戸内の各湊に多くの友人知己ができ、商家にも顔が利くようになった。

やがて新九郎の父が隠居し、因島村上家は腹違いの弟が継いだ。

それで弟との関係が気まづくなつたというわけではないが、目の上のたん瘤が身近にいれば弟も気を使うだろうとおもんばかつた新九郎は、この二、三年はほとんど因島には帰らず、商人に雇われて水運業の手伝いをしたり、村上海賊衆との交渉の口利きをしてやりたりすることで口銭（仲介手数料）を稼ぎ、故郷の厳島や廿日市はつかいちを拠点にして自由気ままに暮らしている。現代で喩えるなら、海運に関するフリーランスのアドバイザーといえればそれに近いであろう。

ついでながら、新九郎の弟である村上尚吉の通称は「新蔵人しんくらんじん」である。この「新蔵人」は因島村上氏にとって嫡子が相続すべき特別な受領名うけいりょうなのだが、先代当主の村上吉直が、遊女に生ませた子に「新九郎」という名を与えたのは、嫡子にできない長男を憎からず思っていることの隠微な表現であつたらう。そういう事情を知っている者たちは、新九郎を決しておろそかにはしないのである。

塩飽諸島しほくに根を張る塩飽海賊衆は、因島村上氏とはゆるい同盟関係にある。「人船」の船頭として塩飽・屋代島間を往来している源吉は、因島村上氏の縄張りで商売をしているわけで、新九郎のことは十代の頃から知っていた。新九郎が警護船に乗って海域警護をしているときや、自身が因島付近の湊に停泊した際に、幾度も口を利いたことがある。近年はあまり顔を見かけなかったが、新九郎がどのようにして暮らしているかについても噂には聞いていた。

「それで、高崎にはどういふ御用で？」

話の接ぎ穂を探して源吉が尋ねると、新九郎は気さくに応えた。

「厳島の商人衆あきんどが、新たな船を造りたいといふのでな。その差配の一切を頼まれた」

「ああ、そういふことでしたか」

「造り始めてそろそろ三月になる。作事の進み具合を見に来たとい
うわけだ」

源吉は即座に納得した。

高崎の湊の特色は、なんとといっても大型船さえ建造できる立派な
造船所を持っていることであろう。

この時代、積載量が千石を超えるような大型船も出現し始めてい
るのだが、瀬戸内を日常的に往来する商船は、百石積み、二百石積
みといった小型船がまだまだ主流で、村上海賊衆が軍船いくさぶねの主力とし
ている「小早こはや」も小型船の範疇に入る。村上海賊衆が支配する伯方はかた
島や鵜島うしまなどにも造船所はあるのだが、その船大工たちが造るの
は当然ながら小型の船ばかりで、数百石を積めるような中型船はほ
とんど手がけていないし、船材となる大型の木材を入手するのも離
島ではなかなか難しい。つまるところ、中型以上の船を造るなら陸
の造船所に頼むのが良く、瀬戸内でもっとも充実した造船所を持っ
ている湊のひとつが、高崎なのである。

「その船は、やっぱり商い船で？」

源吉の問いに新九郎は笑顔でうなずいた。

「七百石積み、四十挺櫓の大船だ」

「へー、そいつは豪儀だ」

「来年の春、大内のお屋形が遣明船けんみんせんを出すという話がある。聞いて
いるか？」

「ええ、噂だけです。備前の長船おさふねあたりでは、大内さまから刀の
注文が何千本も入って刀鍛冶が大忙しらしいですわ。玉鋼たまはがねの値が釣

り上がって大変なんだとか」

「はは。廿日市の鍛冶町でも悲鳴をあげておるよ。日本の刀なら、たとえなまくらでも大陸では大いに喜ばれるからな」

「本式の遣明船が出るのは、ずいぶん久しぶりじゃねえですかい」

「前の遣明船で明国に渡ったとき、わしは二十かそこらだったから、十二年ぶりということになるかな」

大内義興が最後に遣明船を出したのは永正八年（1511）である。倭寇や南海の海賊からこの宝船を守るために、義興の依頼で村上海賊衆は数隻の警護船を出している。新九郎は足軽水夫としてそれに乗り込み、外海を渡ったのである。

ちなみに因島村上氏は「熊野丸」という六百石積みの貿易船を所持していて、明国や朝鮮の閩商人を相手に独自のルートで私貿易を行っている。また、琉球（沖縄）で中継貿易を行うこともある。新九郎はこの熊野丸を守る警護船にも何度か乗り込んでおり、合計すると明国に三回、朝鮮に二回、琉球にも数回渡った経験があった。

「じゃあ、新九郎さんのお骨折りは、その遣明船に便乗した話で？」

「そういうことだ。厳島の商人たちが、銭を出し合って自前の船を仕立てておる。堺衆や博多衆ばかりに儲けさせるのは癪なんだろう」

「そいつあ羨ましい。こっちは百文、二百文の銭で人を運んでるつてのに、遣明船はたった一回往って帰って来るだけで、何千貫、何万貫って利が出るんでしょ？ こっちもあやかりてえもんだ」

「銭を出す者はまだ募っておるぞ。百貫出せば、千貫になって返っ

てくるかもしれん。一口乗る気があれば、口を利いてやるが」

「その代わり、船が時化しけにでも遭えば、その百貫は泡と消えちまうわけでしょう」

「まあそうだ。大内のお屋形にとつても、それに乗つかる商人どもにしても、伸のるか反そるかの大博打だな」

「新九郎さんが、その新しい船の船大将になって、寧波ニッポへお渡りになるんで？」

「ああ、たぶんそういうことになるだろう」

「かく、そりやすげえや。仕事がでけえじゃないですかい」

「源吉、出す銭がないなら、船乗りとしてわしを手伝わんか。もちろん、お前の手下たちもまとめて雇う。お前なら水夫頭かこがしらにしてやるが」

そう問われて、源吉は一瞬返事をためらった。

この時代、外洋航海はそれこそ命懸けなのである。

わしがあと十五年若ければ。

と、思わぬでもない。この新九郎という男に接していると、その人格から吹いて来る、明るく闊達かったくな風のようなものに、男ながら惹かれる自分がある。この男を船大将と仰ぎ、新造した大船で外海に乗り出すのはさぞ愉快であろう。海の男の本懐と言つてもいい。そういう稚気にも似た冒険心がまだ自分の裡なかに残っていたことに、源吉は我ながら驚き、慌てて己を戒めた。

「太鼓を打つのは嫌いじゃないですがね。外海渡そとつみつて明国まで行く

には、ちよいと年を取り過ぎましたわ。第一、半年もウチに帰れな
きや嫁が干上がったまう。ここの海で小さく儲けてるのが、分相
応ですわ」

その言葉に、舵取りの男が笑いながら同意を示した。

弁天丸は波を切つて快調に西進した。

山陽沿岸は瀬戸内海でももつとも混み合う航路と言つてよく、三
隻、四隻で船団を組んだ商船がひっきりなしに航行している。老朽
船で積荷も重い弁天丸は船足が遅く、追いついてゆく船が少なく
ない。

二刻ほど帆走して下浦刈島しもかまがりを左手に見るところまで進んだとき、
島影から五艘の小早が躍り出て、太鼓と櫓声を響かせながら急速に
近づいてきた。海域を通航する船を見張っていたものであるう。

源吉はその船の群れを遠く睨んだ。

「ありや、多賀谷たがやの船ですな。ちよいと話してきやす」

「ふむ。わしも行くう」

新九郎が言つと、

「あ、そうしてくださりや、こつちは百人力だ」

源吉の顔がパッと明るくなった。

「船を止めるぞー！ 帆を降ろせー！」

大声で怒鳴りつつ、源吉は舳先へ向けて足早に歩いた。

多賀谷氏は呉港くれの南東に浮かぶ上浦刈島かみかまがりと下浦刈島に本拠を置く
海賊衆である。大内氏の傘下であり、村上海賊衆とはゆるい同盟関

係にある。

弁天丸は船足を止め、舷側から縄梯子を降ろした。

小早の一艘が素早く弁天丸に漕ぎ寄せ、足軽のような格好の男が縄梯子を使つて甲板に昇つてきた。

源吉の背後に立つ新九郎を見て、男は驚いたような顔をした。

「ありや、新九郎さんじゃないですかい。珍しい。上乗りうわのですかい？」

「いや、今日はただの乗客だ」

新九郎は人懐っこい笑みを見せた。

「へえ、そりやなおさら珍しい」

「わしには自前の持ち船がないのでな。不便なことだが、致し方ない」

上乗りというのは、商船などに乗り込んで、海賊との交渉や海域の水先案内などをする仕事のことである。

瀬戸内海にはほとんど海域ごとにそこを縄張りとする海賊衆がおり、安全に通航するためには彼らと平和的に交渉ができればならない。たとえ「村上海賊衆の旗」を掲げていたとしても、略奪に遭つて皆殺しにされれば「死人に口なし」ということにもなりかねないのである。もっとも安全で確実な航海の方法は、村上海賊衆の警護船を出してもらうことだが、それには莫大な銭が掛かる。安価に済ますには、村上海賊衆から人を一人雇い入れて船に乗せておくのが良い。

「上乗りはおらぬが、帆別銭ほべちせん（通行税）はちゃんと払つておる。船

尾の旗をよう見てくれ」

源吉が言うと、男はうなずいた。

「わかった。まあ、新九郎さんが乗られた船じゃと知れば、我らも手荒なことはせんわい」

男は船尾に回って通行証代わりの「に上」の旗を見、そこに記された日付などを確認すると、新九郎に会釈してさっさと船を降りていった。

航行を再開した弁天丸は、ほどなく「音戸おんじの瀬戸」に差しかけた。

音戸の瀬戸は、広島湾への入り口を扼すように立ちはだかる倉橋島と、半島状に海に突き出た三津峯山の間にある、幅がわずか一町ほどのごく狭い海峡である。瀬戸内の海運を重視した平清盛が開削したという伝説のある海の道で、幅が極端に狭く、湾曲しているために見通しが悪く、しかも川のように潮流が速い。おまけにこの「海の川」は、潮の干満によって流れる方向が真逆になるという厄介さがある。干潮の二時間後あたりから南流し始める潮流は、徐々に流れを強め、いったん弱まり、再び強さのピークを迎え、満潮を迎えた頃から水勢を弱め、やがて流れを止める。満潮の二時間後あたりから逆流して北流となり、二度のピークを経て流れを止め、再び南流するということを、およそ十二時間ごとに繰り返すのである。

六百方里といわれる瀬戸内海には大小併せて三千を超える島々が浮かんでおり、この瀬戸のような海の難所がそれこそ到るところにある。そこを通る船は、通過する方向と潮流の向き、さらに風向きが合わない場合、潮待ち、風待ちをすることにもなる。

幸いこの日、弁天丸は北流のタイミングで瀬戸に入ることができた。風はゆるい南東風みなみこちで、帆走と櫓走を併用できる。雨天であることを除けば、最高に近いコンディションである。

振り返って考えてみれば、今日は朝からここまで、実に理想的に船を進められたと言えるであろう。

「今日は風にも潮にも恵まれました。これなら日暮れまでに厳島へ着けましょう」

と源吉は上機嫌で言った。

「これも新九郎さんがこの船に乗ってくださいっただお陰ですわ」

新九郎が乗った船は、不思議と海難に遭わない、という俗信が、因島村上氏の海賊衆の間にある。新九郎が警護船に乗って同行した海外貿易では一度も大きな時化しげに遭わず、商売も常に大成功した。また、因島海賊衆は新九郎が参加した船戦さでは負けたことがなく、新九郎は常に最前線で武者働きをしていたにも関わらず、彼が乗った船は拿捕だほされたり沈められたりしたことが一度もなかった。海で生きる男たちは、船にかかわる吉凶には敏感だから、いつしかそういう信仰が出来たのであろう。その噂を聞き知っている源吉は、

「ありがたや」

と大真面目な顔で新九郎に手を合わせた。

弁天丸は快適な速さで音戸の瀬戸を抜け、江田島を巡るようにして広島湾に入り、船首を西に向けた。

新九郎が目指す廿日市はつかいちは、もう目と鼻の先である。厳島の弥山みせんが次第に大きくなってきた。遠浅の浜辺が続く沿岸線には、塩焼きの煙が幾筋ものぼっている。

広島湾に入ると風がほとんどなくなったので、弁天丸は帆を降ろし、櫓走に切り替えた。しばらく走ると、海辺に小さな半島のように突き出た桜尾城の城山がはっきりと見えてきた。

その奥の浜辺が廿日市の湊であり、沖には多くの船が停泊し、解はしけが浜辺との間を行き来している。この辺りの浜は遠浅であり、船を陸おかへ近づけすぎると潮が満ちるまで動けなくなる。

廿日市の沖で船を止めた頃、空が少しずつ暗くなり始めていた。弁天丸から解はしけが降ろされた。縄梯子を使って客たちがそれに降りてゆく。乗客はほとんどが蔵島か周防の屋代島が目的地であるらしく、廿日市で降りるという者はわずかしかいなかった。

「世話になつたな」

新九郎が胴巻きを引つ張り出すと、源吉は恐縮した。

「そんな、新九郎さんからお代は戴けませんや」

「いいんだ。いまのわしは仕事で動いておる。銭はすべて雇い持ちでな。わしの懐が痛むわけではない。取っておいてくれ」

押しつけるように銀の粒を握らせた新九郎は、身軽に解はしけに乗り込んだ。

「今日は蔵島泊まりだろう。村上海賊衆の屯所に寄つたら、わしも近いうちにそちらに顔を見せるつもりじゃと、連中に言つておいてくれ。それと、新しい船が出来上がったら、塩飽しわくに水夫かこ集めにゆくかもしれん。新九郎が人手を集めておると、仲間に吹聴しておいてくれ」

「承知しやした。では、また」

源吉は笑顔で手をあげた。

村上海賊衆の縄張りにある主要な湊には必ず駐屯所があり、常に

数隻の警護船が海に浮いている。その海域を通る船を監視し、帆別ほべち銭せん（通行税）を徴収するためである。帆別銭を払わずに海域を突っ切ろうとする無謀な船に対しては、拿捕だほして詫び銭を支払わせることになるが、あくまで交渉に応じない場合は、船戦さである。船頭を殺し、水夫を海に放り込み、あるいは捕えて奴隷とし、船を積荷ごと強奪する。

それが、海賊の海賊たる所以ゆえんであろう。

雨はよほど小降りになっていた。

廿日市の町に入った新九郎は、目抜き通りを抜けて一軒の商家の前に立った。

軒の上には「紀ノ屋」と大書した牌はい（看板）が掲げられている。人と荷で混雑する店先を覗くと、新九郎を見つけた番頭が笑顔で寄ってきた。

「ああ、新九郎さま、いまお帰りですか。どうぞどうぞ、遠慮なくお上がりください」

手を取るように店内に導き入れ、下女に新九郎の世話を命じた。笠を取り、蓑を脱いだ新九郎は、式台に腰かけて下女に足をぬぐってもらった。

「嘉兵衛殿はこちらにおられるかな。こちらか蔵島みせの屋敷の方かで迷ったのだが、どうやら当たったか」

「大当たりです。主人あにじは新九郎さまのお帰りを、今日か明日かと首を長くしてお待ちでございましたよ」

紀ノ屋はむろん屋号で、主人の名を嘉兵衛という。

客間で濡れた衣服を着替えた新九郎は、すぐに奥の部屋へと通された。

障子を開けると、この屋敷の主人が座って待っていた。

「ああ、新九郎殿、ご苦労さまでございました。船の方の進み具合はいかがでしたかな」

「順調、と申しあげておきます」

新九郎はその正面に腰をおろした。

「外見にはもう出来あがっておるようなもので、いまは内部なかに手を入れて始めておりました。早ければ年内、遅くとも年明けの正月うちには、進水ということになりますよ」

「それはよかった。それなら春までに積荷も集めて積み込めますな。いや、まさしく吉報でした。ありがたいことです」

嘉兵衛は相好を崩した。

「船の方はどうやら目処がつきましたが、これを操る人を集めるのが大変ですぞ」

「数はどれほど必要ですか」

「炊夫、雑用、櫓こぎなどをする水夫かこがまずは四十人。海賊から船を守るには、武者働きもできる手練れが必要じゃ。これは少なくとも十人は欲しい。何より、外海そとつみを渡るにもっとも大事なのは、舵取りと按針あんじん（航海士）じゃ。これには外海を知る熟練の者が要ります」

「遣明船について往けば良い、というわけには参りませぬか……」

「海の上では何が起こるやわかりませぬからな。いざというとき、自力で外海を渡り切ることが出来る力量がある者たちがおらねば、とても命は預けられません」

「わかりました。そちらの方はやはり新九郎殿にお任せしましょう。銭の方はご心配なさらずに、良き人を集めてください」

大真面目な顔になつた嘉兵衛は、まっすぐに新九郎を見つめた。

「これは、株仲間の主立つ者たちとも相談した上での話ですが。新しい船の船大將は、やはり新九郎殿に務めて頂きたい。お引き受けくださいますか」

新九郎は居住まいを正した。

「新九郎殿が乗つた船は時化しげに遭わぬという噂、我ら商人の耳にまで届いておりましてな。船の大將は新九郎殿の他には任せられぬ、いや新九郎殿でなくては困ると、みな口を揃えて言うのですよ。このような大きな商売は、我らにとつても命が懸かつております。この船が海に沈めば、身代さえ傾きかねません。神仏にもすがりたいというのが正直なところでしてな」

「これまで外海で大きな時化に遭わなんだのは、まったくの偶然だとわしは思っておりますので、それを期待されても困るのですが」

新九郎は頭を掻きつつ、

この狸め。

と腹のなかで苦笑した。

新九郎が強運の持ち主で、海難に遭わない、などと、あることないこと大げさに吹聴して回っているのは、この嘉兵衛自身なのである。貿易船の船大将に自分と昵懇の新九郎を据えることで、出資者仲間の間で発言力を強め、最大の利益をせしめようというのが、この老獪な商人の狙いであろう。

が、新九郎はこの男が決して嫌いではない。

嘉兵衛には物事に筋を通す厳格さがあり、商売相手としては堅実で、情にも篤いところがある。新九郎が巖島で暮らした餓鬼の頃から何かと世話を掛けており、海商として多くのことを学ばせてもらってもいて、いまの新九郎があるのはこの男のお陰とまで言っても大げさではないのである。

「まさに乗り掛かった船、というヤツですな。船大将の件については、わしとしても望むところです。ぜひやらせて頂きたい」

「おお、そう申してもらえると、こちらも大船に乗った気分になりましたわ」

嘉兵衛は破顔した。

「新九郎殿の取り分ですが。 。 明国より持ち帰った積荷を捌いた後、出た利益の五分ということで、いかがでしょうか」

「よろしゅうござんす」

新九郎は大きくうなずいた。

「この仕事が無事に済めば、その報奨ほうじょうでわしも自前の船を持てる身

になれそうです」

笑顔を見せた新九郎に、嘉兵衛は苦笑を返した。

「我らとしては、いつまでも新九郎殿に船大将として働いて頂きたいのですがな」

「己の船を持つことは、海で生きる男の夢なのですよ」

いつまでも雇われの身で、他人の船を動かしていてもつまらない。新九郎は、己の船を新たに造るための銭を少しずつ貯めているのだが、今度の対明貿易の大仕事が無事に済めば、おそらくそれが果たせる。どんな商品を持って帰ってこられるか、その時の唐物の相場がどうなっているかによって、利幅は大きく異なるが、七百石積み の船に満載した唐物の利益といえば、莫大な額である。獲らぬ狸のなんとやら、ではあるが、その五パーセントが新九郎の懐に入れば、あるいは千石積みの大船さえ仕立てられるかもしれない。

「此度の仕事は、わしも命懸けでやらせてもらいます」

新九郎は渋い笑みを見せた。

「ああ、話は変わりますが」

用向きを終えた嘉兵衛は、砕けた感じで言った。

「離れにおられるお客さまが、海の話や異国の話を色々と聞きたいと申しておられますな。どうでしょう、新九郎殿さえよろしければ、その方々と夕餉を一緒に頂くわけには参りませぬかな」

「客。どなたです?」

「吉田　と申しても、新九郎殿にはおわかりになりませんか。安芸でも出雲に近い、北の山奥です。そこを治める毛利さまの若君のご一行が、厳島詣でのために、この屋敷に逗留なさっておられるのですよ」

「毛利……。ああ、どこかの合戦で武田の先代のお屋形を討つたという……」

「その毛利さまです。大宮たなもり柵守の野坂房ほっけん頭殿も一緒ですよ」

「房頭もおるのですか。久しく顔を見ておらん」

「房頭殿は、少し前に野坂家の家督をお継ぎになりました。ご存知でしたかな」

「ほう、あの父君は引退なされたか」

　厳島で暮らしていた少年時代、餓鬼大将だった新九郎は多くの子供を子分に従えていたのだが、四つ年下の房頭とはその頃からの付き合いだから、もうずいぶん長い。新九郎が因島に移って数年は会う機会もなかったが、厳島に戻って来られるようになってからは、共に酒を飲んだりすることもあった。ここしばらく無沙汰であっただけに、同じ屋根の下にいるというなら義理を欠くわけにはいかぬであろう。

「良い酒と美味い肴を調べてございます。ご迷惑でなければ、ぜひ」

　嘉兵衛に導かれ、新九郎は屋敷の離れに通された。

第六章 鷲の羽を継ぐ… 海の男(二)

夕闇に包まれた紀ノ屋の離れに灯明の火が灯った。

襖を取りはらって二部屋を繋げた二十畳ほどの空間で、二十人近い男女が談笑している。

上座には毛利家の主君である幸松丸が座り、向かってその左側に元綱が、右隣に傳人子めしうしの福原弥五郎が座を占めている。棚守の野坂房頭ぼっけん、重蔵や元綱の近侍たちが左右に居並び、もつとも下座には房頭の従者や幸松丸の影武者役を務めた子供の姿まである。それぞれの座の前には豪勢な膳が置かれ、男たちの間には紀ノ屋の女中や卑女などが侍り、愛想を振りまきながら男たちに酒を勧めていた。

「お楽しみのところ失礼をば致します」

廊下に面した襖が開き、紀ノ屋の主人が顔を見せ、頭を下げた。

「相合あいあうさまのご所望に、うってつけのお方をお連れしました。ご相伴させて頂いてもよろしゅうございましょうか」

「おお、紀ノ屋殿、手数をお掛けした。ぜひ入ってもらってください」

元綱は笑顔で手招いた。

紀ノ屋は名を嘉兵衛かへえという。生まれは瀬戸内の弓削島ゆしほという島だ。そうで、若い頃は因島村上氏の船に乗っていたといい、当然ながら瀬戸内の海には詳しいのだが、外海そとつみを渡った経験はないらしく、異国のことについては伝聞以上のことは話せないと語っていた。元綱の希望を容れて、海外渡航の経験を持つ船乗りを探してくれたのであろう。

襖が大きく開き、嘉兵衛に続いて六尺を超す見事な体格の大男が部屋に入ってきた。

年は三十くらいであろう。ボサボサの蓬髪ほうまつを後で無造作に束ね、鬢びんのあたりは毛がそそけ立っている。服装は浪人風だが、いかにも海の男といった精悍な顔つきで、皮革を煮しめたような肌の色をしている。

「新九郎殿ではないか！」

野坂房頭の驚いたような声に、男は笑顔で会釈を返した。

二人は部屋の中ほどまで進んで腰を下ろした。

嘉兵衛は幸松丸に向けて一度平伏してから顔をあげたが、大男の方の礼にはそこまでの篤さはない。

「葭島の新九郎でござる」

潮錆びた声で名乗り、それでも丁重に頭を下げた。

骨がありそうな男だな。

と元綱は人物を量はかった。雄偉な体躯のためか声量も豊かで、その威風だけで立派まのがしりに物頭が務まりそうである。

「こちらの新九郎殿は、瀬戸内では知らぬ者としてない村上海賊衆にゆかりのあるご仁でございましてな。私とは、まだほんの子供の頃からの古馴染みでございますし、そちらの野坂房頭殿とは竹馬の友といったところで、決して素性の怪しい者ではございません」

と嘉兵衛が紹介した。

「この三年ほど、当家の荷船ふながしりの船頭を務めて頂いたり、色々と商売の手伝いをして頂いたりしております。所用で出ておりましたが、

折よくさきほど戻って参りましたので、こちらにご案内した次第で

「瀬戸内に威を張る村上海賊衆の噂は耳にしたことがある。源平の昔、『一ノ谷の合戦』で大いに働かれた村上二郎もとくに基国殿の後裔ごういである」と

元綱の言葉に、大男 新九郎は苦笑した。

「さて、先祖のことはようわかりません。清和源氏・頼信流よりのぶということになっておりますが、北畠親房公ちかふさの孫の顕成公あきなりから始まるという者もおります。いずれ遠い昔のことでござるゆえ、ハキとはしませんな」

先祖という以上、村上氏と血縁関係があるらしい。しかし、この男は「村上新九郎」とは名乗らず、「巖島の新九郎」と名乗った。名字を名乗らないのは、武家ではなく庶民であると宣言したようなもので、そのあたりに何かしら事情があるのだろうが、他人の過去を穿鑿せんさくするような趣味は元綱にはないから、話の方向を元に戻した。

「いや、これは俺が悪かった。異国の話に新九郎殿の出自は関わりがなかったな」

元綱は、未だ名乗っていなかった無礼を詫び、主君である幸松丸と主立つ近侍を新九郎に紹介した。

「それで新九郎殿は、実際に異国へ渡ったことがおありか」

新九郎は人懐っこい笑みを浮かべてうなずいた。

「明国に三度、朝鮮には二度、琉球へも何度か渡りました」

「それはそれは」

重蔵をはじめ、近侍の若者たちも目を見張った。

この時代、陸おかで暮らす武士からすれば、外海を渡って異国へゆくなどということはおよそ日常感覚になかったであろう。瀬戸内の港町や北九州地方に暮らす者ならともかく、安芸の山奥に根を張る毛利家の人間にとってみれば、実際に外海を渡った人間と口を利く機会さえまずない。

女たちが嘉兵衛と新九郎のために酒肴を乗せた膳を運んで来た。

新九郎が自分の方に来た女の尻を撫でたように、女は小さく嬌声をあげ、苦笑しながら新九郎の手を軽く叩いた。新九郎は実に嬉しそうな顔で笑っている。

女と似たような苦笑を浮かべた嘉兵衛は、

「実は来春、大内のお屋形さまが遣明船を出されるとい話がありましてな」

と言いながら酒器を取り上げ、手ずから新九郎に酌をした。

「我ら畿島の商人衆あきんども、その尻馬に乗って明国へ船を出すつもりであります。こちらの新九郎殿に、その貿易船の船大将になつていただくつもりでありますので、四度目の明国ということになりますか」

「ほう、来春に、大内のお屋形さまが。その話は初めて聞く」

元綱は興味津津という顔である。

「異国との交易というのは、俺には想像もつかぬが、ずいぶん大

きな富を生むそうですな。それはつまり、日本の物が明国では高く売れ、あちらから持ち帰った物がこちらでさらに高く売れる。と、そういうことですか？」

「はいはい。おっしゃる通りでございます」

嘉兵衛は温厚な笑みを見せた。

「本式の勘合貿易ならば、一のものが入って返ってくると聞いております。我らは『勘合の符』を持ってはおりませんので、明国の役所を通じた交易はできませんが、それでも元手が五倍にも六倍にもなるそうですございましてな」

「そういうものか……」

明国の役所を通さぬ交易、などということになると、もう元綱にさえ事情がさつぱりわからない。

ここは少しばかり説明が必要であろう。

勘合貿易は、その実質はともかく、名目上は「朝貢貿易」であるという形式が取られている。

「中華」は世界の中心であり、中国大陆を制した王朝は常に周辺諸国の盟主である、というのが伝統的な中華思想である。中国人は中国の朝廷に帰順しない異民族には文化価値を認めないから、当然ながら他の王朝との対等な外交関係というものは成り立たない。異国が中国との接触を望むなら、中国の朝廷に帰順してその属国になるしかないのである。

中国の王朝に「臣下の礼」を取った周辺諸国は、朝廷に聘問して貢物を献上せねばならない。それに対して中国皇帝は、盟主として属国の使者に宝物を下賜する。この「貢献」に対して「賜物」を下げ与える、という形態が、朝貢貿易であると考えていい。

盟主国である中国側は、その面子もあつて、わずかな貢献に対してもそれに数倍する価値の賜物を返礼せねばならない。しかも「貢物」や「賜物」の交換は商売とは看做されないから、関税のようなものも一切掛からない。臣下の立場を取る側は、勞せずして莫大な利益を得ることができたのである。この貿易は当然ながら中国側に経済的な負担が大きく、その利に目をつけた周辺国から朝貢が殺到するようになったため、歴代の中国政府は「朝貢は何年に一度」といった形で頻度を限って承認し、異国の使者の入朝を制限せねばならぬほどであった。

ちなみにこの大永二年（1522）の中国は、明朝の十二代・嘉靖帝の御代で、「日本国王」この場合、室町幕府の最有力者を指す からの朝貢は十年に一度と限られている。大内義興の遣明船派遣が十二年間も行われなかったのは 様々な理由があるにせよ そういった明国側の事情が大きかったであろう。

そもそも唐物は日本では古くから珍重され、高値で取引されるから、中国との交易は利幅が非常に大きいのだが、先に述べたような理由で、明朝政府を通じた正規の勘合貿易はうま味が桁違いであった。このときから百二十年ほど昔、南北朝の合一を果たした第三代將軍・足利義満が、土下座するような低姿勢で自分が「日本国王」であることを明朝政府に承認してもらい、貿易許可書というべき「勘合符」の発行を懇請したのも、裏にこういった事情がある。

ついでながら、中国沿岸部はかつて倭寇（前期倭寇）の跳梁に苦取っており、明国の海民や商人が異国人と接触することを禁じ、朝貢以外のいかなる貿易も認めず、違反者には厳罰をもって臨むという強硬姿勢を取っていた。ところが、明朝政府は十年ほど前から沿岸南部の広州を開港し、外国商船を受け入れ、商人の私貿易をも認めるようになった。交易で富を築こうという貿易商人にとっては素晴らしい時代であったが、この大永二年、明朝政府は再び全土で海禁令を発し、広州の港も対外的に閉鎖され、私貿易が禁止される状

態になっている。この最新事情は、よほど明国の政情に通じた者でもまだ知らなかったに違いなく、厳島の商人あたりがそれを知らないのも当然であったかもしれない。

ともあれ、難しい話をして幸松丸を退屈させても意味がない。

「まあ、交易のこともそうだが」

元綱は主題を元に戻した。

「我らは海に向こうのことなどは、まったくの無知でしてな。どこにどのような国があり、どのような人が住み、どのように暮らしておるか、などといったことを、こちらの幸松殿にもわかるように、話してくださいませんか」

「されば、少々ご無礼を」

持参した絵図を取りだした新九郎は、立ちあがって上座の近くまで膝を進め、幸松丸の前にそれを広げて見せた。

「これは、朝鮮や明国で手に入れた地図を比べ合わせ、拙者が知る瀬戸内や北九州あたりの陸の様子を合わせて、描いてみたものでござる」

彩色は色褪せ、端などは擦り切れてボロボロになった地図である。ごく大ざっぱな筆で、本州の中国地方から四国、九州などの輪郭が描かれ、海は青の波線によって表現されている。海には島らしい丸がいくつもあり、陸地の部分にはそれぞれに国名が書き込まれている。現代の地図に比べれば縮尺は滅茶苦茶で、海岸線、国境線などの様子もまったくいい加減なものだが、それでも陸と海の間隔をイメージしやすくはなるであろう。

海賊衆に限らず、武士にも商人にも庶民にも、異国の話を聞きたがる者は多いから、新九郎はこういう座談をすることには慣れている。

「安芸はここですか。この小さい点が厳島でござる。この隣が周防、その先が長門。こちらが九州の筑前でして、この隙間を関門の瀬戸（関門海峡）と申します」

「これが安芸？　こんな小さいのか・・・」

幸松丸が思わず漏らした感想は、元綱の気持ちと何ら変わらない。空高くから日の本を眺めおろせば、安芸はこのように見えるものか。

と思えば、何やら不思議な感じがした。

新九郎は広げた絵図に指を置きながら説明を続ける。

「関門の瀬戸を抜け、九州を陸伝おかいに進みますと、このあたりが大きく陸に入りこんだ入り江になっており、ここに古来より大宰府たいさいふが置かれてござる。博多の津もここにござる。このあたりの海を玄界灘なだと申して、この先に浮かんでおる丸い島が壱岐いっきでござるな。さらに先にあるこの長細い島が対馬つしま、そのすぐ先にあるこれが、朝鮮でござる」

地図の上端から海に向かって突き出すように馬の足に似た形の線が引かれており、地名と思われる漢字が書き込まれていた。

「塩浦しほのうら、富山浦とみやまのうら？」

地図を覗きこんだ幸松丸が字をそのまま読んだ。

「それは塩浦ヨシボ、富山浦フサンボと訓みます。朝鮮で交易ができる湊の名と思し召せ。朝鮮人も我らと同じように漢字を使いますが、訓み方は大ヤ和言葉とは違いましたな」

新九郎が微笑しながら注意した。

「こちらの小さな島々が琉球。こちらの大きな陸地が明国でござる」

絵図の左端には中国大陸を表す線が引かれ、台湾の手前あたりで紙が尽きる。

「明国は途方もなき大きさにて、西へは果てしなく陸が続ぎ、さらに多くの国があると聞きました。異国人にも色々の違いがあります。な。朝鮮や明国の者は我らと姿があまり変わりませんが、たとえば明国で見た色目人シモクジンは、目が青く、肌が白く、赤みがかつた髪をしておりました。肌の色が墨を塗ったように黒い者もおりましたな」

色目人というのは、トルコ系、イラン系の人種を指す。

外見からして倭人とまったく違う人種がいる、と聞かされても、想像のしようがなく、どうにも実感がわかない。

幸松丸は絵図を指差した。

「その大きな海を船にて渡り、明国までゆくには、どれほど時が掛かるのだ？」

その質問で、新九郎の表情が真面目なものに変わった。

「どのような風が吹くか、それ次第でござるな。たとえば、ちよつと今ごろの時期から来年の春が終わる頃までの間、この辺りの外海ソウシウミでは必ず北西風アホシが吹きます」

指でその風の向きを示しながら続ける。

「この風が毎日、弱すぎず強すぎず吹き続けたとすれば、半月ほどで陸おかを見ることができましよう」

「半月も海の上におらねばならぬのか……」

幸松丸が気弱げに呟くと、新九郎はやや意地悪な笑みを見せた。

「じゃが、風とは難儀なものでしてな。弱すぎれば船は思うように進めず、また風が強すぎれば海が荒れ、船は帆を張れぬゆえ、潮の流れに流されるままになる。ひとたび大風となれば、海は猛獣のように暴れ、波は山のような高さとなり、どのような大船でもひっくり返り、船より振り落とされた者はすべて溺れ死にます。また、たとえば大風で帆柱が折れ、大波で舵が壊れようものなら、船は桶同然となり、大海の上をふわふわと彷徨さまよった拳句、運良く陸に流れ着くことができねば、やがて糧食も水も尽き、すべての船乗りが飢え死ぬことになります」

「……」

少年の想像力を超えた話であろう。幸松丸は息をするのも忘れたような表情で聞き入っている。

「夏から秋が終わるまでの間は、北西風あなじとはまったく逆に、南東風はえしちが吹きましてな。この風のときは、この辺りの海は決して渡れません。風に乗って朝鮮の方へ渡り、そこから陸伝いに明国へゆくことは、あるいはできるのやもしれませんが、それには何ヶ月も掛かりましよう。この風は、明国から日の本へと帰ってくる際に乗る風、

といつことであらう。」

大きくひとつため息をついた幸松丸に、新九郎は再び笑顔を向けた。

「明国の南も陸が延々と続いております。わしが行ったのは、勘合貿易のための港であるこの寧波と、ニッポン 絵図では切れておりますが、ここからさらに陸伝いに南方にいったところにある広州、その近くの海にある台湾という大きな島の辺りまでござるが。聞いた話では、南海には安南、アンナム 暹羅、シヤム ビルマ、ルソン 呂宋、マラッカといった国々があり、他にも小さな島国が数え切れぬほどあるということござる。さらに陸伝いに西にゆきますと、ついには天竺てんじく（インド）へと到ります」

「天竺か……」

元綱は思わず呟いた。仏教説話のなかにしかなかった仏国土が、自分たちが生きるこの世界に確かに存在する、という証拠をつきつけられたような想いである。

「新九郎殿は朝鮮や明国の言葉を話せるのか？」

元綱の問いに新九郎は首を振った。

「ごく簡単な言葉は耳で覚えましたが、難しい言葉はわかりませんし、話せもしません」

「では、異国ではどのようにその国の者と談合をするのか」

「筑前や肥前ひぜんの海辺に暮らす者や、五島、吉岐などの海賊衆のなか

には、偽倭が多くおりましてな」

「ぎわ？」

「倭人のように月代を剃り、鬚をつけ、倭人と同じ着物を着て、日の本に暮らしておる明国人や朝鮮人のことをごさる。それらは大和言葉を解するゆえ、通詞として雇い入れ、連れてゆくのです」

「なるほど……」

問われるがままに続く新九郎の話は一刻を経ても果てない。

やがて眠気を催した子供たちが隣室に消えると、そこからは大人たちだけのさらに砕けた酒宴となった。

元綱の身体は酔いに染まりつつあるが、意識は充分に醒めており、世の中にはこういう男もいるのか。

と密かに瞠目していた。

安芸の山奥に生まれ、伝統ある地頭の家で育った元綱にとってみれば、武士だか船乗りだか商人だか判然としないこの新九郎のような男は、これまでまったく出会ったことがない人種であり、嗅いだ事のない薫りを持っていた。

空と雲と水平線しか存在しないような、果てもなく続く大海原に浮かぶ一艘の船を想像してみればよい。その船に乗った人間は、大自然のちよつとした気まぐれによって避けようのない理不尽な死を強制されるのである。あわれなほどの人為の無力さ、その限界を実感した者が抱くある種の刹那主義と、その海に生きる己の無限の可能性を信じて疑わない楽天主義が、この新九郎という男の陽気で闊達な個性のなかで、どっしりと同居している。陸の武士とは覚悟の置き処が違うが、よほど肚の据わった男だということは、ありありとわかった。

今回の蔵島参詣は、幸松丸の「世界」を広げるための旅であった

はずである。ところが、ごく狭い世界で暮らしているという意味では、いい大人である自分が、わずか八歳の甥子と少しも変わらない、と元綱は認めざるを得ない。毛利の領国からほとんど出ることもない元綱の行動範囲と比べれば、新九郎が生きる世界は千倍も万倍も広いであろう。

その広大な世界を、この海の男は、己の器量ひとつで自由気ままに生きている。

羨ましい生き様よ。

妬心と敗北感が混じったような気分がないでもない。が、それ以上に、なにやら無性に愉しくなった。

男たちは心ゆくまで語り、用意された酒が尽きるまで飲んだ。

酒座が果て、新九郎らが母屋へ引きあげた後、元綱は中庭に出て、胸いっぱい冷えた夜気を吸い込んだ。

と、その背後に重蔵が寄ってきた。

「実に面白き酒肴でございましたな」

重蔵は酒以外のものにも酔ったという顔つきである。

元綱は振り向かず、満天の星空を仰いだ。いつの間にか雨はあがっており、弓のような月から降る蒼い光がやわらかく顔を照らした。

「異国のことなどこれまで考えたこともなかったが、京から安芸へ来るより、安芸から朝鮮へゆく方が、むしろ近いのかもしれないな」

「あの絵図を見た限りでは、どうもそのようです。もっとも、朝鮮へ歩いて渡るわけには参りませんが」

「この世というのは」

詠嘆するような声で元綱は言った。

「どつやら俺が思っていたよりはるかに広く、大きいものらしい」

「まことに……」

興奮を肚の底に沈めるように、重蔵は深くうなずいた。

翌日は朝から晴天であった。

紀ノ屋が用意してくれた二艘の小舟に分乗し、元綱たちは広島湾へと漕ぎ出た。

風はほとんどなく、海は静かなものである。ゆらゆらとゆれる海面が陽光を乱反射して目に眩しい。紅葉に染まりつつある瀬戸内の島々が朝日を受けて輝く様子は、見惚れてしまうほど美しかった。船べりに座った幸松丸は、手で掬った海水をわずかに舐めてみて、その塩辛さに仰天していた。

ちなみに毛利家の一行は、幸松丸と福原弥五郎の子供二人と、元綱や重蔵など大人が八人である。一行の人数を十人に見せるために、影武者役の子供と郎党の一人はあえて紀ノ屋に残してある。無論、幸松丸を特定されないために、子供二人は同じ服装をつけ、編み笠をかぶっている。刺客に対する用心は怠っていない。

舟が厳島の北端を廻り込むと、大小の船が数十隻も停泊しているのが視界に入った。その多くが荷船のようだが、姿が違ちがう軍船いくわふねらしき船も浮かんでいる。大内家の家紋である「大内菱」おうちひしや、よく知らぬ紋様の旗を立てている船もわずかにあるが、ほとんどの船には「村上海賊衆」を表す「に上」の旗が立っていた。

「弥五郎、あれを見よ!」

幸松丸が歓声をあげた。

入り江の奥の海面に朱塗りの大鳥居が鎮座している。その奥の浜辺には、壮麗な社殿が海に浮かんでいるような姿で建っていた。

厳島神社の社殿は竜宮城をモチーフにして造られたのだという。

寝殿造りの建物の屋根はすべて桧皮葺きひわだぎで、柱や垂木たるぎはすべて朱塗りである。背景は青く澄んだ空と緑の山、さらに朱塗りの五重塔がそびえている。周囲の自然と調和しながら、格調高く均整の取れたこの建築美は、平清盛という傑人の美意識を表現したものである。圧倒されるような想いで、一同はしばし息を呑んだ。

海上からその景観を楽しんだ後、小舟で賑わう湊の棧橋から島に上陸した。

「ああ、忘れるところだった」

と独りごちた元綱は、前を歩く野坂房頭ほつげんに言った。

「神域に生えておる青竹を一本、お譲り願いたいのですが、お許し頂けようか。それで軍旗を作るので、必ず頂戴してくるよう、兄にきつく言われておるのですが」

「お安い御用です。太くて立派な竹を用意させましょう」

房頭は笑顔で応じた。

厳島神社の神主職を巡って、神主家に仕える神領衆は東西に分かれて長く争っていたが、彼らも担ぐべき神体や社殿を焼くわけにはいかないから、その兵火は厳島までは及ばない。神社へと続く通りは門前町となっており、蔵を備えた古い屋敷が並び、様々な店舗が軒を連ねている。大路から枝分かれする小路にまで、多くの参拝客や庶人や船乗りや商人がごったがえしていた。

房頭の案内で柵守の屋敷へと導かれた一行は、しばし休息した後、

神社の境内へと向かった。

厳島伽藍がらんの殿舎は、平清盛がそれを創建した当時、本宮が三十七棟、外宮げくうが十九棟あったという。本社本殿、客社祓殿、五重塔、多宝塔、能舞台など、様々な建物がある。

冠をつけ、純白の指貫さしぬきに着替えた房頭と柵守の神職たちが、朱に塗り込められたような回廊を先導して一行を客社祓殿に導いた。

幸松丸を先頭に、一行は神前に額づいた。

元綱は寄進の目録を奉納した。

房頭おおぬまが大麻おおぬまを振り、祝詞を唱え、幸松丸の武運長久と毛利家の繁栄を祈念してくれた。

お神酒みきを頂き、さらに境内を見物した一行は、続いて大願寺と大聖院に参拝した。

大願寺は比較的新しい真言宗の寺で、厳島神社に隣接するように建っている。木造の薬師如来像、鍍金が美しい釈迦如来坐像、弘法大師の作といわれる秘仏厳島弁財天などを拝見した。

一方、大聖院は弘法大師が創建したという古刹こせきで、真言宗御室派おむろの大本山であり、厳島神社の別当寺にして厳島の総本坊でもある。本堂である大聖院は厳島神社から四半時ほど歩いた山麓にあるが、背後にそびえる弥山みせんの山頂から山腹に多くの堂や坊があり、十一面観世音菩薩像をはじめ、各種の観音菩薩、不動明王、三鬼大権現といった様々な仏が祀られている。これらをすべて拝観しようと思えば一日掛かりになるから、弥山の登山までは考えていない。昼食を挟みながら、中腹の摩尼殿まにでん、大師堂、観音堂、勅願堂などを巡るうちに、日が傾いてきた。

「明日は早朝に発たたねばなりません。暗くなる前に廿日市へ戻りましょう」

元綱の言葉に、幸松丸は素直にうなずいた。

紀ノ屋の厳島の屋敷に出向き、帰りの舟を出してもらうことにし

た。

房頭の案内で柵守の屋敷に立ち寄ると、頼んでおいた青竹と共に、幸松丸と福原弥五郎のために守り袋を贈ってくれた。それらを有難く受け取り、一行は棧橋から舟に乗った。

「葎島はいかがでござった」

元綱が尋ねると、

「この島にはいたるところに神様と仏様がおられました。本当に、神仏が住まわれる島ですね」

幸松丸は満面の笑みで答えた。

子供たちは様々な想念が錯綜しているのか興奮気味で、舟の上でも終始しゃべり続けていた。

舟が甘日市の棧橋に着いた頃、陽が西の空に沈んだ。

紀ノ屋に帰った元綱たちは、この夜、再び新九郎と夕餉を共にして歓談し、嘉兵衛には世話になったことに対する謝辞を呈した。

「毛利さまは出雲のお屋形さまに臣下の礼を取られたと聞いております。西条の鏡山城を再び奪還するために、来年も尼子の軍勢が安芸にやって来ましようか」

嘉兵衛の質問に元綱はうなずいた。

「確かなところはわかりませんが、俺の予測ということでは、必ず来ます」

「すると再び、大内のお屋形さまも軍勢を催し、武田のお屋形さまと争うことになる」

「武田が大内のお屋形さまに従わぬ限りは、そうなるでしょう」

「この廿日市が戦場にならねば良いのですが……」

実際、商人にとっては難しい時勢であろう。厳島神主家の選択や向背によって、廿日市は戦火に巻き込まれる可能性が多分にあり、この地に店を構える商家は、とばっちりて財産を失わぬとも限らないのである。

「毛利さまの吉田は出雲に近うございますな。出雲のお屋形さまが出陣すると聞こえたら、報せて頂くわけには参りませぬか」

「噂は風の速さで伝わるものらしいので、尼子軍の出陣の噂を俺が聞いた頃には、すでに紀ノ屋殿の耳にも入っておるやもしれませんが、それでも良ければお報せしましょう」

「ありがたい。よろしくお願い致します」

嘉兵衛は丁重に頭を下げた。

翌日、一行は早曉に紀ノ屋を辞した。

房頭は廿日市の木戸を出るところまで見送ってくれた。

肌寒い朝の海風を浴びながら海辺の道を歩いた一行は、五日市、井口を経て草津から舟に乗った。

太田川は可部のあたりまでは急流はなく、水量豊かにゆったりと流れているため、川舟でも充分に遡行することができる。

一行は日の高いうちに可部の川湊に到り、可部街道を北東へ進み始めた。

可部の城下町を過ぎると、毛利領まで二里ほどの道のりである。往路はほとんど下りであったが、復路は当然ながら上りの道になる。

秋色に色づいた山間の道を一刻も歩くと、人通りはほとんど絶え、森閑とした山道に入った。

その時である。

左右の疎林から十人ほどの男が湧き出して、一行の進路をふさいだ。

出たか。

先頭を歩いていた重蔵は足を止め、編み笠のなかから男たちを睨みつけた。

中央の奥に控える首領格の男は兵法の使い手であろう。剣気の格がひとりだけ違っている。その左右の四人ほども剣術の心得があると見た。その五人は浪人風の身なりで、深編み笠をかぶっており、面貌は口元しか見えない。

が、それ以外の男たちは、服装も獲物もまちまちである。槍や薙刀を握っている者もあれば鉄棒を肩にかついでいる者もあり、山賊にしか見えないような粗末な身なりの者も混じっていて、人品が明らかに下がる。銭で集めた無頼漢といったところであろう。

背後からさらに数人の男が駆けてきて、一行を前後から包囲した。合わせて十と八人か。

そう目で数え、弓矢を持つ者がいないことに重蔵は内心で安堵した。

「我らは毛利家の者である。人違いをするな！」

井上又二郎が大声で怒鳴った。

「毛利幸松丸の一行であろう」

編み笠の一人が若い声を発した。

「我らは旧主の仇を討たんとする者じゃ。これは狼藉ろうせきではなく、仇

討ちの義拳と心得い」

「仇討ちか……」

重蔵は内心で呟いた。

毛利家が関わった合戦で、敵の大將を討ち取るということがあったのは、二月ほど前の壬生城合戦で死んだ山県信春が記憶に新しい。さらに遡れば五年前の「有田合戦」であろう。中井手と有田城の郊外で行われた合戦と、翌日の有田城で行われた戦いで、武田元繁、熊谷元直、己斐宗端、香川元景といった有力武將が討ち死にした。この者たちは、それらの家中にいたのであるうか。

「子供と思えば不憫ではあるが、黄泉路で寂しゅうないように、ついでに多治比元就の舎弟の首も頂いて、旧主の墓前に並べてやろう」

「芝居（戦場）で討ち死にするは武士のならないではないか。それをいちいち仇討ちなどとは、片腹痛い！」

わめいた井上又二郎を手で制し、重蔵は前へ出た。

「ここにおる二人の幼童は、幸松丸さまの影武者とその傳人子だ。気の毒だが、幸松丸さまも相合の元綱さまも、この場にはおられぬ」

「なに……!？」

「我らを皆殺しにしたとして、それでお前たちの旧主の無念は晴れるのか？」

男は明らかに動揺したようで、判断を仰ぐように首領格の男へ顔を向けた。

重蔵は何も虚言を弄したわけではない。事実、この一行には、元綱も幸松丸もいないのである。

元綱の機智であった。

元綱は、実際のところ幸松丸に凶刃が迫るとは十に一つも思っていないかった。

が、それでも絶対に間違いがあつてはならぬことであり、念には念を入れた。

幸松丸を殺そうとする賊があるとすれば、その実行部隊の者たちは、この一行を必ず監視していたであろう。元綱が往路に幸松丸の影武者を立てたことさえすでに看破されているかもしれない。本隊と幸松丸が別行動することを逆手に取られ、帰路に本物の幸松丸の方を襲撃されるようなことになれば、目も当てられない。

「同じ手は二度は使わぬものだ」

と笑った元綱は、昨夜のうちに新たな策を施したのである。

廿日市から吉田への帰路を考えると、太田川をさかのぼって可部を経由し、可部街道を使って直線的に吉田に戻る経路を本道とすれば、太田川へ合流する三篠川へと折れ、三篠川沿いの街道をとって井原市いはらいちから毛利領の向原へと到る迂路うろがある。

陸路をゆく者が見つからずに舟を尾行することはまず不可能である。太田川の河口から可部まで 舟に乗っている間はおそらく安全であろう。人の耳目が多い場所も襲撃にはそぐわない。賊が出る とすれば、可部から毛利領までの山間部であると想定した元綱は、可部の手前で舟を降りて迂路を取り、井原氏の協力を得た上で、幸松丸を毛利領へ運ぶことを考えた。

小四朗殿であれば、間違いはあるまい。

あの男気ある義弟であれば、元綱と共に毛利の幼君が井原領に入ると知れば、一族を挙げて帰路を護衛してくれるであろう。

元綱は、昨夜のうちに、一行を密かに警護している桂元忠もとただに連絡

を取り、使者を井原莊へと走らせ、義弟の井原元師もとがすへ手紙を届けさせた。その上で、三篠川が太田川に合流する手前で、幸松丸と共に舟を降り、桂元忠が率いる二十人ほどの家士に守られつつ、三篠川に沿って井原莊へと向かったのである。今ごろはすでに井原氏の兵に護衛されて向原に向かっているか、あるいは井原の鍋谷城に立ち寄って、井原氏の歓待を受けているであろう。

いずれにしても、幸松丸がこの一行にいない以上、賊は目的を遂げることができない。

「無益なことはせぬものだ。お前たち、どうせ後ろの男に銭で雇われただけであろう。銭より命が大事と思う者は、逃げよ」

無頼漢たちに向けて重蔵は強く言った。

「問答無用！」

叫んだ首領格の男が刀を抜き、周囲の男たちがそれにならって一斉に武器を構え、じりじりと距離を詰めてきた。

二人の子供を除けば、重蔵らは八人である。賊側はその倍以上の人数があり、たいした実力もない無頼漢たちまで気が大きくなっているであろう。

「阿呆あほうめ……。退ひかぬなら、手加減はせんぞ」

顎紐あごひもを解いた重蔵は、ぬいだ編み笠を敵に向けて飛ばすと同時に、前列にいた男たちの間合いに飛び込んだ。鞘走きりったその刀が二度煌めき、二人の男の武器と手首と指がばらばらと地に落ちる。絶叫する男を蹴倒し、もう一人を薙ぎ倒した頃には、近侍の若者たちも一斉に抜刀していた。

「ぬかるな！」

井上又二郎が叫び、六人の男たちが気合いで応えた。

襲撃されることを想定した配置と役割はあらかじめ決めてある。

前に二人、後ろに二人が出て隊列を守り、一人は半弓を取りだして素早く矢をつがえ、残る二人は福原弥五郎と影武者の子供を庇う形で刀を構え、四方を睥睨した。

打ちかかってくる敵を、四人の近侍たちが楽々と撃退し、半弓を持った男が矢継ぎ早に矢を放ってそれを援護した。

もともと元綱の近侍たちは、喧嘩をすれば元綱以外には負けたことがないというような暴れ者ばかりだが、さらに重蔵が手ずから剣術を叩き込んでいる。この場にいるのはそのなかでも選りすぐりの精鋭で、その精強さ、強悍さは、毛利家中でも屈指と言っている。飛び道具なしでこの七人を皆殺しにしようとすれば、完全武装した兵が二十人は必要であろう。無頼漢や山賊まがいの連中を相手に引けを取るはずがない。

それがわかつているからこそ、重蔵は後顧の憂いなく存分に暴れることができる。

手加減を一切考えず、周囲を顧慮することもなく、ただ敵を斬るという目的に専心したときの重蔵の疾さは、木刀をもって弟子を教導しているときは次元が違う。一太刀ごとに血が飛び、一呼吸する間にさらに三人の男が地に斃れた。

この剣客の凄みにようやく気付いたのか、賊側は明らかに怯んだ。いや、驚いたという意味では、味方である近侍たちにしても変わらない。稽古をつけてもらう過程で、重蔵の頸さは百も承知しているつもりであったが、

本気になった重蔵殿は、これほどのものか……！

と、近侍たちは内心で驚嘆し、同時に勇躍した。

首領の男さえ討てば敵は散ると重蔵は思っている。雑魚を蹴散らして踏み込むと、最奥の男にまっすぐに剣を向けた。

「汝は、羽田重蔵……！」

首領の男が深編み笠の奥から声を発した。

重蔵は男を睨みつけた。顔が見えなくともわかる。その声、背格好、何よりその醸す雰囲気、憶えがある。

「神埼弾正か……」

「まさかこのようなところで出会おうとはな」

奇縁というしかない。五年前、熊谷元直が開いた御前試合で重蔵と戦った、あの兵法者ではないか。

「お前たちの手に負える男ではない。手出しをすな」

神埼は左右の四人に厳しく言い、ずいと前に進み出た。

「断つておくが、我らはすでに熊谷家の家士ではない。昔の主家に迷惑を掛けたくはないゆえ、このことは明言しておく。昔の主家に
が、武士として、旧主に対する報恩と報復は果たさねばらぬ」

「民部少輔さまの仇討ちか……」

中井手の合戦で討ち死にした熊谷元直。

神埼弾正は、武士になるために剣を修め、武士になるために苦勞を重ね、熊谷元直に見出されて召抱えてもらい、ようやく夢を叶えることができた。主君に対する想いとこだわりは、初めから武門の家に生まれた者よりはるかに強いであろう。幸松丸がわずかな供を従えただけで熊谷領に入るということを知り、これが千載一遇の機

だと思ひ定め、仇討ちを思い立つたのかもしれない。

「おのれは毛利家に仕えておったか」

「相合の元綱さまにお仕えしておるが、毛利家の禄を食んでおるわけではない」

「おのれの言動と振る舞い、この一行の長のように見える。この場に元綱がおらぬというのは、本当らしいな。ならば幸松丸もおらぬということになる」

「幸松丸さまも元綱さまも、すでにお前たちが手出しの出来ぬところへ去ったわ」

「わしは裏を搔かれたというわけか……」

神崎は自嘲気味に笑った。

「わしの真の仇は多治比の元就じゃ。その類縁ならともかく、それ以外の首に用はない」

毛利本家の血を引く男なら殺し甲斐もあるが、元綱の家来ごときを殺したところで怨みは晴れぬ、ということであろう。

神崎が首の動きで合図すると、

「退けい！」

編み笠の一人が大音声で叫び、それを聞いた手下の男たちが四方に向けて脱兎のごとく走り出した。

無論、動けぬ者と死体は置き去りである。近侍たちは子供を守つ

て戦っていることもあり、逃げる敵を追うような状況でもない。

じりじりと後ろへ下がった神崎とその門弟たちは、十分な距離をとったと見るや、右手の山林へと走り去った。

それを見送った重蔵は、ひとつ重いたため息をつくど、べつとりと^{ちぢい}血脂が付いた愛刀を懐紙でぬぐい、静かに鞘に納^{おさ}めた。

第六章 鷲の羽を継ぐ… 幕間狂言

大内氏の本拠である山口の町は、「西の京」と呼ばれている。

もともと大内氏の本拠地は周防国の国衙（国司が政務を執った国府）である防府市にほど近い大内村であったが、この物語の現在から百五十年ほど昔 南北朝の時代に、周防、長門の二国の守護となった大内弘世が、山口盆地へと本拠を北移した。

山口は周防国のほぼ西端にある。瀬戸内の海や山陰方面へと通じる陸路がいくつも交差する交通の要所で、長門国からもごく近い。防長二国を治めるには至便の地であった。

大内弘世は、山口の町造りにあたり、京の都をその模範とした。山口盆地は北に急峻な高嶺（鴻ノ峰）、東西を低い山で囲まれ、南に向かつて平野が拓けた、風水でいうところの典型的な四神相応の地である。ちょうど京における淀川のように、盆地の南部を榎野川が南西に向けて流れ、周防灘へ注いでいる。弘世は、付近を流れている一の坂川の川筋をわざわざ変え、京の鴨川に見立てて町の中央を南北に貫流するようにさせたという。また、祇園社や北野天神などを京から勧請し、鍛冶、番匠、宮大工など多くの職人や各種の芸能者を招き、当時ほとんど輸入に頼っていた絹織物の国内生産にも尽力するなど、産業と文化の発展にも力を入れた。

その大内弘世の時代から、当主が五代下って、この時代の大内氏の当主は義興である。本国である周防、長門に加え、安芸と石見、さらに北九州の豊前と筑前の守護を兼ねた、六ヶ国の太守であった。大内氏の勢力は、この義興の時代と嫡子である義隆の時代が最大で、当時の守護大名としては日本で並ぶものがない富力と武力を誇っていた。この時代の山口は、まさに西日本の政治・経済の中心であったと言つて差し支えない。

大内氏の本姓は多多良氏で、百済の聖明王の第三王子、琳聖太子の後裔と自称している。いや、実際そうであったかもしれない。周

防や長門、北九州といった地域は、地理的に朝鮮半島とは古くから繋がりが深く、大内氏は代々、朝鮮王朝との交易を通じて莫大な富を得ていた。また、琉球王国とも積極的に交易を行っていたらしい。さらに大内義興が明国との勘合貿易の利権を独占したことによって、大内氏の経済力はこの頃が最大となった。その富と文物の集積地たる山口の繁栄ぶりは、推して知るべきであろう。

「応仁の乱」が起こって以来、戦乱で荒れ果てた京からは、平和と安定を求めて多くの公家や文人墨客が山口に逃れてきた。歴代の大内氏当主も彼らを歓迎し、京文化の伝播を喜んで奨励した。また、先述したように大内氏は朝鮮王朝との繋がりが強く、その文化も多く流入しており、京文化と大陸的文化の融合が行われた結果、国際性豊かな独自の「大内文化」と呼ぶべきものが、この山口の町で花開いている。

現在、龍福寺がある場所に、この当時、大内氏の居館であり政庁ともいうべき「大殿屋形」が置かれていた。その領域はほぼ二町四方、館は大内氏の発展と共に増改築が繰り返された。邸内の南東隅には大きな池があり、池泉庭園が作られ、さらに北西隅には枯山水の庭園もあったという。しかし、一重の堀と土塁で囲まれている他は防御施設のようなものはなく、日本一の富力をもった大内氏の本拠としては、いかにも頼りない。

が、これは裏返せば、「この山口にまで敵軍が侵攻して来るようなことはありえない」という大内氏の自信の表現でもあったろう。

大殿屋形に隣接する形で、一町四方の「築山館」という別宅がある。これは公家や文人墨客と交遊するための施設であつたらしく、ここに招かれた連歌師の宗祇は、邸内の見事な庭を眺め、

池はうみ こそえは夏の 深山かな

という一句を遺している。

山口盆地の中央に位置するこれらの施設の周囲には、大内氏の重

臣たちの広壮な屋敷が並ぶ。大路、小路は碁盤の目に整備され、水はけを良くするために、道の土の下には砂利が厚く敷き詰められていたという。職人、鍛冶、番匠など、それぞれ職ごとに町が区画され、そこで生産された物品、あるいは国の内外からもたらされる産物を扱う商家も無数に軒を連ねている。一の坂川の河原近くには常設の市場も整備されていた。

大内氏の富強を表すように、山口の町には実に多くの寺社仏閣がある。その中でもつとも新しい寺社といえば、二年ほど前に落成したばかりの高嶺太神宮（現在の山口大神宮）であろう。

大内義興は、在京していた永正十一年（1514）、伊勢に足を伸ばして伊勢神宮を参拝したことがある。その森厳とした威容に心打たれた義興は、伊勢神宮に劣らぬ荘厳な神宮社を山口に創建し、皇祖神のご分霊を勧請して祀ることを思い立った。このことは、出雲大社の遷宮を独力でやってのけた尼子経久に対抗する意識もあつたであろう。出雲大社は本邦でもつとも古く、もつとも格式が高い神社のひとつであり、祭神の大国主神は地祇（国津神）の王のような存在である。神威でこれを圧倒できる神社といえば、「国譲り」の伝承で大国主を屈服させた天孫族の皇祖神を祀る伊勢神宮こそが相応しいであろう。

お社を置く地は、大殿屋形からほぼ真西に十町ほど　山口盆地の北にそびえる高嶺の東山麓が選ばれた。

莫大な資金を投じて宮大工や番匠や人夫を大動員した義興は、突貫工事で社殿の造営を急がせた。この工事は義興が京から帰国した直後の永正十五年十月に始められたのだが、そのわずか一年後には外宮が、さらに半年後には内宮がそれぞれ完成した。義興は後柏原天皇に上奏して勅許を得、永正十七年（1520）六月二十九日、伊勢からご神霊を遷宮したのである。伊勢皇太神宮から直接にご分霊を受けて、太神宮社が創建されたことは、これ以前には過去に一度もなく、これ以後も明治時代になるまで例がない。江戸期に入つてお伊勢参りがブームとなると、この高嶺太神宮に参拝することは

「西のお伊勢参り」と呼ばれて人気を博し、多い時には一日に一万人以上の参拝客があつたという。

その高嶺太神宮の表参道。
そびえる石の大鳥居を眺めながら、

「これが噂の『今伊勢』か……」

と呟いた男がある。

修験者の格好をしたその男は、供であるう、若い修験者を引き連れて鳥居をくぐり、参拝客で溢れる参道を颯颯と進んだ。

吐く息が白い。凍雲からは牡丹雪がひらひらと舞い落ちている。

高嶺の深い森には、どこもかしこも薄く雪が積もっていた。

参道の中ほどに神楽堂と呼ばれる常設の屋根付き舞台がある。

何か興行が行われているらしく、人出がやけに多いのもそのためだったかもしれない。神楽堂の手前に木戸が設けられ、幕が張り巡らされ、直接には中が覗けないようになっていた。木戸口では入場を待つ人の行列ができており、左右には甘酒や焼き餅などを売る出店が並んでいた。

張られた幕の紋様を眺めた修験者は、

「ほう、文五郎の一座か。これはよい巡り合わせじゃな」

と独りごちて、口元だけで笑った。

二人の修験者はそのまま木戸の前を素通りし、外宮と内宮にそれぞれ参拝した後、いったん引きあげた。その日の公演が終わるのを待つて、再び夜中に鳥居をくぐり、神楽堂の舞台裏を訪ねた。

座長の文五郎は、社務所に付属する長屋に一室を借りてそこで憩んでいたのだが、修験者が面会を求めてきたと聞かされると、すぐさま客人を部屋へ通すよう言い、さらに手下に人払いを命じた。

入って来た客は二人である。土間で衣服についた雪を払い落とすと、

板間にあがって背負っていた笈おしを床に置き、文五郎の前にゆつたりと座った。

「文五郎、久しいな」

目と口元に親しげな笑みが浮かんでいる。

「やはり司箭院しせん殿でしたか。お懐かしゅうございます」

文五郎は丁重に頭を下げた。

司箭院 興仙こうせんこと宍戸家俊である。

「こうして顔を合わすのは、かれこれ六年ぶりか」

「そうなりますかな。これまでに何度か 今年の正月にも お国許の甲立こいたちへ寄らせて頂きましたが、折悪しくいつもご不在のとこどで、お会いすることが叶いませなんだ。それが、このようならで巡り会いますとは 「

言いながら、茶碗に白湯ゆを注ぎ、二人の客にそれを勧めた。

「ありがたい。身体が冷え切っておったところよ」

家俊は熱い湯を音を立てて喫し、ひとつ大きく息をついた。

「実はこの三年ほど、四国と九州の山々を巡り歩いておった。関門の瀬戸を渡ったのが一昨日じゃ。山口まで来たついでに、噂の『今伊勢』にご挨拶させて頂くこうと思つたところ、そなたの一座と行き会つたというわけよ」

「左様でございましたか」

うなずきつつ、自分よりわずかに年若な客をしげしげと眺めた文五郎は、

お変わりになられたな。

と心中で呟いた。

若き日の宍戸家俊には、どこか抜き身の妖刀のような妖しい美しさと怖さがあり、向かい合えば常に張り詰めた緊張感を強いられたものだったが、今はその妖刀の刀身が鞘に納まっている。六年前にも感じたことだが、目の前にいる家俊は、歳月によってさらに圭角けいかくが削られ、まるやかさが増したように思えた。

が、文五郎はそういう印象を口にはせず、

「それにしても、お前さまは昔と少しもお変わりになりませんか」

と容姿のことを言った。この修験者はすでに四十代も半ばのはずである。が、それより十は若く見える。その妖艶なまでの美貌には、老いの翳かげがほとんどない。

「いや、技はともかく、膂力りょりきにせよ体力にせよ、若い頃に比べればずいぶんと落ちた。衰えが自覚できるようになった、というべきか。情けない話よ」

家俊は自嘲するように笑った。

「後ろに控えおるこの者　わしの兵法の弟子で大蔵たいぞうというのじやが　いずれはこれにも敵わぬようになるう。歳は取りたくないものじやな」

「私など、まだ師の足元にも及びませぬ」

二十歳前後のその若者は、真顔でそう言い、文五郎に頭を下げた。

「河野大蔵と申します。以後、お見知りおきを」

やや瘦身そうしんな家俊と比べると、若者は体格が良い。上背があり、骨太な体つきで、若いに似ず沈毅な雰囲気ふんいきを漂もよほわせている。

「これに、修験の道をいろはから授けんがため、諸国の神山靈峰を巡り歩いておるところじゃ。まだまだ駆け出しの雛ひなじゃからな。先は長い」

「そういうことでございましたか」

「もとより浅学菲才ひんさいの身です。師のご所期しょきに添まつ処ところまでは、千里も万里も到りません」

その声に真摯さを聞いた文五郎は、この若者の心の貌かおを見た想いがした。

よい若衆わかしゅじゃな。

文五郎には人の才徳の大きさを一目で見抜くような眼力はない。が、この若者の心志しんしには粘り強さがあり、求道者のように、ひたむきに努力を続けることができる愚直さと執拗さがあると視た。それは、何も武芸に限った話ではなく、何かを極めようとする者には絶対に必要な資質であろう。

武芸も芸には違いない。

たとえ天与の才能に恵まれなくとも、ある一定の高みまでは、人は努力で昇ることができる、と文五郎は思っている。諦めさえしなければ、人はどこまでも歩き続け、昇り続けることができるのだが、

実際には、極めたとと言えるほど努力を続けられる心力を持つ者が稀なのである。

本当の意味で人の才能が開花し、大輪の華を咲かすことがあるとすれば、それは努力を極め尽くしたその先にしかないであろう。その場所に辿り着く前に、勝手に自分の才能に見切りをつけ、努力を放棄したときに、人の成長は止まるのである。その点、この若者には才走った感じが無いのが良い。師の言葉に愚直に従い、その教えを全身で咀嚼して、一歩ずつ着実に歩み続けてゆくであろう。

「大蔵殿、わしも司箭院殿しせんの凄味は身に沁みて知っておる。その司箭院殿が見込まれたほどのお前さまじゃ。将来は必ず一廉ひとかとの武芸者になられよう」

「嘉言かげんを賜りました。身命を賭して師についてゆくつもりです」

若者は再び深く頭を下げた。

微笑してうなずいた文五郎は、その師の方に視線を戻した。

「して、司箭院殿、わざわざお訪ねあったは、何かご用件があったることと拝察しましたが」

「そのことよ。そなたにふたつほど頼みたいことがあってな」

文五郎は目でうなずいた。

「私にできることならば、何なりと」

「ひとつは路銀のこと。さしあたり三貫ばかり用立ててくれぬか」

「お安い御用です」

「もうひとつはコレじゃ」

家俊は、二重底になっている笥おひの側面の板を抜き、そこから油紙に包んだ帳面の束のようなものを取り出した。

「旅廻りのついででよい。コレを五龍城の兄上まで届けてもらいたい」

「それは一向に構いませぬが」

両手でそれを受け取りつつ、文五郎はやや曖昧な顔をした。

文五郎は周防でこのまま越冬するつもりである。山陰地方は豪雪地帯だから、冬場に歩き回するには苦勞が多い。比較的雪が少ない瀬戸内側の周防で、山口を拠点に海辺の村々を巡り、春を待つて日本海側に回ろうと思っていたのである。長門、石見と巡ってから安芸北部の甲立に入るのは、おそらく初夏を過ぎるであろう。

「もしお急ぎであれば、手の者を走らせましょうか」

「急ぎの用なら、わざわざそなたに頼みはせぬよ。わしがこの足で甲立へ帰れば済む話じゃ」

家俊は小さく笑った。

「兄上にとって、四国や九州の様子などは、取り立てて今すぐ必要な事柄ではなからうからな。届くのは半年先でも構わぬよ。ソレさえそなたに託せれば、わしが安芸へ寄る手間がはぶけるといふ、ただそれだけのことじゃ。わしは屋代島やしろあたりから船に乗り、大三島おおみしまに渡り、大山祇神社おおやまじのみにご挨拶してから、上方へ行く」

「上方へのぼられますか」

「うむ。紀州へとくだり、高野山に登り、その後は熊野の山々を巡り歩こうかと思うておる。ついでに、しばらくぶりに畿内の様子も見ておくかな。兄上にはそのように伝えておいてくれぬか。借りた銭も兄上が倍にして返してくれよう」

穴戸家俊にとって文五郎は、自家の機密や諜報を託せるほど、信頼の置ける男なのである。

この二人の繋がり語るには、少々昔話をせねばならない。

司箭院 興仙こと穴戸家俊が、かつて幕府管領・細川政元の側近であった、ということはずでに触れた。

この物語の現在から三十年ほど昔。

細川氏の嫡流たる吉兆家きつちようけの当主であった細川政元は、時の將軍・足利義材よしき（後の義植）を「明応の政変」と呼ばれるクーデターで京から追放し、管領の座を奪い、傀儡かいらいの將軍（足利義澄）を担いで幕政を牛耳るようになった。この時、政元はわずか二十八歳である。室町幕府の創設以来、幕臣が將軍の首をすげ替えたことなどかつてなく、政元は「半將軍」と呼ばれるようになる。以来、四十二歳の若さで非業に斃たおれるまでの十四年間、政元は敵対勢力と戦い続け、しかも勝ち続けた。

京を追われた足利義材は、諸国の大名や寺社勢力と結び、二度にわたって京の奪回戦を挑んだが、いずれも敗亡し、大内氏の富強を頼って西国に亡命した。政元は合戦には不思議なほど強く、五畿内はもちろん、近江、越前、若狭、紀伊、丹波、丹後などを軍を率いて駆け回り、敵対する者を次々と降伏させ、広大な版図をその勢力下に置いたのである。

なかでもこの男の凄まじさは、比叡山 延暦寺が敵側に通じたと知るやこれを躊躇なく焼き討ちし、根本中堂をはじめ主要な伽藍を全焼させ、さらに奈良北部の喜光寺、法華寺、西大寺などを焼き滅ぼし、興福寺を中心とする南都の寺社勢力まで屈服させたことである。敵対するなら宗教勢力とて容赦しない、というその冷徹な果断さは、信心深い当時の人々の常識から見れば「天魔の所業」と呼ぶほかになく、天下の人心を震撼させた。

南都北嶺を服従させたといえ、さらに六十年ほど昔、「第六天魔王」と恐れられた第六代将軍・足利義教の例があるが、政元は将軍ですらなく、管領であつたに過ぎないのである。傀儡の将軍を立てて天下の権を握つたという点をも含めて、後の織田信長に驚くほどよく似ている。

この細川政元という人は、周囲の人々の理解を超える言動や振舞いが多かつたらしい。京に居ながらにして諸国の事情や大名たちの動静に精通し、ときには京から忽然と姿を消し、わずかな供のみを連れて諸国を放浪したり、地方の大名の元をいきなり訪れたりして人々を仰天させることさえあつたという。政元のこの奇行は、幕府の政務を混乱させることもたびたびであり、細川家の重臣たちの中にも不満や不信感を抱く者が少なくなかつたが、政元が細川吉兆家の最盛期を築き上げたということも、一方では厳然とした事実であつた。

政元は男色家で、女人には一切手を触れず、子も成さなかつたという。修験道や密教に凝り、靈験名高い司箭院 興仙に弟子入りし、自ら魔法を修したとも伝わる。それはそれとしても、周囲の人々が「第一の家臣」と呼ぶほど政元が興仙を寵遇したのは、ただ信仰上の理由、愛欲の上の理由というだけではなかつたであらう。

政元の不思議な強さとその奇行の種は、政元の帷幕に加わり、その謀臣となつた司箭院 興仙 穴戸家俊の存在と、彼が作り上げた謀報組織の優秀さに求められる。穴戸家俊は、修験者や芸能者といった卑賤の身分の者たちを束ねて広範な謀報網を築き、諸国の情

報を吸い上げ、謀報、謀略、政戦略といった分野で、政元の強力なブレンとなっていたのである。

かつて文五郎は、その宍戸家俊の片腕を務めていたという過去がある。

文五郎はもともと細川典厩てんきゅうけ家の家来筋の下士の子で、細川家では賤臣せんしんに過ぎなかったのだが、その才質と器量を宍戸家俊に見出され、密命を与えられて旅一座の座長に化けた。主に近畿から中国地方の国々を旅しながら情報を集め、大名や豪族への密使となり、時にはさらに後ろ暗い仕事をもこなしていたのである。言うまでもないが、文五郎と旅を共にする一座の中にも、その事実を知っている者はわずかしかない。

細川政元が暗殺されたのが、永正四年（1507）　この物語の現在から十五年前である。

その後の細川家は、政元の三人の養子がそれぞれに与党を募り、細川家の家督を巡って泥沼の内訌を始めた。理想も理念もビジョンも持たぬ者たちが、家督相続権を持つ若者をそれぞれに担ぎ、ただ利と権力を求めて擾乱じょうらんを繰り返していたと極言しても、そう外れていないであろう。この細川家の内紛ないほんに、前將軍・足利義植よしたねを奉戴ほうたいした大内義興が割って入ったことで、將軍後継争いや幕府内の権力争いの色合いが加わり、諸国の大名たちもそれぞれの陣営に参入し始め、事態はさらに混迷を極めた。

兄とも慕った細川政元を全身全霊をもって佐たすけることで、その先に天下静謐せいひつの夢を描いていた若き日の宍戸家俊は、主人を守り切れなかったことを痛烈に悔いた。が、どれほど悔いたところで取り返しはつかない。復讐心も手伝って、政元が後継者と定めていた細川澄元すみもとを擁立する陣営に、家俊は迷わず身を投じた。敵対派に澄元の居館が襲撃され、京を遁れねばならなくなったときなど、命を張って澄元の脱出を手助けし、近江の甲賀郡へ避難させたりもした。

しかし、澄元擁立派の重鎮じゆうしんである三好之長ゆきなガをはじめ、細川家の貴臣きしんたちは、卑賤しんな上に胡乱うごらんな修験者などは好まず、細川政元の奇行

が修験狂いのせいであるという悪印象も手伝って、家俊をまともに遇しようとはしなかった。

「政元さまを色でたぶらかし、魔法狂いの奇行に走らせ、いまの御家の凶運を招いた、諸悪の根源である」

と家俊を決めつけ、目の敵かたきにする者さえ少なくなかった。

政元暗殺の実行犯である竹田孫七、それを画策した香西元長、薬師寺長忠らは、うち続く争乱のなかで次々と討ち死にした。復讐の対象さえ失ってしまった家俊は、いつ果てるとも知れぬ権力争いの馬鹿馬鹿しさに愛想を尽かしたこともあり、三年後には失意のうちに京を去った。家俊が政元のために作り上げた諜報組織も、資金源と指導者とを失ったことで、事実上消滅した。

それでも、文五郎と細川家との個人的な繋がりは残った。

文五郎には細川家に対する忠誠心といったものはほとんどない。むしろ宍戸家俊という個人に心服してその仕事を輔たすけているつもりであったから、頭目おかしらたる家俊が細川家から離れた時点で、ただの旅一座の座長になったとも言えるのだが、細川政元に仕えていた細川典てんぎゅうけ既家のさる重臣が、政元の死後、現在の幕府管領・細川高国に仕えるようになり、文五郎をそのまま謀者として便利使いするようになった。

管領・細川氏の密使などを務めていれば、諸国の大名の重臣や豪族たちとも裏の繋がりができ、その便宜を引き出しやすくなるという利点がある。これまで諸国に築き上げた人脈もそのまま利用することができる。文五郎は文五郎で、細川氏の権勢を利用し続けていたとも言えるであろう。

無論、そういう文五郎の現状を、宍戸家俊はよく知っている。

家俊は、細川政元という無二の主君を喪うしなつてからは、天下の趨勢すうせいといったものに関してほとんど興味を失っていた。その志向はもっぱら個人的なところに向かい、自ら編み出した司箭流しせんの技を、体

系化して次代に継ぎ、後世に伝えるといった仕事に情熱を注ぐようになっていた。旅で知り得た情報を兄の宍戸元源もとよしに伝え送っているのも、この男の感覚で言えば物のついでに過ぎない。

「それにしても、いまの山口の賑わいは大変なものじゃな」

用向きを終えた家俊は、雑談らしい気安い口調で言った。

「大内のお屋形が春に遣明船を出されるそうじゃが、そのせいか」

「そのようでございますな。商人衆あきんどはもちろん、町衆や日雇い人夫のたくいまで銭回りが良いようで、ウチの小屋にも連日客がよう入ってくれます」

「そなたまで嬉しい悲鳴か。結構なことじゃな」

家俊は眼だけで笑った。

「じゃが、大内が遣明船を出すと知れば、細川の管領殿も愉快ではあるまい。噂では、大内のお屋形は『勘合の符』を独り占めして山口に持ち帰ったと聞いたが。さすがの管領殿も、此度ばかりは泣き寝入りか？」

「まさか。明国への朝貢しやうこうは十年に一度の好機でございますからな。黙っておるはありますがまい。すでに堺あたりで、交易のための品々を調しらえ始めておるやに聞いております」

「さもあるう。明国との交易の利権を博多衆に奪われたままでは、堺衆もたまらぬであらうからな。じゃが、『勘合の符』がなければ明国の朝廷との交易はできまい。そのあたりの事は、管領殿はどう

なされるのか……」

「さて、そこまでは私にも見通しはつきませぬが。ないものは仕様がありませんからな。あるいは、正徳年号（明の正徳帝時代の年号）の符ではなく、昔の符でも持って行って、力づくで横車を押し通すおつもりやもしれません」

勘合貿易を行うことは長く室町幕府の特権であったが、その実務を執っていたのは管領である細川氏であり、家俊が細川政元の側近であった時代にも一度、政元が暗殺された二年後にも一度、遣明船が出ていたので、家俊や文五郎はその内情やもたらされる利の巨大大さをよく知っていた。

「大内と細川が、遠い明国の海で船戦さをするとなれば、これは面白いな。大内の船も細川の船も、守っておるのは同じ村上海賊衆の警護船であろう。三島村上の者たちは、果たしてどちらに華を持たせるか。なかなか興深い見物じゃ」

「確かに。ですが、そもそも外海を無事に往来し、帰って来られるという保証もないわけで……。こればかりは風任せ、運任せでございますからな」

「違う。いずれかの船が日の本に無事帰り着いたとして」

日本海に南東の季節風が吹くのは初夏から秋にかけての時期である。この時期を外すと、中国大陸から日本へ渡ることが一年先までできなくなる。秋は台風（台風）の季節でもあるから、可能な限り速やかに帰国の途につくべきなのだが、勘合貿易には様々な事務手続きが必要であり、明国の首都である北京まで使者を何度も往来させねばならない上、明朝政府の役人たちは常に鷹揚、悪く言えば怠慢で、敏

速にその事務を片づけてはくれないから、どんなに早くとも二月や三月は寧波の港で待たされることになるう。

「事の顛末が知れるのは、来年の秋といったところか……。ふふ、その頃にでも、堺に行ってみるとするか」

長屋を出た修験者は、弟子と共に夜の闇に溶けて消えた。

冬が深まり、やがて大永三年（1523）が明けた。

毛利家にとつて 元綱や元就にとつても この大永三年は重大な変化の年になるのだが。

この時期、兩人にその自覚は一切なかったであろう。

鶴寿丸が五歳になったことを期に、元綱は我が子を郡山の満願寺に通わせることにした。寺で真名（漢字）を習わせ、同時に様々な耳学問をさせるためである。

満願寺は毛利氏が安芸に入部する以前から郡山の中腹に建っていた真言宗の古刹で、郡山に本拠を置いた毛利氏とは代々深い縁を結んでいる。郡山城は郡山の南東尾根に築かれており、その本丸より満願寺の方がはるかに高い位置にある。城の搦め手（裏門）からでも登れるのだが、相合から行く場合、清神社の脇から山道を登る方が距離的にはずっと近い。

住職は榮秀法印という老人である。元綱や元就にとつても、初等教育を施してもらった学問の師ということになる。すでに七十を超えているであろう。行儀に厳しい「恐い爺さん」で、さすがの元綱もこの老人にだけは今でも頭があがらない。

父である元綱の身分がさほど高くなく、親子が一緒に暮らしていることもあつて、鶴寿丸には傳人（養育係）と呼べる存在がいなかった。近侍の若者たちの息子のなかに六歳の子供が一人いたので、その子を鶴寿丸の傳人子代わりにし、共に学ばせることにした。

相合の屋敷から郡山の中腹にある満願寺まで、平時なら子供の足でも一刻もあれば着く。が、冬場は雪が深いため、当然ながら余計に時間が掛かるし、それなりに危険でもある。

「せめて春になってからでもよろしいではありませんか」

などとゆきは反対したが、

「一年の計は元旦にありと言っだろう。何事も、物事は最初が肝心なのだ。雪山といっても郡山は我らにとっては庭のようなものだ。雪があるから登れぬというのでは毛利の武士は務まらない」

と元綱は厳しいところを見せた。

山に登ることは足腰を鍛えることであり、冬山の怖さや危険さを知ること学ぶということに他ならない。学習の場はなにも寺の境内にだけあるわけではなく、すべてが鶴寿丸の血肉になるのである。束脩（授業料）を持参した元綱が、我が子を初めて満願寺へ連れて行ったとき、鶴寿丸を見た栄秀和尚は、

「おおおお、四朗さまの幼き頃に生き写しでございますな」

と云って相好を崩した。

「鶴寿殿、そなたの父御も幼き頃は鶴寿丸と申して、今のそなたと同じ年頃の頃に、この寺に参って学ぶようになりましたがな。父御は文事より武事をお好みでな。はじめの頃は、習字をさせてもじつと座っておることができず、同窓の子供と喧嘩をしたり、その辺りの森のなかを走り回ったり、その蓮池に飛び込んでみたりと、それはそれは、弟子たちの手を煩わせることばかりしておりましたわ。その父御に比べれば、そなたはずっと行儀がよろしい」

などと鶴寿丸を褒めて、元綱を汗顔させたりした。

三日に一度ほどの頻度で、重蔵や近侍の若者たちが 時には元綱自身が 交代で子供たちを満願寺まで引率した。

満願寺に通っているのは鶴寿丸ばかりではない。毛利家の当主である幸松丸を筆頭に、吉田に暮らす上級武士の子弟は、この寺で初等教育を受ける者が少なくないのである。顔ぶれは日ごとに違出し、年齢も身分もまちまちだが、常時二、三十人の子供が文机ぶんぐきを並べて学んでいた。

鶴寿丸は朝食を終えると満願寺へ出掛けて行く。午前は栄秀の弟子について習字をし、昼食を挟んで午後からは栄秀自身が語る毛利家の歴史や先祖の人物についての話を聞くのである。法話で鍛えた栄秀の話術は巧みで、子供にとってもわかりやすい上に面白い。折りに触れて日本や唐土たうとの故事なども軽妙な語り口で語ってくれる。

未ひつじの下一刻（午後三時）には講話も終わり、子供たちは日が暮れる前に相合の屋敷に帰って来る。鶴寿丸は性質が明朗で、あまり人見知りをしていないこともあり、新しい環境にもすぐに馴染んだようだった。この冬は降雪が多く、雪解けは例年よりやや遅かった。

大永三年は三月が二度あり、閏三月に入る頃には郡山の山桜も散り落ちた。

朝夕の寒さが去ると、当然のように戦火の騒がしさがやって来る。

「青屋友梅せいいつゆを討ち、祖父の無念を晴らす。多治比殿、是非とも毛利家のご助勢を願いたい」

自ら郡山城に出向いてきた高橋興光たかきみつが、元就に丁重に頭を下げたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8136f/>

鷲爪伝

2012年1月14日12時52分発行